

2006 年度

多良間方言の空間と時間の表現

千葉大学大学院
社会文化科学研究科

下地賀代子

凡例

1. 本研究で用いている用例の主な出典は以下の通りである。それぞれの詳細については別冊内の「資料編について」を参照。

資料 1：自然談話

資料 2：「多良間の民話」

資料 3：「狂言」(*本文では音韻表記に改めている)

また第Ⅱ部では、2002 年度文部科学省科学研究費補助金基盤研究(B)「方言における動詞の文法的カテゴリーの類型論的研究」(課題番号 13410124, 研究代表者:工藤真由美)における調査結果も一部用いた。また序論 2 の「音韻論」は、1999.8~2000.10 の基礎語彙調査によった。この調査の主なインフォーマントは故下地竹(T10, 塩川→沖縄本島)である。

2. 本文中での用例の示し方は以下の通りである。

用例番号	音韻表記	資料番号
3-32	aidia-u Ndasī-taL pītu sīni: wa:ri:L. [Sim-a-1-C1]	
Gloss	アイディア-を 出した 人-Ø 死に なさっている	
意識	(その本の)アイディアを出した人(は)死になさっている。	

意識内の()は語句の補い、(ft.~)は文脈からの解釈による意識、{note.~}は説明である。また、資料番号が付されていないものは「資料編」に収められていないことを示すが、そのいずれの用例にも、資料 1 を採集時、あるいは補足調査(翻訳法)によって得られた言語データ、または 1 で述べた科研費調査結果が用いられている。

なお、本文では Gloss を共通語の対応語によって逐語訳的に示しているため、「資料編」のそれとは示し方が異なっている。

3. 注について、本文中で用いている用例が、多良間村役場 1981『多良間村の民話』(以下『民話』, 別冊内「資料編」について)を参照)または先行研究によっている場合、用例の末尾に「i, ii, …」のようにローマ数字を付して、詳細を章末に示した(文末脚注)。通常の注は本文中に「1, 2, …」のようにアラビア数字を付して、注釈をそのページの末尾に示した(脚注)。
4. 引用部分は全てその表記に従っている。但し、例文として用いる場合は注を付し、本稿での音韻表記に従った。
5. 本文中に引用・参考した論文は、(著者姓 年代:頁数)もしくは著者姓(年代)のように示した。詳しい論文名、初出などのについては「参考文献」または序論 1「先行研究」の 1-2 を参照。単行本化された研究書及び雑誌は二重かぎ括弧(『』)、その他の雑誌掲載論文名などはかぎ括弧(「」)でそれぞれ括り、記している。
6. 論文などの初出を含めた年次の記述は、全て西暦を用いた。
7. 1 頁は 40×40 文字 1,600 字で、400 字詰原稿用紙 4 枚にあたる。400 字詰原稿用紙換算総枚数は、約 1040 枚(注を含める)である。

目次

凡例

はじめに	1
序論 多良間方言概説	4
1. 先行研究	5
1-1 多良間方言の位置づけ	5
1-2 先行研究一覧	7
1-3 多良間方言研究小史	11
2. 音韻論	15
2-1 音韻体系	15
2-2 音韻対応	20
2-3 多良間方言にみられる音韻同化の現象	26
2-4 多良間方言の音韻的特徴	28
3. 形態論	30
3-1 名詞の形態論	30
3-2 動詞の形態論	34
3-3 形容詞の形態論	41
4. 動詞分類	45
4-1 自・他の分類と他動性	45
4-2 ‘コト’の類型	47
4-3 語彙・文法的な系列	52
4-4 多良間方言の動詞の分類	57

第 I 部 <空間>の表現

第 1 章 「空間」の名詞論	61
第 1 節 空間名詞の分類	62
1-1 「空間名詞」とは	62
1-2 (空間の)相対名詞とトコロ化	64
1-3 「空間名詞」の分類	66
第 2 節 空間の指示代名詞	74
2-1 形式	74
2-2 意味・用法	74
2-3 空間の指示代名詞の体系	85
第 3 節 「空間格」	86
3-1 多良間方言の「空間格」	86
3-2 「空間格」の内部構造	91
3-3 <經由するトコロ>を表す ju(ba)格と kara 格	94

3-4 「空間格」の体系	95
第2章 「移動の表現」論	98
第1節 ヒト=イキモノの移動の表現	99
1-1 主体的な空間的な移動を表す動詞の類型	99
1-2 「出ル」動き	100
1-3 「通ル」動き	104
1-4 「入ル,着ク」動き	109
1-5 「行ク」と「来ル」	113
1-6 gami 格の空間名詞とのくみあわせ	122
1-7 多良間方言の主体的な移動動詞の類型	122
第2節 モノの移動の表現	123
2-1 対象的な空間的な移動を表す動詞の類型	123
2-2 「入レル,出ス」類の動詞	124
2-3 授受の表現	131
2-4 多良間方言の対象的な移動動詞の類型	138
第3章 「存在の表現」論	143
第1節 移動の結果の状態	144
1-1 「泊マル」動き	144
1-2 ヒト、モノゴトの<出現>	148
第2節 存在動詞	151
2-1 存在文の類型	152
2-2 多良間方言の「存在文」	153
第3節 「存在の表現」に関わる動詞の類型	159

第Ⅱ部 <時間>の表現

第4章 「時間」の動詞論	163
第1節 「総合的アスペクトシステム」	164
1-1 ‘アスペクト’概念の「総合化、抽象化」	164
1-2 ‘アスペクト’とは	166
第2節 現代日本語の「アスペクト」の研究	167
2-1 アスペクト研究の3つの段階	167
2-2 アスペクトの一般的な規定	169
2-3 アスペクト的な意味	170
第3節 現代日本語の「パーフェクト」の研究	175
3-1 パーフェクトとは	175
3-2 <パーフェクト>と<変化の結果の継続>	177
3-3 「パーフェクト」というカテゴリー	179
3-4 シテアルとシテオクについて	180
第5章 テンス・アスペクト論	183
第1節 多良間方言のテンス・アスペクトの体系	185

1-1 形式	185
1-2 テンス・アスペクトの意味の体系性	185
1-3 完成相	186
1-4 継続相	198
1-5 基本的なテンス・アスペクトの体系	204
第2節 連体形のテンス・アスペクト	206
2-1 形式	206
2-2 連体形のテンス・アスペクト的な意味	208
2-3 連体形のテンス・アスペクトの体系	220
第6章 パーフェクト論	224
第1節 多良間方言のパーフェクト	226
1-1 形式	226
1-2 格支配の仕方と統語論的特徴	226
1-3 意味・用法	228
1-4 シテオク形のテンスの対立	234
第2節 シテオク形の中核的な時間的意味	235
2-1 パーフェクト的な意味を表す si: buL	235
2-2 パーフェクトテキナ意味の区別	237
2-3 si: buL の中核的な時間的意味	239
2-4 si: ukī の中核的な時間的意味	240
第3節 継続相のシテオク形	242
3-1 形式	242
3-2 意味・用法	242
第4節 多良間方言の時間の表現—仮説の提示—	247
おわりに	250
参考文献	255

＊別冊「多良間方言の空間と時間の表現(資料編)」目次

「資料編」について	(1)
資料1 自然談話資料	(5)
資料2 「多良間の民話」	(115)
資料3 「狂言」	(355)

はじめに

本研究の目的は、多良間方言において<空間>と<時間>という「内容」が、どのような「形式」によって表されるかを明らかにすることである。多良間方言の文法事項の網羅的な記述を目指し、「形式」から「内容」へとその考察を進めていった拙論 2002 を踏まえながら、その流れをあえて逆にして新たな記述的研究を行うことによって、多良間方言の表現形式全体の体系性を浮き彫りにしようと試みている。

なぜ、<空間>と<時間>という 2 種の「内容」に関わる表現形式を、1 つの研究の中で取り上げるのか。その論拠を示すものの 1 つに、三尾 1948 によって提示された「場」の概念と「時所的制約」がある。三尾 1948 は、「あるしゅんかんにおいて、言語行動になんらかの影響をあたえる条件の総体を、そのしゅんかんの話の場という」と規定している(三尾 2003:23, 以下引用はすべて三尾 2003 より)。そして、この「場」を、文の中にも見出し(「文の場」)、場と文がどのような関係性の中にあるかを明らかにすることによって、4 種の文のタイプを導き出している(「場と文の関連の類型」)。

- (1) 場の文(=現象文) ex. 「雨が降っている」
- (2) 場をふくむ文(=判断文) ex. 「それは梅だ」
- (3) 場を志向する文(=未展開文) ex. 「あ! 雨だ!」
- (4) 場と相補う文(=分節文) ex. (「これは?」という問いに対する)「梅だ」

このうち「場の文」について、次のように述べている(p49)。

この種の文は、つまり、一文のあらわすものがすなわち場であり、場そのものかただちにそのまま文となったものである。場の直接的な言語的表現なのである。つまり、場の文=現象文とは、「いつかどこかにあり、存続し、あるいは変化し、消失しつつある現象の表現である」(p64)。このことは、上の例文「雨が降っている」が、例えば、「今」「この辺に」という時間の限定と空間の限定を持っている(と「直感」される一引用者)ことから、明らかだと言えよう。

三尾 1948 はこの制約を、「時所的制約」と呼んでいる。そして、「場そのもの」を表す現象文はこの制約のもとに成り立っており、その文(「表現型式」)には、時間と空間のカテゴリーが原則的にみとめられることを明言している。それは例えば、「雨が降っている」によって、「イマ」という時間限定のみ、あるいは「コノ辺ニ」という空間限定のみを表すことはできない、ということの意味しているだろう。そして、三尾 1948 の考える「場」というものの性質も、その主張の中から窺うことができる。すなわち、<空間>と<時間>は「場」の重要な要素であり、緊密で、不可分な関係を築いている、ということである。

このように、三尾 1948 における議論は、本研究にとって重要な指針の 1 つとなっている。だが実際の分析の作業では、<空間>と<時間>をいきなり同時に扱っていくわけにはいかないだろう。なぜなら、全ての表現型式がその表現型式そのものによって「場」全体を表せるわけではなく、「場の文」においても、それぞれの「限定」は、文中の異なる言語的要素の異

なるやり方によって表されているのがほとんどだからである。例えば、「机にリンゴがある」という現象文では、ツクエという空間限定は「机に」という名詞の格形式によって、イマという時間限定は「ある」という動詞のテンス形式によって、それぞれ表されている。

上記のことを踏まえ、本研究では次のような構成をとっている。

まず序論「多良間方言概説」では、本論の前提となるコトガラー先行研究、音韻論、形態論、動詞分類—を、概略的に示している。特に、本研究で用いている用例の表記は、全て、音韻論での記述に拠っている。本論は2部立てとなっており、第1章から第3章までを<空間>表現、第4章から第6章までを<時間>表現の考察に充てている。第1章「空間の名詞論」では、<空間>を指し示す名詞について取りあげ、空間名詞の分類、空間表現に関わる<場所・方向>の指示代名詞の体系化、また、動作や状態に関わるトコロ、すなわち「空間的な意味」をあらわす用法を持つ格形式についての考察を試みる。第2章では、「移動」を表す動詞を取りあげる。「移動」を「人や物体が空間内の一つの点から別の点に移動すること」と規定し(岡田 2003:102)、「ヒト=イキモノの移動の表現」と「モノの移動の表現」とを区別して、それぞれの表現の中心的な役割を果たす動詞の語彙=文法的な意味を記述していく。第3章では、「存在」を表す動詞を取りあげ、「移動」の動詞の場合と同じく、その語彙=文法的な意味を記述する。但し、本研究ではいわゆる存在動詞に限らず、「移動の表現」に関わる動詞と「存在の表現」に関わる動詞の中間に位置するような動詞(「泊マル」など)、また、ヒトやモノ、デキゴトの「出現」を表す動詞(「生まれる,起こる」など)についても、存在の表現に近いふるまいを示すものとして取りあげ、考察する。そしてこの第I部での考察を通して、「移動」の表現と「存在」の表現とは連続しており、「空間表現」としての一貫性を保っていることを明らかにする。

続いて第II部について、第4章では、第5章以下での考察の前提となるコトガラを、先行研究を手掛かりに、示していくことに割り当てる。「アスペクト」という概念を規定し、現代日本語のアスペクトに関する先行研究を概観していくことを通して、本研究が採っていく立場を明らかにする。第5章では、多良間方言のアスペクトの体系化を試みる。アスペクトは、同じく時間に関わる文法的カテゴリーである「テンス」と緊密な相関関係を持つものであるから、その体系を「テンス・アスペクト」の体系として捉え、表に示す。第6章では、多良間方言のパーフェクトの形式 si: uki について、その具体的な意味・用法の記述と体系化を行う。またさらに、<パーフェクト>の si: buL と比較することによって、その「内容」を特徴づけている「中核的な時間的な意味」、また両者の異同関係も明らかにする。そしてこの章の最後には、第II部全体の考察を通して得られた仮説として、多良間方言のパーフェクトのカテゴリーが、テンスとアスペクトの関係のように、その他の時間に関する文法的カテゴリーと関わって体系をなしているという考えを提示する。

以上が本研究の構成となる。またこれに、別冊の「資料編」が付く。この「資料編」には資料1「自然談話」、資料2「多良間の民話」、資料3「狂言」が収められており、それぞれの詳細については別冊内の「「資料編」について」に記した。調査には、インフォーマントを始めとする実に多くの方の協力を得ることができた。この場を借りて、その全ての方々への感謝の意を表したい。

ここに一葉の写真がある。

2004年9月22日、私は多良間島にいた。前々日の宮古本島での研究発表を終え、島の伝統芸能である八月踊りを見に来島していたのだ。祭りの初日となる21日に島に入り、その足で仲筋の祭祀場「土原御願」(MtabaLugaM)に向った。別冊の資料3に詳しいが、多良間の八月踊りは3日間にわたって執り行われ、初日は仲筋、2日目は塩川、そして最終日には「別れ」として、それぞれの場所で祭りが開かれる。そこで演じられる組踊は島独自の变化を遂げており、永積安明はその論で、これを「能風にまた首里風に制御された緊張とは異質の、自由で闊達な表現」と評した。特に、「多良間様」と呼ばれる他の地域の組踊には見られない独特の足の運び方が印象的で、人々に紛れつつ、私も魅入っていた。

私は1泊しか島に留まることができず、その日の昼過ぎ、塩川の祭祀場「ピトゥマタ御願」(pitumataugaM)から調査でお世話になったカマ媼の家を訪れた。2時には飛行場へ向わなければならないかった。途中、真っ白の小山羊が道端に繋がれていて、遠めにも、灰色の壁からそれだけ浮き上がって見えた。

媼は私の祖母の従姉にあたり、それまで全く面識のなかった私を実の孫のように可愛がってくれた。祖母は4年前に亡くなったのだが、その翌年、再び調査に訪れたとき、媼は私との再会を喜び、祖母の死を悼んだ。そして自分を、「多良間のおばー」だと思いなさいと私に言った。

その日、媼は、腰掛けることのできる手押し車を家の前の道端に置いて、座っていた。ちょうど向いの家の塀からはみ出した木が、媼のために心地良さそうな陰をつくっていた。集落内は碁盤目状に区画されており、その道の東はピトゥマタ御願へと続いていた。媼は歌を口ずさんでいるようで、私は少し離れたところから声をかけた。祭りを見に行かないのかと尋ねると、媼は、足腰が弱いから祭祀場までは行カレナイと答えた。残念だね、と重ねると、もう毎年、何十回も見ルカラと笑った。特に最近は、大きなスピーカーが祭りの音を集落中に響かせる。だからここにいてもこのように聞こえる。ほら、今はこの場面だよ、と媼はその聞こえてくる歌を口ずさんだ。

時間になり、私は暇を申し出た。またおいでね、これは血の繋がりだからと媼は言い、必ず来ますと私は答えた。振り返ると、東の方を真直ぐに向いて座っている、媼の後姿があった。少し遠くから聞こえる祭りの音に、それはしっとりと、馴染んでいた。私はそれを、そっと写真におさめた。

媼はまぎれもない「多良間人」(tarama pītu/)だ。島に馴染み、祭りに馴染むその姿を眺めるたびに、何とも言い難い気持ちに駆られる。私はこの島の言葉を通して、この「血の繋がり」に向き合おうとしているのだろう。

大切な大切な一葉である。

序論 多良間方言概説

1. 先行研究

本論での考察に入る前に、その前提となるコトガラについて、序論をもうけて概説しておく。ここでは特に、多良間方言に関する先行研究について概観していく。研究の現状を明らかにすることによって、本研究の研究史への位置づけを試みる。

1-1 多良間方言の位置づけ

多良間島は、琉球諸島の中の沖縄本島(群島)と八重山諸島の間にある、宮古諸島と呼ばれる8つの島の1つである¹。この宮古諸島で使用されている言語を「宮古方言」と総称する。多良間方言は宮古方言の下位に位置付けられ、多良間島の仲筋と塩川及び水納島で話されている言語を指すが、本研究ではこの「多良間方言」を、水納を除く、塩川と仲筋の2字の言語の総称として用いていく²。仲筋と塩川では語彙レベルでの音韻的な対立が見られるが、混同も多く、また文法体系においてほとんど差異が見られなかったことから、今回は便宜的に両者を区別することなく、「多良間方言」として総括的に扱っている。

宮古島から「多良間島を経て八重山群島までの往来は容易であった」³という記載も見られることから、距離的にもあまり差のない宮古島と石垣島、それぞれの多良間島との関連性はほぼ変わらないように一見思われるのだが、史資料上は、多良間島と宮古島との関わりの方、圧倒的に多く見出されている。また言語的にも、多良間方言には、平良、石垣両地域方言それぞれとの類似点があることが既に指摘されてきている(特に、動詞は宮古方言系、形容詞は北琉球方言や八重山方言と同じサアリ系という形態論的な特徴)。だが先述したように、琉球方言の区画において、多良間方言は一般的に「宮古方言」の下位に位置付けられており、この区分は行政上の区分とも一致している。これに対し、狩俣 1997 では、「形容詞の語尾に-*fa:l* という形があったり(用例中略)、*ija > e*、*ɿja > ë*⁴という母音融合の現象が見られる(用例中略)などの点で、八重山方言と共通する特徴」(p389)を多良間方言が有していることを指摘し、その位置づけに疑問を投げかけている。かりまた 2000 ではさらに、

- ・「閉音節構造」のゆたかさ、「舌尖母音/*ɿ*/」の摩擦の度合いなどの音声(音韻)的特徴は、「宮古諸方言と八重山諸方言を明確に区分するための決定的な指標にはなりえない」⁵(p29)

¹ 村の公式 HP によると、多良間村は、北緯 24 度 39 分、東経 124 度 42 分に位置する面積 19.39k m² の楕円形をした多良間島と、約 8km 離れた面積 2.153k m² のさつまいもの形をした水納島の2島からなっている。また、宮古島と石垣島とのほぼ中間に位置し、宮古島の西方約 67km、石垣島の北東約 35km の海上に位置しており、琉球王国が中継貿易で栄えた中世には、沖縄本島と宮古、八重山地域を結ぶ航海上の要所であったという。(「多良間村」<http://www.vill.tarama.okinawa.jp/>)

² 水納の言語は仲筋、塩川の言語に対して音韻的に異なる体系を示している。よって、「多良間島方言」「水納島方言」という2つが「多良間方言」から下位区分され、本研究についても、本来ならば、「多良間島方言」の研究となるべきであろう。だが水納島は、平成 15 年 4 月現在で5世帯7人が生活しているのみであり、その言語が衰退の危機にさらされていることは明らかである。この現状を鑑みるに、「水納島方言」が「多良間島方言」に對置されうるかどうかは疑わしいため、本研究ではこのような立場をとっている。注 14 も参照されたい。

³ 佐渡山正吉「宮古の自然」(『平良市史 第1巻通史編I』1979:8)より。

⁴ 本研究では、[ɿ](舌尖母音)ではなく[i](中舌母音)として、/ɿ/の音韻表記を用いている。序論2を参照。

⁵ 上村 1992 では、これらの音声的特徴を、宮古諸方言と八重山諸方言とを区分するための基準として挙

- ・サアリ系統の形容詞、母音融合の現象、また「おわる」系の尊敬動詞の存在といった文法的特徴は、多良間方言と八重山方言で共通している
- ・「砂糖黍」「虹」「蜻蛉」といった語の系統などの語彙的特徴が、多良間方言と八重山方言で共通している

などの事例を挙げ、ついに「多良間方言は八重山方言である」(p35)と結論付ける。

だが、「形容詞の成立が名詞や動詞よりもおそいことは疑ひなく、その名詞や動詞から形容詞が生まれてきたこともまた確かなこと」であるとするならば(山崎 1963, 山崎 1992:10)、方言区画を試みる際、やはり動詞における共通性は最も重要な項目の 1 つではなかろうか。多良間方言の動詞には、「中止形」⁶がテンス的に過去を表すという、他の宮古諸方言に共通する用法が観察されている。かりまた 2000 は、宮古諸方言と八重山諸方言の連続性、すなわち両方言が共に「南琉球方言」として括られ得る根拠を、その意図とは関係ないにせよ、明らかにしているのだが、それは、多良間方言の方言区画上の位置づけを決定づけるまでには至っていない。ただその姿勢は、この方言について論じるにあたり、その成立事情を考えるための重要な示唆を与えてくれているように思われる。つまり、宮古系か八重山系か⁷という一般的な方言区画の是非を問うことから離れた、「多良間方言」そのものの位置づけを考えることである。本研究は、その位置づけのために今後必要不可欠な作業となる、平良方言、石垣方言などとの比較研究のための土台作りでもある。

以下、琉球方言の区画図を、上村 1963 によるものに代表させて示しておく。□は引用者。これは最初期のものであるが、これ以後の区画でも、個々の名称や下位区分に若干の差異は見られるものの、大枠は変わっていない。なお八重山方言について、その下位区分は未詳であることが注記されている。多良間方言はこの当時から宮古群島方言の下位に位置づけられていたわけだが、このことについては 1-3 でも触れている。

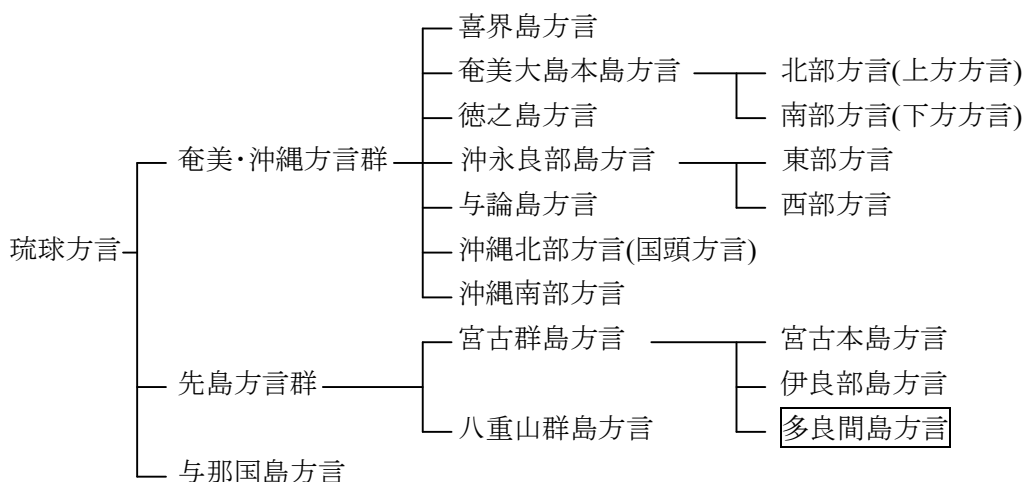


図 1 琉球方言区画(上村 1963「琉球方言概説」p15 より)

げている。

⁶ 序論 3 の「形態論」を参照。多良間方言では、「中止形」と同音形式となる *ari* 過去形がみとめられる。なお、石垣方言にはこのような形式、つまり、「中止形」と同音形式となる過去形は現れないようである。

⁷ このような区画上の二重性は、多良間方言だけではなく、奄美喜界島方言(沖縄本島北部方言的要素と、奄美大島の要素)にも見られるようである。

1-2 先行研究一覧

多良間方言に関する先行研究論文を、管見に入る限り、以下に示す。年代ごとに、50 音順に掲載している。外間 1971 の付録「琉球方言研究文献・資料目録」及び大城 2000 に依拠しつつ、必要に応じて補足、訂正を施している。なお、書誌の提示法は以下の通り。

年代 著者名「論題」『書誌名』番号(;頁数), 出版者

- 1926 N・ネフスキー「アヤゴの研究」『民族』1-3, 民族發行所
- 1928 a. N・ネフスキー「月と不死(若水研究の試み)」『民族』3-2, 民族發行所
b. N・ネフスキー「月と不死(二)」『民族』3-4, 民族發行所
{以上は N・ネフスキー/岡正雄編 1971 所収}
- 1934 与儀達敏「宮古方言研究」『方言』4-10
- 1944 垣花良香「多良間島雑記―雨乞ひ・年中行事・俚諺及び方言の係り結び」『南島』3; 183~198, 宮古民俗文化研究所 {馬淵・小川編 1971 所収}
- 1960 サムエル・H・北村「宮古方言音韻論の一考察」『国語学』41;94~105, 国語学会 {外間編 1972 所収}
- 1961 崎山 理「多良間沖縄方言の比較―宮古島と周辺離島を踏査して―」『琉球新報』11/23
仲宗根政善「琉球方言概説」『方言学講座』4;20~43, 東京堂
- 1962 a. 崎山 理「琉球・多良間島, 水納島方言の音韻」『音声の研究』10;287~305, 日本音声学会
b. 崎山 理「宮古方言について」『琉球新報』11/16, 11/17 (8 面)
- 1963 上村幸雄「琉球方言概説」『沖縄語辞典』;11~17, 国立国語研究所
a. 崎山 理「琉球・宮古方言比較音韻論」『国語学』54;6~21, 国語学会
b. 崎山 理「琉球語動詞の通時的考察」『国語国文』32-3 京都大学文学部国語国文学研究室 {外間編 1972 所収;343~356}
平山輝男「琉球方言の研究」『音声学会会報』112;14~17, 音声学会
広島大学国語学研究室「南島のあいさつことば」『方言研究年報』6 和泉書院
- 1964 日下部文夫「赤と青―沖縄・宮古・八重山をめぐって」『国語学』58;60~75, 国語学会
崎山 理「琉球・多良間島方言の南方的要素」『民俗学研究』(「資料と通信」) 29-1; 85~88, 日本民俗学会
平山輝男「琉球宮古方言の研究」『国語学』56;61~73, 国語学会
- 1965 崎山 理「琉球宮古方言の舌尖母音について」『国語学』60 国語学会
永山 勇「先島方言覚書(一)」『国語研究』16;1~18, 山形大学教育学部国語国文学研究会
- 1966 稲垣正幸「宮古島アクセントの研究」『都留文科大学研究紀要』3;1~19
永山 勇「先島方言覚書(二)」『国語研究』17;35~60, 山形大学教育学部国語国文学研究会
a. 平山輝夫「琉球方言の区画について」『音声学会会報』118;7~12, 音声学会
b. 平山輝夫「琉球先島方言のアクセント体系」『国語学』67;1~17, 国語学会
c. 平山輝夫「琉球先島方言の研究」『都立大学方言学会会報』16
- 1967 平山輝男・大島一郎・中本正智『琉球先島方言の総合的研究』明治書院
- 1968 仲宗根政善・大城 健・屋比久 浩・成田義光・内間直仁「宮古方言の研究」琉球大学沖縄文化研究所『宮古諸島学術調査研究報告(言語・文学編)』;1~62

- 1970 比嘉政夫「社会人類学から見たことばの意味—<上>と<下>—」平山輝男博士還暦記念会編『方言研究の問題点』明治書院 {比嘉 1982『沖縄民俗学の方法』(新泉社)所収;212~220}
- 1971 N・ネフスキー/岡正雄編『月と不死』平凡社 {2003.9 に再発行}
上村幸雄「沖縄・琉球方言の位置と下位区分」『人類科学』23;107~121, 九学会連合馬淵東一・小川徹編 1971『沖縄文化論叢 3 民族編Ⅱ』平凡社
- 1972 外間守善編『沖縄文化論叢 5 言語編』平凡社
- 1976 仲宗根政善「宮古および沖縄本島方言の敬語法」九学会連合沖縄調査委員会編『沖縄—自然・文化・社会』;491~502, 弘文堂
中本正智『琉球方言音韻の研究』法政大学出版局
- 1977 矢野証喜「琉球方言動詞活用体系の進展」『言語研究』72;1~17, 日本言語学会
- 1978 沖縄県教育庁文化課編『沖縄県文化財調査報告書第 12 集 多良間島の方言 琉球方言緊急調査第 3 集』沖縄県教育委員会
{所収論文} 長浜数子「多良間村塩川方言の音韻」;1~20
野原三義「多良間方言の助詞を中心とした文例」;21~41
名嘉順一「多良間島の地名」
比嘉政夫・名嘉順一「多良間島の屋号」
津波古敏子「多良間方言の語彙」;79~96
比嘉政夫「多良間島の親族語彙」;97~98
名嘉真三成「琉球方言の音便形について—接続形を中心に—」『沖縄文化』50;18~38, 沖縄文化協会
中本正智「指示代名詞の構造と祖形」『沖縄文化』15-1(50);1~17, 沖縄文化協会
本永守靖「宮古平良方言の形容詞」『琉球大学教育学部紀要』22;45~53
- 1979 津波古敏子「多良間村字塩川方言の名詞形態論(中間報告)」『沖縄言語研究センター資料』10;1~6
中本正智「琉球方言動詞"書く"の活用」『人文学報』132;129~189, 東京都立大学人文学部
- 1981 (多良間村役場編『多良間村の民話』)
名嘉真三成「琉球宮古方言の動詞終止形の成立」『沖縄文化』55 沖縄文化協会 {名嘉真 1992 所収;307~329}
- 1982 かりまたしげひさ「宮古島方言のフォネームについて」仲宗根政善先生古希記念編集刊行委員会『琉球の言語と文化』
津波古敏子「多良間島塩川の方言における音韻の考察」仲宗根政善先生古希記念編集刊行委員会『琉球の言語と文化』;33~61
a. 名嘉真三成「琉球宮古方言の動詞の接続形」『沖縄文化』58 沖縄文化協会 {名嘉真 1992 所収;330~350}
b. 名嘉真三成「宮古方言のふるさとあたらしさ」『国文学解釈と鑑賞』47-9;140~152, 至文堂 {名嘉真 1992 所収;11~24}
- 1983 久野マリ子「琉球宮古方言基礎語彙の研究報告」『国学院大学日本文化研究所報』19-5

- 津波古敏子「多良間島の方言」『沖縄百科事典』;730, 沖縄タイムス社
- 友利哲市・来間杉男「多良間村塩川方言における「は」格、「を」格の音変化」『沖縄方言研究』5
- 名嘉真三成「琉球宮古方言の形容詞」『琉球大学教育学部紀要』26;67~85 {名嘉真 1992 所収;602~637}
- 平山輝男『琉球宮古諸島方言基礎語彙の総合的研究』桜楓社
- 1984 内間直仁『琉球方言文法の研究』笠間書院
- 新里 博「民間語源－沖縄・宮古方言の場合－」平山輝男博士古稀記念会編『現代方言学の課題3 史的研究篇』;433~462, 明治書院
- 渡久山春憲「多良間島方言の動詞の活用」(1984 年度沖縄国際大学卒業論文)
- 1985 名嘉真三成「宮古方言の上一段動詞の四段化現象」『沖縄文化研究』11;159~185, 法政大学沖縄文化研究所 {名嘉真 1992 所収;351~368}
- 1986 内間拓・花城恵美子・長浜数子「親族」琉球大学民族研究クラブ『沖縄民俗』24;58~76
- かりまたしげひさ「宮古方言の「中舌母音」をめぐって」『沖縄文化』66;54~64, 沖縄文化協会
- 長浜数子「口承文芸」琉球大学民俗研究クラブ『沖縄民俗』24;77~101
- 野原三義『琉球方言助詞の研究』武蔵野書院
- 1987 内間直仁・名嘉真三成「琉球方言の古層」『言語』(別冊)16-7;188~205, 大修館書店
- かりまたしげひさ「宮古方言の成節的な子音をめぐって」琉球方言研究クラブ 30 周年記念会編『琉球方言論叢』;419~429
- 名嘉真三成「宮古方言の代名詞」『国文学解釈と鑑賞』52-2;155~160, 至文堂
- 1988 名嘉真三成「宮古多良間島塩川方言の動詞の活用」『琉球大学教育学部紀要』32, 第1部;17~26 {名嘉真 1992 所収;520~532}
- 中本正智「琉球語二段系動詞「起きる」の活用」『琉球の方言』13 法政大学沖縄文化研究所
- 1990 大野眞男「南琉球における親族名称の記述と比較」『岩手大学教育学部研究年報』49-2;17~34
- 中本正智『日本列島 言語史の研究』大修館書店
- 1992 伊豆山敦子「琉球方言の1人称代名詞」『国語学』171;106~124, 国語学会
- 名嘉真三成『琉球方言の古層』第一書房
- 1993 a. 高橋俊三「多良間方言の動詞の問題点」『多良間島調査報告書(1)』地域研究シリーズ 19;57~72, 沖縄国際大学南島文化研究所
- b. 高橋俊三「多良間島の語彙(中間報告)」『多良間島調査報告書(1)』地域研究シリーズ 19;73~164, 沖縄国際大学南島文化研究所
- 1994 高橋俊三「多良間方言の語彙(中間報告 2)」『多良間島調査報告書(2)』地域研究シリーズ 20;123~223, 沖縄国際大学南島文化研究所
- 1995 高橋俊三「多良間方言の語彙(中間報告 3)」『多良間島調査報告書(3)』地域研究シリーズ 21;55~110, 沖縄国際大学南島文化研究所
- 1997 狩俣繁久「宮古方言」亀井孝他編『日本列島の言語』;388~403, 三省堂
- 1998 N・ネフスキー著/グロムコフスカヤ編

- 「子守歌」,「多良間で豊作になったら」,「正月の歌」,「カンナタドゥルの歌」
 {狩俣繁久ほか訳『宮古のフォークロア』砂子屋書房所収}
- 内間直仁「琉球方言の親族語彙」『沖縄文化』34-1 沖縄文化協会
- 1999 大野眞男「日本語音韻史における琉球宮古方言」『日本語学』18-5;47~54, 明治書院
- 2000 大城涼子「多良間島研究文献一覧」『沖縄県多良間島における伝統的社会システムの実態と変容に関する総合的研究』;127~138, 琉球大学法文学部
- 加治久真市「ネフスキーと宮古方言」『国文学解釈と鑑賞』65-1;121~132, 至文堂
- かりまたしげひさ「多良間方言の系譜ー多良間方言を歴史方言学的観点からみるー」
 『沖縄県多良間島における伝統的社会システムの実態と変容に関する総合的研究』;27~37, 琉球大学法文学部
- 下地賀代子「宮古多良間島塩川方言動詞・形容詞の基礎的研究」(2000 年度琉球大学卒業論文)
- 2002 かりまたしげひさ「琉球語宮古諸方言の形容詞についてのおぼえがき」狩俣繁久・津波古敏子・加治工真一・高橋俊三編『消滅に瀕した琉球語に関する調査研究』(『環太平洋の「消滅に瀕した言語」にかんする緊急調査研究』「環太平洋の言語」成果報告書 A4-019);1~28
- 下地賀代子『宮古多良間島方言の基礎的研究』(千葉大学大学院 2002 年度修士論文)
- 2003 N・ネフスキー/岡正雄編『月と不死』平凡社(ワイド版東洋文庫 185,再発行)
- a. 下地賀代子「多良間方言の代名詞」村岡英裕編『日中両言語における代名詞及び親族語の対象研究ー琉球方言との比較研究も含めてー』(千葉大学大学院社会文化科学研究科研究プロジェクト報告書 84);64-82
- b. 下地賀代子「宮古多良間島方言の格形式」『対照言語学研究』13;37~57, 海山文化研究所
- 新里 博「[付録]宮古方言概説」『宮古古諺音義』;437~620, 渋谷書言大学事務局(仲程正吉編『多良間のことわざ』多良間村教育委員会)
- 2004 a. 下地賀代子「宮古多良間方言の待遇表現」『千葉大学社会文化科学研究』8;31~37, 千葉大学大学院社会文化科学研究科
- b. 下地賀代子「宮古多良間方言の音韻及びその変化の現象」『琉球の方言』28;93~113, 法政大学沖縄文化研究所
- c. 下地賀代子「南琉球方言の空間表現ー宮古多良間方言の「空間格」ー」『国文学解釈と鑑賞』69-7;169-179, 至文堂
- 2005 a. 下地賀代子「沖縄宮古多良間方言のアスペクトの体系」松本泰丈編『語彙と文法の相関』(千葉大学大学院社会文化科学研究科研究プロジェクト報告書 123);53~78
- b. 下地賀代子「多良間方言のアスペクトーsi: uki をめぐってー」琉球大学言語文化研究会『言語文化論叢』2;1~20
- c. 下地賀代子「「畑の草取り狂言」ー多良間島八月踊りの狂言ー」『奄美沖縄民間文芸学』5;67-80, 奄美沖縄民間文芸学会
- 2006 下地賀代子「多良間方言の動詞連体形のテンス・アスペクト」『琉球の方言』30 法政大学沖縄文化研究所

1-3 多良間方言研究小史

1-2 で示した一覧から、多良間方言研究は、他の宮古諸方言同様、ロシアの言語学者 N・ネフスキー⁸の手によって始められ、以後 1960 年代半ばまでは音韻論もしくは語彙論的研究がその中心となっていたことがわかる。そして、1967 年の平山・大島・中本による『琉球先島方言の総合的研究』以後、徐々にではあるが文法論へと研究の幅が広がっていき、1970 年代後半には、音韻論、語彙論を凌ぐ勢いで動詞や形容詞の活用体形の記述という形態論的文法研究が盛んに進められている。以下、この N・ネフスキー1926 から 1970 年代までを研究の第 1 期、1970 年代から 2000 年代を第 2 期とし、それぞれの時期の代表的な論文について、いくつか示しておこう。なお、ここで取り上げている先行研究論文は、特にことわり書きのない場合は全て 1-2 の一覧で示したものである。

第 1 期の研究の中心は音韻論、語彙論的研究であるが、これらの研究と関わって、この時期には 1-1 で触れた方言区画に関する問題も多く論じられている(なおそのいずれでも、多良間方言は宮古方言の下位に位置づけられている)。例えば北村 1960 は、与儀 1934 による三分区—宮古本島方言・伊良部島方言・多良間島方言—に触れて、「(宮古方言の)細分類は結局、地域的小方言(regional sub-dialect)同士間における示唆的特徴(音韻的弁別特徴)並に余情的特徴(音韻的非弁別)の研究から出発せねばなるまい」(p94)という立場を示した。そして、宮古各地の方言の音声現象について記述し、改めて三分区説の妥当性を見出しつつ、本島方言のさらなる細区分として、「平良小方言,下地小方言,城辺小方言,久松小方言,狩俣小方言,大神小方言^{おおがみ}といった極細区分」が存在すること」(同上)を明らかにした。

また、崎山理は、多良間方言、水納方言の音韻に関する個別言語学的な記述研究(1962a)とほぼ並行的な 1962b の論考において、「共時的な見地に基礎をおいて、言語の音韻(形態音韻も含める)を中心とする宮古方言の分類」を目指し、「宮古方言」の小区分に以下の 9 つの下位方言をみとめている⁹。

- 1) 宮古島本島内北部…大浦、島尻、狩俣。
- 2) " 中部…「平良市を中心として、北は下崎、東は城辺町北部の与那浜に拡がる」(崎山 1963a:7)
- 3) " 南部…城辺町(与那浜を除く。保良、新城は来間島小方言に近い)、上野村、下地町。

⁸ Николай Александрович Невский (1892-1937)。モスクワの北方約 250km にあるヴォルガ河岸の古都ヤロスラウリ市に生まれる。1915 年にペテルブルグ大学派遣の官費留学生として来日し、柳田国男や金田一京介らと交流を深め、1922 年に宮古島出身の上運天(稲村)賢敷の協力を得て、宮古調査を実施した。1922~3 年、1926 年の 2 度にわたって来沖、宮古島を訪れている。N・ネフスキー1928b に、「同年(「大正十一年夏」—引用者)、私が多良間に滞在してゐた時」という記述の見られることから(N・ネフスキー2003: 14)、多良間島へは 1 度目の調査の際に訪れたようである。

⁹ 崎山 1963a でも同様の下位分類がなされている。同論文では、宮古本島内を 3 つの小方言に分ける根拠として、次のようないくつかの現象を挙げている。但し、「この例の外は宮古方言内で最も勢力のある平良市方言の属する中部方言とほぼ等しい」(p7)。

- ・中部方言と北部方言；ka, ga が xa, ya に対応 ex.(血)[akatsi]-[axatsi] (東)[agaŋ]-[ayaŋ] (平良-島尻)
「~たくない」ex.(飲みたくない)[numadʒa:ŋ]-[numanma] 但し狩俣は平良と同
「北」を表す語 [ui](島尻、狩俣) 他地域は[nisi] etc.
- ・中部方言と南部方言；文末における中舌母音[ɿ]の消失 ex.(来ている)[kiʃiun]-[kiʃu:] 「しかし他の面では中部方言と変わらない」(1963a:8)。また「このような南部の傾向は平良でもぼつぼつ起こり始めている」(1962b)

- 4) 多良間…「宮古方言とはやや異なった形態」(1962b)。{[(tati:)wa:l]の存在,そり舌音の[l]}
- 5) 水納…「多良間方言と文法、語彙は殆んど変わらないが、音韻のみが大変化して全く新しい体系を作っている」(1962b)。{中舌方言の全失[i]>[i], そり舌音[l]>[i] ex. 鶏 [tul](多良間)-[tui](水納)}
- 6) 来間…宮古島の保良,新城を含む。「中部方言の音韻が最も変化してきたものと考えられる」(1962b)。{平良方言の[k₁]>[ts₁] ex. 息[ik₁]-[its₁]}
- 7) 大神…「宮古の中で最も注目すべき言語」(1962b)。音韻としての濁音がない—「付戸音を伴わない純粹の中舌母音」(1962b)。ex.(海老)[ib₁](平良)-[ipi](大神)
- 8) 池間…宮古島の西原、伊良部島佐良浜も含める(池間島からの移住民)。{他地域の[pa]>[xa]}
- 9) 伊良部…仲地、佐和田。「他の各方言の混合的な様相を持っているところに特徴」がある(崎山 1963a:7)。

崎山 1962b(,1963a)によるこの試みは、平山輝男との論争を呼んだ。平山 1963 は崎山 1962b の「資料採集上の誤り」を指摘し¹⁰、次いで、定説化しつつあった感のある、多良間方言を含む宮古諸方言「一型アクセント」説を否定、そして、自身の言うところの「曖昧アクセント」説を主張した¹¹。これに対し崎山 1963a はその「附記」において、資料採集に関する指摘については「一部の人が留めている archaism」(p20)に過ぎない事、また、平山 1963 の「曖昧アクセント」説の根拠となっている「反省的型」観察法¹²を、「インフォーマントに暗示を与えて調査者の思う壺に填めると言う言語暗示法的調査」であると、激しく非難した。これに平山 1964 が再度、論の詳説、反論を行なっているのだが、宮古方言の下位区分を示す事はせず、崎山氏の区分も現在まで定着していないようである。また、仲宗根 1961、上村 1963 では三区分説が採られ(1-1 の図 1)¹³、中本 1976 では、「これらの島々(下地島を除く宮古の7島—引用者)に分布する方言は、それぞれ特色があるが、基層においては宮古方言として一つにまとめることができる」(p80)と述べるに留めている。この他、新里 2003 や狩俣 1997¹⁴ などでも、宮古方言の下位区分は試みられている。

第2期では、動詞、形容詞の形態論的研究が盛んに行われている。それは、名嘉真三成

¹⁰ 平山 1963 は、8)池間方言での[pa]>[xa]のような音韻変化、また 5)水納方言での[i]>[i], [l]>[i]という音韻変化について、「これも前記池間方言と同じく、私どもの調査によれば、比較的若い層に見られることで、(中略)高齢層の発音では中舌音[i]もそり舌音[l](用例省略)もよく現われる」(p15)と述べている。

¹¹ 「一型アクセント」も「曖昧アクセント」も平山輝男による用語で、前者が、型の区別がない、つまり「アクセントによって意味の区別をし得ない」のに対し、後者は、単に「型の区別が曖昧になっているもの」、「つまり、型知覚が薄れて、型が崩壊してしまう一歩手前の相」のアクセントを指しているとされている(平山 1964:72)。崎山 1962b では、宮古方言のアクセントについて「一型アクセント」説が示されている。なお、崎山 1962b に先立ち、上村幸雄 1959「琉球方言における<一・二音節名詞>のアクセント概観」(『ことばの研究』1)、北村 1960 などこの説をとっている。

¹² 「落ちついて、話者の内省による」とある(平山 1963:16)。

¹³ 但し上村 1975 は、その「琉球方言の下位区分」(p15)において、仲宗根 1961、北村 1960 を参照していることを注記している。

¹⁴ 狩俣 1997 では、「1)宮古本島方言(来間島も含む)、2)大神島方言、3)池間島方言、4)伊良部島方言、5)多良間島方言(水納島も含む)、の5つに分かれる」(p389)としている。

また水納島では、1961年10月に、18世帯が平良市東仲宗根添(通称「高野」集落)に移住させられていることから、新里 2003 は、この「高野」の一部で用いられている方言をも「水納方言」に含めて捉えている。だが、同地への移住は大神島からも行なわれたため、「その集落には複数の小方言が混用されている」(新里 2003:533)。やはり、「水納島方言」と「多良間島方言」の関係性については、このような歴史的・社会的事情を考慮した上で捉えられるべきであり、今後更なる調査、考察が求められる。

による一連の論文群によって代表させることができるだろう。氏の研究は「宮古」各地域の方言に及び、1992 年の大著『琉球方言の古層』に結実しているのだが、ここでは 1-2 で挙げたもののうち、本論に深く関わる 2 つ(1981, 1982a)の概略を示すに留まる。

まず 1981 年の「琉球宮古方言の動詞終止形の成立」について見ていく。この論文では各地方言の実態の考察を通して、宮古方言の動詞終止形が、他の琉球方言同様、「連用形」に「居り」が結合して成り立っていることを明らかにしようと試みている。例えば、西原、仲地、長浜方言では「終止形 kafu《書く》、kuv(ku:)《漕ぐ》(中略)と同じ形式が、従来の連用形 kaki《書き》、kugi(kudzi)《漕ぎ》(中略)などと平行して連用法に用いられる」が(p311, 以下頁数は名嘉真 1992)、前者は補助動詞を伴うことができないこと、また、狩俣、西原方言の 2 種の条件形のうち、kafuriba/ kafuba(書けば)という形式は、その音韻法則から「直ちに kakure-ba(「書く」+「れば」)や kakuba(「書く」+「ば」)などに対応する形式とは考えられない」こと(p313)、西原、仲地、長浜方言に見られるもう 1 種の終止形 kafuŋ/ kafum(書く)に、「居り」の結合がほぼ定説となっている沖縄方言の katəuŋ/ kakuŋ と同じく、進行の意味がみとめられることなどを挙げ、「書く」の変化過程を次のように推察している。

*kakiwormo → kakjəmo ✓

↓
→ kakjumo $\begin{cases} \text{kakum(o)} \rightarrow \text{kafum (狩俣など)} \rightarrow \text{kafuŋ (西原)} \\ \text{kakim(o)} \rightarrow \text{kakim (平良など)} \rightarrow \text{katsim (保良)} \\ \text{kakjum(o)} \rightarrow \text{kakuŋ (大浜など)} \end{cases}$

*kakiwori → kakjəri ✓

↓
→ kakjuri $\begin{cases} \text{kakuri} \rightarrow \text{kafuri} \rightarrow \text{kafui} \rightarrow \text{kafu (狩俣など)} \\ \text{kakiri} \rightarrow \text{kakiri} \rightarrow \text{kaki:} \rightarrow \text{kaki (平良など)} \\ \text{kakjuri} \rightarrow \text{kakuru} \rightarrow \text{kaku (大浜など)} \end{cases}$

[名嘉真 1992:324]

この他の活用タイプの動詞や形態についてもその変化過程の推察は行われており、このような考察を通して、「居り」のついた新しい終止形の成立は、琉球全体を覆う言語現象であったと思われる」と結論づけるに至っている。

次に 1982 年の論文「琉球宮古方言の動詞の接続形」について、この論文では、名嘉真 1978 を踏まえつつ、「音便化」という観点から動詞の活用形を捉え、宮古諸方言の「接続形」に¹⁵、「国語の接続助詞「て」に対応する」「*te」が含まれていることが主張されている。名嘉真 1982a は宮古方言の「接続形」について、音韻対応などから「国語の連用形に対応する形式とはいえない」こと(p340)、また、「意義上国語の「書いて」に対応」し(p366)、*te の複合がみとめられる沖縄方言の「接続形」と同様のふるまいを示していることなどを挙げ、次のような変化過程を推察している。前の論文の場合と同じくその他の活用タイプについても図示されているが、ここでは「書く」についてのみ引用しておく。

*kakite(書いて) ✓

→ kakitfe → kakitfi $\begin{cases} \text{kakifi} \rightarrow \text{kakifi} \rightarrow \text{kaki: (狩俣など)} \rightarrow \text{kaki (平良など)} \\ \text{katsitfi} \rightarrow \text{kattfi (仲地)} \end{cases}$

[名嘉真 1992:324]

¹⁵ 「国語の「書いている」「漕いでみる」のように接続助詞「て」を含む形式に対応する形のこと」とされている(名嘉真 1992:330)。多良間方言では、本研究でいうところの「第一中止形」(kaki:)がこれに当たる。

この名嘉真 1981, 1982a などを受け、拙論 2002 の第 2 章「動詞論」でも、動詞の各活用形の成り立ちについて考察を試みている。まず、終止形の叙述法・断定形(名嘉真 1981 の「終止形」)について、多良間方言の *i>i* という音韻法則から、例えば */kaki/* は **kaki* から成立したと考えるのが自然であるが、弱変化タイプの「上二段活用動詞」に相当する語は非融合説では説明することができないこと¹⁶、さらに、準体形に *kakiru* という形式が現れる¹⁷ことなどから、名嘉真 1981 などと同じくヲリ融合説をとっている。だが、過去形にはヲリの融合を認める必然性はなく、「連用形」に *-アリ*、*-タリ* が後接して成立したと考えており、この点において、拙論 2002 と名嘉真 1982a の主張は異なっている¹⁸。拙論 2002 は */kaki:/* という形式について、「この形にアリが含まれるということは、*kaki:* が同音形式として中止形にも用いられることから明らかであって、同一の語形が、過去の用法にも文の中止の用法にも用いられるのは、すなわちアリの融合によってのみ実現されるものである」と述べ、それぞれ、以下のような変化の過程を推察している(*ri* 語尾形のみ示す)。このことは、シアリにさらに *-タリ* が後接して派生したであろう「直前過去形」の存在からも、有力のように思われる¹⁹。

- ari 過去形 **kakiari* > *kakeri* > *kakiri* > *kaki* > *kaki:* [I 類]
 **əkəiari* > *okeari* > *ukiarī* > *ukerī* > *uki* > *uki:* [II 類]
- 直前過去形 **kakiaritari* > *kakeritari* > *kakiritari* > *kaki:tari* > *kakiqta(l)* [I 類]
 **əkəiaritari* > *okearitari* > *ukiaritari* > *ukeritari* > *ukiitari* > *ukiqta(l)* [II 類]
- 第一中止形 **kakiari* > *kakeri* > *kakiri* > *kaki* > *kaki:* [I 類]
 **əkəiari* > *okeari* > *ukiarī* > *ukerī* > *uki* > *uki:* [II 類]

このように多良間方言研究は、第 1 期における音韻論を中心とする比較言語学的な研究の発展、第 2 期の動詞の形態論的研究の萌芽・成長を経て、現在に至っている。これは恐らく、琉球方言研究の流れにそのまま対応するものであろう。そして多良間方言では、音韻論についての研究が第 2 期にも積極的に進められており(長浜 1978, かりまた 1982 など)、その先行研究は大変充実したものとなっている。だが、形態論を始めとする文法論的研究についての積み重ねはまだ不十分であり、拙論 2002 はそれを補うため、主要な 3 品詞(名詞・動詞・形容詞)に見られる文法事項の「網羅的な」記述研究を目指した。そして本研究では、このような基礎的作業を踏まえ、<空間>と<時間>に関わる(文法的)意味内容を実現する形式の考察というテーマのもと、多良間方言研究のさらなる深化を目指していく。

¹⁶ 例えば、古代語のオク(起く)の「連用形」はオキであるが、この方言の */ukiL/* (起きる)は明らかにオキに対応しない。1 言語内で、活用タイプごとに活用形の派生が異なるというのは極めて不自然であることから、やはりヲリは融合しているものと思われる。

¹⁷ この形はまさしくカキヲルに相当し、連体形は *-ru* が脱落した形のみ用いられているが、*/kakiru/* も元々は連体形として機能していただろう。

¹⁸ 拙論 2002 では「第一中止形」(名嘉真 1982a の「接続形」)と「ari 過去形」とを同音の異なる形式として扱っており、この点においてまず、「接続形」に「言い切りの形となり、過去・完了の意味をあらわす」用法をみとめている名嘉真 1982a の立場とは異なっている(序 3 の 3-2 参照)。だがここでは、形態論に関する立場の相違は捨象しておく。なお名嘉真 1982a は、「接続形」が「過去・完了」の意味を有していることについて次のように述べている。「助詞「て」は本来過去・完了の助動詞「つ」の連用形と考えられており、琉球方言の接続形が過去・完了の意味を有することはその古い姿を保持するものと考えられる」(名嘉真 1992:336)。

¹⁹ 但し、*ukiL* (起きる)と同じく「上二段活用動詞」である *ni:L* (煮る)、*mi:L* (見る)など、その古形を **Cai-* に遡れない語がなぜ、*i>i* の音韻変化を免れたのかということが依然問題となっている。他の弱変化タイプ動詞、また *ari* 過去形から、*i>i* の類推変化が起こったことも考えられるが、はっきりしない。

2. 音韻論

多良間方言の音韻については、先述の塩川と仲筋とでは語彙レベルにおける音韻的な対立の他²⁰、共通語のリ(ル)に対応する/L/や、/N/とは別に/M/が立ちうることなどを、その特徴的な現象として挙げることができる。多良間方言では、音韻論的にも興味深い現象が数多く見られるのだが、ここでは、あくまでも本論における前提の1つとして、同方言の音韻体系及び共通語との対応、さらにその変化の現象などについて記述し、その大概を示すに留める。第1章以下の用例の表記は、全てここでの記述に従っている。

2-1 音韻体系

まず、多良間方言の音韻体系を示していく。

2-1-1 音素

(1) 母音音素 A.短母音音素 /i, i, a, u,(e),(o)/ [4 (6)]

B.長母音音素 /i:, e:, i:, a:, u:, o:, e:, ü:/ [8]

Aの短母音音素について、中舌狭母音/i/²¹は多く摩擦音を伴い、その存在は宮古方言に特徴的なものである。また/e/と/o/は、e>i, o>uというこの方言の音韻対応によって、その出現が極めて少数である。他の四つと比べてもその劣勢は明らかではあるが、いわゆる共通語(以下単に共通語)の影響によって使用が増えつつある等の理由により、()に入れて暫定的に認めている。特に/e/は、[ba:re](おりこう {note.子供に対して用いる}), [mmepi](もっと)、[mme](もう)などのように、共通語に由来しない、多良間方言の日常語彙の中にもいくつか観察される音であることから、/o/よりも音韻として認められやすいように思われる。だが、共通語由来の語を除いて語頭には立たないことから、示すならばやはり()に入れるべきであろう。

Bの長母音音素は、短母音音素をもととしつつ、その「音声器官の状態を維持することによってつくられる」(長浜 1978:1)。つまり、これらは短母音の連続として認められる性質を有するものではなく、[a:m](あくび)と[am](綱)のような最小対立を示すことから、1つの分節的な単位として機能していると言える。また、その「(音を)伸ばす」という特徴のみを切り出し、長音記号などを用いて分析的に捉えてしまうと、それぞれの「長音」に見られる音響的な違いを捨象してしまうこととなり、適切ではない。

/e:/と/o:/は、以下に示す連母音の融合現象によって現れるものが大半であると考えられる。だが後者について、仲筋では[au]の融合が起らず、塩川の[o:]と語彙的な対立を示している(注20参照)。また[ai]と[ae]について、その他の連母音が仲筋([au]を除く)、塩川ともに長母音化して現れる場合が主であるのに対し、この2種の連母音ではむしろ非長母音化が優勢である。まず[ai]は、例えば[kaiku](蚕)、[dai](値段{代}), [taigai](大体{大概}), [unigai](お願い)等のように、特に名詞の語彙レベルでの長母音化は稀である²²。[ai]の融合

²⁰ 塩川-仲筋で、/o:/-/au/の音韻対立が見られる。例。「棒」/bo:/-/bau/、「買う」/ko:/-/kau/ また「松明」を指し示す語にのみ、/umuci/-/umaci/のように/u/-/a/の対立が現れている。

²¹ この中舌母音/i/についてこれまで多くの論説がみられるが、本稿での考察はその論議の結論を見出すまでに至らず、これまで通り/i/を用いることとした。

現象は、例えば共通語のカイ(買)、ツカイ(使)にそれぞれ対応する強変化動詞のいわゆる連用形が[ke:]、[tsuke:]のように現れるなど、主に動詞の形態レベルにおいて生じると考えられる。また形容詞[ne:ŋ](無い)、助数詞[pituke:](1回)も、原則的に長母音化して現れる。[ae]について、音韻対応による[ai]と、そこからさらに長母音化した[e:]のいずれも現れる。だがその出現頻度からは[ai]が優勢であり、特に弱変化動詞及びそれに準じる形式、また[kaisi](返す)のように対応する弱変化動詞([kail]返る²³)を持つ強変化動詞では、その活用形のいずれにも融合現象は生じていない。なお例外として、カンガエルに対応する語に[kanɡail]と[kanɡe:M]の2型見られるが、後者は「気遣う」というニュアンスを伴っており、両者のその語彙的意味には若干の差異が見られる。またその基本となる形式も異なることから、これらは別語として扱われるべきだろう。

e: < ie, ija, {ai, ae} 語例) [ke:ril](消える), [me:ku](宮古), [e:gu](歌{アイゴ}), [me:](前{mai とも})²⁴

o: < au, ao, owa 語例) [ko:](買う note.塩川)), [o: ʃa:l](青い), [jo: ʃa:l](弱い)

また、/ɛ:/と/ü:/は、その出現が限定され、助辞が後接した形式の融合形、すなわち文中での存在形態としてのみ現れる点で特殊である。/ɛ:/は、末尾音が/t/である語の係助辞/-ja/によるとりたて形式、/ü:/も同様に、末尾音が/t/である語の、対格助辞/-ju/の後接した格形式の融合形である。/ü:/は、/ɛ:/に比べて分析的な形でも現れやすく、やや新しい変化であると思われるが、いずれも次のような最小対立を示し、上記の融合音/e:/と/o:/が認められるのと同じく、1つの音素として認められる。

[gagɛ:] (鉤は{<gagi-ja})	[takü:] (炊くのを{<taki-ju})
[kage:] (影は{<kagi-ja})	[taku:] (蛸を{<taku-ju})

(2) 子音音素 A.一般子音音素 /h, k, g, t, d, c, s, z, r, n, f, v, p, b, m, l/ [16]

B.口蓋音子音音素 /j, hj, kj, cj, zj, sj, pj, bj, mj/ [9]

C.唇音子音音素 /w/ [1]

A について、歯茎破裂無声音/t/と歯茎摩擦無声音/c/は相補分布を示さず、別音素として解される。なお/c/には条件異音として[tɕ]が含まれる。また、/z/、/s/にも条件異音[z]と[dʒ]、[ʃ]がそれぞれ含まれる。B の/kj/以下の音素について、これらは、例えば[k][j]のように分断することのできない、つまり、わたり音的に発されているのではないということから、1つの音素として認められるべきであると考ええる。そして/j/も含めたこれらの音は、口蓋音という特徴から、口蓋音子音音素としてまとめられる。

²² 首里方言でこれらの語は、それぞれ deeni(代値)、teegee(大概)、(u)nigee(お願い)のように、全て長音化する(『沖縄語辞典』より。以下本節における首里方言の引用は全て同書による)。しかし、行き先を表す格助辞へ(向格)の場合、多良間方言[ŋke:]に対し、首里方言では-kaiのように長母音化が生じないという、逆の現象が見られる。ちなみに石垣方言でも、向格は-kaiで現れている(登野城 2002)。

²³ なお、「帰る」に相当する語には[ke:l]と[kail]の2形式が確認された。だが、この方言にはもともと「帰る」に該当する語はなく「行く」「来る」と同語形(平山 1983:450)が用いられていたのであり、よってこれは比較的新しい語であると言える。強変化動詞からの類推によって2形式が生じたものと思われるが、同音形式[kail](返る)などへの影響の有無は、今のところ確認できていない。

²⁴ なお、マエ(前)は[mai]で現れるのが基本的であり、両形式の、その意味・用法による使い分けは今のところ見られない。また、主に<到着点>を表す[-ŋke:](向格)、[-ŋka](処格)を伴って、[-ga mai(ŋke:)](〜のところへ)という言語形式によってヒト名詞の空間化を行う用法においては、原則的に長音化しない。

(3)成節子音音素 A.短子音音素 /q, N, M, L/ [4]

B.長子音音素 /N:, M:/ [2]

成節子音音素は、単独で音節を成し得るという点において(2)の子音音素から区別される。なお、/L/を除く全ての音素が、単独で語頭に立ち得る。

まず/q/について、これは促音を表し、以下に示すようなものが該当する。

[tippu:](鉄砲), [ffa](子供), [bikivva](男の子), [ssaku](咳), [baʃʃi:l](忘れている),

[tsukkari:l](疲れている), [uttu](年下<弟、妹>), [baddzi](なぐる), [tulla](鶏は)

金田一(1958)は日本語の促音の本質について、口腔内における閉鎖・狭窄の一般、さらにつきつめて閉鎖の持続・狭窄の持続であると述べている(金田一 1967:161)。多良間方言においても、「詰める音」がその前に現れる音は、その調音方法においていずれも閉鎖や狭窄を伴うものである。つまり、これらは<閉鎖・狭窄>という音声的特徴によって促音音素/q/に抽象化される。また、[utu](音)と[uttu](年下の総称)のように、促音の有無による意味の弁別が行われること、閉鎖・狭窄の持続部が1拍分の長さを保持することも、その音節性の根拠として挙げられる。従って促音音素/q/が認められ、これには[p, f, v, s, ʃ, k, t, d, l]が該当することとなる。このように考える事は、一見、母音音素に長短の別を認めることと矛盾するようである²⁵。だが、両者の長音部及び閉鎖・狭窄部それぞれに位置する、それぞれの音声の音響的差異の程度は著しく異なっており、またすでに見たように、長母音/e:, ë:, o:, ü:/に対応する短母音/e, ë, o, ü/の出現はない、あるいは稀である。よって両者に同等の抽象の度合いを与える事は、この場合決して適切とは言えない。

/N/は撥音を表し、その調音的な違いから/n/と区別される。すなわち、/n/が舌先でおこなわれる「破裂の鼻音」であるのに対して、/N/は「閉鎖の鼻音」と称されるように、促音/q/同様、その本質は「閉鎖の持続」にある(金田一 1967:164)。そしてそれが十分に1拍分の長さを持つことから、撥音音素/N/が認められる。また、[anga](姉)、[baŋki](吠える)、[aŋ](私)のように、その出現が後に続く子音やその位置によって条件付けられている軟口蓋鼻音[ŋ]などは、「閉鎖の鼻音」の条件異音として/N/に含まれる。

またこの方言では、[am](網)、[mni](胸)、[mta](土)のように、後接する子音やその位置に条件付けられることなく、単独で音節を成し得る[m]が観察される。さらにこの[m]は、[aŋ](餡)－[am](網)のように撥音の条件異音[ŋ]と互いに意味を弁別する要素となることから、子音音素[m]から区別され、/N/とは別に成節音素/M/として解釈される。だがここで、[mmaga](孫)、[mbail](耐える)等、/mV, bV, pV/の音節の前に現れる[m]が問題となる。すなわち、この場合の[m]は/N/の条件異音ではないのかという問いである。だがこの方言では[ʃaninmutsi](月桃の葉で包んだ餅)のように、/nV/の前に現れる[m]と共に、/mV/の前に現れる[n]も観察される。この語は[ʃanin](月桃)と[mutsi](餅)からなる複合名詞であるから、一語となって[m]が後に続きつつも、[ʃanin]の[ŋ](/N/)が保たれているのである。従って、例えば[im](海)と[patarakī](働く<き>)からなる[imbatarakī](漁など海で行なう仕事の総称)の[m]も、両唇音[p(b)]が後に続くという「条件」によって現れたものとは言えず、上記の問いは否定される。だが[mbil](伸びる)等、共通語との対応から[nu>n>m]という変化が想定される語があ

²⁵ 例えば仲原 2003 では長音音素/R/を認め、「これら長音の音声実質はそれぞれ直前の母音と同じであるが、分節音素としてのそれぞれの母音の属性をこえて、時間的単位としての一拍分の長さが意味の弁別に関与している」(p148・下線引用者)と解釈する。

る。この場合のみを上と区別して扱うことも考えられるが、[nu(no)>m]という音韻変化(対応)を示すものは今のところごく少数であり²⁶、既に見たとおり、多良間方言における[m]と[n]の区別は厳密なものである。よって本稿では、助辞の後接などの形態レベル及び統語論レベルでの[n>m]である場合を除いて、/N/の条件異音としての[m]を/M/から区別することなく、一括して扱うこととする。

この/N/と/M/からは、さらに長子音音素/N:/と/M:/が区別される。いずれの長子音音素も短子音音素と比してその出現は量的に少数だが、前者が後者を基としつつ、その状態が保たれた音であるという点で長母音音素と同質であり、間に「閉鎖」の解放がないことから、/N/及び/M/の連続とは認められない。[nna](綱)と[n:na](大便の幼児語)のように最小対立を示し、長母音の場合と同じく、1つの分節的な単位として機能していると言える。このような長短の区別は、/N/と/M/が他の短子音音素に比べて、より成節的であることを示しているだろう。

母音を伴わない歯茎側面音[l]の出現は、多良間方言に特有の音声的特徴として多く指摘されている。音韻対応からは[rɪ]となるはずのものだが、後者は今のところ観察されていない。対格助辞[-ju]及び係助辞[-ja]の後接によって、[akal-ju>akallu](蟻を)、[tul-ja>tulla](鶏は)のように融合・促音化の現象が見られるが、その他の助辞の後接ではその成節性は失われず、十分に1拍分の長さを持つことから、/L/が認められる。なお母音を伴う[l]について、その出現に構文論的な条件を有すること、また本稿では、特に語彙的意味の弁別をなさない形態論的な音韻のレベル(形態音韻論)を中心とはしないことから、歯茎弾き音[r]とはその調音方法において異なっているものの、/r/の異音として位置付けるものとする。

2-1-2 音節構造

多良間方言の音節構造には次の8種が認められる。

- (1) /V/ (2) /CV/ (3) /q/ (4) /N/ (4)' /N:/ (5) /M/ (5)' /M:/ (6) /L/

Cは子音、Vは母音を表す。(2)のCとVにはそれぞれ全ての子音と母音が立ちうるが、/ti/、/di/、/ri/、/ni/の音節は欠ける。(3)から(6)はそれぞれ成節子音音素による音節を表しており、(4)'、(5)'は長子音音素によるそれを表す。また、母音音素についても長短の区別のあることを示したが、(1)と(2)にもその別をつけることができるだろう。いずれも短い音節は音数律的に1拍を構成し、長い音節は2拍を構成する。

2-1-3 音節表

以下、多良間方言の音節とそれに該当する音声を示す。表では音節を/ /で囲わないで示している。*は未確認の音節、-は体系的あきまである。また出現が稀である、あるいはそのほとんどが共通語由来の語において現れている音節は、()に入れて示す。

○ /V/及び/CV/ {但しCは一般子音音素}

a	a:	e	e:	ẽ:	i	i:	ĩ	ĩ:	u	u:	ü:	(o)	o:
[a]	[a:]	[e]	[e:]	[ẽ:]	[i~ji]	[i~ji:]	[ĩ]	[ĩ:]	[u]	[u:]	[ü:]	[o]	[o:]

²⁶ この方言では[nudu](咽喉)、[nunu](布)のように、語頭・語尾に関わらず[no]-[nu]の音韻対応を示すのが普通である。これまでに[nu(o)]>[n]>[m]という変化の想定のできる語は[mbil](伸びる)、[mbasi](伸ばす)、[mnil](濡れる)等があり、調査が進めば/M/から/N/の条件異音[m]を区別する必要の出る可能性はある。その音の現れる位置も考慮して、検討していかなければならないと考える。

ha	ha:	he	he:	*	*	*	*	*	-	-	-	ho	ho:
[ha]	[ha:]	[he]	[he:]									[ho~φo]	[ho:~φo:]
ka	ka:	ke	ke:	kē:	ki	ki:	kī	kī:	ku	ku:	kū:	ko	ko:
[ka]	[ka:]	[ke]	[ke:]	[kē:]	[ki]	[ki:]	[k ^h i~kī]	[k ^h i:~kī:]	[ku]	[ku:]	[kū:]	[ko]	[ko:]
ga	ga:	ge	ge:	gē:	gi	gi:	gī	gī:	gu	gu:	gū:	go	go:
[ga]	[ga:]	[ge]	[ge:]	[gē:]	[gi]	[gi:]	[g ^h i~gī]	[g ^h i:~gī:]	[gu]	[gu:]	[gū:]	[go]	[go:]
ta	ta:	te	te:	-	ti	ti:	-	-	tu	tu:	-	to	to:
[ta]	[ta:]	[te]	[te:]		[ti]	[ti:]			[tu]	[tu:]		[to]	[to:]
da	da:	(de)	de:	-	di	di:	-	-	du	du:	-	(do)	do:
[da]	[da:]	[de]	[de:]		[di]	[di:]			[du]	[du:]		[do]	[do:]
-	-	(ce)	ce:	cē:	ci	ci:	cī	cī:	cu	(cu:)	cū:	-	-
		[tse:~tʃe:]	[tse:~tʃe:]	[tsē:]	[tʃi]	[tʃi:]	[tsī]	[tsī:]	[tsu]	[tsu:]	[tsū:]		
sa	sa:	(se)	se:	sē:	si	si:	sī	sī:	su	(su:)	sū:	(so)	(so:)
[sa]	[sa:]	[se]	[se:]	[sē:]	[si~fi]	[si:~fi:]	[sī]	[sī:]	[su]	[su:]	[sū:]	[so]	[so:]
(za)	*	*	*	zē:	zi	zi:	zī	zī:	zu	zu:	zū:	*	*
[za]				[dzē:]	[dʒi]	[dʒi:]	[zī~dzī]	[zī~dzī]	[dzu]	[dzu:]	[dzū:]		
ra	ra:	(re)	re:	-	ri	ri:	-	-	ru	ru:	-	(ro)	ro:
[ra~la]	[ra:~la:]	[re]	[re:]		[ri]	[ri:]			[ru~lu]	[ru:~lu:]		[ro]	[ro:]
na	na:	(ne)	ne:	-	ni	ni:	-	-	nu	nu:	-	(no)	no:
[na]	[na:]	[ne]	[ne:]		[ni]	[ni:]			[nu]	[nu:]		[no]	[no:]
fa	fa:	*	fe:	*	fi	fi:	(fī)	(fī:)	fu	fu:	*	*	*
[fa]	[fa:]		[fe:]		[fi]	[fi:]	[fī]	[fī:]	[fu]	[fu:]			
va	va:	*	ve:	*	vi	vi:	vī	*	vu	*	*	*	*
[va]	[va:]		[ve:]		[vi]	[vi:]	[vī]		[vu]				
pa	pa:	(pe)	pe:	*	pi	pi:	pī	pī:	pu	pu:	*	*	po:
[pa]	[pa:]	[pe]	[pe:]		[pi]	[pi:]	[p ^h i~pī]	[p ^h i:~pī:]	[pu]	[pu:]			[po:]
ba	ba:	(be)	be:	bē:	bi	bi:	bī	bī:	bu	bu:	bū:	(bo)	bo:
[ba]	[ba:]	[be]	[be:]	[bē:]	[bi]	[bi:]	[bī]	[bī:]	[bu]	[bu:]	[bū:]	[bo]	[bo:]
ma	ma:	me	me:	*	mi	mi:	mī	mī:	mu	mu:	*	(mo)	mo:
[ma]	[ma:]	[me]	[me:]		[mi]	[mi:]	[mī]	[mī:]	[mu]	[mu:]		[mo]	[mo:]

○/CV/及び/q~/L/ {*但し C は口蓋音及び唇音子音音素}

ja	ja:	je	je:	ju	ju:	jo	jo:	wa	wa:	we	we:
[ja]	[ja:]	[je]	[je:]	[ju]	[ju:]	[jo]	[jo:]	[wa]	[wa:]	[we]	[we:]
(hja)	hja:	-	-	*	*	*	*	-	-	-	-
[hja]	[hja:]										
(kja)	*	-	-	*	kju:	(kjo)	kjo:	-	-	-	-
[kja]					[kju:]	[kjo]	[kjo:]				
*	*	-	-	*	*	(gjo)	(gjo:)	-	-	-	-
						[gjo]	[gjo:]				

cja	cja:	*	*	cju	cju:	*	cjo:	-	-	-	-
[tʃa]	[tʃa:]			[tʃu]	[tʃu:]		[tʃo:]				
sja	sja:	sje	sje:	sju	sju:	sjo	sjo:	-	-	-	-
[ʃa]	[ʃa:]	[ʃe]	[ʃe:]	[ʃu:]	[ʃu:]	[ʃo]	[ʃo:]				
zja	zja:	*	*	zju	zju:	*	zjo:	-	-	-	-
[dʒa]	[dʒa:]			[dʒu]	[dʒu:]		[dʒo:]				
*	*	*	*	(rju)	rju:	(rjo)	rjo:	-	-	-	-
				[rju]	[rju:]	[rjo]	[rjo:]				
*	*	*	*	*	(nju:)	*	*	-	-	-	-
					[nju:]						
*	(pja:)	-	-	*	*	*	(pjo:)	-	-	-	-
	[pja:]						[pjo:]				
(bja)	*	-	-	*	bju:	*	bjo:	-	-	-	-
[bja]					[bju:]		[bjo:]				
*	*	-	-	*	(mju:)	*	*	-	-	-	-
					[mju:]						

q [p, f, v, s, ʃ, k, t, d, l]

N [n~ɳ, ŋ, (m)]

N: [n:]

M [m]

M: [m:]

L [l]

以上の音節の内/ɸi/、/fu/、/vi/、/vu/について、これらは語中に位置した場合、その母音が無声化して現れる。これを成節的子音/F/、/V/として解する研究者も見られるが²⁷、語頭・語尾ではほとんど無声化せず、共に閉鎖性の強い摩擦音である多良間方言の[f]、[v]の音声的特徴が、語中において際立たされた結果によるものだと考えられる。この方言の[f]、[v]の発声はやや唇歯音的であり、共通語よりも英語のそれに近く聞こえる。また今回確認できた/vV/の音節は、全て促音の直後に現れていた。

2-2 音韻対応

多良間方言と共通語との対応関係を以下に示す。なお対応表を除いて、共通語の音韻は片仮名表記を用いて表している。

2-2-1 母音対応

(1)短母音音素...多良間方言の短母音と共通語のそれとは次のように対応する。

共通語	a	e	i	u	o (ア エ イ ウ オ)
多良間	a	i	i	u	

²⁷ 長浜 1978 では、本稿で促音と解した語頭の[f]、[v]についても、成節的子音/F/、/V/として扱っている。だがこれらを認めることは、他の促音/q/に含まれる音声についても成節的子音として扱うことを意味し、適切ではない。

共通語のアに/a/、エに/i/が対応し、ウとオは/u/に統合している。イに対応する音素は/i/と/i/であるが、連母音(ア)イに対応するときはそのほとんどで/i/が現れる。また語頭のイにも、[i]が対応する場合が多いようである。

<ア> [akaʃa:l](赤い), [aki](開く)

<エ> [ibi](伊勢えび), [kui](声)

<イ> [izi](言う), [isi](石), [daidzi](大変{大事}), [mainitsi](毎日)

<ウ> [usi](牛), [usunu:](失う)

<オ> [ukil](起きる), [ukina:](沖縄)

但し、共通語のイが/N/、/na/に、ウが/M/、/fu/に対応している例も見られる。

[nnabikal](稲光), [nama](今), [mmaril](生まれる), [futti](移る)

なお、/c/、/z/、/s/の後に位置する共通語の/u/は、/i/に対応することが多い。

[ciffi](作る), [midziraʃa:l](珍しい), [usi](臼)

(2)長母音音素

A. 多良間方言の/i:/は、共通語の1音節1拍の語の短母音音素/e/と/i/に対応する。

[i:](絵), [mi:](目), [ni:](荷), [ki:](木)

なお、[ie]>[i:]のように長母音化した語も観察されている。

[pi:ʃa:l](寒い, 冷たい{ヒエ hie})²⁸

また係助辞/-ja/が、語幹末尾音が[i]で、その直前の音節の母音が[a]である語に後接した場合に/i:/が現れることがある。但し、原則的な変化ではない。

[ami:](雨は{ami-ja [ame:]も可})

B. 多良間方言の/i:/は、共通語の1音節1拍の語の短母音音素/i/に対応する。

[ki:](気), [pi:](火), [mi:](巳), [tsi:](乳)

なお、共通語の1音節1拍の語の短母音音素/i/への対応は/i:/がそのほとんどであり、/i:/による対応例は、現在のところ上記の2例しか確認できていない。

C. 多良間方言の/a:/は、共通語の1音節1拍の語の短母音音素/a/及び、連母音/awa, awo/に対応する。

[pa:](葉), [ta:](田), [na:](名), [a:](粟), [ka:](川), [a:sa](アヲサ)

なお、係助辞/-ja/が、末尾音が[a]である語に後接した場合にも/a:/が現れる。

[nara:](自分は{<nara-ja}), [ata:](明日は{<ata-ja})

D. 多良間方言の/u:/は、共通語の1音節1拍の語の短母音音素/u/と/o/に対応する。また、いわゆるハ行四段動詞に相当する語の多くで、/u:/が現れる。

[ju:](湯), [pu:](帆) / [fu:](食う), [baru:](笑う)

なお、対格助辞/-ju/が、末尾音[u]である語に後接した場合にも/u:/が現れる。また指示代

²⁸ この他[mi:l](見える), [ni:l](煮える)などが、[ie]>[i:]によってそれぞれ[mi:l](見る), [ni:l](煮る)と同音となっている。動詞の場合、[ie]が[i:]と[e:]のいずれに変化するかは対となる動詞の有無に関わるか。

名詞の場合のみ、/ju/が末尾音[l]である語に後接して/(r)u:/が現れる。

[pitu:](人を{< pītu-ju}), [munu:](ものを{< munu-ju}) / [kuru:](これを{< kul-ju})

E. 多良間方言の/e:/は、共通語の連母音/ie, ija, {ai, ae}/に対応する。2-1 の(1)参照。

[ke:ril](消える), [me:ku](宮古), [e:gu](歌{アイゴ}), [me:](前)

なお、係助辞/-ja/が、末尾音が[i]である語に後接した場合/e:/が現れる。但し、その直前が母音、すなわち連母音である場合は当てはまらない。

[ime:](意味は{< imi-ja}), [ʃake:](酒は{< ʃaki-ja})

また指示代名詞においてのみ、末尾音[l]の後に/-ja/が後接して/(r)e:/が現れる。

[ure:](それは{< ul-ja})

F. 多良間方言の/o:/は、共通語の連母音/au, ao, owa/に対応する。但し、仲筋では[au]の融合は起こらず、塩川の[o:]と語彙的な対立を示している。2-1 の(1)参照。

[ko:](買う {note.塩川}), [o:ʃa:l](青い), [jo:ʃa:l](弱い)

なお、係助辞/-ja/が、末尾音が[u]である語に後接した場合/o:/が現れることがある。

[pito:](人は{< pītu-ja}), [muno:](ものは{< munu-ja})

G. 多良間方言の/ɛ:/について、共通語との対応関係は見られず、末尾音が/i/である語に係助辞/-ja/が後接して生じる融合音である。

[pagɛ:](脚は{< pagi-ja}), [futsɛ:](口は{< futsi-ja})

H. 多良間方言の/ü:/について、共通語との対応関係は見られず、末尾音が/i/である語に格助辞/-ju/が後接して生じる融合音である。

[mitsü:](道を{< mitsi-ju}), [panasü:](話を{< panasi-ju})

2-2-2 子音対応

子音対応については、主に短母音を含む音節についてのみ記述する。

(1)カ行子音...共通語のカ行子音には、音節によって多良間方言の/k/, /f/が対応する。

共通語 ka ke ki ku ko (カ ケ キ ク コ)

 | | | | |
多良間 ka ki kī fu ku

共通語のカに/ka/, ケに/ki/, キに/kī/, クに/fu/, コに/ku/がそれぞれ対応しており、全ての段に区別がある。

<カ> [kaki](書く), [ka:ra](瓦) <ケ> [taki](竹), [kiddzi](削る)

<キ> [kīn](着物), [kiki](聞く) <ク> [fumu](雲), [fuʃul](薬)

<コ> [kuma](ここ), [kugani](黄金)

但し、共通語のカが/ga/, /ku/に、キが/ki/に、クが/ku/に対応している例も見られる。

[garaʃa](鳥), [kubi](壁), [kimil](決める), [kutibuni](頬骨{口骨})

(2)ガ行子音...共通語のガ行子音には、音節によって多良間方言の/g/, /v/が対応する。

共通語 ga ge gi gu go (ガ ゲ ギ グ ゴ)

多良間 ga gi gĩ vĩ gu

共通語のガに/ga/、ゲに/gi/、ギに/gĩ/、グに/vĩ/、ゴに/gu/がそれぞれ対応しており、全ての段に区別がある。

<ガ> [agal](上がる), [kagaM](鏡) <ゲ> [kagi](影), [ningin](人間)

<ギ> [m:gi](右), [gagi](鉤) <グ> [do:vi](道具 {note.[do:], [do:gu]とも})

<ゴ> [kagu](籠), [masu:gu](真っ直ぐ)

(3)サ行子音...共通語のサ行子音には、音節によって多良間方言の/sj/、/s/が対応する。

共通語 sa se si su so (サ セ シ ス ソ)

多良間 sja si si sju

共通語のサに/sja/、セに/si/、シに/si/、スに/si/、ソに/sju/がそれぞれ対応している。イ段とウ段が同音となり、またア段とオ段で口蓋化が生じている。

<サ> [ʃaki](酒), [ʃakil](裂ける) <セ> [aʃi](汗), [ʃinʃi:](先生)

<シ> [usi](牛), [ka:si](お菓子) <ス> [usi](臼), [si:gata](姿)

<ソ> [buʃu](へそ), [ʃudatil](育てる)

但し、共通語のサが/sa/に、シが/si/に、またスが/sju/に対応している例も見られる。なおサと/sa/の対応例は、漢数詞の「三」など、ごく限られた語にのみ現れている。

[sanʃtu](三斗), [ʃinʃka](臣下 {note.「民」という意味でも用いられる}), [fuʃul](薬)

(4)ザ行子音...共通語のザ行子音には音節によって多良間方言の/d/、/z/、/zj/が対応する。

共通語 za ze (zi) (zu) zo (ザ ゼ ジ ズ ゾ)

多良間 da zi zi zju

共通語のザに/da/、ゼに/zi/、ジに/zi/、ズに/zi/、ゾに/zju/がそれぞれ対応している。イ段とウ段が同音となり、またオ段で口蓋化が生じている。

<ザ> [ada](痣), [kiɖam](刻む) <ゼ> [maddʒil](混ぜる), [udʒin](お膳)

<ジ> [dʒinaŋ](次男), [tudʒi](妻 {刀自}) <ズ> [kidʒi](傷), [padʒimil](始める)

<ゾ> [kudʒu](去年), [dʒu:ʃi:](雑炊)

但し、共通語のザが/zja/(/zja:/)に、ゼが/di/に対応している例²⁹も見られる。

[kudʒara](小皿), [dʒa:](部屋 {座}), [kadi](かぜ)

(5)タ行子音...共通語のタ行子音には、音節によって多良間方言の/t/、/c/が対応する。

共通語 ta te ci cu to (タ テ チ ツ ト)

多良間 ta ti ci tu

²⁹ 名嘉真 1992 では共通語のゼに対応する音韻は/di/とされているが、[kadi](風)以外にその用例は確認できず、また[din](金 {銭})(名嘉真 1992:274)は現在[dʒin]という形をとって現れていることから、本稿では、ゼと/zi/の対応を認めている。

共通語のタに/ta/、テに/ci/、チに/ci/、ツに/ci/、トに/tu/がそれぞれ対応しており、また、イ段とウ段が同音となっている。

<タ> [takaʃa:l](高い), [tani](種) <テ> [tigami](手紙), [tati](立てる)

<チ> [akatsi](血), [mitsi](道) <ツ> [tsibu](壺), [tsiku:](使う)

<ト> [tul](鶏), [tunal](隣)

但し、共通語のチが/ti/に対応している例も見られる。

[kutibuni](頬骨{口骨})

(6)ダ行子音...共通語のダ行子音には、音節によって多良間方言の/d/、/z/が対応する。

共通語	da	de	(zi)	(zu)	do	(ダ デ ズ ド)
多良間	da	di	zi	du		

共通語のダに/da/、デに/zi/、ズに/zi/、ドに/du/がそれぞれ対応しており、また、イ段とウ段が同音となっている。これらはまたザ行のイ段・ウ段とも同音であり、多良間方言も、共通語同様、四つ仮名の区別はないと言える。

<ダ> [nada](涙), [mida](まだ) <デ> [udi](腕{note.[kaina]とも}), [idil](出る)

<ズ> [adzi](味), [dzi:](地) <ド> [midzi](水), [sīdzim](沈む)

<ト> [duru](泥), [duku](毒)

(7)ナ行子音...共通語のナ行子音には、音節によって多良間方言の/n/、/N/、/M/が対応する。

共通語	na	ne	ni	nu	no	(ナ ネ ニ ヌ ノ)
多良間	na	ni	N	M	nu	

共通語のナに/na/、ネに/ni/が対応している。またイ段の対応について、この方言には/ni/の音節が存在しないことから、ニはネと同じく/ni/、もしくは/N/が対応している。ヌとノは/nu/に統合しているが、ヌはまた/M/にも対応する。

<ナ> [naril](慣れる), [nagaʃa:l](長い) <ネ> [nini](寝る), [nika](猫)

<ニ> [ni:l](煮る), [ngaʃa:l](苦い) <ヌ> [nul](塗る), [mni](濡れる)

<ノ> [num](飲む), [nunu](布)

但し、共通語のノが/nu:/に対応している例も見られる。

[nu:ʃil](乗せる)

(8)ハ行子音...共通語のハ行子音には、音節によって多良間方言の/p/、/f/が対応する。

共通語	ha	he	hi	fu	ho	(ハ ヘ ヒ フ ホ)
多良間	pa	pi	pī	fu	pu	

共通語のハに/pa/、ヘに/pi/、ヒに/pī/、フに/fu/、ホに/pu/がそれぞれ対応しており、全ての段に区別がある。

<ハ> [paki](吐く), [pana](花) <ヘ> [pinal](減る), [pinnaʃa:l](変な, 変わった)

<ヒ> [pīgi](髭), [pī:ma](昼間) <フ> [futa:tsi](二つ), [funi](船)

<ホ> [puni](骨), [pumil](褒める)

(9)バ行子音...共通語のバ行子音には、音節によって多良間方言の/b/、/v/が対応する。

共通語	ba	be	bi	bu	bo (バ ベ ビ ブ ボ)
多良間	ba	bi	bī	(vī)	bu

共通語のバに/ba/、ベに/bi/、ビに/bi/、ボは/bu/にそれぞれ対応している。ウ段について、名嘉真 1992 など[V](本稿での[vī])で報告されている語の多くは、現在[fu(fɪ?母音は無声化)]によって現れている。だが[avva](油)など、音韻同化の生じた語にその痕跡が認められることから、()に入れてではあるが、ブと/vī/の対応を認めている。

<バ> [bakal](ばかり {note.程度の副助辞}) <ベ> [nabi](鍋) [jubi](夕べ)

<ビ> [tabī](旅), [tubīkusī](飛び越す) <ブ> [vītsī](打つ {note.現在は futsī が普通})

<ボ> [ubuil](覚える), [tsību](壺)

但し、共通語のビが/bi/、/gi/に、ブが/bu/に対応している例も見られる。

[uibi](指), [fugī](首), [kubu](昆布)

(10)マ行子音...共通語のマ行子音には、音節によって多良間方言の/m/、/M/が対応する。

共通語	ma	me	mi	mu	mo (マ メ ミ ム モ)
多良間	ma	mi	M	mu	

共通語のマに/ma/が対応し、ムとモは/mu/に統合している。イ段とエ段が同音となっており、またイ段とウ段はそれぞれ/mi/、/mu/の他に、/M/にも対応している。なお、共通語のミ、ムと/M/の対応は、その出現位置によって制限されていない。

<マ> [mami](豆), [matsī](待つ)

<メ> [jumi](嫁), [midzīraʃa:l](珍しい)

<ミ> [midzī](水), [mim](耳)

<ム> [muku](婿), [num](飲む)

<モ> [munu](もの), [mutsī](持つ)

但し、共通語のマが/mi/に、ミが/bi/に対応している例も見られる。

[mida](まだ), [kabi](紙)

(11)ヤ行子音...共通語のヤ行子音には多良間方言の/j/が対応する。

共通語	ja	ju	jo (ヤ ュ ヨ)
多良間	ja	ju	

共通語のヤに/ja/が対応し、ユとヨは/ju/に統合している。

<ヤ> [jakī](焼く), [jaʃai](野菜)

<ユ> [jum](弓), [jubi](夕べ)

<ヨ> [jumi](嫁), [ju:tsī](四つ)

但し、共通語のヨが/i/に対応している例も見られる。

[uigī](泳ぐ)

(12)ラ行子音...共通語のラ行子音には、音節によって多良間方言の/r/、/L/が対応する。

共通語	ra	re	ri	ru	ro (ラ レ リ ル ロ)
多良間	ra	ri	L	ru	

共通語のラに/ra/に、レが/ri/に、リが/L/にそれぞれ対応しており、ルとロは/ru/に統合している。またルは/L/とも対応している。なお、/L/は原則として語頭には立たない。

<ラ> [para](柱), [tura](寅) <レ> [turi](取れ{note.命令形}), [naril](慣れる)
 <リ> [tul](鶏), [uril](下りる) <ル> [ʃa:ru](猿), [kalla:l](軽い)
 <ロ> [iru](色), [mutʃi](持つ)

但し、共通語のルに対応する語中・語尾の/ru/、/L/が脱落・長音化している例や、子音[r]の脱落によって、/i/が対応している例も見られる。

[pi:ma](昼間) [ma:ku](丸い) [si:](汁{note.[siru]とも}) [aikī](歩く{note.[alkī]とも})

また、宮古・八重山方言に広く見られる[r]>[s, ʃ]の変化は多良間方言にも見られる。このような音韻変化は[i]の直後の[r]に多く見られ、「iにともなう摩擦音によって同化されたもの」(中本 1976:401)と考えられている³⁰。

[kisi](切る), [kisi:l](切れる), [pi:suʃa:l](広い), [pi:suʃa:l](平たい)

(13)ワ行子音…共通語のワ行子音には多良間方言の/b/が対応する。

共通語	wa	(w)e	(w)i	wo	(ワ エ キ ヲ)
多良間	ba	bi		bu	

共通語のワに/ba/、ヲが/bu/にそれぞれ対応しており、イ段とエ段が同音となっている。

<ワ> [bakamunu](若者), [bal](割る) <エ> [bigul](挟る), [bi:fuʃal](酔う{ふふ})
 <キ> [bi:dai](椅子{座り台}) <ヲ> [budul](踊る), [buba](叔母)

但し、共通語のワに/wa/が対応する例も見られる。

[wan](お椀), [wassa:l](悪い)

2-3 多良間方言にみられる音韻同化の現象

ここまでの多良間方言の音韻体系及び共通語との音韻対応の記述の中で、連母音ならびに助辞の膠着による融合・長母音化の現象が示されてきた。だがこの他、多良間方言では様々な音韻同化、すなわち/ CV-r-V/における[r]の同化現象、また順行・逆行同化による語頭・語中の破裂・摩擦・破擦音の促音化の現象も観察されている。以下これらの同化現象について「inter-vocalic な[r]の同化現象」と「その他の音韻同化現象」(加治工 1977:17)とに分けて、記述していく。

2-3-1 intervocalic な[r]の同化現象

[ffa](子ども)のような/qCV/の音節構造は、/CV-r-V/の音節構造から、[r]の直前の母音脱落及び[r]の音韻同化の現象によって生じたと考えられる。/CV-r-V/での子音によって、次のような変化が認められる。

³⁰ 中本 1976 では[r]の変化を、大きく「[s, ʃ]への変化」と「その他の音への変化」に区別しているが、ここで挙げた「[r]>[s, ʃ]の変化」は「その他の音への変化」とは、同じく同化現象ではあるものの、タイプを異にするものと考えられる。また「[r]>[s, ʃ]の変化」の中にも「その他の音への変化」と同じタイプのものが存在することから(本文においても後に触れているが)、促音化の有無を1つの基準として、「[r]>[s, ʃ]の変化」に2種認めている。

(1)/qfV < kV-r-V/

[ffa](子ども){<[fura]<[kura]}, [ffil](くれる){<[furi-]<[kure-]},
 [ffuʃa:l](黒い){<[furu-]<[kuro-]}, [ffaʃa:l](暗い){<[fura-]<[kura-]},
 [tsiffi](作る){<[tsifuri-]<[tsukuri-]}

この他、/fV-r-V/からの変化が想定できる語に[ffi](降る)<[furi-]、[kaffasi](隠す)<[kafurasi-]<[kakurasi-]³¹がある。

(2)/qvV < bV-r-V, u-r-V/

[avva](油){<[abura]}, [kaqvī](被る){<[kaburī-]},
 [qva](あなた){<[ura]}, [qvī](売る){<[urī-]}

ワ行音に対応する/bV/の音節を含む語にはこのような変化は現れない。

(3)/qsV < sV-r-V/

[ssi:l](擦る){<[siri-]}, [ssuʃa:l](白い){<[siru-]},
 [ssaŋ](知らぬ){<[sira-]}, [ssail](知られる{note.可能形})<[sirari-]},
 [baʃʃi(:)l](忘れる){<[basurī-]<[wasure-]}

このタイプの語は、2-2の(12)で示した[r]>[s, ʃ]の変化と、一見同じ変化によるもののように見える。だがこの場合はさらに母音の脱落が生じており、「その他の音への変化」と同じく促音化して現れている。本稿ではこの点に基準を設け、[r]>[s, ʃ]の音韻同化を二種類に区別して扱っている。また[umuʃʃa:l](面白い)もこのタイプに属し、[umuʃʃiʃa:l]<[umuʃiri(u?)<]からさらに融合化が進んだものである。

(4)/qzV < zV-r-V/

[kizzi](削る){<[kizurī-]}, [maddzi](混じる){<[madʒiri-]},
 [baddzi](殴る){<[badʒiri-]<[wadʒiri-]³²}, [paddzi](外す、脱ぐ){<[padzurī-]},
 [fuddʒa](鯨){<[fudzira-]<[kudʒira]}, [uddʒa](鶉){<[udzura]}

(3)と平行的な、母音脱落の有無による変化の種類の違いは見られない。またこのタイプの語では、同化後[za]となっているであろう箇所が、[da]ではなく[dʒa]に対応している。このことは、動詞のいわゆる未然形に関しても言い得ることである。

[kiddʒaŋ](削らぬ){<[kizura-]}, [maddʒaŋ](混じらぬ){<[madʒira-]},
 [baʃaddʒaŋ](怒らぬ){<[baʃadʒira-]<[wasa(?)dʒira-]}

(5)/qcV < cV-r-V/

[futtʃi](移る)<[futsiri-]

確認できたのはこの一語のみである。

2-3-2 その他の音韻同化現象

³¹ この他、[kaqfi], [kafusi]もカクレル(隠れる)に相当する動詞である。後に述べているように、前者は[kafusi]の母音[u]の脱落によって生じた形式である。

³² 首里方言の 'wazi=juN (①沸く, 沸騰する ②腹を立てる, 憤慨する)と同系の語であろう。同じく(4)で挙げている[baʃaddʒaŋ](怒らぬ)も、これらと同系の語と思われる。

intervocalic な[r]の同化現象の他、順行同化、また僅かだが逆行同化が現れている。

(1) 順行同化

順行同化は助辞の膠着した語形と形容詞³³とに多く現れ、そのほとんどで促音化する。

/cVsa > -qcja/ ; [attʃa:l](熱い){<[atsusa-]}, [muttʃa:l](粘っこい){<[mutʃisa-]}

/rVsa > -qra/ ; [kalla:l](軽い){<[karusa-]}, [magalla:l](曲がった){<[magarisa-]},

[utulla:l](恐ろしい){<[uturusa-]},

[navulla:l](滑っこい){<[naburi(?)sa-]}³⁴

/Lj- > -qr-/ ; [tullu](鶏を){<[tul-ju]<[turi-ju]},

[~julla](~よりは){<[~jul-ja]<[~juri-ja]},

[bullu:](いるよ){<[bul-ju]<[buri(wori)-ju]},

[ikitallo:](行ったよ){<[ikital-jo]<[ikitarijo]}

また、無声子音に挟まれた母音の無声化・脱落による同化現象も現れている。だが用例は少なく、同化の生じる音節の位置³⁵や母音に制限が見られること、さらに音節の保たれた形式([fuʃagal](塞がる), [fuʃagi](塞ぐ), [kafusi](隠す))も現れていることなどから、他の同化現象からの類推によって生じた、比較的新しい現象であることが考えられる。

/-fUs- > -qf-/ ; [ffagal](塞がる), [ffagi](塞ぐ){<[fusa-]}

/-kUs- > -qf-/ ; [kaffi](隠す){<[kafusi-]<[kakusi-]}

/-kUf- > -qf-/ ; [fu:](食う){<[ffu]<[kufu]}

(2) 逆行同化

次の一例のみ確認されている。

[wassa:l](悪い){<[warusa-]}

2-4 多良間方言の音韻的特徴

以上、多良間方言の音韻体系及び共通語との対応、さらにその変化の現象についての記述してきた。多良間方言の音韻に特徴的なものとしては、共通語のリ(ル)に対応する、成節子音音素/L/が用いられること、また/N/とは別に、/M/がやはり成節音素として立ちうることなどが挙げられる。さらに音韻同化の現象について、特に inter-vocalic な[r]の同化現象では、その音節構造/CV-r-V/の母音のほとんどが狭母音であり、そして子音は全て破裂・摩擦・破擦音のいずれかであった。つまりこの現象においては、中本(1976)でも指摘されていたように、(摩擦音など)呼気の阻害の程度が大きい音声との影響関係は明らかである。これは2-1の(3)で述べた、閉鎖・狭窄の持続をその本質とする「詰める音」につながり、よっ

³³ 名嘉真 1983 では次のような順行同化が示されている。

*atsiʃa:m → attʃa:m 《熱い》

*kalʃa:m → kalla:m 《軽い》 (名嘉真 1992:605, 序論3「形態論」の3-3も参照)

³⁴ 首里方言では naNdurusaN と言い、これらは同系統の語であると考えてよいだろう。<しなやかであるさま>を表す、古典語のナビヤカ(ナビラカ)に由来するか。

³⁵ 特に語頭では、その音節連続は保たれたままであることが多い。例えば、同じく宮古方言に属する大神島では[ffa](草)、[ffu:](薬)のような順行同化が見られているのだが(加治工 1977)、多良間方言でこれらの語はそれぞれ、[fuʃa]、[fuʃul]である。

て促音化の現象が多く見られる。この方言ではこの促音化が盛んであり、[ʃassi](刺す)のように、類推による促音化が生じていると思われる例も見られる。

また/i/に関わって、サ変動詞/si/(する)がその発声において i 母音の噪音性を薄れさせ、[su:]に近づきつつあるようである。当然個人差はあるが、共通語などの影響によるゆるみが考えられる。

3. 形態論

ここでは、多良間方言の名詞、動詞、形容詞について概観する。それぞれの品詞ごとにその形式と代表的な用法を概観していくが、特に、名詞の格形式と動詞の活用体系は、第1章以降での議論の前提となる。

3-1 名詞の形態論

3-1-1 格の形式

(1)連用格	(2)連体格
-Ø 名格(なづけ格) nominative	
-ga 第一主格(し手格) agentive	-nu 第一属格(もちぬし格) genitive
-nu 第二主格	-ga 第二属格
-ju(/-juba) 第一対格(うけ手格) accusative	
-ba 第二対格	
-ni 与=所格(あいて=ところ格) dative-locative	
-Nka 処格(ありか格)	-Nkanu
-Nke: 向格(ゆくさき格) allative	-Nke:nu
-kara 奪格(でどころ格) ablative	-karanu
-tu 共格(なかま格) comitative	-tunu
-si: 具格(てだて格) instrumental	-si:nu
-gami 範囲格(とどき=かぎり格) terminative-limitative	-gaminu
	複合連体格助辞
(3) 格の周辺=周辺のな格	
<連用的> -juL (比較) -ti: (引用)	
<連体的> — -ti:nu	

多良間方言の格形式は、共通語同様、名詞(語幹)に格助辞が後接する膠着の手続きをとる。連用格 12 形式、連体格 8 形式、全体で 20 の格形式がみとめられる。

対格について、-ju に -ba を伴った -juba という形式は、ju 格の強調形と位置付けられる。[ba]と共通語の「わ(は)」の対応関係から(序論 1「音韻論」2-2-2)、-ba を係助辞として扱うことも考えられるのだが、-ba がとりたてるのが ju 格のみであり、また -ba そのものが対格助辞化している(第二対格)ことから、これを係助辞とみるのは適当ではない。また、-ju と -juba を別形式として捉えることも、ba 格形式の存在から妥当ではないと思われる。なお、この -juba の存在によって、ju 格の係助辞 -ja によるとりたての形はほとんど現れない。

3-1-2 格の意味・用法

以下、それぞれの格形式の代表的な用法を示していくが、複合連体格助辞及び格の周辺=周辺のな格については省略する。

1) Ø 格(名格)

- a. よびかけや提示、並立、数量や程度、また時を表わす文の成分となる。

- b. モノゴトの状態や性質などを差し出している述語に対して主語となる。

cibusi jami:L[↑], aNna. 膝(が)痛んでいる？お母さん

- c. ヒト名詞と数詞が組み合わさって主語となる場合、Ø 格形式が用いられる。

miga to:ke buraqzja, abir-adaka: nar-aN. ミガ1人(が)いるなら、呼ばないといけない

- d. 直接補語になる。

- e. コピュラ aL が後に続いて名詞述語となる³⁶。

oba:-ja Ndaja:-nu oba:-ga ari: wa:L. おばーはどこ家の{note.屋号}おばーでいらっしゃいますか

- f. 動作に関わる場所を表す。

- g. 連体的用法。ヒト固有名詞³⁷、代名詞、また不定代名詞 nu:(何)に見られる。

qva ozi: na:-mai-du aL[↑] あなた(の)おじいさん(の)名前もある？

2) ga 格(第一主格,第二属格)

- a. ヒト固有名詞、代名詞に後接して、主語となる。

- b. ヒト固有名詞、代名詞に後接して、連体修飾語となる。

aNna-ga tubi kiM-ju micikitari:=ju. お母さんの飛び着物(ft.羽衣)を見つけました

- c. -ga で言い切って非難する態度を感情調で指し示す。

purimunu-nu me-ga. 馬鹿者めが

3) nu 格(第二主格,第一属格)

- a. 普通名詞一般(親族名称,ヒト以外のイキモノ名詞含む)に後接して、主語となる。

kuNsi aqcja:-taka: nu-du-nu-du ka:ki. こう暑かったら咽喉が渴く

- b. 普通名詞一般、またヒト代名詞相当でない数詞に後接して、連体修飾語となる。

4) ju/[juba]格, ba 格(第一,第二対格)

- a. 直接補語となる。強調形 juba を用いると、個別化、または対比強調される。

nama sjozjo, zju:su:ba num-aN, cja:-ju-du nuM. 今の女の子はジュースは飲まない、お茶を飲む

- b. si:(する)とくみあわさって、その実質的な内容を担う。

- c. 動作のかかわるところを表す。

5) ni 格(与=所格)

- a. 動作の間接的な対象を表す。

- b. 受身文や使役文で、動作の主体を表す。

- c. 動作や状態に関わるところを表す。

- d. 主に時やデキゴトを指し示す名詞に後接し、動作や状態がなりたつその状況を表す。

- e. naL(なる)、si:(する)など形式的な動詞とくみあわさってその実質的な内容を担う。

- f. 動作の手段、方法を表す。但し、モノ名詞に後接して道具を表す場合は si:格を用いる。

nara-ga munu:ba nara-N siM. 自分のことは自分です！

6) Nka 格(処格)

- a. 動作や状態に関わるところを表す。

ja:-Nka-de:N si:L, jaM-ba puka-Nke: ik-aN. 家に/でだけしている、(脚が)痛むから墓へ行かん

³⁶ 多良間方言では、名詞が文の述語となるのに共通語のデやニに当たる形を必要としない。また-du ataL のくみあわせにおいて、一見-du が共通語のデに当たるように思われが、-du には格関係を表す機能はなく、係助辞-du を伴う Ø 格の強調用法に当たると考えるべきである。

³⁷ 人名、親族呼称及びそれらに準ずるものを指し示す。

7) Nke:格(向格)

- a. 移動の到着点・方向を表す。
- b. 動作の間接的な対象などを表す。

8) kara 格(奪格)

- a. 動作の間接的な対象(モノ名詞、ヒト名詞)を表す。
- b. 動作や状態の起点となる時や場所、原因などを表す。
- c. 手段・方法を表す。

e. haruko-ga-du, kuruma-kara sja:ri: ika-zī:. はるこが車から(ft.で)連れて行くだろう

- d. 動作に関わるトコロを表す。

tauka: junagata-nu micī-kara aLkī-taka: utuqra:L. 1人で夜道から(ft.を)歩くと危ない

9) tu 格(共格)

- a. 共同作業や対立のあいてを表す。
- b. 認識や話しの内容³⁸、主体の様子などを表す。

10) si:格(具格)

- a. 道具、手段、原因、動作の主体(ヒト集合名詞、人数詞)を表す。

sjaki-uba: mai-si:-du cuqfi. 酒は米で作る

11) gami 格(範囲格)

- a. 動作や状態の及ぶ範囲や動作・状態が達成されるまでの限定された範囲を表す。

paL-gami ikiqti ku:-zī:. 畑まで行ってくるね

uL-mai sicizi-game ku:-du sī-ba, その子も7時までには来るとする(ft.言っている)から

3-1-3 <手段>を表わす格形式

次に、類似の機能を果たす格形式‘群’として、<手段>を表わす格形式の異同関係を示していく。なお、「空間格」³⁹についての考察は、本論第1章で行う。

ni 格と kara 格、また si:格には、その格形式をとる名詞が動作の<手段>であることを表す用法があるが、この用法のこれらの格形式は相互入れ替えが可能である場合が多い。だがこれらは、必ずしも全く同一の文法的意味を表わしているわけではなく、その後接する名詞(語幹)の意味クラスによって、入れ替え不可な場合や、意味的な差異が見られる。

- a. fudi-si:(○-ni:/×-kara) kakī. 筆で書く
- b. kuruma-kara(○-ni:/○-si:) Mkai-ga kuqzi-ba mati:ri=jo:. 車で迎えに行くから待っているよ
- c. futa:L-ni:(○-si:/○-kara) e:gu: sju:-zī:. 2人で歌をしよう(ft.歌おう)
- d. sjaki-uba: mai-si:(○-ni:/?-kara)-du cuqfi. 酒は米で(から)作る
- e. to:fu: mami-kara(○-ni:/○-si:) cuqfi. 豆腐は豆から(で)作る

まず上の例文 a より、具体的な<道具>を表す用法が kara 格には無いことがわかる。また例

³⁸ また、-tu には引用節を受ける用法が見られるが、この方言では引用を表わす場合 ti:助辞をとるのが主である。そして、ti:助辞にも内容を表す用法をも持つことから、この2種の助辞については、<引用>と<内容>をどこからどのように分けるかということを中心に、今後も考察していかなければならないだろう。その線引きの仕方によっては、tu 格に<内容>を表わす用法が認められなくなるかもしれない。

³⁹ 「空間的な意味」(まつもと 1998:83)を表す用法をもつ格形式を指す。

文 b、c、e ではいずれの格形式をも用いることができるが、それぞれの形式によって実現される意味内容は、‘ニュアンス’のレベルで異なるようである。次に例文 d、e について、これらは共に<材料>を表わしているが、前者の場合<材料>が質的に変化するのに対し(=原料)、後者では<材料>はそのまま用いられるものである。そして、この前者の用例を kara 格に置き換えると、構文的には問題ないが、意味的にやや不自然なものとなる、つまり、英語の(make) of/ from に類似した格の使い分けがあることが分かる。だがその逆、例文 e を si:格に置き換えることは可能であり、英語のそれほど厳密ではない。

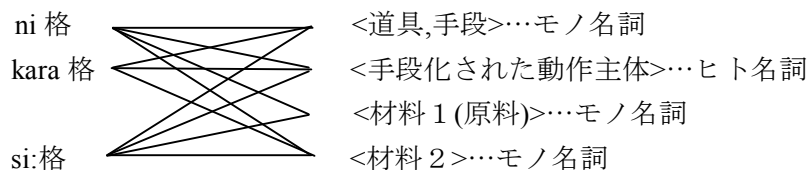


図1 <手段>を表す格形式の移動関係

3-1-4 多良間方言の格体系

多良間方言の格体系内の内部構造及び下位体系を以下の表に示す。

	意味・機能/かざりかた		連用格	連体格
I	主語や直接補語になり、 連体=連用が未分化の格 (主格=連体格)	名格 属格 主格	Ø 格 (-ヲ,-ガ,-Ø ほか) nu 格 (-ノ,-ガ) ga 格 (-ガ,-ノ)	
II	ヒト・モノを指し示す名詞の とる形で、直接・間接補語に なり、複合連体格を持たない	第一対格 第二対格 与=所格	ju/juba 格 (-ヲ) ba 格 (-ヲハ) ni 格 (-ニ)	—
III	ヒト・モノを指し示す名詞の とる形で、間接補語となる	共格	tu 格 (-ト)	tunu 格 (-トノ)
		具格	si:格 (-デ)	si:nu 格 (-デノ)
		奪格	kara 格 (-カラ)	karanu 格 (-カラノ)
III	空間名詞や空間化された名 詞のとる形 (空間格)	処格	Nka 格 (-ニ)	Nkanu 格 (-ニノ)
		向格	Nke:格 (-ヘ)	Nke:nu 格 (-ヘノ)
		範囲格	gami 格 (-マデ)	gaminu 格 (-マデノ)
IV	周辺的な格=格の周辺		-juL (-ヨリ) 比較 -ti: (-ト) 引用	— -ti:nu (-トイウ)

表1 多良間方言の格体系

表について、Iは連体と連用が未分化の格、IIは複合連体格助辞をもたず、直接補語、間接補語のいずれにもなる格、IIIはいわゆる間接格であり、複合連体格がそれぞれの連用格に対応して存在する。そして、周辺的な格、あるいは格の周辺として、<比較>の-juL(より)、<引用>を表す-ti:(と)とその複合連体格的な助辞-ti:nu(という)の3つがIVに入る。

3-1-5 とりたての形式

とりたて形式については以下にその体系表を示すに留める。これらの助辞は、その分布、述語との関わりから係助辞と副助辞に下位区分される。また副助辞は、<複数性>、<否定性>という意味特徴によってさらに二分され、その度合いによる使い分けが見られる。

格助辞	文の述語に影響し、文の部分に何らかの意味的要素を二次的に付与して、その前後の文の部分の結びつきを承認する		-ja (-ハ)	<対比・提題>
			-mai (-モ)	<累加・並存>
			-du (-ゾ)	<単純強調>
			-ga (-カ)	<疑問・反語>
副助辞	文の部分を意義の上から修飾し、そのモノゴトに限定して際立たせる辞（文の述語に影響しない）	複数性	-te:N [-te:na/-te:ka] (-ダケ)	「単数」,「複数」
			-daM (-サエ)	「単数」のみ
			-ba:ki (-バカリ)	「複数」のみ
	否定性	-tuM (-サエ)	大 <否定的限定強調>	
		-gami (-マデ,ダケ)	微 <限定・単純強調>	
		-ke: (-ホド)	無し <限界点>	
		-daki (-ダケ)	少 <(否定的)限定>	
<程度>を表わす		-bakaL (-バカリ)		

表 2 とりたて助辞の体系

3-2 動詞の形態論

3-2-1 活用のタイプ

多良間方言の動詞の活用のタイプは、まず、規則変化タイプと不規則変化タイプ(特殊変化タイプ)に大きく分けられ、規則変化タイプはさらに、強変化タイプ(I類)と弱変化タイプ(II類)に二分される。それぞれの類の動詞の対応について、I類の動詞のほとんどは語幹が子音終わりとなる古典語のいわゆる「四段活用動詞」に(ex. kak~i 書く)⁴⁰、II類の動詞は語幹が母音終わりの「一・二段活用動詞」に(ex. uki~L 起きる)、それぞれ対応している。また、III類の動詞は特殊活用動詞に対応し、ki:(来る)と si:(する)の2語が属する⁴¹。なお、ナ行変格活用動詞「死ぬ」に対応する si:niL(死ぬ)は、弱変化タイプに属している。

いずれのタイプにも、肯定動詞の直前過去形、中止形に音便現象が見られ、その多くは音韻脱落后の母音融合によって長母音化して現れている。また、規則変化動詞には基本語幹のみ、もしくは基本語幹と1つの変わり語幹をもつという規則性がみとめられるが、「ハ行四段活用動詞」に相当する動詞はこれと異なっている(I類のD及びD')⁴²。

⁴⁰ 本節では、音韻表記における語幹と接辞の切れ目を「~」によって示すこととする。

⁴¹ 拙論 2002 では、本来は強変化タイプに属するはずの qsi:(知る)についても、その活用に変化が生じていることから、便宜的にこのタイプに位置づけている。

⁴² 塩川と仲筋では連母音/au/の融合現象の有無で語彙の形態的な差異が見られ、この事も関わって、他の強変化タイプの語とは異なる、やや複雑な活用を示している。D'のタイプの動詞にはその基本形の古形末尾が*(nig)awiのように推定される語が含まれ、かつては nigu:と nigau[仲筋]あるいは nigo:[塩川]のようにそれぞれの地域で2種の形が現れていたようであるが、現在は nigu:のみが用いられている。塩川では usunu:/usuno:(失う)にわずかにその名残が窺えるが、その使用は前者に偏っているようである。以上

I 類	A	kak~i 書く,	kak~aN 書カヌ,	kak~iqti: 書イテ
	B	pus~i 干ス,	pusj~aN 干サヌ,	pus~iqti: 干シテ
	C	tuL~Ø 取ル,	tur~aN 取ラヌ,	tur~iqti: 取ッテ
	D	fu:~Ø 食ウ,	fa:~N 食ワヌ,	fe:~qti: 食ッテ
	D' (仲筋)	kau~Ø 買う	ka:~N 買ワヌ	ke:~qti: 買ッテ
	(塩川)	ko:~Ø //	ka:~N //	ke:~qti: //
II 類		uki~L 起キル,	uki~N 起キヌ,	uki~qti: 起キテ
III 類		kĩ:~Ø 来ル,	ku~N 来ヌ,	ki:~qti: 来テ

3-2-2 終止形の用法

本論での動詞に関する考察は、終止の位置のものが中心となる。以下では、I 類動詞 kaki(書く)と II 類動詞 ukiL(起きる)に代表させて、多良間方言の動詞の終止形の各形式ごとに、その基本的な意味・用法を示していく。なお、本研究では、この「終止の位置」に現れる動詞の形態の総称として「終止形」という用語を用いている。

1) 叙述法・断定形⁴³

この形の肯定形式は、次のような体系を示している。なお表について、一は体系的あきま、()は任意成分を示している。以下、表 12 まで同じとする。

		非過去	過去	
			普通過去	直前過去
kaki	ri 語尾形	kakĩ ス(シ)	kakĩtaL シ-タリ	kakiqta(L) シ-アリタリ
	(ari 形)	—	kaki: シ-アリ	—
	m 語尾形	kakĩM シ-ム	kakĩtaM シ-タリ-ム	kakiqtaM シ-アリタリ-ム
ukiL	ri 語尾形	ukiL //	ukitaL //	ukiqta(L) //
	(ari 形)	—	uki: //	—
	m 語尾形	ukiLM //	ukitaM //	ukiqtaM //

表 3 終止形;叙述法・断定形 I(肯定形式)⁴⁴

ri 語尾形と m 語尾形について、これらの形式にはその成り立ちにおける意志・推量を表す *mu(mo)の融合の有無がみとめられる。当然、後者が融合による派生形式だと考えられるのだが、このような形式の違いはその意味においても、陳述性の違いとなって現れている。具体的には、ri 語尾形が用いられると、話し手及び聞き手、また第三者によっても認知さ

のことから、D'タイプの動詞が D タイプに統合されつつあることは明らかであり、仲筋と塩川での音韻的対立も、kau-ko:(買う)を除き、動詞語彙に関してはほとんど解消されてしまっている。

⁴³ なお、叙述法・断定形の肯定形式の過去形には 3 型 2 種の形が現れているが(表 3)、これらの形式の違いなどについては第 5 章の第 1 節でとりあげるのここでは触れない。

⁴⁴ 琉球方言の動詞基本形の非過去形について、いわゆる「連用形」にヲリがくみあわさって成立したことはほぼ定説となっているが、宮古方言については、ヲリの融合・非融合をめぐる説が分かれている。本研究では、この点について言及することはせず、体系表の対応語形についても、便宜的に「ス(シ)」のように示してあるが、それがそのまま本研究の立場を意味するものではない。

れうるような「客観的表現」(<非情意的表現>⁴⁵)となり、m 語尾形が用いられると、発話者自身の判断の加わる表現、つまり、<情意的表現>となる。

1. keqkoN-uba sjasjagi-ti: i:. 結婚は「シャシャギ」と言う
2. ba-ga kakiM=jo:. 私が書くよ

次に否定形式について、非過去形は、ri 語尾形と m 語尾形のいずれでも、いわゆる「未然形」に<否定>の「ない」の古形とされる *nawu⁴⁶ が後接して成立したと考えられる。また、過去形には ri 語尾形が現れず、-dataM のみが用いられているが、その対応語形ははっきりとは推測できていない。

		非過去	過去
kaki	ri 語尾形	kakaN セ-ヌ	—
	m 語尾形	kakamaN セ-マヌ	kakadataM セ-ズ-アリタリ-ム?
ukiL	ri 語尾形	ukiN //	—
	m 語尾形	ukimaN //	ukidataM //

表 4 終止形・叙述法・断定形 2(否定形式)

また、ri 語尾形と m 語尾形の陳述性の違いは否定形式にも見られるが、過去形の m 語尾形は情意性の有無に関わらず用いられている。そして、過去形の ri 語尾形には -dataL という形が想定され、この形が名詞述語文に現れるコピュラ -dataL (←-du+ataL ズアリタリ) と同音形式になることから、恐らくは両者の混同を避けるために -dataM が多用され、その使用範囲が広がることにより、ri 語尾形の -dataL が衰退したことが考えられる。

3. a-ga bikiduM-ja sjaki-u num-aN=jo:. 私の夫は酒を飲まない
4. aN-ja kju:-ja sjaki-u num-amaN. 私は今日は酒を飲まない
5. aN-ja kīnu: sjaki-u num-adataM. 私は昨日酒を飲まなかった
6. ba-ga bikiduM-ja kīnu: sjaki-u num-adataM. 私の夫は昨日酒を飲まなかった

2) 叙述法・推量形

ここからは肯定形式についてのみ示していく。

推量形には ge:ra 形と pazi 形があるが、いずれも断定形に<推量>の終助辞を伴って形づくられている⁴⁷。また、両者の形式の意味の違いなどについてはまだ十分な考察は行われ

⁴⁵ 両形式の表現の違いは<非情意的><情意的>と述べられるべきであろう。違いは *mu という要素の有無であり、<情意性>を示す *mu にマークされない形は<情意性>を持たないために「客観的」なのである。このことは、ri 語尾形の動詞述語文が、<非情意的>な表現とはなるものの、1 人称主語をとれるのに対し、m 語尾形の動詞は、その<情意性>から、3 人称の主語を取ることができないことから明らかである。

cf 1. ○ aN-ja sjaki-u num-aN. 私は酒を飲まない

2. × a-ga bikiduM-ja sjaki-u num-amaN. 私の夫は酒を飲まない

⁴⁶ 松村編(1969)より。一ナイの成り立ちについて、万葉集の東歌などに見られる打消を表す「なふ」の連体形「なへ」から、naFe>nawe>naye>nai という変化を経たとしている(p253)。(但し、橋本進吉『国語学概説』(岩波書店 1946)等に追随していることが注記されている)

⁴⁷ pazi 形について、-pazi は形式名詞的に用いられる共通語の「筈」に対応していると考えられるが、多良間方言では文末に位置して<推量>の意味を表す用法しか確認されておらず、終助辞化していると考えら

ていないが、**pazī** 形は「きっと～だ(ろう)」というような、やや確定的な表現になるという、ニュアンスのレベルでの違いはみとめられる。但し、推量の根拠となるモノゴトが文脈や言語外現実を示されている必要はなく、その確定性は低いと考えられる。

くりかえしになるが、この形式については考察がまだ不十分であり、以下の体系表は便宜的なものとなる。また終助辞一般について、本研究はこれを独立の品詞とはみとめていないのだが、格助辞などとはその接続のあり方が異なることから、「=」によって表している。なお、この表し方は、推量形の 2 形式(-**gera**, -**pazī**)、また以下に示すたずね法の **na** 形、**sja** 形、命令法の **jo** 形でも同様である。このような終助辞を伴う形式については今後の研究課題である。

7. **nicijo: ari:, uja: pīru-gami nini:L=ge:rai.** 日曜だから、お父さんは昼まで寝ているだろう

8. **beta-ga futa:L-si:-ja kati: uki=pazī=na:.** 私たちの 2 人では(ft. 2 人でなら)勝っただろうな

		非過去		(普通)過去		
		ri 語尾形	m 語尾形	ri 語尾形	m 語尾形	(ari 形)
kaki	ge:ra 形	kaki=ge:ra(i)	kakīM=ge:ra	kakītaL=ge:ra	kakītaM=ge:ra	kaki:=ge:ra
	pazī 形	kaki=pazī	—	kakītaL=pazī	—	—
ukiL	ge:ra 形	ukiL=ge:ra(i)	ukīLM=ge:ra	ukitaL=ge:ra	ukitaM=ge:ra	uki:=ge:ra
	pazī 形	ukiL=pazī	—	ukitaL=pazī	—	—

表 5 終止形;叙述法・推量形⁴⁸

3) 疑い法

その形をとる動詞が指し示している運動の成立に対して、話し手がうたがいを抱いていることを単に表す。よって、必ずしも答えを求める表現ではなく、問いかけの相手はなくとも構わない。**ga** 形が多く用いられ、**ja** 形は中年層以下にはほとんど用いられず、年代差、個人差がみられる(以下の表では{ } で示す)。

		非過去 (ri 語尾形)	過去		
			普通過去		直前過去 (ri 語尾形)
			ri 語尾形	(ari 形)	
kaki	ga 形	kakī=ga(=na:)	kakītaL=ga	kaki:=ga	kakiqta=ga
	ja 形	{kakī=ja}	{kakītaL=ja}	—	{kakita=ja}
	推量形	kakazī:=ga	—	—	—
ukiL	ga 形	ukiL=ga(=na:)	ukitaL=ga	uki:=ga	ukiqta=ga
	ja 形	{ukiL=ja}	{ukitaL=ja}	—	{ukiqta=ja}
	推量形	ukizī:=ga	—	—	—

表 6 終止形;疑い法

れる。だが、首里方言の **-hazi** には「筈。当然そうあるべきこと。」という<当然>を表す用法もみとめられており(上村幸雄 1963 『沖縄語辞典』 p210)、多良間方言の **-pazī** についてもさらなる調査が必要である。

⁴⁸ 以下、() の任意成分は非過去形の ri 語尾形についてのみ示す。

ga 形は終助辞-ga が後節した形式であり、部分たずねの ga 形と同音形式である。両形を疑い-尋ね法として一括に捉えることも可能だが、ja 形にたずねの用法が見られなかったので、今回は区別して扱った。また、推量形は勧誘・意思形を元とし、疑問詞と呼応して現れることが多いのだが、やはり自問自答の表現であり、疑い法と位置づけられる。なお、過去形、非過去形ともに、m 語尾形を元とする形式は現れない。

9. Mme pi:cja matiqti munu ko:=ga/ kau=ga. もう少し待って買い物しようか

10. nubasi:-ga ja:-Nke: iki: nuci muta-zī:=ga. どうやって家へ帰って命(を)保とうか

4) 尋ね法・全体たずね(一般たずね)形

聞き手に問いかけて、答えを積極的に求める用法を言う。尋ね法は大きく2つに分けられ、全体たずね(一般たずね)はたずね文が指し示すコトガラについて肯定か否定かを求める、つまりハイかイエエかによって返答がなされる表現となる。この形には Ø 形と na 形、sja 形の3つの形が見られ、このうち na 形と sja 形は、断定形に<たずね>の終助辞が伴って形づくられている。また、na 形は強意的、sja 形は確認的なニュアンスを帯びている。

11. a-ga kui-ja kiki: wa:riLM. 私の声は聞こえていらっしゃいます？

12. haruko-mai ki:L-ti: i:-taL-gadu tubi:=na. はるこも来ていると言っていたけど、帰ったの？

13. uja-mai Mma-mai sjuri: wa:ri:L=sja. お父さんもお母さんも元気でいらっしゃるでしょ？

		非過去		過去				
				普通過去			直前過去	
		ri 語尾	m 語尾	ri 語尾	m 語尾	(ari 形)	ri 語尾	m 語尾
kaki	Ø 形	kakī	kakīM	kakītaL	kakītaM	kaki:	kakiqta	kakiqtaM
	na 形	kakī=na	—	kakītaL=na	—	kaki:=na	kakiqta=na	—
	sja 形	kaki=sja	—	kakītaL=sja	—	—	kakiqta=sja	—
ukiL	Ø 形	ukiL	ukiLM	ukitaL	ukitaM	uki:	ukiqta	ukiqtaM
	na 形	ukiL=na	—	ukitaL=na	—	uki:=na	ukiqta=na	—
	sja 形	ukiL=sja	—	ukitaL=sja	—	—	ukiqta=sja	—

表 7 終止形;尋ね法・全体たずね形

5) 尋ね法・部分たずね(疑問詞たずね)形

疑問詞によって表される不定のコトガラを答えとして求める表現である。また、4)の全体たずねでは語尾の上昇が義務的であるのに対し、部分たずねでは、共通語の場合と同様、それは任意的である。また部分たずねでは、疑問をあらわす文中の係助辞-ga と文末の-ga との呼応関係が見られる。

14. aNda-kara-ga wa:L. どこからいらっしゃった？

15. aNti, na:-juba nu:-ti-ga i:=ga. それで、名前は何と言うか

		非過去 (ri 語尾)	過去		
			普通過去		直前過去 (ri 語尾)
			ri 語尾	(ari 形)	
kaki	Ø 形	kaki	kakitaL	kaki:	kakiqta
	ga 形	kaki=ga	kakitaL=ga	—	kakiqta=ga
ukiL	Ø 形	ukiL	ukitaL	uki:	ukiqta
	ga 形	ukiL=ga	ukitaL=ga	—	ukiqta=ga

表 8 終止形;尋ね法・部分たずね形

6) 勧誘—意志法

みとめ形式にのみ見られ、テンスの対立は持たない。Ø 形は主語(動作主体)が複数か単数かによって、<勧誘>または動作主体の<意志>を表す。一方、zi:形は<勧誘>としては用いられず、単数主体の意志を表す用法を一次的とする。また zi:形は、第三者について述べ立てる文の主節で<推量>の意味を表すことができるが、近い未来、あるいは進行中の(と思われる)コトガラに限られ、その使用には制限が見られる⁴⁹。m:形は、m(*mu)が陳述性に関わる要素であることに関わって、より強い<意志>を表す。

16. zju:, be:ta: o:sa:ra: siu. さあ、私たちはお手玉(を)しよう <勧誘>
 17. uL-mai sicizi-game ku:-du si-ba, i:=jo:. この子も7時までに来るとするから(ft.言っているから)、(そのぐらいの時間で)いいよ <意志>
 18. paL-gami ikiqti ku:-zi:. 畑まで行って来る(よ) <意志>
 19. zinaN-nu-du ku:-zi:-ti bu-taL=dara:na. 次男が来るだろうといた(ft.言っていた)よね <推量>
 20. kuru:-daM, qva-ga nugī-tika: misim:. これをあなたが抜いたら(女を)見せよう

		((テンスの対立なし))
kaki	Ø 形	kaka(=na)
	zi:形	kakazi: [変わり語形;kakaqzi:, kakaqzja:]
	m:形	kakaM:
ukiL	Ø 形	uki(=na)
	zi:形	ukizi: [変わり語形;ukiqzi:, ukiqzja:]
	m:形	ukiM:

表 9 終止形;勧誘=意志法

7) 命令法(広義)

相手(聞き手)への動作のはたらきかけを表す。テンスの対立を持たず、多良間方言では、肯定形式で狭義の命令、促し、依頼、うちけし形式で禁止の文法的意味を表す。相手にはたらきかけるという点では 6)の<勧誘>の用法と共通し、言語によっては、両者をはたらきかけ法として一括に扱える場合もある。だがこの方言では、勧誘-意志法(形)の zi:形、m:

⁴⁹ 連体形の推量形式はこの zi:形から派生している(第5章第2節)。

形は<勧誘>を表さないため、両者は区別される。

命令法について、 $\emptyset$ 形と jo: 形は狭い意味での<命令>を表す形であり、それぞれ共通語のシロ、シロヨに相当する。後者は相手へのはたらきかけ(命令)の度合いが弱まり、やや柔らかな表現となるが、両形の実際の使用における男女差は見られない。勧誘由来形は相手へ動作の実行を促す表現で、勧誘-意志法の $\emptyset$ 形をもとに派生していると思われる。シテ由来形は第二中止形 si:qti 由来の語形であり、共通語のシテ(ネ)に相当する。

21. aNta-ga mikaN-mai fai. うちの蜜柑でも食べなさい
22. haruko, fumakira: muti ku=jo:. ハルコ、フマキラー持っただいね
23. terebi-nu kui-ju imiqcja sjuda:. テレビの声を小さくしたら
24. aN-nu-mai iziqti=ja:. 私のも入れてね

		((テンスの対立なし))
kaki	$\emptyset$ 形	kaki
	jo: 形	kaki=jo:
	勧誘由来形	kakada:
	シテ由来形	kakiqti=ja:
ukiL	$\emptyset$ 形	uki
	jo: 形	uki=jo:
	勧誘由来形	ukida:
	シテ由来形	ukiqti=ja:

表 10 終止形;命令法(広義)

3-2-3 動詞の基本的な活用(連体形～副動詞)

終止形以外の動詞の活用形式についても、形式ごとの記述は省略するが、kaki(書く)に代表させて以下の表に示しておく(肯定形式のみ)。表について、これまでと同じく()は任意成分、{ }は個人差・世代差のあるものを示し、[]は変わり語形を示す。同一枠内の語形の順列は暫定的だが、使用頻度が高いなど、実際の言語表現活動においてより基本的に用いられていると思われる語形を上位に配している。なお、終止形も含め多良間方言の動詞の各活用形については今後も調査、研究を進めていき、訂正や補足を行っていく必要がある。

		非過去	過去
連体形	断定形	kaki	kakitaL
	推量形	kakazi:	—
準体形	ヲリ脱落形	kaki	kakitaL
	ヲリ融合形	kakiru	kakitaLru
	(mu)nu 形	kakinu	kakitaLnu
接続形	順接	$\emptyset$ 形	kakaqzi:
		ziba 形	kakqziba
		ba 形	kakiba
			kakitari:(-du)
			—
			kakitaLba

(接続形)	逆接	ga 形 gadu 形 ba(du)形	kakīga(du) kakīrugadu kakība(du)	kakītaLga(du) kakītaLrugadu —
条件形	仮定法	taka:形 ka:形 アラバ形	kakītaka: [kakītakaba] kakī(ti)ka: kakaba(du)	
	確定法	アレバ形	kakība(du)	
譲歩形	アラバモ形 アラバム形 シテモ形 シモ形		kakabamai kakabaM kakqtimai kaki:mai	
連用形 (狭義)	第一中止形 第二中止形 第三中止形 シテカラ形 スルマデ形		kaki: kakqti: [kakiqte:] kakītui kaki:kara kakīke:	
副動詞	反復強調形 平行形 目的形		kakīkakī kakīke:na kakīga	

表 11 多良間方言動詞の基本的な活用体系(連体形~副動詞)

3-3 形容詞の形態論

3-3-1 形容詞の形式

多良間方言の形容詞の基本的な構造は、次のようになっている。

高い taka+sja+aL タカ-サ-アリ

安い jaq+sa+aL ヤス-サ-アリ

すなわち、語基+/sja, sa/+接尾辞/-aL/(正確には接尾辞化した補助動詞)の構造を取り、語基+/sja, sa/が活用の語幹として位置付けられる。だが、語基にあたる/taka-/が、taka-gi:(高い木)のように単独で名詞を修飾することや、また/taka:taka/のように2つ重ねられた形で述語となることなどから、古典語同様、その独立性がみとめられる。以下では、名詞的接尾辞‘サ’の後接した/takasja-/のような形を「サ語幹」、サを伴わない/taka-/のような形を「基本語幹」と称していく。

サ語幹について、/-sja-/と/-sa-/のように口蓋音と直音が現れているが、この方言では共通語のサに口蓋音化した/sja/が対応するので⁵⁰、前者が基本的なタイプであると言える。実際、このタイプに属する形容詞の数は最も多い。/-sa-/のように口蓋化が起こらないタイプは、その直前の音が促音であるため、口蓋化を免れたと考えられる⁵¹。すなわち、この方言の

⁵⁰ サと/sja/の対応例には、序論2の2-2-2で示したもの以外に asjaL(アサリ)、kasja(傘)などが挙げられる。

⁵¹ 但し umuqsjsja:L(面白い)は、2000年調査時には/umuqsja:L/のように口蓋化していた。だがこれは、/-sa-/

形容詞に見られる /-sja-/ と /-sa-/ の別はあくまで音声的なものであり、いわゆるク活用、シク活用の区別を表すものではない⁵²。また、上記のもの以外に、語幹末音節が /-cja-/、 /-ra-/ で現れるものもある。これらは名嘉真 1983 で示されている、次のような順行同化現象の結果生じたものと考えてよいだろう。

*atsiʃa:m → attʃa:m 《熱い》

*kalʃa:m → kalla:m 《軽い》 (引用は名嘉真 1992 :605 より)

よって、これらはサ語幹の変種として位置付けられる。このように、多良間方言の形容詞のタイプには大きく 3 種みられるが、これらは規則変化であり、これに不規則変化を示す ne:N(ない)が加わると、動詞の場合と同様、規則変化と不規則変化の対立となる。

また、規則変化形容詞の活用の仕方は、サ語幹の違いに関わらず、基本的に aL(ある)のそれと同じである。が、おそらくその中核的な機能の違いから、述語となる活用形それぞれの variant は、存在動詞 aL よりも豊かではない。だが連体修飾となる場合は、サ語幹、基本語幹の用法も盛んに用いられ、語彙的な意味の違いによる差も現れている。

3-3-2 形容詞の基本的な活用体系

形容詞は本論での直接的な考察の対象とはなっていないため、各形式ごとの記述は省略し、その基本的な活用体系を takasja:L(高い)に代表させて以下の表に示すに留める。

表について、形容詞の最も基本的な機能は連体修飾(連体形)であるが、より出発点的な形である終止形感嘆法からその派生の順序に従って、活用形を挙げていつている。動詞と形容詞の活用体系には共通項が多いのだが、形容詞の終止形には意思・勧誘法、命令法⁵³が欠如し、代わりに感嘆法が現れていること、またテンス的には、肯定形式の叙述法に直前過去形は現れず、全ての活用形で非過去形と(一般)過去形とが対立を示すなどの違いが見受けられる。なお、否定形式についてはここでは触れないが、サ語幹に -ne:N(-ない)を伴って表され、その活用形は不規則変化の ne:N(ない)と同じとなっている。

また、連体形に、テンスの対立のみられるものとテンスに無関心な形式と、大きく 2 種が現れている。共通語の連体形についても、被修飾名詞の「特徴」を示す用法においてはテンスに無関心であることを基本とし、その一方で「アクチュアルな状態にかかわる形容詞」はテンスの対立を示すということが指摘されているが(高橋他 2005:144)、これらの連体形は同形となっている。これに対し多良間方言では、/taka/などの基本語幹がテンス的に unmarked な形、すなわち、テンス対立性がない形であることによって、テンス的な意味への関わりの有無が形態的に区別されるようになっている。また、連体形と準体形が対応していないことも共通語との差異として挙げられる。

の直前の狭母音 /i/ にひきずられた順行同化の結果によるものであり、本文で挙げた原則を乱すものではない。なお、/umuʃsisja:L/ は、名嘉真 1983(1976~1977 年調査)等で報告されている。

⁵² 首里方言形容詞では、「=saN に終わるものはク活用の形容詞に、=sjaN に終わるものはシク活用の形容詞にそれぞれ対応する」(上村 1961:354)というように、/-sa-/ と /-sja-/ の区別が活用タイプの違いによってなされている。

⁵³ 宮古平良方言では、kɨnna jo:kare pɨto: tsɨ:kare 「着物は弱くあれ、(着る)人は強くあれ」(諺)というように、語は限られているものの命令形が現れるが(狩俣 1997:400)、多良間方言では諺の中にも命令形は用いられない。インフォーマントによると、上記の文をこの方言で言い表そうとする場合、kiM jo:sjakara, ki:pito: cju:sjakara(着物は弱くから、着る人は強くから)というようになるという。

			非過去	過去	
終 止 形	感嘆法		sjā 形 (サ語幹用法) (mu)nu 形	takasja takasjanu [takasjaN]	
	叙述法	断定	ri 語尾形	takasja:L	tkasja:taL
			ri 語尾 du 融合形	takasjada:L	takasjadataL
			m 語尾形	takasja:M(=do:)	takasja:taM(=do:)
		推量	ge:ra 形	takasja:L=ge:ra(i)	takasja:taL=ge:ra(i)
	pazī 形		takasja:L=pazī	takasja:taL=pazī	
	zī:形		takasja:razi:	—	
	疑い法	断定	ga 形	takasja:L=ga(=na:)	takasja:taL=ga(=na:)
		推量	ge:ra 形	takasja:L=ge:ra(=na:)	takasja:taL=ge:ra(=na:)
			zī:ga 形	takasja:razi:=ga(=na:)	—
	尋ね法	全体	Ø 形 (ri 語尾形)	takasja:L [↗]	takasja:taL [↗]
(m 語尾形)			takasja:M [↗]	—	
na 形			takasja:L=na [↗]	takasja:taL=na [↗]	
sjā 形			takasja:L=sja [↗]	takasja:taL=sja [↗]	
	部分	Ø 形 (ri 語尾形)	takasja:L	takasja:taL	
		ga 形	takasja:L=ga:	takasja:taL=ga:	
連体形		サアリ形	takasja:L	takasja:taL	
		語幹形 (基本語幹用法)	taka [/ kada:nu] ⁵⁴	—	
		(sī 形 {感情 Ad.のみ})	(pukarasī)	—	
準体形		名詞形	takasja [taka]	—	
		ja 形	takasjaqro [takasjaqru]	takasja:taqro [takasja:taqru]	
		(mu)nu 形	{taka:nu}	—	
接続形	順接		— ⁵⁵	takasja:tari:	
	逆接	gadu 形 ga 形	takasja:Lgadu takasja:Lruga(du)	takasja:taLgadu takasja:Lruga(du)	
条件形	仮定	taka:形	tatasja:taka:		
		ka:形	takasja:Lka:		
	確定	アラバ形	takasja:raba(du)		
		nu 形	takasjaN		
		アレバ形	takasja:Lba(du)		
譲歩形		アラバモ形	takasja:rabamai		
		アラバム形	takasja:rabaM		

⁵⁴ この -nu を伴う形式をとれる語は限られているようであるが、用例が少ないため、今のところその現れ方などははっきりしていない。

⁵⁵ 形容詞の接続形には非過去形・順接の形式は現れず、同様の文法的意味の実現には、条件形・確定の形式が用いられている。

連用形(狭義)	サ語幹連用形	takasja
	サアリ連用形	takasja:ri
	中止形	takasja:riqti [takasja:riqte]
	(ke:形) ⁵⁶	(imisja:Lke:)
	(kara 形)	(imisjakara)

表 12 多良間方言形容詞の基本的な活用体系

また、サ語幹連用形の takasja という形式は、終止形感嘆法の sja 形、準体形の名詞形と同音形式となっているが、これは奄美喜界島方言(松本 1986、まつもと 1989 等)や石垣方言(言語学研究会 2000、未公刊)などでも同様で、サ形(サ語幹)の多機能性は、形容詞がサアリ系を示す琉球方言全体で共通するものと思われる。このサ形は、まず述語用法の有無によって名詞形が区別され、同じく述語用法を示す終止形(感嘆法)と連用形は、それぞれの文法的意味・用法の違いによって区別される。また両形式の間には、文のレベルにおける、それぞれが表すモノゴトの<特徴>にテンズ的な差異があるようにも思われる。すなわち、終止形感動法を述語とする文が、常に話し手の目の前にある現在のモノゴトの状態や属性を表すのに対し、連用形述語文はそのことに無関心なものとなる。また、属性形容詞のサ語幹連用形には副詞への転用も見られる。

最後に付け加えておくと、多良間方言には表 12 に示したサアリ型の形容詞活用形の他に、基本語幹(感情形容詞では-si 形)を2つ並べるタイプの語形が現れる。つまり、この方言の形容詞には、サアリ系と反復語幹系のタイプの異なる2種の活用体系があることになる。だが実際の使用においては、前者のタイプの語形が中心的に用いられ、また、反復語幹タイプの語形が(主節の)文の述語となる場合、終止形を除く接続形、条件形などはコピー的な動詞とくみあわさり、その動詞の活用形によってそれぞれの文法的な意味を実現する。従って、反復語幹タイプは体系的であるとは言えず、サアリ型活用形の副次的、もしくは補助的な語形であることが考えられる。この2種の活用形の共存は、クアリ系の活用を示す他の宮古諸方言や石垣方言にもみとめられている(狩俣 1997)。

反復語幹系の各活用形についての具体的な記述及び体系を示すことは省略するが、簡単にその特徴を述べると、その活用形は同一の語幹が単に繰り返されているのではなく、先立つ語幹の末尾音が長音化して現れる場合が多い。また、全ての形容詞が反復形をとれるわけではなく、とり得る語にも、意味的な制限が窺える。例えば、「痛い,痒い」のような感覚形容詞にこの形は現れず、属性形容詞と感情形容詞に限られている。但し、感情形容詞の場合は基本語幹ではなく、連体形の si 形が用いられる。属性形容詞でも、感覚形容詞的である語の中には、反復語幹形を形作ることができないものがある。

cf. naci ari:, mida aka:aka=na:. 夏だから、まだ(外が)明るいな

aN-ja ati pukarasipukarasi-ti-du buL. 私はとても嬉しいという(ft.嬉しい)

⁵⁶ ke:形、kara 形をとれる形容詞は、主語で表されるヒト、モノに備わる属性、それも、変化を前提とした一時的な状態としての属性を指し示すものに限られている。

4. 動詞分類

本研究の主題は多良間方言の「空間の表現」と「時間の表現」の考察であるが、そのいずれにおいても、文の述語となる動詞の果たしている役割は大きい。前者では、例えば、「移動」の動作を表す動詞(句)を述語とする文において、その動詞が示している動作の関わる「空間」を表す名詞(句)の格形式は、述語となる動詞のタイプによって異なってくる。また後者についても、例えば、<過去・現在・未来>といった文のテンス的意味の実現には、述語動詞のタイプとその形式との相関関係が大きく関わることなどが挙げられる。このような現象は、本研究の対象である多良間方言にも、同様に認められるものであり、よってその動詞の分類は、本論での議論における重要な前提の1つと言える。しかし、ただ単に「動詞を分類する」と言っても、どの観点から見るかによっていろいろなし方がある⁵⁷。

以下では、いわゆる自・他の区別のほか、上にあげた2つの主題それぞれに関わると思われる「コトの類型」と「語彙・文法的な系列」について概観する。そして、共通語におけるこのような動詞分類のし方を手掛かりに、多良間方言の動詞分類を仮定しておく。

4-1 自・他の分類と他動性

日本語学における動詞分類は、「自動詞」と「他動詞」という2分法によって行われるのが最も一般的であると言ってよいだろう⁵⁸。だが同時に、その問題点も多く指摘されてきている。例えば形態面では、いわゆる「自動詞」と「他動詞」の関係には形式上の原則がなく、自他同形の動詞も多いことなどが挙げられる。

ex. ‘-u / -eru’ 「続く / 続ける」(自一他)、「焼く / 焼ける」(他一自)

触れる「手が 触れる / 手を 触れる」 増す「スピードが 増す / スピードを 増す」

また、その分別の基準にも疑問がある。‘ヲ格 object を取れるかどうか’という基準によると、例えば「困難を 克服する」は他動詞、「困難に 打ち勝つ」は自動詞としてそれぞれ分類されるのだが、「対象への働きかけ」という点で、両者に違いはない⁵⁹。また‘受動文化でできるかどうか’という基準についても、例えば、「他動詞」文である a が受動文化しにくいのに対し、「自動詞」文である b では問題なく可能、という矛盾した現象が生じてしまうことが、角田太作 1991 によって指摘されている。これは、英語においても同様だという(p64)。

a. 太郎は たくさんの本を 持っている → ? たくさんの本は 太郎に 持たれている

⁵⁷ 本章で触れている自動詞・他動詞の区別、コトの観点からの類別などの他にも、例えば、‘活用’の観点からの分類(四段(五段)活用動詞、一段活用動詞、二段活用動詞、変格活用動詞/強変化動詞、弱変化動詞、不規則変化動詞)、「自立性の度合」の観点からの分類(本動詞、補助動詞)、また比較的新しいものとして、ムードのカテゴリーに関わる、‘意志性’の観点からの分類(意志動詞、無意志動詞)など、さまざまな分類法がこれまで提案されてきている。

⁵⁸ 動詞の自・他は、「格支配 case government」(「動詞が文のなか(あるいは、連語のなか)で、名詞の特定の格とくみあわせる」こと)の概念から、「対象的な関係で名詞の対格を支配する」か否かで区別される。そのような支配をするものは他動詞であり、しないものは自動詞となる(高橋他 2005:67-68)。なお、「対象的な関係」とは「モノ的な関係」とも言い換えることができ、よって「道を歩く」などは、「道」がモノとしての対象ではなく動作にかかわるトコロとして差し出されていることから、たとえ対格をとっていても他動詞(文)とは認められていない。

⁵⁹ 例えば、中国語でこれらの文は「克服困難」、「戦勝困難」(「戦」の簡体字は改めた)と訳され、「困難」とそれぞれの動詞との間の意味関係に差はないという(森田 1987:157-158)。

b. 太郎が 花子に 触った→ 花子が 太郎に 触られた

このような「伝統的」分類では、特に、‘ヲ格 object を取れるかどうか’が絶対的な基準となっているのだが、それとは異なるやり方で動詞分類を試みたものに、三上章 1953 がある。三上はまず動詞を、その一々の使用において、「所動詞」(受身にならない動詞)と「能動詞」(受身になる動詞)とに区別し、さらに、2種の受動文を認めた。それは例えば、「次郎が 太郎を 殴った」という能動文に対して、そのまま対応する受動文(c-1)と、能動文にはなかった要素の加わる受動文(c-2)である。三上は、前者を「まともな受身」、後者を「はた迷惑の受身」と名づけた。なお、これらはそれぞれ直接受身、間接受身ともよばれている。

c-1. 「太郎が 次郎に 殴られた」 — 「まともな受身」(直接受身)

c-2. 「花子は 次郎に 太郎を 殴られた」 — 「はた迷惑の受身」(間接受身)

そして「他動詞」を、「能動詞のうち、更にまともな受身も成立つもの」と定義している(p105)。

この三上 1953 の定義によれば、「犬に 吠える」や「花子に 触る」など、与格を取る動詞でも「他動詞」として位置付けられることになり、‘ヲ格 object を取れるかどうか’という基準による分類での矛盾はある程度解消することができるだろう。しかし、新たな疑問も生じてくる。例えば、上で挙げた例文 a の動詞「持つ」は、「太郎が 本を 持った」のように、具体的な作用動作を表わしている場合もある。そしてその場合も、「本が 太郎に 持たれた」というまともな受身の文を作ることはいできない。一方、この「持つ」と類似の動作を示している「抱く」では、「花子が 赤ん坊を 抱いた」という能動文から、「赤ん坊が 花子に 抱かれた」というまともな受身の文を作ることができる。このように、この2つの能動文は、主体動作の対象へのはたらきかけ方という点において何ら変わりがないにも関わらず、三上の分類では区別されてしまう、ということなどである。

だが、上の記述に明らかなように、この自動詞・他動詞の分類は、「動作に対する主体と客体の関係にかかわる文法的なカテゴリーであるヴォイス」と、「本質的な関係をもつ」ものである(須田 2000:93)。よって、そのヴォイスに関する分析を行うためには、有効かつ必要な動詞分類であると言ってよいだろう。寺村 1982 でも、本章の 4-2 で見ていく「コト」の観点からの動詞文類とともに、動詞の文法的な態(ヴォイス)とは「対立する自他のある形に託されたある意味が次第にいくつかの一般的な類型として把握されるに至ったものだ」という考えから(p303)、「動詞の自他一語彙の態の類型」を試みている。

またこの他、角田 1991 では、以下の‘prototype(原型)’という概念によって他動性を定義し、ヲ格をとる動詞述語文が他動詞文とみなされることへの説明を試みている。

「ある言語現象には,prototypical な(原型的な)もの,即ち,いかにもその例としてふさわしいものがあり,一方,そうではない例がある.この両者は連続体を成している.即ち,両者の違いは,程度問題であって,明快に二分することはできない」(p71)

即ち、「自動詞」か「他動詞」のいずれかに分類するのではなく、「他動詞文らしい他動詞文」(=「他動詞(文)の原型」あるいは「原型的他動詞(文)」)を設定し、そこから他の文の他動性の程度を計る、ということである⁶⁰。

⁶⁰ 「他動詞文の原型」という考え方は Hopper and Thompson 1980 'Transitivity in grammar and discourse'によっているという。しかしそこでは、意味的側面と形の側面の明確な区別はなされておらず、角田 1991 は

そして、原型的他動詞は、次のようなものとして設定されている(pp72-75)。まず意味的な側面では、「相手に及び、かつ、相手に変化を起こす動作を表す動詞」と定義され、「殺す」「壊す」「傷つける」「作る」「増やす」のような動詞が挙げられている。つまり、「何等かの意味で変化を表す」動詞である。次に形の側面についてだが、「意味的に他動詞文の原型であるものがその言語で持っている文法的特徴」と定義されるということである。

ところで、この角田 1991 による「原型的他動詞(文)」を基準とする他動性の考え方に拠ると、動詞「持つ」についてもうまく説明することができそうである。個々の文を問題とする限りにおいてであるが、つまり、「持つ」を述語とする以下の文 d と e では、それぞれの他動性の度合が異なる、ということである。

d. 太郎は たくさんの本を 持っている

e. 太郎が 本を 持っている [具体動作]

また例文 e は、「手に」という補語によって文が広げられた場合、対象の何らかの変化を伴う他動詞文へと移行する。この動詞「持つ」の 2 面性について、奥田靖雄 1968~1972 にも同様の記述が見られる。奥田は動詞「もつ」が示すヲ格名詞とのむすびつきの性質を、「ふれあいのむすびつき」と「ものもちのむすびつき」(ニ所有のむすびつき)の両方に位置づけており、前者が対象(物)に対する物理的な働きかけを表わしているのに対し、後者では「対象にたいする所有」が表されていると述べている⁶¹。

そして、この 2 種の「持つ」の区別は、スル-シテイルのアスペクト形式の対立の仕方の違いに関わるものでもある⁶²。例文 f の「ものもち」では、形式が異なってもアスペクトの意味に違いが生じていない、つまり対立していないのに対し、g の「ふれあい」では、それぞれの形式のアスペクトの意味は異なっており、対立している。

f. たくさんの本を 持つ 男 / たくさんの本を 持っている 男 [対立無]

g. 本を 持つ 男 / 本を 持っている 男 [対立有]

4-2 ‘コト’の類型

次に、「コト」の観点からの分類をみてみよう。コトとは「客観的な叙述の内容の表現」(寺村 1982:79)である。寺村秀夫 1982 では、上の自動詞・他動詞の区別とも関連させつつ、「具体的なコトを描くかなめとしての叙述語」(=用言)を「述語」、「それといろいろな格関係において結びつく名詞」を「補語」とし、共通語の述語について、「それがどういう種類の補語を必要とし、それぞれの補語がどういう格助詞をとるかという視点」からの分類が試みられて

それを修正、発展させたものと位置づけられている(p72)。

⁶¹ 「持つ」のこのような多義性は「語彙の意味のずれ=抽象化」によるものと考えられており、当然その通りであろう。その場合、具体的な動作を表している e の用法が、その「本来の」ものだと推察されるわけだが、e の文においても直接受動文が作れないことをどう説明すれば良いだろうか。直接受動文化の可否は他動性の基準としては下位と考えるか、あるいは、「太郎は本を(手に)持った→本が太郎(の手)に持たれた」という変形自体を認める(但し「太郎の手に」は<場所>)ということが考えられる。

⁶² 角田 1991 にも、高橋太郎(私信)からの指摘として、その「他動性」の考え方を発展させた「二項述語階層」が(格枠組み case frame の種類の最も多い二項述語の分類を提案したもの角田 1991:95 の表 5)、「アスペクト用法の違いにも反映している。(大まかな傾向ではあるが。)」ということが示されている(p114)。即ち、「スルーシテイル」は、他動性の低い表の右端では対立せず、それぞれの形式の実現する文法的意味が異ならないのに対し、他動性の高い左端の方では対立し、その文法的意味が異なっている。

いる(pp79-81)。なお、この時の「補語」は、「必須補語」と「準必須補語」となる⁶³。

述語はまず、1「動的事象の描写」(動詞文)・2「性状規定」(形容詞文)・3「判断措定」(名詞文)・4「感情の表現」・5「存在の表現」・6「コトを含むコト」という6つに大きく分けられている。前の3つ(1~3)は1つの大きなグループをなすものであるが⁶⁴、4「感情の表現」と5「存在の表現」が、1と2の中間に位置付けられている。また6「コトを含むコト」とは、名詞の代わりに、「補語と述語が結びついて、一つのまとまった叙述内容を表わすものを、補語としてとる」述語を指す(p173)。ここでは、動詞にかかわるものとして、1「動的事象の描写」、4「感情の表現」、5「存在の表現」、6「コトを含むコト」について、寺村 1982 によるそれぞれの下位分類を見ていくこととする。

4-2-1 動的事象の描写

「動的事象の描写」は、まず、大きく次の5つに類別されている。

- (1) 二者の関係の表現
- (2) 移動・変化の表現
- (3) 「入レル, 出ス」表現—働きかけと移動の複合
- (4) 「変エル」表現—働きかけと変化の複合
- (5) 授受の表現—働きかけと対面と移動の複合

以下、それぞれの内容を具体的に示していこう。

(1) 二者の関係の表現 ; 「ある主体(X)と、対象(Y)との関係を表わすような動作、作用、現象」。その対象(補語)がとる格の形によって、3つに下位分類されている(pp87-92)。

i. ‘働きかけ’—「主体が対象に向って働きかける動作・作用を表わす」。補語(対象=客体)はヲ格の形をとる。また、Y をガ格にする(直接受身文にする)場合に X がとる格の形によって、さらに、次の3つに下位分類されている⁶⁵。

- A. 客体=「受け手」が、物理的・心理的に直接影響を受けるもの。「X ニ~サレル」
ex. 殺ス, 殴ル, 誘ウ, 引ク, 壊ス, オトス, 割ル, 切ル, 突ク, 食ベル, 飲ム, 読ム…
- B. 主体の、客体=「目当て」をめざしての感覚・感情の動き。「X カラ/ニ~サレル」
ex. 見ル, 聞ク, 嗅グ, 感ジル, 呼ブ, 褒メル, 叱ル, 愛スル, 憎ム, 尊敬スル…
- C. 動作の結果による客体=「作品」の出現・創出。「X(ニヨッテ)~サレル」
ex. 作ル, 書ク, (穴ヲ)掘る, (写真ヲ)写す, (湯ヲ)沸カス, 建てる, 興す…

ii. ‘対面’あるいは‘対象に対する態度’—「X が Y(という個体)に向って、それに対して、何らかの動きをすること」を表す。i の‘働きかけ’の動詞とは、その補語(対象=相手)がヲ格ではなくニ格の形をとる点において区別されている。その「働きかけ」

⁶³ 寺村 1982 は、「ある述語にとって、それがなければそのコトの描写が不完全であると感じられるような補語」である「必須補語」と、そうではない「副次補語」とを区別し、その判定基準として反問誘発の可能性を挙げている。そしてさらに、「必ずしも反問を誘発するとは言いがたいが、述語の下位分類にとっての意味が大きいと思われるような補語を「準必須補語」として認め、「どういう必須補語、準必須補語をとるか」ということを、分類の手掛かりとしている。(pp81-85)

⁶⁴ なお、この「動的事象の描写」、「性状規定」、「判断措定」という分類は、佐久間鼎によるものであることが記されている。

⁶⁵ なお「二者の関係の表現のまとめ」では、これらはそれぞれ、「物理的働きかけ」、「ある対象をめぐっての感覚・感情の動き」、「創る行為」として、以下の ii「対面」、iii「相互動作」に並べて示されている(pp99-101)。

性の度合によって、3種が区別されている。

- A. 「働きかけ」性の度合が強く、直接受身になれる。その場合、i-A の動詞と同じく、X は二格をとる。

ex. 賛成スル,逆ラウ,噛ミツク,クツク,掴ミカカル,吠エル,ネダル…

- B. 主に相手に対する心理的な動きを表わし、直接受身になれる。その場合、X は二格ともカラ格ともなる。

ex. 恋スル,惚レル,甘エル,アコガレル,頼ル,言ウ,ドナル,話シカケル…

- C. 「働きかけ」性の度合は低く、直接受身にならない。Y が二格とト格のいずれもとれる動詞がある(ex.*印)。

ex. 会ウ*,当タル*,ブツカル*,馴レル,志ス,向カウ,触レル*,触ル,似ル* …

- iii. ‘相互動作’—「一方が他方に対してしたことは、同時に他方が一方に対してしたことであること、X と Y がお互いに何かをし合うということ」を表す。その補語(対象=片方)はト格をとる⁶⁶。

ex. ブツカル,喧嘩スル,争ウ,結婚スル,心中スル,愛シ合ウ,別レル…

(2) 移動・変化の表現 ; 「第二の補語が、いろいろな種類の動きと密接な関係をもつ場所」である移動の表現と、それらと「類似するところのある」変化の表現が1つの類型にまとめられている。ここでは、移動の表現の補語が表わす「特定の」場所⁶⁷との関わりかたによる3種の小類型と「境遇性」の介入する「行く,来ル」などの動詞、さらに変化の表現の5つの下位分類がなされている(pp102-121)。

- i. ‘出ル’動き—その補語がヲ格をとり、「出どころ(出発点)」を表わす。述語との関わりは深い。移動主体が animate あるいはそれに準じるものである場合、その出発点はカラ格に言い換えられるのが普通であるが、それが「観念的な場所、ないし制度や状態」であるときには言い換えられない。また逆に、カラ格の形はとれるがヲ格はとれない場合もある。

ex. 出ル,卒業スル,出発スル,離レル,オリル,(飛ビ,這イ…)～出ス,去ル…

- ii. ‘通ル’動き—その補語はヲ格をとるが、「通りみち(通過点)」を表わす点において、i から区別される。また、通過点との結びつきの強さによって、動詞は2つに分けられている。

- A. その通過点は必須補語であり、「線上の運動とその移動の場所」を表わす。

ex. 通ル,経過スル,過ギル,経ル,渡ル,越ス

- B. その通過点は準必須補語であり、「線上の運動とその移動の場所」よりも「身体の動きそのもの」に重点をおいていることができる。

ex. 歩ク,走ル,馳ケル,這ウ,進ム,飛ブ

- iii. ‘入ル,着ク;泊マル’類—「動きの行きつくところ」(到達点)に深く関わる。その補語が二格の形をとる点で(1)-ii の「相手」と似ているが、到達点がへ格となることも多

⁶⁶ このト格と並立助辞のトとは、当然区別されなければならない。寺村 1982 でも、「ここの必須補語としての「Y ト」と、より広く「連れ」を表わす副次補語の「～ト」との違い」が指摘されている(p96)。

⁶⁷ 寺村 1982 は、この「特定」の場所の表現に対し、「一般的な」場所(デ格)の表現は「すべての動詞にとって副次補語である」とし、動詞の下位分類の手掛かりとはしていない(pp103-105)。

いのに対し、相手はへ格をとれない。この類の動詞は、その表現の中心が移動そのものであるか否かで、次の3つに下位分類されている。

A. 移動そのものを表わす。i, ii に対し、「移動の終わる相」に注目した表現であり、また、出発点を補語として付け加えることができる。

ex. 入ル, 乗ル, 届ク, 着ク, 上ガル, 達スル, 迫ル, 移ル, 向ウ, 伝ワル, 進ム…

B. A と C の中間に位置するもの。

ex. 集マル, 集中スル, 近ヅク, 沈ム, 広マル, 広ガル, 落着ク, ハヤル

C. 「移動を前提とし、その結果の表われである事象を表わしている」。移動に「準ずる」ものであるが、その補語が、動き、変化の結果、主体が「存在している場所」を表わす点において、存在の表現に近い。

ex. 泊マル, 住ム, 浮ク, 浮かブ, 立ツ, 寝ル, 倒レル, 響ク, 向ク, 残ル, 並ブ…

iv. ‘行ク, 来ル, 帰ル, 戻ル’—「その出発点と到達点について約束がある」点において、他の移動の動詞から区別されている。特に、前3つは「話し手が発話時にいる場所、または話し手がふだんいる場所、属しているところ」(=「自分の領域」)へ依存する性格を持つ、「境遇性」⁶⁸の高い動詞とされている。

v. 変化‘ナル’類—「ある存在主体(X)が、或る状態、始めの状態(S)から他の状態、結果の状態(G)へ移行すること」を表す。補語(G)が二格の形をとることから iii の「入ル」類と似ているが、へ格をとることはできない。

ex. A; ナル, 変ル, 化ケル, 扮スル, ナリサガル [「G ニ」は必須補語]

B; 分カレル, 伸ビル, 増エル, 割レル, 落チル… [「G ニ」は準必須補語]

(3) ‘入レル, 出ス’表現—働きかけと移動の複合; 「主体(仕手)X が、受け手 Y に働きかけて、その力で Y がある場所から出たり、通ったり、入ったりする」ような表現。(2)-i から(2)-iii の(自)動詞と形態的に対立する他動詞がこの類に相当する。(但し i と ii に対立するものには格形式の「再配置」が生じる⁶⁹。)対立する他動詞形が欠けている場合、使役形が用いられる。また逆に、この類に含まれる他動詞に対応する自動詞形が欠けている場合は、受身形によって表される。なお、動詞の例としては「入ル」類のみが挙げられていた。

ex. A; 入レル, 乗セル, 届ケル, 着ケル, 上ゲル, 落トス, 伝エル, 置ク, シマウ…

B; 集メル, 沈メル, 広メル, 広ゲル, 落着ケル, 捨テル

C; 泊メル, 浮かベル, 立テル, 寝カス, 倒ス, 添エル, 残ス, 並ベル, 比ベル…

(4) ‘変エル’表現—働きかけと変化の複合; 「あるもの(X)が、他のもの(Y)に働きかけ、作用して、その結果、Y がある状態・性質(Z)を帯びようになる、あるいは身分、資格(Z)をもつに至る」ことを表す。(2)-v の(自)動詞と形態的に対立する他動詞がこの類に相当する。(3)の場合と同じく、対立する他動詞形がない場合は使役形が用いられ、そしてこの類の他動詞に対応する自動詞形がない場合は、受身形によって表される。

⁶⁸ 三上 1953 の用語であり、いわゆる代名詞などにみとめられる、「場面に左右される」という「記号」の性質を指している(p34)。本稿第2章 1-5 を参照されたい。

⁶⁹ 「出ル」類の動詞を述語する文において、その「出どころ」はヲ格の名詞によって指し示されるため、「出ス」類の動詞を述語する場合には、「出どころ」の「～ヲ」は、客体の「～ヲ」とぶつかることになり、その結果「～カラ」にかえるという現象が起こる(寺村 1982:194)。

ex. A;スル,変エル,決メル,改メル,選ブ,起用スル

B;増ヤス,減ラス,伸バス,上ゲル,アタタメル,ヒヤス,塗ル,割ル,割ク…

(5) 授受の表現—働きかけと対面と移動の複合;いわゆる「やりもらい」の表現であり、X(動作主体)、Y(相手)、Z(対象)の関わり方から、次の4つに下位分類されている(pp126-138)。

i. ‘与エル’類—「仕手(X)が、自分の所有するもの、ないし自分に属するもの、自分の支配下にあるもの(Z)を、相手(Y)に向って移すことを表わす表現」。「X ガ Y ニ Z ヲ〜スル」という形をとる。

ex. 与エル,授ケル,賜ワル,見セル,示ス,売ル,貸ス,アズケル,紹介スル…

ii. ‘受ケル’類—Z が Y から X に向って移動する表現。X は<し手>であると同時に Z の<到達点>であり、Y は X の<相手>であると同時に Z の<出どころ>である。よって Y は、二格の代わりにカラ格の形をとることもできる。また、この類の動詞には、形態的、あるいは意味的に、i と対立しているものがある。

ex. 受ケル,授カル,賜ワル,蒙ル,受ケトル,教ワル,習ウ,学ブ,買ウ,借リル…

iii. ‘ヤル,モラウ,クレル’類—ヤル,クレル類は i に、モラウ類は ii にそれぞれ属する動詞であるが、これらは「その仕手と相手について特別の制約」を持ち、その制約について、上2つとは別に考察されている。これらの動詞は、「話し手を中心とした動きの方向性」と「人称」に関わって、厳密に使い分けられている。

ex. ヤル,アゲル,サシアゲル / クレル,クダサル / モラウ,イタダク

iv. ‘命ジル’類—上3つと同じく「X(主体,人)ガ Y(相手,人)ニ〜スル」という形をとるが、Z がモノではなくコトガラである点が異なっている。授受のような「移動」ではないが、「X が「ことば」を発して Y に達し、それが何かの効果を生む」ということから、寺村 1982 ではこの類を、(5)の下位分類の1つとして立てている。

ex. 命ジル,要求スル,頼ム,強イル,ススメル,説明スル,感謝スル…

4-2-2 感情の表現

「生きものの心の動きを写そうとする表現」(寺村 1982:139)である「感情の表現」は、1「動的事象の描写」(動詞文)と 2「性状規定」(形容詞文)の中間に位置づけられている。そして、感情の表現は、まず、その述語が動詞であるものと形容詞であるものに大別されるが、ここでは前者(感情動詞)についてのみ示していくこととする。

感情動詞はその補語の格の形によって、次の2つが区別されている。

(1) 一時的な気の動き,受動的感情の表現;「何か特定の外界の出来事のために、一時的に感情(気)が動き、それが何らかの表情を伴う」(外面に現れる)点に特徴があるとされている。感情の主体=感じ手はガ格をとり、感情の誘因を表す補語は二格をとる。(pp140-142)

ex. 驚ク,怯エル,安心スル,怒ル,興奮スル,ウットリスル,失望スル…

(2) 能動的な心の動き—感情の発動を表す動詞;4-2-1「動的事象の描写」の(1)-i のB「目当て」をとる動詞から「感覚の動詞を除いた残りを、感情表現全体の中で捉えな」おされたものであり、感情の対象である補語はヲ格をとる。(pp142-145)

ex. 愛スル,憎ム,恨ム,惜シム,喜ブ,悲シム,懐カシム,恋スル,好ク,望ム…

4-2-3 存在の表現

「感情の表現」と同じく、1(動詞文)と2・3(形容詞文・名詞文)の中間に位置づけられている。ここでは、存在を表す「アル」の用法によって、4つの下位分類がなされている(pp155-161)。

(1) 出来事の発生；「動的事象の表現」に属する。場所を表す(副次)補語がデ格をとる。

ex. アル,起コル,発生スル

(2) 物理的存在；「ある特定の時/場所に,ある物/人が,存在する」ことを表し、場所を表す(準必須)補語はニ格をとる。また、存在主体が animate か inanimate かで動詞が異なっている。

ex. アル,ナイ / イル,イナイ

(3) 所有,所属的存在；「誰か(X)が誰か/何か(Y)を所有している」あるいは「Y が X に所属するものとして存在している」ことを表す。また、(2)に見られた animate-inanimate の対立が曖昧であり、「アル」が多く用いられるようである。

ex. アル,イル 「彼女ニ子供ガアルトハ知ラナカッタ」

(4) 部分集合,または種類の存在；「ある集合の中のある種の部分集合の存在を問題にする表現」。存在主体の animate-inanimate の区別意識は全くなく、動詞も区別されない。

ex. アル,イル 「ナニカ質問シタイ人ハアリマセンカ?」

4-2-4 コトを含むコト

「コトを含むコト」とは、「名詞の代りに、コト、すなわち補語と述語が結びついて、一つのまとまった叙述内容を表わすものを、補語としてとる」述語を指している。寺村 1982 は、その補語の形、つまり、「包まれるコト」を名詞化する方法によって、この類の動詞を、次の3つに下位分類している。(但し同じ類の中にも多少の異同がみとめられている。)

(1) 感覚作用；「[コト(=現象)]-ノヲ」となる。

ex. 見ル,見守ル,見ツケル,見出ス,目ニスル,聞ク,耳ニスル,匂ウ,感ジル

(2) 思考作用；「[コト]-コトヲ /-ノヲ, […] -ト」となる。

ex. 思ウ,考エル,信ジル,疑ウ,思イ出ス,恥ジル…

(3) 発話行為；「[…] -ト」となる。

ex. 言ウ,話ス,教エル,叫ブ,怒鳴ル,尋ネル,問ウ,答エル,命ジル,頼ム…

4-3 語彙・文法的な系列

アスペクト的な意味とかかわる「動詞の語彙的な意味のなかのカテゴリカルな側面にもとづく」分類を、「語彙・文法的な系列」という(須田 2003:146)。この用語はもともと、鈴木重幸 1957 が、動詞の「すがた的な性格」(aspectual character, видовой характер)を、「動詞の語彙的な特徴(その表わすプロセスがどういうものであるか)と文法的な(形態論的な)特徴(とき、すがた)の両方にかかわる」「語彙=文法的な(語彙=形態論的な)カテゴリー」と規定したことによる(p67)⁷⁰。この規定に関わる問題は、金田一春彦 1950 によってなされた動詞の

⁷⁰ なお奥田 1977 は、「一般化の結果うけとった語彙的な意味の共通な側面は、やはり語彙的なものであって、そこで動詞の語彙的な意味がアスペクトとからみあっているといえても、けっして語彙・文法的なものではない」(奥田 1985:97)というように、鈴木 1957 の規定を批判している。そして、奥田 1994 において、「語彙的な意味の一般化であれば、とりだされた《動作》とか《変化》とかいう概念は、意味的な

4 分類に対する奥田靖雄 1977 の批判を 1 つの継起として、日本語のアスペクト研究の発展をもたらした(第 4 章参照)。以下では、金田一 1950 の「瞬間動詞」と「継続動詞」への反論として、奥田 1977 によって提出された「動作」と「変化」及び、須田 2003 が、「アスペクトとかわる、もっとも一般的な動詞分類」(p161)と位置づけている「限界性」という概念それぞれについて見ていきたい。

4-3-1 動作と変化

奥田 1977 は、「太る,叩く,結婚する」などの動詞をひきあいに出すことによって、金田一 1950 が示した「瞬間」や「継続」という「動作のながさ」の観点による動詞分類を否定し、「継続動詞のことを《動作をあらわすもの》とみる。瞬間動詞は《変化をあらわすもの》とみる」と述べた(奥田 1985:102)。そして、「移動」を表わす動詞のうち、「歩く,走る」などは動作に伴なわれる位置の変化について触れておらず、「行く,来る」などは位置の変化をもたらす動作の形態について触れていないことなどを例として挙げ、「このような事実から、《動作》は運動の形態であるし、《変化》は運動の内容である」と述べている(同上:103)。この「動作」と「変化」については、奥田 1994 でより詳しく説明がなされている。まず動作について、

意味的なカテゴリーとしての《動作》は,他の物(客体)へはたらきかけて,その物になんらかの変化をひきおこす,人間の意図的な,物理的な運動をとらえている.そして,客体にはたらきかけていく,主体の物理的な運動は,現実のおおくの動作にふさわしく,時間的な長さをもつ過程としてとらえられている.(中略)こうして,意味的なカテゴリーとしての《動作》は,客体へはたらきかけていく主体,主体のはたらきかけをうける客体,過程としてののはたらきかけ,はたらきかけの結果としての,客体に生じてくる,あたらしい状態をその構成要素としてふくみこんでいる,ということになる.(奥田 2004「動詞の終止形(2)」p32)

また変化について、次のように述べている。最初の引用だけを見ると金田一 1950 の「瞬間動詞」に重なるような規定を与えているように思われるが、「変化動詞がさしだす《変化》の、このような時間的な特徴は、この動詞に《瞬間動詞》という名まえをあたえることになるのだが、意味的なカテゴリーとしての《変化》は結果的な状態をあらかじめ、先行する状態をふくみとしてとらえていて、そのような《変化》を表現する動詞が、継続相において変化の結果としての状態の継続をさしだすのであれば、この変化動詞に《瞬間動詞》という名まえを与えるわけにはいかない」((2):31)と、つけ加えられている。

たしかに,変化動詞は,ひとつの物の,前の状態からあたらしい状態への移行,ひとつの物のあり方の変更,つまり変化をその意味にとらえている.ところが,日本語の変化動

(あるいは語彙・意味的な)カテゴリーである」と述べ、それを、「語彙的な意味とアスペクト的な意味とのからみあいのなかでおこなわれた、動詞の分類であれば、動詞という品詞の内部における語彙・文法的な系列である」としている(「動詞の終止形(2)」p27 下線引用者)。つまり、同様に「語彙・文法的」という言葉が使われているものの、鈴木 1957 と奥田 1977,1994a とでは、語彙的なカテゴリーと文法的(形態論的)カテゴリーの両方にまたがるものと捉えるか、文法的なカテゴリーとの関わりの中で一般化された語彙的なものと捉えるか、という違いが見られるのである。しかし、「語彙と文法をつなぐもの」(須田 2003:161)という広い意味においては、両者の捉え方は共通していると言ってよいように思われる。よって、やや消極的で曖昧な規定になってしまうが、本研究ではこの「広い意味」において「語彙・文法的な系列」という用語を用いていく。

詞は、その移行をモメントとしてとらえていて、それを、多少とも時間的な長さをもつところの過程としてはとらえてはいない。(奥田 2004「動詞の終止形(2)」p30)

変化動詞がいいあらわす《変化》という意味的なカテゴリーは、その構成要素(意味特徴)として、変化するもの、その物の先行する状態、変化の結果としての、あたらしい状態、あたらしい状態への移行のモメントをみずからの構造のなかにふくみこんでいる。(奥田 2004「動詞の終止形(2)」p33)

しかし、この奥田 1994 の規定に対し、須田 2003 は次のように指摘する。

このようにみてくると、奥田 1994 における、奥田氏の動作と変化の規定のなかに、変化のありなしと時間的なながさのありなしという基準がうかびあがってくる。もし、このふたつの基準によって、動詞を分類するとすれば、動詞は、四分類されることになるだろう。(須田 2003『現代日本語のアスペクト論』pp155-156 下線引用者)

そして、「奥田氏の動作動詞と変化動詞という動詞分類における根底的な問題は、それが運動の質的な分類であるということである。つまり、ひとつの特徴を基準として分類したものではないということであ」り、このような「質的な分類」が、極端には「どうしても解釈できる」ものであると、続けて述べている(須田 2003:155-156)。

また、この動作動詞と変化動詞⁷¹の他、奥田 1994 では、「限界動詞」と「無限界動詞」という動詞分類も提出された。そしてこれは、動作、変化といった「運動の質的な特徴づけ」に対し、「アスペクトの形成に土台として直接にむすびついてゆく、語彙・文法的な系列」と位置づけられていた。だが奥田 1994 におけるそれぞれの動詞分類についての記述は、「日本語の動詞は、継続相において、あるときには動作の継続を、あるときには変化の結果としての状態をいいあらわしている」((2):27 下線引用者)や、「しかし、動詞の語彙的な意味を、《動作》であるか、それとも《状態》であるか、質的に特徴づけることだけでは、アスペクトの意味をすべて根拠づけることはできない。おなじ動作動詞であっても、完成相において、完結した動作をさしだしていないばあいがたくさんある」((3):35 同上)のように述べるところから始まっており、「継続相のアスペクト的な意味の分析には、おもに、動作動詞と変化動詞をつかい、完成相のアスペクト的な意味の分析には、主に、限界動詞と無限化動詞をつかっている」(須田 2003:157-158)と見られるような、不徹底なものであった。

この奥田 1994 を受け、須田 2003 は、動詞の語彙的な意味の一般化に関する自身の考えを次のように示している。

アスペクトという形態論的なカテゴリーに作用する動詞分類としては、完成相と継続相とが、どのようなアスペクト的な意味の対立をなしているか、対立のし方のタイプという観点から、動詞の語彙的な意味を一般化しなければならない。アスペクト的な形を、ばらばらにとらえるのではなく、ふたつの形の統一した対立としてとらえるという出発点にたちかえらなければならない。

(中略)

アスペクトが形態論的なカテゴリーであれば、その文法的な意味は一般的なものであ

⁷¹ なお、奥田 1994 では、「変化の結果ではない、《ただの状態》をさしめしている動詞」((2):38)である「状態動詞」も、「動作動詞、変化動詞」に加わる 3 つ目の動詞のタイプとして差しだされている。

り,その一般性とむすびについて,その土台となるような,動詞の語彙的な意味の一般的な側面(カテゴリーカルな意味)をあきらかにしなければならない.そして,それは,アスペクトの本質とかかわるような,アスペクト的な意味の構成要素と直接的にむすびつくような,動詞のさしめす動作の側面,あるいは構成要素の一般化でなければならない.それは,まず第一に,アスペクトが,動作の時間的な展開のし方という,動作の内的な時間構造にかかわるカテゴリーであれば,動詞の語彙的な意味における動作の内的な時間構造の一般化であろう.(須田 2003『現代日本語のアスペクト論』pp158-159 下線引用者)

そして,奥田 1994 で差しだされた「限界」について次のように述べ、「限界動詞と無限界動詞という動詞分類を、動作動詞と変化動詞にかわる、アスペクトとかかわる、もっとも一般的な動詞分類」として規定し直している(p161)。

一方,限界は,動作の時間的な構造が,限界と過程という構成要素からなっているとすれば,動作の内的な時間構造をあらわすアスペクトの本質とかかわっているといえる.時間のなかで展開する動作であれば,たとえ瞬間的なものであっても,かならず,ある時間的なながさをもった過程をもつ.そうであれば,区別的にはたらく特徴となるのは,その過程がどこであたらしい段階へ移行するかということになる.そして,そのしきりをめぐって,アスペクト的な意味の対立も生じてくるのであれば,限界という特徴は,かなりの程度に普遍的なものであるということになろう.(須田 2003『現代日本語のアスペクト論』 p159)

須田 2003 のこのような捉え方は、上の奥田 1994 が示した動詞分類を、より厳密に再規定し、発展させたものと言ってよい。奥田 2004 は、「動作」と「変化」という動詞分類を乗り越える継起を(それも自らの手で)作りだしている点において、高く評価されるだろう。なお、須田 2003 も、「変化」と「継続」という動詞分類が完全に否定しているわけではなく、この分類は「すべての形態論的なカテゴリーと関係をもちうる」動詞分類であり(p159)⁷²、アスペクトの関わりにおいては、「より具体的な現実を反映する、その(限界動詞と無限界動詞という動詞分類の一引用者注)下位区分である」と位置づけている(p160)。

4-3-2 限界性

次に、「限界性」について見ていく。上に示したように、須田氏はこの概念をアスペクトに関わるもっとも一般的な動詞分類の基準としている。須田 2000 で「限界」は、次のように定義づけられている。

限界とは,言語的に表現された動作の,時間のなかでの展開におけるしきりである.動作の展開における時間的なしきりとなるのは,まず第一に,そこにいたれば,動作の展開の過程がつきはて,それ以上展開することのできないような,動作の臨界点である.(須田 2000「限界性について」 p87)

動詞はまず、その語彙的意味のなかに、その意味特徴の 1 つとして「限界」を含みこんでい

⁷² また奥田 1994 も、「動作動詞とか変化動詞とか状態動詞とかいう、語彙・文法的な系列は、文法的な現象の、あらゆる領域にかかわってゆく、動詞のより総括的な分類である」と述べている(「動詞の終止形(3)」p37)。

るか否かによって、「限界動詞」と「無限界動詞」とが区別される。但しこのとき、「言語的な規定」と「現実における運動の規定」、「動詞の語彙的な意味のレベル」と「文の意味のレベル(述語の意味のレベル)」、「動詞の語彙的な意味にふくまれる限界という意味特徴」と「動詞のアスペクト的な意味のひとつとしての「限界への到達」とを、それぞれ明確に区別しておくことが求められている。

また、限界性には、大きく次の6つのバリエーションが認められている(須田 2000:88-93)。

(1) 絶対的な限界

- a) 結果的な限界；ものや人における、何らかの変化を指し示す自動詞に見られる限界のタイプで、その限界は、変化の終わりであると同時に新しい状態の始まりである。また、「ぬれる,きれる」など変化が漸次的に進展するものを「進展的な結果的限界」、「つく,はずれる」などあるモメントに変化が一挙に実現するものを「非進展的な結果的限界」と呼ぶ。
- b) 非結果的な限界；「ぶつかる,たたく」などに見られ、新しい結果的な状態をもたらすわけではないが、運動がそれ以上進行できないような限界である。このタイプの動詞では、1回限りの動作であればそのアスペクト的な意味は他の限界動詞と同じであるが、多回的な動作であれば、無限界動詞と同じアスペクト的な意味が表される。

(2) 相対的な限界；「ふえる,へる,あがる」など、相対的な量や程度の変化をさししめす動詞に見られる。一定の量や程度が限界となるが、変化の進行によって、その限界は新たに更新される。

(3) 無限界動詞；「あるく,はしる,ながれる,まわる」など、ものや人の動きを指し示す動詞がこのタイプになる。その基本的なアスペクト的な意味は、完成相で動作の発生やはじまり、継続相で動作の過程をそれぞれ表す。また、人の生理・心理的な状態を指し示す動詞や「きこえる,みえる」なども無限界動詞であるが、完成相・非過去形で現在の状態が表される。

(4) 外的な限界；無限界動詞が、時間や空間の量的な限定をあらわす修飾語やつきそい文などによって、外的に限界があたえられている場合。

(5) 他動詞における限界(目標的限界)；対象に変化をひきおこす動作を指し示す他動詞では、対象の変化の実現が動作の限界となっているが、その語彙的な意味の中心は主体のはたらきかけの過程にある。よってその限界性の強さは動詞によって異なる。

- a) 非進展的限界；「おく,いれる,とる」など、あるモメントにおいて一挙に実現するような対象の変化をひきおこす動詞に見られる限界のタイプであり、その対象の変化の実現のモメントが限界となる。
 - b) 進展的限界；「きる,やぶる」など、対象に対するはたらきかけが直接的に対象の漸次的変化の実現とむすびついていて、はたらきかけの進行とともに、対象における変化の結果が蓄積されていくような動作を指し示す動詞に見られる限界のタイプである。この種の動詞は基本的に、無限界動詞のようにふるまう。
- (6) 複合的な動作；複合的な動作を指し示す動詞も、限界動詞と無限界動詞とが区別されるが、前者はもっぱら完成相で使用され、後者はもっぱら継続相で用いられる。

4-4 多良間方言の動詞の分類

以上、大きく3つの観点からの動詞分類について概観してきた。ここまでの記述を踏まえつつ、多良間方言について、「コトの種類」と「語彙・文法的な系列」という観点からの動詞分類を試みるとすると、それは概ね次のように仮定することができるだろう。なお、この分類は網羅的なものではなく、また、kaqvi(被る)や ki:L(着る)などのいわゆる再帰動詞が「客体の状態・位置の変化」(a-1-1)に含まれるなど、その位置づけのし方にも検討の余地が大いにある。本研究では、あくまでも一応の目安としてこれを提示しておきたい。

A. 限界動詞

a-1. 主体の動作による客体の変化を表す

a-1-1 客体の状態・位置の変化

ex. acimiL(集める), akiL(開ける), aM(編む) amiL(浴びる), baL(割る), bisil(据える, 座らす), buL(折る), ciciM(包む), cigi(注ぐ), cikiL(付ける), ciM(積む), cimiL(詰める), cizikiL(続ける), fudaki(砕く), fukasii(沸かす, ((糞尿などを)もらす), fusjagi(塞ぐ), ho:muL(葬る), idasi/ndasi, nuNdasii(出す), iziL(入れる), jabuL(破る, 壊す), jamiL(止める), jurasi(浮かす{揺らす}), jaki(焼く), kacimiL(掴む), kaiL(変える), kakiL(掛ける), kaki, katamiL(担ぐ), katazikiL(片付ける), kaqvasii(被せる), kaqvi(被る), kaqfi, kafusii, kaqfasii(隠す), ke:sii(消す), ki:L(着る), kizii(削る, 梳る), kidaM(刻む), kisiL(着せる), kisi(切る), kubaL(配る), kumiL(込める), kunasi(こなす, 練る), kurusi(殺す), M:(汲む), magiL(曲げる), maki(巻く, 蒔く), maqziL, maqzii(混ぜる), maruki(縛る), Mbasii(伸ばす), me:sii(燃やす), mucii(持つ), muL(盛る), Nbasii(伸ばす), Ngil(握る), Ngii(抜く), niniqsi(ねかす), ni:L(煮る), no:sii(治す, 直す), nu:sil(乗せる), paki(吐く), pasjaM(はさむ), panasii(はなす, ほどく), paqzii(外す, 脱ぐ), piNgasii(逃がす), puL(掘る, 彫る), pusagiL(広げる), pusii(干す), sjaki(裂く), sikii(敷く), sitatiL(放り出す), sjagiL(下げる, 掛ける), sjunaiL(供える), simiL, qfiL, qfi(閉める), sutiL(捨てる), tabarasii(集める{溜らす}), taki(炊く), tatiL(立てる), tukasii(溶かす), tapugii(畳む), tudiL, tuzimiL(閉じる), tuL(取る), ucikii(置く), ukaL(置ける), ukuL(送る), utusii(落とす), urusii(おろす), uziiM(埋める)

a-1-2 客体の所有関係の変化

ex. azukaL(預かる), ataeL/ataiL(与える), baku:(奪う), juiL(もらう), kaisii(返す), kaiL(換える), kaL(借りる), karasii(貸す{借らす}), kau, ko:(買う), ko:kaNsii(交換する), qvi(売る), nusuM(盗む), paru:(払う), qfiL(くれる), tuLkaiL(取りかえる), turasii(渡す{取らす}), ukiL(受ける), usjagiL(奉げる, 供える)

a-1-3 客体の結果的な状態

ex. nukusii(残す), tumiL(泊める), usunu:, usuno:(失う)

a-1-4 客体の出現・発生

ex. ciNgii(紡ぐ), ciqfi(作る), fuki(建てる{葺く}), micikiiL(見つける), nasii(生す), pazimiL(始める), tatiL(建てる), ukusii((事件を)起こす), uL(織る)

a-2. 主体の変化を表す

a-2-1 状態・位置の変化

ex. acīmaL(集まる), afuriL(溢れる), agaL(上がる), akaL(明るくなる{明る}), akiL(開く), ataL(当たる), bakaL(別れる), bataL(渡る), bi:L(座る), buduLNki(飛び込む), buriL(折れる), ciki(着く, 付く), cīmaL(詰まる), cīziki(続く), fuguM(くぼむ), fukiL(くぐる), fuki(沸く{噴く}), fukupL(膨れる), fusjagaL(塞がる), fuqci(移る), gagaL(痩せる), idiL/NdiL, nuNdiL(出る), i:(入る), jakiL(焼ける), juL(寄る, 浮ぶ), jusiL(寄せる), jurugi(揺るぐ), kakaL(掛かる), ka:raki(乾く), kaqfiL(隠れる), kariL(枯れる, 涸れる), kawaL(変わる), ke:L(消える), kuiL(越える), kumaL(入る{込まる}), kusi(越す), kisiL(切れる), magaL(曲がる), marubi(転ぶ), Mbi:L(伸びる), misjuriL(醒める), muguL(潜る), muiL(燃える), MniL(濡れる), nagi(難ぐ), Ngil(抜ける), niniL(寝る), nu:L(乗る, 上る), pariL(晴れる), panariL(離れる), paqziL(外れる, 死別する), piNgil(逃げる), pisagaL(広がる), qfaiL(太る), qfi(閉まる), (sjagaL, qsagaL(下がる), sjaki(咲く), sjakiL(裂ける), sjuru:(集まる{揃う}), siniL(死ぬ), siziM(沈む), tabaL(集まる{溜る}), taci(立つ), tukiL(溶ける), ukiL(起きる), uriL(おりる), utiL(落ちる), uwaL(終わる)

a-2-2 出現・発生

ex. baki(湧く), muiL(生える{萌える}), nasi(生す), naL(成る, 為る, 実る, 鳴る), MmariL(生まれる), muiL(萌える), ukiL((事件が)起きる)

B. 無限界動詞

b-1. 主体の動作を表す

b-1-1 客体へのはたらきかけ

ex. aru:(洗う), cikanu:(飼う), ciki(突く), ciku:(使う), faNki(咬む), fu:(食う), fuci(打つ), fuki(拭く), fuL(振る), jubu(吸う), kadiL(耕す), kaki(搔く), ki:L(蹴る), kugi(漕ぐ), kurabiL(較べる), M:cikiL(踏む{踏みつける}), macuL(祀る), maci(待つ), muL(子守る), naM(なめる), nariL(慣れる), nara:si(教える{習わす}), naru:(習う), nuM(飲む), qsi:L(擦る), paziki(弾く), piki(ひく), pugi(揺さぶる), siciL, siciNki(いじめる), sjaqsi, zjaNki(刺す), sjudatiL(育てる), sjuL(擦る, 拭く), sumiL((手や顔を)洗う{澄める}), sutugi((顔を)はたく), tataki(叩く), tasukiL(助ける), tidaiL(おごる), tiqvi(投げる), tugi(研ぐ), tumiL(探す), usi(押す), uqcjakiL(押さえる)

b-1-2 移動

ex. aLki(歩く), iki(行く), isjugi(急ぐ), kaeL/kaiL(帰る), kaju:(通う), ma:L(回る), miguL(巡る), muduL(戻る), nagariL(流れる), nu:L(上る), paL(走る), pe:duL(這う), taduL(辿る), tu:L(通る), tubi(行く{飛ぶ}), uigi(泳ぐ)

b-1-3 主体の結果的な状態

ex. amaL(余る), juku:(休む), kaci(勝つ), makiL(負ける), nukuL(残る), siM(住む), tumaL(泊まる), sigi, sigiL(過ぎる{過ぐ})

b-1-4 動き

ex. asubi(遊ぶ), buduL(踊る), ikiL(生きる), magi(性交する{まぐわる}), uiki(動く), patarak(働く), paniL(跳ねる), si:(する)

b-2.主体の知覚を表す

ex. kikaiL(聞こえる), kiki(聞く), mi:L(見る,見える)

b-3.主体の感覚を表す

ex. bugariL, cika(r)iL(疲れる), jaM(痛む), ka:ki(渴く), kabi(嗅ぐ)

b-4.主体の生理・心理的な状態、動きを表す

ex. baqsiL(忘れる), basjaqzi(怒る), (ikidu fuki(息が切れる)), kaNgaiL(考える), kaNge:M(考える, 気遣う), mipuriL(見惚れる), (muqke: bi:L(むかむかする)), nuziM(好む{望む}), puriL(狂う, 夢中になる), si,qsi:L(知る), suki(好く), tanusuM(楽しむ), ubuiL(覚える),

uduruki(驚く), umuidiL(思い出す), umu:(思う), utagu:(疑う)

b-5.主体(ヒト)の言語・表現活動を表す

ex. abiL(呼ぶ), aja:kaL(あやかる), baNki(わめく, 吠える), bamiki(叫ぶ), baru:(笑う), buiL(吠える), damasi(騙す), i:(言う, 叱る, 要る), irabi(選ぶ), juM(読む, 数える), jurusi(許す), kakiL(測る), kaki(書く, 描く), kazuiL(数える), naki(泣く, 鳴く), nigu:(願う), panasi(話す), pumiL(褒める), sjabaki(尋ねる), sukasi(おだてる, お世辞をいう), tanuM(頼む), tu:ziki(指示する, しつける),

C.存在動詞

ex. aL(ある), buL(いる)

第 I 部　〈空間〉の表現

第1章 「空間」の名詞論

瀬戸賢一 1995 は次のように述べている。「空間そのものに対する一般的な思索の歴史は新しいものではない。詩人の靈感のみならず、ほとんどのあらゆる知の分野で、空間論は重要な位置を占めてきたといえるだろう。」(p76) そして、「空間」と多くは対比的に語られる「時間」の概念が「空間のメタファー」によって表現されていること、「時間」についてのみならず、例えば、「心」という精神的表現は、「入れ物」という空間的に知覚可能な感覚的表現の媒介を経て、はじめて私たちの認識の経路に入ってくる」(p78)こと、つまり、「空間」は、抽象概念の意味把握のための「媒介項」であることを指摘し、「空間」に関わる表現が、言語認識において「いかに根源的なものであるか」を(p10)、熱く論じている。

本研究の主題である「空間表現」と「時間表現」のうち、前者をまず取り上げようとする意図は、瀬戸 1995 の主張から決して遠いものではない。空間の‘広がり’が簡単に1枚の絵にあらわせるのに対し、時間の‘流れ’はそのようにはいかないことから、空間は時間よりも、具体的で、視覚などの身体的感覚によって直接的に捉えられるものであると考えるのである。瀬戸 1995 が指摘しているように、時間表現に空間表現が多く用いられていることも、このことと無関係ではないだろう¹。

この第1章では、空間を指し示す名詞について取りあげる。空間が「直接的に捉えられる」ということは、言語的には、それを直接的に指し示すための‘名づけ’が行なわれることと等価であり、その捉えられた空間の性質(あるいは空間の捉えられ方)によって、その‘名づけ’のし方も体系的であることが考えられる。本章では、広い意味での「存在」に関わる空間を直接的に指し示す名詞を、「空間名詞」として取りあげ、考察する。

以下では、まず、共通語の空間名詞に関する先行研究を検討し、それを手掛かりに、多良間方言の空間名詞の分類を試みていく(第1節)。これは一般名詞についての分類であるが、空間を指し示す名詞には他に指示代名詞が現われており、この「空間の指示代名詞」についても、その意味・用法を記述していく(第2節)。そして第3節において、動作や状態に関わるトコロ(=「空間的な意味」)をあらわす用法を持つ格形式について、記述・考察を行なっていく。これらの作業はいずれも、第2章「移動」の表現、第3章「存在」の表現それぞれに現れる、名詞と動詞の結びつき方についての記述に繋がっていく。

¹ 「空間的用法と時間的用法を併せ持つ多義語」に関する研究においても、空間的用法の方を基本的とし、その理由を「人間にとって空間は時間よりわかりやすく基本的」だからとする考え方が「通説」となっているようである(定延 2002:183-186)。だが定延 2002 では、「語彙の時間的用法が基本で空間的用法が派生的」と見える現象を<空間的分布を表す時間語彙>と名づけ、現代日本語(東京方言)と現代中国語(北京方言)とを対照させてその「現象」の考察し、認知言語学的立場から「通説」への疑問を投げかけている。

第1節 空間名詞の分類

‘人’によって捉えられるデキゴトは全て、何らかの「空間」を前提としていると言ってよいだろうが、特に、モノやヒトの広い意味での「存在」に関わる空間を直接的に指し示す名詞を、「空間名詞」として取りあげることができそうである。本節では、まず共通語の空間名詞に関する先行研究を検討し、それを手掛かりに、多良間方言の空間名詞の分類を試みていく。

1-1. 「空間名詞」とは

荒川清秀 1982,2004 では、寺村秀夫 1968 によって示されたトコロ性をもった名詞(=「トコロ名詞」)を取り出すための3つの「ワク」(a. ココハーデス/b. ーへ行ク(来ル)/c. ーデ〜シタ)²の検討を通して、次の3種の「トコロ」をみとめている(荒川 2004:33-34 より)。

- (A) 人間の移動先、存在のありかとしての広いトコロ
- (B) 人間が座ったり、立ったり、寝たり、接触するような場所としてのトコロ
- (C) 人が関与するしないに関わらず、モノの移動先、存在場所としてのトコロ

すなわち「トコロ」は、まず<ヒトにとってのトコロ>と<モノにとってのトコロ>とが区別され、前者ではさらに<身体全体のトコロ>と<身体部分のトコロ>とが区別されると言えるだろう。そして、これらのうち a と b のワクからは主に A が取りだされる。ここではこれを(1)<ヒトの身体全体のトコロ>と呼んでおく。また、荒川 1982 は新たなワク(d. ーニ〜スル)を提示し、「ーニ」にはいる名詞の多くが中国語ではトコロ化して現れることを指摘しているが、上の B と C はこのワクに当てはまるものであり、ここではこれらを(2)<ヒトの身体部分のトコロ>と(3)<モノにとってのトコロ>と呼んでおく。

(2)と(3)について、現代日本語(共通語)では、そこに当てはまる名詞の全てを直ちに「空間名詞」として位置づけられ得るわけではない。例えば、「椅子(に 座る)」や「封筒(に 入れる)」などは、それぞれ「なにに 座る」、「なにに 入れる」のように、動作に関わるモノとしても尋ねられることから、動作に関わるトコロ、すなわち「場所」ではなく、動作の「対象」として捉えられているとも言える³。荒川 2004 でも、「椅子に座る」は言えるが「椅子に立つ」は不自然であることなどを例に挙げて、前者が「トコロ的な結びつきではなく、動作とその対象との結びつきである」ことを指摘している(p35)⁴。

² 寺村 1986 では、名詞の下位分類の土台となる「特性」として「実質(実体)性」、「モノ性」、「トコロ性」、「コト性」、「相対性」、「形容詞性」などを挙げており、このうち「トコロ性」をはかる枠として、(a)から(c)を設けている(pp46-47)。なお、「特性」とは、個々の名詞固有の「意味」(Katz-Postal が‘distinguisher’と呼んでいるもの(Jerrold J. Katz-Paul S. Postal, 1964 ‘An Integrated Theory of Linguistic Descriptions’が参照されている—引用者))も、又いわゆる「選択制限」(例えばどんな名詞がどんな動詞と共起するかといったこと)も除外したものとして規定されている(p45)。

³ 奥田 1962 では、これらのくみあわせを「くつつきのむすびつき」に含め、「に格の名詞は、動作がその表面に、内部にいくこんでいく物=対象をしめしている」としている(言語学研究会編 983:295)。

⁴ この指摘は荒川 1982 にすでに見られる。中国語では「方位詞がつかない」名詞はすなわち「トコロとしてつくられた名詞」であることを踏まえた上で、日本語の「椅子」と「座る」のくみあわせが「椅子ノ上ニスワッテイル」のように空間化できない(しにくい)ことについて、「椅子」は「スワル」の対象となっていて、両者のあいだが、空間的なむすびつきではないからだろう」と述べている(大河内編 1992:78~83)。なお、田窪 1984 でも同様の指摘がなされている(p95)。

また、田窪行則 1984 では、共通語の「場所」を表わす名詞を取り出すためのテスト・フレームとして、次のような5つのワクが提示されている。

- e. 「のところ」が付かない
- f. 疑問詞「どこ」で聞ける(=答となり得る)/「ここ,あそこ,そこ」で指せる
- g. 移動を表わす動詞の Goal, Source に現われる
- h. 場所の状況語句を作る「NP で」の NP の位置に現われる
- i. 存在を表わす文において「位置」を示す「NP に」の NP の位置に現われる

これらのうち、f と g は、寺村 1968 の a と b にそれぞれ相当していると言えるだろう。また h について、例えば「ふとんで 寝た」の「ふとん」が動作の関わる「場所」でないことを示すために、その他のワクに当てはまらないことをその理由として挙げなければならないことから、テスト・フレームとしては適当でない。これは寺村 1968 の c についても同様であり、荒川 1982 において既に退けられている(大河内編 1992:74)。

では、田窪 1984 による「場所」名詞の分類を以下に示す。

(D) 「人」が関与している場所名詞

- A. 地名；若草山,大井川,野尻湖,...
- B. 自然物；山,川,湖,...
- C. 機関；玉野高校,京都大学,巨人軍,...

(E) 「人」が関与していない場所名詞

- A. 地名；若草山,大井川,野尻湖,...
- B. 自然物；山,川,湖,...
- C. 建造物(その一部も)；家,部屋,階段,...

(F) 身体名称；胃,腸,肝臓,口,のど...

(G) 相対名詞：後,前,左,右,上,下,東,西,南,北,...

網羅的ではないと注記されているものの、上の(D)、(F)と先の(1)から(3)の「トコロ」とを比べると、(2)<ヒトの身体部分のトコロ>と、(3)<モノにとってのトコロ>のうちの「移動先」としての「トコロ」が、「場所」名詞として取り上げられていないことがわかる。特に後者については、i のワクに「存在を表わす文において」という前提が付せられていることから明らかであろう。しかし、後述するように、「どこに ある？」というたずね文に対して、「ふくろに ある」という答えが受け入れられるとするならば、この「ふくろ」も、モノが存在する「場所」を表す名詞として取り出されるべきではないだろうか。

(2)<ヒトの身体部分のトコロ>と(3)<モノにとってのトコロ>について、もう少し見ていこう。荒川 2004 は次のように述べている。「名詞のトコロ性というのは、名詞のもついくつかのカテゴリーのひとつであって、(中略)一つの名詞のどの側面を引き出すかは動詞によって違う」(p36)。そして、動詞が要求する「トコロとしての意味特徴」を、それとくみあわさる名詞に対して付与する言語的手づきを、「トコロ化」(=「空間化」)と呼ぶ。当然、動詞に要求される「トコロとしての意味特徴」が既に示されている=顕然化している場合、名詞のトコロ化は行われまいだろう。そして、このトコロ化=空間化の有無を手がかりに名詞を眺める場合、最もトコロ性の度合いが高いのは、「地名」や「自然物」や「建造物」など、e から i のワク全てにおいてトコロ化の手づきを必要としない<ヒトの身体全体のトコロ>を指し示す名詞であり、<ヒトの身体部分のトコロ>や<モノにとってのトコロ>は、それよ

りも、トコロ性の度合いが低い名詞である、と言えそうである。

また、存在やヒトの移動を指し示す動詞は、それと組みあわさる名詞をモノとして尋ねることができないことから、名詞の「トコロとしての意味特徴」を最も強く要求する動詞であることは明らかである。だが、これらの動詞を含んだワクを用いて先の「椅子」と「ふくろ」とを比べると、わずかだが、以下のような違いが見られる。

- b-1 *椅子へ 行ク b-2 *ふくろへ 行ク
i-1 *(本は)椅子ニ アル i-2 ?(本は)ふくろニ アル

b-1、b-2、i-1 が非文であるのに対し、i-2 はやや許容されるだろう。また次のような用例も現れている。

- i-3 同署によると、見つかった偽札は、授与所で12月31日午前8時から2日午後10時までの売上金を入れる袋にあった。

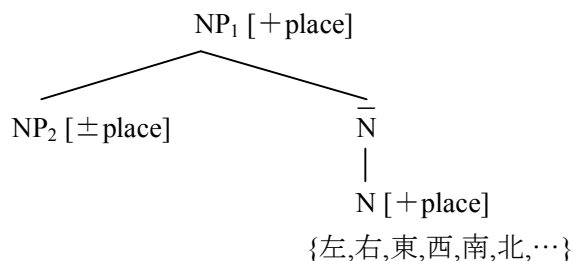
うち74枚は1日までの袋で、約42万人の人出があった元日のピーク時に使われていたことになる。残る9枚は2日の袋にあった。

(『朝日新聞』2005.01.07 北海道朝刊28頁,「朝日新聞記事情報:@nifty データベースサービス」[<http://www.nifty.com/QASK/>]より.)

例 i-3 に対して、「偽札はなににあったのか」というたずね文が成り立たないことから、この例文における「袋」は、「偽札」が存在する「トコロ=場所」として差し出されていると捉えられる。つまり、<モノにとってのトコロ>を指し示している名詞の中には、「トコロ」としての意味を表わすのに、必ずしも、「トコロ化」の手つづきを必要としないものがある、ということである。そして本研究では、このような名詞についても、「空間名詞」の1つ、あるいはそれに準じるものとして、取りあげることとする。

1-2. (空間の)相対名詞とトコロ化

だが、<ヒトの身体部分のトコロ>や<モノにとってのトコロ>を指し示す名詞の多くは、存在やヒトの移動を指し示す動詞などとのくみあわせにおいて、「トコロ化」の手つづきを必要とするだろう。田窪 1984 が取り出している(G)「相対名詞」はこの「トコロ化」に関わるものであり、次のような樹形図によって説明されている(p100)。



空間表現における相対名詞は(以下単に相対名詞)、それが付く名詞(NP₂)を基準として、相対的な空間的な位置を指し示すものとして規定されている⁵。そして、相対名詞を含む名詞

⁵ この「相対名詞」という用語は奥津敬一郎 1974 によるものである。奥津 1974 は「付加連体名詞」のうち、叙述文以外の修飾句もとれ、またその意味が「相対的な時点や地点などを表す」名詞を「相対名詞」と名づ

句に見られる「場所性」(=トコロ性)が、「NP₁の主要部であるNの特徴が $\bar{N}$ 、NPと percolate up して決まる」ことから(田窪 1984:100)、NP₂の「トコロ性」そのものは、その名詞句全体のトコロ性(の程度)にはほとんど関わっていないと言える。よって相対名詞は、「トコロ性の低い名詞をトコロ化する働きをもつ名詞」であると規定されるだろう⁶。

また田窪 1984 では、相対名詞を「基準点からのある方向へのへだたりをあらわすものとそうでないもの」(p100)に分類し、前者について、次のような特徴を指摘している。

- j. 「方向性」を強調する「方」とか「側」がつけられる
- k. 基準点を「から」格形式によって示すことができる
- l. 基準点からのへだたりを示すのに数量詞や程度副詞が使える

だが田窪 1984 は、「方向」という内在的特性をそなえている名詞は相対名詞の一部だけであり、普通は、名詞に「方」とか「側」とかの接尾辞的要素によって「方向性」を示すことから(p102)、「方向」を、「場所」の下位区分とした。これに対し、金水敏 1990 では、次のようなさらなる「証拠」を挙げて、「方向」を、「場所」から独立した範疇として定義づけている。

- m. 「後ろという方向」「北という方角」などの表現が補足語なしに可能であることから、これらの相対名詞は本来方向を表していると考えられる
- n. 「向く」など、場所名詞ではなく方向(性のある)名詞を指定する動詞がある⁷
- o. 同じ動詞との組みあわせにおいても、例えば、「庭へ行く」と「庭の方へ行く」とでは表される意味が異なる(前者が直接的に場所を示すのに対し、後者ではその方向にある任意または不特定の一地点が示される)

このように、相対名詞によるトコロ化の手つづきには、大きく「場所化」と「方向化」の2つの側面が取り出されることになる。本研究では以下、「場所」という用語を、「方向」に対立する狭い意味においてのみ用いることとする。これらはそれぞれ、「モノやヒトの、広い意味での「存在」に関わる空間」のタイプの1つである。よって、「場所性」と「方向性」も、「トコロ性」(=空間性)の下位に位置づけられる⁸。

けている(pp185-186)。「付加連体名詞」とは、マエ、アト、コトなど、これらを被修飾名詞とする「連体修飾文」の文構造内に、同一の名詞が現れないような連体修飾をも構成できる名詞を指している(cf. 僕が昨日食ベタウナギ→[(僕が昨日食ベタ)ウナギ]=[ウナギ]/父ハ朝食事ヲスルマエニ→[父],[朝],[食事]≠[マエ])。

⁶ 徳永他 2004 では、ここでいう相対名詞に相当するものを「空間名詞」と呼び、「表現がその座標を指示している尤もらしさへの写像を規定するポテンシャル関数」の「設計」を試みている。筆者の理解が及ばないため、その計算式について具体的に説明することはできないが、「空間名詞」を、「参照物の一部を指す部分型」と「参照物から離れた位置を指す分離型」の2つに区別し、さらに後者を、「方向性が重要である方向型」と「距離が重要である距離型」に下位分類して分析している点は、本章での議論にも関わってくる。

⁷ なおこのnの「証拠」について、金水 1990 は森山卓郎 1988(pp179-180)を参照している。また、「物理的移動を表す「進む」や「見る/凝視する/注目する」なども、「方向名詞」(森山 1988 の用語,p179)を要求する動詞であることが付け加えられている(金水 1990:24-25)。

⁸ 但し、例えば「机の上」が、「机」というモノの一部分(上面)を指し示す場合と、「机」というモノを基準とする方向(上方)とを指し示す場合とがあると捉えられるように、「場所」と「方向」のいずれのトコロをも表し得る相対名詞の方が多いだろう。いずれの意味が実現されるかは、文脈によって定まってくる。(以下の用例は「Google」[http://www.google.co.jp/]による検索結果より取りあげている。)

cf 1. 小さなゴキブリが、台所の流しと同じように、私の部屋の机の上を這うようになった。

2. 例えば、大きな会社で働いていて、毎日書類が机の上を飛び交い、会議が行われて、

最後に、(F)身体名称について見る。田窪 1984 は、身体名称が「それが身体のあるべき位置にある時のみ、「場所」として機能する」ことを指摘し、そこから、「部分化」という概念を引き出した。つまり、身体名称のトコロ性の度合いが高いのは「それが全体の中の部分として位置づけられている」ことによるのであり、よって、同様の現象は、身体名称に限らず、「構造体の部分をなすものならばどんなものにでも」現れると述べている(p109)。

田窪 1984 では触れられていないが、この「部分化」の概念そのものは、例えば「(机の)端」のような一部の相対的な名詞にもみとめられる、トコロ化の機能の1つであると捉えられるだろう。だが、このような「部分」を現す名詞は、基準となるモノ全体をトコロとして差し出すのではなく、モノの一部分を取り出し、その結果として、その「部分」がトコロ性を示すようになるものであり、モノ全体をトコロ化するその他の相対名詞とはやや異なっているように思われる。よって本研究では、「部分化」の相対名詞をその他の相対名詞から区別し、「部分」としてのトコロを指し示す名詞と一緒に扱っていくこととする。

1-3. 「空間名詞」の分類

以上の考察を踏まえ、多良間方言の空間名詞の分類を試みていく。

多良間方言の空間名詞には、まず、ヒトを主体として、その物理的な移動や存在に関わるトコロや、また何らかの動作が行われるトコロを表すものが挙げられる。

1-1 tarama-N-te:na buL pītu-nu kutuba:, kawaL. [Oj-d-8-A1]

多良間-に-[限定] いる 人-の 言葉-は 変わる

多良間にばかりいる人の言葉は、違っている。

1-2 agai, Mme qva: siNsi:-miduM nariqti: Mme, aNta-ga sīma: ku-N:=na:. @

[感] もう あなた-は 先生-女-Ø なって もう 私たち ex.-が 島-は 来ない=な

ああ、もうあなたは(ft.も)先生(の)嫁(に)になって、もう、私たちの島(に)は来ない(だろう)ね。 [Kij-a-9-A4]

1-3 unu naifu: pītucu muqtui, du:-nu ja:-Nke: muduri:, [Tok-18]

その ナイフ-を 1つ 持って自分{胴}-の 家-へ 戻り

そのナイフを1つ持って、自分の家へ戻り、

1-4 ida-Nka... buL-ga. ida-N-ga, we:, ××ja:-Nka,⁷ kuma-Nka.⁷ [Oj-d-7-B2]

どこ-に いる-か どこ-に-か [間] [屋号]家-に ここ-に

(その子は)どこにいるか。どこに、えー、[屋号]家に？(それとも)ここに？ {note. 滞在先を訪ねている}

1-5 ku:ko:-N-du deai:-ti:, nara-ga oto:-to:.

空港-に-ぞ 出会った-と 自分-が おとーと

空港で出会ったって、自分のお父と。

例 1-1 から 1-4 では、存在を表す動詞 buL(いる)や、kī:(戻る),muduL(戻る)など、ヒトの移動を表す動詞とくみあわさって現われていることから、これらの名詞がいずれも、<ヒトの身体全体のトコロ>を表わしているのは明らかである。例 1-5 も、ida-N(どこで)でのみ尋ねることが可能であることから、やはり、ヒトの動作に関わる場所が指し示されていると言える。またこれらの名詞と動詞の組みあわせは、いずれも、動物をその主体とすること

も可能であることから、広く<イキモノの身体全体のところ>と言うべきだろう。

また、例 1-1 の *tarama*(多良間)と例 1-2 の *sīma*(島)について、これらは<地名>と<自然物>というように下位分類することができるのだが、例 1-1 を *taramazīma*(多良間島)のように言い換えることもできることから、<自然物>が「名前」を与えられる(特定される)と、<地名>化、すなわち‘固有名詞化’することがわかる。例 1-3 の *ja:*(家)と例 1-4 の *××ja:*([屋号]家)についても、前者が建物そのもの(「建造物」)を指し示しているのに対し、後者では、その「名前」のつけられた「家」に関わるヒトビトの共同体(「組織」)を指し示していると捉えられることから、同様のことが言えるだろう。但し、このような現象は、<地名>と<自然物>、<建造物>と<組織>というくみあわせに限られるものではない。

次に、モノの存在しているところを表している用例が現れている。

1-6 *asjugadu takata-nu pama-N, pītu-nu pagībuni-nu aL-ba*, [民 Toj-1-3]

だけど タカタ-の 浜-に 人-の 脚骨-の あるので

だけど、タカタの浜に人の脚骨があるので、

1-7 *cibi-kara iki: mi:LN-cī:-badu, unu hora-Nka:, aqgaitaNdi: niŋgiN-nu puni,*

後{尻}-から 行って 見る-[引・推]-ので その 洞-には [感] 人間-の 骨

kanamaLgu: puni, usī nu:ma-nu kanamaLgu: puni,-nu Mme-nu, Mme jama-nu

頭蓋骨 骨 牛-Ø 馬-の 頭蓋骨 骨-の [Pl.]の もう 山-の

gutu cumari:-taL-ti: unu kubu: Mme uma-Nka biraki: kaiL.

ように{如} 積まれていた-と その 蜘蛛-は もう そこ-に 大の字になって 返る

後から行って見たそうで、その洞には、ああもう、人間の骨、頭蓋骨、牛(や)馬の頭蓋骨なんかが、もう山のように積まれていたそうだ。そのクモはもうそこに大の字になって返る(ft.ひっくり返った)。[民 Joh-7-21~22]

1-8 *unu ba:-N, unu sibuL-karanu, idi mizī-nu, kanu, qvata: mi: mi:L=sja,*

その 場合-に その 冬瓜-からの 出(る) 水-の あの あなたたち-は 見て みる=さ

kanu upuka:-ti. {中略} tiN-ni: aNsi aL. [民 Joh-5-49,50]

あの 大川-と 天-に そのように ある

その時、その冬瓜の中からの出(た)水が、あの、あなたたちは見てみるでしょ。あの川って。{中略} 天にそのようにある。{note.天の川のことを指している}

1-9 @ *we: ××ja:-N-mai aL=dara:na.* [Oj-d-10-B6]

[間] [屋号]家-に-も ある=だろう

あら、(テープは)[屋号]家にもあるよ(ft.売っているよ)。

上の用例の名詞が指し示しているところはいずれも、<イキモノの身体全体のところ>の意味も実現できるようなところであると言ってよい。例 1-8 について、登場人物の 1 人に天女が登場するような物語などでは、*tiN*(天)も、物理的な移動や存在に関わる場所として捉えられることから、他の用例に現れている名詞と同様に扱うことは可能だろう。

だが次の用例では、ヒトの動作の対象ともなり得るモノが、それとは別のあるモノが存在しているところとして捉えられている。

1-10 “*aLpī:, jaNbaru-Nke:-ti: kī:-ke:N, jama-nu naka-Nka fusju: mari: buL-badu,*

ある日 山原-へ-と 来-ながら 山-の 中-に 糞-を まって いると

pikaL, pīkariti:-nu munu-nu, mi:raiL-ba, iki: mi:-taka:-du, kugani-nu kami-Nka
 光る 光って-の もの-の 見られるので 行って みると-ぞ 黄金-の 甕-に
 iqpai aL-ba, kure: kaMganasi-nu tasuki-du, ari: wa:L”-ti, [民]ⁱ
 イッパイ あるので これは 神加奈志-の 助け-Ø-ぞ [COP] なさる-と

「ある日、山原へと来ながら(ft.行きながら)、山の中で糞をまっていると、光る、
 光ってのもの(ft.何か光っているもの)が見えるので、行ってみると、黄金が甕に
 いっぱいあるので、これは神様の助けでありなさる」と、

- 1-11 qva-ga sjo:gacue:gu-nu, kanu, jakusjo-karanu munu-N, sjasiN-nu aLruga,
 あなた-が 正月エーグ-の あの 役所-からの もの-に 写真-の あるけど
 anigena-du uki.↗ [Oj-d-32-A1]
 そのまま-ぞ おく

あなたの正月エーグの、あの、役所からのものに、写真がある(ft.あった)けど、
 そのままおく(ft.そのままにしてある)?

また、以下の例 1-12 では、hoNdanau mi:L(本棚を見る)という文が条件節に現れているこ
 とから、「見る」という動作の対象である「本棚」が、同時に「本」の存在するところをも指し
 示していることがわかる。例 1-13 でも、「埋める」という動作の対象である「穴」が、kuma
 という指示代名詞によって指し示されているように捉えられる⁹。このような「ところ」を、
 <対象的なアリカ>と呼んでおく。

- 1-12 aL pītu-nu-du, kunu hoNja-Nke: hoN kau-ga-ti, hoN kau-ga-ti: wa:riqti:,
 ある 人-の-ぞ この 本屋へ 本-Ø 買いに-と 本-Ø 買いに-と いらっしゃって
 unu hoNdana-u mi: wa:L-badu Mme, na-ga, hizjo:ni nuzomi: buL hoN-nu,
 その 本棚-を 見 なさると もう 自分-が 非常に 望んで いる 本-の
hodana-N, ari:-taL-ti:.
 本棚-に あった,[融継]-と

ある人が、この本屋へ本(を)買いにと、本(を)買いにと行かれて、その本棚を見な
 さると、自分が大変に望んでいる本が、本棚にあったそうだ。[民 Joh-15-2~3]

- 1-13 “to:to:, we: kuma-u puri: mi:ru. kuma-u ana puri, kuma-N uzuma-daka:
 [感] [間] ここ-を 掘って みろ ここ-を 穴-Ø 掘って ここ-に 埋めなければ
 nara-N-niba”-ti: si:-du, [民]ⁱⁱ
 ならないから-と して-ぞ

「さあさあ、ここを掘ってみなさい。ここを(ft.に)穴(を)掘って、ここに埋めなけ
 ればならないから」として(ft.おっしゃって)、

「全体の中の部分」を指し示すような名詞も現れている。前の2例では、mipana(顔)や
 sjenaka(背中)といった身体名称が「痣」の<アリカ>として差し出されており¹⁰、また後の用

⁹ 「穴を掘る場所」が先に/kuma/で指し示されているため、/kumaN uzumadaka: naraN/の/kuma/が ana(穴)そ
 のものを指し示しているとは断言しづらい。だがそれが、少なくとも「穴」のある状態になった「場所」を
 指し示していることは明らかである。

¹⁰ 以下に示すように、身体部位を<場所>の指示代名詞が差し示している用例も現れており、それがトコ

例では、ni:(根)という「木の部分」を指し示す名詞が、ida(どこ)という<場所>の疑問詞で尋ねられている。よって多良間方言でも、身体名称や「構造体の部分をなすもの」を指し示す名詞は、トコロ名詞として扱われるべきことがわかる。

1-14 aNti, unu ozi:-ja, pītu-tu-du kawari:, mipana-N ada-nu ari: wa:L-taL-ti:.

それで その おじーは 人-と-ぞ 変わって 顔{目鼻}-に 痣-の あり なさった-と

それで、そのお爺は、人と変わって、顔に痣がありなさったそうだ。{note.他の人のそれとは全く異なるような痣があった、ということだろう}。[民]ⁱⁱⁱ

1-15 Mme anci: kusū:... mi:-taka: mi:gutu asahigata, Mme sjenaka-N asahigata ^{iv}

もう それで 腰-を 見たら 見事 朝日型 もう 背中-に 朝日型

もうそれで腰を見たら見事(な)朝日型、もう背中に朝日型(の痣がある。)

1-16 'ki:-nu ni: sjura-u, ida-du ni:, ida-du sjura-ti:, kuL-u: bakasi:, nu:siru'-ti:,nu,

木-の 根-Ø 先-を どこ-ぞ 根 どこ-ぞ 先-と これ-を 分かって 上せろ-との

zai, ki:, ki:-ju sje:, surimunu-nu, sjuri-Nke:, sjurio:-nu ne:-N ki: ukī-taL-ga
言淀 木 木-を 添えて 刷り物-の 首里-へ 首里王-の ところ-に 来て おいた-が
jau=sja:mi:. [民 Joh-9-11]

様=だよ

‘木の根、先を、どこ(が)根、どこ(が)先と、これを分けて上がらせろ(ft.見分けて持って来い)’という、木をその木を添えて、刷り物が、首里へ、首里王のところへ来ておく(ft.来た)らしいよ。

また、例 1-16 の sjura(先)は、「木」の一部分を取り出す相対名詞であるが、ida(どこ)という疑問詞で尋ねられていることから、やはりトコロ化していると言ってよいだろう。その他にも、次のような部分化の相対名詞が現れている。

1-17 Mme:, N, mukasje:-N, sju:i-N-mai isigaki ma:qti: ari ukī=sa.ʔ unu...iki

もう [間] 昔-は-に? 周囲-に-も 石垣-Ø 回して? あって お=さ その 生ける)

iši-nu... pana-N bi:, bi:tui, bi: buriqti:-ja ki:-ja, mata iki: tubagari:-ja mata

石-の 端-に 座り 座って 座って いて-は 来て-は また 行って 飛んで-は また

nusi-nu wa:L-taka:, uma-ni... bi:bi:...si:. [民 Joh-2-5~6]

主-の いらっしゃったら そこ-に 座り座り した

もう昔は、周囲にも石垣(を)回して(?)あったよね。(雀は)その生けた(?)石の端に座って(ft.とまって)、座っていては来ては、また行って飛んではまた、主がいらっしゃると、そこに座ったり(ft.とまったり)していた。{note.主が見ると、雀が石の端に来てとまったり飛んでいたりしていた、ということ}

ロとして捉えられうることは明らかである。だが、これらの用例で実現されているむすびつきを<内在>、つまり、「痣」を「顔」や「背中」に「部分」として捉える場合、その<アリカ>が「空間的」であるかどうかの判断は難しくなるだろう。この点については、第3章の第2節を参照されたい。

cf. oto:-ja we: uNsjuku-nu kuNsi sjaNtukibe:L-Nka:-du, {聴取不可}, uNsjuku, aqzjagi-u

お父-は [間] 大変な このように 昼のひなた-に-ぞ うんと 畦の整地-を

si:-taL-ba, kanamaL-mai... jaM, Nda kuma jami:L-ba, [狂言]

していたから 頭-も 痛む どこ ここ 痛んでいるから

お父あ、こんな大変な昼のひなたに、うんと(頑張って)、[聴取不可]、畦の整地をしていたから、頭も痛い、あちこち痛むから、

- 1-18 unu usi-gama-uba: isibana-nu...paNta(-N) Nnagiq-ti:, [民 Toj-1-7]

その 牛-[指小]-をば 岩山-の 突端-に 繋いで
その牛を、岩山の先に繋いで、

- 1-19 “to:to:, nama, ja:-nu...kadu-nu ke:-ju, Ngi: ku.”-ti si:, [民 Saw-35]

[感] 今 家-の 角-の 茅萱-を 抜いて 来い-と して
「さあさあ、今、家の角の茅萱を抜いておいで」として、

その他、場所化あるいは方向化の相対名詞が現れている。

- 1-20 aNti:du, unu miduM-nu paka-nu tunaL-N ka:sija:-nu a-taL-ti: [民 Joh-14-2]

それで その 女-の 墓-の 隣-に 菓子屋-の あった-と
それで、その女の墓の隣に(は)菓子屋があったそうだ。

- 1-21 upuka:-nu...sjuba-N, weNpara-N-ja, kicigi pusi-nu pikaL-bisi-nu, ke:, weNsi:,

大川-の そば-に こちら側-には 綺麗な 星-の 光る-星-の [間] このように
sidaN, teNteNteN-ti mi:cu si: pikaL-ti:nu pusi-nu aL. [民 Joh-5-51]
次第に 点点点-と 3つ して 光る-との 星-の ある

川が流れなさる、大川{note.天の川のこと}のそばに、こちら側には、綺麗な星が、
光り星が、ほらこのように次第に、点点点と3つして光るとの(ft.3つ並んで光っ
ている)星がある。

- 1-22 “uibe: uci-Nke:-du bu(r)iL, ci:-ja ki:-badu juqL” (諺)

指-は 内-へ-ぞ 折れる 血-は 切れば 寄る
「指は内へ折れる(ft.内側に曲がる)、血は切れば寄る」

これらの名詞の出現の度合いは非常に高く、ヴァリエーションに富んでいる。また以下
に示すように、文脈によって<場所>と<方向>のいずれをも表せる名詞、つまり、そのトコ
ロ化の機能が、場所化と方向化のいずれかに限られていないような名詞もいくつかある。

- 1-23 “kanu tu:L-nu...sita-N-ja, ba-ga miduM naL gumata-nu kaL-ga-du buL”-ti:,

あの 灯り-の 下-には 私-が 女-Ø なる [当然]-の あれ-が-ぞ いる-と
「あの灯りの下には、私の女(ft.妻)になるはずのあの人がいる」と、 [民]^v

- 1-24 asjugadu, kunu, N: ga:ina-nu...ui-nu bikiduM-ja, a:, muLpazimaL-kara, kuNke-ga

だけど この [間] 芝生-の 上-の 男-は [間] 最初-から これら-が
misita:L-ga asibi-ga kisü:ba:, muLpazimi-kara qsi: buL-ba, [民 Ojm-15]

3人-が 遊び-に 来る-の-をば 最初-から 知っ-て-いる-ので

だけど、この芝生の上の男は、あー、最初から、これらの3人が(自分の所へ)遊
びに来るのは、最初から知っている(ft.知っていた)ので、

- 1-25 “~kanu tiL-N, Nna: qsi:-ubi-u maruqi:ti:, uL-kara...sita: niNgiN-nu muti,

あの 籠-に [間] 白帯-を 結んで それ-から 下-は 人間-の 分
suda-nu muti”, {中略} “mata, ui-ja mazimunu-nu muti”-ti: nara:sitaL-ci:-badu,
スダ-の 分 また 上-は お化け-の 分-と 習わした-引・推-ので

「~あの籠に、白帯を結んで、(籠に入っている魚のうち)それ(note.帯)から下は人
間の分。スダの分」、{中略}「また、上はお化けの分」と習わせた(ft.教えた)そうで、

[民 Nam-2-5,7]

その他、同じくトコロ化に関わる名詞として、共通語の「ところ」に対応する *tukuru* が現れている。田窪 1984 では、共通語の「ところ」について、それが「あるものを基準としての「場所」ではなく、「場所」そのものを示す」名詞であることを示し、以下の3つの用法をみとめている(p105-112)。なお *q* の用法は、一見、相対名詞の用法と同じであるように思われるが、その名詞句全体において「「ところ」が関与するのは、「場所」という性質のみで、あとの性質は、「ところ」がついた名詞によって決まる」点で異なっている(p108)。

p. 関係節の主要部において「場所」を表す (名詞『場所』に置きかえ可)

q. 「非場所」名詞について、その名詞の所在する場所を表す (〃に置きかえ不可)

r. 「部分」を強調する

そして、多良間方言の *tukuru* にも、共通語の「ところ」と同様の用法がみとめられる¹¹。また、*p* の用法には *tukuma* という語も現れているが(例 1-27)、用例は少なく、また *tukuru* の表す意味とほとんど差異がないようであることから、ここでは便宜的に、空間名詞としての *tukuru* の異形態として扱っておく。

1-26 “*pītu-nu...mi:...buL...tukuru-N-ja mata kure beNzjo-ja sju-N.”-ti i:-badu,*

人-の 見て いる ところ-に-は また これ-は 便所-は しない-と 言う

「人が見ているところでは、この子は便所はしない」というと、[民 Kad-1-11]

1-27 *jana:cja-gama miN-ja kaqvītui ki:-nu sīta-gama-u fuki: iki:, acumari:...buL*

こっそり 面-は 被って 木-の 下-[指小]-を くぐって 行って 集まって いる

tukuma-u mi: buL-ci:-badu, [民 Joh-13-注 6]

ところ-を 見て いる-[引・推]-[順接]

面は(ft.を)被ってこっそり木の下をくぐって行って、(動物たちが)集まっているところを見ていると、

1-28 *kuma-N, seNta-Nke:, kaeriqti:-du, uLkara Mme, N: ××-Nke:, ××-ga*

ここ-に センター-へ 帰って-ぞ それから もう [間] [施設名]-へ [屋号]-が

tukuru-Nke: iki:-taL-ti: . [Oj-a-3-A15]

ところ-へ 行っていた-と

(その人は)ここに、センターへ、帰って、それからもう、[施設名]へ、[屋号]の(子供が務めている)ところへ行っていたって。

1-29 *kunu, ami-nu kutu:, ami-nu kutu:...kakari:L...tukuru:, buNsjo:-nu...tukuru:,*

この 雨-の こと-を 雨-の こと-を 書かれている ところ-を 文章-の ところ-を

¹¹ 非空間的な用法の *tukuru*(ところ)もいくつか現れている。本研究第 I 部は空間表現をその主題としているため、詳しく見ていくことはしないが、例えば、以下の用例の *tukuru* は、関係節において、*kutu*(こと)と同じようなふるまいをしているように思われる。

cf. *ano mekarusju:-ga, aNsi unu, tubikiM-ju...kakusi:...uciki-taL...tukuru-nu-du,*

あの 銘刈主-が そのように その 飛び着物-を 隠して おいた ところ-の-ぞ

Mme, warui kutu-ni nari:L=sja:↗ [民 Joh-5-55]

もう 悪い こと-に なっている=さ

あの銘刈主が、そのようにその飛び着物{note.羽衣のこと}を、隠したところ(ft.こと)が、もう悪いことになっているんだね。

Mme mafuda:, teisei-ba si:, [民 Joh-17-8]

もう マフダ-は 訂正-(を)ば して

この雨のことを、雨のことを(ft.が)書かれているところを、書かれている文章の
ところをもうマフダは訂正をして、

だが q の用法について、多良間方言の *tukuru* はヒトをトコロ化する言語的要素としてはほとんど用いられず、この場合、相対名詞の *mai*(前)や、*ne:*という語が現れている。

1-30 “baN-ja sīni:-ja bur-aN. sīni:-ja bur-aN. uja, uja-nu...mai-Nke:-du, uja-nu

私-は 死んで-は いない 死んで-は いない 父{親} 父{親}-の 前-へ-ぞ 父{親}-の

jubidasi: aL-ba, uja-nu juisjugutu: ugaM-ga ikī-taL”,-ti:nu [民 Asa-1-27]

呼び出し-Ø あるので 父{親}-の 申し伝え-を 拝み-に 行った-との

「私は死んではいない。死んではいない。父の前(ft.ところ)へ、父の呼び出し(が)
ある(ft.あった)ので、父の申し伝えを拝みに行った」、という

1-31 “ī:.....sī-ga...mai-Nke:-ja iki, pumiLru-ga...mai-Nke:-ja ikī-na.” (諺)

叱る するの-が 前-へ-は 行け 褒めるの-が 前-へ-は 行く-な

「叱る(人)の前(ft.ところ)へは行け、褒める(人)の前(ft.ところ)へは行くな」

1-32 kunu, bikidacī pītu-nu tomodaci-nu, puka-kara jo:zi-Nke: kī-taL-ti:, jo:zi sī-ga.

この [独り身の男] 人-の 友ダチ-の 外-から 用事-へ 来た-と 用事-Ø し-に

unu...bikidacī...pītu-nu...ne:-N=ju. [民 Joh-4-18]

その [独り身の男] 人-の ところ-に=よ

この、独り身(の)人の友ダチが、外から用事(をしに)来たって、用事(をしに)。そ
の独り身の人のところによ。

1-33 aNsi:-du Mme muqtu unu...miduM-nu...ne: wa:r-aN-gutu buriqti-du ^{vi}

そして-ぞ もう 全然 その 女-の 所-Ø いらっしゃらないで いて-ぞ

そしてもう全くその女のところ(へは)いらっしゃらないでいて

しかし、トコロ化されるのがヒトを指し示す名詞であっても、その「ヒトのトコロ」、つまり、所在に関わるような具体的な場所が文脈において既に示されている場合は、*mai* や *ne:*ではなく、*tukuru* が用いられるようである。例えば、多良間方言では「屋号」を(その家の)ヒトを指し示すのに用いることができ、例 1-28 でもやはりヒトが指し示されていると考えられるのだが、その直前に[施設名]が現れているため、そのトコロ化には *tukuru* が用いられている。また *ne:*について、*iNne:*(西隣の家), *agaNne:*(東隣の家)のように、「位置」関係まで含めての「家」を表す名詞の要素となっていること、そして、今のところヒトの移動を表す *iki*(行く)や *kī:*(来る)のような動詞と組みあわさっている用例しか現われていないことから、*ne:*によるトコロ化は、*mai* によるトコロ化よりも、より「場所性」の高いトコロを差し出していることが考えられる。

以上の記述から、多良間方言の「空間名詞」は、大きく次の4つに分類される。

[1] イキモノの身体全体のトコロ

地名 ; *tarama(zīma)*多良間(島), *miNna(zīma)*水納(島), *me:ku* 宮古, *ukīna:* 沖縄, *amaga:* 天川[地

区名], upudu:大道[地区名], akasjarabaL 赤地原, fusjumatagi フシュマタギ, magaLmicī マガリ道, takataiM タカタ海, takasibama タカシ浜, miNnauki 水納沖, kaqdibaL カッフイ畑, maidumaLko:前泊港, tumaLutaki 泊御獄, me:kudo:mi 宮古遠見, …

自然物; sima 島, iM 海, pama 浜, ka:川, gama 洞穴, cizi 丘/頂き, muL 丘{盛り}, jama 山, abu 穴, (tiN 天, ciki 月,) …

建造物(及びその一部); ja:家, jadufuci 戸口, nakada 台所, amadaL 軒{雨垂れ}, tiNzjo:天井, to:qva 炊事小屋¹², taci(家畜用の)小屋 Mmagoja 馬小屋, bokuzjo:牧場, paka 墓, s(j)aNbasi 栈橋, maMma マンマ¹³, po:gu 抱護(林), micī 道, paL 畑, aqzja 畦, minatu 港, utaki 御獄, ugaNzjo 拝所,{御願所} to:mi 遠見(台), …

組織; ka:dija:カーディ家[屋号], mura 村, maqcja 店, maci 市場, no:kjo:農協, jakusjo 役所, seNta:センター, ku:ko:空港, ko:miNkaN 公民館, …

[2] モノにとってのトコロ

地名,自然物,建造物,組織; takatanu pama タカタの浜, magaLmicī マガリ道, gama 洞穴, gu:リーフ, ka:dija:カーディ家[屋号], (tiN 天,) …

対象的なアリカ¹⁴; kami 甕, hoNdana 本棚, ana 穴, nabi 鍋, haci 鉢, …

[3] 部分と「部分化」の相対名詞

身体名称; mipana 顔{目鼻}, kusī 腰, sjenaka 背中, cibi 尻, bata 腹, (usi-nu)cīnu²⁰角, futa 肩 …
モノの部分; sjura 先, pana/pata 端, paNta/panata 突端, kadu²¹角, sjuku 底, …

[4] 「空間化」の名詞

相対的な名詞

1) 場所; tunaL 隣, sjuba そば, sju:i 周囲, basi // aida 間, pikima 隙間, ura 裏, mai 前, cibi 後ろ, uci 内, naka // mi:中, Mnaka 真ん中, uku 奥, ui 上, sita 下, wa:bu 上部 …

2) 方向; uci 内, puka 外, mai 前, mauka/mo:ka: // maibara 前側(向かい), cibi // kusī 後ろ, qsibara 後ろ側, weNpara こちら側, kata 方, iqpo:一方, katafuta 片方, e:magi 両側, (tura-nu)pa 方位, ho:meN 方面, Mgi 右, pidaL 左, agaL 東, iL 西, nisi 北, pai 南, ui 上, wa:ka:上側, sita 下, sita:ra 下側, juka:ra 横(側), fuci{口} // muki 向き(正面),…

tukuru 系 ヒト以外; tukuru/tukuma ところ,(mai 前)

ヒト; mai 前, ne:ところ

この他、-muti(-方),-dati(辺り),-M:na(辺り)が、[4]のタイプの名詞に関わる接辞的要素として、それぞれ挙げられる。また、iNne:(西隣の家)や agaNne:(東隣の家)といった名詞について、これらも[4]のタイプに準じるものとして扱えそうである。なお、maibara(前側,向かい)も、単独で「向かいの家」という意味を表すことができる。

また[3]や[4]のタイプの名詞には、トコロ性を強調する接辞的要素として、空間名詞を構

¹² /toqva/とは別棟に立てられた台所のことで、裏手に便所兼用の/fuLja:(豚小屋)があった。

¹³ /maMma/とは、浜から続いて(上がる方向)、同じく砂浜ではあるが、1m くらい盛り上がって植物が生えているところを指す。またその後方(内側)は林になっているが、その林と maMma の内側に通っている道を/maMmamicī/と呼ぶ。maMmamicī は島を1周するように続いている。

¹⁴ このタイプの名詞は、モノがそこに存在するのに、ヒトの関与を前提としているようである。例えば、「(モノを)入れる」というヒトの動作(デキゴト)の結果、そのモノは「入れられた先」に存在しうる。そして、その「入れられた先」がモノの存在場所として捉えられるようになる、ということである。

成する働きをも示しているものがいくつか見られる。以下に例を示しておく。

ex. iM-bata 海端, mura-ucī 村内, iM-naka 海中, pama-fucī 波打ち際{浜口}, mura-fucī 村はずれ{村口}¹⁵, pai-sīta 南下, juduM-dukuru 休み所, …

第2節 空間の指示代名詞

拙論 2002 において、指示代名詞も含めた多良間方言の「指示語」について記述し、その体系化を試みたが¹⁶、本節では特に、空間表現に関わる<場所・方向>の指示代名詞(以下「空間の指示代名詞」と呼ぶ)について、その具体的な意味・用法を記述していく。

2-1. 形式

拙論 2002 において、指示代名詞も含めた多良間方言の「指示語」について記述し、その体系化を試みた。そこで、多良間方言の指示語には、共通語のコ・ソ・アに対応する ku 系、u 系、ka 系の形式の他に、a 系の語と、また指示副詞では/weNsi:/という語のあることを明らかにしたが、今回新たに、空間の指示代名詞にも we 系の語があることがみとめられた。また、その他の指示語と形態的な共通点をもたないような形式もいくつか現われた。

空間の指示代名詞 [第1称] kuma, [第2称] uma, [第3称] kama, [疑問=不定称¹⁷] ida/ Nda, [a 系] ama, [we 系] wema/ema, [その他] kema

音韻的に、kuma はココ、uma はソコ、kama は古典語のいわゆる遠称の代名詞「彼」、つまり、現代共通語のアソコ、そして ida は古典語の「いづれ・いづく(こ)」に、それぞれ対応していると考えられる。また、ida の変わり語形として Nda が現われている。a 系と we 系、また kema について、その対応語形は不明である。なお ema は、wema の変わり語形である。

2-2. 意味・用法

以下、多良間方言の空間の指示代名詞の意味・用法を記述していく。

2-2-1 第1称格 (kuma)

まず、<イキモノの身体全体のところ>の意味を表す用法が見られる。イキモノの存在を表す動詞や動作を表す動詞、移動を表す(あるいは伴う)動詞などと組みあわせて、主体の存在場所や動作を行う場所、また、移動の着点や起点を表す。

¹⁵ fucī は接辞的要素として用いられると、「境界」とでも言うような、相対名詞として用いられる場合とは異なる空間的な意味を表すようになる。例えば pama-fucī は<海と浜の境>、mura-fucī は<村と外界の境>をそれぞれ表している。

¹⁶ 拙論 2002 では、「<指示>の機能」という観点から代名詞を捉え、指示連体詞、指示副詞と共に「指示語」に含める立場をとっている。但し、「指示語」と示していることから明らかなように、これらは1つの品詞としてみとめられるのではなく、「品詞の枠を超えて」捉えられるべき、特殊な「語」である。

¹⁷ 拙論 2002 は、代名詞の下位分類として人称代名詞、指示代名詞の2種を認め、いわゆる不定代名詞、再帰(反射)代名詞はこれらと等価とせず、それぞれの代名詞の称格として扱う立場を取っており、本研究もこれに従っている。なお、多良間方言の指示語では、そのいわゆる不定称は共通の形態的要素を有していない。

- 1-34 ida-Nka...buL-ga. ida-N-ga, we:, ××ja:-Nka,⁷ kuma-Nka.⁷ [Oj-d-7-B2]
 どこ-に いる-か どこ-に-か [間] [屋号]家-に ここ-に
 (その子は)どこにいるか。どこに、えー、[屋号]家に？(それとも)ここに？{note.
 滞在先を訪ねている}
- 1-35 kunu o:kame:, “agai, furuja-nu muri-ti:-ja Nka, kaNsinu nara-ju:qra: kuwai
 この 狼-は [感] 古家-の 漏り-と-は [感] あのような 自分-より-は 怖い
munu-ga jau. kure kuma-N bu-taka: Mme abunai”-ti, @ [民 Joh-3-7]
 もの-が 様 これ-は ここ-に いたら もう 危ナイ-と
 この狼は、「ああ、古家の漏りとは、なるほど、あのような自分よりは怖いものの
 様だ。これはもう、ここにいたら危ナイ」と、
- 1-36 M:na gaqko:-ja kuma-N Ndi...uki=sja:mi:. [Oj-d-25-A5]
 皆 学校-は ここ-に 出て おく=でしょう
 皆学校はここで出ておく(ft.出ている)でしょ。
- 1-37 kunu buda: “aNsinu kaNgai-uba: si:-ba, mazu kuma-N M:na tuqru abiri:
 この おじ-は そのような 考え-をば するなら まず ここ-に 皆 鳥-を 呼んで
mi:.” {中略} -ti: wa:Ltari:, [Tok-14]
 みろ -と おっしゃって
 このおじは、「そのような考えをするなら、まずここに全部鶏を呼んでみなさい」、
 {中略}とおっしゃって、
- 1-38 mata kuma-kara hiqkosi iki-taL zinaN-ja mata, Nna, isja. N:, kuza-nu
 また ここ-から 引越して いった 次男-は また [間] 医者 [間] コザ-の
cju:o:bjoiN-nu, kakari-u si:, [民 Asa-1-33]
 中央病院-の 係-を して
 またここから引越して行った次男はまた、ええと、医者(になっている)。コザ{note.
 地名}の中央病院の係をして{note.その病院に勤めているということ}、

そして、kuma で指し示されるこれらのトコロは、‘表現主体¹⁸が発話時に存在している場所’である場合がほとんどである。だが、その指し示される範囲は常に同じではなく、例えば、例 1-35 で狼がいる場所が「amadaL 軒{雨垂れ}」であるのに対し、例 1-36 では、沖縄本島で生活している多良間島出身の人物(とその兄弟)について述べたものであることから、「tarama(zima)多良間(島)」という、より広い範囲が指し示されていると考えられる。このように、kuma の指し示す場所の範囲が一定でないことは、次の用例により明らかであろう。

- 1-39 “kuma-N-du Mme, Nna uja-uba ko:gomri:-du tiNganasī-ti ugami, Mme uzigami-ti
 ここ-に-ぞ もう [間] 親-をば 奉って-ぞ 天加奈志-と 拝み もう 氏神-と
ugami, mata nara mata uja-uba jagumisja:L-ba, mata uja-to: iqtai-ja nar-aN.”
 拝み また 自分-Ø また 親-をば 畏れ多いので また 親-と-は 一体-は ならない

¹⁸ なお、本研究でいうところの「表現主体」には、被引用発話の発話者や、いわゆる「語り」のテキストにおいて、「語り手」によって、いわゆる直接話法によって言い表された台詞の「発話者」たる物語の登場人物なども含めることとする。

mata, we:, kuma=jo:. [[a:]] kuma-N-du mata nara-ni:, {中略} uzigami-ti: Nna:,
 また [間] ここ=よ [感] ここ-に-ぞ また 自分-に 氏神-と [間]
 Nna:, su: si:, Nna, si: iki-ti:nu jiguN-ba si: wa:L-taL-ti:. [民 Asa-1-15~17]
 [間] する して [間] して いけ-との 遺言-をば し なさった-と

(ミージン太郎は)「自分(ft.私)はここで、親を奉って天の神様と拝み、また氏神と拝み、また私は父は恐れ多いので、父と一体(に)はならない{note.同じ場所に葬られるわけにはいかない、ということ}」。(だから)また、ええと、ここよ。[[あー。]]
 ここでまた自分で、{中略} (私を)氏神としていきなさい{note.祀っていきなさい、ということ}という遺言をしなされたそう。

上の用例は、多良間島に伝わる伝承について物語られたもの的一部分であるが¹⁹、上の用例において話し手は、自分が今語っているコトガラが、彼らが発話時現在(物理的に)いる「家」のデキゴトであることを強調し、聞き手に注意を促している。そして、聞き手がそれに、恐らく<驚き>や<気づき>のニュアンスを表すような感動詞で答えていることから、聞き手はその kuma が指し示しているものをそれまで特定できていなかった、あるいは異なるトコロを想定していたことが窺える。

しかし、上に挙げたいずれの用例も、kuma の指し示すトコロが<表現主体が今いるトコロ>²⁰である、という点においては一致している。このような、現前する具体的なモノゴト(この場合は「場所」)を、時に身振りを伴って指し示す用法を<現場指示>と呼ぶ²¹。また以下の用例では<モノにとってのトコロ>や<部分>が指し示されているが、これらは、<表現主体が今いるトコロ>を所在とするモノ、あるいはその場所の一部分であると捉えられることから、やはり、kuma の<現場指示>の用法に含められるだろう。

1-40 “jicē:, ba-ga-du mainicī kuma-nu fa:i-gu: muno:, fe: bu-taL”-ti: qsai-taka:-du,
 実-は 私-が-ぞ 毎日 ここ-の 食べ-そうな もの-を 食って いた-と 申し上げたら-ぞ
 (男が)「実は、私が毎日ここの食べられそうなものを、食べていました」と申し上げると、[民 Sims-3-注 4]

1-41 ta:-ga-ga kuma-N rakugaki-u si: ukī=na:.
 誰-が-か ここ-に 落書き-を して おく=な
 誰がここに落書きをしておく(ft.している)かな。

この他、kuma には、次のような用法も見られる。

1-42 tukapana-nu, saNkakujama-N-ja, ukīpī-nu ba:-ja, upu-nika-nu-du Ndi: ki:,
 トッカパナ-の 三角山-に-は 凶日-の 場合-は 大猫-の-ぞ 出て 来て
 niNgiN:ke: ru:zī sītaL-gi munu. iM:ke:-mai paL-Nke:-mai, tukaku
 人間-へ [襲い掛かること]-Ø した-気 もの 海-へ-も 畑-へ-も どうしても

¹⁹ 詳しくは、資料 2「多良間の民話」の Asa-1 を参照のこと。

²⁰ これは、金水 1988 の「現場」の概念に重なるものであろう。「現場」は、「<自分>を取り囲み、<自分>によって実時間的に直接知覚される対象によって満たされた空間」と規定されている(金水 1988:4)。

²¹ 以下、指示代名詞の用法の名づけには、堀口 1978,1990 の用語を借用している。

kuma-u kaja:-daka: nar-aN ba:-nu aL=sja, nika-nu panasë: murazju:-N

ここ-を 通わなければ ならない 場合-の ある=さ 猫-の 話-は 村中-に

pīsugari:, kuma-nu micü:ba:, kaju:-zikī sī-na-ti:nu panasī=sa, [民]^{vii}

広がって ここ-の 道-をば 通う-[いつも~する]{漬け} する-な-との 話=さ

トゥカパナの三角山には、悪い日の時には、大猫が出て来て、人間へ襲い掛かるらしい。海へも畑へも、どうしてもここを通わなければならない場合があるでしょ、猫の話は村中に広がって、ここの道は通うなという話さ、

1-43 upu du:L, ikī-badu, “zju: Mme kuma.” “ar-aN. fusjumatagi-game mati”-ti:,

大(道)-Ø 沿って 行く-と [感] もう ここ ではない フシュマタギ-まで-は 待て-と

fusjumatagi-ti-ja mata ano, magaLmicī-N-du aL. kuma-gami:-ti: i:-badu

フシュマタギ-とは また アノ マガリ道-に-ぞ ある ここ-まで-と 言う

大道(に)沿って行くと、「さあもうここ(で勝負だ)。」「だめだ、フシュマタギまでは待て」と、フシュマタギとはまたアノ、マガリ道にある。そこまで、と言うと、
[民 Toj-1-16~17]

これらの kuma は、表現主体(前の例では話し手、後の例では物語の登場人物)が<今いる場所>ではなく、それぞれの文脈において先に差し出されている saNkakujama (三角山)、fusju-matagi(フシュマタギ)という「場所=地名」を指し示している。このことは、これらの用例が、「語り」のテキストから取り出されたものであることから明らかだろう。このような指示代名詞の用法を、<文脈指示>と呼ぶ。また、指し示されるところが現前する具体的なところではない、という点において<文脈指示>と同じであるが、そのところが文脈にも差し出されていない用例も現れている。この用法を、<観念指示>と呼んでおこう。以下の例 1-44 では、「男」によって思い出された「カヌシャガマ(愛人)」の「白く柔らかい」<部分>が、kumaによって指し示されていることがわかる。

1-44 agaitaNdi:, aga, umuidi-maN-tu, umu, umu:-sjugadu, mata jana fusi Ndi:

[感] [感] 思い出さない-と [言淀] 思うけど また 嫌な 癖-Ø 出て

ne:N. kunu, kanusja-gama-ga, kuNsinu, ema-M:na-nu qsi: japa:japa:-ti:nu

しまった この 愛人{愛しさ-指小}-が このような ここ-辺り-の 白く 柔々-との

kuma-u, umuidi: ne:N. [狂言]

ここ-を 思い出して しまった

何てことだ、ああ、思い出すものかと思うけど、また嫌な癖(が)出てしまった。このカヌシャガマの、このような、ここ辺りの白くて柔々との(ft.柔らかい)ここを、思い出してしまった。

2-2-2 第2称格 (uma)

uma にも、まず、<現場指示>の用法がみとめられる。

1-45 uma-Nkanu jumi-gama:, paL-Nke: tubi:L¹ aNga:. [Oj-d-21-B1]

そこ-にの 嫁-指小}-は 畑-へ 行っている{飛んでいる} 姉

その嫁は、畑へ行っている？お姉さん。

1-46 e:, uma bi:tui fa:-N=na.ʔ [Kij-b-17-B3]

[感] そこ-Ø 座って 食べない=な

ねえ、そこ(に)座って食べないね(ft.食べてくれない)?

1-47 ~paL-u:, kaduzuke:=sja,ʔ kaLNta-ga nakabaL beta-ga paL-to:. kaduzuke:-ju

畑-は 角付け=さ あれたち-が [畑名]-Ø 私たち in-が 畑-とは 角付け-を

si:-du buL. sju: jari: wa:L-taqra, ara hanako:, we: uma-kara: ki: kadi-da,-ti

して-ぞ いる 主-Ø? やり なさったの-は [感] 花子 [間] そこ-から 来て 掘ったら-と

M:-mai kadisi. [Oj-a-12-A1~A2]

芋-も 掘らす

(あの家の)畑を(ft.は)、角付けさ{note.畑の境が接しているということ}、あの人たちのナカ畑(と)、うちの畑とは。角付けをしている。(うちの)お爺さんでいらっしやった(方)は、ほら花子{note.「あの人」を指す}、そこからきて掘りなさい、と芋も掘らせる(ft.掘らせた)。

上に挙げた用例のいずれでも、<表現主体が今いる場所>からそれほど離れていないトコロが指し示されている。例えば、例 1-47 の uma は「花子」がいる場所が指し示しているのだが、その場所について、表現主体=「お爺さん」の隣の畑(=nakabaL)であることが文脈から推測できる。(なお、<現場指示>の用法では現前しているモノゴト(この場合はトコロ)が指し示されるため、「語り」のテキストでなければ、そのものを直接的に指し示す名詞などは文中に現れにくいだろう。)つまり、この用法の uma で指し示されるトコロとは、<表現主体が今いる場所に近接しているが離れた場所>であると、今のところ規定できそうである。そしてその指し示されるトコロには、大きく 2 つのタイプが見られる。以下の 2 例、

1-48 uma-Nka wa:ri: panasī-gama-uba sjuda:, Mme:. Mme ba-ga ja:-Nke.

そこ-に いらっしゃって 話-[指小]-をば したら もう もう 私の 家へ

そこにいらっしゃって話をして、もう。もう私の家へ(帰るよ)。[Oj-d-26-B2]

1-49 ~qsitūL Mni-nu, upuganu tuMbara-u katamitui, tubagari: kī:-ba, kiqti:-du, paLmau,

白鳥-Ø 群-の 大きな 岩-を 担いで 飛んで 来るので 来て-ぞ 言淀

tamadara-ga zī:-Nka ki: juke:, buL-badu, Mme pītui muqtui tabagari:-ti sike:,

タマダラ-が 畑{地}-に 来て 休んで いると もう 1 回 持って 飛ぼう-と しかけて

uL-u: muqtagi: tubī, tubagaL kuto: nar-aN, si:du, paLmatamadara:, “uma:

それ-を 持ち上げて 行く{飛ぶ} 飛ぶ こと-は ならない それで 波利間タマダラ-は そこ-は

ba-ga zī: ari: mutagirai-daka: uma-N ucīki-mai junumunu”-ti: ī:-badu,

私-が 地-Ø [COP] 持ち上げられないなら そこ-に 置いても 良い-と 言う

白鳥(の)群が、大きな岩を担いで飛んで来て、タマダラの土地に来て休んでいて、もう 1 回持って飛ぼうとしかけて、それを持ち上げて行く、飛ぶことは(ft.が)ならない(ft.できない)、それで、波利間タマダラは「そこは私の土地だから、持ち上げられないならば、そこに置いても良い(ft.構わない)」と言うと、 [民 Noz-4-2~4]

まず例 1-48 について、言語的には表されていないが、発話時、表現主体=話し手は「庭先」に、聞き手は庭先に面した「部屋の奥」にそれぞれ位置していた。そして、話し手が「話をす

るために」聞き手に対して移動を促していることから、uma が指し示すトコロ=移動先とは、話し手と聞き手のいずれの<今いるトコロ>にも<近接しているが離れたトコロ>を指し示していると考えられる。次に例 1-49 について、「語り」の地の文で示されているように、その uma が指し示しているトコロとは「白鳥の群れ」が「今いる場所」であり(=「波利間タマダラの畑」、正確には「畑」の一部分)、そしてそれは、「波利間タマダラ」が<今いるトコロ>(=同じく「畑」だが異なる一部分)から<近接しているが離れたトコロ>である。

つまり、<現場指示>の用法の uma は、<話し手と聞き手それぞれの今いるトコロに近接しているが離れたトコロ>と、<聞き手が今いるトコロ>の意味を表すと言える。先に挙げた3つの用例のうち、例 1-45,1-46 は前者のタイプであり、例 1-47 は後者のタイプである。

だが、次のように、uma が kuma と混同されて用いられている用例も現れている。

- 1-50 “agai, nu:ma-nu-mai-du aNsi: munu i:=na, Neja, kuma-Nkanu uja-nu-du
[感] 馬の-も-ぞ そのように もの-Ø 言う=な [間] ここ-にの 親の-ぞ
uNsjuku be:ta-u si:ciKiNki: buriqti:-nu niNgiN-nu, kanuju:-Nke: ikiqte: du:-ga
うんと 私たち in.-を 苛めて いて-の 人間-の あの世-へ 行って 自分-が
ja:-nu, nu:ma-nu naka-kara Mmari: ki: kaNsi: niNgiN: cuka:i: fuqzjariqti:,
家-の 馬-の 中-から 生まれて 来て あのように 人間-に 使われて [めちゃくちゃに
be:ta:-Nke: kuNsi: kagi-nara:sī si:. agai, be:ta:, uma-Nkanu
~される] 私たち in.-へ このように 良い{影}-習わすの-Ø する [感] 私たち in.-は そこ-にの
maida:ra-u nasumi:-ja nar-aN, ~” [民]^{viii}
米俵-を 盗んでは ならない

「おや、馬もそのようにもの(を)言うのか。ああ、ここの親(ft.主人)が、うんと私たちを苛めていた人間が、あの世へ行って自分の家の馬の中から生まれて来て、あのように人間にこき使われ、私たちへこのように良い教えをする(ft.良いことを教えてくれている)。ああ、私たちはそこ(ft.ここ)の米俵を盗んではならない、~」

上の用例に現れている kuma と uma は、いずれも、発話主体=「私たち」が<今いるトコロ>を指し示していると捉えられる。なお、uma が、「私たち」が<今いるトコロ>に近接しているが離れたトコロ>である「米俵」のあるトコロを指し示している可能性も考えられるが、ku 系と u 系の語の混同は空間の指示代名詞に限られたものではなく(拙論 2002)、また、同様の現象は琉球方言全体に広く見られるものでもあることから、やはり、混同例の1つとして扱うべきように思う。以下にもう一例挙げておく。

- 1-51 hotokesama-nu Mme:, kunu sje:me:-u, “nu:-ti-ga qva:, uga pe:sja,
仏様の [Pl.]は この 清明-を 何-と-か あなた-は これほど 早く
uma-Nke: ki: gumata: ar-aN, nigiN-nu uga pe:sja kuma-Nke: ki:=ga”-ti
そこ-へ 来る [当然]-Øは [COP]-否 人間-の これほど 早く ここ-へ 来る=か-と
simi: wa:L-badu, [民 Joh-17-27]
責め なさるので

仏様たちは、この清明を「どうしてお前は、こんなに早く、そこ(ft.ここ)へくるべきではない人間が、こんなに早くそこ(ft.ここ)へ来るのか」と責めなさるので、

また *uma* にも、<文脈指示>や<観念指示>の用法がみとめられた。まず、以下に挙げている3例は<文脈指示>の用例であるが、*uma* は、<イキモノの身体全体のトコロ>だけでなく、<モノにとってのトコロ>や<部分>をも指し示しうることがわかる。

- 1-52 *kaL-ga panasē:, kanu:, taka, takasibama-N, -tu ī: tukuru-du makupa:ja:-ti*
 あれ-が 話-は あの [言淀] タカシ浜-に -と 言う ところ-Ø-ぞ マクパー家-と
aL-ba, uma-Nka-du iki:, sime: sīmaLtui pītu: sja:ri: ki:-ja fu:fu: buL tukuru:-du,
 あるので そこ-に-ぞ 行って 住み 住んで 人-を 連れて 来て-は 食い食い いる ところをぞ
bunaL-nu kīkiqti-du, [民 Kad-1-1~2]
 妹 or 姉-の 聞いて-ぞ

あれの話は、あの、タカシ浜に、というところ(に)マクパー家とあるので、(自分の兄が)そこに行って住んで、人を連れてきては食ったりしているところ(ft.こと)を妹が聞いて、

- 1-53 *Nna-u sjaukitui, unu gama-u-kara nuNdi: Mme, kada:-ni:-Nke: tuNditui,*
 縄-を 引いて その 洞穴-を-から 出て もう 遠く-に-へ 急いで{飛んで}行って
unu, nara-u maruki: ukī-taL Nna: uma-nu kī: marukiqti: piNgi:,
 その 自分-を 縛って おいた 縄-は そこ-の 木-Ø 縛って 逃げて
 縄を引張って、その洞穴から出てもう遠くへ行って、その、自分を縛っておいた
 (ft.縛っていた)縄はそこ(に)縛って逃げて、 [民 Kad-1-13]

- 1-54 ~”*jurasi: ucīkī-badu, cjoqto mo:, unu ni:-nu...kata-ti:-ja siziM-nu kazju:,*
 浮かして{揺らして} おくと チョット モー その 根-の 方-とは 沈む-の-の 増える
sjura: ukagaL sī-ba, {中略}”-ti:, “uma-u arawasi: mut, nu:siru”-ti: ī:-taka:, ure
 先-は 浮き上がり するので -と そこ-を 顕して 言淀 上がらせろ-と 言ったら それ-は
go:kaku, a-taL-ti: unu sju:-ga ukagi-N=ju.↑ [民 Joh-9-16~17]
 合格-Ø [COP]-過-引 その おじいさん-が おかげ-に=よ

~「(川の水に)浮かせておくと、チョットモウ、その根の方とは沈むのが増える(ft.深い)、先は浮き上がるから、{中略}と、「そこを顕して(ft.印をつけて)、献上しろ」と言うと、それは合格だったそうだ。そのおじいさんのおかげでね。

そして次の例 1-55 について、*uma* が指し示しているトコロは、現前している具体的なトコロではなく、文脈にも示されていないために、「漠然とした」トコロとして捉えられざるを得なくなっている。このような現象は共通語のソ系の指示語にも見られるものであり、正保 1981 はこのようなソを、「弛緩したソ」と名づけている²²。

- 1-55 *kunu micū: masu:gu wa:L-taka:, jakuba: uma-N aL.*
 この 道-を まっすぐ いらっしゃったら 役場-は そこ-に ある
 この道をまっすぐ行かれたら、役場はそこにある

²² 正保 1981 では、三上 1955 によって提示された場面様式の図式(p177)に重なる2つの「心理的な場」—話し手が聞き手を心理的に疎遠な存在とみなし、コトソの対立が優位になる「対立型」と、話し手が聞き手を自分の領域に引き入れて捉え、コトアの対立が優位になる「融合型」—をみとめている(p66)。「弛緩したソ」とは、「融合型」の場(面)に現れるいわば「直接指示性」の弱まったソであると考えられる。また、本稿でいうところの<話し手と聞き手それぞれの今いるトコロに近接しているが離れたトコロ>(例 1-48 など)を指し示すような場合も、「弛緩したソ」に含められるだろう。

2-2-3 第3称格 (kama)

次に、kama の意味・用法を見ていく。kama にも、まず、<現場指示>の用法がみとめられる。特に例 1-57 では、ke:(ほら)という注意を促す語が現れていることから、kama が、現前している具体的なところを指し示しているのは明らかである。そしてこれらの用例では、kama は、表現主体が<今いるところ>から<離れたところ>を指し示している。

1-56 kama: ta:-ga ja:.

あそこ-は 誰-が 家

あそこは誰の家(か)。

1-57 “aNti, ara unu, jadu: kari: wa:L-taL pīto: ida-gami-ga wa:L=ga”, “ke:,
それで [間] その 宿-を 借り なさった 人-は どこ-まで-か いらっしゃる=か [間]
kama-M:na-gami-du wa:L”-ti:, [民 Isg-3-26]

あそこ-辺り-まで-ぞ いらっしゃる-と

「それで、その宿を借りなされた人はどこまで行かれる(ft.行かれている)か」、「ほら、あそこ辺りまで行かれる(ft.行かれている)」と、

また、<文脈指示>と<観念指示>の用法も現れている。まず前者について、以下の前2つの用例で、kama は、それが現われる前に、既に、文脈に差し出されている空間名詞が指し示すところ(「遠見」、「宮古遠見と泊御獄の間」)を、それぞれ指し示している。これに対し例 1-60 では、ところを指し示す空間名詞が後に現れている。よって、この用例において kama が指し示しているところは、現前しているわけでも文脈で示されているわけでもない、発話主体の内的なコトガラに留まっており、言語的にも非常に曖昧であると言える。

1-58 ja:-kara Mme, kanu to:mi,↑ kama-ni: idi: Nna, Mme sugu mura-Nka-u

家-から もう あの 遠見 あそこ-に 出て [間] もう すぐ 村-に-を

pibikasi: Mme sju:-tu sju:=do: sju:=do:-te cunami-nu Nna: baNkī sī-badu,

響かせて もう 津波-と 津波=よ 津波=よ-テ 津波-の [間] 叫ぶ するけど

家からもう、あの遠見(ね)、あそこに出て、もう、すぐさま村(に声を/を)響かせて、もう津波と、津波よッテ、津波が(来ると)叫ぶけど、[民 Asa-2-3]

1-59 kiM sjaka-kaqvū: sī-tui, e:, ja:ma, e: me:kudo:mi-kara tumaLutaki-nu kaN,

着物-Ø 逆-被るの-を して [間] 八重山 [間] 宮古遠見-から 泊御獄-の カン

N: aida-u, basi-u, aNsi:, nigacu-nu pī:-nu, pī:-nu, pī:-nu Mma-nu ī:-ni, arawareru,

[間] アイダ-を 間-を そのように 2月-の 丙-の 丙-の 丙-の 午-の 日-に アラワレル

-L-ba, mata, aNsi:nu panasē: mukasī-kara kiki: pī:-nu Mma-nu ī:-N-ja

(現れる)から また そのような 話-は 昔-から 聞いた 丙の 午-の 日-には

kama micī-uba kaja:N munu=do:-ti:nu, imasime-mo aL-ba,-tu, [民 Toj-2-3~5]

あそこ-Ø 道-をば 通わない もの=よ-との 戒め-モ あるから-と

(ジャーという魔物は)着物(を)逆被りして、八重山、えー、宮古遠見から泊御獄のカン、んー、アイダを、間を、そのように、2月の丙の午の日に現れるから、また、そのような話は昔から聞いた。丙の午の日にはあそこ(の)道は通わないものよ(ft.通ってはいけないよ)という戒めモあるからと、

1-60 kama-Nka-Nke:-gama qva: ik-amaN=dara:na, N:, aga:bara-Nke:-

あそこ-に-へ-[指小?] あなた-は いかない=だろう [間] アガー原-へ

あそこへ(は)あなたは行かないでしょ、んー、アガー原{note.畑の名}へ。

2-2-4 a系と we系 (ama, wema/ema)、その他 (kema)

ここまで、共通語のいわゆるコソアに対応している指示代名詞の意味・用法について記述してきたが、多良間方言の指示語には、ku・u・ka系の語の他に、a系とwe系の語も現われている。これらの語の用例は先の3種と比べて非常に少ないため、その意味・内容について詳しく考察することができないが、前者については、その他の指示語に現れているa系の語の意味・用法がu系からka系にまたがるものであることから、amaに対しても同様のことが想定される。またwe系について、このタイプの指示語は、空間の指示代名詞の他、指示連体詞(wenu/enu)と指示副詞(weNsi:)にも見られる。そのいずれにおいても、共通語のコ系の語と似通ったふるまいをしていることから²³、空間の指示代名詞 wema(/ema)は、kumaと同様の意味・用法を持っていると言えそうである。なお、以下の例1-61,62,64では<モノにとってのトコロ>と<部分>(=身体部分,本の一部分)がそれぞれ指し示されており、このうち例1-62は<現場指示>、例1-64は<観念指示>の用法を示している。なお例1-63のwemaは<方向>を指し示していると思われるが、この用法については後述する。

1-61 ama-kara sju:-gama piki ki-uba si:.

そこ-から 野草-[指小]-Ø 引き 来?-をば する

そこから野草(は)引いてくる(ft.取って来る)。

1-62 C; wema, wema-kara,

ここ ここ-から

B; ure uwari:. [Sim-3-C1~B2]

それ-は 終わった

1-63 Mme kuganizjai-gama-ni:, e:, zjai-u furi: wa:L-tika:, wema-N-ja gohaN idi,

もう 黄金ゼイ?-[指小]-に [間] ゼイ-を 振り なさると ここ-に-は 御飯-Ø 出て

wema-N-ja wa:Nbusi-nu idi, wema-N-ja ocuju-nu idi, [民 Isg-3-19]

ここ-に-は 豚の煮付け-の 出て ここ-に-は お汁-の 出て

(神様が)黄金ゼイ(?)で、ゼイを振りなさんと、ここには御飯(が)出て、ここには豚の煮付けが出て、ここにはお汁が出て、

1-64 agaitaNdi:, aga, umuidi-maN-tu, umu, umu:-sjugadu, mata jana fusi Ndi:

[感] [感] 思い出さない-と [言淀] 思うけど また 嫌な 癖-Ø 出て

²³ 以下に、指示連体詞 wenu(/enu)と指示副詞 weNsi:の例を挙げておく。

cf 1. agai, pītu-nu kīN-ju ko:tika:, maki-maN-ti:, enu pītu-mai kenu pītu-mai ko:

[感] 人-の 着物-を 買ったら 負けない-と この 人-も あの 人-も 買う

jaNmai-nu aL, (『民話』「首里の人と那覇の人」より。Pp252-253)

病気-の ある

ああ、人が着物を買ったら、負けないとこの人もあの人も買う(というような)病気がある、

2. Mme ure-u si: nu:siL site, weNsi: si:ʔ [Oj-a-2-A5]

もう それ-を して 乗せる シテ このように する

もうそれ{note.お手玉を上を投げる事}をして(から)乗せる(んだね)。シテ、こうする?

ne:N. kunu, kanusja-gama-ga, kuNsinu, ema-M:na-nu qsi: japa:japa:-ti:nu

しまった この 愛人{愛しさ-[指小]}-が このような ここ-辺り-の 白く 柔々-との

kuma-u, umuidi: ne:N. [狂言]

ここ-を 思い出して しまった

何てことだ、ああ、思い出すものかと思うけど、また嫌な癖(が)出てしまった。

このカヌシャガマの、このような、ここ辺りの白くて柔々との(ft.柔らかい)ここを、思い出してしまった。

また、空間の指示代名詞には、kema という語も現われている。やはりその用例は少ないのだが、以下の2例ではその他の系統の語と共に現れて、それらが指し示すトコロとは対照的なトコロが指し示されているようである。まず例 1-65 について、その発話に「指をさす」という身振りが伴っていたことから、表現主体が<今いるトコロ>の、emaNke:は「右方」を、kemaNke:は「左方」をそれぞれ指し示されていることが明らかである。よってこの場合の ema と kema は、共に、<方向>を表す共通語のコチラなどに対応するような空間的意味を実現していると捉えられる。次に例 1-66 について、uma-nu(そこの)、kama-nu(あそこの)に対して kema-nu が現れていることから、この kema は共通語のコ系の指示代名詞に対応しているように思われる。そしてこの用例では、これらの語を、共通語の「コチラ、ソチラ、アチラ」という語によって訳することも可能であろう²⁴。

1-65 agai, ma:Nti, ema-Nke: iki-baM, mata kema-Nke: iki-baM, ti:daL munu

[感] 本当に こちらへ 行っても また あちら?-へ 行っても 怠ける 者

mata miduM-buri munu-ti-du, M:na-N izai: buL. [狂言]

また 女-呆れ もの-と-ぞ 皆-に 言われている

ああ、本当に、こっちへ行っても、またあっち(?)へ行っても、怠け者(だ)、また女呆れもの(ft.女好きだ)と、皆に言われている。

1-66 upumi:kuNgeN,-ti:nu, kasiku pītu-nu-du, uma-nu ki-nu sīta-Nke:-mai, kama-nu

ウプミークンゲン-との 賢い 人-の-ぞ そこ/そちら-の 木-の 下-へ-も あそこ/

ki:-nu sīta-Nke:-mai, kema-nu ki:-nu sīta-Nke:-mai, “haihai, qvata:

あちら-の 木-の 下-へ-も ここ/こちらの 木-の 下-へ-も [感] あなたたちは

asibi: buL=na, ba:re-nu Mme”-ti:, [民]^{ix}

遊んで いる=ね お利口-の [Pl.]-と

ウプミークンゲンという賢い人が、[そこ/そっち]の木の下へも、[あそこ/あっち]の木の下へも、[ここ/こっち]の木の下へも、「おやおや君たちは(そんなところで)遊んでいる(んだ)ね。お利口さんたち(だ)」と(声を掛けて)、

多良間方言では、共通語のコチラ、ソチラ、アチラなどの<方向>を指し示す指示代名詞と形態的に対応する語は現れない。だが上の用例から、多良間方言では、例えば uma という1つの指示代名詞が、<場所>と<方向>のいずれのトコロをも指し示すことができる、と言ってよさそうである。次の用例でも、uma, kama が指し示しているトコロに関わる「塩川」

²⁴ 実際、『民話』でこの文は、「ウプミークンゲンという、利口な人が、そこらの木の下にも、あちらの木の下にも、またこちらの木の下にも~」のように共通語訳されている(p69)。

と「仲筋」という名詞が、kata(方)という<方向>の相対名詞と共に現れており、これらの指示代名詞が指し示しているところは、やはり、<方向>であると捉えられる。

- 1-67 sjuga:-nu kata-N-ja paLmauputunu, mata nakasuzi:-nu kata-N-ja MtabaLtujumi-ti:
 塩川-の 方-には 波利間大殿 また 仲筋-の 方-には 土原豊見親-と
 futa:L-ga, uNna-ga buNbuN, {中略} taramamura-nu uma kama-u usjami:, usjami:-taL
 2人-が 各自-が 勝手々々? 多良間村-の そちら あちら-を 治めて 治めていた
 -ga jau. [Tok-2~3]
 -が 様

塩川の方には波利間大殿、また仲筋の方には土原豊見親という2人がそれぞれ、多良間村のそちら(と)あちらを治めていたらしい。

そして kema について、上の例 1-66 からだけではこの語が<場所>を指し示す用法を持っているのかどうかは明らかでないため、現段階においては、<方向>の指示代名詞として扱っておく。また、対応する称格についても、例 1-65 のように we 系の語と対比的に用いられる場合は共通語のア系の語に対応しているように思われるのだが²⁵、例 1-66 では、コ系の語に対応する意味を実現しているように見えるなど、一定ではない。用例をさらに集めて、検討していく必要があるだろう。

2-2-5 疑問=不定称 (ida / Nda)

最後に、不定あるいは未定のところを示す ida について見ていく。ida はまず、尋ねる文や疑いの文において、多くは表現主体にとって不明であるところを、不明なままに差し出すのに用いられる。

- 1-68 ida-Nka buL=ga. ida-N-ga, we:, ××ja:-Nka,⁷ kuma-Nka.⁷ [Oj-d-7-B2]
 どこ-に いる=か どこ-にか [間] [屋号]家-に ここ-に
 (その子は)どこにいるか。どこに、えー、[屋号]家に?(それとも)ここに? {note.
 滞在先を訪ねている}
- 1-69 “ida-N-ga ka:cjaN-ga tubikiM-ja ari:L-ba”-ti Mme, sukasi-gama-u si:,
 どこ-にか 母チャン-が 飛び着物-は あるから(継続相)-と もう なだめるの-[指小]-を して
 「どこに母チャンの飛び着物はあるから(ft.あるか)」ともう、なだめすかして、
 [民 Joh-5-22]
- 1-70 kare: Nda-Nke: [??] puka-Nke iki naM-nu uci, ucigiwa-Nka uci:ki=pazi. kanu.
 あれ-は どこ-へ 外-へ 行って 波-の 内 内側-に 置く=はず あの
 あれ{note.消波ブロックを指す}はどこへ[??]、外(海)へ行って(ft.出て)波の内、
 内側に置くんだらう。あの。 [Oj-b-11-C13]
- 1-71 haru-ga-du, kuruma-kara sja:ri: ika:zi:, we:, Nda sja:ri:L=dara:na:.
 ハル-が-ぞ 車-から 連れて 行く-[推] [間] どこ-Ø 連れてくる=だらう
 ハルが車から(ft.車で)連れて行く(ft.行っている)よね、どこ(に)連れてくるのかな。
 [Kij-a-1-A2]

²⁵ 指示連体詞にも、we 系の語と対比的に用いられ、共通語のソ系あるいはア系に対応する意味を表しているように見える用例が現れている。本章注 23 の cf.1 を参照。

これらの用例で *ida* は、<疑問>を表す接辞-*ga* と共起するなど、いわゆる疑問代名詞として働いていることがわかる。またこの用法に関わって、否定文において、従属節の動詞の表す動き²⁶に関わるトコロが、表現主体にとって不明であることを表す用法も挙げられる。

1-72 *muqtu munu: ucikiqtimai Nda-N-du uciki-ka: qs-aN*. [Oj-d-26-B5]

全く もの-を 置いても どこ-に-ぞ 置く-か-は 知らない

全然、ものを置いてもどこに置くか(ft.置いたか)わからない。

また、具体的なトコロではなく、複数の、不特定のトコロを差し出す用法がある。このとき *ida* は、係助辞-*mai* によってとりたてられていることが多い。

1-73 *ju:bai-tewa Nda-mai aL-du si=dara:.* [民 Asa-1-2]

妾{夜這い}-テワ どこ-も ある-ぞ する=だろう

妾テワ(ft.というのは)どこにでもあるでしょ？

1-74 *aga:i Nda-mai ani:-ti.*

[感] どこ-も そのように-と

あら、どこでもそのような(もの)って。

また、「語り」のテキストにおいて、具体的なトコロを差し出すことを避け、*ida* によってその代わりを果たさせている場合がある。この場合、*ida* によって示されるトコロというのは、ただ語り手によって指定されていないに過ぎず、よって、具体的なトコロを指し示す空間名詞に置き換えても、その文の意味が変わることはない。

1-75 *’ara, Nda-game:, usi-mai sjo:ki:L-ba Nda-game:, aLki: kiq-ti-du sju:-zi:’-ti:.*

[感] どこ-まで-は 牛-も 連れているから どこ-まで-は 歩いて 来て-ぞ しよう-と

「じゃあどこどこまでは、牛も連れているから、どこどこまでは歩いて行って、(そこで勝負を)しよう」と、[民 Toj-1-13]

1-76 *“ida-gami-du iki:, unu kju:keiba-N, qvata: buri=jo: uma-game ba: we:*

どこ-まで-ぞ 行って その 休憩場-に あなたたち-は いろ=よ そこ-まで-は 私-Ø? [間]

kuma-kara nuNdiqti:, muguri-u si:, qvata-ga siita-game kiqti:, nu:ri: kuqzi:’-ti:.

ここ-から 出て 潜り-を して あなたたち-が 下-まで-は 来て 上って 来るから-と

reNraku: siti, nuNdi-taL-ti: kunu, idaqsi:-ja=ju.↑ [民 Joh-8-4]

連絡-を して 出た-と この [年上の総称]-は=よ

「どこどこまで行って、その休憩場に、あなたたちはいなさいね。私(は)そこまでは、ここから出て潜って{note.潜水漁をして}、あなたたちの下まで来て、上がってくるから」と、連絡をして、出た(ft.出かけた)そうだと。この、兄さんはね。

2-3. 空間の指示代名詞の体系

以上、多良間方言の空間の指示代名詞の意味・用法について記述を試みてきた。まず、その用法には大きく<現場指示>、<文脈指示>、<観念指示>が見られ、空間名詞と同じく、<イキモノの身体全体のところ>や<モノにとってのトコロ>、また<部分>を指し示しうるこ

²⁶ ここでいう「動き」には、主に動詞によって表される具体的な動作や変化、また状態をも含めている。

とを明らかにした。また *uma* について、*kuma* と混同されて用いられている用例が現れていたが、その混同が、<現場指示>の用法での、話し手と聞き手の心理的対立のない「融合型」の場面(本章注 22 を見よ)において現れていることは、大変興味深いところである(例 1-50 及び例 1-51)²⁷。「融合型」は、共通語ではコとアの対立が優位になる場面とされていることから、多良間方言では、それぞれの語に対応する *ku* 系と *ka* 系の語の対立が、同じように優位になると想定できる。用例も考察も不十分なためあくまでも仮定でしかないが、つまり、少なくとも *kuma* と *kama* の対立が前面にでる場面においては、*uma* と *kuma* の対立が失われ、「*ku* 系,*u* 系」対「*ka* 系」の 2 項対立化するということが考えられる。

以上の記述・考察の結果を踏まえて、指示代名詞の体系を以下の表 13 に示す。

	第 1 称格(ku-)	第 2 称格(u-)	第 3 称格(ka-)	疑問=不定称
場所/方向	kuma	uma	kama	ida/Nda
	wema/ema			
場所(/方向?)	ama			
方向	(kema)			

表 13 多良間方言空間の指示代名詞の体系表

表について、破線部は *ku* 系と *u* 系の対立が失われ、使用に混同が見られる場合があることを表している。また *ama* は、*a* 系の意味・用法が *ka* 系にまで及んでいることから別段に配置し、超称格的に扱っている。*kema* の位置づけも先述した理由により便宜的なものとなる。

第 3 節 「空間格」

本節では、動作や状態の関わるところ、すなわち「空間的な意味」(まつもと 1998:83)をあらわす用法を持つ格形式について記述・考察を試みていく。

3-1. 多良間方言の「空間格」

序論 3 で、多良間方言の格形式の内部構造及び下位体系を表に示したが、これらのうち、*ni* 格と *Nka* 格、また *Nke* 格、*kara* 格、*gami* 格は、空間名詞をその語幹として、空間的な意味を実現することができる。以下、それぞれの形式が実現する文法的な意味のうち、空間的な意味を実現する用法について記述していく。

3-1-1 *ni* 格²⁸

多良間方言の *ni* 格は、共通語の二格(与格的)からデ格(所格的)にまたがる意味・用法を示し、次の用法において、空間的な意味を実現する。

²⁷ 例 1-50 では話し手と聞き手が *be:ta*(私たち)という第 1 人称で捉えられているため、それが「融合型」の場面であることはわかりやすいだろう。例 1-51 でも、「仏様たち」と「清明」は同じ場所(=「仏の島」)にいたのであり、そして、その同じ「場所」を指し示すのに、*uma* と *kuma* の両方が現れているのである。

²⁸ なお *ni* 格形式では[i]が脱落して撥音化する現象が見られる。規則的とまでは言えないが、後接する名詞の末尾音が[i]の時に撥音化することが多い。

- a. <ゆきさき>や<動作がおこなわれるところ>など、組みあわさる動詞が表す動作に関わるところを表す。

1-77 ~sju:-ja, jama-N, {中略} tamunu su-ga wa:riqti:, [Oj-c-1-A1~A2]

お爺さん{主}-は 山-に 薪-Ø し-に いらっしゃって

お爺さんは、山に、{中略} 薪(を)しに(ft.薪取りに)行かれて、

1-78 kanagai aNsi:-du bo:cjo:riN-ti: kadi fuku-nu kakī-ti: ki:-u maNma-N uiqsi:

昔 そのように-ぞ 防チョウ林?-と 風-Ø 吹く-の- 垣-と 木-を マンマ-に 植えさせ

wa:L-taL.

なさった

昔そのように、防チョウ林と、風が吹く-の-の垣と(note.風が集落に吹き込むのを防ぐための垣として)、木をマンマ²⁹に植えさせなさった。

- b. 存在を表す動詞などと組みあわさって、ヒトやモノの<アリカ>を表す。また、<状態の成り立つところ>を表す用法も見られる。

1-79 MtabaLtujuume: miNna-nu, {中略}, miNna-N buda-ga buL-ba, [Tok-7]

土原豊見親-は 水納-の 水納-に おじ-が いるので

土原豊見親は水納の、水納におじがいるので、

1-80 aNti:du, unu miduM-nu paka-nu tunaL-N ka:sija:-nu a-taL-ti:. [民 Joh-14-2]

それで その 女-の 墓-の 隣-に 菓子屋-の あった-と

それで、その女の墓の隣に(は)菓子屋があったそうだ。

1-81 sentā:-N, kaNgofu: si:-takara.

センター-に 看護婦-を していたから

(その子は)センターに(ft.で)、看護婦をしていたから。

但し、ni 格の意味の中心は、<動作の間接的な対象>を表わす用法にある³⁰。

1-82 haruaNga:, haruaNga-N, mi:cu ju:cu-ga uqtu=sja:~ [Oj-d-27- B14]

ハル姉-は ハル姉-に 3つ 4つ-か 年下=さ

ハル姉さんは、(私は)ハル姉さんに、3つ4つか年下でしょ。

3-1-2 Nka 格

動作や状態の関わることを表わす格形式には、先に見た ni 格のほかに、Nka 格がある。この Nka 格の意味・用法は ni 格よりも狭く、もっぱら、空間的な意味を実現する。

- a. <動作がおこなわれるところ>や<ゆきさき>など、動作に関わるところを表す。また<方向>を表している用例も見られた。

1-83 ja:-Nka-de:N si:L, jaM-ba puka-Nke: ik-aN.

家-に-だけ している 痛むから 墓-へ 行かない

(十六日 {note.行事名} は)家[に/で]だけしている、(脚が)痛むから墓へ行かない。

²⁹ 本章注 13 参照。

³⁰ この他、ni 格には、<動作や状態が成り立つ状況>や<認識の内容>、<動作の手段・方法>を表す用法が見られるが、その具体的な内容については拙論 2003b を参照されたい。

- 1-84 uma-Nka wa:ri: panasĩ-gama-uba sjuda:, Mme: Mme ba-ga ja:-Nke.
 そこに いらっしゃって 話-[指小]-をば したら もう もう 私の 家へ
 そこにいらっしゃって話をして、もう。もう私の家へ(帰るよ)。[Oj-d-26-B2]

- 1-85 kuNsi: jariqti:-du weNsi: nu:si:L=dara:na. ui-Nka nagiqte weNsi:.
 このように 投げて-ぞ このように 乗せている=だろう 上-に 投げて このように
 (玉を)こう投げて、こう{note.手の甲に}乗せているよね。上に投げて、こう。
 [Oj-a-2-B4]

b. ヒトやモノの<アリカ>や、<状態の成り立つトコロ>を表す。

- 1-86 kunu bunaqra:, jarabi-gama-u uNbu-ba sĩtui, iki:, si:du utuqra:L uma-Nka
 この 姉 or 妹-は 童-[指小]-を オンブ-(を)ば して 行つて すると 恐ろしい そこ-に
burai-maN-ti:, isjugi: mudura-daka:-tu sĩ: ba:-N-du, [民 Kad-1-6]
 いられない-と 急いで 戻らなければ-と する 場合-に-ぞ
 この妹は、童をオンブして行つて、すると、恐ろしい、そこに(は)いられないと、
 急いで戻らなければとする時に、
- 1-87 kaL-ga mi:-Nka-mai uirari:-du buL. Nna, sĩNna uicukiqte-nu aida-Nka Nna:.
 あれ-の 穴-に-も 植えられて-ぞ いる [間] ネギ-Ø 植え付けて-の あいだ-に [間]
 あれの中にも植えられている。葱(を)植え付けての間に{note.葱を植えたその間に}。[Oj-b-5-B9]

また-Nka は、連体格-nu を始め、<方向>を表す-Nke:など、その他の格助辞と共に複合助辞的に用いられることが多い。このとき、くみあわさるその他の語(名詞,動詞)との結びつきの仕方は、-Nka ではなく、後接するその他の格要素が優先される。

- 1-88 uLu: uma-Nkanu zĩnaN.
 それ-は そこ-にの 次男
 その人はそこ[に]の次男(だよ)。
- 1-89 e:, pa:ma-Nka-Nke: iki: sjari iki asĩbasĩ=sa:mi:, si:. [Kij-b-7-B2]
 [間] 浜-に-へ 行つて 連れて 行つて 遊ばす=さ そう
 えー、浜へ行つて、連れて行つて遊ばせるさ。そうよ。
- 1-90 “aNsi: ataka:”, {中略} “ara kunu zju:ba urusi:, kunu zju:-si:, ana-Nka-u
 そのように だったら [感] この 尾-をば 下ろして この 尾-で 穴-に-を
sjadami: mi:=na:”-ti, Mme futa:L kataLru-gadu, [民 Joh-3-24~25]
 試す{定めて} みよう=ね-と もう 2人 相談するけど{語るけど}
 「そうだったら、」{中略}「じゃあ、この尾を下ろして、この尾で、穴を試して(ft. 探つて)みよう」と2人{note.狼と尾長猿}相談するけど、

だが、以下の用例のように、どちらの格要素が優位となっているのかが曖昧な場合もある。特に、後の例 1-92 では、Nka 格と ni 格のいずれにも<アリカ>を表す用法が見られるため、さらに曖昧である。

- 1-91 ja:-kara Mme, kanu to:mi,[↑] kama-ni: idi: Nna, Mme sugu mura-Nka-u
 家-から もう あの 遠見 あそこ-に 出て [間] もう すぐ 村-に-を
pibikasi: Mme sju:-tu sju:=do: sju:=do:-te cunami-nu Nna: baNkĩ sī-badu,
 響かせて もう 津波-と 津波=よ 津波=よ-テ 津波-の [間] 叫ぶ するけど
 家からもう、あの遠見(ね)、あそこに出て、もう、すぐさま村[に(声を)/を]響かせて、
 もう津波と、津波よッテ、津波が(来ると)叫ぶけど、[民 Asa-2-3]
- 1-92 e:, maebara-Nka-ni buL, taro:-ga-du ki:L-ti:, taro:. [Oj-a-10-B1]
 [感] (門)の前の家-に-に いる 太郎-が-ぞ 来ている-と 太郎
 向かいの家にいるよ。太郎が来ているって、太郎。

3-1-3 Nke:格

多良間方言の Nke:格は、共通語のへ格に対応し、移動を表す動詞とくみあわさって、<ゆきさき>や<方向>を表す。

- 1-93 qva, seNta:, seNta:-Nke: aLki ikĩ,[↑] [Oj-d-19-A1]
 あなた-Ø センター センター-へ 歩いて 行く
 あなた(は)、センター、センターへ歩いて行く？
- 1-94 sībadu miNnauki-Nke: kugĩ-ba si:, wa:L-badu, Mme nara-ga fune: aka-nu-du
 すると 水納沖-へ 漕ぎ-(を)ば し なさると もう 自分-が 舟-は 海水-の-ぞ
 ĩzi: kī: si: Mme we: kure: Mme miNna-nu cikafu-N:na-du ari ukĩ-ga jau.
 入って 来る して もう [間] これ-は もう 水納-の 近く-辺り-Ø-ぞ [COP] おく-が 様
 すると水納沖へ(舟を)漕ぎなさると、もう自分の舟(に)は海水が入って来る。もう、
 これは、水納の近く辺り(のこと)であつたらしいよ。[民 Kad-1-29]

また、<動作の間接的な対象>を表わす、非空間的な用法も見られる。

- 1-95 ~futa:L-nu jerai pĩtu-mai sono:, nabi-Nke: usĩkumiL-tu do:ziN, [民 Sims-4-8]
 2人-の 偉い 人-も ソノ 鍋-へ 押し込めるの-と 同時に

3-1-4 kara 格

多良間方言の kara 格は、共通語のカラ格に対応し、次のような意味・用法を示す。

- a. 移動を表す動詞とくみあわさって、動作の<起点>となるところや<通りぬけるところ>を表す。

- 1-96 sju:-ga, N:, paL-kara wa:L-ba, futa:L-ni:, baki-taka:-du, mumutaro:-nu
 お爺さん[主]-が [間] 畑-から いらっしゃるので 2人-に 分けると-ぞ 桃太郎-の
 Mmari-taL-ti: nuNdi kī-taL-ti,nu panasü:du jarabisja:L ke: sī:sī: sī-taL.
 生まれた-と 出て 来た-との 話-を-ぞ 子供の(adj.) 頃 いいしい した
 お爺さんが畑からいらっしゃる(ft.いらっしゃった)ので、2人で分けると(ft.割ると)、
 桃太郎が生まれたと、出てきたという話を、子供の頃したりした。[Oj-c-1-A4]
- 1-97 ~uNkita-ga, sisike: buL-ke:-du, sisike: buL-ke:-du, mura-kara nika-gama-nu,
 これたち-が 争って いる-うちに-ぞ 争って いる-うちに-ぞ 村-から 猫-[指小]-の

ki-ba, [民 Toj-1-24]

来るので

これ達が争っているうちに、争っているうちに、村から小猫が来る(ft.来た)ので、

1-98 tauka: junagata-nu mici-kara aLki-taka: utuqra:L.

1人 夜-の 道-から 歩いたら 怖い

1人(で)夜の道から(ft.を)歩いたら怖い{note.夜道の1人歩きは危ないということ}。

b. <状態の成り立つところ>や<動作がおこなわれるところ>を表わす。但し、この用法では -Nka が前接して現れている場合がほとんどである。なお、いずれの用例でも、動作の<起点>となるところが表されているようでもある。

1-99 N, patake:-no, paL-Nkanu, Mta-Nka-kara uNsi muiL. [Oj-a-13-A3]

[間] 畑-ノ 畑-にの 土-に-から そのように 生える

ん、畑ノ、畑の、土にからそのように生える。

1-100 o:kami-mai sje: sja:ru: kacimitui, uti-Nkasja-maN-ti: piki:. Naka-Nka-kara:

狼-も 急いで 猿-を 捕まえて 落ち-こまさない-と 引いた 中-に-から-は

sja:ru-nu zju:-si:, tuNdi: ku:-ti su-ba si:du [民 Joh-3-注 12]

猿-の 尾-で 飛び出て こよう-と するから すると

狼も急いで猿を捕まえて、内に行かさないと引いた。中からは(泥棒が)猿の尾で、飛び出てこようとするから{note.尾を引っ張っているということ}、すると、

この他、<動作の間接的な対象>や<手段・方法>を表す、非空間的な用法が挙げられる。前者のうち、特に<あいて>を表わす用法について、例えば、以下の例 1-101 は、「おばあさんに習う」というように、共通語では二格を用いて表現することもできる。だが多良間方言では、この用例を ni 格を用いると不自然になる。それは、両者が同じく「動作の間接的な対象」を表わしつつも、その「対象」が<到達点>か<起点>かによって、厳密に使い分けられていることによる³¹。

1-101 oba:-kara nu:-ju-ka naru: buqsa:L-ti:.

おば-から 何-を-か 習う ~したい-と

おばあさんから何か習いたいって

1-102 haru-ga-du, kuruma-kara sja:ri: ika-zī, we:, Nda sja:ri:L=dara:na:. [Kij-a-1-A2]

ハル-が-ぞ 車-から 連れて 行く-[推] [間] どこ-Ø 連れている=だろう

ハルが車から(ft.で)連れて行く(ft.行っている)よね、どこ(に)連れているのかな。

³¹ 両形式の使い分けは次の二例に顕著である。

cf 1. terebi-kara-mai kiki-taL. テレビからも(その歌を)聴いた。

テレビ-から-も 聴いた

2. terebi-N Ndi:tari: ubui-taL. テレビに(その歌の歌詞が)出ていたから覚えた。

テレビ-に 出ていたから 覚えた

前の例文では、歌がテレビから流れていてそれを聴いた、ということが表されている。これが ni 格になると、後者のように、「その歌の歌詞」がテレビの画面に文字で示されていたことになり、その実現する意味が異なってしまう。

3-1-5 gami 格³²

共通語のマデ格のほかマデニ格に対応し、動作や状態の及ぶ範囲や動作・状態達成までの、限定された範囲を表わす。

- 1-103 sa:, usi-gama, sa: ba-ga maqvul, ja:-gami niNgakiN pari:_____qfiru
 [感] 牛-[指小] [感] 私-が 守り神 家-まで 一生懸命{念掛けに?} 走って くれる
 さあ牛よ、さあ私の守り神よ、家まで一生懸命走ってくれ [民 Toj-1-注 16]
- 1-104 kumaL naka-gami kumarai-du si. [Oj-b-11-C14]
 入る 中-まで 入れ-ぞ する
 (車もそこに)入る、中までもう入れる。

この他、時間的範囲や数量的範囲などを表す、非空間的な用法も見られる。

- 1-105 beta: ata, jozi-game.³³ uwar-aN=ge:rai.
 私たち in.-は 明日 4時-まで(に)-は 終わらない=だろう
 私達は明日、4時まで(に)は終わらないんじゃない?
- 1-106 e: nanazju:saN-game ara-N=sja:ʔ [Oj-d-25-B5]
 [感] 73-までは COP-否=さ
 えー。73 までは違うよね(ft.73 歳にはまだなっていないよね)。

3-2. 「空間格」の内部構造

以上の記述を踏まえ、それぞれの格形式が実現する空間的な意味の違いを検討する。

3-2-1 動作や状態に関わるトコロを表わす ni 格と Nka 格

多良間方言の ni 格と Nka 格は共に、動作や状態に関わるトコロを表す用法を示している。以下、それぞれの空間的な用法を整理し、その使い分けについて考察を試みていく。

1) ni 格

空間的な意味を表わす ni 格について、その文法的意味は大きく、<ゆきさき>、<動作や状態が成り立つトコロ>、<アリカ>の3つにまとめられる。但し、iki(行く)など移動を表す動詞と組みあわさって<ゆきさき>を表すのに用いられる主な形式は Nke:格であり、ni 格が現れるのはまれである(3-2-2 参照)。また、動作や存在に関わるトコロ、つまり<状態や動作が成り立つトコロ>や<アリカ>の意味は、原則的に、空間名詞によって表される。そして、その名詞(語幹)が空間名詞でないときは、以下の用例のように、トコロ化の手続きがとられる。なお、このトコロ化は、kara 格を除くその他の空間格が用いられている場合にも見られる現象である。

- 1-107 naNzju: si: sjuga:-nu agaL-nu kata-N kurusjai-taL, -taL-ti:. [Tok-24]
 難儀-を して 塩川-の 東-の 方-に 殺された -た-と
 難儀をして(ft.やっとのこと)で塩川の東の方で殺された、たそうだ。

³² gami にも共通語のマデと同様、格関係を表わすものにとりたてをあらわすものがある。両者は同音形式である。

³³ jozi-game: < jozi-gami-ja

1-108 mi:-taka:-du, upuginu horaana aL-ba, iki: uL-ga s(i)uba-N tati:qti:

見たら-ぞ 大きな ホラ穴-Ø あるので 行って それ-が そば-に 立って

見ると、大きなホラ穴(が)あるので、行ってそのそばに立って、 [民 Joh-3-16]

2) Nka 格

主に、ヒトやモノの<アリカ>、<動作や状態がなりたつところ>を表わす。よってその名詞(語幹)は空間名詞が主となる。だが、o:da(もっこ)、nabi(鍋)など、特に<イレモノ>としての空間性がみとめられるモノ名詞は、iziL(入れる)などモノの「移動」を伴う動詞や、そのようなモノの「移動」を前提とする動作を表す動詞と組みあわせる場合、Nka 格形式をとることができ、それが原則的ですからある。なお、後の用例では、ni 格形式をとると<手段・方法>³⁴の意味を表すようになる。

1-109 ~aM-tu ĭzi-to:, Mme o:da-Nka ĭzi:, kare:siqti:, no:ra-ti su-badu, no:ri

網-と 魚-と-を もう もっこ-に 入れて 結えて 上ろう-と すると 上がって

ja:-Nke:-ti sī-badu, [民 Toj-1-9]

家-へ-と すると

網と魚とを、もっこうに入れて、(もっこうを)結んで(牛の背に載せて)、(浜から)上ろうとして、上って家へ(帰ろう)とすると、

1-110 “ara Mme, upuginu nabi,-Nka mizū: fukasi: wa:ri”-ti: qsai-tika:-du,

[間] もう 大きな 鍋-に 水-を 沸かし なされ-と 申しあげたら-ぞ

「ではもう大きな鍋に水を沸かして下さい」と申しあげると、 [民 Isg-3-17]

また、Nka 格にも<ゆきさき>を表す用例が見られるのだが、このとき、その<ゆくさき>として差し出されている空間名詞が指し示すところが、「移動」の後に、その移動主体が「とどまる」ところともなっている点で、ni 格や後にみる Nke 格が表す<ゆきさき>の意味とは異なっている。これは、3-1-2 で挙げた例 1-84 についても同様である。また、以下の例 1-112 も、「病気」などをただ「遣られること」ではなく、村に「遣られて」、それが「そこにとどまる」ことを忌避したがつているのである。

1-111 kaL-ga panasē:, kanu:, taka, takasibama-N, -tu ĭ: tukuru-du makupa:ja:-ti

あれ-が 話-は あの [言淀] タカシ浜-に -と 言う ところ-Ø-ぞ マクパー家-と

aL-ba, uma-Nka-du iki:, sīme: sīmaLtui pītu: sja:ri: ki:-ja fu:fu: buL tukuru:-du,

あるので そこ-に-ぞ 行って 住み 住んで 人-を 連れて 来て-は 食い食い いる ところをぞ

bunaL-nu kīkiqti-du, [民 Kad-1-1~2]

妹 or 姉-の 聞いて-ぞ

あれの話は、あの、タカシ浜に、というところ(に)マクパー家とあるので、(自分の兄が)そこに行って住んで、人を連れてきては食ったりしているところ(ft. こと)を妹が聞いて、

1-112 puka-kara, nu bjo:ki, mata nabasinu jana munu-nu, uL-ba kunu, po:gu-ti-ja

外-から 何 病気 また どのような 嫌な もの-の それ-(をば) この 抱護-と-は

³⁴ 非空間的な意味の1つである<手段>について、si:格がその用法の中核を占めていることから、この場合のni格はいわば二次的な形式と言える。

arudesjo:, kunu ucī, jama-Nka, Nna, sī, mura-Nka jarasi: wa:L-na-tinu mata,
 アルデショウ この 内 山-に [間][言淀?] 村-に やらし なさる-な-との また
 pidami munu-ti:, munu pidami munu-ti: uNsi: nasi:-du, [民 Asa-1-53~54]
 隔てる もの-と もの 隔てる もの-と そのように なして-ぞ

外からどんな病気、またどんな嫌なものが、それはこの、抱護(林)とはアルデシ
 ョウ、この内(に)、山に(から)、村にやらしなさるなど、隔てるものと、そのよう
 になして、{note.村に嫌なものが入れなくするために抱護を設けた、ということ}

また、-Nka 単独ではなく -Nke:が伴われて<ゆくさき>の意味が実現されている用例として
 先に挙げた例 1-89 でも、その名詞語幹が指し示しているトコロは、広い意味で、「移動主
 体が「とどまる」トコロ」と捉えられるだろう。

このように、複合的な格助辞の要素となる場合も含め、Nka 格が実現する空間的な意味
 は静的であり、また、その形式をとる名詞によって指し示されるトコロが、「周囲との間
 に明確な境界を持つ「一定範囲の空間」(岡田 2003:107)であることから³⁵、Nka 格には<内部
 性>とでも言うような文法的意味特徴があることが想定される。

3-2-2 <到達点>を表わす ni 格と Nke:格

ni 格と Nke:格は、共に、主体・客体の<到達点>を表わす用法を示している。<到達点>と
 は広い意味での「移動先」であり、空間的な用法に限って言えば、それは<ゆくさき>や、モ
 ノの移動先としての<イレモノ>の意味となる。

まず前出のこの用例、

- 1-113 ~ sju:-ja, jama-N, {中略} tamunu su-ga wa:riqti:, [Oj-c-1-A1~A2]
 お爺さん{主}-は 山-に 薪-Ø し-に いらっしゃって
 お爺さんは、山に、{中略} 薪(を)しに(ft.薪取りに)行かれて、(=例 1-77)

だが、ni 格が主体の<移動の到達点>を表している用例は非常にまれであり、今のところほ
 とんど現れていない。この用例の場合も、「山で薪をとる」というように、主体の動作が成
 り立つ場所を表わしているようにも思われる。

そして Nke:格について、次の2例、

- 1-114 umagoja-Nke: pari: iki:, unu amadaL-kara Mme pari: iki:, [民 Joh-3-8]
 馬小屋へ 走って 行って その 軒{雨垂れ}-から もう 走って 行って
 馬小屋へ走って(ft.急いで)行って、その軒からもう急いで行って、
 1-115 rju:-Nke:-mai nara-ga nare: kitaLru: panasi-badu [民]^x
 龍へ-も 自分-が 習って きたの-を 話すと
 龍へも自分が習ってきたの(ft.聞いてきたこと)を話すと

³⁵ この「一定範囲の空間」という表現は、岡田 2003 で動詞「入れる」の意味記述に用いられており、宮島
 達夫 1972 の「でる」語彙的意味の規定、「「でる」のもっとも基本的な意味は、物体が他の物体から、また
 は一定範囲の空間から、外に移動することである」(p563)からの借用であることが明記されている。本研
 究でも、この宮島 1972 の用語を借用する。

例 1-114 のような<ゆきさき>や、客体の空間的な「移動」に関わる<イレモノ>などを表す用法、つまり、ヒトやモノが向かう<トコロ>や<方向>を表わすことが、Nke:格の用法の中心である。また例 1-115 のように、<あいて>という非空間的な意味をも実現する事ができるが、それも<動作の向けられる対象>を表す用法に限られていることから、Nke:格の文法的意味特徴として、<方向性>が取り出される。

3-3. <経由するトコロ>を表す ju(ba)格と kara 格

3-1 では触れなかったが、共に<通りぬけるトコロ>や<移りうごくトコロ>を表わす用法を持つ、ju(ba)格と kara 格についても見ておく³⁶。これらは、この空間的な意味を表している場合、それぞれを置き換えることができる。

1-116 kunu micü: masu:gu wa:L-taka:, jakuba: uma-N aL.

この 道-を まっすぐ いらっしゃったら 役場-は そこ-に ある

この道をまっすぐ行かれたら、役場はそこにある

1-117 unu pītu:, micü-nu isi-N marukaitui, uma-kara tubī pītu-nu Mme-N, jaL-si:

その 人-は 道-の 石-に 縛られて そこ-から 行く{飛ぶ} 人-の [Pl.]に 槍-で

cīkasī, cīkasū: si: kurušī-taL-ti:. [民 Joh-19-注 3]

突かす 突かすの-を して 殺した-と

その人は、道の石に縛られて、(そして大將はその人を)そこから行く人たち{note. そこを通る人たち}に、槍で突かせる、突かさせて殺したそうだ。

1-118 “baN-ja, kuma-nu micü: tu:ri:L-ba, ~” [民 Joh-7-17]

私-は ここ-の 道-を 通っていると

「私は(ft.が)、ここの道を通っていると、~」

1-119 tauka: junagata-nu micü-kara aLkī-taka: utuqra:L.

1 人 夜-の 道-から 歩いたら 怖い

1 人(で)夜の道から(ft.を)歩いたら怖い。(=例 1-98)

上の用例での ju 格と kara 格は、一見まったく同じ役割を文中で果たしているように思われる。だが kara 格には、-Nka の助けによるものの、<動作や状態が成り立つトコロ>を表す用法が見られ(3-1-4 の b)、以下の用例でそれは、<手段>的、すなわち、ある動作を成り立たせるのにその「場所」を使う、というニュアンスを伴っているようである。

1-120 unu kiqka, seNso: kacī-taL kiqka, o:ki: sju, umacū: idasi: bi:tui, unu

その 結果 戦争-Ø 勝った 結果 大キイ [言淀] 松明-を 出して 座って その

kifusī-nu naka-Nka-kara mi:-Nka-kara, kati: wa:L-taL-ti=sa:-nu panasī.

煙-の 中-に-から 中-に-から 勝ち なさった-と=さ-の 話

その結果、戦争(に)勝った結果{note.「経緯」などの誤りか}、大きな松明を出して(ft. 焚いて)座って、その煙の中[に/で]から{note.煙の中で戦って、ということか}勝ちなさる(ft.勝ちなさった)とさ、(と)いう話。 [民 Kun-12]

³⁶ 空間的な意味を示している名詞の対格形式についての考察は、次章で扱う移動動詞とのくみあわせり方の記述とともにおこなっていく。

これは、*kara* 格の<経由するところ>を表す用法が、<手段・方法>を表わす用法からの転用であることを意味していないだろうか。例えば、例 1-117 の *uma* = 「道」が、「行く」という動作が行われるところというよりも、その動作を行なうのに必要な<手段>として捉えられている、ということである。このことは、*kara* 格が<動作や状態が成り立つところ>を表すのに他の格要素(-*Nka*)を必要とすることから明らかであろう³⁷。

以上のことから、*kara* 格の「空間格」としての用法はあくまで<起点>を表わすことであり、上にみた<経由するところ>や<動作や状態が成り立つところ>を表わす用法は、非空間的な<手段>を表す用法からの派生であることが考えられる。つまり、これらの用法において *kara* 格の示す「ところ性」は二次的なものであり、それは、後者の用法において -*Nka* の付随が義務的であること、また以下に示すように、前者の用法でも、-*kara* が -*Nka* を伴っている用例が現れていることから窺える。

1-121 *sju:-ja pama-Nka-kara-du aLki:-taL*.

お爺さん{主}-は 浜-に-から-ぞ 歩いていた

1-122 *ja:-Nke: iki micí-naka-N, qfaje:M:ka-kara, qsípigí-sju:-nu akaqva-u, upuga:N*

家-へ 行く 道-中-に 真暗闇-に-から 白髭-翁{主}-の 赤子-を 背負うこと-Ø

sutu(i) aiki: wa:ri:L-badu, [民]^{xi}

して 歩き なさっているの

家へ行く道中に、真暗闇にから白髭(の)お爺さんが赤子を背負って歩きなさっているの、

3-4. 「空間格」の体系

本節の冒頭で多良間方言の空間格として挙げた 5 つの格形式のうち、共通語のニ格とデ格に対応するものは *ni* 格と *Nka* 格である。だが、これらの形式のいずれも空間的な用法と非空間的な用法とを示しており、よって、ニ格、デ格に対応する格形式が、「空間的な用法と非空間的な用法とをかたちのうえで区別」している(まつもと 1998:84)奄美方言の「空間格」に比べると、多良間方言の「空間格」の「空間格らしさ」は低い。しかし、*ni* 格と *kara* 格を除いて、いずれの形式も、空間的な意味を表わす用法がその中核となっており、その非空間的な意味には、それを実現する他の形式が存在している事から、完全に分化した状態ではないけれども、「空間格」としてのまとまりは、一応みとめられるだろう。

ni 格について、*Nke* 格が<方向性>を、*Nka* 格が<内部性>をその文法的意味特徴としているのに対して、*ni* 格はそのいずれをも、*Nke* 格や *Nka* 格ほど濃厚ではないが、兼ね備えているようであった。そして、モノの<移動先>を含む、<動作の間接的な対象>を表わす用法などから、空間的な意味、またそれに準じる用法において、*ni* 格は、単に<到達点>を表わす、ということが言えそうである。複合連体格助辞の要素とならないことから、以下の体系表に示される通り(再掲、序論 3 の表 1 に同じ)、形態的には「空間格」の枠から外れざるを得ない。だが、意味の観点からは「空間格」への繋がりが窺える。

そして *kara* 格については、その名詞(語幹)が空間名詞に限られておらず、また 3-3 で明

³⁷ また、例 1-120 に現れている *kara* 格は、その名詞(語幹)が指し示しているところが、「煙の外」の起点であることを表しているようにも思われる。すなわち、この用例中における「勝つ」という動作が、「煙の中から外」のような移動を伴っている、と考えられる。

らかにしたように、そのトコロ性が二次的なものであることなどから、完全には「空間格」に含められない。だが **kara** 格は、**tu** 格や **si:**格というその他の間接格と「空間格」との中間に位置し、「空間格」の格体系内での位置づけを決定している。すなわち、この **kara** 格の存在によって、「空間格」は間接格から分離され得ず、そのさらに下位のカテゴリーとして位置づけられるのである。

	意味・機能/かざりかた		連用格	連体格
I	主語や直接補語になり、 連体=連用が未分化の格 (主格=連体格)	名格 属格 主格	Ø 格 (-ヲ,-ガ,-Ø ほか) nu 格 (-ノ,-ガ) ga 格 (-ガ,-ノ)	
II	ヒト・モノを指し示す名詞の とる形で、直接・間接補語に なり、複合連体格を持たない	第一対格 第二対格 与=所格	ju/juba 格 (-ヲ) ba 格 (-ヲハ) ni 格 (-ニ)	—
III	ヒト・モノを指し示す名詞の とる形で、間接補語となる	共格	tu 格 (-ト)	tunu 格 (-トノ)
		具格	si:格 (-デ)	si:nu 格 (-デノ)
		奪格	kara 格 (-カラ)	karanu 格 (-カラノ)
	空間名詞や空間化された名 詞のとる形 (空間格)	処格 向格 範囲格	Nka 格 (-ニ) Nke:格 (-ヘ) gami 格 (-マデ)	Nkanu 格 (-ニノ) Nke:nu 格 (-ヘノ) gaminu 格 (-マデノ)
IV	周辺の格=格の周辺		-juL (-ヨリ) 比較 -ti: (-ト) 引用	— -ti:nu (-トイウ)

表 14 多良間方言の格の体系(再掲)

ⁱ 『民話』<本格昔話>の「黄金のかめ」より(pp103-105)。外に妾を作っていた夫が妻と仲直りをし、その寝床で黄金の入ったカメを見つけた話をする。その話を、妻の元へ夜這いしようと来た男が立ち聞きし、先にそのカメを探しに行くが、蜂に刺されて死んでしまうという話。

ⁱⁱ 『民話』<本格昔話>の「嫁の乳」より(pp140-142)。ある翁が、嫁たちの心試しとして病気を装い、それを治すために子を殺して自分に乳を飲ませてほしいという話をする。親を産むことはできないからと受諾した嫁の1人が、翁に言われた通り子を埋めるための穴を掘ると、黄金が出てきて、それを与えられるという話。

ⁱⁱⁱ 『民話』<本格昔話>の「王様に生まれ変わったお爺」より(pp79-82)。薪取りを生業とする貧しい生活をしてながら、より貧しい人々へ恵んでいた、顔に人とは違った痣のある翁が、ある日、山中で嵐に遭ってそのまま死んでしまったいたので、村人たちは翁のために墓標を立て、その前を通る時は必ず手を合わせ、線香を焚いていると、やがて島の王に、翁に痣までそっくりの男の子が生まれたという話。

^{iv} 長浜数子 1986「口承文芸」(『沖縄民俗』24:77-101, 琉球大学民俗研究クラブ)より。原文は以下の通り。本文では、本稿の体裁に合わせて表記を改めた。

“mme antʃi: kuʃammju mi: gutu asahigata, mme ʃenakan asahigata” (pp86-87)

「そして背中を見ると朝日型、背中に朝日型のあざがある。」

なお、kuʃammju の部分は、訳が「背中を見ると」となっていることから、恐らく、kusü:(腰を)と mi:L(見る)の何らかの活用形が、一緒に記述されたものと思われる。本文では、この箇所を/kusü: mi:taka:/(腰を見たら)のように改め、斜体で示した。

^v 『民話』<本格昔話>の「婿とりの話」より(pp87-88)。イリスズヤーの娘に惚れこんだ青年2人が、その娘から我慢くらべで相手を決めることを提案される。結果、イリスズヤーの灯りの方を向いて、娘の顔を思い浮かべながら寒さに耐えた青年が勝利し、婿になるという話。

^{vi} 長浜 1986 より(本章脚注 iv 参照)。原文は以下の通り。

“anʃi:du mme muttu unu midumnu ne: wa:rangutu burittidu” (p86)

「そうしてんめきっぱりその女のところへは通わないでいた。」

^{vii} 『民話』<本格昔話>の「三角山の猫」より(pp44-45)。三角山を通ると大きな山猫に襲われるという話が村中に広まっていて、ビンキヤーのお爺さんが連れの者とそこを通るとやはり猫が現われたので、松明を焚いて目をくらませて倒したという話。

^{viii} 『民話』<本格昔話>の「馬に生まれ変わった男」より(pp57-59)。酷く扱われていた使用人たちが主の死後、自分らの苦勞の賜物だとその家に米俵を盗みに入る。すると馬が口を利き、たしなめ、自分がその家の主であったことを告げる。使用人たちはそれを聞いて盗むことを止め、立派な人間になったという話。

^{ix} 『民話』<本格昔話>の「隠れ着物」より(pp69-72)。ウブミークンゲンという男がお化けと親しくなり、隠れ着物を借りるが、うっかり焼いてしまう。お化けたちに果し合いを迫られて逃げられなくなるが、先祖に祈りを捧げて命拾いするという話。

^x 『民話』<本格昔話>の「若者の長旅」より(pp100-102)。占者のもとへ旅していた若者が、その道中言葉を話さない娘の母親と飛べなくなった龍から、その状況の理由も尋ねて欲しいと頼まれる。若者が、娘は将来の夫の顔を見れば、龍は魔法の玉を吐き出せば解決するという占者の言葉を伝え、龍から魔法の玉を与えられ、また娘は若者を見て言葉を話したので夫婦となり、裕福に暮らしたという話。

^{xi} 『民話』<本格昔話>の「正直者に神宿る」より(pp120-123)。祖母の心遣いによって役所で働くことになった正直者の孫が、ある晩帰り道で赤子を背負った翁と出会う。孫は翁の代わりに赤子を背負って送ろうとするが、途中翁とはぐれ、仕方なく自分の家へ帰ると、それは赤子ではなく黄金だったという話。

第2章 「移動の表現」論

本章では、岡田 2003 に倣い、「人や物体が空間内の一つの点から別の点に移動することを「移動」と呼ぶこととする」(p102)。その「移動の表現」について、森田 2004 に次のような記述が見られる。「モノが存在し、それが移動するということは、存在空間・移動空間が前提となるが、見方を変えれば、存在物の移動によって空間の広がりが逆に表現される」(p19)。このように、移動の表現は、空間の広がり密接に関わる「空間の表現」の1つであると言えるわけだが、「移動」というデキゴトを表す動詞には様々なものがある。

序論4「動詞分類」の4-2で、寺村 1982 による「コト」(=「客観的な叙述の内容の表現」)の観点からの動詞分類について概観したが、そこでは、述語の6分類の中の1つ、「動的事象の描写」(動詞文)に5つの下位分類が見出されていた。本章で取りあげようとしている移動の表現には、移動・変化の表現のうちの移動の表現、「入レル,出ス」タイプの動詞、授受の表現に関わる動詞が関わってくる。そして、本研究ではこの寺村 1982 における3つの類型を、大きく、「ヒト=イキモノの移動の表現」と「モノの移動の表現」とに区別し、その中心的な役割を果たす動詞の語彙=文法的な意味の記述を試みていく。

以下では、まず、主体的な空間的な移動を表す動詞として、ヒト=イキモノを中心とする移動の表現について考察する。この表現に関わる動詞にはさらに4つの下位分類がみとめられるが、それぞれのタイプの動詞の語彙=文法的な意味について、岡田 2000 における分析の観点—「格の形式・その格の名詞がある動詞とともに用いられることによって表す語彙—文法的意味・その動詞の語彙の意味という三者の相互関係という観点」(p101)—を用い、記述を試みる(第1節)。次に、対象的な空間的な移動を表す動詞として、モノの移動の表現について考察する。本研究では、この「モノの移動」を、X(し手)がY(対象,相手)に働きかけて、その働きかけの結果、Y(対象,Y=対象)あるいはZ(対象,Y=相手)の空間的な位置が変化することを表す表現と規定し、大きく、「入レル,出ス」類の動詞と「授受の表現」の2つに分けて、その語彙=文法的な意味の記述を試みる(第2節)。

また、これらの作業は序論4で示した多良間方言の動詞分類を「移動」という観点から再検討するものでもあり、第3章の「存在の表現」論ともあわせて、細分類のための手がかりの1つとなるだろう。

第1節 ヒト=イキモノの移動の表現

1-1. 主体的な¹空間的な移動を表す動詞の類型

寺村 1982 では、共通語の動詞文のタイプの1つである「移動・変化の表現」に、さらに次のような下位分類をみとめていた(序論4の4-2 参照)。

- a. 「出ル」動きーその補語がヲ格をとり、「出どころ」を表す。
- b. 「通ル」動きーその補語がヲ格をとり、「通りみち」を表す。また、通過点との結びつきの強さによって、動詞は2つに分けられている。
 - b-1. 「線上の運動とその移動の場所」を表す。
 - b-2. 「線上の運動とその移動の場所」よりも「身体の動きそのもの」に重点がある。
- c. 「入ル,着ク,泊マル」類ー「動きの行きつくところ」に深く関わる。この類の動詞は、その表現の中心が移動そのものであるか否かで、3つに分けられている。
 - c-1. 移動そのものを表わす。
 - c-2. c-1 と c-3 の中間に位置するもの。
 - c-3. 移動を前提とし、その結果のあらわれである事象を表す。存在の表現に近い。
- d. 「行ク,来ル,帰ル,戻ル」
- e. 変化「ナル」類

これらのうち、a,b,d と c-1,c-2 の一部が、主体的な空間的な移動の表現に直接的に関わる動詞として取り出されるだろう。a から c(c-1,c-2)の3つはその動詞とくみあわせる名詞が表す「特定の」ところとの関わり方によって区別されており、また d は、「境遇性」の介入する動詞として、a~c から区別して立てられている。

ヒト=イキモノなどの主体的な移動を表す動詞に対するこの4分類は概ね妥当なものであろう。だが、その分類の基準となっている名詞とのくみあわせり方、つまり、名詞が指し示すところとの関わり方に関する考察は決して十分なものではなく、例えば以下に示すように、a のタイプに含まれている動詞「出る」とのくみあわせにおいて、ヲ格の名詞は、必ずしも「出どころ」を表すわけではない、といった問題点が指摘される。これらの用例は岡田 2000 で示されていたものであるが²、ヲ格の名詞はそれぞれ、「出発地」(f-1)と「経由地」(f-2)を表していると捉えられている。

- f-1. 明日はまたいつも通り七時半には家を出るのだ。
- 2. 二人は校門を出ると、ようやく芽を出した並木に沿って歩いた。

岡田幸彦 2000 では、これまでの名詞の格形式と動詞との結合関係についての研究が、名詞の文法的な意味に対する「論理的な分類」に偏っていることを指摘し、「格の形式・その格の名詞がある動詞とともに用いられることによって表す語彙一文法的意味・その動詞の語

¹ ここで言う「主体的な(移動)」とは「動作主体自体の(移動)」を指すものであり、その意図性を問題とするものではない。よって utiL(落ちる)などの非意図的な動きを表す動詞や jarasjaiL(遣らされる)などの受身動詞も、本節での考察の対象となる。なお、utiL にはモノを主体とする用例も現れている。

² 用例について、f-1 は山田太一『丘の上の向日葵』新潮文庫 pp22-23、f-2 は辻邦生『雲の宴』朝日文庫、上 p66 をその出典とすることがそれぞれ記されている。

彙的意味という三者の相互関係という観点からみると、「状況的」「対象的」という分け方とはまた別の分け方ができる」と述べている(p101)。そして、「一定の格の名詞(略)とその動詞との構文論的結合関係においてあきらかになる動詞の語彙的意味の特性」を「構文的意味特徴」と呼び³(p102)、トコロを表す名詞とヒトの移動を表す動詞とのくみあわせでは、「出発性」、「経路性」、「到着性」、「指向性」という4つの意味特徴を取り出している。これは寺村 1982 の4分類に近いようにも思われるのだが、例えば、ヲ格の名詞とのくみあわせにおいて、「出る」が「出発性」と「経路性」を示しうるのに対し、同じく a のタイプに挙げられている「出発する」には「出発性」しかみとめられないなど、同タイプに位置づけられている動詞間の相違、また下位分類内の構成について、様々な示唆を与えるものであると考える。

よって以下では、多良間方言のヒト=イキモノの空間的な移動を表す動詞について、寺村 1982 による分類をベースに、岡田 2000 によって提示された「観点」を用いて、その語彙=文法的な意味の考察を試みる。

1-2. 「出ル」動き

まず、「出ル」動きを表す動詞について見ていく。多良間方言では、共通語の場合と異なり(f-1 参照)、このタイプの動詞と対格の空間名詞とのくみあわせは全く現れず、また、例えそのくみあわせがみとめられても、例 2-1 のように、さらに -kara を後接させて複合助辞的に用いられている。

2-1 Nna-u sjaukĩtui, unu gama-u-kara nuNdi: Mme, kada:-ni:-Nke: tuNditui,

縄-を 引いて その 洞穴-を-から 出て もう 遠く-に-へ 急ぎ{飛んで}行って

縄を引張って、その洞穴から出てもう遠くへ行って、[民 Kad-1-13]

そして、nuNdiL⁴に限らず、多良間方言の「出ル」動きを表す動詞は、<出発性>という空間の意味を示す場合、移動範囲の<起点>を表す kara 格形式の空間名詞とくみあわさって現れていることがほとんどである。kara 格は、共通語のカラ格と同じく、「動詞の語彙的意味の特性からある程度独立してその名詞の語彙—文法的意味を決定できる格形式」(岡田 2000:116)である。だが、その独立性は共通語の-カラよりも弱く、「通ル」動きを表す動詞と kara 格の空間名詞とのくみあわせでは、その名詞によって指し示されているトコロは<出発地>とはならない(本章 1-3 参照)。よって、この kara 格の空間名詞とのくみあわせにおいて示される空間的な意味特徴の違いによって、「出ル」動きを表す動詞と「通ル」動きを表す動詞を区別できるだろう。

また、tuNdiL(飛び出る)など、「出ル」動きを表す動詞が必ずしもその動作の<着点>を示す名詞句=補語を要求していないのに対して(例 2-2)、kumaL(入る)など、「入ル,着ク」動きを表す動詞を述語とする文では、<着点>(この場合は<到着地>)が明示されるか、文脈にしめされるかしていなければならないようである(例 2-3)。これはすなわち、それぞれのタイプの動詞によって要求される、「それがなければそのコトの描写が不完全であると感じられる

³ また岡田 2000 では、ここで言われている「構文的意味特徴」というのは、宮島 1972 の「語いの意味の形式的側面」あるいは(語いの意味の)「範ちゅう的な側面」(p671)に重なるものであり、また、奥田 1974 などの「カテゴリーカルな意味」の1種類であることも合わせて記してある。

⁴ なお、共通語の「出る」に対応する多良間方言の動詞には、idiL/NdiL, nuNdiL という2系統3種の形態が見られる。前者は古典語の「出(い)づ」に対応していると思われるが、後者については不明である。

ような補語」(寺村 1982:82)が異なっているということである。こうして、やはり *kara* 格の空間名詞とのくみあわせり方の違いによって、「出ル」動きを表す動詞と「入ル,着ク」動きを表す動詞も、「通ル」動きと同じく、異なるタイプの動詞として分類することができる。

2-2 *awatitui kunu, tuNdija:-nu sjeNzo:, toqva-Nka, kumari:, buri:-du, Mme*

慌てて この トウンディ家-の 先祖-は 炊事小屋-へ 入って いて-ぞ もう

uma-kara, nuNditui paL, si-taL-ga-jara nu:-gara si-badu, [民 Ork-2-15]

そこ-から 出て 走る すた-か-やら 何-やら するので

慌てて、この、トウンディ家の先祖は炊事小屋へ入っていて、もうそこから出て走る、したやら何やらして、

2-3 *ure nubasi:-ga Nda-kara-ga, aqzja:-Nke: kumara-zĩ:=ga. [狂言]*

それ-は どのように-か どこ-から-か 畦-へ 入ろう=か

それは(ft.これは)どうやって、どこから、畦へ入ろうか。

以上のことから、「出ル」動きを表す動詞とは、*kara* 格形式の空間名詞とのくみあわせにおいて<出発性>という空間的意味を示す動詞である、と規定できそうである。そしてこのとき、くみあわせる名詞によって指し示されているトコロは、<出発地>である。このタイプには次のような動詞も含まれる。

2-4 “*agaitaNdi, kunu ju-nu naka-N-mai-du kunu baN-juqra:-mai, utuL cju:ba:-nu*⁵

[感] この 世-の 中-に-も-ぞ この 私-より-は-も 恐ろしい 強い者-の

buL=na. kuma-kara piNgi-daka: nar-aN”-ti, sugu uma-kara piNgi-taL-ti:. [民]ⁱ

いる=な ここ-から 逃げなければ ならない-と すぐ そこ-から 逃げた-と

「ああ、この世の中にこの私よりも、恐ろしい強い者がいるのか。(ならば)ここから逃げなければならぬ」と、すぐそこから逃げたとそうだ。

2-5 *mata kuma-kara hiqkosi iki-taL zinaN-ja mata, Nna, isja. N:, kuza-nu*

また ここ-から 引越して いった 次男-は また [間] 医者 [間] コザ-の

cju:o:bjo:iN-nu, kakari-u si:, [民 Asa-1-33]

中央病院-の 係-を して

またここから引越して行った次男はまた、ええと、医者(になっている)。コザ{note.地名}の中央病院の係をして{note.その病院に勤めているということ}、

2-6 *aLpi:, jama-nu naka-kara bikiduM-nu, gagaL mipana-nu pitu-nu paidi: wa:Ltui,*

ある日 山-の 中-から 男-の 痩せ(た) 顔{目鼻}-の 人-の 這い出 なさって

ある日、山の中から男が、やせた顔の人が這い出なさって、[民-Sims-3-注 3]

2-7 ~ *ure: kuNkimakisi: mata uL-N-mai N:, ja:-nu wa:bu-kara, wa:bu-kara uti:,*

それ-は 根気負けして また それ-に-も [間] 家-の 上部-から 上部-から 落ちて

その子は根気負け(を)して、またそれにも、ん、家の上から落ちて、[民 Cin-13]

また、<出発性>を示している空間名詞と動詞とのくみあわせには、空間名詞が、-*kara* に-Nka が前接するという複合的な形式をとって現れているものも見られた。このとき、くみあわ

⁵ 多良間方言で「強者」は *cju::munu* と言う。この *cju:ba:*(強者)という語は恐らく、沖縄本島方言からの借用語であろう。

さるその他の語(名詞・動詞)との結びつき方は-kara のそれが優先されており(前章 3-1-2)、以下の用例では、その名詞(語幹)によって指し示されているトコロは<出発地>であると捉えられる。

- 2-8 uma-nu qfa usi-mai, gagaL usi-nu futacinu-nu, sugata-u mi:qti: uduruki:,
 そこ-の 肥える 牛-も やせた 牛-の 二角-の 姿-を 見て 驚いて

taci-Nka-kara buduLdi:, [民]ⁱⁱ

小屋-に-から 躍り出て

そこの太った牛も、やせた牛の二角の姿{note.両角に一升ますを下げた様}を見て
 驚き、小屋から躍り出て

- 2-9 mainici kuma-Nka-kara, nuNdi-du sju:zi:-ti si:-nagara-mai, [民]ⁱⁱⁱ

毎日 ここ-に-から 出よう?-ぞ しよう-と し-ながら-も

毎日ここから出ようとしながらも(ft.思いながらも)、

また、「出ル」動きを表す動詞には、Nke:格や ni 格形式の空間名詞とくみあわさって、<到着性>という空間的な意味を表す用法も見られる。このとき、その名詞は<到着地>としてのトコロを指し示しているのだが、このタイプの動詞とのくみあわせにおいては、Nke: 格の形式の名詞によってそれが表されている場合が、ni 格名詞の場合と比べて圧倒的な多数を占めている。

- 2-10 iM-nu sjuku-Nke: muguri: wa:L-taL-ci:-badu, iki: saiwaiN, riku-Nke: nuNdi:.
 海-の 底-へ 潜り なさった[引・推]-ので 行って 幸いに 陸-へ 出た

海の底へ潜りなさったそうで、行って(ft.行くと)幸いに、陸へ出た。[民 Joh-21-7]

- 2-11 ~aLpi:, ka:ma-nu iM:ke: uri-taL-ti: misita:L=ju. [民 Joh-8-注 1]

ある日 遠く-の 海-へ 下りた-と 3人=よ

ある日、遠くの海へ下りたそうだ。3人(で)よ。

- 2-12 “~uNzju-N, kana:-ti:-du umu:sjugadu, kunumai-kara haNtai-ba si:, Nda-gara:-Nke:

あなた様-に 適おう-と-ぞ 思うけど この前-から 反対-(を)ばして どこ-やら-へ

piNgi: buL-ga jau. uja-tusiqti:, nu:-ti:-ga qsai-zi:=ga=ge:ra”-ti, [民]^{iv}

逃げて いる-が 様 親-として 何-と-か 申し上げよう=か=やら-と

「~ あなた様に適おうと(ft.ご期待に添えたいと)思うのですが、(娘は)この前から反対をして、どこかへ逃げているようです。親として何と申し上げましょうか(ft. お詫び申し上げてよいやら)」と、

- 2-13 ja:-kara Mme, kanu to:mi, kama-ni: idi: Nna, Mme sugu mura-Nka-u

家-から もう あの 遠見 あそこ-に 出て [間] もう すぐ 村-に-を

pibikasi: Mme sju:-tu sju:=do: sju:=do:-te cunami-nu Nna: baNki si-badu,

響かせて もう 津波-と 津波=よ 津波=よ-テ 津波-の [間] 叫ぶ するけど

家からもう、あの遠見(ね)、あそこに出て、もう、すぐさま村[に(声を)/を]響かせて、もう津波と、津波よッテ、津波が(来ると)、ん、叫ぶけど、[民 Asa-2-3]

この用法でも、<出発性>が示されている場合と同じく、-Nke:に-Nka を前接させた形式をとっている空間名詞とのくみあわせが見られる。他の要素との結びつきの仕方ではやはり-Nke:が優先されていて、いずれの名詞も<到着地>としてのトコロを指し示しているのだが、

以下に挙げる例 2-15,16 と上の-Nka を伴わない用例とを比べると明らかなように、その<到着地>は、動作主体が移動という動作の後に「とどまる」トコロともなっていることがわかる。Nka 格は、それ単独で<ゆくさき>を表す場合でもその文法的意味特徴である<地点性>を示しており(第1章3-2-1,例1-111,112などを参照)、その性質の度合いの強さが窺える。

2-14 agai, du:-ga akasjarabaL-nu, we: aqzja-gama-Nka-Nke: we:, doqfara-ti: we:, uriqta.
[感] 自分-が 赤地原-の [間] 蛙-[指小]-に-へ [間] [擬態語]-と [間] 降りた
ああ、自分の赤地原{note.畑名}の、蛙へ、さあストンと、降りた。[狂言]

2-15 upuginu kubu-N naLtui Mme, aLki: jama-Nka-Nke: piNgiL-ba, cibi-kara iki:
大きな 蜘蛛-に なって もう 歩いて 山-に-へ 逃げるので 後{尻}-から 行って
mi:LN-cī:-badu, {中略} unu kubu: Mme uma-Nka biraki: kaiL.
見る-[引・推]-[順接] その 蜘蛛-は もう そこ-に 大の字になり 返る
大きなクモになってもう、歩いて山へ逃げるので、後から行ってみたそうで、{中略}そのクモはもうそこに大の字になって返る(ft.ひっくり返った)。[民 Joh-7-20~22,注4]

2-16 unu ina-gama: akadaNmaMma-nu adaNjama-Nka-Nke: piNgi: uma-Nka-u
その 犬-[指小]-は アカダンマンマ-の アダン山-に-へ 逃げて そこ-に-を
ja:-ba si:, [民]^v
家-(を)ば して
その犬はアカダンマンマのアダン山へ逃げて、そこ[に/を]家をして{note.そこに住み着いた、ということ}、

この他、<経路性>を示している空間名詞と「出ル」類動詞のくみあわせも、1例だけが見られた(例2-17)。その空間名詞は Ø 格形式をとっているのだが、多良間方言の Ø 格は連用的な nu 格や ga 格、ju 格、ni 格にまたがる広範な意味・用法を示しており(序論3「形態論」3-1-2)、このくみあわせにおいては必ず<経路性>が示される、というわけではない。実際、後の例2-18では、同じ idiL/NdiL(出る)という動詞と Ø 格名詞とのくみあわせながら、<到着性>が示されている。

2-17 Mmaga-nu zjo: Ndi:, “wa:ra-maN=ge:ra=ju”,-ti: tati: buL-ke:, [民]^{vi}
孫-の 門-Ø 出て いらっしゃらない-[推量]-?-と 立っている-うちに
孫が門(を)出て、「(お爺さんがここへ)いらっしゃらないかな」と立っている間に、

2-18 unu qfa-gama:, panaikigi:-ja nu:-gi:-ga-ge:ra-mai qsi:mai sju-N-niba, Mme
その 子-[指小]-は 花生木-は 何-木-か-[推量]-も 知りも しないので もう
iM-nu pata-M:na idi:, Ndi-ga panaikigi:=ga-ti: i:=ga-ti ma:ri: bu-taka:-du, [民]^v
海-の 端-辺り-Ø 出て どれ-が 花生木-か-と 言う=か-と 回って いたら-ぞ
その子は、花生木(と)は何木だろうかも(ft.どの木のことであるか)知りもしないので、海の端辺り(に)出て、どれが花生木というかと回っていると、

このように、「出ル」動きを表す動詞と空間名詞とのくみあわせは、その名詞の格形式によって、大きく<出発性>と<到着性>の2つの空間的な意味を実現する用法を示している。だが、動詞分類の観点から「出ル」動きを表す動詞の語彙=文法的な意味を問題とするならば、その意味特徴は<出発性>であると規定されるべきであろう。このことは、先述した、

「[出ル]動きを表す動詞が必ずしもその動作の<着点>を示す名詞句=補語を要求していない」ことから明らかである。ここまでに挙げた用例についても、<出発地>はそのほとんどで明示されるか文脈に示されるかしているのに対し、<到着地>はその限りではない。

1-3. 「通ル」動き

次に、「通ル」動きを表す動詞について見ていく。このタイプの動詞には、まず、ヲ格対応の ju(ba)格⁶の空間名詞とくみあわさって、<経路性>という空間的意味を表す用法が見られる。そして、その名詞によって指し示されているのは<経路地>としてのトコロである。

2-19 “ba-ga, uma kuma-nu micü: aLki: bur-aba, ~” [民 Joh-7-注 1]

私-が そこ ここ-の 道-を 歩いて いたら

2-20 kunu micü: masu:gu wa:L-taka: jakuba: uma-N aL.

この 道-を まっすぐ いらっしゃったら 役場-は そこ-に ある

この道をまっすぐ行かれたら、役場はそこにある

2-21 unu qfa-gama:, iki-na iki: buL-badu, iM-bata-M:na-u ma:ri: buL-badu, [民]^v

その 子-[指小]-は 行き-[強調] 行って いると 海-端-辺り-を 回って いると

その子は、行きに行っていると(ft.行けるだけ行って)、海端辺り {note.海の端、つまり海岸の辺りということ}を回っていると、

2-22 iM:ke:-mai...paL-Nke:-mai, tukaku kuma-u kaja:-daka: nar-aN ba:-nu aL=sja,

海-へ-も 畑-へ-も どうしても ここ-を 通わなければ ならない 場合-の ある=さ

nika-nu panasë: murazju:-N pisugari:, kuma-nu micü:ba:, kaju:-ziki
猫-の 話-は 村中-に 広がって ここ-の 道-をば 通う-[いつも~する]{漬け}

sī-na-ti:nu panasī=sa, [民]^{vii}

する-な-との 話=さ

海へも畑へも、どうしてもここを通わなければ(ft.通らなければ)ならない場合があるでしょ、猫の話は村中に広がって、ここの道は通うな(ft.通るな)という話さ、

2-23 Mme, a, “kama-u kui-taka: Mme: kure: nara nu:-mai sirai-N-niba”-ti, unu

もう [聞] あそこ-を 越えたら もう これは 自分-Ø 何-係 できないから-と その

mazimuno:, i:-ba, [民 Toj-1-22]

お化け{混じ物}-は 言うので

「あそこ {note.ポーク(抱護(林))を指す}を越えたらもうこれは自分(は)何もできないから(だめだ)」と、そのお化けは言うので、

⁶ 多良間方言の対格形式には ju(ba)格と ba 格の2つの形式があり、前者を第一対格、後者を第二対格と呼んでいる。ba 格は ju 格と比べてその出現の度合いが低く、この<経路性>の用法においても、以下の1例しか確認できなかったため、ju 格に代表させて考察を行なっていくこととする。なお、序論3の3-1に示してあるように、ba 格は第一対格の強調形-juba の-ba が格助辞化したものだと考えられ、その基本的な文法的意味は ju(ba)格とほとんど変わらない。

cf. to:-kara cjo:seN-ju batari: jamatu-Nke: ki: sī-tu, to:-kara taiwaN-ba batari: rju:kju:-Nke:
唐-から 朝鮮-を 渡って 大和-へ 来る するの-と 唐-から 台湾-(を)ば 渡って 琉球-へ
ki: sī-tu, cizu-nu ui-kara, mi:L ba:-N butui-ja, be:ta-ga-du, pe:sja:L gumata=sja:ami:
来る するのと 地図-の 上-から 見る 場合-に いては 私たち in.-が-ぞ 早い [当然]=だろう
唐から朝鮮を渡って大和へ来るのと、唐から台湾を渡って琉球へ来るのと、地図の上から見る
場合(に)おいては、私たち(の方)が、(影響を受けるのは)早いはずだろう。

(『民話』<伝説>の「れんの話」より。文末脚注 xxxv 参照。)

- 2-24 muduL-kaci:ra mata rju:-nu tukuru: tu:ra-daka: nar-aN. [民]^{viii}
 戻り-ながら また 龍-の ところ-を 通らなければ ならない

この<経由地>は、さらに、<移りうごくところ>と<通りぬけるところ>の2つに区別することができる⁷。例えば上の用例では、前の3例(例 2-19~21)では<移りうごくところ>が、後の3例(例 2-22~24)では<通りぬけるところ>が、それぞれ指し示されていると捉えられるだろう。また、これらの異なるところを指し示している名詞句の意味特徴について、前者では mīci(道)や iMbataM:na(海端辺り)など、「距離と広がりを持った」、「限界性が不明瞭な連続体として概念化されている空間・場所」(姚 2003:66)を指し示す名詞句が現れ、後者では「ポグ」や rju:nu tukuru(龍のところ)など、「動作の起点と終点の境界線がはっきりとした限定された場所・空間」(姚 2003:68)を指し示す名詞句が現れる、というように、異なっていることがわかる。例 2-22 についても、その mīci(道)が「海」や「畑」へ通じるところであることが文脈に示されており、やはり、「限定された場所・空間」であると言える。また、例 2-19 と以下の例 2-25 を比べると、同じく aLki(歩く)という動詞とのくみあわせながら、名詞句の意味特徴の違いによって、表されるところが異なっていることが明らかである。つまり、例 2-25 では<通りぬけるところ>が表されており、多良間方言では、このような名詞句の意味特徴の違いが、<移りうごくところ>と<通りぬけるところ>のいずれの空間的な意味を表すかに大きく関わっているのである。

- 2-25 kanagai-kara, qfae:M-ja, qfa, qfa-nu ki:-nu sita-u aLki-taka:, cju:-gi nari:
 昔-から 暗闇-は 黒 黒-の 木-の 下-を 歩いたら 強い-気-Ø なって
 upuganu kui-si: e:gu: situi, uma-u...sīgi-taka: sjaNge: baqtabaqta-ti situi,
 大きな 声-で 歌-を して そこ-を 過ぎたら 鳥肌-は [擬態語]-と して

昔から、暗闇は(ft.暗い夜には)、黒々とした木の下を歩くと、強そうになって大きな声で歌をして{note.生繁った木の下は歌いながら通った、ということ}、そこを過ぎたら鳥肌は(ft.が)バッタバッタとして(ft.立って)、[民]^{ix}

このうち、<移りうごくところ>を指し示す名詞とくみあわさる動詞は、「方向性」という観点から捉えられるものと、「様態」という観点から捉えられるものとに分けることができる(奥田 1968-72)。先に挙げた用例では、例 2-20, 21 の wa:L(おわる, iki 行くの敬体動詞)や ma:L(回る)は「方向性」のグループに、例 2-19 の aLki(歩く)は「様態」のグループに分けられるだろう。奥田 1968-72 では、このような分類が「かざられになるあわせ動詞のつくり方にかかわる」ものであることが指摘されているのだが、多良間方言でも、特に「方向性」のグループに含めることのできる iki(行く)に、他のさまざまな動詞とくみあわさってあわせ動詞を形づくる、補助動詞としての用法が目立って見られる⁸。なお、iki(行く)については、「境遇性」の介入するタイプとして、その補助動詞としての用法とあわせ、本章の 1-5 で考察し

⁷ この2つのところの区別は奥田 1968~1972 に倣っている。奥田 1968~では、「空間的なむすびつき」を示すを格の名詞と動詞とのくみあわせ(=連語)に、「うつりうごくところ」「とおりぬけるところ」「はなれるところ」の3つの下位カテゴリーを設けている(言語学研究会編 1983:140)。

⁸ 但し、同じく補助動詞としての用法を持つ動詞 ki:(来る)について、ju 格の名詞とくみあわさって<経由性>の意味を表している用例が1例も現れておらず、また kara 格名詞とのくみあわせでも、<経由性>ではなく<出発性>が示されていることから、iki と異なり、このタイプには含められない可能性がある。本章の 1-5 を参照。

ている。

また先述したように、多良間方言の *ju* 格の空間名詞には、「出ル」動きを表す動詞とくみあわさって「はなれるところ」を表す用法がみとめられない、つまり、空間的な *ju* 格は、「通ル」動きを表す動詞としかくみあわさらないことから、その空間的な意味特徴に<経由性>を想定することができるだろう。この<経由性>はまた、*kara* 格の空間名詞とのくみあわせにおいても、用例数は少ないが、示されている⁹。

2-26 *tauka: junagata-nu micī-kara aLkī-taka: utuqra:L.*

1人 夜-の 道-から 歩いたら 怖い

1人(で)夜の道から(ft.を)歩いたら怖い{夜道の1人歩きは危ない、ということ}。

2-27 ~*uine:cīzī-ti:, kanu: MtabaL,ugaM-nu, kusī-nu kata-ni:, udakinu cīzī-nu aL.*

ウイネー丘-と あの 土原(御願)-の 後ろ{腰}-の 方-に 大きな 丘-の ある

kunu utudara futa:L Mme, uma-ni:-gami nu:L-ke:, Mme ka:saN-ja, iL-kara

この 兄弟 2人-Ø もう そこ-に-まで 上る-うちに もう 母サン-は 西-から

Mme:, ida-gami-mai Mme aLki: wa:ri:L=sja:. [民 Joh-18-12~13]

もう どこ-まで-も もう 歩き なさっている=さ

(家から畑へ行く途中に)ウイネー丘と、あの土原御願の、後ろの方に、大きな丘がある。この兄弟2人(が)もう、そこにまで上る間に、母サンは、西(の方)から(ft.を)歩きなさっている(ft.歩きなさっていた)んだよ。

2-28 *unu pītu:, micī-nu isi-N marukaitui, uma-kara tubī pītu-nu Mme-N, jaL-si:*

その 人-は 道-の 石-に 縛られて そこ-から 行く{飛ぶ} 人-の [Pl.]に 槍-で

cīkasī, cīkasū: si: kurasī-taL-ti:. [民 Joh-19-注3]

突かす 突かすの-を して 殺した-と

その人は、道の石に縛られて、(そして大將はその人を)そこから(ft.を)行く人たちに、槍で突かせる、突かせて殺したそうだ。

2-29 *kju:-ja, unu, mī: cuqfi hiko:zjo:micī-kara, iki: mī:-daka: nar-aN.* [狂言]

今日-は その 新しい 作る 飛行場道-から 行って みなければ ならない

今日は、その、新しく作った飛行場道から、行ってみなければならない(ft.行ってみよう)。

第1章の3-3で、*kara* 格には<経由性>と<動作や状態が成り立つところ>を表すという2つの空間的な用法が見られるが、後者の用法では-Nkaの付随が義務的であること、また前者の用法でも-Nkaを伴っている用例が現れていることから¹⁰、これらの用法において *kara*

⁹ 「通ル」動きを表す動詞と *kara* 格の空間名詞とのくみあわせで、その名詞が<出発地>としてのところを指し示している用例は、今のところ、*iki*(行く)とのくみあわせにいくつか見られるだけである(例2-64,77)。つまり、上に挙げた用例のいずれも(例2-26~29)、その<出発地>は明示されないか、文脈に示されているかにすぎないのである。よって、多良間方言では、この *kara* 格の空間名詞とのくみあわせにおいて示される空間的な意味特徴の違いが、「出ル」動きを表す動詞と「通ル」動きを表す動詞とを、異なるタイプの動詞として区別する基準の1つとなると考えられる。

¹⁰ なお、<経由性>を示している *ju* 格にも、-Nkaを伴っている用例が1例だけが現れている。

cf. *to:ka:-nu pītu-nu, o: cīzīMkani-u narasītui, “sīciupunaka-uba jami-du sju:-zi:”-ti*
1人-の 人-の [間] 鼓鐘-を 鳴らして スツウプナカ-をば 止め-ぞ しよう-と
mura-Nka-u, M:na, a: furima:ri: aLkī-taLru-gadu, kunu pīto:, aNsiqti: atu-N sugu,
村-に-を 皆 [間] ふれ回って 歩いたが この 人-は そうして 後-に すぐ

格が示している「トコロ性」が、二次的なものであることを示した。具体的に述べると、多良間方言の空間的な *kara* 格には、「ある動作を成り立たせるのにその「場所」を使う」という<手段>的なニュアンスが伴われていることを示したわけだが、共通語の空間的なヲ格についても、この *kara* 格に見られる現象に関わるような、興味深い分析がなされている。後藤克己 1964 は、「本を読む」と「道を歩く」に見られる「二つの「を」の意味を相違なるものとして区別しようとする通説のあやまり」(p52)を批判し、「海をわたる」と「空を飛ぶ」を例に挙げて、これらの「海を」「空を」は単に場所の規定ではなく、それぞれに「わたる」「飛ぶ」という動作の働きかけの対象、もっと積極的な処置の対象であり、「いわば対象と場所とが偶然に一致しているにすぎない」と述べている(p58)。また池上喜彦 1993 も、英語やドイツ語などが<移動>と<行為>という概念を異なる言語形式によって表示するのに対し、現代日本語では必ずしもそうではないことから、「日本語では、二つの概念(<移動>場所としての<トコロ>という概念と<行為>の対象としての<モノ>の概念—引用者)は相互に近似化されう程近い関係に受けとられる傾向がある」こと(p52)、すなわち、「<移動>と<行為>という概念は絶対的な対立要因としては機能していない」(p51)ことを指摘している。そして姚艶玲 2003 は、これらの先行研究を踏まえつつ、「ヲ格+移動動詞」構造における、「空間・場所名詞句」の特徴及びヲ格と移動動詞との結びつき関係について考察し、そのヲ格名詞句によって指し示されているトコロが、「動作が成り立つために必要な成分で、移動動作の向けられる対象として認知されている」(p70)ものであることを主張している¹¹。本研究の主題から外れるためこれ以上の考察は行わないが、もし、多良間方言の空間的な *ju* 格にも、共通語のヲ格に見出されているような対象性(つまり、動作の向けられる対象として捉えられていること)がみとめられるとするならば、「トコロ性」が二次的なものと捉えられる点において *kara* 格と共通することになり、この二次性によって、全く異なる2つの格形式が<経由性>という同様の文法的意味を表すようになっているのではないかと考えられそうである。この *ju* 格と *kara* 格の問題は、いずれ稿を改めて考察していきたい。

また、Ø 格形式の空間名詞とのくみあわせで、<経由性>を表している用例も見られた。

- 2-30 *sīcupunaka-u, pe:sja-N mugīfuL-nu tuLkīsjai-N-ni: gogacu-Nke: nubasi: wa:ri-ti:,*
 スツウプナカ-を 早いから 作物-の 採りきれないから 5月-へ 延ばし なされ-と
kunu mura-uci ma:riqti:, unu, kadikarukaniku-tinu pītu-gama-Nke:, tanumi: wa:L-tika:,
 この 村-内-Ø 回って その カデカルカニク-との 人-[指小]-へ 頼み なさると
 スツウプナカを、早くて作物が採りきれないから、5月へ延ばして下さいと、この村内(を)回って(欲しいと)、そのカデカルカニクという人へ頼みなさると、{note. 5月に変更することを神に報告して欲しい、ということか} [民 Kad-2-11]

sīN-taL-tinu kutu. [民 Noz-1-12]

死んだ-との こと

1 人の人が鼓鐘を鳴らして、「スツウプナカを止めよう」と、村をふれ回って歩いたが、(その)すぐ後に死んだ(ft.死んでしまった)そうだ。

¹¹ 同様の指摘は、奥田 1968~1972、寺村 1982 などにも見られる。例えば奥田 1968~は、移動動作をしめす動詞を、「もし、自動詞がを格の名詞とくみあわさることがおこれば、その自動詞は他動詞へ移行する」という原則からはずれる、「空間をしめすを格の名詞とくみあわさって、空間的なむすびつきをつくる」「自動詞」と規定しながらも、このような「を格の名詞と動詞とがつくりだす、むすびつきの性格は、たんに空間的でなく、対象的でもある。つまり、を格の名詞がしめす場所は、動作がなりたつために必要な対象でもある」と述べている(言語学研究会編 1983:139-142 下線引用者)。

- 2-31 kikiqte:, nakitui, iM:ke: pari: uri:, e: pama-dati ma:ri: buL-ke:-du,
 聞いて 泣いて 海へ 走って おりて [間] 浜-辺り-Ø 回って いる-うちに-ぞ
 (ウムイミガがそれを)聞いて、泣いて海へ走り下りて、浜辺り(を)回っているう
 ちに、 [民 Saw-19]
- 2-32 si:du pukaiM iki: futa:L kugi: oki-Nke: iki: uki=sja. [民 Orkc-注 1]
 それで 外海-Ø 行って 2人-Ø 漕いで 沖へ 行って おく=さ
 それで、外海[を/へ?]行って、2人(は)漕いで沖へ行ったんだよ。
- 2-33 “nama-kara, kada:-nu micī, aikaqziba, qva: mi:-ju qfagaLtui, aiki,
 今-から 遠く-の 道-Ø 歩くから あなた-は 目-を 閉じて{塞がって} 歩いて
 pīraki:-ja nar-aN=do:. ~” [民]^x
 開いて-は ならない=よ
 「今から遠くの(ft.遠い)道(を)歩くので、あなたは目を閉じて歩いて、開いてはな
 らないよ。 ~」

その用例のほとんど全てで Ø 格名詞は<移りうごくところ>を指し示しているのだが、例 2-32 に関してはやや曖昧であり、以下に示す、<指向性>あるいは<到着性>が示されているようでもある。だが、「通ル」動きを表す動詞のほとんどが、Nke:格とのくみあわせにおいてのみ、これらの空間的な意味を表す用法を示していることから、上の例 2-32 も、やはり、<経由性>が示されていると捉えるべきだろう。

では、<指向性>と<到着性>の用例を示す。前者の用法の Nke:格の空間名詞は<目的地>としてのところを指し示しており(例 2-34,35)、後者の用法では<到着地>としてのところが指し示されている(例 2-36,37)。なおこのタイプの動詞は、「出ル」動きを表す動詞とは異なり、ni 格の空間名詞とはくみあわさらないようである。

- 2-34 asjugadu, unu sju:-ga ja:-mai qsai-Nni:, nara-ga ja-Nke: aLkī-u si:, [民]^{vi}
 だけど その 翁{主}-が 家-も わからないので 自分-が 家へ 歩くの-を して
 だけど、そのお爺さんの家もわからないので、自分の家へ歩いて、
- 2-35 aLpī:-nu sje:kaN, pama-Nke: touka: isjugi: buL, junasu:, cibi-kara abiL
 ある日-の 早朝 浜へ 1人 急いで いる ユヌス-を 後ろ{尻}-から 呼ぶ
 pītu-nu buL. [民]^{iv}
 人-の いる
 ある日の早朝、浜へ1人急いでいるユヌスを、後ろから呼ぶ人がいる。
- 2-36 kunu ××-nu sju:-ja joNzju:goneN-du ukīna:-Nke: bataL-taL-ba, uja,
 この [屋号 1]-の おじいさん{主}-は 45年-Ø-ぞ 沖縄へ 渡ったけど 父{親}
 be:ta: icu-ga naNneN Nda-N-ga ukīna:-Nke: kusi: wa:ri:-ti, ××-nu taro:-Nke:
 私たち in.-は いつ-か 何年 どこ-に-か 沖縄へ 越し なさった-と [屋号 2]-の 太郎へ
 narai mi:ru=jo:.
 習って みろ=よ

この[屋号 1]のおじいさんは、45年(に)沖縄へ渡ったけど、お父さん、私たちはいつ、何年(に沖縄の)どこに、沖縄へ越しなされたかと、[屋号 2]の太郎へ習って(ft. 聞いて)みなさいよ。

- 2-37 tarama-nu pītu-nu-du, me:ku-kara muduL ba:-N, siki-N e:, pai-nu sima-Nke:
 多良間-の 人-の-ぞ 宮古-から 戻る 場合-に 時化-に 遭い 南-の 島-へ
nagasjaL-taL-ti:. [民]^{xi}
 流された-と

多良間の人が、宮古から戻るときに、時化に遭って、南の島へ流されたようだ。

また、その「語彙的意味自体が方向性を持っている」(岡田 2000:119)<方向>の相対名詞とのくみあわせについても、その名詞によって指し示される場所は広い意味での<目的地>であり、<指向性>の空間的意味が実現されていると捉えられるだろう。

- 2-38 Mme jama-nu gutu-N kumari: kī:-ba, ui-tika:-du, Mma-nu pa-Nke: paL-ba,
 もう 山-の 如(く)-に 入って 来るので 追ったら-ぞ 午-の 方位-へ 走るの
 もう(山羊が)山の如くに(畑へ)入って来るので、追うと、午の方角(ft.南の方)へ走
 る(ft.走って逃げる)ので、[民]^{xii}

- 2-39 asjugadu, patamute: muqtu mai-Nke: aLkai-N ba: si:, kadi-nu tami-N=ju.
 だけど 旗持ち-は 全然 前-へ 歩けない 場合-Ø した 風-の ため-に=よ
 だけど、旗持ちは全く前へ歩けなかった、風のためによ。[民 Joh-19-注 5]

このように、「通ル」動きを表す動詞は、ju 格の空間名詞とのくみあわせでは<経路性>を、Nke:格の空間名詞とのくみあわせでは<指向性>または<到着性>を示すことが明らかになった。だが、後者の用法は<移りうごくところ>を指し示す名詞とくみあわせる動詞にしかみとめられず、「通ル」類動詞全体を規定する意味特徴であるとは言い難い。これに対し前者の用法は、<移りうごくところ>と<通りぬけるところ>がその下位分類であることから明らかなように、いずれの動詞にもみとめられるものである。よって、「通ル」動きを表す動詞の意味特徴は、<経路性>と規定される。

1-4. 「入ル,着ク」動き

続いて、「入ル,着ク」動きを表す動詞について記述していく¹²。多良間方言には、共通語のニ格に対応する格形式に ni 格と Nka 格の2つの形式があるのだが、「入ル,着ク」動きを表す動詞はそのいずれの形式の空間名詞ともくみあわせることができる。このタイプの動詞と ni 格ある

いは Nka 格の名詞のくみあわせでは<到着性>が示されており、またその名詞は<到着地>としてのところを指し示している。

- 2-40 aNsiqti: kunu pīto: mida m:-ja m:-N sima-N cīki-badu, [民]^{xi}
 そして この 人-は まだ 見て-は みない 島-に 着くと

¹² 寺村 1982 では、「動きの行きつくところに特に関係の深い」(p112)、<到達点>を表す「Yニ」あるいは「Yへ」という形式の空間名詞とくみあわせる動詞として、「入ル」、「着ク」、「泊マル」動きを表す動詞を第3のグループとして挙げており、このうち「泊マル」類の動詞については、「移動そのものではないものの、移動を前提とし、その結果の表われである事象を表わしている点で、「入ル」類に準ずるものと考えてよいと思う」(p113)と述べられている。だが本研究では、直接的な移動の表現として、「出ル」類の動詞や「通ル」類の動詞と対照的に「入ル,着ク」動きを表す動詞を捉えたいと考えることから、便宜的にはあるが「泊マル」動きを表す動詞をここでの考察の対象とせず、存在の表現に関わる動詞として次章でとりあげている。

そしてこの人は(ft.が)まだ見ては見ない(ft.見たことのない)島に着くと、

- 2-41 nakada-Nka-Nke: sīnubikumi:, unu isiusū: nusuMtui iM:ke: uri:, funi-N nu:Ltui,
台所-に-へ 忍び込み その 石臼-を 盗んで 海-へ 下りて 舟-に 乗って
台所へ忍び込み、その石臼を盗んで海へ下り、舟に乗って、[民 Joh-10-注 4]

- 2-42 awatitui kunu, tuNdija:-nu sjeNzo:, toqva-Nka, kumari:, buri:-du, Mme
慌てて この トウンディ家-の 先祖-は 炊事小屋-へ 入って いて-ぞ もう
uma-kara, nuNditui paL, sī-taL-ga-jara nu:-gara sī-badu, [民 Ork-2-15]
そこ-から 出て 走る すた-か-やら 何-やら するので
慌てて、この、トウンディ家の先祖は炊事小屋へ入っていて、もうそこから出て
走る、したやら何やらして、

- 2-43 aNsītika: upukadi-nu nisikadi-nu buNmiki ba:-N, ikinupata-nu iki-Nka,
そうすると 大風-の 北風-の [勢いよく-する] 場合-に イキヌパタ-の 池-に
sjanagi pītuci naLtui, ici ni:-no saN:-ti: tubiNki:, [民]^{xiii}
禰 1つ-Ø なって イチ ニ-ノ サン-と 飛び込み
そうすると大風が、北風が勢いよく吹いているときに、イキヌパタの池に、禰 1
つ(に)なって、1 2の3と飛び込んで、

上のいずれの用例でも「移動そのものを表わす」動詞が述語として現れているのだが、一見、その「移動」が「入ル」動きか「着ク」動きかによって、くみあわさる名詞の格形式が使い分けられているように見える。例えば、ciki(着く)や nu:L(乗る, 上がる)など、「着ク」動きを表す動詞が ni 格の名詞とくみあわさって現れているのに対し(例 2-40,41)、kumaL(入る)や tubiNki(飛び込む, tubikuM と)など「入ル」動きを表わす動詞は、Nka 格の名詞とくみあわさって現れている(例 2-42,43)。だが、1 例ではあるが、ni 格名詞が「入ル」動きを表す動詞とくみあわさっている用例も現れていることから(例 2-44)、ここでは、「入ル」動きを表す動詞には Nka 格名詞をとる傾向が見られる、と述べるに留めておく。

- 2-44 misīta:L-nu muno: iM:¹³ muguri-u si:-nu kurasī. [民 Joh-8-注 1]
3人-の もの-は 海-に 潜り-を して-の 暮らし
{note.海に潜って漁をすることを生業としていた、ということ}。

また、「移動そのものを表わす」動詞と「移動を前提とし、その結果のあらわれである事象を表す」動詞の「中間に位置する」動詞にも、ni 格あるいは Nka 格の名詞とくみあわさって、<到着性>を表す用法が見られた。

- 2-45 “kure: nai-nu naL ki:-nu nai. we:, kuL-u: muqtui ja:-Nke: iki-tika:, micī-nu
これは 実-の なる 木-の 実 [間] これ-を 持って 家-へ 行くと 道-の
katafuta-N qfa-nu Mme-nu, nu:gara:-nu sjaku tabariqte:, ~” [民 Joh-10-15]
片方-に 子-の [Pl.]の 何やら-の 程度 集まって
「これは実のなる木の実。これを持って家へ行ったら、道の片隅に子供(ft.小人)ら

¹³ iM: < iM-ni なお、多良間方言の ni 格は共通語のニ格からデ格にまたがる用法を示しているため、この「iM-ni」(海に/で)は、「背景としての空間」(岡田 2003:106)を示しているようでもある。この場合、「入ル」と「着ク」それぞれの動きを表す動詞の間には、やはり、くみあわさる名詞の格形式が使い分けられている、ということになる。

が何やらの程度(ft.たくさん)集まって、～」

- 2-46 unu urasoigama-Nka:, unu ojakuniN-nu qfa-nu Mme:, sjeineN sjozjo, M:na
 その 浦添洞穴-に-は その オ役人-の 子-の [Pl.]は 青年 少女{処女} 皆
acumaLtui asibi:, Mme gei-mai sī:, oŋaku: si: M:na asibi: buri ukī=sja:mi:.
 集まって 遊んで もう 芸-も する 音楽-を して 皆 遊んで いて おく=だろう
 その浦添洞穴には、そのお役人の子供たちは、青年少女、みんな集まって遊んで、
 芸もする、音楽をして、みんな遊んでいておく(ft.遊んでいた)よ。 [民 Joh-16-17]
- 2-47 ~Mme du:-ga ja:-Nke:-ti: zjo:-gami idiqte:, uma-N kaqfi:riqti:,
 もう 自分-が 家-へ-と 門-まで 出て そこ-に 隠れていて
 もう自分の家へと門まで出て、そこに隠れていて、 [民 Joh-10-注3]
- 2-48 aL ja:-nu goniNkjo:dai-ja, cjo:zjo-nu-du panasī-N Ndi:tui jama-Nka kaqfi:, ni,
 ある 家-の 5人姉妹-は 長女-の-ぞ 話-に 出て 山-に 隠れて ニ
 saNzjo-nu mizī paNmai-ja muti: kaje:. [民]^{xiv}
 三女-の 水-Ø 食料-は 持って 通った
 ある家の5人姉妹(で)は、長女が(ウェンマの候補として)話に出て(ft.出たので)、
 (長女は)山に隠れ、二、三女が水(や)食事は(ft.を)持って通った。

上の例 2-45 と 46、例 2-47 と 48 はそれぞれ同じ動詞とのくみあわせであり、いずれの形式の名詞とも同様のむすびつき方をしているように見える。だが、その名詞の語彙的意味に注目すると、「入ル」動きを表す動詞に見られたあの傾向が、このような中間的な動詞とのくみあわせにも関わっていることが窺える。例えば、上の例 2-48 について、その名詞の語彙的意味から、この用例で表されている「山ニ隠レル」というデキゴトには、「山ニ入ル」というデキゴトが含まれていると捉えられる。そしてそのために、同じ kaqfiL(隠れる)という動詞とのくみあわせながら、例 2-47 の「門」がとっている形式とは異なる、Nka 格の形式をとって現れていると考えられるのである。例 2-45 と 46 についても、「道(の片隅)」が「入ル」という動作を表す動詞の<到達地>とはならないのに対し、「洞穴」は<到達地>となり得ることから、同様のことが言える¹⁴。すなわち、その名詞の語彙的意味の性質の違いが、それぞれの名詞のとっている格形式の違いに現れているのである。

また、先に挙げた例 2-40 と 2-41 の「島ニ着ク」、「舟ニ乗ル」というくみあわせについて、奥田 1962 ではこれらのくみあわせを、「くつつきのむすびつき」¹⁵に含めている。そしてこのむすびつきを、「行く」「来る」などの方向性をもった移動動詞とニ格の名詞のくみあわせに見られる「ゆくさきのむすびつき」や、ニ格の名詞が「動作のおこなわれる場所」を示す「空間的なむすびつき」¹⁶とは異なる、「空間的なニュアンスがまったくかけている」ものと捉えている(言語学研究会編 1983:295)。これに対し「入る」という動詞は、「ゆくさきのむすびつ

¹⁴ また、第1章の3-2-1で、Nka格の空間名詞が<ゆくさき>としてのトコロを指し示すとき、そのトコロはまた、「移動」の後に、その移動主体が「とどまる」トコロともなっていることを示したが、それはこの<到達性>の意味が表されている場合においても同様である。特に例 2-46 は、Nka格名詞が-jaで取り立てられていることによって、<到達地>としての意味よりも、「遊ぶ」という<動作がなりたつトコロ>としての意味が強まっているようである。

¹⁵ のちの奥田 1968~1972 では「とりつけのむすびつき」となっている。

¹⁶ なお奥田 1962 は、この「空間的なむすびつき」について、「文体的なふるくささ」がつきまとうものの、この空間のに格と「ありかのに格との間にはっきりした境界線をひくのは、むずかしい」とも述べている。

き」を実現する移動動詞の例としても、また「くつつきのむすびつき」を表す「くつつけ動詞」の例としても差し出されている。このような奥田 1962 に見られる「入ル,着ク」動きを表す動詞の扱い方の違いは、実は、そのまま多良間方言の ni 格と Nka 格の現れ方の違いに対応するものである¹⁷。第1章で、Nka 格が、ni 格と比べて空間性の高い形式であることを示した。そして、「入ル」動きを表す動詞に Nka 格の名詞とのくみあわせを好む傾向が見られることから、「入ル」類の動詞は「着ク」類の動詞よりも空間性が高い、と考えられるのである。共通語ではくみあわせる名詞の格形式に違いはない。だが共通語でも、このような「入ル」類と「着ク」類の空間性の程度の違いは、「感覚的」には捉えられているだろう。例えば、奥田 1962 における分類の「揺れ」は、その現れではないだろうか。

しかし、「着ク」動きを表す動詞と「入ル」動詞とを区別し、一方は非空間的な動詞、もう一方は空間的な動詞として扱うことは、果たして可能であろうか。多良間方言では一見、くみあわせる名詞の格形式の違いをその基準とすることができそうである。だがそのやり方では、「中間的な動詞」の位置づけはできない。動詞全体を問題とする分類を試みようとする場合には、さらにむずかしくなるだろう。だが、空間的な意味を表している名詞と動詞の結びつき方について、「格の形式・その格の名詞がある動詞とともに用いられることによって表す語彙一文法的意味・その動詞の語彙的意味」という三者の相互関係という観点から考察する場合は、*ciki*(着く)や *nu:L*(乗る)などの動詞をここで取りあげておいても良いように思う。なぜならこれらの動詞は、空間名詞とのくみあわせにおいて、移動動詞と同じような(空間的な意味を窺わせるような)ふるまいをするからである。この場合、その語彙的意味に「移動」という概念が含まれるかどうかは問題とならないだろう。よって本研究では、以上の動詞を、「入ル,着ク」動きを表すものとしてひとまとめに扱っている。

また、このタイプの動詞には、Nke:格の空間名詞とくみあわせて、<到着性>の空間的な意味を表す用法も見られる。このとき、名詞によって指し示されるトコロは、<到着地>としてのトコロである。なお、<到着性>の用法は、「移動そのものを表わす」動詞と「中間的な動詞」のいずれの動詞とのくみあわせでも示されている。

2-49 ~sjaki-u tumi: Nkagiqsa-ti: ma:ri:L-ke:, jama-naka-Nke: kumari:, jama-Nka

酒-を 探して 召し上がらそう-と 回っている-うちに 山-中-へ 入って 山-に

sjaki-nu nagari: buL tukuru-nu aL-ba, [民 Kad-3-注 2]

酒-の 流れて いる ところ-の あるので

酒を探して(父親に)召し上がらせようと回っているうち(に)、山中へ入り、(その)山に酒の流れているところがある(ft.あった)ので、

2-50 ××-nu, taro:azja-ga, we: usimaku-Nke:-du ata:magamaN ciki. [狂言]

[屋号]-の 太郎兄-が [間] 牧場(の囲い){牛巻?}-へ-ぞ あっという間に 着く

[屋号]の、太郎兄さんの牧場へ、あっという間に着く(ft.着いた)。

2-51 M:na gacjagacja-ti: pisugi-Nke: sjuru:tui, [民]^{xv}

皆 [擬態語]-と 広場-へ 集まり{揃い}

皆ガヤガヤと広場へ集まり、

¹⁷ 多良間方言では、「くつつけられる」第二の対象を指し示す名詞も、ni 格と Nka 格のいずれの形式もとることができるのだが、*kumaL*(入る)に意味的に対立する *iziL*(入れる)などでは、*kumaL*と同じく、その名詞に Nka 格形式をとりやすい傾向がある。本章第2節を参照されたい。

この用法では、-Nke:に-ni や-Nka が前接する複合助辞的な形式の名詞とのくみあわせも見られた。そして、Nke:格がいずれの格要素を伴うかということにも、前述の、「[入ル]動きを表す動詞とくみあわさる名詞は Nka 格の形をとりやすい」という傾向は影響している。

- 2-52 “~ kaL-ga tukü: qsaſi-taL tukü-N ki:-nu ui-ni:-Nke: nu:Ltui, M:na-Nke: tukü: あれが 時-を 知らせた とき-に 木-の 上-に-へ 上って 皆-へ 時-を qsaſi.”-ti i:-taL-ci:-badu, [民 Okh-注 2]

知らせ(ろ)-と 言った-[引・推]-ので

「~ あれ{note.やもり}が時を知らせたときに、木の上へ上って、皆へ時を知らせろ」と言ったそうで、

- 2-53 “ba-ga-du aNsi tiN-ni:-Nke:, nu:ra-ti bu-taL-ti:nu panasü:, tau-Nke:-mai panasi: 私-が-ぞ そのように 天-に-へ 上ろう-と いた-との 話-を 誰-へ-も 話して qfi-N-na=jo:, ~” [民]^{xvi}

くれる-な=よ

「私がそのように天へ上ろうと(して)いたという話を、誰へも話してくれるな(ft. 話さないでくれ)よ、~」

- 2-54 itu:, Nna: paL-N ſigiqti:, unu itu tajuri:, N:na tubasi:, “ida-nu 糸-を [間] 針-に 上げて その 糸-Ø 頼って [間] 行かせて{飛ばせて} どの- pñtu-ga aL gumata=ga”-ti, Nna ſi-tika:-du, cukasjaja:-Nka-Nke: kumari: wa:L-taL-ti:. 人-Ø-か [COP][強い推量]=か-と [間] したら-ぞ 司家-に-へ 入り なさった-と 糸を針に上げて、その糸(を)頼って、行かせて、「どの人であるか」と(確かめようと)すると、(その人は)司家へ入りなされたそう。 [民 Isg-1-3~4]

- 2-55 nakada-Nka-Nke: ſinubikumi:, unu isiusü: nusuMtui iM:ke: uri:, funi-N nu:Ltui, 台所-に-へ 忍び込み その 石臼-を 盗んで 海-へ 下りて 舟-に 乗って 台所へ忍び込み、その石臼を盗んで海へ下り、舟に乗って、 [民 Joh-10-注 4]

なお、上の例 2-53 は、その動詞が意志形の形をとって現れているため、<到着性>ではなく<指向性>が表されていると捉えるべきだろうが、空間名詞とこのタイプ動詞のくみあわせによって表される語彙=文法的な意味とは言えないため、他の用例から区別していない。

また、1 例だが、Ø 格の名詞とくみあわさって<到着性>を表している用例も現れた。

- 2-56 kusuka-nu ika, nubasi:-ga katami: ja: cika-zī:=ga-ti: buL-ke:, [民]^{xvii}

こんな[量]-の イカ-Ø どのように-か 担いで 家-Ø 着こう=か-と いる-うちに

こんなにたくさんのイカ(を)、どのように担いで家(に)着こうか{note.どのように持って帰ろうか、ということ}と(考えて)いるうちに、

このように、「入ル,着ク」動きを表す動詞は、ni 格と Nka 格、また Nke:格や Ø 格のいずれの形式の名詞とのくみあわせにおいても<到着性>を示すことが明らかになった。よって、このタイプの動詞の意味特徴は、<到着性>であると規定してよい。

1-5. 「行ク」と「来ル」

最後に、「境遇性」の介入する、iki(行く)や ki:(来る)などの動詞について記述していく。寺村 1982 では、共通語の「行く,来る,帰る」について、次のように述べている。「話し手が発

話時にいる場所、または話し手がふだんいる場所、属しているところ(まとめて「自分の領域」と呼ぶ)が、出発点、到達点として言わなくても了解されている点が共通している。そして、「行く」は、出発点が自分の領域、「来る」は逆に到達点が自分の領域、そして「帰る」は、自分の領域から出発してどこかへ移動し、また自分の領域へ移動するということが了解されている(p115)。つまり、これらの動詞には、<表現主体¹⁸が(今)いるトコロ>に依存する性質、言い換えれば、「場面に左右される性質」(三上 1953:34)がみとめられるということである。三上 1953 は、「記号」にみられるこのような性質を「境遇性」と呼んでいる(p34)。また寺村 1982 は「戻る」にもこの「境遇性」をみとめているが、他の3つの動詞とは異なり「自分の領域」はあまり関わらず、「単に移動の始点と終点が同じ」となるのものとしている(pp115-116)。多良間方言にも「戻る」に対応する *muɖuL*(戻る)が現れており、この動詞についてもここで取り上げる。また、共通語の「帰る」が借用語として用いられることがあり¹⁹、その場合も、このタイプの動詞の用例として扱っている。

では、多良間方言の動詞について見ていこう。まず *iki*(行く)について、この動詞は 1-3 で見た「通ル」動きを表す動詞の<移りうごくトコロ>を表す動詞のうちの、「方向性」のグループに含まれるものである。よって *iki* も、基本的にはそれらの動詞と同様の用法を示している。<経路性>の用法については、1-3 でも示した通りである。

2-57 *kunu micü: masu:gu wa:L-taka:, jakuba: uma-N aL.*

この 道-を まっすぐ いらっしゃったら 役場-は そこ-に ある

この道をまっすぐ行かれたら、役場はそこにある。 {=例 2-20}

2-58 *kju:-ja, unu, mi: cuqfi hiko:zjo:micü-kara, iki: mi:-daka: nar-aN.* [狂言]

今日-は その 新しい 作る 飛行場道-から 行って みなければ ならない

今日は、その、新しく作った飛行場道から、行ってみなければならぬ(ft.行ってみよう)。 {=例 2-29}

そして、*ni* 格や *Nka* 格、*Nke* 格、そして $\emptyset$ 格の空間名詞とくみあわさって、<到着性>の空間的な意味を表す用法が見られる。また、*-Nke* に *-Nka* が前接する複合格助辞的な形式をとっている名詞とくみあわさっている用例も現れている。このとき、その名詞によって指し示されているトコロは<到着地>である。

2-59 ~*sju:-ja, jama-N*, {中略} *tamunu su-ga wa:riqti:*, [Oj-c-1-A1~A2]

お爺さん{主}-は 山-に 薪- $\emptyset$ し-に いらっしゃって

お爺さんは、山に、{中略} 薪(を)しに(ft.薪取りに)行かれて、

2-60 *kunu uranaisja-nu ja:-Nka iki:-du mazu pazime: rju:-nu kutu-kara naru: ba:.*

この 占い者-の 家-に 行って-ぞ まず 始め-は 龍-の こと-から 習う 場合

この占い者の家に行ってまず始めは龍のことから習う(ft.聞いた)。[民]^{viii}

¹⁸ なお、第1章の注18でも触れたが、本研究でいうところの「表現主体」には、「語り」のテキストにおいて、「語り手」による、いわゆる直接話法によって言い表された台詞の「発話者」たる物語の登場人物なども含めている。また本章では、会話のテキストにおける、引用節で示されたデキゴトに関わる第三者(「元々の」発話者、あるいはそのデキゴトの「場」のヒトなど)も、これに準じるものとして扱っている。

¹⁹ 平山 1983 では、多良間方言の、共通語の「帰る」の意味を表す語について、「帰る」に該当する語はなく「行く」、「来る」と同語形」と述べている(p450)。なお、「帰る」に音韻的に対応する/*kaiL*/は、「ひっくり返る、倒れる」の意を表す動詞であり、よって例 2-93 などに現れている/*kaiL*/は、借用語である/*kaeru*/が多良間方言との音韻対応により、*kaiL*(返る)と同音形式をとって現れたものであると考えられる。

- 2-61 aL pītu-nu-du, kunu hoNja-Nke: hoN kau-ga-ti, hoN kau-ga-ti: wa:riqti:,
ある 人-の-ぞ この 本屋へ 本-Ø 買いに-と 本-Ø 買いに-と いらっしやって
ある人が、この本屋へ本(を)買いにと、本(を)買いにと行かれて、[民 Joh-15-2]
- 2-62 “taNkibo:-nu gakī, ida-nu sīma iki-baM qva:, aNsi: taNki-ju-te:ka si:
短気坊-の がき どこ-の 島-Ø 行っても あなた-は そのように 短気-を-[限定] して
bu-taka: Mme, nu:-ga sī: gumata=ga. ~” [民 Joh-20-34]
いたら もう 何-を-か する [強い推量]=か
「短気坊のガキ、どこの島[に/へ]行ってもあなたは、そのように短気をばかりして
いたらもう、どうするのか。～」
- 2-63 e:, pa:ma-Nka-Nke: iki: sja:ri iki asībasī=sja:mi, si:. [Kij-b-7-B2]
[間] 浜-に-へ 行って 連れて 行って 遊ばす=さ そう
えー、浜へ行って、連れて行って遊ばせるさ。そうよ。

<経路性>も含め、これらの用例のいずれでもその<出発地>は明示されていないのだが、その動詞の語彙的意味によって、その動きがいわゆる「自分の領域」を<起点>として行なわれていることは既に了解されている。例えば、上に示した用例のいずれでも、「(自身の)家」を<出発地>として想定することができるだろう²⁰。また、次の例 2-64 のように、その<起点=出発地>が kara 格の空間名詞によって明示されることもある。

- 2-64 ~ti:, ukīna:-kara, usukanu pītu-nu Mme-nu, mi:-ga-ti:-ja ikīiki, kunu qsi-uzu:
-と 沖縄-から たくさんの 人-の [Pl.]の 見-に-と-は 行き行き この 白うなぎ-を
kurusī-taL pītu-nu saNdaime-nu pītu-mai, kerama-Nke: mi:-ga-ti:, iki: ukī=sja:mi:.
殺した 人-の 三代目-の 人-も 慶良間-へ 見-に-と 行っておく=だろう
~と、沖縄から、たくさんの人たちが、{note.変わった家を}見にと行って、この白うなぎを殺した人の三代目の人も、慶良間へ見にと、行ったのだろう。[民]^{xviii}

また多良間方言では、iki(行く)だけでなく、tubi(行く{飛ぶ})という動詞にも共通語の「行く」に対応する意味・用法がみとめられる。また、<様態>的な意味をあわせもつ tuNdiL(急いで行く{飛んで行く})という動詞も現れている。以下の用例について、例 2-65 では<経路性>、例 2-66,67 では<到着性>の空間的な意味がそれぞれ表されている。

- 2-65 unu pītu:, micī-nu isi-N marukiqti:, uma-kara tubi pītu-nu Mme-N, jaL-si:
その 人-は 道-の 石-に 縛られて そこ-から 行く{飛ぶ} 人-の [Pl.]に 槍-で
cīkasī, cīkasū: si: kuruśi-taL-ti:. [民 Joh-19-注 3]
突かす 突かすの-を して 殺した-と
その人は道の石に縛られて、(そして大將はその人を)そこから(ft.を)行く人たちに、
槍で突かせる、突かせて殺したそうだ。{=例 2-28}
- 2-66 uma-Nkanu jumi-gama:, paL-Nke: tubi:L.↗ aNga:. [Oj-d-21-B1]
そこ-にの 嫁-[指小]-は 畑-へ 行っている{飛んでいる} 姉

²⁰ また、「語り」の地の文における登場人物の行動描写の文では、厳密な意味での「自分の領域」に当てはまらないトコロが移動の<起点>として差し出されることがある。だがこの場合も、「動作主体」が<いる/いたトコロ>からの移動が指し示される点において、いわゆる「自分の領域」を<起点>とする用法に準じるものとして扱うことができるだろう。

その嫁は、畑へ行っている？姉さん。

- 2-67 Nna-u sjaukitui, unu gama-u-kara nuNdi: Mme, kada:-ni:-Nke: tuNditui,
 縄-を 引いて その 洞穴-を-から 出て もう 遠く-に-へ 急ぎ{飛んで}行つて
 縄を引張つて、その洞穴から出てもう遠くへ行つて、[民 Kad-1-13]

次に ki:(来る)について見ていく。共通語の場合、「来る」にもヲ格の空間名詞とくみあわさつて<経由性>を表す用法が見られることから²¹、「行く」と共に<方向性>の動詞グループに含めることができる。だが、多良間方言では、今のところ ki:(来る)が NP-ju の形式の空間名詞とくみあわさっている用例はほとんど現れておらず、また、以下に示しているように、kara 格の空間名詞とのくみあわせにおいても、<経由性>ではなく、<出発性>が示されている。

- 2-68 ~uNkita-ga, sisike: buL-ke:-du, sisike: buL-ke:-du, mura-kara nika-gama-nu,
 これら-が 争つて いる-うちに-ぞ 争つて いる-うちに-ぞ 村-から 猫-[指小]-の
ki-ba, [民 Toj-1-24]
 来るので

これたちが争っているうちに、争っているうちに、村から猫が来る(ft.来た)ので、

- 2-69 aparagi munu:, miduM-ba si:-nu pïtu-nu-du, pï-ni ifuki-ga-ge:ra: paL-kara ki:
 美しい 者-を 妻{女}-(を)ば して-の 人-の-ぞ 日-に 何回-か-やら-は 畑-から 来て
 miduM:ke:, “qva-ga mipana-gama-u mi:-daka:-du, sigutu-nu nar-aN”-ti:. [民]^{xix}
 妻{女}-へ あなた-が 顔{目鼻}-[指小]-を 見なければ-ぞ 仕事-の ならない-と
 美しい者を妻ををしての(ft.美人を妻にした)人が、日に何回かは畑から来て妻へ、
 「あなたの顔を見ないと仕事にならない(ft.できない)」と。

- 2-70 ~paL-u:, kaduzuke:=sja, kaLNta-ga nakabaL beta-ga paL-to:. kaduzuke:-ju
 畑-は 角付け=さ あれたち-が [畑名]-Ø 私たち in-が 畑-とは 角付け-を
 si:-du buL. sju: jari: wa:L-taqra, ara hanako:, we: uma-kara ki: kadi-da,-ti
 して-ぞ いる 主-Ø? やり なさったの-は [感] 花子 [間] そこ-から 来て 掘つたら-と
 M:-mai kadisi. [Oj-a-12-A1~A2]
 芋-も 掘らす

(あの家の)畑を(ft.は)、角付けさ{note.畑の境が接しているということ}、あの人たちのナカ畑(と)、うちの畑とは。角付けをしている。(うちの)お爺さんでいらっしゃった(方)は、ほら花子{note.「あの人」を指す}、そこからきて掘りなさい、と芋も掘らせる(ft.掘らせた)。

すなわち、多良間方言の ki:(来る)は、<経由性>の空間的な意味を表す用法をその中核としていないということが考えられるのである。以下の例 2-71 についても、述語動詞 wa:L(ki: の敬体動詞)が「出現物のでどころのむすびつき」をつくる「出現動詞」としてはたらい

²¹ 例えば、寺村 1982 では、「歩くなどと同じように通過の動作と似通った意味で使われるとき、(中略) 通過場所の補語「~ヲ」が現れることがある」として、「コンナ大雨ノ中ヲ来テ下サツテ…」という例文を示している(p117 下線引用者)。なお、この例文を多良間方言で言い表そうとすると、以下に示すように、その名詞句は-Nka-ju という複合格助辞的な形式をとって現れる。

cf. kuNsinu upuami-Nka-u, wa:ri: qfi: wa:L-tari:, arigato:.
 このような 大雨-に-を いらっしゃつて くれ なさつて アリガトー

ることから²²、その名詞が、動きの<起点=出発地>を指し示していることは明らかである。なお、<出入口>という語彙的意味のみとめられる名詞とくみあわさる場合には、*ki:*も<経由性>の空間的な意味を表すことができる(例 2-72)。

2-71 *uNsjukunu u:ami-Nka-kara, qsi-pigi-sju:-nu wa:riqti:*, [民]^{xx}

ものすごい 大雨-に-から 白髭爺-の いらっしゃって

ものすごい大雨(の中)から、白髭爺(ft.白髭のおじいさん)がいらっしゃって、

2-72 “~ *urazjo:-mai maizjo:-mai ari:-nu ja:-ja ari:, urazjo:-kara wa:ri asibaqzi-ba*”

裏門-も 前門-も あって-の 家-Øは [COP] 裏門-から いらっしゃれ 遊ぶから

-ti: *miduM-nu i:-taL-ti:*. [民]^{xxi}

-と 女-の 言った-と

「~ 裏門も前門もある家であるので、裏門からいらっしゃい、遊ぶから」と女が言ったそうだ。

そして、以下に示しているように、*Nka* 格、*Nke:*格、また *Ø* 格の空間名詞とくみあわさって<到着性>の空間的意味を表す用法がみとめられることから、*ki:*は、「通ル」動きを表す動詞よりも、「入ル」動きを表す動詞と似たふるまいをする動詞であると言えそうである。

2-73 ~ *qsituL Mni-nu, upuga-nu tuMbara-u katamitui, tubagari: ki:-ba, kiqti:-du,*

白鳥-Ø 群-の 大きな 岩-を 担いで 飛んで 来るので 来て-ぞ

paLmau, tamadara-ga zi:-Nka ki:, juke:, buL-badu, {中略} paLmatamadara:, “uma:

言淀 タマダラ-が 畑{地}-に 来て 休んで いると 波利間タマダラ-は そこ-は

ba-ga.....zi:.....ari: mutagirai-daka: uma-N uciki-mai junumunu”-ti: i:-badu,

私-が 地-Ø [COP] 持ち上げられないなら そこ-に 置いても 良い-と 言う

白鳥(の)群が、大きな岩を担いで、飛んで来るので、来て、(波利間)タマダラの土地に来て、休んでいて、{中略}波利間タマダラは「そこは私の土地だから、持ち上げられないならば、そこに置いても良い(ft.構わない)」と言うと、 [民 Noz-4-2~4]

2-74 *aNsi:du, niNgiN-nu ja:-Nke: mazimunu-gama-nu ki: ba:-N-ja, Ncja umaci-ja*

それで 人間-の 家-へ お化け{マジ物}-指小-の 来る 場合-には [感] 火-は

ne:N-ni:, Mme cja:-mai, -ti:-mai fukasjai-N gumata. [民 Joh-12-3,注 2]

ないから もう 茶-も -と-も 沸かせない [強い推量]

それで、人間のところへお化けが来る時には、火はないので、もうお茶も、(お茶)とも{note.言換えている}沸かせない。

2-75 *agai, Mme qva: siNsi:miduM nariqti: Mme, aNta-ga sima: ki:-N:=na:. @*

[感] もう あなた-は 先生-女-Ø なって もう 私たち ex.-が 島-は 来ない=な

ああ、もうあなたは(ft.も)女(の)先生(に)なってもう、私たちの島(に)は来ない(だろう)ね。 [Kij-a-9-A4]

²² 荒正子 1975 は、カラ格の空間名詞と移動動詞のくみあわせに見られる「出発点のむすびつき」と「出現物のでどころのむすびつき」のちがいについて、「出現物のでどころのむすびつきではふつう、が格の名詞が存在して、動作の持ち主-物・現象-をさしだしてくれる。これによって、むすびつきは、出現物のでどころであることがわかる」と述べている(言語学研究会編 1983:407)。実際例 2-71 でも、「出現物」である「白髭爺」は共通語のガ格に対応する *nu* 格によって差し出されている。また、『民話』でも、「大雨の中から(中略)あらわれて」(p83 下線引用者)のように、共通語訳されている。本稿第3章も参照されたい。

このとき、その名詞によって指し示されているのは<到着地>としてのトコロであり、そのいずれのトコロも、<表現主体の(今)いるトコロ>、すなわち、「自分の領域」となっている。これは例えば、例 2-73 と 2-75 で差し出されている「畑」と「島」が、いずれも、「私の」という第1人称の代名詞によって規定されていることから明らかであろう。なお、*kī*:(来る)を述語とする文ではこの<到着地>の明示は必ずしも必要ではなく、以下の例 2-76 のように、たとえそれが文脈にも示されていなくとも「反問誘発」²³は起こらない。

2-76 B; *bikiduM-ti i:ta, e: nu:-ti-ga i:-taL. Nna, zinaN-nu-du ku:-zi:-ti bu-taL=dara:na.*

男-と [言淀][間] 何-と-か 言った [間] 次男-の-ぞ 来る[推]-と いた=だろう

男って、えー何と言ったか。次男が来るといた(ft.言っていた)よね。

A; *uL-ga uja-ga-du kī-taL-ti:=jo:.* [Oj-c-3-B1~A1]

それ-が 父親{親}-が-ぞ 来た-と=よ

その子の父親が来たってよ。

このように、*kī*:(来る)という動詞を述語とする文では、その動きが「自分の領域」を<着点>として行なわれていることが既に了解されているのである。*kī*:に見られるこのような意味特徴は、*iki*(行く)が、「自分の領域」をその<出発地=起点>として了解させていることと対称的である。そしてその対称性は、次の例 2-77 に明らかである。この用例では、<表現主体が(今)いるトコロ>である「多良間」は、*iki*(行く)という動きの<出発地=起点>であると同時に、*kī*:(来る)という動きの<到着地=着点>ともなっている。

2-77 *ku:ko:-N-du deai:-ti:, nara-ga oto:-to:.. tarama-kara, oto:-ja iki, nara:*

空港-に-ぞ 出会った-と 自分-が お父-と 多良間-から お父-は 行く 自分-は

kuma-Nke: kī:-ti:.

ここ-へ 来る-と

空港で出会ったって、自分のお父さんと。多良間から、お父さんは行く、自分はここへ来る(ft.来た)って。

以上の記述から、多良間方言の *iki* と *kī*:にも「自分の領域」に関わる「境遇性」がみとめられること、そして、それぞれの動詞によって表わされる移動の<方向>が、対称的であることが明らかになった。だが、共通語の「行く」と「来る」の場合と異なり、その対称性は絶対的なものではないようである。例えば以下の用例、

2-78 “*aLpi:, jaNbaru-Nke:-ti: kī:-ke:N, jama-nu naka-Nka fusju: mari: buL-badu,*

ある日 山原-へ-と 来-ながら 山-の 中-に 糞-を まって いると

「ある日、山原へと来ながら(ft.行きながら)、山の中で糞をまっていると、~」[民]^{xxii}

2-79 “*agai nama:, me: buL-ga-jara nu:-ga-jara-nu, -daki-nu, jasjai-nu-mai-du,*

[感] 今 芽吹いて いる-か-やら 何-か-やら-の -だけ-の 野菜-の-も-ぞ

pītui-ni: naL nari:L gumata=na”-tu umu:-nagara, “hai”-ti:, nu:ritui idiL:-baḍu,

1日-に 実-Ø なっている [当然]=な-と 思い-ナガラ [感]-と 乗って 出る-と

agaitaNdi sibuL-nu naqra, Mme uNsjuku-du sugu:, uqpugi: unagina si:

[感] 冬瓜-の 実-は もう たくさん-ぞ すぐ とても大きく とても長く して

²³ 序論4の注63を参照。

buL-ba, uL-u: muri:, Mme nu:ma-N cuM-ke:(na) ja:-Nke: ki:-badu,
 いるので それを もいで もう 馬に 積みながら 家へ 来ると

「おや、今芽吹いているか何かの、だけの野菜が、1日で実(が)なっているのか」
 と思いナガラ、「はい」と、(馬に)乗って出ると、おやまあ冬瓜の実は、もうたく
 さん、とても大きくとても長くしているので、それをもいで、馬に積んで家へ来
 ると(ft.行くと)、[民 Joh-5-43~44]

上の例 2-78 は、「寢床」での「夫」から「妻」への台詞の一部であることから、動詞 *ki:* が表す動きの<到着地>として差し出されている *jaNbaru*(山原)は、<表現主体が(今)いるところ>ではないことがわかる。また例 2-79 も、*sibuL*(冬瓜)を取りに「出て」、そこから「家」へと向かう動きが、*ki:* という動詞によって表されている。つまり、これらの用例の動詞 *ki:* は、「自分の領域」あるいは「動作主体」が<いる/いたところ>を、<出発地=起点>とする動き(移動)を表わしていることになる。この *iki* と *ki:* の混同は、第1章の第2節で述べた、同じく「境遇性」の高い品詞である指示代名詞 *uma* が *kuma* と混同されて用いられることとも重なって、共通語においてはかなり強固な「ここー来る」「そこー行く」という連動ー共起関係を、緩めてしまっているようである²⁴。以下に示すように、多良間方言では、「そこー来る」のような表現が許容されている。

2-80 hotokesama-nu Mme:, kunu sje:me:-u, “nu:-ti-ga qva:, uga pe:sja,
 仏様の [Pl.] は この 清明を 何と-か あなたは これほど 早く
uma-Nke: ki: gumata: ara-N, nigiN-nu uga pe:sja kuma-Nke:...ki:=ga”-ti
 そこへ 来る [当然]-Ø は [COP]-否 人間-の これほど 早く ここへ 来る=か-と
 simi: wa:L-badu, [民 Joh-17-27] {=第1章例 1-51}
 責め なさるので

仏様たちは、この清明を「どうしてお前は、こんなに早く、そこ(ft.ここ)へくるべきではない人間が、こんなに早くそこ(ft.ここ)へ来るのか」と責めなさるので、

2-81 uma-Nka wa:ri: panasī-gama-uba sjuda:, Mme:. Mme ba-ga ja:-Nke.
 そこに いらっしゃって 話-[指小]-をば したら もう もう 私-の 家へ
 そこに いらっしゃって話を、もう。もう私の家へ(帰るよ)。[Oj-d-26-B2]
 {=第1章例 1-48}

iki と *ki:* のこのような混同は、補助動詞として他の動詞とあわさって用いられている用例にも多少見られる。次の例 2-82 では、第3称の指示代名詞 *kama*(あそこ)とあわせ動詞 *idi:* *ki:*(出て来る)がくみあわさって、<到着性>が表されている。

2-82 si:du kama-Nke: idi: ki: muno: uga raku=sja, [民 Joh-6-注1]
 それで あそこへ 出て 来る もの-は 大変 楽=さ
 それであそこへ出て来る(ft.出て行く)者はとても楽でしょ、

だが、補助動詞としての用法でもこの *iki* と *ki:* の対称性は守られている場合の方が多く、共通語ほど強固ではないけれども、一応の規範となっはいるようである。以下の用例で

²⁴ なお、この場合の「ここ」「そこ」は、移動の<着点>である。

もその空間名詞が指し示しているところはいずれも(表現主体あるいは動作主体にとっての)「自分の領域」であるが、これらのところは、ikiを伴うあわせ動詞とのくみあわせでは<出発地>、kiを伴うあわせ動詞とのくみあわせでは<到着地>として差し出されている。

2-83 “~ be:ta:, ure:-tuM ne:N-niba, kunu ja:-kara nuNdi: ika-daka: nar-aN”-ti,

私たち in.-は それ-は?-さえ 無いから この 家-から 出て いかなければ ならない-と

「~ 私たちは、その人もないから{note.主も亡くなったから}、この家から出て行かなければならない{note.この場合は「出て行く」ことへの強い意志}」と、 [民]ⁱⁱⁱ

2-84 miNnauki-Nke: kugi-ba si:, wa:L-badu, Mme nara-ga fune: aka-nu-du i:zi: ki:.

水納沖へ 漕ぎ-(を)ばし なさると もう 自分が 舟-は 海水-の-ぞ 入って 来る
水納沖へ漕ぎなさと、もう自分の舟(に)は海水が入って来る。 [民 Kad-1-29]

2-85 umagoja-Nke: pari: iki:, unu amadaL-kara Mme pari: iki:, [民 Joh-3-8]

馬小屋へ 走って 行って その 軒{雨垂}-から もう 走って 行って

(狼は)馬小屋へ走って(ft.急いで)行って、その軒からもう走って(ft.急いで)行って、

2-86 Mme kju:-bakaL-ja ki:=pazi-ti: umu:tui, zjo:no:Nnu: uri: buL-ke-du, bo:-nu

もう 今日-ばかり-は 来る=はず-と 思っ 上納布-を 織っ てる-うちに-ぞ 蛇-の

futakara nara-ga si:ta-Nke: pe: ki:-ba, [民]^{xiv}

二匹-Ø 自分が 下-へ 這っ てる-ので

もう今日あたり(帰って)来るだろうと思って、上納布を織っていると、蛇が二匹自分の下へ這って来るので、

また、以下の用例のように(前者では<出発地>、後者では<到着地>としてのところを指し示す)空間名詞が現れていない場合でも、「自分の領域」が、その動きを表す動詞が iki を伴うあわせ動詞であるときは<出発地>、kiを伴うあわせ動詞であるときは<到着地>であることは既に了解されている。

2-87 muNke: uL-u:, fu:ziNsaN-ju tubasiqti:, moN-gami idi: kaqfi: tati: mi:

門へ それ-を 婦人さん-を 行かせて{飛ばせて} 門-まで 出 隠れて 立って 見て

buL-badu, paka-Nka-Nke: kumari: tubi-taL-ti:. unu fu:ziN-ja=ju.↑ [民 Joh-14-8]

いると 墓-に-へ 入っ 行っ った{飛んだ}-と その 婦人-は=よ

門へその人を、婦人さんを行かせて、門まで出て隠れて立って見ていると、墓へ入って行ったそう。その婦人はね。

2-88 ~juka:ra-kara mata, kasjara,kasjara-ti:, nuNdi: ki:-ba, “kuja mata”-ti: bu-taka:-du,

横側-から また [擬音語]-と 出 来る-ので こ(れ)-は また-と いたら-ぞ

agai, du:-ga ina-gama, [民 Ork-1-注 1]

[感] 自分が 犬-[指小]

横側からまた、カシャラカシャラと、(何かが)出てくるので、「これはまた」とい
たら、ああ、自分の犬(だった)。

つまり、iki, ki を補助動詞とするあわせ動詞では、そのくみあわせられる動詞(si:)の語彙=文法的な意味特徴に関わらず、si: iki では「とおのくうごき」が、si: ki: では「ちかづくうごき」が表されるということである(高橋他 2005)。これは、移動を表す動詞以外とくみあわさる場合でも同様であり、多良間方言の補助動詞 iki, ki には、それがくみあわさる動詞に、一

定の<方向性>を与える働きがあることがわかる。

- 2-89 ina-nu akaci:-ju si:gu-N mamitui ki:, “we:, kurusiqtı:-du ki:-do:”-ti: mi:si:L-badu,
 犬-の 血-を 小刀-に まみって 来て [間] 殺して-ぞ 来る=よ-と 見せていると
 犬の血を小刀に塗ってきて、「ほら殺して来る(ft.来た)よ」と見せていると、[民]^{xxiii}

- 2-90 A. muka-da:, aNta-ga mikaN-ju.

剥いたら 私たち ex.-が みかん-を
 剥いて。うちの蜜柑を。

- B. fe:qte ki:. [Oj-d-2-A8~B9]

食べて 来る
 食べて来る(ft.食べて来ている/食べて来た)。

- 2-91 nada-gama-u utusi: buri:-du, Mma: “uri, uri saigo-nu Mma-ga ti:pani-gama-u,
 涙-[指小]-を 落として いて-ぞ 母-は [感] [感] 最後-の 母-が 手作り-[指小]-を
fe:qti: iki”-ti: kaudakitui naki: [民]^{xx}

食べて 行け-と 抱きついて 泣いて

涙を落としていて、母親は、「さあさあ、最後の母の手作り(のご飯)を食べて行きなさい」と抱いて泣いて、

最後に muduL(戻る)と kaeru(帰る)についてみていく。これらの動詞には、ni 格、Nke:格の名詞とくみあわさって<到着性>の意味を表す用法が見られる。

- 2-92 unu naifu: piticu muqtui, du:-nu ja:-Nke: muduri:, [Tok-18]

その ナイフ-を 1つ 持って 自分-の 家-へ 戻り

そのナイフを1つ持って、自分の家へ戻り、

- 2-93 “~ karası-taL ziN-ju, muti:-du baN-ja sıma-N-ja kairu gumata aLru-gadu, unu
 借らした 銭-を 持って-ぞ 私は 島-へ-は 帰る [当然]-Ø [COP]-逆接 その
 ziN-ju para:i-N, piNgi:, para:-maN-ti:nu kimoci idi-ba kaNsi:, nu:ri: ki:,
 銭-を 払わないで 逃げて 払わない-との 気持ち-Ø 出るので あのように 上って 来て
 kuma-Nka kaqfi: buL=na”-ti:, [民 Joh-20-11~12]

ここ-に 隠れて いる=な-と

「~ 借らした(ft.貸した)お金を持って、私は島には帰るべきであるけど、そのお金を払えないから逃げて、(あるいは)払うものかという気持ち(が)出て、あのように(ft.このように)、上って来て、ここに隠れているのか」と、

例 2-93 の kaeru(kaiL)²⁵は共通語からの借用である。「帰る」と同じく、その名詞が指し示している<到着地>としてのトコロは「自分の領域」であり、やはり「自分の領域から出発してどこかへ移動し、また自分の領域へ移動するということが了解されている」。例 2-92 の muduL も、その<到着地>は「自分の領域」であるが、次の例 2-94 のように、「自分の領域」以外のトコロも<到着地>として差し出せることから、やはり共通語の「戻る」同様、単に<起点>と<着点>を同じくする移動を表している。

²⁵ 本章の注 19 を参照。

- 2-94 kunu miduMqva: pari: iki: nara-ga nasī Mma-Nke: “haihai, qva-ga...kunumai
 この 女の子は 走って 行って 自分が 生し 母へ [感] あなた-が この前
tanumi: wa:L-taL kanu pīu-nu-du muduri: wa:L”-ti: kju:N munu: ī-badu, [民]^{viii}
 頼み なさった あの 人-の-ぞ 戻り なさる-と 急に もの-を 言うので
 この女の子は走って行って自分の生し母{note.生みの親ということ}へ、「はいはい、
 あなたがこの前頼みなさったあの人が戻りなさる(ft.戻りなさっている)」と急に
 ものを言うので(ft.言ったので)、

1-6. gami 格の空間名詞とのくみあわせ

また、共通語のマデ格「相対的に自立性が高い格形式」(岡田 2000:116)であるが、それに
 対応する gami 格の空間名詞と移動動詞とのくみあわせについても、ここで示しておこう。
 前章の 3-1-5 で、gami 格には「動作や状態の及ぶ範囲や動作・状態達成までの、限定された
 範囲を表わす」用法(空間的な意味について言えば<到着性>)がみとめられたが、以下の用例
 に明らかなように、その用法は、くみあわさる動詞の語彙=文法的な意味特徴に関わらず
 一定である。つまり gami 格は、共通語のマデ格同様「動詞の語彙的意味の特性からはある
 程度独立し」た形式(同上:116)であると言える。

- 2-95 ~Mme du:-ga ja:-Nke:-ti: zjo:-gami idiqte:, uma-N kaqfi:riqti:, [民 Joh-10-注 3]
 もう 自分が 家へ-と 門-まで 出て そこ-に 隠れていて
 もう自分の家へと門まで出て、そこに隠れていて、

- 2-96 sa:, usī-gama, sa: ba-ga maqvuL, ja:-gami niNgakiN pari: qfiru
 [感] 牛-[指小] [感] 私-が 守り神 家-まで 一生懸命{念掛けに?} 走って くれろ
 さあ牛よ、さあ私の守り神よ、家まで一生懸命走ってくれ [民 Toj-1-注 16]

- 2-97 kumaL naka-gami kumarai-du si. [Oj-b-11-C14]
 入る 中-まで 入れ-ぞ する
 (車も)入る、中までもう入れる。

- 2-98 “aNti, ara unu, jadu: kari: wa:L-taL pīto: ida-gami-ga wa:L=ga”, “ke:,
 それで [間] その 宿-を 借り なさった 人-は どこ-まで-か いらっしゃる=か [間]
kama-M:na-gami-du wa:L”-ti:, [民 Isg-3-26]
 あそこ-辺り-まで-ぞ いらっしゃる-と
 「それで、その宿を借りなさった人はどこまで行かれる(ft.行かれている)か」、「ほ
 ら、あそこ辺りまで行かれる(ft.行かれている)」と、

- 2-99 bunazje:-nu kaMganasī-tu, mata bikiL-gama-tu:, Mme, uine:cizi-gami, wa:L,
 ブナジェー-の 神加奈志-と また 兄or弟-[指小]-と もう ウイナー丘-まで いらっしゃる
 tocju:-N, [民 Joh-18-14]
 途中-に
 ブナジェーの神様と、また兄と、ウイナー丘までいらっしゃる途中に、

1-7. 多良間方言の主体的な移動動詞の類型

以上、多良間方言の「ヒト=イキモノの移動」の表現に関わる動詞について、その動詞と
 くみあわさる名詞の「格の形式・その格の名詞がある動詞とともに用いられることによって
 表す語彙-文法的意味・その動詞の語彙的意味という三者の相互関係という観点」から、記述

を試みてきた。ここまでの考察の内容を、以下にまとめて示しておく。

1. 「出ル」類；

- ・ *kara* 格名詞とくみあわさって、<出発性>の空間的な意味を表す。
 - ・ <到着地>を表す *Nke*:格, *ni* 格の名詞によって広げられる。
- ex. *idiL/NdiL, nuNdiL*(出る), *tuNdiL*(飛び出る), *paidiL*(這い出る), *buduLdiL*(踊り出る), *piNgiL*(逃げる), *hiqkosi iki*(引越していく), *uriL*(おりる), *utiL*(落ちる), *jarasjaiL*(遣らされる), *wa:(r)iL*(追われる), *afuriL*(溢れる), …

2. 「通ル」類；

- ・ *ju(ba)*格, *kara* 格, $\emptyset$ 格の名詞とくみあわさって、<経路性>の空間的な意味を表す。
 - ・ その名詞が指し示す<経路地>は<移りうごくトコロ>と<通りぬけるトコロ>に分けられ、前者のトコロとくみあわさる動詞はさらに、「方向性」のグループと「様態」のグループに分けられる。
 - ・ <到着地>あるいは<目的地>を表す *Nke*:格の名詞によって広げられる。
- ex. [移] *aLki*(歩く), *paL*(走る), *iki*(行く), *tubi*(行く{飛ぶ}), *ma:L*(回る), *isjugi*(急ぐ), *taduL*(辿る), *keNbucu si:*(見物する), *miguL*(巡る), *tumiL*(探す), *uigi*(泳ぐ) …
- [通] *kaju:*(通う), *kuiL*(越える), *tu:L*(通る), *sigi*(過ぎる{過ぐ}), *bataL*(渡る), *kusi*(越す), *fukiL*(くぐる), …

3. 「入ル,着ク」類；

- ・ *ni* 格, *Nke*:格の名詞とくみあわさって、<到着性>の空間的な意味を表す。
 - ・ 但し、「入ル」動きを表す動詞には *Nka* 格名詞を要求する傾向がある。
- ex. a. *ciki*(着く), *nu:L*(乗る,上る), *agaL*(上がる), *aNcjaku: si:*(安着する), *juL*(寄る), …
- b. *kumaL*(入る), *tubiNki*, *tubikuM*(飛び込む), *sinubikuM*(忍び込む), *siziMnuki*(沈み込む), *muguL*(潜る), …
- c. *tabaL*(集まる{溜る?}), *sjuru:*(集まる{揃う}), *kaqfiL*(隠れる), *siziM*(沈む), …

4. 「行ク,来ル」類；

- ・ *iki*(行く)は「通ル」類の<方向性>のグループに含まれる動詞である。だが、*ki:*(来る)には<経路性>がみとめられず、「入ル」類の動詞と似たふるまいをしている。
- ・ *iki* と *ki:*には、「とおのくうごき」と「ちかづくうごき」という、移動の方向の対称性がみとめられる。共通語と異なり絶対的なものではなく、混同も見られるが、一応の規範とはなっている。
- ・ *muduL*(戻る)は、<起点>と<着点>を同じくする移動を表す。
- ・ *kaeru(kairu)*は、<起点>と<着点>が「自分の領域」である移動を表す。

第2節 モノの移動の表現

2-1. 対象的な空間的な移動を表す動詞の類型

「モノの移動の表現」を、*X*(し手)が *Y*(対象,相手)に働きかけて、その働きかけの結果、*Y*(対象, *Y*=対象)あるいは *Z*(対象, *Y*=相手)の空間的な位置が変化することを表す表現、と規定しておこう。この表現には大きく2つのタイプが見られ、寺村 1982 の下位分類によるならば、

「入レル,出ス」表現」と「授受の表現」の一部がこれに関わる。寺村 1982 ではこれらの表現を、それぞれ、「働きかけと移動の複合」、「働きかけと対面と移動の複合」と規定している。「入レル,出ス」類の動詞について、このタイプの動詞には、前節で見た「出ル」「通ル」「入ル,着ク」類の動詞と形態的に対立する他動詞、あるいはその使役形などが含まれ、それをそのままこの類の動詞の下位分類とすることができるとされている。また、授受表現に関わる動詞について、動作主体(<し手>), <相手>, <働きかけの対象>の関わり方から、「与エル」類、「受ケル」類、「ヤル,モラウ,クレル」類、「命ジル」類の4つが区別されている(序論4の4-2 参照)。

以下では、これらの動詞のうち、具体的な空間的な移動の表現に関わるものとして、「入レル,出ス」類の動詞と、「授受の表現」のうちの「命ジル」類を除いた3つについて、前節と同様、「格の形式・その格の名詞がある動詞とともに用いられることによって表す語彙-文法的意味・その動詞の語彙的意味という三者の相互関係という観点」からの記述を試みていく。

2-2. 「入レル,出ス」類の動詞

上で規定した「モノの移動の表現」のうち、「入レル,出ス」類に含まれるだろう共通語の動詞は、奥田 1968-72 では主に、「とりつけのむすびつき」「とりはずしのむすびつき」「うつしかえのむすびつき」という、「物にたいするはたらきかけをあらわす連語」の下位カテゴリーで扱われている(言語学研究会編 1983:27-36)²⁶。そして奥田 1968-72 は、これらのカテゴリーを次のように規定している。まず「とりつけ」

について、このむすびつきは「第一の対象を第二の対象にくっつける」という関係を表し²⁷、「第二の対象」を指し示す二格あるいはへ格の名詞は必須の要素となっている。そして「とりはずし」は、「第一の対象が、動作のはたらきかけをうけて、第二の対象からとりはずされる」という「とりつけ」とは対称的な関係を表すが、その「第二の対象」を指し示すカラ格の名詞は必ずしも必要ではない。一方、「うつしかえ」は、「はたらきかけをうける物は空間的な位置変化をするだけにとどまる」ものであり、「場所をあらわすに格あるいはへ格、から格あるいはまで格の名詞でひろげられて、意味的な完結性をもつことができる」。

だが、奥田 1968-72 はまた、「とりつけ、とりはずし、うつしかえのむすびつき方のちがいが連語の構造のなかに明確にやきつけられている²⁸」にもかかわらず、これらのカテゴリー

²⁶ それぞれのむすびつきを実現する動詞として奥田 1968-72 が挙げているものを、以下に示しておく。
「とりつけ」;あてがう,あてる,あびせる,あびる,(びんに花を)いける,いれる,うえる,うずめる,うめる,おく,おさめる,おびる,おぶう,かかげる,かくす,かける,かさねる,かざる,かつぐ,かぶせる,かぶる,くべる,くむ(以下省略,詳しくは言語学研究会編 1983:28 を参照)

「とりはずし」;おとす,あらいおとす,かきおとす,そりおとす,かる,つむ,ちぎる,ひきちぎる,とる,かりとる,きりとる,だきとる,ちぎりとる,つみとる,ぬきとる,はぎとる,ふきとる,むしりとる,もぎとる,ぬく,ひきぬく,ぬぐ(以下省略,詳しくは同上:32 を参照)

「うつしかえ」;あげる,あつめる,うつす,おとす,おろす,だす,とどける,なげる,はこぶ,ほうる,まわす,もどす,よせる

この他、「もちあげる,もちだす」や、「もっていく,もってくる,もってかえる」のようなあわせ動詞も、このグループに含まれている(同上:34)。

²⁷ この「くっつける」ということには「接触から表面への付着まで,包含から貫通にいたるまで,いろいろ」な種類があり(言語学研究会編 1983:27)、第1節で見た「通る」などに対立する「通す」などの動詞も、この「とりつけのむすびつき」を実現する動詞のグループに含まれている。

²⁸ これらのカテゴリーの違いとして、奥田 1968-72 は、「を格の名詞と動詞とのむすびつき方のちがいは、これをひろげる第二の名詞のはたらきのなかにあらわれてくる」ことを明確に示しており(言語学研究会編 1983:34)、さらに、「連語の内的なむすびつきの本質は、これをひろげる第二の単語との外的なむすび

一のあいだをつなぐ中間的なものがあって、境界をあいまいにする」とも述べている。そして例えば、「動詞いれるにはとりつけのむすびつきをつくる能力があり、動詞だすにはうつしかえのむすびつきをつくる能力があるといえるのは、一般的な傾向としてであり」、「うつしかえととりつけとの、うつしかえととりはずしとの、二つのカテゴリーの連続性」を指摘している(同上:35-36)。

岡田 2003 は、この奥田 1968-72 による一連の考察を踏まえ、「おく、いれる、はずす、だす、もってくる、はこぶ」の6つの動詞について、

1. 移動全体のうちのどの部分が示されるか、ということとの関連で、「○○を」以外の、物体あるいは空間を表す名詞(句)の格形式はどうであるか。
2. 物体の移動がどのようにとらえられているか(接着か分離か移動か、など)ということとの関連で、「○○を」以外の名詞(句)によって示されるものは何か(物体か空間か、など)という2点に注目しつつ、上記の「カテゴリーが動詞の語彙的意味のどのような特性を反映しているものなのかを考察し、それを手がかりとして、物体を移動させることを表す他動詞の語彙的意味の形式に基づく、より客観的な記述」を試みている(p105)。

「とりつけ」と「とりはずし」を「モノの移動の表現」として扱うことに問題がないわけではなく、岡田 2003 でもそのことは触れられている。だが、これらのカテゴリーと「うつしかえのむすびつき」の連続性は奥田 1968-72 に示された通りであり、「モノの移動」という観点から動詞分類を試みる場合においても、簡単に除外することはできないだろう。よって本研究では、その「モノの移動」あるいは働きかけの<方向>が、「第二の対象」に対して「近づく」ものであるか「離れる」ものであるかを手がかりとし、前者を「入レル、着ク」動きを表す動詞、後者を「出ス、取ル」動きを表す動詞と呼んでおく。なお、移動の<起点>や<着点>を指し示す名詞との関わりではなく、「物体を移動させること自体が問題」(岡田 2003:110)となるような動詞もみとめられるが、その多くは「入レル」類と「出ス」類の動詞のいずれにも共通するような、言い換えればいずれの<方向>が示されているのかが明らかでないことから、明確に区別することはせず、それぞれの動詞の下位、あるいは中間に位置するものとして扱う。

以下、それぞれのタイプの多良間方言の動詞が、名詞とのくみあわせにおいて実現する語彙=文法的な意味の記述を試みていく。

2-2-1 「入レル、置ク」動き

まず「置ク」動きを表す動詞について、このタイプの動詞は、ju(ba)格や ba 格、Ø 格の名詞が指し示す<第一の対象>を、ni 格の名詞が指し示す<第二の対象>に「くっつける」ことを表す。ここでは、<第一の対象>を破線、<第二の対象>を波線によって示す。

2-100 pīsigaL ti:-N-du muno: ukaL. (諺)

広がる 手-に-ぞ 物-は 置ける

2-101 peruma-nu anafuci-N Nnagu: muL-tika:, tiNki-nu-du gumata. [民]^{xxiv}

砂蟹-の 穴口-に 砂-を 盛ったら 悪天?{天気}-の-ぞ [当然,推量]

砂蟹が穴口に砂を盛ったら、悪天のはず(?)(ft.悪天候になる)。

つきのなかに自己を露出する」ということを注記している(同上:149, 注7)。

- 2-102 “mī:gi-nu cīnu-N-ja ta:ragu:-ju sjagiru pīdaL-ni-ja cīga-u sjagiru sjagi:
 右-の 角-には 空き俵-を 下げろ 左-には 一升ます-を 下げろ 下げて
 nara-u Ndasi.”-ti i:-badu, [民 Noz-3-5]

自分-を 出せ-と 言うので

「右の角には空き俵を下げろ。左には一升マスを下げて。下げて自分を(牛闘せに)出せ」と言うので、

- 2-103 Mme pītuta:ra rokuzjuqkiN-mai aL a:da:ra futa-N nu:siqti:, [Tok-21]
 もう 1 俵 60 斤-も ある 粟俵-Ø 肩-に 乗せて
 もう 1 俵 60 斤もある粟俵(を)肩に乗せて、

これらの用例で表わされている<第一の対象>の‘くっつけられ方’は、いずれも、<第二の対象>の「表面への付着」である(注 27)。だが以下の用例のように、相対名詞 naka(中)など、「一定範囲の空間」²⁹を指し示すような空間性(トコロ性)の高い名詞が<第二の対象>の位置に現れている場合、そのくっつけられ方は「包含」となる。そしてこのとき、<第二の対象>を表す名詞は Nka 格形式をとって現れる。

- 2-104 jakuniN-nu Mme:, cību-nu naka-Nka kagaM-ju ucikiqti:, [民]^{xxv}
 役人-の [Pl.]は 壺-の 中-に 鏡-を 置いて
 役人達は、壺の中に鏡を置いて、

- 2-105 “a: purimunu-nu Mme, uL-uba: idi:, kawa-nu uqpu-mizi-Nka, jurasi:”
 [聞] 馬鹿もの-の [Pl.] それ-をば 出て 川-の 大-水-に 浮かせて{浮かして}
 agai, @ “jurasi: uciki-badu, cjoqto mo:, unu ni:-nu kata-ti-ja siziM-nu kazju:,
 [感] 浮かせて おくと チョット モー その 根-の 方-とは 沈む-の 増える
 sjura: ukagaL si-ba, ~” [民 Joh-9-16]
 先-は 浮き上がり するので

「馬鹿ものたちめ、それは{note.木の枝を指すか}出て、川の大水に浮かせて」、おや、「浮かせておくと、チョットモウ、その根の方とは沈むのが増える(ft.深い)、先は浮き上がるから、

また、次の用例の<第二の対象>を表す名詞は、くっつける対象というよりも、「背景としての空間」(岡田 2003:106)を示しているようである。

- 2-106 “~ paL-nu jukadu-N, misī...da:gu...ubuNzju:-ju³⁰ ciqfi: sjunairu, ~” [民]^{xii}
 畑-の 四角-に 神酒 団子 [料理名]-を 作って 供えろ
 「~ 畑の四角に、神酒、団子、ウブンジューを作って供えろ、~」

続いて、「入レル」動きを表す動詞について見ていく。「置ク」動きを表す動詞の場合と同じく、ju(ba)格、ba 格、Ø 格の名詞が指し示す<第一の対象>を<第二の対象>にくっつけることを表すが、<第二の対象>を指し示す名詞が ni 格と Nka 格のいずれの形式をとっていても、そのくっつけられ方は<包含>である。なお、iziL(入れる)³¹、kumiL(込める)とのくみ

²⁹ 宮島 1972 より(p563)。第1章注 35 を参照。

³⁰ 青菜の和え物。鎮祭のときに供えるという(高橋俊三 1995:63 より)。

あわせの用例では、その<第二の対象>を表す名詞はいずれも Nka 格の形で現れていた(前2例)。

- 2-107 ~ aM-tu...i:ĩ-to:, Mme o:da-Nka i:ĩ:, kare:siqti:, [民 Toj-1-9]

網-と 魚-と-を もう もっこ-に 入れて 結んで

網と魚とをもっこうに入れて、(もっこうを)結んで(牛の背に載せて)、

- 2-108 sjuziN:ke: “nara: pítuju:-ja taNsu-Nka-du kumirai-taL-ti: Nni-u mi:, ~” [民]^{xxi}

主人へ 自分-は 一夜-は タンス-に-ぞ 込められた-と 夢-を 見て

主人へ「自分は一夜はタンスに込められたと(いう)夢を見て、~」

- 2-109 asjaMma-nu Mme-N qsai-N-gutu-nana, kaqfi:tui: nara-ga niN-dukuru-Nka kaqfi:

両親-の [Pl.]に 申さない-まま 隠していて 自分-が 寝どころ-に 隠して

uciki:tui:, [民]^{xxiii}

置いていて

両親に申しあげないまま隠していて、{note.女を}自分の寝床に隠して置いていて、

- 2-110 “~ nara: aNsi: tau-N-mai qsai-N-gutuna, zjo:fuci-nu M:gigata-N uzumi: uki-ba, ~”

自分-は そのように 誰-に-も わからない-ように 門口-の 右側-に 埋めて おくので

「~ 自分はそのように誰にもわからないように、{note.牛の角を}門口の右側に埋めておくので(ft.埋めたので)、~」 [民]^{xxvi}

- 2-111 “~ nusítai-ga atika:, kunu...munu-dane:, miduM-nu itaN-nu naka-N pasjami:

どうして-か だったら この もの-種-は 女-の イタン-の 中-に はさんで

kĩ-taL munu si:-du, fukicuna munu-N nari: buL-ba.” [民 Tom-注 5]

来た もの-Ø して-ぞ 不吉ナ もの-に なっているから

「どうしてかだったら(ft.どうしてかと言うと)、この種は、女のイタン{note.下着のこと}の中にはさんで来たもので、不吉ナものになっているから(だ)。」

だが、ui(上)など、<第二の対象>を指し示す名詞が「一定範囲の空間」を指し示すものではない場合、そのくっつけられ方は<(表面への)付着>となり、ni 格の形がとられる。

- 2-112 aNsutika:-du, kunu mekarusi:-ti:nu pító:, uL-u: mi:qti: ja:-nu ui-N kīN-ju

そうして-ぞ この 銘苅子-との 人-は それ-を 見て 家-の 上-に 着物-を

kaqfasī-taL-ci:-badu, Mme tiN:ke: nu:rai-N-gutu bu-taL. [民]^{xxvii}

隠した-[引・推]-ので もう 天-へ 上れないで いた

そうして、この銘苅子という人はそれを見て、家の上に着物を隠したそうで、(それで天女は)もう天へ上れないでいた。

また、共通語の場合、以下の例 2-113 の「葉に青蝇(を)包む」というようなくみあわせでは、その「葉に」が、「とりつけのむすびつきをあらわす連語のなかの、第二の対象をあらわすに格であるか、ふるくさい道具のに格であるか、判断にこまる」ことがある(奥田 1968-72, 言語学研究会編 1983:30)。ニ格に対応する ni 格にも<手段・方法>の意味を表す用法は見られ

³¹ 「入れる」に対応する i:ĩL について、例 2-84 でこの動詞が「入る」という自動詞の意味において用いられているが、これは、古典語の自他同形動詞「いる」に形態的、意味的に対応する i: (入る, 入れる)からの類推によって、i:ĩL が自他同形的に用いられたものと考えられる。この動詞 i: は、高橋俊三 1993b に収集されている。

るのだが、多良間方言の場合、<内部性>を表す Nka 格形式をとることによって、そのような混乱は避けられているようである。また上の例 2-111 でも、第二の対象を表す名詞は ni 格の形をとっているが、相対名詞 naka(中)を伴うことによって、<包含>の意味が表されていることははっきりしている。

- 2-113 niNgiN-nu mi:L-badu, kaqsa-ga³² pa:-Nka, aubai-nu pītu-kara cīcimi: muti:
人間-の 見ると カズラ-が 葉-に 青蠅-の 1匹-Ø 包んで 持って
kī-ba, [民]^{xxviii}
来るので

人間が見ると、蔓の葉に青蠅の一匹包んで持って来る(ft.来ている)ので

また、<第二の対象>を表す名詞が Nke:格をとって現れている用例も多く見られた。なおこのときも、iziL(入れる), kumiL(込める)などとのくみあわせでは、その<第二の対象>の名詞は-Nke:に-Nka を前接させる、複合格助辞的な形式をとって現れている(例 2-117,2-118)。

- 2-114 “ara, kanu u:ki-u, sjuko: ne:N u:ki-u bisiqti:, mizū: uL-Nke:
[間] あの 桶-を 底-は ない 桶-を 据えて{座らせて} 水-を それ-へ
cīmi: mi:ru”-ti:, N, wa:L-badu, [民 Sims-2-10]
詰めて みろ-と [間] おっしゃるので

「じゃああの桶を、底は(ft.が)ない桶を据えて、水をそれに詰めてみる」とおっしゃるので、

- 2-115 ~ futa:L-nu jerai...pītu:-mai sono:, nabi-Nke: usikumiL-tu do:ziN, [民 Sim-4-8]
2人-の 偉い 人-をも ソノ 鍋-へ 押し込めるの-と 同時に
2人の偉い人そもソノ、鍋へ押し込めると同時に、

- 2-116 “karabai-juba:, baraguru:, jau sugu kuma:kuma, si:na-kara fukiL-sjaku-N
灰-をば 藁-を よく すぐ 細かく ふるい-から くぐる-程-に
kuma:kuma sīk, kīsiqti:, uL-Nke:, ma:sjumizū: kakitui, ~” [民 Joh-9-34]
細かく [言淀] 切って それ-へ 塩水-を かけて

「灰は、藁を、よく細かく、ふるいからくぐる{note.ふるいの目を通り抜ける、ということ}程に細かく切って、それへ、塩水をかけて、～」

- 2-117 kami-Nka-Nke:, tī:ju nuqfiL-badu, [民]^{xxii}
甕-に-へ 手-を 突っ込むと

- 2-118 “ara Mme ba-N: makasi: wa:ri”-ti: i:-ke:N muti: kī-taL aubai-ju, miduMqva-nu
[間] もう 私-に まかせ なされ-と 言いながら 持って きた 青蠅-を 女の子-の
pana-nu mi:-Nka-Nke: kumiL-badu, [民]^{xxviii}
鼻-の 穴-に-へ 込めると

「ではもう私に任せなされ」と言いながら、持ってきた青蠅を女の子の鼻の穴へ込めると、

2-2-2 「出ス、取ル」動き

³² 多良間方言の ga 格は主にヒト固有名詞、代名詞によってとられる形式であり、よってこの-ga は-nu の誤りであろう(序論3の3-1を参照)。

次に「取ル」動きを表す動詞について、このタイプの動詞には、ju(ba)格や ba 格、Ø 格の名詞が指し示す<第一の対象>を、kara 格の名詞が指し示す<第二の対象>から「とりはずす」こと(「分離」)を表す用法が見られる。このとき、<第二の対象>が必ずしも kara 格名詞で示されているわけではない点において、共通語の場合と共通している。

2-119 e:bigu:-nu naka-kara munu:-du turi:L. [Kij-b-2-A3]

アワビ-の 中-から もの-を-ぞ 取っている

アワビの中からものを{note.中身を}取っている(ft.取ってある)。

2-120 “to:to:, nama, ja:-nu kadu-nu ke:-ju Ngi: ku:’-ti: si:, [民 Saw-35]

[感] 今 家-の 角-の 茅萱-を 抜いて 来い-と して

「さあさあ、今、家の角の茅萱を抜いておいで」として、

2-121 kaL paqzi:-ke: sibaL dadadada.↑ [Kij-b-8-B2]

あれ-Ø 外す-までに 小便-Ø [擬態語]

あれ{note.ズボン}(を)脱ぐまでにおしっこ(が)ダダダダ(と出るの)?

また、「出ス」動きを表す動詞について、このタイプの動詞には、ju(ba)格、ba 格、Ø 格の名詞が指し示す<第一の対象>を、kara 格の名詞が指し示す<第二の対象>あるいは<第一の対象>が「属するところ」から、「だす」こと(「排出」)を表す用法がみとめられる。

2-122 Mme miduM-nu bikiduM-nu kī-ba taNsu-nu naka-Nka īzi: ukiqti:, bikiduM-nu

もう 女-の 男-の 来たら タンス-の 中-に 入れて おいて 男-の

sīgutu-Nke:, tubi-tika: taNsu-Nka-kara nuNdasi: jarasi ba:-ju,

仕事-へ 行ったら{飛んだら} タンス-に-から 出して 行かせる{遣らす} 場合-を

ozisaN-ti: ki: panasi-taL-ti:. [民]^{xxi}

オジサン-と 来て 話した-と

もう女の男(ft.夫)が来たらタンスの中に入れておいて、男(ft.夫)が仕事へ行ったらタンスから{note.旅人を}出して行かせる(ft.帰らせた)ということをおじさんと来て話したそう。

2-123 si:du, unu pikima-kara Mme, ziuN:ziuN...muno: qfa-gama: idasi:, “we:’-ti.

そして その 隙間-から もう 正常(の) もの-は 子-[指小]-は 出して [感]-と

そして、その隙間からもう全く(の)ものは(ft.正にその飛bij着物を)子供は出して、「ほら」と(母親に渡した)。 [民 Joh-5-23]

2-124 “aNti:, ba-ga tiN-kara, Nna-u urusjaqzi:, uL-u: taduri: kunu qfa-gama-nu

それで 私-が 天-から 縄-を 下ろすから それ-を たどって この 子-[指小]-の

futa:L, mata qva nu:ri: wa:L gumata=do:’-ti i:-taL-ti:. [民 Joh-5-26]

2人 また あなた-Ø 上り なさる [当然,義務]=よ-と 言った-と

「それで、私が天から縄を下ろすので、それをたどってこの子(ら)の2人、またあなた(も)上りなさるべきよ(ft.上って下さいね)」と言ったそう。

また、このタイプの動詞には、ni 格や Nke:格の空間名詞とのくみあわせにおいて、その名詞が、<排出先>や<排出の方向>を指し示している用例も現れている。

2-125 ~upudatiMniazi-nu, takaramunu:ba:, kanuju:-Nke:nu ciciu-ti:, nagasjakiiM-nu,

大立峰按司-の 宝物-をば あの世-への みやげ-と 長崎海-の

ufuricizi-N sutati: wa:L-tari:-du, [民 Joh-21-注 7]

[地名?]-に 放り出し なさったので-ぞ

大立峰按司の宝物を、あの世へのみやげと、長崎海のウフリツツに放り出しな
 ったので、

2-126 ure: qva harue: buL-ba to:ka ari:, aN-ja hanako-ga mai-Nke:-du

それ-は あなた-Ø ハルエ-は いるから 1人-Ø [COP] 私-は ハナコ-が 前-へ-ぞ

hanae-tu hanako-ga mai-Nke:-du, futa:L-ni fai-ti: saNkai ukuriqtari: @ Mme ne:N.

ハナエ-と ハナコ-の 前-へ-ぞ 2人-に 食べ-と 3回 送ったから もう ない

それはあなた(は)ハルエがいるから1人であって、私はハナコの所へ、ハナエと
 ハナコの所へ、2人に食べなさいと {note. じゃがいもを} 3回送ったから。もう無
 い(よ)。[Oj-b-3-B3]

2-127 po:gu: ma:si, po:gu-ti:nu muno: ma:si: ucikiqti:, uL-kara puka-Nke:, gaN-juba:

ポ-グ-を 回して ポ-グ-との もの-を 回して 置いて それから 外-へ 龜?-をば

Ndasi:-ja nar-aN-tinu, N:, kisoku-nu Mme-u cīqfitui, [民 Noz-4-26]

出して-は ならない-との [間] 規則-の [Pl.]を 作って

ポ-グ-を回して、ポ-グ-というものを回して置いて、それから外へ、龜(?)を出
 してはならないという、規則などを作って、

2-128 aLpī:, sīgutucju:-N, inu:-nu ki:, unu i:-uḅa, usju:-nu minaka-Nke: iki:

ある日 仕事-中に 竜巻-の 来て その 絵-をば 御主-の 庭-へ 行って

utusi-taL-gi munu. [民]^{xix}

落とした-気 もの

ある日、(男の)仕事中に竜巻が来て、その絵を王様の庭へ行って落としたらしい。

例 2-122 で<排出元>の「タンス」が-Nka を前接させて現れていること、また、例 2-126 では
 <排出先>のヒト名詞が空間化されていることから、その移動に関わるモノゴトを指し示す
 名詞は空間性のみとめられる名詞でなければならない、ということが言える。そして、こ
 のタイプの動詞を述語する文では、その動詞が表す移動の<起点=排出元>が kara 格の名詞
 や文脈などによって常に明らかであり、一定の<方向性>がみとめられる。つまり、「出ス」
 動きを表す動詞は、<着点=包含先>を表す名詞を要求する「入レル」動きを表す動詞と、こ
 の<方向性>において対称的であることがわかる。

また、以下に挙げる用例では、その補助動詞の語彙=文法的な意味によって、前2例で
 は「出ス」動きを表す動詞、後2例では「入レル」動きを表す動詞に共通する<方向性>が、そ
 れぞれ示されているようである。

2-129 “kutuba-nu, kutuba-daki-si:nu orei-ti:-ja, karugarusi: ari:, ja:-kara-mai ziN-ju

言葉-の 言葉-だけ-での 御礼-とは 軽々シイ [COP] 家-から-も 錢-を

upoupo cīcimi:, muti: iki: orei-juba: sī.” mo:, itumaNdusi-N=ju. [民 Joh-20-36]

たくさん 包んで 持って 行って 御礼-をば する モー 糸満友達-に=よ

「言葉だけの御礼とは、軽がるしいから、家からもお金をたくさん包んで、持っ
 て行ってお礼をする(ft.しよう)」。モー糸満(の)友達にね。

- 2-130 futa:L-ja sjo:daN-ju si:, uLkara kunu kugani-nu Mme-u pise: iki:, uma,
 2人-は 相談-を して それから この 黄金-の [Pl.]を 拾って 行って そこ
 kuma-nu muramura, simazima-N akinai-ba si:, [民]^{xxix}
 ここ-の 村々 島々-に 商い-(を)ば して
 2人は相談をして、それから、この黄金なんかを(洞窟から)拾って行って、そこ
 ここの村々、島々で商いをして、
- 2-131 unu kame: katamitui ki:, mai-nu miutu-nu ja:-Nka-Nke: jaLNki-badu,
 その 甕-は 担いで 来て 前-の 夫婦-の 家-に-へ 投げ込むと
 その甕は(ft.)を担いで来て、前の夫婦の家へ投げ込むと [民]^{xxii}
- 2-132 “agai, mati: wa:ri, sjaki...usjai-ja, ba-ga jamasike: muti: ki: uki-ba, juqkuri
 [感] 待ち なされ 酒-Ø 肴-は 私が 山ほど 持って 来て おくから ャックリ
 si: wa:ri”-ti:, [民]^x
 し なされ-と
 「ああ、待ってください、酒(と)肴は私が山ほど(ここに)持って来ておくので(ft.あ
 るので)、ヤックリして下さい」と、

だが、これらの用例の中には、その動詞とくみあわさっている第二の対象を表す名詞ある
 いは文脈によって指し示されているところが、<第一の対象>の移動の<起点>あるいは<着
 点>を示しているのか、それとも「背景としての空間」を示しているのか、判断に困るもの
 もある。それは、これらの動詞が、移動の<起点>や<着点>を表す名詞との関わりよりも、
 <第一の対象>の「空間的な位置変化」(奥田 1968-72, 言語学研究会編 1983:34)を表すことが、
 その意味の中心に据えられていることによると考えられる。また以下のように、「入レル」
 と「出ス」の、いずれの<方向>の移動を表す動詞であるのかが明確でない動詞も見られる。

- 2-133 asjugadu, kaNsi:nu mucikasi tukuru-kara:, pikagi mizi-mai sirai-N, [民]^{xxx}
 だけど あのような 難しい ところ-から-は 引き上げ(る) 水-も できない
 だけど、あのような(ft.)このような難しいところからは、引き上げ水{note.つるべ
 で水をくみ上げること}もできない、
- 2-134 kanagai-du, o:, kane, e: uiguskukaNdunu-ti:nu pitu-nu, N: kaNzja:-u
 昔-ぞ [間] [言淀] [間] ウイグスクカンドゥヌ-との 人-の [間] 鍛冶-を
 tarama-Nke: muti wa:riqti:, [民 Noz-1-1]
 多良間-へ 持ち なさって
 昔、えー、ウイグスクカンドゥヌという人が、鍛冶を多良間へ持ちなさって、
- 2-135 tiN-karanu qfu fumu-Nka-kara, kanigagi-nu uri: ki: kaNnamaru: kakagi:
 天-からの 黒(い) 雲-に-から 金鉤-の 下りて 来て カンナ丸-を 掲げて
 tiN:ke: nu:si: tubi-taL-ti: [民]^{xxxi}
 天-へ のぼらせて 行った{飛んだ}-と
 天の黒雲から金鉤が下りてきて、カンナ丸を掲げて天へのぼらせていったそうだ。

2-3. 授受の表現

授受表現に関わる動詞は、モノの移動に関わるところあるいは狭い意味での<対象>では
 なく、動きの及ぶ<相手>を要求する点で、2-2 で見た「入レル,出ス」類の動詞とは異なって

いる³³。よってその動きには、「モノ」³⁴の<与え手>と<受け手>が存在し、「与エル」動きであるか「受ケル」動きであるかによって、その動詞が表す動きの<し手>と<相手>は異なってくる。そして、いわゆる「やりもらい」動詞には、動作の主体と客体のどちらを主語とし、また補語とするかに関わるヴォイス的な側面、すなわち、<し手>と<相手>についての「特殊な関係的制限」(寺村 1982:127)がみられる。これらの動詞はこの制限によって、「与エル」、「受ケル」類の動詞から区別して扱われることになる。この扱いは、ヒト=イキモノの移動の表現における、「行ク,来ル」類の動詞と同じである。そして、多良間方言のやりもらい動詞は、共通語のそれとは異なり、「くれる」と「貰う」にそれぞれ対応する qfiL と juiL との、「クレ・モライ」とでも言うような二項対立を示している。但し qfiL(くれる)には、その動きの<し手>と<相手>のいずれが主語であるかによって異なる敬体動詞が用いられることから、意味的にはヤルとクレルという使い分けがあるものと考えられる³⁵。

以下、「与エル,受ケル」動きを表す動詞と、「やりもらい」の動きを表す動詞について、それぞれの意味・用法を考察していく。

2-3-1 「与エル,受ケル」動き

まず「与エル」動きを表す動詞について、このタイプの動詞は、<し手=与え手>が、「自分の所有するもの、ないし自分に属するもの、自分の支配下にあるもの」を、<相手=受け手>へと「移す」ことを表す(寺村 1982:127)。このとき移動する「モノ」は、ju(ba)格, ba 格の名詞によって指し示されている。また、<し手=与え手>を表す名詞は主語として ga 格, nu 格形式をとって現れ、<相手=受け手>を表す名詞は, ni 格や Nke:格をとって現れる。ここでは、<し手>を二重線、<相手>を波線、移動する「モノ」を破線によって示す。

2-136 “ure:, kunu qfa-gama-nu-du, kunu mura-kara:, de:Nnu sjo:ziki, patarakiziN,
 それ-は この 子-[指小]-の-ぞ この 村-から-は 1 番の 正直 働き者
 ko:ko:ziN-ti:, kaMganasi-nu, ae:³⁶ wa:ri: uki-ba, pe:fu qvata-ga uagami”-ti:
 孝行者-と 神加奈志-の 与え なさって おくから 早く あなたたち-が 拝め-と
 tu:zuki: wa:L-badu, [民]^{vi}
 指示し なさるので

「それは、この子が、この村からは1番の正直、働き者、孝行者と、神様が、(あなたたちに)与えなさっておく(ft.与えなさっている)から、さっそくあなたが拝め(ft.貰いなさい)」と指示しなさるので、

³³ 奥田 1968-72 は、この「授受の表現」に関わる動詞と名詞のくみあわせを、「所有のむすびつき」と呼んでいる。そして、このむすびつきについて、「対象へのはたらきかけとはちがって、この種の連語には対象をめぐる人間の所有関係が反映している。もちろん、所有権の移動は、対象が動産であれば、その空間的な移動をともしなうだろう。」だが、この「所有権の移動にともしなう対象の空間的な移動は、所有のむすびつきをあらわす連語の成立にとって、どうでもいいこと」であり、この事実が「所有のむすびつきを物へのはたらきかけからくべつする、たいせつな根拠」となると、述べている(言語学研究会編 1983:80)。

³⁴ 授受の表現において、<し手>と<相手>の間を移動するのは狭い意味でのモノに限られないが、ここでは特に物体の「具体的な空間的な移動」の表現を考察の対象とすることから、「モノ」という表記によって示している。

³⁵ この、形態的には二項対立であるにも関わらず、意味的には三項対立を示すという構造は、八丈方言の kerowa(くれる)と murouwa(貰う)の対立と同様である(金田 2001:349)。

³⁶ /atae:/(与えて)の[ta]の脱落によって、このような形で現れているのだろう。なお、多良間方言には「与える」に相当する語はなく、この ataeL(ataiL)は共通語からの借用である。

- 2-137 oni-nu meN-ju miduM: turasī-badu, [民 Joh-13-注 3]
 鬼-の 面-を 女-に 取らすと
 鬼の面を女(ft.奥さん)に取らす(ft.渡す)と、
- 2-138 busija-nu sju:-ja, no: gjo:munu-nu, nu: sī=ga-ti:, jakuſjo-Nke: kifu: si: wa:L-taL-ti:,
 ブスイ家-の 爺{主}-は 農業者-の 何 する=か-と 役所-へ 寄付-をし なさった-と
 ブスイ{note.武士}家のお爺さんは、農業者がどうするかと、{note.貰った遠眼鏡を}
 役所へ寄付をなさったそうだ、 [民]^v
- 2-139 “iqtukī nara-N, rjukju:o:sama-nu fukuſo:-ju, karasi: qfi: wa:ri”-te:ti: unigaisi-badu,
 一時 自分-に 琉球王様-の 服装-を 借らして くれ なされ-と お願いすると
 「一時、自分(ft.私)に琉球王様の服を借らしなされ(ft.貸して下さい)」とお願いする
 と、 [民 Sims-4-5]

次に「受ケル」動きを表す動詞について、このタイプの動詞は、上の「与エル」類の動詞とは逆の、<相手=与え手>から<し手=受け手>への「モノの移動」を表す。このとき、主語として差し出されるのは<し手=受け手>である。また、<相手=与え手>を指し示す名詞は、kara 格の形式をとって現れる。

- 2-140 “Nda-nu fujin-nu-ga, na:ta-ga...nabi-uba: oba:saN-ga-du kari: wa:L-taLruga”-ti:
 どこ-の 婦人-の-か 自分たち-が 鍋-をば オ婆サン-が-ぞ 借り なさったけど-と
qsai-taka:-du, [民 Isg-3-24]
 申し上げたら-ぞ
 「どこの婦人が、私(たち)の鍋はオ婆サンが借りなさったけど」と申し上げると、
- 2-141 “mata karasi-taL okone-ju-mai ukiN-na ureikiN-ju sjui(L)-ba-ti:, kanu
 また 借らした オ金-をも 受ける-な 御礼金-を 添えるから-と あの
itumaNdusi-N we:siqti:, we:si: ku:”-ti:. [民 Joh-20-37]
 糸満友達-に 差し上げて 差し上げて 来い-と
 「また借らした(ft.貸した)オ金をも(友達から)受け(と)るな。御礼金を添えるからと、この糸満(の)友達に差し上げて、差し上げてきなさい」と。
- 2-142 tunaLmura-nu ziNmuci-mai, tukidukē:, kunu si:niN-kara izū: ke: bu-taL-gi munu.
 隣村-の 錢持ち-も 時々-は この 青年-から 魚-を 買っていた-気 もの
 隣村の金持ちも、時々は、この青年から魚を買っていたそうだ。 [民]^{xxix}
- 2-143 ~uja-kara taçü: bake:, e:, du:-si:, bata-u sjaki: siN-taL-ti:nu panasi.
 父{親}-から 太刀-を 奪って [間] 自分{胴}-で 腹-を 割いて 死んだ-との 話
 (この息子は)父から刀を奪って、自分で腹を割いて死んだという話。 [民 Noz-4-21]

また、より抽象的な「コトガラ」の「授受」を表す動詞も、具体的な空間的な移動の表現とは言えないが、「与エル,受ケル」類の動詞には含まれる。上で示した動詞の場合と同じく、「与エル」動きの<相手>は ni 格の名詞によって、「受ケル」動きの<相手>は kara 格の名詞によって、それぞれ指し示される。

- 2-144 sjo:gacue:gu-mai, sjeNta:-N-kara muti: ki-taL munu turasi: ite oba:-N nara:si-ti.
 [歌謡名]-も センター-に-から 持って 来た もの-Ø 取らせた イテおば-に 習わせ-と
 「正月エーグ」も、センターから持ってきたもの{note.歌詞のこと}を取らせた(ft.あ

げた)。イッテおばーに(その歌を)習わせなさい(ft.教えなさい)って。 [Oj-d-6-A1]

2-145 oba:-kara nu:-ju-ka naru: buqsa:L-ti:.

おばーから 何-を-か 習う ~したい-と

おばあさんから何か習いたって

また、双方向的な「授受」を表す *kaiL*(換える), *ko:kaNsī:*(交換する)や、「受ケル」動きの実現を前提とする「与エル」動きを表す *kaisi*(返す)のような動詞も現れている。これらは、「与エル」類の動詞と「受ケル」類の動詞の中間的なものとして位置づけられそうである。

2-146 “*uL-u: muti: iki: qva: nu:-ga sju:-zī:-ga, hai ba-ga kugani-nu aL-ba,*

それ-を 持って 行って あなた-は 何-か する[推]-か [感] 私-が 黄金-の あるから

zju:zju: kairu”-ti: i:-badu, [民]^{xxviii}

[感] 換えろ-と 言う

「それを持って行ってあなたはどうするのか、おい、私が(ft.に)黄金があるから、さあさあ換えろ」と言う、

2-147 “*asjugadu, kaNke: isī-nu pīkī usē: de:N takaramunu-nu aL-ba, uL-tu*

だけど あれら-は 石-の 引き 臼-は 1番(の) 宝物-の あるから それと

ko:kaNsiru-ti: sjo:daN-ba si:, saNsei:sī=pazī ari:, ~” [民 Joh-10-17]

交換し-と 相談-(を)ば して 賛成する=はず-Ø [COP]

「だけど、あれら(に)は石の引き臼は(ft.という)1番(の)宝物があるから、それと {note.木の実を} 交換しと相談をして、賛成するはずだから、~」

2-148 *uMma-gama-nu naḥi-u kaisi-ga iki-badu, [民]*^{xxxii}

お婆さん-[指小]-の 鍋-を 返し-に 行くと

お婆さんが鍋を返しに(東隣へ)行くと、

2-3-2 やりもらい(「ヤル,モラウ,クレル」類)

最後に、いわゆるやりもらい動詞について見ていく。先述したように、多良間方言では「くれる」と「貰う」に対応する *qfiL* と *juiL* が、形態的な二項対立を示しているのだが、以下に述べていくように、*qfiL*(くれる)には、その動きの<し手>と<相手>のいずれが表現主体であるかによって、意味的にはヤルとクレルという使い分けがみとめられる。

qfiL(くれる)について、まず、*ju(ba)*格や *ba* 格、*Ø* 格の名詞によって指し示される「モノ」が、<し手=与え手>から<相手=受け手>のもとへと移動することを表す用法が見られる。意味的には共通語の「やる」に対応し、<し手=与え手>を指し示す名詞は、主語として *ga* 格や *nu* 格形式で現れる他、*kara* 格形式をとって現れている用例も見られた(例 2-151)。また<相手=受け手>は、*ni* 格あるいは *Nke:*格の名詞によって差し出される(例 2-152,2-153)。

2-149 “*namakara, kiN-nu...tani-u qfiqziba, kunu sīma-Nke: maki: icigami-mai*

今から 黍-の 種-を くれるから この 島-へ 蒔いて いつまでも

ko:fukuN kurasi=jo: ~” [民 Tom-注 3]

幸福に 暮らせ=よ

「~ 今から、黍の種を(あなたたちに)くれる(ft.やる)から、この島へ蒔いて、いつまでも幸福に暮らせよ。~」

- 2-150 usjuganase:, “qva: irai pekusjo:=sjaika”-ti: pumi:, ho:bi-u, qfi: jarasi:

御主加奈志-は あなた-は 偉い 百姓=であるよ-と 褒めて 褒美-を くれて 遣らし

wa:L-taL-ti:. [民]^{xii}

なさった-と

王様は、「あなたは偉い百姓だ」と褒めて、(男に)褒美をくれて(ft.やって)、遣らしなさった{note.島に帰らせたということ}そうだ。

- 2-151 jakuniN-kara, tihoN-nu si:niN ari:, kunu si:niN-nu buqsa:L...munu: nu:-mai

役人-から 手本-の 青年 であるから この 青年-の 欲しい もの-を 何-も

qfi-daka: nar-aN, nuziM-mama-nu munu: qfi-ti:nu kutu:ba si:, kaL-u: abiri:
くればなければ ならない 望む-まま-の もの-を くれよう-との こと-をば して あれ-を 呼んで
panasi-taL-ti:. [民]^{xxv}

話した-と

役人から、手本の青年だから、この青年が欲しいものを何でもくればなければ(ft.やらなければ)ならない、望むままのものをくれよう(ft.やろう)ということで、あれ(ft.彼)を呼んで話したそうだ。

- 2-152 “haihai, uL-uba: qva-N qfi-daka: baN-ja tau-N-ga qfi gumata=ga.

[感] それ-をば あなた-に くればなければ 私-は 誰-に-か くれる [強い推量]=か

kanarazu qva-ga je: qfiru.”-ti i:-ba, [民]^{viii}

必ず あなた-が 貰って くれろ-と 言うので

「はいはい、それ(ft.これ)をあなたにくればなければ(ft.やらなければ)、私は誰にくれる(ft.やる)べきか。必ずあなたが貰ってくれ」と言うので、

- 2-153 kuL-u: qva-Nke: qfi-zi:.

これ-を あなた-へ くれよう

(ft.これをあなたへやろう)。

また、基本的に<し手=与え手>が表現主体となることから、その敬体動詞としては、<謙譲>の動詞 we:si (we:siL と)が用いられる。この動詞は意味的に「差し上げる」に対応しており、基本的に常体動詞 qfiL は目上から目下への、敬体動詞 we:si は目下から目上への「モノの移動」を表す。但し、表現主体が第三者であり、<し手=与え手>がその表現主体にとって目上である場合は、さらに<尊敬>の動詞 wa:L が伴われる(例-155)。

- 2-154 si:du, N:, kamisama-Nke: we:si:L usunaimunu:, [民 Sims-3-2]

それで [間] 神様-へ 差し上げている お供え物-は

それで、ん、(男が)神様へ差し上げているお供えものは、

- 2-155 “a:, ba-ga-du Nna-u muti: buL-ba de:”-ti, e: we:si: wa:L-takara:-du,

[間] 私-が-ぞ 縄-を 持って いる-から [感]-と [間] 差し上げ なさると-ぞ

「ああ、私が縄を持っています、さあ」と、(おじいさんがその縄を)差し上げなされると、[民 Nam-3-4]

また、qfiL には、対格名詞が指し示す「モノ」の<し手=与え手>から<相手=受け手>への移動が、後者の側から捉えられていることを表す用法もみとめられる。このとき、<し手=与え手>が主語として現れて、<相手=受け手>が ni 格あるいは Nke:格の名詞によって差し出

される点はヤルの用法と変わらないのだが、<相手=受け手>によってそのデキゴトが捉えられている(表現主体となっている)ことから、ヤルではなく、クレル動きを表していることがわかる。

- 2-156 “a:, ara ba-ga, N:, pise: agi: kamiqsa-ba, qva-ga...miduMqva-u nar-aN
[間] [感] 私-が [間] 拾って 上げて 担がせたら あなた-が 女の子-を 自分-に
qfiN:=na”-ti:, wa:L-ba, [民 Mor-9]

くれる=な(尋ね)-と おっしゃるので

「あーでは、私が、拾い上げて担がせたら、あなたの娘を自分にくれるか」とおっしゃるので、

- 2-157 uL:-u: baNke: qfiru.³⁷
それ-を 私-へ くれる

そして、基本的にその表現主体が<相手=受け手>であることから、その敬体動詞としては qfi: wa:L(くれなさる)という<尊敬>の動詞が用いられる³⁸。つまり、基本的に常体動詞 qfiL は目下から目上へ、敬体動詞 qfi: wa:L は目上から目下へという、ヤル動きを表す場合とは逆の方向の「モノの移動」が、それぞれ表わされることがわかる。

- 2-158 tunaL-nu sju:-ga-du ju:cju-gama qfi: wa:L-taL.^{xxxiii}
隣-の 爺{主}-が-ぞ ままごと-[指小]-Ø くれ なさった
隣のお爺さんがままごと(の道具を)くれなさった(ft.下さった)。

ここまでの記述から、多良間方言の動詞 qfiL は、<与え手>と<受け手>のいずれが表現主体であるか、言い換えれば、いずれが第1人称の代名詞によって指し示されうるかによって、「やる」と「くれる」という2つの異なる動詞に対応する用法を示すということが明らかになった。そしてその2つの用法の間には、iki(行く)と ki:(来る)の場合と同様の、動きの<方向>の対称性が窺えた³⁹。また、qfiL には補助動詞としての用法も見られるのだが、「モノの移動」だけでなく、<相手>への働きかけが表されている場合にも、その働きかけの<方向>による敬体動詞の使い分けはなされている(例 2-160,162)。

- 2-159 reN-ti:nu...munu-mai, kanagai-ja, ju:zju, pi:zju-N-ja, nubasi:-mai-du, kabī-u
レン-との もの-も 昔-は 祝い {ju:zju の対語}-に-は どうして-も-ぞ 紙-を
tumi: ki:-mai, kazjari: we:sī-taL=sja. [民]^{xxxiv}
探して 来て-も 飾って 差し上げた=さ
レンというものも、昔は、祝いには、どうしても(ft.どのようにしても)紙を探して来て、飾って差し上げたよ。

- 2-160 asjugadu, du:-ja tamunu: si: ki:-nu kurasu: sī:-nagara-mai, du:-ga sīma-nu
だけど 自分-は 薪-を して 来るの-の 暮らし-を し-ながら-も 自分-が 島-の

³⁷ なお、インフォーマントの語感では、baN: qfiru(私にくれろ)と baNke: qfiru(私へくれろ)とでは、後者のほうが「やわらかい」表現となるようである。

³⁸ 多良間方言には共通語の「くださる」に相当する本動詞は現れない。

³⁹ 寺村 1982 でも、共通語の「やる」と「くれる」について次のように指摘されている。「このような、話し手を中心とした動きの方向性という点で、ヤル、アゲルは「行く」と、クレル、クダサルは「来る」と共通した性格をもつ語だといえるだろう。さらに、前者は自己の範囲内のものを指す「コ」の系列と、後者は話し相手の範囲のものを指す「ソ」の系列と共通している」(p134)。

niNgiN-nu Mme-u, uNsjuku migumi: qfi: wa:L-taL-ti:. [民]^{xxxv}

人間-の [Pl.]を うんと 助けて{恵んで} くれ なさった-と

だけど、自分は薪をしてくるのの暮らしをしながらも、自分の島の人間たちを、
とても助けてくれなさった(ft.やりなさった)そうだ。

- 2-161 “iqtukī nara-N, rjukju:o:sama-nu fukuso:-ju, karasi: qfi: wa:ri”-te:ti: unigaisi-badu,
一時 自分-に 琉球王様-の 服装-を 借らしてくれ なされ-と お願いすると
「一時、自分(ft.私)に琉球王様の服を借らしなされ(ft.貸して下さい)」とお願いする
と、 [民 Sims-4-5]

- 2-162 icimai kanasja-u si:-du qfiL. ^{xxvi}

いつも 可愛さ-を して-ぞ くれる

いつも可愛さをして(ft.可愛がって)くれる。

続いて juiL(もらう)について見ていく。この動詞は、ju(ba)格や ba 格、Ø 格の名詞に指し示されている「モノ」が、<相手=与え手>から<し手=受け手>へと移動するという<受け手>の側からの働きかけを表わしている点で、qfiL が表す「モノの移動」とは異なっている。また、この動詞を述語とする文が表すデキゴトは、<受け手>の側から捉えられており、よって、主語として差し出されるのは<し手=受け手>である。

- 2-163 “aNsi:-du ke:, to:bo:sju:-ga qva-u jui-zī-ti wa:L. sa:sa:”,-ti:, [民 Mor-11]

そのように-ぞ [間] トーボー主-が あなた-を 貰おう-と おっしゃる [感]-と

「そのように、トーボー主があなたを貰おう(ft.貰いたい)とおっしゃる(ft.おっしゃっている)、さあさあ」と、

- 2-164 “a-ga turi jui-ma:sī=na:”-ti bare:, ~ [Oj-d-30-A8]

私-が 取って 貰う-[反実仮想]=な-と 笑って

(そしたら)「私が(そのお金を)取って貰えばよかったな」と笑って、

表現主体は基本的に<し手=受け手>であるが、以下の例 2-165 のように、<相手=与え手>が表現主体となっている用例も見られる。このとき、<し手=受け手>が目上ならば jui wa:L(貰いなさる)という敬体動詞が用いられる。なお、共通語の「貰う」の敬体動詞は<謙譲>の動詞「いただく」であるが、多良間方言には「いただく」に対応する動詞は現れない。

- 2-165 kunu ja:-nu jumi-nu, aparagi miduM-ba si: kuL-N puri: ukī-gi munu,

この 家-の 嫁-の 美しい 女-(を)ば して これ-に 惚れて おく-気 もの

asjugadu, “kure: ba-ga....bunaL ari:, jui: wa:ri”-ti:nu ba:-ju si:,

だけど これは 私-が 姉 or 妹-Ø [COP] 貰い なされ-との 場合-を して

この家の嫁が美しい女で、(首里王子は)この人に惚れたらしい、だけど、「これは私の妹だから、もらいなされ」ということをして(ft.と言って)、 [民]^{xxxvi}

また、<相手=与え手>が表現主体となる文で juiL が補助動詞 qfiL(~くれる)とあわさって現れている場合、以下の用例で言うならば、「あなた」(<受け手>)から「私」(=表現主体、<与え手>)への、「受益」のニュアンスが伴われる。

- 2-166 “haihai, uL-uba: qva-N qfi-daka: baN-ja tau-N-ga qfi gumata=ga.

[感] それ-をば あなた-に くれなければ 私-は 誰-にか くれる [強い推量]=か

kanarazu qva-ga je:⁴⁰ qfiru.”-ti i:-ba, [民]^{viii}

必ず あなた-が 貰って くれろ-と 言うので

「はいはい、それ(ft.これ)をあなたにくれなければ(ft.やらなければ)、私は誰にくれる(ft.やる)べきか。必ずあなたが貰ってくれ」と言うので、

また、juiL にも補助動詞としての用法がみとめられる。以下の用例では働きかけが表されているが、その働きかけの<与え手>が ni 格の名詞によって差し出されていることから、やはり、<受け手>の側から捉えられた表現であることがわかる。

2-167 siNsi:-N pumirari jui-taL.

先生-に 褒めて もらった

2-4. 多良間方言の対象的な移動動詞の類型

以上、多良間方言の「モノの移動」の表現に関わる動詞について記述してきた。その内容は次のようにまとめられる。

1. 「入レル, 置ク」動きを表す動詞

a 「置ク」類 ;

- ・ ju(ba)格や ba 格、Ø 格の名詞が指し示す<第一の対象>を、ni 格の名詞が指し示す<第二の対象>に、「くっつける」(<接触>から<付着>)ことを表す。
- ・ <第二の対象>が「一定範囲の空間」を指し示す名詞である場合、その名詞は Nka 格をとり、そのくっつけられ方は<包含>となる。

ex. ucikī(置く), ukaL(置ける), muL(盛る), sjagiL(下げる), nu:siL(乗せる), jurasī(浮かす{揺らす}), niniqsi(寝かす), kaqvasī(被せる), sjunaiL(供える), bisiL(据える, 座らす), ciM(積む), abiL(呼ぶ), …

b 「入レル」類 ;

- ・ ju(ba)格や ba 格、Ø 格の名詞が指し示す<第一の対象>を、ni 格、Nka 格、Nke:格の名詞が指し示す<第二の対象>に、「くっつける」(<包含>から<貫通>)ことを表す。
- ・ <第二の対象>が「一定範囲の空間」を指し示す名詞ではない場合、その名詞は ni 格をとり、そのくっつけられ方は<付着>となる。

ex. i:ziL(入れる), kumiL(込める), usīkumiL(押し込める), nuqfiL(突っ込む), kakiNki(掻き込む), jaLNki(投げ込む), uiNki(追い込む), kaqfi/kaqfasī(隠す), uziM(埋める), ho:muL(葬る), ci:ciM(包む), pasjaM(はさむ), ci:miL(詰める), kakiL((水を)かける), maki(蒔く), muti: ki:(持ってくる), …

2. 「出ス, 取ル」動きを表す動詞

c 「取ル」類 ;

- ・ ju(ba)格や ba 格、Ø 格の名詞が指し示す<第一の対象>を、kara 格の名詞が指し示す<第二の対象>から、「とりはずす」(<分離>)ことを表す。但し、<第二の対象>は必ずしも kara 格の名詞でしめされているわけではない。

ex. tuL(取る), Ngī(抜く), paqzi(外す), …

⁴⁰ je: < jui:

d 「出ス」類；

- ・ ju(ba)格や ba 格、Ø 格の名詞が指し示す<第一の対象>を、kara 格の名詞が指し示す<第二の対象>あるいは<第一の対象>が「属するところ」から、「だす」(<排出>)ことを表す。
- ・ <排出先>や<排出の方向>を表す ni 格、Nke:格の空間名詞によって広げられる。

ex. idasī/Ndasī, nuNdasī(出す), sutatiL(放り出す), urusī(おろす), utusī(落とす), ukuL(送る), kubaL(配る), piNgasī(逃がす), fukasī((糞尿などを)もらす), muti: iki(持って行く), pise: iki(拾って行く), …

3. 「空間的な位置変化」を表す動詞類；

- ・ 移動の<起点>や<着点>を表す名詞との関わりよりも、<第一の対象>の空間的な位置変化を表すことがその意味の中心となっている。

ex. panasī(放す), jaL(投げる), sītiL(捨てる), pikiagiL(引き上げる), mucī(持つ), kakagiL(掲げる), …

4. 「与エル」類；

- ・ <し手=与え手>が、(<与え手>)のモノを、<相手=受け手>へと「移す」ことを表す。
- ・ 移動するモノは ju(ba)格や ba 格、Ø 格の名詞、<し手=与え手>は ga 格や nu 格の名詞、<相手=受け手>は ni 格、Nke 格の名詞によって指し示される。

ex. ataeL/ataiL(与える), turasī(渡す{取らす}), karasī(貸す{借らす}), kifu: sī(寄付をする), qvī(売る), usjagiL(奉げる, 供える), nara: sī(教える{習わす}), (paru: (払う), kaisī(返す)), …

5. 「受ケル」類；

- ・ <相手=与え手>から、<し手=受け手>への「モノの移動」を表す。
- ・ 移動するモノは ju(ba)格や ba 格、Ø 格の名詞、<し手=受け手>は ga 格、nu 格の名詞、<相手=与え手>は kara 格の名詞によって指し示される。

ex. ukiL(受ける), azukaL(預かる), kaL(借りる), kau, ko: (買う), baku: (奪う), nusuM(盗む), naru: (習う), …

6. 双方向的な「授受」を表す動詞

ex. kaiL(換える), ko:kaNsī(交換する), tuLkaiL(取りかえる), …

7. やりもらい；

- ・ 多良間方言では「くれる」と「貰う」に対応する qfiL と juiL が、形態的な二項対立を示しているが、意味的には三項対立となっている。
- ・ qfiL は、<し手=与え手>から、<相手=受け手>への「モノの移動」を表す。このとき、「モノ」は ju(ba)格や ba 格、Ø 格の名詞、<し手=与え手>は ga 格、nu 格、kara 格の名詞、<相手=受け手>は ni 格、Nke:格の名詞によって指し示される。
- ・ qfiL は、<し手=与え手>と<相手=受け手>のいずれが表現主体であるか(第1人称の指示代名詞で指し示されうるか)によって、ヤルとクレルという、異なる意味を表す。
- ・ juiL は、<相手=与え手>から、<し手=受け手>への「モノの移動」を表す。このとき、主語として現れるのは<し手=受け手>である。

	意味	「モノ」の移動の方向	表現主体	待遇表現
qfiL(くれる)	ヤル	<し手=与え手> → <相手=受け手>	与え手	謙譲 we:si, we:siL
	クレル		受け手	尊敬 qfi: wa:L
juiL(貰う)	モラウ	<し手=受け手> ← <相手=与え手>	受け手	×

表 15 多良間方言の「やりもらい」動詞の体系

ⁱ 『民話』<動物昔話>の「漏り加那志」より(pp14-15)。ある大雨の晩、兄弟が漏り加那志の話をしているのを虎が立ち聞きし、逃げ出すと、牛の主が牛と思って跨ってきたのでそれを漏り加那志だと思う。慌てて振り落とし、穴に隠れたその姿を確かめようと尾を差し入れると鎌で切られてしまった、という話。

ⁱⁱ 『民話』<本格昔話>の「もの言う牛」より(pp52-53)。ある人がつながればなしのやせた牛の世話をしあげると、その牛が自分を金持ちの飼主から買い上げ、その家の太った牛と闘わせるよう頼む。やせた牛が両角に一升ますを吊り下げて向かうと、太った牛は闘わずに逃げてしまったという話。

ⁱⁱⁱ 『民話』<本格昔話>の「馬に生まれ変わった男」より(pp57-59)。酷く扱われていた使用人たちが主の死後、自分らの苦勞の賜物だとその家に米俵を盗みに入る。すると馬が口を利き、たしなめ、自分がその家の主であったことを告げる。使用人たちはそれを聞いて盗むことを止め、立派な人間になったという話。

^{iv} 『民話』<伝説>の「雨乞祭の由来」より(pp186-189)。多良間のウペーガラユヌスが八重山のウブシガキメーラパイに、雨乞いのニリ(唱え歌)を教えてもらう代わりに娘をやる約束をする。だが気持ちが変わり娘を隠すと、メーラパイに崇られ娘を失い、自分も死んで、共に雨乞いの神としてまつられたという話。

^v 『民話』<伝説>の「ウランダ船遭難の話」より(pp241-244)。『球陽』にも記録されている、1857年のウランダ船座礁の事件について、島で語り継がれているそのあらましが語られている。用例はその船員たちが連れて来ていた犬についての一節。

^{vi} 『民話』<本格昔話>の「正直者に神宿る」より(pp120-123)。祖母の心遣いによって役所で働くことになった正直者の孫が、ある晩帰り道で赤子を背負った翁と出会う。孫は翁の代わりに赤子を背負って送ろうとするが、途中翁とはぐれ、仕方なく自分の家へ帰ると、それは赤子ではなく黄金だったという話。

^{vii} 『民話』<本格昔話>の「三角山の猫」より(pp44-45)。三角山を通ると大きな山猫に襲われるという話が村中に広まっているとき、ピンクヤーのお爺さんが連れの者とそこを通ると、やはり大猫が現われるので、松明を焚いて目をくらませて倒したという話。

^{viii} 『民話』<本格昔話>の「若者の長旅」より(pp100-102)。占者のもとへ旅していた若者が、その道中言葉を話さない娘の母親と飛べなくなった龍から、その状況の理由も尋ねて欲しいと頼まれる。若者が、娘は将来の夫の顔を見れば、龍は魔法の玉を吐き出せば解決するという占者の言葉を伝え、龍から魔法の玉を与えられ、また娘は若者を見て言葉を話したので夫婦となり、裕福に暮らしたという話。

^{ix} 『民話』<伝説>の「ジャーの話」より(pp231-232)。失恋して、誰彼かまわず男を捕まえてその着物をはぎとるようになった、ジャーという女の魔物の話。

^x 『民話』<本格昔話>の「九十九の運」より(pp73-74)。25歳までの運命であると告げられた青年が、ユタに助けを求める。たくさんのご馳走をこさえてあの世の座敷へと赴き、人々をもてなすと、運命を37歳まで延ばしてもらえることになるが、係の者が帳簿に誤って99と書いてしまい、それがそのまま認められるという話。

^{xi} 『民話』<伝説>の「綿草履」より(pp226-227)。時化に遭って見たことのない島へ流された多良間の人が、多良間の歌を歌っている人を見て近づくと、上陸せずにそのまま帰るよう言われる。帰ってからその時渡された綿草履をほどくと、七反の布になったという話。

^{xii} 『民話』<伝説>の「バルマツツの由来」より(pp177-178)。ウブカッジャフ家の先祖が、毎晩栗を盗まれているので番をしていると、たくさん山羊が畑に入って来た。1匹つかまえると、その小山羊が人々が初穂祭をしないために竜宮の神が怒っていると言うので、そのやり方を教えてもらったという話。

^{xiii} 『民話』<本格昔話>の「婿とりの話」より(pp87-88)。イリスズヤーの娘に惚れこんだ青年2人が、その娘から我慢くらべて相手を決めることを提案される。結果、イリスズヤーの灯りの方を向いて、娘の顔を思い浮かべながら寒さに耐えた青年が勝利し、婿になるという話。

^{xiv} 『民話』<伝説>の「多良間シュンカニ」より(pp237-241)。「人頭税時代」(1500年頃に始まったらしい人

頭税制度が廃止される 1903 年までの期間を指していると思われる)に、中央から派遣される施政者へ、島の女性が妾として差し出されるという慣習があり、それがどのように行なわれたか、またその女性たちがどのような生活を送ったかなどについて語られている。「多良間シュンカニ」では、同棲していた役人(施政者)を見送る、「ウェーンマ」(妾となった女性の尊称)の別離の悲しみが語られている(『多良間村史 第五巻』より)。

xv 『民話』<伝説>の「山羊祭」より(pp245-248)。明治の中頃まで行われていたという、山羊の放牧について、それを管理するため仕事の苦労や、旧暦の1月と八月には「山羊繁昌祈願祭」の様子などが、「古老」から聞いた話として語られている。

xvi 『民話』<本格昔話>の「竜になった蛇」より(pp64-65)。山奥で大蛇が脱皮して竜に化けて飛び上がろうとしているところを貧乏な夫婦の妻が目撃するが、それを他言しないことを条件に富を与えられる。だが夫婦喧嘩をして妻がその話をぶちまけたとたん家がふきとび、元の貧乏な生活に戻ったという話。

xvii 『民話』<本格昔話>の「欲ばりの大損」より(pp144-145)。ある人がイカとりに出かけ、大漁していると、黒い奇妙な影が現れ、驚いて逃げてしまった。翌日も同じように現れたので、今度は逃げずに鉞で突き殺したが、見ると、それは近所の親しい友人だったという話。

xviii 『民話』<本格昔話>の「白うずの仇討」より(pp50-51)。ある漁師が取り逃がした小さな白いうなぎが大変大きくなり船の邪魔をしていて、その漁師から三代目の人に退治された。その骨が慶良間の浜に流れつき、そこの人々はその骨を根石にして家を建てていた。その話が沖縄で評判となり、その珍しい家を見ようと人々が訪れるようになった。うなぎを退治した人のさらに三代目に当たる人が見に行ったところ、その根石が爆発して死んでしまったという話。

xix 『民話』<本格昔話>の「鶴になった夫婦」より(pp89-91)。ある男が美人の妻の顔を描いた紙を飛ばされそれが王様の目に留まる。連れて来られた妻がある日踊りが見たいと言うので踊りを開くと、それには目もくれず、人だかりの中から男を探しだして泣いて駆け寄り、二羽の鶴になって飛んで行ったという話。

xx 『民話』<本格昔話>の「かみなりの人だめし」より(pp82-83)。雷に焼かれて死ぬことを知った若者が、運命の当日、虫のわいた母親の最後の手料理を食べ、畑を荒らしていた牛の縄を繋ぎ、焼かれるという場所へ向かうと、白ひげの老人に運命が晴れたことを告げられるという話。

xxi 『民話』<笑話>の「讒言がじゃわら」より(pp154-157)。旅人が行商の美人と遊びたいと宿の主に相談すると、扇を毎日1つずつ買えと言われる。そしてその遊んだ話を聞いた宿の主はその美人の夫に告口する。だが旅人はそれを夢の話として難を逃れ、告口した宿の主は嘘をついたとくびにされたという話。

xxii 『民話』<本格昔話>の「黄金のかめ」より(pp103-105)。外に妾を作っていた夫が妻と仲直りをし、その寝床で黄金の入ったカメを見つけた話をする。その話を、妻の元へ夜這いしようと来た男が立ち聞きし、先にそのカメを探しに行くが、蜂に指されて死んでしまうという話。

xxiii 『民話』<本格昔話>の「ハガマ被り娘の話」より(pp128-134)。継母に苛められ、香箱のくつついたハガマを被るはめになった娘が、家から逃れ、王様の子にかくまわれているが、皆が集る踊りの日にハガマが割れ、その美しさが明らかとなり、王様の子の妻となる話。

xxiv 『民話』<諺>の「天候のことわざ」より(pp265-268)。

xxv 『民話』<笑話>の「鏡のない島」より(pp140-142)。役人が褒美をやるからと欲しい物を大変親孝行なコースケという青年に尋ねると父親の顔がみたいと言うので、壺の中に鏡を置いてそれを見せたという話。

xxvi 『民話』<本格昔話>の「牛の角の話」より(pp107-116)。ある娘が町へ出るとき両親から牛の角を持たされる。娘は宿を借りた老婆の助言で良人と巡り合い、牛の角を宝物として大切に埋めておくが、病に伏せ夫に牛の角のことを遺言する。夫はやがて盲になるが、長男と次男はそれを山に捨てようとする親不孝ものだった。だが竜巻のために長男と次男は死に、親孝行の三男だけが見知らぬ老婆の助言によって命拾いしたので、2人で牛の角を掘り出してみると、中に黄金が詰まっていたという話。

xxvii 『民話』<本格昔話>の「銘苺子」より(pp25-26)。羽地村の銘苺子が自分の池で水浴びをしている天女の着物を隠してしまう。帰れなくなった天女は銘苺子と夫婦になるが、ある日娘が着物を探し出し、天に帰る。銘苺子も後を追うが女には出会えず、北極星になったという話。

xxviii 『民話』<本格昔話>の「金蠅のたましい」より(pp27-29)。イリスズヤーの娘の魂をとった海の神から金蠅(魂)をだましとり、娘を生き返らせて婿入りした男の話。

xxix 『民話』<本格昔話>の「貧乏男と黄金」より(pp77-79)。ある金持ちの娘が貧しい漁師の男との結婚を望み、両親もしぶしぶながら承諾して、2人に紙包みを渡して送り出した。その道中、男が池の鴨を捕ろうとその紙包みを投げてしまったことに娘は驚くが、男の住む洞窟へ着くと金がゴロゴロ溢れており、2人はそれを拾って売って、幸福に暮らしたという話。

xxx 『民話』<伝説>の「ナガシガーの井戸掘りエーグ」より(pp219-220)。字仲筋にある長瀬井戸は、つるべでの水汲みの難しい所であったため、与那覇家の人を中心に苦労して下り階段を掘ったという話。

xxxi 『民話』<伝説>の「カンナ丸クールクの神」より(pp201-202)。昔、仲筋の嶺間井戸を飲んで人々の中から優秀な人々が生まれていたが、カンナ丸にはカンナ丸という美人が生まれ、若者たちがその姿を

みるために集まって飢え死にしているのを心配した守姉がカンナ丸をアカダン海に連れ出すと、天から鉤が下りてきて、カンナ丸を引き揚げていってしまい、井戸も埋められてしまったという話。

^{xxxii} 『民話』<本格昔話>の「猿になった金持ち」より(pp119-120)。神様をもてなした西隣の家の貧しい老夫婦が東隣の金持ちから借りてきた鍋の水を浴びて若返ったので、東隣の人々も真似して浴びると猿になり、食物をせびりに西隣に来ていたが、熱い砥石の上に座らされてお尻が赤くなったという話。

^{xxxiii} 平山 1983 より。原文は以下の通り。本文では、本稿の体裁に合わせて表記を改めた。

- ・トゥナルヌシューガドゥ ユーチャガマ ッフィーワールタル[tunalnuʃu:ɡadu ju:tʃugama ffi:wa:ɪtal]
(隣の人がおもちゃを下さった)。 (p541, 「くれる(呉)」の項)
- ・イチウマイ カナシャウ シードゥ ッフィル[itsimai kanaʃau ʃi:du ffiɪl](いつでも親切にしてくれる)。 (〃)

^{xxxiv} 『民話』<伝説>の「れんの話」より(pp248-250)。昔、冠婚葬祭の折に飾られた、「れん」というものについて語られている。その時々紙に書かれる言葉は決まっているという。

^{xxxv} 『民話』<本格昔話>の「王様に生まれ変わったお爺」より(pp79-82)。薪取りを生業とする貧しい生活をしながら、より貧しい人々へ恵んでいた、顔に人とは違った痣のある翁が、ある日、山中で嵐に遭ってそのまま死んでしまったいたので、村人たちは翁のために墓標を立て、その前を通る時は必ず手を合わせ、線香を焚いていると、やがて島の王に、翁に痣までそっくりの男の子が生まれたという話。

^{xxxvi} 『民話』<伝説>の「大主になったアカシャ」より(pp217-218)。多良間に漂着したイルラマモツという腕の良い大工が、仕事を頼まれて、大変に立派な家を建てたが、立派すぎる家は役人に徴収されてしまうので、わざと傷をつけた。そして首里王子自ら調査に来たが、その家の妹を見初め、やがて生まれたアカシャ(私生児)を大主の位につけたという話。

第3章 「存在の表現」論

一般に「存在」とは、「物理的な時間、空間を対象が占有することを表す出来事の種類」(金水 2002:478)というように規定することができるだろう。そして、このデキゴトを言い表すのに用いられる動詞を「存在動詞」と言い、存在動詞を述語とする文は「存在文」と呼ばれる。共通語の存在表現については、特に、動詞「ある」と「いる」の意味論的、また統語論的な対立の仕方に関する先行研究が数多く見られる。そしてこれらの先行研究によって、存在文によって表されるコトガラが上記の意味での「存在」には限られていないこと、つまり、それは「存在の表現」の1つにすぎないことが明らかにされている。例えば金水 2002 では、存在文を場所名詞句の有無(必須か否か)に基づいて二分し、場所名詞句を必須とし、狭い意味での<存在>を表す文を「空間的存在文」、場所名詞句を必ずしも要せず、「特定の集合における要素の有無を表す表現」と捉えられる文を「限量的存在文」と呼んでいる(p478)¹。

だが本研究では、「移動そのものを表すのではなくて、移動した結果、変化した結果の状態を表わしている」(寺村 1982:113)動詞を述語とする文についても、「存在の表現」に準じるものとして、本章での考察の対象としたいと考える。寺村 1982 はこのタイプに含まれる動詞として「泊まる,住む」などを挙げており、これらを、前章で見た「入ル,着ク」類に準じるものとして位置づけている。だがその一方で、両者の間に、出発点を補語として付け加えられるか否かという違いをみとめ、また、「「～ニ」が、主体がある動き、変化の結果存在している場所を表すので、存在の表現、(中略)などと境を接する」(同上:114)とも述べていることから、このタイプの動詞を、「移動の表現」に関わる動詞と「存在の表現」に関わる動詞の中間に位置するものと捉えていることがわかる。これらの動詞は、前章の冒頭で規定した「移動」、つまり、<位置の変化>を積極的には表していないのであり、本研究では、その中間性をより際立たせるため、「入ル,着ク」類の動詞から区別して扱っていく。

また、「生まれる,起こる」など、ヒトやモノ、デキゴトの「出現」を表す動詞も本章での考察の対象としたい。これらの動詞は、それとくみあわさるニ格名詞が「動き、変化の結果存在している場所」を指し示すこと、また前章で見た「移動の表現」に関わる動詞のあるものが、「語彙的な意味のずれ=抽象化の結果、出現動詞のグループにはいりこんできている」(奥田 1962, 言語学研究会編 1983: 290)ことなどから、「泊まる」などと同様、存在の表現に近いふるまいを示していると言える。

以下では、「移動の表現」と「存在の表現」の中間に位置する上記の動詞類(「移動の結果の状態」を表す動詞)と存在動詞について、第2章で用いた「観点」からの記述を試みていく(第1節, 第2節)。そして、その考察の内容を、「存在の表現」に関わる動詞の類型として提示する(第3節)。

¹ このような「場所表現の有無に基づく大分類」(金水 2002:477)は西山 1994 にも見られるが、その細分化において両者は異なっている。例えば、西山祐司 1994 が存在表現の1つとして取り上げている「所在コピュラ文」(おかあさんは、台所です)は、金水 2002 では存在表現とはみとめられていない、など。

第1節 移動の結果の状態

この節では、「移動そのものを表すのではなくて、移動した結果、変化した結果の状態を表わしている」動詞と「ヒトやモノ、デキゴトの「出現」を表す動詞」を取り上げる。前者のタイプを「泊マル」類の動詞、後者のタイプを<出現>の動詞と呼び、多良間方言のそれぞれのタイプの動詞について、その語彙=文法的な意味の記述を試みていく。

1-1. 「泊マル」動き

このタイプの動詞は、ni 格、Nka 格の名詞のいずれともくみあわさることができる。だがこのとき、その名詞が指し示しているのは「主体がある動き、変化の結果存在している場所」であり、<到着地>としてのところではない点において、「入ル、着ク」類の動詞とは異なっている。

3-1 unu tamunu-gama-u, jama-nu katafuta-gama-N ucukiqti:, uL-ga sita-gama-N

その 薪-[指小]-を 山-の 片隅-[指小]-に 置いて それ-が 下-[指小]-に

juke: wa:ri: buL-badu, [民]ⁱ

休み なさって いると

その薪を山の片隅に置いて、その下に休みなさっていると、

3-2 “kuNsi: inaka-N-te:ka-game: sumi:-ja nar-aN. Mme maci-Nke: idi-daka: nar-aN”

このように 田舎-に-ばかり-[強意] 住んでは ならない もう 町-へ 出なければ ならない

「このように、田舎にばかり住んではならない。もう町へ出なければならぬ{note. 強い意志を表している}。」 [民]ⁱⁱ

3-3 “nara-ga tanuM-ju kiki: wa:ri, ja-N-du ba-ga do:gu-nu nukuri: buL-ba, kuL-u:

自分-が 頼み-を 聞き なされ 家-に-ぞ 私-が 道具-の 残って いるので これ-を

nara-Nke: jaki: sjunai: wa:ri, aNsubadu nara: kiMjurusja-zī:”-ti [民]ⁱⁱⁱ

自分-へ 焼いて 供え なされ そうすれば 自分-は 安心する{肝許す}-[意,推]-と

「私の頼みを聞いて下さい。家に私の道具が残っているので、これを焼いて私へ供えて下さい、そうすれば私は安心すると(ft.気掛かりはない)」と

3-4 N:, to:bo:sju:-ja, e: biki-daci-gama-u sutui, wa:ri:, du:-ga paL-Nka, N,

[間] トーボー主-係 [間] 独身-[指小]-を して なさって 自分{胴}-が 畑-に [間]

imi ja:-gama-u fuki:, uL-Nka sumai:, wa:L. [民 Mor-3]

小さい 屋-[指小]-を 建てて{葺いて} それに 住むこと-Ø なさる

トーボー主は、独身をして、(し)なさって、自分の畑に小屋を建てて、そこに住みなさる(ft.すんでいらっしやった)。

3-5 uNnu ju:-ja Mme: uma-Nka tumari:, [民 Cuk-1-5]

その 夜-は もう そこ-に 泊まって

これらの用例に見られるような、siM(住む)、tumaL(泊まる)などの動詞と ni 格、Nka 格の空間名詞とのくみあわせにおいて実現される空間的な意味を、<アリカ性>と呼ぶこととする。このとき、くみあわさっている名詞が指し示しているのはヒトやモノの<アリカ>としてのところである。

この空間的な意味は、当然、存在動詞 aL(ある)や buL(いる)とのくみあわせによっても実現されるものなのだが、「泊マル」動きを表す動詞とのくみあわせには、その「存在」の状態に至る前提として、「移動」という動的な事象が含まれている。但し以下に示すように、iki(行く)、ki:(来る)など、移動を表す動詞が「泊マル」類の動詞の前に現れている用例が現れていることから²、その前提となる「移動」は「泊マル」動きを表す動詞の意味的特徴とはなっていない。つまり、<移動性>が希薄なのである。以下の用例において、iki(行く)、ki:(来る)、kumaL(入る)という動詞が表している移動の<到着地>は、その後続く siM(住む)、juku:(休む)、tumaL(泊まる)という動詞が表す動き(=「移動の結果の状態」)の主体の<アリカ>ともなっている³。ここでは、<到着地=アリカ>を波線、前提となる「移動」を二重線で示す。

3-6 ~ takasibama-N, -tu i: tukuru-du makupa:ja:-ti aL-ba, uma-Nka-du iki:, si-me:

タカシ浜に -と 言う ところ-Ø-ぞ マクパー家と あるので そこに-ぞ 行って 住み

si-maL-tui pītu: sja:ri: ki:-ja fu:fu: buL tukuru:-du, bunaL-nu kikiqti-du,

住んで 人-を 連れて 来て-は 食い食い いる ところをぞ 妹 or 姉-の 聞いて-ぞ

～ タカシ浜に、というところ(に)マクパー家と(いう家が)あって、(自分の兄が)そこに行って住んで、人を連れてきては食ったりしているところ(ft.こと)を妹が聞いて、 [民 Kad-1-1~2]

3-7 ~ kīqti:-du, paLmau, tamadara-ga zī:-Nka kī:, juke:, buL-badu, [民 Noz-4-3]

来て-ぞ [言淀] 波利間タマダラ-が 畑{地}-に 来て 休んで いると

(白鳥(の)群が飛んで)来て、(波利間)タマダラの土地に来て、休んでいて、

3-8 “~ Mme kuma-Nkanu akaqra si: buL-ba, nara: kumari: kī:-ba, kju:-ga ju:-ja,

もう ここ-にの 灯り-は しているのので 自分-は 入って くるので 今日-の 夜-は

tumurasi: qfi wa:ri:”-ti i:-taka:-du, [民]ⁱⁱ

泊まらせて くれ なされ-と 言う-と-ぞ

「～ もうここが灯りはしているのので(ft.明るいので)、私は(ここに)入ってくるので(ft.きたので)、今日の夜は、泊まらせくれなされ(ft.泊めて下さい)」と言うと、

なお、これらの動詞の<移動性>について、それが「希薄である」とは言えてもゼロであるとは言えないことは、次の用例から明らかであろう。この例 3-9 の B1 と B2 は同一人物の発話であるが、B1 で、動詞 tumiL(泊める)が<方向>を表す Nke:格の名詞とくみあわさって現れているのに対し、その直後の B2 では、動詞 buL(いる)が、Nka 格あるいは ni 格の名詞とのくみあわせにおいて用いられている。つまり、ほとんど同じデキゴトを言い表している(あるいは言い表そうとしている)にも関わらず、用いられる動詞によって現れる名詞の格

² 例 3-6 から 3-8 のいずれの用例でも、<到着地>あるいは<アリカ>としてのところを指し示している名詞句は Nka 格の形をとって現れている。これは、そのところが、単なる「移動」の<ゆきさき(到着地)>ではなく、「移動」の後にその移動主体が「とどまる」ところともなっていることによると考えられる(第1章の 3-2-1 を参照)。

³ 「入ル」類の動詞にも、その他の「移動」を表す動詞がその前に現れている用例は見られるのだが、その2つの「移動」に関わるところは同一ではない、また同一であっても異なる格形式の名詞句によって示されており、「泊マル」動きを表す動詞の場合とは大きく異なっている。

cf. ~ Mme du:-ga ja:-Nke:-ti: zjo:-gami idigte:, uma-N kaqfi:riqti:, [民 Joh-10-注 3]

もう 自分-が 家-へ-と 門-まで 出て そこ-に 隠れていて

もう自分の家へと門まで出て、そこに隠れていて、

形式が異なっているということであり、このことから、<移動性>に関する両者の意味的特徴の違いが窺える。

3-9 B1; ida-Nke: tumi buL=ga.

どこへ 泊めて いる-か

A; N.↗

[感]

B2; ida-Nka buL=ga. ida-N-ga, we:, ××ja:-Nka,↗ kuma-Nka.↗ [Oj-d-7-B1~B2]

どこに いる-か どこに-か [間] [屋号]家-に ここ-に

(この子は)どこにいるか。どこに、えー、[屋号]家に？ここに？ {note.宿泊先を尋ねている}

また、taci(立つ)、bi:L(座る)、niniL(寝る)のようなヒトの状態の変化を表す動詞も、ni格あるいは Nka 格の空間名詞とくみあわさって<アリカ性>の空間的な意味を実現する。このとき、その名詞は<状態のなりたつところ>を指し示しており、これも、広い意味での<アリカ>に含めることができるだろう。

3-10 ~ nu:-ti-ga i:-taL=ga kanu, do:bucu-nu jana Nzja-uba:. {中略} a, o:kami.↗

何-と-か 言った=か あの 動物-の 嫌な 奴-をば [間] 狼

o:kami-nu ki:, kuL-nu, e: amadaL-N tati:tui, [民 Joh-3-2~3]

狼-の 来て これ-の [間] 軒{雨垂れ}-に 立って

~ 何と言ったかあの、動物の嫌なやつを。あ、狼、狼が来て、こいつが軒(下)に立っていて、

3-11 unu jama-nu ki:-nu kagi-gama-N bi:tui, unu meN-ju kaqvi:-ja mi:mi:,

その 山-の 木-の 陰-[指小]-に 座って その 面-を 被って-は 見い見い

aNsi:, meN-ja kaki:-ja mi:mi: si:, ki:-nu sita-N bi:tui, sidasja-u si:,

そのように 面-は かけて-は 見い見いして 木-の 下-に 座って 涼しさ-を して

(男は)その山の木の陰に坐って、その面を被ってみて、面は(ft.を)かけてみたりして、木の下に座って、涼んで、[民 Joh-13-16]

3-12 kunu:, ne, nini heja-Nka-du, okusaN-ja Mme:, otoko-no, fukuso:, otoko-no

この 言淀 寝る 部屋-に-ぞ 奥サン-は もう 男-ノ 服装 男-ノ

sjugaL si:. mata ka:saN-ja Mme, sjozjo-nu sjgaL-ba si: nami:, jumi-u

装い-Ø する また 母サン-は もう 少女{処女}-の 装い-(を)ば して 並んで 嫁-を

sja:ri: nini:-taL-ci-badu, [民 Joh-20-26]

連れて 寝ていた-[引・推]-ので

この、寝る部屋に、奥サンはもう、男ノ服装、男ノ姿(を)する。また母サンはもう、娘の姿をして並んで、嫁を連れて寝ていたそうで、

なお、これらの動詞が空間名詞以外の名詞とのくみあわさる場合、その名詞は ni 格の形をとって現れ、動きの向けられる<対象>を表すのだが、以下の用例のように、その ni 格名詞が<アリカ>と<対象>のいずれを表しているのか、判断しづらい場合もある。

- 3-13 i:-ti Mme o:kami-mai i:-ba, Mme sja:ru: iki: anafuci-N tati:tui, @ zju:-ju
 イイ-と もう 狼-も 言うので もう 猿-は いて 穴口-に 立って 尾-を
 urusi:, sjadami:-ti su-badu, [民 Joh-3-26]

下ろして 試そう{定めよう}-と すると

イイともう狼も言うので、猿は穴口に立って、尾を下ろして試そうとすると、

- 3-14 “ke: kama-nu kagīna-ni:-du, upuganu si:niN-nu nini: buLru-ga”, [民 Ojm-2]
 [感] あそこ-の 芝生-に-ぞ 大きな 青年-の 寝て いるけど
 「ほら、あそこの芝生に、大きな青年が寝ているけど」、

また、前章で考察の対象とした「移動」を表す動詞について、ヒト=イキモノの移動の表現に関わる動詞や(aLki(歩く)などの<移りうごくところ>を表す空間名詞とくみあわさる動詞を除く)、「入レル,出ス」類の動詞も、継続相やシテオク形の形をとって ni 格、Nka 格の空間名詞とくみあわさる場合、<アリカ性>を示すようになる⁴。第II部で見ていくことだが、これらはそれぞれ、「主体の変化を表す限界動詞」の継続相に見られる<変化の結果の継続>の用法と、「対象に何らかの変化をもたらす動作、あるいは主体の変化を表す動詞」のシテオク形に見られる<動作・変化の完了とその変化の結果の継続>の用法によるものであろう。「移動」とは<位置の変化>であり、よって、以下のいずれの用例でも、これらの動詞とくみあわさっている ni 格、Nka 格の空間名詞は、「その変化の結果の状態(限界到達後の状態)」の<アリカ>を指し示していると捉えることができる(本稿の第5章及び第6章を参照)。

- 3-15 awatitui kunu, tuNdija:-nu sjeNzo:, toqva-Nka, kumari:-, huri:-du, Mme
 慌てて この トウンディ家-の 先祖-は 炊事小屋-へ 入って いて-ぞ もう
 uma-kara, nuNditui paL, si-taL-ga-jara nu:-gara si-badu, [民 Ork-2-15]
 そこ-から 出て 走る すた-か-やら 何-やら するので

慌てて、この、トウンディ家の先祖は炊事小屋へ入っていて、もうそこから出て走る、したやら何やらして、

- 3-16 kunu midumqva: atukara tazuni: ikiqte: minaka-N kugani-nu gaqfi: sitirai:
 この 女の子-は 後から 訪ねて 行って 庭-に 黄金-の たくさん 捨てられて
buL-ba, [民]^{iv}
 いるので

この女の子は後から訪ねて行って、庭に黄金がたくさん捨てられているので、

⁴ この他、動詞 Mci(満ちる)にも、継続相の形で<アリカ性>を示している用例が見られた。

cf 1. umu pama-Nka:, bisi-gami-mai, kugani-nu kakira-nu Mme-nu, uma kuma iqpai
 その 浜-には 干瀬-まで-も 黄金-の かけら-の [Pl.]の そこ ここ イッパイ
Mti: buL. [民, 「貧乏男と黄金」]
 満ちている

その浜には、干瀬までも、黄金のかけらなどが、そここイッパイ満ちている。

2. aribadu, kanu taramasjuNkani-mai Mmari, bunagama-ga e:gu-mai, unupuka we:Mma-u,
 だから あの [歌謡名]-も 生まれ [人名]-が 歌-も その他 ウェーンマ-を
 we:masja-u si:-nu e:gu-nu, si-ma-Nka: Mti: buL=dara:na:. [民, 「多良間シュンカニ」]
 羨ましさを して-の 歌-の 島-には 満ちて いる=だろう

だから、あの多良間シュンカニ{note.歌謡名}も生まれ、ブナガマの歌も、その他ウェーンマ{note.人頭税時代のいわゆる現地妻のこと}を羨ましさをしての(ft.羨望する)歌が、島には満ちているんだろうよ。

3-17 ~unu isibana-nu sīta-Nka=ju. @ si: uciki: uki. [民 Joh-20-49]

その 岩の下に=よ して 置いて おく

その岩の下にね。(そのように)して(お金を)置いておく(ft.置いてある)。

1-2. ヒト、モノゴトの<出現>

次に<出現>を表す動詞について見ていく。このタイプの動詞にも、ni 格、Nka 格の名詞とくみあわさって<アリカ性>の空間的な意味を実現する用法がみとめられ、その名詞は「出現物のありか」(奥田 1962, 言語学研究会編 1983: 290)を指し示す。またこのとき、その<出現物>は、主語あるいは補語(直接対象)として文中に差し出されている。ここでは、「出現物のありか」(次にみる「でどころ」も)を波線、<出現物>を破線で示す。

3-18 ~o:naba me: buL-tuka naN-tuka-nu tukuru-N nari muiL=dara

青苔-Ø 生えて{萌えて} いる-とか 何-とかの ところ-に なって 生える{萌える}=

kare:. [Oj-a-13-B3]

だろう あれ-は

~ 青苔(が)萌えているとか何とかのところになって(?)萌える(ft.生える)よね、あれは{note. nu:Lzju(地糊?)という植物について話している}。

3-19 nuzjaki-N-du, a: iNne:-N-ja miduMqya-nu Mmari, agaNne:-N-ja bikiqva-nu

久松-に-ぞ [間] 西隣-に-は 女の子-の 生まれ 東隣-に-は 男の子-の

Mmari, [民 Saw-1]

生まれ

久松[に/で]、西隣には女の子が生まれ、東隣には男の子が生まれ、

3-20 kame: pama-Nke: nuri: ki: Mnagu-Nka kuga-u nasī.

亀-は 浜-へ 上り 来て 砂-に 卵-を 生す

亀は浜に上って来て砂(の中)に卵を生す。

3-21 “sa:, kure: idi: mi: ku-daka: nar-aN. azja: nanika iM:ka-du ziko:.

[感] これは 出て 見て こなければ ならない 兄-は 何カ 海-に-ぞ 事故-は

uki: buL-ga jau”-ti:. [民 Joh-8-7]

起きて いる-が 様-と

「さあ、これは行って見てこなければならない。兄は何カ、海で事故は(ft.が)起きているようだ」と、

3-22 aNsiqti:, qfa-nu fa:-ti: sī-badu, unu fu: munu-Nka:. musī-nu Mme-nu, baki: buL.

そして 子-の 食おう-と すると その 食う もの-には 虫-の [Pl.]の 湧いて いる

そして、子供が食おうとすると、その食うものには、虫などが湧いている、 [民]^v

だが、<出現>を表す動詞の中には、kara 格、あるいは-kara に-Nka を前接させた複合格助辞的な形式の名詞とくみあわさることのでき動詞も含まれており、この点において「泊マル」動きを表す動詞とは異なっている。このとき、kara 格あるいは-Nka-kara の形の名詞はいずれも、「出現物のでどころ」(荒 1975, 言語学研究会編 1983: 406)を指し示している。

3-23 “~be:ta-u cuke:-taL uja-N:dakari: sī-tika:, kaNsi:-du nu:ma-nu naka-kara

私たち in.-を 使っていた 親~のように したら あのように-ぞ 馬-の 中-から

MmariL-ba, be:ta: aNsinu kutu-mai sju-N, ~” [民]^{vi}

生まれるから 私たち in.-は そのような こと-も しない

「～ 私たちを使っていた親{note.この家の主人}のようになると、あの様に馬の中から生まれるから、私たちはそのようなこともしないで、～」

3-24 N, patake:-no, paL-Nkanu, Mta-Nka-kara uNsi muiL. [Oj-a-13-A3]

[間] 畑-ノ 畑-にの 土-に-から そのように 萌える

ん、{note. /nu:Lzju/(は)}畑ノ、畑の、土にからそのように萌える。

<起点>となるトコロを指し示す *kara* 格の名詞とくみあわさる用法の見られることから、このタイプの動詞の<移動性>は「泊マル」動きを表す動詞よりも高い、と言えるだろう。またこのとき、その *kara* 格の名詞が、広い意味での<出発地>としてのトコロを指し示していることと捉えられることから、「出ル」または「出ス」動きを表す動詞に準じているようにも思われる。しかし、「出ル」「出ス」類の動詞とくみあわさる *ni* 格の名詞が<到着地>、<排出先>を指し示すのに対し、上の用例の *ni* 格名詞は<アリカ>を指し示していること、また、「出ル」「出ス」類の動詞には *Nka* 格の名詞とくみあわさる用法がみとめられないことから、<出現>を表す動詞が、恐らく近接してはいるものの⁵、これらの動詞とは異なるものであることは明らかである。以上のことから、本研究ではこの<出現>の動詞を、「出ル」「出ス」類の動詞から区別し、存在の表現に近いふるまいをする動詞として、ひとまとまりに扱うべきだと考える。これは、<アリカ性>をみとめることによって、「泊マル」類の動詞を「入ル、着ク」類の動詞から区別したのと同じやり方である。

また、前章でみた *kī*:(来る)の敬体動詞 *wa:L*(いらっしゃる)の他、*idiL*(出る)や *idasī*(出す)⁶、*taci*(立つ)、また *idi: kī*:(出て来る)などのあわせ動詞にも、(ヒト、)モノゴトの<出現>を表す用法が見られた。この用法にはその動詞がくみあわさる名詞の語彙的意味が大きく関わっていることから、奥田 1962 が述べているように、やはり、「語彙的な意味のずれ=抽象化の結果」によるものであろう(言語学研究会編 1983:290)。以下に挙げる用例では、上で示してきた<出現>の動詞の場合と同じく、*ni* 格や *Nka* 格の空間名詞とくみあわさる場合は<出現物のアリカ>が、*kara* 格の空間名詞とのくみあわさる場合は<出現物のデドコロ>が、それぞれの名詞によって指し示されている。また *wa:L* の場合を除き(例 3-30)、その<出現物>はいずれもモノや現象であり、<出現>の動詞の場合と同じく、その名詞は主語あるいは補語(直接対象)として文中に差し出されている。なお例 3-27 のように、動詞が連体の位置に現れている場合はその限りではない。

3-25 Mme kuganizjai-gama-ni:, e:, zjai-u furi: wa:L-tika:, wema-N-ja, Nna gohaN

もう 黄金ゼイ?-[指小]-に [間] ゼイ-を 振り なさると ここ-には [間] 御飯-Ø

⁵ 用例は確認できていないが、<出現>を表す動詞が、*ni* 格の名詞と *kara* 格の名詞のいずれとも同時にくみあわさる場合、多良間方言でも恐らく、「から格の名詞は出発点をつくり、に格の名詞がいきさきをつくるというそれぞれの格のはたらき」は保たれるだろう(荒 1975, 言語学研究会編 1983:408)。その場合、そのむすびつき方は、「出ル」「出ス」動きを表す動詞とほとんど変わらなくなる。

⁶ これらの動詞には、他にも */NdiL, nuNdiL/*(出る)、*/Ndasī, nuNdasī/*(出す)という形態が現れている(第2章の注4を参照)。

idi:, wema-N-ja wa:Nbusi-nu idi:, wema-N-ja ocuju-nu idi:, [民 Isg-3-19]

出て ここ-には 豚の煮付け-の 出て ここ-には お汁-の 出て

(神様が)黄金ゼイ(?)で、ゼイを振りなされると、ここには御飯(が)出て、ここには豚の煮付けが出て、ここにはお汁が出て、

- 3-26 “ara, ba-ga kunu miduMqba-u, nuči Ndasjaba baN-tu pituci nasi: wa:raM:=
[間] 私-が この 女の子-を 命-Ø 出せば 私-と 1つ-Ø なし なさる[意]=
na:”-ti:, [民]^{vii}
な(尋ね)-と

「では、私がこの女の子を、命(を)出したら、私と1つ(に)なしなさいますか(ft.結婚させて下さいますか)」と、

- 3-27 “agaL-N taci sira-fumu-daki upusja nari: wa:ri”

東-に 立つ 白-雲-程{だけ} 大きく なり なされ

「東に立つ白雲程(ft.のように)大きくなりなされ{note.大成して下さい、ということ}」 [古謡「多良間シュンカニ」の1節]

- 3-28 kunu...uze: upuga we:gariqti:-du, ukina-nu uma kuma-nu iM:ka, juL-nu kazu
この うなぎ-は 大きく 成長して-ぞ 沖縄-の そこ ここ-の 海-に 夜-の 毎{数}
idi: ki:, ko:kaisiN-ju, zjamasī:sī:, [民]^{viii}

出て 来て 航海船-を 邪魔しいしい

このうなぎは大きく成長して、沖縄のそここの海に、夜毎出て来て、航海船を邪魔していて、

- 3-29 ~ sheiri-nu miduM-kara Ndi pazimi-taL-ci:-badu, [民 Isg-2-注 4]

生理-の 女-から 出 始めた-[引・推]-ので

(すると)生理が女から出始めたそうで、

- 3-30 uNsjukunu u:ami-Nka-kara, qsi-pigi-sju:-nu wa:riqti:, [民]^v

ものすごい 大雨-に-から 白髭爺-の いらっしゃって

ものすごい大雨(の中)から、白髭爺(ft.白い髭のおじいさん)がいらっしゃって、

また、次のような抽象的な事象を指し示す名詞と動詞 idiL(出る)、idasī(出す)のくみあわせも見られたが、これらの用例ではもはや、モノゴトの<出現>の意味は表されていない。このような用例の存在からも、これらの動詞が示している<出現>の用法が、二次的なものであることは、明らかである。

- 3-31 naNgacu ifuka-N-ja buduL-nu-du idi gumata aL-ba, unu buduL-nu idi-zi:
何月 何日-には 踊り-の-ぞ 出る [当然]-Ø [COP]-順接 その 踊り-の 出る-[推]
ba:-N-ja, to:ka: nukuraN mura-nu pito:, idi: buduL mi: gumata=do:-ti:nu
場合-には 1人 残らず 村-の 人-は 出て 踊り-Ø 見る [義務]=よ-との
kjo:gi-u si: wa:L-taL-ti:, [民]^{ix}

協議-を し なさった-と

何月何日には踊りが出るべきだから、その踊りが出るときには、村の人は1人残らず、出て踊り(を)見るべきだとの協議をしなされたそう。

3-32 aidia-u Ndasi-taL pītu sīni: wa:ri:L. [Sim-a-1-C1]

アイディア-を 出した 人-Ø 死に なさっている

(その本の)アイディアを出した人(は)死になさっている。

この他、cuqfi(作る)や fuki(建てる{葺く})など、「結果的なむすびつきをあらわす連語のうち、出現性のニュアンスをおびているもの」(奥田 1968-1972, 言語学研究会編 1983: 41)にも⁷, ni 格、Nka 格の名詞によって広げられて、<アリカ性>を示している用例が見られた(例 3-33,34)。また、例 3-35 の mura-u kamaiL(村を構える)、例 3-36 の ana-nu aki(穴があく)のようなくみあわせにも、同様の現象が現れている。このとき、以下の用例のいずれにおいても、その ni 格、Nka 格の名詞は<出現物のアリカ>を指し示している。

3-33 aNtidu niwa-N, iqtaN-bakaL-nu saNtu:ba cuqfi: wa:riqti:, [民 Joh-5-2]

そして 庭-に 一反ばかり-の (屋敷内の)貯水池-をば 作り なさって

そして庭に、一反ぐらいの貯水池を作りなさって、

3-34 N:, to:bo:sju:-ja, e: bikiđaci-gama-u sutui, wa:ri:, du:-ga paL-Nka, N,
[間] トーボー主-係 [間] 独身-[指小]-を して なさって 自分{胴}-が 畑-に [間]imi.....ja:-gama-u fuki:, uL-Nka sumai:, wa:L. [民 Mor-3]

小さい 屋-[指小]-を 建てて{葺いて} それに 住むこと-Ø なさる

トーボー主は、独身をして、(し)なさって、自分の畑に小屋を建てて、そこに住みなさる(ft.すんでいらっしやった)。

3-35 ~Nda kuda-nu, N:, niNgiN-nu Mme acumi: ki:, mura-uba:, sima-nu nisi-nu
どこ ここ-の [間] 人間-の [Pl.]を 集めて 来て 村-をば 島-の 北-の
kata-N, M:na kamaiqti:, [民 Noz-4-23~24]

方-に 皆 構えて

あちこちの、人間たち(を)集めて来て、村を、島の村の北の方に全部構えて、

3-36 unu oNna-nu we:, N, sjo:beN si-taL-ti:. sitaka: Mta-Nka Mme ana-nu aki=sa:.
その 女-の [間] [間] 小便-Ø した-と すると 土-に もう 穴-の あく=さ
その女はもう小便(を)したそうだ。すると土に穴があくでしょ、 [民 Cuk-2-3~4]

第2節 存在動詞

この節では、いわゆる存在動詞(文)について考察していく。多良間方言の存在動詞には aL(ある)と buL(いる{ヲリ})、またそれぞれの敬体動詞 ari: wa:L(ありなさる)と wa:L(いらっしやる)の4つが見られ、いずれの動詞も、ni 格、Nka 格の名詞とのくみあわせにおいて<アリカ性>を示している。本節では特に、その意味・用法の記述を通して、aL と buL がどのように使い分けられているのかを明らかにしていく。

⁷ この「結果的なむすびつき」について、奥田 1968-1972 では、「つくる,こしらえる,きずく」などの「生産性の動詞」と、「物理的なはたらきかけをうける対象ではなく、その結果としてつくりだされたもの」を指し示す名詞とのくみあわせにおいて示される結びつき、として述べられている(言語学研究会編 1983:40)。

2-1. 存在文の類型

本章の冒頭でも触れた金水 2002 では、共通語の存在文について次のような分類を行なっている⁸。なお、ここでいう「存在文」とは、「存在動詞を述語とする文」を指すものとする。

- A. 空間的存在文 a.所在文：「お父さんは会社にいる」
 b.眼前描写文：「あ、子供がいる」
 (c.擬似限量的存在文：「昔、太郎という男の子がある山奥の村に{いた/*あった}」)
- B. 限量的存在文 d.部分集合文：「授業中に寝ている学生が{いる/ある}」
 e.初出導入文：「昔、ある山奥の村に、太郎という男の子が{いた/あった}」
 (f.リスト存在文：「当時のパンの会のメンバーには、北原白秋、高村光太郎、木下杢太郎、吉井勇らが{あった/いた}」)
- C. 所有文：「私には婚約者が{ある/いる}」

まず A「空間的存在文」について、この文は<(狭義の)存在>を表す表現とされている。場所名詞句が必須であり、有生か無生かによる動詞「いる」と「ある」の対立がみとめられている。次に B の「限量的存在文」について、その典型は d「部分集合文」であり、「主として連体修飾節を用いて部分集合を言語的に設定し、その集合の要素の有無多少について述べる」(p483)。なお、同様の考え方は寺村 1982 によって既に差し出されており、本章ではこれを<部分集合>と呼ぶこととする。また e「初出導入文」について、金水 2002 ではこの種の文を「部分集合文の位置特殊型」としており、その特徴として、「存在限量によって導入される対象が特定の対象であり、導入後は唯一的な個体として取り扱われる」ことを挙げている(p484)。本研究ではこれを<初出導入>と呼ぶ。最後に C の「所有文」について、金水 2002 では「存在と所有者の関係」(奥田 1962, 言語学研究会編 1983:288)が表現されているものについてしか言及されていないが、この種の文にはもう 1 つ、奥田 1962 が「内在のむすびつき」と呼んでいる「/属性として、部分としてもっている/という語彙的な意味」を表す用法もみとめられるだろう(言語学研究会編 1983:285)⁹。本研究では前者を<所有>、後者を<内在>と呼ぶ。

なお、c「擬似限量的存在文」と f「リスト存在文」について、c はその統語的關係においては「空間的存在文」のようにふるまうが、意味的には「限量的存在文」と(論理式が)同じにな

⁸ この金水 2002 及び西山 1994 は、存在文に対し「場所表現の有無に基づく大分類」を行なっている点で見解を同じくしている。だがこのような捉え方に対し今田水穂 2005 では、「汎時間的な連続体」と「個別時間的な断片」という概念を用い、哲学的意味論の立場から次のような主張が行なわれている。つまり、「我々は、日本語の様々な種類の存在文の意味の違いを、あるものは主語述語文(金水 2002 の「空間的存在文」—引用者)であり、あるものは存在量化文(金水 2002 の「限量的存在文」—引用者)であるというような言い方で区別することはできない」(p57)。よってその諸類型の意味の違いは、「対象の種類、領域の種類、文の構造といった諸要因」、言い換えれば、「何の存在を前提として、何の存在を主張しているのか」という観点から説明される(p68)。

だが本研究は、存在動詞のその文中に現れる名詞(主語、補語)との関わり方、それによって実現される意味の記述によって、存在動詞を、多良間方言の動詞体系の中に位置づけることを試みるものであり、今田 2005 で議論されている「存在文」に関する哲学的意味論上の問題(例えば「対象」は、「個体(individual)」や「種 kind」、「時間断片 stage」などの諸概念によって種類分けされている)には立ち入らない。

⁹ 但し、存在動詞と二格名詞句との「むすびつき」において、<所有>と<内在>は近接関係にあることは明らかだが、<内在>は普通、「ある」によってのみ表される。よって、金水 2002 が<所有>にみとめる意味構造(論理式)に、<内在>をあてはめることはできないだろう。

るもの、また f は、文中にあらわれる二格名詞句が「変更名詞句」であり¹⁰、「所有文に近い意味を持って」いるが「その違いは、要素の有無多少を述べるのか、要素の固体を数え上げるのかという違いに還元できる」(p491)ものとして、それぞれ説明されている。だが金水 2002 におけるこれらの文の位置づけは便宜的であり、多良間方言の存在文にこのような下位類型がみとめられるかどうかについても、異なる観点からのさらなる考察を要するだろう。よって本研究では、この2つの類型について特に必要がない限り言及しない。

2-2. 多良間方言の「存在文」

まず、ヒトやモノゴトの<存在>を表す用法がみとめられる(=「所在文」,「眼前描写文」)。このとき、これらの動詞とくみあわさる ni 格、Nka 格の空間名詞は、「存在という状態が成立するために必要なありか」(奥田 1962, 言語学研究会編 1983:284)を指し示す。ここでは、「ありか」を波線、主体となるヒトやモノゴトを破線で示す。

3-37 “atika: i: ba: naNta-ga ja:-Nka-du sjasjagi-Nke: iki tusiguru-nu qfa-nu

そしたら 良い 場合 自分たちが 家-に-ぞ 結婚へ 行く 年頃-の 子-の

buLru-gadu, jaqkai-gutu-N-ja munu-nu izjai-N-niba, ~” [民]^{iv}

いるけど 厄介な-こと-には もの-の 言えないので

「それならば良い場合。自分たちの家に結婚(ft.嫁)へ行く年頃の子がいるけど、厄介(な)ことにものが言えないので、～」

3-38 “~ mutu-nu cukanu:-be:-nu hakuzjo:na pītu-nu ja:-N-ja, upuganu, qfa usi-nu-du

元-の 飼う~する人-の 薄情ナ 人-の 家-には 大きな 肥える 牛-の-ぞ

buL-ba, ~” [民]^x

いるから

「～元の飼い主の薄情な人の家には、大きな、肥える(ft.肥えた)牛がいるから、～」

3-39 aNti:du, unu miduM-nu paka-nu tunaL-N ka:sija:-nu a-taL-ti:. [民 Joh-14-2]

それで その 女-の 墓-の 隣-に 菓子屋-の あった-と

それで、その女の墓の隣に(は)菓子屋があったそうだ。

3-40 ~ jama-Nka sjaki-nu nagari: buL tukuru-nu aL-ba, [民 Kad-3-注 2]

山-に 酒-の 流れて いる ところ-の あるので

山に酒の流れているところがある(ft.あった)ので、

上の用例から、この用法の aL と buL が、その<存在>の主体がイキモノであるか否かによって使い分けられていることが窺える。だが以下に示すような、有生か無生かによる aL と buL の使い分けが守られていない用例も現れている。

3-41 ~-ti sugu waN-nu cikafu-gami iki-badu, nama iza-ba minato-ti:nu ba:

-と すぐ 湾-の 近く-まで 行くと 今 言えば 港-との 場合-Ø

ar-aN, minato-N-gami-du fune: buL=dara:. [民]ⁱⁱ

[COP]-否 港-に-[限定]-ぞ 船-は いる=だろう

¹⁰ 西村 1994 の用語で、「意味的に変項を含む名詞句」(金水 2002:489)とされている。「当時のパンの会のメンバーは誰？」というような被覆疑問文を作ることができることをその特徴としている。

～と、すぐ湾の近くまで行くと、今言えは港ということじゃない(かな)、港にだけ船はいる(ft.ある)でしょう。

- 3-42 “qva-ga.....uja: ari: wa:r-aNni:, baNta: becu-Nke: nuNdi-zī:”-ti nuNdi: iki:,
 あなた-が 父{親}-は あり なさらないから 私たち ex.-は 別-へ 出る[意]-と 出て 行き
 「あなたの父親はありなさらないから{note.亡くなったということ}, 私たちは別へ
 出る」と出て行って、[民]^{vi}

次に、共通語で「存在の主体が生きものであるのに「アル」が使われる」場合について、寺村 1982 では、後に見る<内在>と<所有>の用法の他に、「ある集団の中のある種の部分集合の存在を問題にする表現」が挙げられている(pp158-159)。多良間方言の aL を述語とする文でも、次の例 3-43、3-44 ではこの<部分集合>の意味が表されていると捉えられる。なお、この用法は buL にも見られ(例 3-45)、これらの動詞とくみあわさっている ni 格名詞が<アメリカ>を指し示していないことから明らかなように(部)¹¹、この用法の aL と buL は、「ある実体が一定の空間を占めている」(寺村 1982:159)という狭い意味での<存在>を表していない。

- 3-43 mata, Nna: kama-N...sumikomi:....pītu-mai aL-ti:. [Oj-a-4-A3]

また [間] あそこ-に 住み込む 人-も ある-と

また(中には)、ええと、あそこに住み込む人もある(ft.いる)って(ね)。

- 3-44 kunu uqzja-de:na, “zju:, nu:-nu-du jaki: kī:-ba be:ta:, M:na tubagari: Nna:,
 この ウズラ-同士 [感] 野-の-ぞ 焼けて 来るので 私たち in.-は 皆 飛んで [間]
 ika”-ti: ī:-badu puka-N-ja kuga-u.....nasi:L-mai aL, mata, qfa-u.....daki:L-mai
 行こう-と 言う と ほかに-は 卵-を 生しているの-もある また 子-を 抱いているの-も
 aL-ba, [民 Kam-1-2, 注 2]

あるので

このウズラ同士、「さあ、野が焼けてくるので、私たちは皆飛んで行こう」と言う
 と、(その)ほかには卵を生しているのもある、また子を抱いているのもあるので、

- 3-45 tarama-nu nakasuzi-nu, amaga:buraku-nai-nu¹², ukina:ja:-nu. siNzju-N-du, upujā:,
 多良間-の 仲筋-の 天川地区{部落}-内-の ウキナー家-の 先祖-に-ぞ ウプヤー
 upusju:-ti:nu upu-de:-munu-nu wa:L-taL-ti:. [民]^{xi}

ウプシュー-との 大-力-者-の いらっしゃった-と

多良間の仲筋の天川地区内の、ウキナー家{note.屋号}の先祖に、ウプヤーウプシューという大力者(note.力持ちの人)がいらっしゃったそう。

上の<部分集合>の用法は「限量的存在文」の1つであるが、同じくこのタイプの文に含められる<初出導入>も、多良間方言の存在動詞にはみとめられる。この用法では、<部分集

¹¹ これらの用例の ni 格名詞句について、例 3-45 ではその「部分集合」が含まれる「ある集団」そのものが、例 3-44 では「ある集団」を前提とするコトガラ(=状況)が、それぞれ指し示されていると捉えられる。金水 2002 では「出来事が展開される空間という意味を表すのではなく、対象の有無を判断する際の領域をあらかじめ設定」するようなニ格名詞句を「世界設定語」と呼んでいるが、これらの ni 格名詞句も、この「世界設定語」に準じる働きをしていると言えそうである。

¹² この/buraku/は単に地域を区切るのに用いられる単位名であり、卑下的な意味は全く伴われていない。

合>の場合と同じく、その主語が連体修飾節を伴う名詞句であることが多い。また、「対象を物語世界に導入する」というその特別な「動機」から(金水 2002:484)、以下の用例に現れている *ni* 格のトコロ名詞(句)は(部)、具体的な<アリカ>を指し示しているというよりも、「領域」を設定するものとして捉えられるだろう(本章の注 11 参照)。

- 3-46 *aL tukuru-N-du*, *a:*, *ina-tu...keqkNo-ba...si:L...oNna-nu a-taL-ti:*. [民 Isg-2-1]
ある ところ-に-ぞ [間] 犬-と 結婚-(を)ば している 女-の あった-と
あるところに、犬と結婚をしている女があったそうだ。

- 3-47 *aL mura-N-du*, *ujakimunu-nu ari: wa:riqti:*, [民]^{vi}
ある 村-に-ぞ 大金持ち-の あり なさって
ある村に、大金持ちがありなさって(ft.いらっしゃって)、

- 3-48 *kanagai-du paLmamura-N*, *paLmauputunu-ti:nu*, *e: paLmatamadara,-ti:nu pītu-nu*,
昔-ぞ ハリマ村-に 波利間大殿-との [間] 波利間タマダラ-との 人-の
paLmamura-nu...sjucio:-nu...paLmauputunu,-ti:nu...pītu-nu butui, [民 Noz-4-1]
ハリマ村-の 首長-の 波利間大殿-との 人-の いて
昔ハリマ村に、波利間大殿という、えー、波利間タマダラという人が、ハリマ村の首長の、波利間大殿という人がいて、

- 3-49 *e:*, *Nkja:N-du*, *e:*, *upukimura-N*, *midaruupusju-ti:nu...pītu-nu wa:L-taL,-tinu*
[間] 昔-係 [間] 大木村-に メダルツクドゥン-との 人-の いらっしゃった-との
panasī-nu aL. [民 Noz-2-1]
話-の ある
昔、大木村に、メダルツクドゥンという人がいらっしゃったという話がある。

また、多良間方言の *aL* にも、*ni* 格名詞とくみあわさって「/属性として、部分としてもっている/という語彙的な意味を実現する」用法が見られる。以下に示すように、この<内在>の用法の *ni* 格の名詞が指し示しているのは「属性や部分のありか」である(言語学研究会編 1983:285)。

- 3-50 *kunu paLmauputunu-ga qfa-N*, *cjakusi-N-ja*, *umukutu-mai aL*, *mata*, *cikara-mai*
この 波利間大殿-が 子-に 嫡子-に-は 知恵{思う事}-も ある また 力-も
aL si:-nu munu-nu butui, [民 Noz-4-14]
あるの-Ø して-の もの-の いて
この波利間大殿の子に、嫡子には、知恵もある、また、力もある者がいて(ft.知恵も力もある嫡子がいて)、

- 3-51 *qva-ga sjo:gacue:gu-nu*, *kanu*, *jakusjo-karanu munu-N*, *sjašN-nu aLruga*,
あなた-が [歌謡名]-の あの 役所-からの もの-に 写真-の あるけど
anigena-du uki.↑ [Oj-d-32-A1]
そのまま-ぞ おく
あなたの正月エーグの、あの、役所からのもの{note.広報誌のこと}に、(正月エーグの)写真がある(ft.あった)けど、そのままおく(ft.そのままにしてある)?

だが、次の用例では、それが<内在>と<存在>のいずれのむすびつきであるのか曖昧である。

3-52 cikiganasi-Nka:-du, kanu, i:-nu aqro:, [民 Han-1-1]

月加奈志に-ぞ あの 絵-の あるのは

お月様に、あの、絵があるのは、

3-53 aNti, unu ozi:-ja, pitu-tu-du kawari:, mipana-N ada-nu ari: wa:L-taL-ti:.

それで その おじ-は 人-と-ぞ 変わって 顔{目鼻}-に 痣-の あり なさった-と

それで、そのお爺は、人と変わって、顔に痣がありなされたそうだ。{note.他の人のそれとは全く異なるような痣があった、ということ}。[民]ⁱ

奥田 1962 では、<属性や部分のアリカ>を指し示すのは「空間的なニュアンスをもたない具体名詞か抽象名詞」であり、「動詞との関係において空間的なありか」を示さないと述べている(言語学研究会編 1983:285)。この奥田 1962 の考えによる場合、ciki(月)、mipana(顔)は空間名詞であるから¹³、これらの用例はいずれも、狭い意味での<存在>、つまり、「空間的なありか」を示しているということになるだろう。特に、例 3-52 では、ciki(月)が Nka 格形式をとって現れていることため、より「空間的なありか」=トコロ的である¹⁴。だが例 3-53 については、例えばその不可分性によって、「痣」を「顔」の「部分,属性」として捉えることは十分に可能であり、必ずしも<存在>の意味が表されているとはいいきれない。以上のことから、<存在>と<内在>は連続的なものであり、表わされるデキゴトが抽象的になるにつれて、述語となる動詞 aL の空間性=具体性も薄れていくと言えそうである。

次に<所有>の用法について見ていく。この用法の aL と名詞とのくみあわせでは「存在と所有者の関係」が表現されており(奥田 1962, 言語学研究会編 1983:288)、共通語の場合、その<所有者>となるヒト、あるいはヒトの組織を現す名詞は、ほとんど原則的に二格の形で現れている。だが多良間方言の場合、<所有者>を表す名詞も主格形式(nu 格、ga 格)をとって現れており、「二重主格」とも言うような構造をとっている¹⁵。ここでは、<所有者>を波線、(存在の)主体となるヒトやモノゴトを波線で示す。

3-54 “uL-u: muti: iki: qva: nu:-ga sju:-zi:=ga, hai ba-ga kugani-nu aL-ba,

それ-を 持って 行って あなた-は 何-か する[推]=か [感] 私-が 黄金-の あるから

zju:zju: kairu”-ti: i:-badu, [民]^{vii}

[感] 換えろ-と 言う

「それを持って行ってあなたはどうするのか、おい、私が(ft.に)黄金があるから、さあさあ換えろ」と言う、

¹³ 身体名称など、「全体の中の部分」を表す名詞のトコロ性の高さは、第1章の1-3で示した通り(例1-14から16及び注10のcf.を参照)。また「月」も、「自然物」に準じるトコロ名詞として扱うことができる。

¹⁴ 但し、例3-53は「月」の影を「絵」にみたてたメタファーであり、「絵」という具体物が、実際に「月」を<存在のアリカ>にしているわけではない。また、-kanasi(様{加奈志})という美称辞が伴われていることから、言語的にも、全くの「空間的なありか」を表す名詞として差し出されているわけではなさそうである。

¹⁵ 多良間方言の主格形式は、ヒト固有名詞(人名と親族呼称)の場合は ga 格の形、普通名詞一般は nu 格の形をとるというように、名詞によってその形が異なっている(序論3「形態論」3-1参照)。よって、ここでいう「二重主格」とは、同一形式の名詞の二重使用を意味するものではない。上に挙げている用例でも、被所有=存在物がモノである場合に ga 格と nu 格の名詞が現れたり(例3-54)、またヒトであっても、<所有者>(あるいは被所有=存在物)が係助辞-jaによってとりたてられたりしている(例3-57)。

- 3-55 “asjugadu, kaNke:¹⁶ isi-nu piki usë: de:N takaramunu-nu aL-ba, ~”
 だけど あれら-は 石-の 引き 臼-は 1 番(の) 宝物-の あるから
 「だけど、あれら(に)は石の引き臼は(ft.という) 1 番(の)宝物があるから、~」 [民 Joh-10-17]
- 3-56 itumaN:-du, N:, cjakusë:, okusaN-mai aL. mata, zinaN-ja Mme, tauka:. [民 Joh-8-1]
 糸満-に-ぞ [間] 嫡子-は 奥サン-も ある また 次男-は もう 1 人
 糸満に、嫡子(ft.長男に)は奥サンもある。また次男は 1 人 {note.独身ということ}。
- 3-57 e:, upubo:to:bo:sju:-ja, qfa: ne:N, bikidaci, iNne:pa:-ja miduMqva-gama-nu
 [間] ウプボトーボー主-は 子-Ø ない 独身の男 インネーパー-は 女の子-[指小]-の
 to:ka: ariqti:-du, [民 Mor-2]
 1 人 あって-ぞ
 ウプトーボー主は、子はない、独身、インネーパーは女の子が 1 人あって、

また、次の用例では buL によって<所有>の意味が表されている。A は、「[屋号]のハナコの子供の次郎と太郎は、それぞれ、ハルオの姉の婿、[名字]の婿である」というコトガラを B に伝えようとしているが、B が A の発話に対して同じことを繰り返し尋ねていること、また A3 で B のたずねに対して<驚き>のニュアンスを伴う感嘆詞が現れていることから、その会話は若干かみ合っていないことが窺える。そして、B1 と B2 で ni 格形式の<場所>不定代名詞が用いられているのに対し、A2 と A3 では主格形式のヒト名詞¹⁷、ヒトの組織を表す名詞が用いられていることから、<所有者>を指し示す名詞はやはり ni 格の形をとりにくいこと、また、動詞 buL は<所有>の意味を表しにくいことなどが考えられる。

- 3-58 A1; Nna, we:, Nna haruo-ga, kjo:dai-nu, muku-mai, buL-ti:. {中略} ziro:-ti: zinaN-nu.
 [間] [間] [間] ハルオ-が きょうだい-の 婿-も いる-と 次郎-と 次男-の
 えーと、ハルオの、姉の婿もいるって。次郎って(いう)次男が。
- B1; ida:-N:.[↑]
 どこ-に
- A2; N:, hanako-ga qfa-no:, mata ××-nu, muku-mai buL-ti: taro:-ti:.
 [間] ハナコ-が 子-の-よ また [名字]-の 婿-も いる-と 太郎-と
 ん、ハナコの子供が(ft.に)よ、また[名字]の婿もいるって、太郎って。
- B2; ida:-N:.[↑]
 どこ-に
- A3; aga, hanako-ga qfa-no: ××-no:.[↑] [Oj-d-17-A1~A4]
 [感] ハナコ-が 子-の-よ [屋号]-の-よ
 あら、ハナコの子供が(ft.に)よ、[屋号]が(ft.に)よ。

¹⁶ kaNke: < kaNke-ja

¹⁷ 例 3-58 の A2 と A3 に現れている hanako-ga qfa-nu は、「婿」が「部分」として含まれる「全体」を指し示しているようにも思われる。だが既に見たように、<部分集合>の意味を表している存在文において「全体」を指し示す名詞は ni 格形式をとって現れていたことから(例 3-44,45)、やはり、<所有者>が指し示されていると解釈すべきだと考える。

最後に、「動的事象の表現に属する」(寺村 1982:156)ような aL の用法について記しておく。以下の用例では、主格(nu 格)の形の名詞によって指し示されているデキゴトの<発生>が表されている。また、このとき aL とくみあわさる ni 格の名詞は、そのデキゴトが成り立つところや状況(波線で示す)を表わしている(例 3-59)。

- 3-59 hai, beta-ga, nu:-ti-ga ĭ:-taL, seNta:-nu, saNgacuhacuka, saNgacuhacuka-N-ja,
[感] 私たち in.-が 何-と-か 言った センター-の 3月20日 3月20日-には
naNka jokjo:-nu atui, ko:miNkaN: jokjo:-nu atui, nasu gamata-ti: [??]
何か 余興-の あって 公民館-に 余興-の あって なす [義務]-と
sĩ-taL. saNgacuhacuka. [Oj-d-33-B1]
した 3月20日

ねえ、私たちの、何と言ったか、センターの、3月20日、3月20日には、何か余興があって、公民館で余興があって、なすべきって[??]した。3月20日。

- 3-60 rju:kju:o:-tu sacumao:-tunu, moNdai-nu, kunu: zjo:no:, zjo:no:moNdai-nu tami-N,
琉球王-と 薩摩王-との 問題-の この 上納 上納問題-の ために
Nna, araşoi-nu ari: ukĩ zidai-N, [民 Sims-4-4]
[間] 争い-の あって おく 時代-に

琉球王と薩摩王との(間で)、上納問題のために争いばかりがあった時代に、

- 3-61 mazimunu-gama-tu niNgiN-tu, maziwari: hanasiai-ba si:, asĩbi: wa:L
お化け{マジ物}-[指小]-と 人間-と 交わって 話合い-(を)ば して 遊び なさる
zidai-nu-du a-taL-ti: [民 Joh-12-2]
時代-の-ぞ あった-と

お化けと人間と(が)、交わって話し合いをして、遊びなせる時代があったそうだ。

また aL には、主格(nu 格)の形の名詞とのかみあわせ全体で形容詞的にはたらく用法もみとめられる。このときの aL は「語彙的な意味をうしなって、陳述をしめすはたらきだけをもって」おり(奥田 1962, 言語学研究会編 1983:286)、その性格によっては、例 3-64-66 のように、<相手>を表す Nke:格の名詞とくみあわさることもできる(二重線で示す)。

- 3-62 ~juki:na zikaN-ju kakiqsĩ pĩtu=ga:-ti umu:-nanagina, zikaN-nu aL-ba,
余計な 時間-を かかす 人=が-と 思い-ながら 時間-の あるので
sikeNkaN-ja heja-Nke: abiri:, [民 Joh-11-注 6]
試験管-は 部屋-へ 呼んで

~ 余計な時間のかかせる人め、と思いながら(も)、時間があるので、試験管は{ft. 娘を}部屋へ呼んで、

- 3-63 “‘ti:-nu idi-ba, kĩmu: pĩki, kĩmu-nu idi-ba ti: pĩki.’-ti:nu, mukasipanasĩ-nu-du
手-の 出れば 心{肝}-を 引け 心{肝}-の 出れば 手-Ø 引け-との 昔話-の-ぞ
ari: wa:L-badu nara:, uL-u: ube: buL.~” [民 Joh-20-16]
あり なさるので 自分-は それ-を 覚えて いる

「‘手が出れば心を引け、心が出れば手(を)引け’という昔話がありなさって、自分(ft.私)はそれを覚えている。~」

- 3-64 kanagai-du, aL sju:-ga, du:-ga jumqfa-nu Mme-tu, mazu kiM-damisi-ti:-du
 昔-ぞ ある お爺さん{主}-が 自分-が 嫁子-の [Pl.]-と まず 心{肝}-試す-と-ぞ
 iza-zi-ga-jara, mata puka-nu kaNgai-du a-taL-ga-jara, tonikaku, unu jumiqfa-Nke:
 言う[推]-か-やら また 他-の 考え-Ø-ぞ あった-か-やら トニカク その 嫁子-へ
panasi-nu a-taL. [民]^{xii}
 話-の あった
 昔、あるおじいさんが、自分の嫁たちと、まず心試しという(こと)か、また他の
 考え(があった/だった)のか、トニカク、その嫁へ話しがあった。
- 3-65 ~kunu qfai usē:, de:N cju:sja:L usē:, kunu gagaL usi-Nke:, nigiN,-ni
 この 太る 牛-は 1 番 強い 牛-は この 痩せる 牛-へ 人間-に
 Mmari: buL kuru-N, fusai-nu-du a-taLru-gadu [民 Noz-3-9]
 生まれて いる 頃-に 負債-の-ぞ あったけど
 この太った牛は、1 番強い牛は、この痩せた牛へ、人間に生まれている頃に、負
 債があったけど、
- 3-66 asjugadu mutunuse: kau nusī-Nke:nu, uqka-nu-du kanagai-kara a-taL-gi munu.
 だけど 元主-は 買(う) 主-への 借金-の-ぞ 昔-から あった-気 もの
 だけど元主は(その牛を)買った主への、借金が昔からあったらしい。 [民]^{xi}

第3節 「存在の表現」に関わる動詞の類型

以上、多良間方言の存在表現に関わる動詞について、意味・用法の記述を試みてきた。これらの動詞はいずれも、ni 格あるいは Nka 格とくみあわさって、<アリカ性>を示す用法を持つという点において共通しているのだが、「泊マル」類と<出現>とでは<移動性>の度合いが異なること、また存在動詞には、狭い意味での<存在>に限られない広範な用法がみとめられることなどが明らかになった。その考察の内容を、以下にまとめて示しておく。

1.「泊マル」類；

- ・ni 格、Nke:格の名詞とくみあわさって、<アリカ性>の空間的な意味を実現する。このときその名詞は、ヒトやモノの<結果的なアリカ>=(「主体がある動き、変化の結果存在している場所」)としてのところを指し示している。
- ・また、このタイプの動詞と空間名詞のくみあわせは、その「存在」の状態に至る前提として「移動」という動的な事象を含んでいるが、その<移動性>はこれらの動詞の意味的特徴とはなっていない。

ex. tumaL(泊まる), tumiL(泊める), siM(住む), juku:(休む), nukuL(残る), nukusi(残す), …
 taci(立つ), bi:L(座る), niniL(寝る), …

2.<出現>の動詞；

- ・ni 格、Nke:格の名詞とくみあわさって、<アリカ性>の空間的な意味を実現する。このときその名詞は、<出現物のアリカ>としてのところを指し示している。
- ・<出現物>は、主語あるいは補語(直接対象)として文中に差し出されている。

- ・ <出現物のデドコロ>表す **kara** 格ともくみあわさることができ、その<移動性>は「泊マル」類の動詞よりも高い。

ex. **MmariL**(生まれる), **nasī**(生す), **muiL**(萌える), **bakī**(湧く), **ukiL**(起きる), …
(**cuqfi**(作る), **fukī**(建てる{葺く})), …)

3. 存在動詞 ;

- ・ **ni** 格、**Nke**:格の名詞とくみあわさって、<アリカ性>の空間的な意味を実現する。このときその名詞は、<存在状態の成立のために必要なアリカ>としてのトコロを指し示している。
- ・ <存在>の用法の **aL** と **buL** にはその主体がイキモノであるか否かによる使い分けの傾向が窺えるが、その使い分けが守られていない用例もいくつか見られた。
- ・ **aL** と **buL** には、**ni** 格の名詞とくみあわさって<部分集合>、<初出導入>を表す用法も見られる。但しこの用法では、その主体がイキモノであるか否かに関わらず **aL** が現れる場合が多く、**ni** 格名詞は<アリカ>を指し示さない。またその主語は、連体修飾節を伴う名詞句であることが多い。
- ・ その他の **aL** の用法には次のようなものがある。
 - 1) **ni** 格名詞とくみあわさって<内在>の意味を表す用法が見られる。その名詞が指し示すのは<属性や部分のアリカ>であるが、それは狭い意味での<場所>ではない。
 - 2) 「存在と所有者の関係」を表す用法(=<所有>)も見られるが、多良間方言では<所有者>となるヒトを表す名詞も主格形式をとって現れるため、「二重主格構造」となっている。
 - 3) 主格(**nu** 格)形式の名詞によって指し示されるデキゴトの<発生>を表す。

ⁱ 『民話』<本格昔話>の「王様に生まれ変わったお爺」より(pp79-82)。薪取りを生業とする貧しい生活をしていながら、より貧しい人々へ恵んでいた、顔に人とは違った痣のある翁が、ある日、山中で嵐に遭ってそのまま死んでしまったいたので、村人たちは翁のために墓標を立て、その前を通る時は必ず手を合わせ、線香を焚いていると、やがて島の王に、翁に痣までそっくりの男の子が生まれたという話。

ⁱⁱ 『民話』<本格昔話>の「牛の角の話」より(pp107-116)。ある娘が町へ出るとき両親から牛の角を持たされる。娘は宿を借りた老婆の助言で良人と巡り合い、牛の角を宝物として大切に埋めておくが、病に伏せ夫に牛の角のことを遺言する。夫はやがて盲になるが、長男と次男はそれを山に捨てようとする親不孝ものだった。だが竜巻のために長男と次男は死に、親孝行の三男だけが見知らぬ老婆の助言によって命拾いしたので、2人で牛の角を掘り出してみると、中に黄金が詰まっていたという話。

ⁱⁱⁱ 『民話』<笑話>の「墓から手」より(p171)。お墓の前で雨宿りをしていた人が墓の中から出てきた腕に掴まれて、傍にいた友人に助けを求めると、友人はこの人を見捨てて逃げてしまったという話。“友だちは鬼と思ってつき合え”という古い諺の由来となっているようである。

^{iv} 『民話』<本格昔話>の「若者の長旅」より(pp100-102)。占者のもとへ旅していた若者が、その道中言葉を話さない娘の母親と飛べなくなった龍から、その状況の理由も尋ねて欲しいと頼まれる。若者が、娘は将来の夫の顔を見れば、龍は魔法の玉を吐き出せば解決するという占者の言葉を伝え、龍から魔法の玉を与えられ、また娘は若者を見て言葉を話したので夫婦となり、裕福に暮らしたという話。

^v 『民話』<本格昔話>の「かみなりの人だめし」より(pp82-83)。雷に焼かれて死ぬことを知った若者が、運命の当日、虫のわいた母親の最後の手料理を食べ、畑を荒らしていた牛の縄を繋ぎ、焼かれるという場所へ向かうと、白ひげの老人に運命が晴れたことを告げられるという話。

^{vi} 『民話』<本格昔話>の「馬に生まれ変わった男」より(pp57-59)。酷く扱われていた使用人たちが主の死後、自分らの苦勞の賜物だとその家に米俵を盗みに入る。すると馬が口を利き、たしなめ、自分がその家の主であったことを告げる。使用人たちはそれを聞いて盗むことを止め、立派な人間になったという話。

^{vii} 『民話』<本格昔話>の「金蠅のたましい」より(pp27-29)。イリスズヤーの娘の魂をとった海の神から金蠅(魂)をだましとり、娘を生き返らせて婿入りした男の話。

^{viii} 『民話』<本格昔話>の「白うずの仇討」より(pp50-51)。ある漁師が取り逃がした小さな白いうなぎが大変大きくなり船の邪魔をしていて、その漁師から三代目の人に退治された。その骨が慶良間の浜に流れつき、そこの人々はその骨を根石にして家を建てていた。その話が沖縄で評判となり、その珍しい家を見ようと人々が訪れるようになった。うなぎを退治した人のさらに三代目に当たる人が見に行ったところ、その根石が爆発して死んでしまったという話。

^{ix} 『民話』<本格昔話>の「ハガマ被り娘の話」より(pp128-134)。継母に苛められ、香箱のくつついたハガマを被るはめになった娘が、家から逃れ、王様の子にかくまわれているが、皆が集る踊りの日にハガマが割れ、その美しさが明らかとなり、王様の子の妻となる話。

^x 『民話』<本格昔話>の「もの言う牛」より(pp52-53)。ある人がつながればなしのやせた牛の世話をしあげると、その牛が自分を金持ちの飼主から買い上げ、その家の太った牛と闘わせるよう頼む。やせた牛が両角に一升ますを吊り下げて向かうと、太った牛は闘わずに逃げたという話。

^{xi} 『民話』<本格昔話>の「猫に助けられた話」より(pp46-47)。昔ウキナーヤーの先祖のウブシュウという力持ちの人がいて、キーズ山に現れる大猫を退治しようとするが、パタキズ浜まで押され、神様に祈ると、子猫が現れてその大猫を倒した。それ以来、この浜の神様に拝みをするようになったという話。

^{xii} 『民話』<本格昔話>の「嫁の乳」より(pp140-142)。ある翁が、嫁たちの心試しとして病気を装い、それを治すために子を殺して自分に乳を飲ませてほしいという話をする。親を産むことはできないからと受諾した嫁の1人が、翁に言われた通り子を埋めるための穴を掘ると、黄金が出てきて、それを与えられるという話。

第Ⅱ部　〈時間〉の表現

第4章 「時間」の動詞論

まず、「時間」は古くから人々の関心を惹きつけてきた、ということは誤りではないだろう。時間の問題は、哲学や文学、また近代物理学や生物学など¹、さまざまな分野で論じられ、重要な研究対象となっている。そして特に、現象学以来の「時間論」では、「物理的時間」あるいは「客観的時間」というそれまでの概念に対し、「観測によって認識されるもの」(山口 2005:315)²、つまりは、「私」に「体験」されるもの(中山 2003:3)としての時間概念が確立されている³。

そこで、言語による時間の表現とは何か、ということを考えるとき、上に挙げた「時間論」の言葉を借りて、<‘私’の「体験」を概念化し、言語記号化したもの>と、一応の規定をしておこう。そしてその具体的な内容としては、例えば現代日本語の「昨日・今日・明日」といった時間観念を表す語彙的カテゴリーや、「走った」「走っている」といった、動きの時間的位置づけを表すための文法的カテゴリーなどが挙げられる。特に後者については、テンス(時制)研究の進展とともに、アスペクト(相)についての研究が近年めざましい発展を見せている。それは日本の言語学においても同様である。

そこで、本研究の第Ⅱ部では、多良間方言の時間表現の中でも特に、アスペクトを中心とする時間表現の文法的カテゴリーに関する記述を試みていきたい。次章以下で論じていくことだが、多良間方言の「アスペクト」には、共通語とは全く異なる言語的事象が現れている。よってその記述と考察は、琉球方言研究に限らず、日本語研究全体の発展に寄与するものとして、積極的に扱われなければならないだろう。

本章は、先行研究を手掛かりに、その具体的な作業の前提となるコトガラを示していくことに割り当てたい。以下では、まず、「アスペクト」という概念について、山田 1984 を手掛かりに再考察することによって、本研究におけるアスペクトの概念規定を行う(第1節)。次いで、現代日本語のアスペクトに関する先行研究を概観し、須田 2003 による、アスペクト的意味の体系化の試みを概説する(第2節)。そして、「パーフェクト」という文法的概念が抱えている問題を示し、工藤 1989,1995 と須田 2003 それぞれの主張を検討することによって、本研究が採っていく立場を明らかにする(第3節)。

¹ 例えば、近代物理学ではブラックホールやタイムマシンとの関連での論議が盛んになっており、また生物学の領域でも、「生物時間」という概念が確立されるなど、時間把握に関する研究の進展がめざましいという(長野 1999 より)。生物学については、「動物はその身体の大きさによって時間の進み方が変わる」という仮説を提示した書が(本川達雄『ゾウの時間ネズミの時間』中央公論社,1992)、世間の話題を呼んでいたことが思い出される。

² 山口巖 2005 は、物理学者の手になる書(渡辺慧『時』河出書房 1974)から時間概念について学んでいる。孫引きになるが、この『時』によると、「現実的な我」(=「己の観察を自らまた観察し得る」)は、それがただ1つの「現在」に記す、ただ1つではない観察の結果の積み重なりを、「動くとか流れるとかいうふうに感じる」。これを「我の流れ」と言う。そして、「我々が直接体験する「時」はこの我の流れ」である、とされている。

³ 中山康雄 2003 は「体験」と「世界」という2つの視点(概念)を用いて自身の「時間論」を展開している。「あることが起こり、それが終わる」。「体験」とは、「私」が「それを「観察し、それを確かめる」ことである。そしてそれは「次々と起こる」(p4)。よって、「体験」そのものが「時間構造を持つ」、と中山氏は考えている。

第1節 「総合的アスペクトシステム」

1-1. ‘アスペクト’概念の「総合化、抽象化」

近代アスペクトの研究は、古典ギリシャ語の時制理論及びスラブ諸語の動詞システムの理論にその端緒を見出せるという(山田1984:7)。そして現在、研究の対象はさまざまな言語に及び、その個別的な研究の深まりと共にさまざまなアスペクト理論が提案されてきているのだが、その理論的立場はもちろんのこと、扱う対象や用語の使い方のずれなどから、その様相はそれぞれに異なっている。例えば、佐藤純一 1982 はアスペクトを次のような 5 つのレベルに区別しているが—①語彙的意味のレベルに関係する場合 ②分析的(合成的)な述語の形式によって表示される場合 ③特定の時称形態がアスペクトの表示に関係する場合 ④アスペクト動詞を派生する形態論的手段が動詞体系の一部に存在する場合 ⑤あらゆる動詞のあらゆる形態がアスペクトの区別を表示する場合—、当時の研究の状況が、「アスペクト」を⑤のレベル(すなわち ipf-pf の対立)に限る傾向にあったことを指摘している(p86)。この立場に立つ場合、例えば②のレベルに属する日本語の「～テイル」などは「アスペクト」ではないことになってしまう。だが、「事象を観察し表現する場合に、事象全体を一まとまりのものとして把握するかその部分に着目するかの二元性はスラブ語だけの特徴ではなく、「すべての言語の中でこの二種の観察が何らかの形で表現されている」(山田1984:203)はずなのである。

そのような中、山田小枝 1984 は、アスペクトというカテゴリーを「いくつかの下位カテゴリーから成り立ち、そのそれぞれの下位カテゴリーが言語によって多様な現れ方をしてだけでなく、同一言語内でもいく通りかに表現されるもの」(p203)として捉えた。そしてそれまでのアスペクト理論を詳細に辿ることで、「それぞれの下位分類の中身を吟味して、できるだけ体系的に記述すると共に、下位カテゴリー相互の関係づけ」(序)を行うこと、すなわち、アスペクトの「総合化、抽象化」(p205)を試みている。その概要を以下に示そう。

山田 1984 では、次に挙げる 4 つの事柄に関わるものを「アスペクト」とみなしている。

- (1) 事象⁴の時間的性質にかかわるもの
- (2) 話者の把握のしかたや、視野のとり方に関するもの
- (3) 事象を展開のどの相でとらえるか
- (4) (一定の言語表現と結びついた)事象のサイズや生起数、頻度を示すもの

(1)事象の時間的性質には、①質的特性 ②数量的特性 ③変化性 ④時間的延長の性質の 4 つが挙げられている。その下位区分を簡略に示す。例文は山田 1984 によっている。

- ①質的特性＝持続する事象をいくつかの時間点で切断したときにみられる性質；「均質連続」(紙は(が)白い), 「均質不連続」(絵を描く), 「散発」(火山が噴火した<単発>, 「散発」の特殊な場合), 「中断」(運転している)
- ②数量的特性；「一回の生起」(去年富士山に登った), 「反復生起」(I used to see John every day when he lived in Austin<事象の反復>, その丘に登るといつも遠くに富士が見えた<観察の

⁴ 「事象」とは「話者による知覚あるいは認識と言語化を前提とした現象」、言い換えれば「知覚というふるいかけられ、言語化を前提として認識された」(山田 1984:45)のものであり、物理的現象そのものとは厳密に区別されている。山田 1984 はまたこれを、「実事象」とも呼んでいる。

反復>)。また事象の反復はさらに、「単一事象が同一条件で反復生起する真の反復」、「複数個の主体から生ずる反復」、「複数個の対象に及ぼされる反復」に区別される。

③変化性；「不変化」(ドアが開いている)、「瞬間的变化」(reach the top)、「漸進的变化」(例無し)

④時間的延長の性質；「無条件無限延長」(山は動かない)、「片側延長」(l'humanité a cherché ses principes essentiels jusqu'à la révolution de 89)、「有限延長」(神田からお茶の水まで歩いた)、「延長をもたないもの」(例無し)

例えば「海が青い」という例文は<状態>をあらわすが、これは、①質的には「均質連続」(事象をあらわす言明 p が事象の生起時間帯 I のいかなる時点 t においても真である)を示す、④時間軸上に位置したときその両端に限界のない「無条件無限延長」、③「不変化」の事象である、というように言い表せるだろう。また、「去年見た沖縄の海は青かった」のように、話者による観察の時間帯 J の明示が行われた場合、それ以上の補足がなければ、②期間 J における「一回の生起」という数量的特性を獲得する。

(2)話者のたちば(視点・視野・視角)とは、人間の「実世界で生起する現象」の知覚及びその概念化に関わるものであり、「事象をどのように視野におさめどのように観察するか、実事象のどの部分に注目するか、視点をどこにおくか、また視角をどのようにとるか」ということが問題となるという。例えば、ipf-pf や「部分-全体」といった二項対立の図式は、事象把握の規模の異なりを反映しており、また、事象の部分の注目・選択は、その時間的段階のモデル化を意味するといえる。なお「視点」と「視角」は、事象と話者との関係、すなわち事象の生起時間と観察点及び発話点の関係であり、テンスとも関わりとされている。

また、観察される事象が「活動性で漸進的变化を示す」場合、話者がどの部分をどのように切り取るか(3)局相の抽出)によって、その様相は全く違って見える。山田 1984 では、局相アスペクトについて次のような区間の定義と類別が行われている(図 2)⁵。

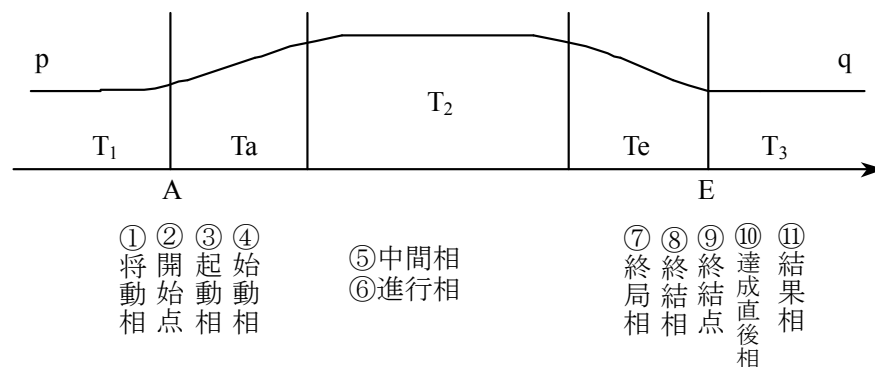


図 2 局相アスペクト(山田 1984, p51 の図 19 及び p125 の図 50 より)

⁵ 「結果相」について、狩俣 1997 では平良方言の(sakinu) numi: an((酒が)飲んである)という形式に対し、「痕跡相」という名づけもなされている。これは、平良方言のシテアルに相当する形式が、「酒そのものがなくなっていたり、あるいは、酒を飲んだ跡があったりする」というような、主体の動作や変化の結果にとどまらない、共通語の「してある」とは異なる用法を示していることによるだろう(p395)。本研究では、そもそも琉球諸方言の「結果相」(あるいは「痕跡相」)の形式を「アスペクチュアルな形式」の1つとは捉えていないのだが、先行研究に言及する際などは、「結果相」という名称に統一して用いることとする(第6章を参照)。

③起動相と④始動相は、それぞれ「瞬間的(点的)開始」と「徐々の始動」である。これらは A 点(開始点)を含むか否かによって区別されている。⑤中間の局相は、その把握の仕方によって「持続」あるいは「進行」「展開」とも)などのように呼ばれる。しかし両者は必ずしも同一ではなく、「持続」が不変化あるいは恒常的变化を意味する概念であるのに対し、「進行」(または展開)は「同一状態の持続でなく徐々の変化を含意」している。

(4)事象のサイズ、数量・質的变化は、(1)の数量的特性と変化性に関わっている。一回生起に対する反復生起は、①規則性(規則的反復,不規則的反復,習慣性) ②何の反復か(全体,部分,いくつかの事象のセット) ③含意的か明示的か(含意的反復;初回以降の事象の反復を含意,明示的反復;回数を明示) の3つに下位区分され、また事象の生起のしかた(程度)として、それが平均よりも活発か不活発かが区別される。

山田 1984 はこの数量、強度変化アスペクトを、話者の視点と視野に関わる対立的アスペクト及び事象の時間的展開の諸相と関わる局相アスペクトと、その本質的差異から全く別系統のアスペクトカテゴリーとして扱われるべきものとする。残念ながらその「差異」について具体的には述べられていないが、これまでの記述から察するに、それは話者の<視点>の関わりの有無、あるいはその関わりの度合いであろう。視点はどこかに置かれるものであるが、対立カテゴリーと局相カテゴリーはまさにその視点と事象との距離、言い換えれば話者がどのように事象を観察するかによって成り立つカテゴリーである。これに対し数量、強度変化カテゴリーは、視点の置き方よりも、持続を持つか否か、限界的か非限界的かといった事象の時間的性質そのものへと関心の向けられたカテゴリーと言えよう。ただしこれは、決して「主観」対「客観」といった不明瞭な二項対立を示唆するものではない。その著の中で山田氏は、「言語表現されたものは、主観的選択ならびに概念化の結果」(p55)であり、よってアスペクトは「人間の普遍的な時間意識に由来するもの」(p7)であることを繰り返し述べている。つまりこの2種のアスペクトカテゴリーは、事象の時間的側面を言語化しようとする際の、話者の選択と概念化のし方がことなるものなのである。

1-2. ‘アスペクト’とは

以上、山田 1984 によるアスペクトの「総合化、抽象化」の作業の概観を示してきた。このような作業は、それぞれの言語に特徴的な「アスペクト」の表現手段の比較研究のために欠かせないものであり、氏もそれを企図していたものと思われる。だが、その前段階に必要な各言語の個別的研究において、山田 1984 の提示した総合的な「アスペクト」モデルをそのままに適用することは難しいだろう。表現手段は各言語において特徴的なものであり、よってその実情に即した体系化がおこなわなければ、その個別的な「アスペクト」の本質を見失うことになりかねないからである。本研究では、山田 1984 が、上記の下位カテゴリー(「多様な現象」)を「ゆるくまとめたもの」としてみとめる「総合的アスペクトシステム」(p73)を、「広義のアスペクト」もしくは「アスペクチュアリティ」と呼び、「アスペクト」という語は、各言語の特徴的かつ基本的な現象の体系に対して用いることとする(<狭義のアスペクト>)。このような規定は、例えば現代日本語のアスペクト研究での、「動態的出来事(=運動)の<時間的展開の様態>を表し分ける、意味・機能的カテゴリー」(工藤 1995:31)である「アスペクチュアリティ」の中核として、形態論的カテゴリーである「アスペクト」を捉えるような考え方も覆うものと言えよう(本章 2-2 参照)。また、本規定による「アスペクト」には、それが

個別言語的な基本的特徴であるならば、形態論的なレベルだけでなく語彙・意味論的、統語論的レベルも含まれ得ることから、現代日本語に限らず、他の個別言語的な現象に対しても同じタームを用いることができる。

第2節 現代日本語の「アスペクト」の研究

2-1. アスペクト研究の3つの段階

現代共通語ではスルとシテイル(シタとシテイタ)の対立がその基本的なアスペクト体系として定着しており、一般的に、スル(シタ)は完成相、シテイル(シテイタ)は継続相とそれぞれ名づけられている。以下、現代日本語に関するアスペクト研究の歴史の流れを概観しよう。その流れには、工藤真由美 1995 によって3つの段階が見出されている。

まず、金田一春彦 1950 によってなされた動詞の4分類は、現代日本語のアスペクト研究の先駆的研究としてよく知られるところである。金田一は、いわゆる「テイル」形の有無、またその形式によって実現される「意味」を分析することによって、動詞を「状態動詞」、「継続動詞」、「瞬間動詞」、「第四種の動詞」の4つに分類し、それぞれの文法的意味の実現が、その形をとる動詞の語彙的意味に大きく関わっていることを明らかにした。研究の初期は、「動詞の示す事象の時間的性質は動詞分類という形で把握されることが多い」(山田 1984:73)ようだが、金田一のこの分類は正にそれにあたるだろう。この「金田一段階」は、アスペクト研究史における「要素主義的なアプローチの段階」と位置づけられている。

次いで、奥田靖雄 1977 に代表される、一連の論稿が挙げられる。これらは、シテイルをスルとの相補的対立関係において捉えた、「体系的なアプローチの段階」に位置づけられている。特に奥田 1977 は、以下の点において今日なお一定の評価を得ている。まず、これまでの研究がシテイルの形だけを分析の対象としてきたのに対して、「site-iru という文法的なカタチは suru という文法的なカタチと対立的な関係をむすびながら、アスペクトの体系をなしている」ことをみとめ(奥田 1985:89)⁶、前者の形式に「継続性」を、後者の形式に「ひとまとまり性」というアスペクト的意味の見られることを明らかにしたこと。さらに、金田一の「継続動詞」「瞬間動詞」についてその語彙的意味の一般化の矛盾を指摘し、それぞれ「動作をあらわす動詞」(後の動作動詞)、「変化をあらわす動詞」(後の変化動詞)と再規定したことである。

最後に、言語の体系とその実際の使用との相関性の考察、すなわち形式・意味・機能の三重の観点からのアプローチを目指すものとして、工藤 1995 は、自身の研究を「体系・機能的アプローチ」の段階と位置づけている。工藤 1995 は、奥田 1977 を始めとする一連の研究の

⁶ 但し、スルを *aspectual form* の1つとしてシテイルに対立させる、形態論的なカテゴリーとしてのアスペクト体系の素描は、鈴木重幸 1957 によって既に見出されていた。だが奥田は、鈴木氏が「アル」や「イル」などシテイルの形をもたない動詞をも《持続態》(シテイル)に対立する《基本態》としていることから(同様の記述は鈴木 1972 にも見られる)、「スルのかたちとシテイルのかたちは、ひとつの実質的な(語彙的な)意味をもつ動詞の形態論的なカタチとして対立している」(鈴木 1957:65)という鈴木氏の言を「具体化されることのない、たんなるイデーにすぎない」(奥田 1985:88)ものと断じた。

なおこの批判に対し、須田 2003 は次のように述べている。「形式的にアスペクトの対をなす形をもたない単語を、アスペクトの体系のなかで位置づけるか、それから排除するかは、ロシアのアスペクト論においても、さまざまな議論の問題であるし、それ以前に、「ある」「いる」の位置づけと、それ以外の動詞がアスペクトの対立をなしているとみなしているかどうかは、まったくべつの問題である。」(p22)

成果を、新たな段階のアプローチへの「躍進」であり、その「研究史的意義は、どんなに強調しても強調しすぎることはない」と、高く評価している。だがその一方で、体系的アプローチでは「脱場面・文脈化されていて、実際の使用法とのきずなが結べないことを指摘し、現代日本語のアспект研究が、「言語体系(文法体系)を媒介とするテキスト的機能」の考察の必要な段階にあることを明言している。そのアプローチの発展を目指し、工藤氏はその著において、アспектが「テキストを構成する複数の出来事間の時間関係」を担うものであるとするタクシス(時間的順序性 temporal order)機能論を展開した⁷。そしてそれを「アспектの本質的機能」と位置づけている。

これは、日本のアспект研究における最も主要な流れの1つであり、その根幹をなしていると言っても決して過言ではないだろう。だが須田義治 2003 は、第2の段階と第3の段階について次のように指摘している。つまり、工藤 1995 はその論の構築において、奥田靖雄 1988, 1993 に見られるアспектの規定(本章 2-2 参照)をほぼそのまま土台としているのだが、その規定は「小説の地の文のなかの、具体的な場面の描写をさしだす段階につかわれている動詞のアспектにしかあてはまらない」、「特殊な使用にもとづく規定」である。そして、「一般的に、せまい範囲にかぎった研究は、それをふくむひろい範囲の研究を前提として、はじめて、十分なものとしておこなえるもの」であり、よって体系的なアプローチも、「機能的な観点を欠いていたから不十分であるだけでなく、体系的なアプローチ自体としても、必然的に、不十分なものとどまっている」(p7)⁸。

なお、これは、工藤 1995 に限った問題では決してない。奥田のアспект理論自体が、これまで、「本質的な、内在的な批判は、おこなわれてこなかった」状況にあったのだという。そして須田 2003 では、「機能的なアプローチの成果をいれて、奥田氏の体系的なアプローチを再検討する」ことによって、奥田の構想したアспект理論の「批判的再構築」をめざしている。以下、須田 2003 における、アспектの一般的な規定とアспект的な意味に関する議論を概観していこう。

⁷ 工藤 1995 は、<テキスト>を「実際の使用のなかにある、複数の文の有機的なつながり」と規定し、「場」との関係において、<かたり>と<はなしあい>という2種類のテキストをみとめた(p19,20)。そして、テキストのもう1つの側面である、文の間の関係に関わる、「<タクシス(taxis)>という機能・意味論のカテゴリー」(p24)について言及している。工藤 1995 は、タクシスを、「テキストを構成する複数の出来事間の時間関係そのもの」であると規定し、それが主にアспектによって担われていることから、タクシスを「アспектの本質的機能」としている(p24,25)。

⁸ 須田 2003 に付せられた鈴木重幸氏による解説「現代日本語のアспект論(須田義治)について」(以下単に「解説」)では、須田 2003 の「特徴」を次のように述べている。

「アспект論としてはもちろん、今日の言語学が、単語や文のレベルにとどまらず、テキスト、あるいはその断片(文の連続)にまで、対象をひろげようとしている段階にあっても、なお、形態論的なアプローチの研究の必要さ、重要さを具体的にしめしている」(p260)

また、その「テキスト」との関係の認識について、同じく「小節の地の文」におけるテンス・アспектな意味の問題を扱った工藤 1995 と対照させながら、次のように述べている。

「工藤はテキスト、すくなくとも、その言語的な側面を対象にしている、といえるとしても、須田はテキストを正面から対象としてはいない。須田は、テキストを視野にいれながら、それを対象としてとりあげる前提として、動詞のテンス論、アспект論、文のテンポラリティー論、アスペクチュアリティー論をいっそうたしかなものにしておいて、それをベースにして、それとの関係をたもちながら、テキストの言語的な側面にむかわなければならない、というのではないか？そして、その立場で、現にテキストの言語的な側面の一部にとりくんでいるのではないか？」(p296)

鈴木「解説」からのこれらの引用によって、須田 2003 の研究史への位置づけは明らかであろう。第5章以下で示していくように、発展途上にある琉球方言のアспект研究にとっても、この須田 2003 における一連の考察が寄与するところは大変大きいと考える。

2-2. アスペクトの一般的な規定

研究の最も初期の段階で、金田一春彦 1955 が「動作・作用の進行の相を示す形態のちがい」というように言い表していたアスペクトの規定は、鈴木重幸 1972 によって明確化されている。鈴木 1972 は「動詞のすがたとは、おおまかにいって、動詞のあらわす動きのどの過程的な部分をとりたてて問題にするかという文法的なカテゴリーである」(p375 下線引用者)と述べており、「話者の視点」という観点が、ここで始めてアスペクトの規定に持ち込まれている。また、鈴木氏はさらに、この言語化された「動作」は、「一定のときになりたつ(なりたつた)ものとして表現される」(同上)のものであると述べ、後の「基準時間」に繋がる概念を示した。この用語は高橋太郎 1985 によって提出されたものであり、以下に引用する高橋太郎他 2005 でも、テンスとの関わりと共に、「よりはっきりと、アスペクトの規定における重要な要素であることが示されている」(須田 2003:9)。

アスペクトもテンスも時間に関係した文法的カテゴリーであるが、アスペクトは、動詞のあらわす運動が、基準となる時間とどのようにかかわっているかについてのカテゴリーであり、テンスは、動詞のあらわす運動が、時間軸上のどこに位置するか(基本的には、発話時とどうかかわっているか)にかかわるカテゴリーである。(高橋他『日本語の文法』p80 下線引用者)

これに対し奥田 1988 は、B.Comrie1976 や Ю.С.Маслов1984⁹に見られる「動作の内的な時間構造」¹⁰という概念に注目し、それに「外的な時間構造」を対置させ、次のように述べる。

ある、ひとつの動作はみずからの内的な時間をもっていると同時に、自分を取りまく、ほかの動作との時間的な関係のなかにあって、それがその動作の外的な時間をかたちづくっている。この内的な時間と外的な時間とはひとつに統一されていて、きりはなすことのできない関係にあるだろう。(奥田 1988「時間の表現(2)」p33)

「外的な時間構造」は従来テンスについていわれていた概念であるが、奥田 1988 はこれをアスペクトに関わらせている。このような考え方は、奥田 1993、工藤 1995 の規定にも、基本的に引き継がれている。

いくつかの動作(変化,状態)のあいだの外的な時間的な関係のなかで、動作(変化,状態)それ自身もっている、内的な時間構造をとらえる (奥田 1993「動詞の終止形(1)」p53)

アスペクトは、<他の出来事との外的時間関係のなかで、運動内部の時間的展開の姿を

⁹ 「場面の内的な時間 situation-internal time」(Comrie1976, 山田訳 1988:14)、「あらわされる「動作」の内的な時間的構造(внутренняя темпоральная структура) (話し手が理解しているものとしての)」(Маслов1984, 菅野訳 1992:98)。なお Маслов1984 では、以下の注 10 に挙げている、Comrie1976 のアスペクトの規定を参照していることが注記されている。

¹⁰ Comrie1976 は、'Aspects are different ways of viewing the internal temporal constituency of situation'(p3)というそのアスペクトの規定において、「場面の内的な時間構成」(山田訳 1988:11)という概念を自明のこのように用いている。これは、「ことなるいくつかの局面を内部にふくみこんでいる場面」や、John is singing と John is making a chair という文によって表されるそれぞれの「場面」は「内部構造の面からみれば」限界の或非限界のかでことなる、などの記述から、ある 1 つの「場面」(これは<動作>や<動き>、あるいは山田 1984 の<事象>などとおきかえることができるだろう)を成り立たせている「要素」のタイプ、また時間の流れの上でのその配置を示していることが窺える。すなわち、動作の時間的展開の仕方である。

とらえる>ものであって、複数の出来事間の時間関係<タクシス>を表し分けるというテクスト的機能を果す。(工藤 1995『アスペクト・テンス体系とテクスト』p61)

だがその一方で、奥田 1993 は「時間の座標軸」という語を用いてアスペクトを規定してもいる。須田 2003 の規定にある「基準時点」は、この「時間の座標軸」に相当しているという。

動作(変化,状態)はみずからの時間的な内部構造(限界,局面,ひとまとまり性)をもっていて、設定された時間の座標軸との関係のなかで、あたえられた動作がどのような時間的な内部構造のなかにあるか、終止形の動詞は、具体的な動作をさしだすために、しめすことがもとめられる。(奥田 1993「動詞の終止形(1)」p46 下線引用者)

アスペクトは、時間軸上の一時点(基準時点)との時間的な関係づけにおいて顕在化する、動作の内的な時間構造(動作の時間的な展開の性格)の、動詞の語形変化による表現である。(須田 2003『現代日本語のアスペクト論』p107 下線引用者)

但し、奥田 1993 の「時間の座標軸」は、ある事象の「基準」となる抽象化された別の事象(外的な時間、「発話時」も含まれる)によって設定されるものであり、話し手によって「時間軸上」に設定される須田の「基準時点」とは、その概念の背景が異なっているといえる。須田 2003 は、発話内の事象(言語化された事象)と発話行為(すなわち発話時)とは位相がことなるものであることから、両者を「動作の間の時間的な関係」として一般化することには無理がある、として批判している。

2-3. アスペクト的な意味

既に述べたように、共通語では、スル(シタ)とシテイル(シテイタ)という2種の形式の対立がその基本的なアスペクト体系であるとされている。工藤 1995 は、「文法性＝形態論的範疇性の認定基準」として、①義務性(使用の強制)、②包括性(あらゆる動詞,述語形式を巻き込んでいる)、③規則性(一様な形式的指標の存在)、④抽象性・一般性(語彙の意味からの解放)、⑤パラディグマティックな対立性(相補的対立関係)の5つを挙げ、「スルーシテイルの形態論的対立としてのアスペクト」が、上記5つの観点からみて「最も文法化されたもの」であることを明確に述べた(pp29-31)¹¹。

これに対し須田 2003 は、上記の基準それぞれについての具体的な説明や議論のないことを指摘し、「工藤氏の説明は、現象面に関するものとなっていて、本質をとらえているとはいえない」とする。そして、「意味の面における対立のし方を捉えなければ、形態論的なカテゴリーを規定することはできない」として(p18)、アスペクトの意味の面からの、それぞれの形の規定と位置づけを試みている。

2-3-1 先行研究

奥田 1977 が、シテイルをスルとの相補的対立関係において捉えたことは既に述べた通りだが、そこで奥田は、シテイルの形のあらわす「動作の継続」と「変化の結果の継続」から<

¹¹ また、シテアル、シテオク、シテイク、シテクル、シテシマウは、包括性の欠如、他の文法的意味の共存、アスペクト対立の存在などの点から、「スルーシテイルのアスペクト対立のように、典型的なもので、文法化されているとはいえない」として、「準アスペクト」と位置づけている(工藤 1995:31-32)。

継続性>を、そしてスルに<ひとまとまり性>というアスペクトの意味をそれぞれ見出している。そして、後の奥田 1993 では、一回おこった具体的な動作をあらわす完成相のアスペクトの意味に「ふたつのヴァリエーション」をみとめ、スルの形に、さらに<限界達成性>というアスペクトの意味を見出している(pp47-48)。これは、鈴木重幸 1979 によってなされた、シタの形(完成相・過去形)に対する次のような意味の区別に大きく関わるものである(pp40-58)。

- ・ アクチュアルな過去—基本的なテンスの意味で、「完成相のあらわすひとまとまりの運動(動きや変化)を過去の特定の一つの時間に関係づける」。
 - (1)発言の直前の動きや変化；「あ、電気がきえた!」
 - (2)現在の状態に結果がのこっている過去の変化；「己もめっきり年を取ったよ」
 - (3)現在すでに実現済みであること；「あのひと、まだいる？」「帰ったわ」
 - (4)現在からきりはなされた過去；「父はこの間の伊豆の地震で死にました」
- ・ 非アクチュアルな過去—現在未来形(非過去形)の非アクチュアルな用法に対応する。
 - (5)非連続のくりかえしの過去；「あの時もさ、君はよく指を切ったぜ」
 - (6)コンスタントな属性の過去；「秀吉は、小さいときの名を日吉丸といった」
- ・ その他の過去形—話し手の内的な状態をのべる文、話し手の態度表明の文

ここで問題となっているのはアクチュアルな過去をあらわす用法であるが、鈴木 1979 はこのうち、(1)から(3)を<ペルフェクト的な過去>(=何らかの点で現在とむすびついた過去)、(4)を<アオリスト的な過去>(=現在からきりはなされた過去)として区別した。このテンスの面での区別に加え、奥田 1993 はさらに、前者は「限界へ到達した動作」、そして後者は「ひとまとまりの動作」をそれぞれあらわすというように、アスペクトの面における違いをも見出したのである。この区別は、「これまで、過去と完了というように、一方はテンスだけ、もう一方はアスペクトだけを表すとされてきた「した」の形の意味を(例えば寺村 1971—引用者)、テンスとアスペクトの両面から、統一的に規定」(須田 2003:19-20)したものととして、高く評価されている。

次に、工藤 1995 によるアスペクト的な意味の規定を見てみよう。工藤氏はスル、シタ、シテイル、シテイタという4つの形の体系を「基本的アスペクト・テンス体系」(p36)と呼ぶ。そこで規定されているアスペクトの意味は次のようにまとめられるだろう(pp38-40)。

- ・ シテイル形—基本的意味 <継続性> … 動作の継続, 変化結果の継続
 派生的意味 <パーフェクト性>¹²；「その本なら一度読んでよ」
 <反復性>；「あの子はマンガばかり読んでいる」
 <単なる状態>；「この道は曲がっている」
 - ・ スル形 — 基本的意味 <完成性>
 派生的意味 <パーフェクト性> <反復性> <恒常的特性>
- | | | | |
|----|---|---|---|
| スル | — | + | + |
| シタ | + | + | — |
- ex. スル；「彼は毎朝5時に起きる」<反>、「人は死ぬ」<恒>

¹² 後に示していくことであるが、工藤 1995 が「パーフェクト」をアスペクト的な意味の1つと見ているのに対して、須田 2003 では、アスペクトとパーフェクトを別カテゴリーとしている。須田 2003 では、「パーフェクト的な意味」を「基準時点に先行しておこった出来事をあらわす」(p71)ものと規定されている。

シタ；「その本なら、もう読んだよ」<パ>、「あの人は、若い頃、毎朝5時に起きた」<反> 工藤氏の規定では、スル形には奥田のみとめた<限界到達性>が含まれておらず、それは、「動詞の語彙的な意味による焦点化のちがいを考え」られているようである(須田 2003:20)。

2-3-2 アスペクト的な意味の体系性

工藤 1995 の2種の規定に対し、須田 2003 では、「中核的な意味」、「基本的な意味」、「周辺の意味」に、さらに「一般的な意味」を加えた4つの観点から個々のアスペクトの意味を検討し、その体系化を試みている。以下にその概要を示す(pp22-43)。

(1)中核的な意味

「個別的な意味を代表し、その形態論的なカテゴリーの性格をもっともきわだたせるような意味」であり、具体的な動作をあらわす場合の完成相と継続相の意味が相当する。両者は「動作が基準時点と時間的に関係づけられることによって生じてくる、動作の内的な時間構造の現われ方の対立」を示し、<限界到達>と<過程継続>という意味が、それぞれ、抽出されている。これらは、積極的な特長によって性格づけられている等価的な対立であり、より一般化すれば<非過程継続>と<過程継続>のように規定されるという。

動詞のタイプ別に具体的に見ていくと、まず、限界動詞の完成相では<限界へ到達した動作>の意味が表される。このとき、限界到達の段階は、過去形ならば基準時点以前(直前)、非過去形は以後(直後)となり、よって、過去形の方が基準時点との関係づけが強く、非過去形の限界到達は潜在的なものとなる。コンテキストに強く依存した意味であり、その土台には動詞の語彙の意味が作用している。

- ex. 完成相・過去形 「たいへんだ。彦ちゃんがおちたっ」
完成相・非過去形 「待ってて頂戴。いま、すぐあったまるわ」

また、限界動詞の継続相では<動作の過程の継続>の意味が表される。一般的に、主体変化動詞ならば基準時点にある限界到達後の状態を、客体変化動詞ならば基準時点における限界に方向づけられた過程の継続を、それぞれ表すとしている。

- ex. 主体変化動詞 「お帰んなさい。お風呂がわいていますよ」
客体変化動詞 「何、煮てるんだね？」

但し、「おく、いれる」などは、対象に変化を引き起こす動作をあらわす動詞であるにも関わらず、継続相で動作の過程の継続をあらわす場合は少ない。

無限界動詞の場合、その継続相は、基準時点と関係づけられた<動作の過程の継続>の意味を表し、また完成相は、過去形ならば基準時点以前(直前)、非過去形ならば基準時点以後(直後)の、<動作の発生>の意味をそれぞれ表す。

- ex. 継続相 「まあ、お時さんはたのしそうに話しているわ」
完成相・過去形 「コロコロと鳴き始めた。鳴いたッ」
完成相・非過去形 「動くぞ」ジェット機は方向を変えて滑走しはじめた」

また、これらの意味の特殊なバリエーションとして、①ながい時間のなかで進行するような動作(痩せる、直る)、②現象動詞・知覚動詞(光る、音がする、見える、聞く)、③「たたく、ぶつ、あたる」などの動詞の例が挙げられている。

- ex. ①「あなた、とても痩せたわね」, 「ええ、すっかり直りました」
②完成相 「ライターが光った」<動作の発生、はじまり>
継続相 「広いアスファルトの道は河のように白く光っていた」<動作の過程>

- ③「自分の膝小僧を、ぴちゃぴちゃ叩いた」 <多回性/動作のはじまり>
 「両手で、子供のように、台をたたいている」 <多回性/動作の過程の継続>
 「店主は印入りの厚い前だれをたたいた」 <一回性>

(2)基本的な意味

「その意味の実現において言語的な環境¹³への依存度がもっともひくいような個別的な意味」であり、「その言語の話者が、その形をみて、まずおもいうかべる意味」とされている。継続相は<動作の具体的な過程継続の意味>、完成相は<全体的な事実の意味>という基本的な意味をそれぞれ表す。継続相の基本的な意味が中核的な意味と一致し、完成相との対立において有標性を示しているのに対し、完成相の基本的な意味は、動作の内的な時間構造にはふれず、ただ動作の実現の事実を表している。つまり、動作の内的な時間構造を表す継続相とそれがないことを表す完成相という、欠如的な対立である。

この、完成相の基本的な意味である<全体的な事実の意味>には、<全体的な出来事の意味>と<全体的な名づけの意味>の2つが見出だされてる¹⁴。まず<全体的な出来事の意味>について、次のような3種の意味が挙げられている。これらは、質問文やコンテキストなどによって表される、何らかの前提のもとで実現する意味である。但し、<特定時への出来事の位置づけ>の意味には何らかの前提はあまり感じられないとしている。

ex. <動作の実現・非実現の確認> 「借りますか?」「うん、借りる」

<出来事の側面的な、付随的な特徴の確認>

「この男は一人で食堂で飯を食べたのですなあ」

<特定時への出来事の位置づけ> 「けさ、わたし転んだの。石段で…」

また、<全体的な名づけの意味>については、次の3種の意味が挙げられている。

ex. <提示> 「飲む、打つ、買う…何だっていいじゃないか」

<例示・手順> 「～、私の毛皮のコートを売り飛ばす、テレビを持ち出して売ってしまう。(中略)もう何年もそれをやられて来たんですよ」

「空気を入れる前に、その重さを計ります。それから次に(中略)口をとじて重さを計ります。そして、(中略)計算するのです」

<評価・特徴づけ> 「奥さんはよく働かれますなア」

「何て音をたてるのよ。何時だと思ってるの」

(3)周辺の意味

まず、<非連続的な過程の明示と非明示>の意味が挙げられている。反復的な動作の過程継続が、完成相では非明示的、継続相では明示的にそれぞれ表される。

ex. 完成相 「行くとも、毎日々々画に描かれに行く」

継続相 「休みの日いいいは、毎日行ってるよ」

次に、<パーフェクト性>(以前か同時か)の意味が挙げられている。<パーフェクト>は、

¹³ この「言語的な環境」は、次のように規定されている。「コンテキストだけでなく、文の構文論的な構造や動詞の語彙的な意味など、文法的な形と文法的な意味意外のものは、すべて含まれる」(p23)。

¹⁴ なお、須田 2003 は<全体的な名づけの意味>について、時間的な具体性の弱い、アスペクト体系の周辺のなものであり、本来は基本的な意味に含めるべきではないのだが、便宜的に<全体的な出来事の意味>とひとまとめにしていることを断っている(p29)。

工藤 1995 によって、「ある設定された時点において、それよりも前に実現した運動がひきつづき関わり、効力を持っていること」を表すものと規定されている(p99)。そして須田 2003 は、<パーフェクト>の継続相に対立するものとして<全体的な出来事の意味>を表す完成相を想定しているが¹⁵、それは「パーフェクトの対立」ではなく、「基準時点をめぐる時間的な位置づけというカテゴリー(「動詞のさししめす動作の、時間軸への位置づけのし方」-引用者)における対立」にふくめられている(p111)。

ex. 完成相<全体的な出来事の意味> 「僕の母は憲法発布の翌年に死んだ」

継続相<パーフェクト> 「私たちが逮捕にいくまえに、(中略)しんでいましたよ」

また、完成相過去形は、コンテキストあるいは「もう」などの副詞との共起によって、パーフェクト的な意味をとまうことができる

ex. 完成相過去形 「あら、もうそんな話をしたの」

(4)一般的な意味

(1)から(3)までの意味の考察から、継続相は、その文法的な意味が言語的な環境に対して積極的(有標形式)であり、また完成相は、その文法的な意味が言語的な環境に対して受動的(無標形式)であることが明らかにされたが、そこから須田 2003 は、「それぞれの個別的な意味すべてに共通する意味特徴」である一般的な意味の抽出も試みている。

例えば、中核的な意味、基本的な意味の考察において、継続相には<継続性>という意味特徴のあることが示されたが、<パーフェクト>の意味でも、何らかの「効果」の継続をそれと解釈すればみとめられなくもなく、またさらに、パーフェクトをアスペクトとは別カテゴリーであるとすれば¹⁶、より限定的な、<過程継続>という意味がみとめられるとしている。

しかし、「はじめ、なか、おわりをふくむ過程全体をまとめて分割せずにさしだすのが、ロシア語のアスペクト論におけるひとまとまり性である」ことからすると、日本語の完成相に<ひとまとまり性>はみとめられないとする。完成相は、限界到達だけでなく、過程継続(限定されない反復の動作の場合)を仄めかすこともあり、よって、継続相の過程継続という積極的な特徴を「あるともないとしめさない」(=<非過程継続>)ものと捉えられている。

但し、「一般的な意味は、きわめて抽象的なものであり、その存在は確実なものであるとはいいがたい」とし、「中核的な意味や基本的な意味は、その意味のために、その形があるというもののなので、そうした意味においてアスペクトを規定する方が、言語の本質をとらえているといえる」と述べ、「完成相」「継続相」という名づけを引き続き用いている。

以上、現代日本語のアスペクト研究の状況について概観し、須田 2003 によるアスペクトの規定と、アスペクト的な意味の体系性を示してきた。須田 2003(ほか)は、奥田がみとめた完成相の<ひとまとまり性>と<限界達成性>を、それぞれ基本的な意味と中核的な意味と

¹⁵ 両者は、「内的な時間構造を顕在化させない動作として共通しながら、基準時点に対する時間的な関係において、同時か以前かという対立をしめしている」と捉えられている(須田 2003:37)。なお、この対立は、基準時点が現在にある場合には成り立たない。

¹⁶ 次節に示すように、須田 2003 は、<パーフェクト>が「内的な時間構造、時間的な展開のし方」をさらけださない(p88)ことにアスペクトとの本質的差異をみとめ、両者を別カテゴリーと見なす立場を採っている。

いことなるレベルのアスペクトの意味として位置づけ、そして、それぞれの意味が、<継続性>という継続相の意味特徴との対立において現れてくる性質のものであることを明らかにしている。そしてそれは、アスペクトという文法的カテゴリーにおける有標―無標という形態的な対立が、意味の面においてもあてはまる、ということをも明らかにしている。次章では、この須田 2003 によるアスペクト的な意味の体系化を参照しつつ、多良間方言のテンス・アスペクトについての考察をすすめていく。

だがその前に、継続相の周辺的な意味の1つとして示された、<パーフェクト>についても見ておく必要がある。西日本諸方言にはこの<パーフェクト>の意味を実現するための形式シトルがあり、「パーフェクト相 Perfect」あるいは「結果相 Resultative」のようによばれているが、多良間方言にも同じく、<パーフェクト>のための形式と考えられる *si: ukī* が現れている。しかし、現代日本語のアスペクト研究において、シトルの「名付け」に用いられている「パーフェクト」、「結果(相)」という文法的概念それぞれについて、その明確な規定を試みた研究は実に少数である。またその数少ない中でも、研究者の立場の異なりによって、両者の捉え方は大きく異なっている。以下、工藤 1989,2005 及び須田 2003 における議論を主な手掛かりとしながら、<パーフェクト>についての考察を試みる。

第3節 現代日本語の「パーフェクト」の研究

3-1. パーフェクトとは

現代日本語のパーフェクトの研究は、シテイルの形が実現する、「あの人はたくさんの小説を書いている」に見られるような、<継続>とはことなる意味の考察をその端緒としているという。藤井正 1966 はこの「<継続>とはことなる意味」を、「過去に行われた動作・作用そのものが問題であって、それを現在から眺めた場合に用いるもの」としている。そしてその意味を、「その動作・作用のもたらした結果であるところの現在の状態」をあらわす「あの人は現在結婚している」の意味から区別して、「経験」と名づけている(金田一編 1976:105-106)¹⁷。

この「経験」は後に、高橋太郎 1969 によって「経験・記録」と名づけ(規定)しなおされる。そして、高橋 1985 は、「現在以前の動作やできごとを質化したもの」(=<経験・記録>)と、「ある局面の完成後につぎの局面のなかにあるすがた」という2つの意味を取り出すに至る。両者の違いは次のようなものとして説明されている。

あとの例(「わたしが産院についたときには、あかんぼうはもううまれていた」―引用者)では、基準時間がしめされていて、基準時間のまえに、さきだつ局面、つまり<うまれる>という変化の局面がまるごと完成し、基準時間には、その結果の局面、つまり、<母体のそとに存在している>という状態のなかにあったことをしめしている。それに対して、まえの例(「島崎藤村は 1872 年に長野県で生まれている」―引用者)では、結果の局面は問題にならず、その動作が以前に完成したことだけをのべている。(高橋 1985『現代日本語動詞のアスペクトとテンス』p119)

¹⁷ なお藤井 1966 に先立って、教科研東京国語部会・言語教育サークル 1963『文法教育 その内容と方法』で既に「経験」の意味の取り出しはなされていた(須田 2003:68)。

その後、工藤真由美 1989 では、まず「終止の位置におけるシタがあらわすアスペクト的意味を<パーフェクト>」とよび¹⁸、シテイルの形に見出される 4 つの意味—①持続(動作の持続,変化結果の持続)、②反復,習慣、③経験,記録、④単なる状態—のうち、③の「経験,記録」がそれに関わるとした。工藤 1989 は「パーフェクト」を次のように規定している。

- ① 発話時点,出来事時点とは異なる<設定時点>が常にあること。(省略)
 - ② 設定時点にたいして出来事時点が先行することが表わされていて,テンス的要素としての<先行性>を含んでいること。
 - ③ しかし,単なる先行性ではなく,先行して起こった運動が設定時点との<むすびつき=関連性>をもっていること。つまり,運動自体の<ひとまとまり性>とともに,その運動が実現した<後の段階=効力>をも同時に捉えるというアスペクト的な要素を持っていること
- は,平等に強調されなければならないであろう。(工藤 1989「現代日本語のパーフェクトをめぐって」p67)

またその機能的側面(タクシスの機能)に、シタの「継起性=前進性」、シテイタ(<継続>)の「同時性」に対する、「先行する出来事を導入する」機能、すなわち、<時間的後退性(一時的後退性)>を見出している。なお、これらの規定は工藤 1995 にも引き継がれており、<パーフェクト性>についてはさらに、<原因・理由の説明性>というムード性に関わる機能がみとめられている(p114)。しかし、その意味(機能)の中心はあくまでも<時間的後退性>にある、と捉える点に変わりはない。また須田 2003 でも、工藤 1989,1995 のパーフェクトの規定に対して、「高橋氏のとりだしたふたつの意味をひとまとめにしてパーフェクトとよび」、「経験・記録」(中略)ではなく、高橋 1985 のいう「ある局面の完成後につぎの局面のなかにあるすがた」という意味(中略)を、パーフェクトの、より基本的なものとしてみているようである、という指摘がなされている(pp70-71)。

この工藤 1989,1995 に対し、須田 2003 は、「パーフェクト的な意味」を、「基準時点に先行しておこった出来事をあらわす」¹⁹ものと規定している。そしてそれを、「先行性」と「事実性」という、2 つの意味に区別した。前者は、高橋 1985 の「ある局面の完成後につぎの局面のなかにあるすがた」、工藤 1995 の「一時的後退性」に重なるものである。なお、須田 2003 は、自身の規定においては「局面」ではなく「段階」という語を用い、「場面のなかで、なんらかの意味をもつような、動作の完成後の段階にあることをあらわす」としている。またこの「先行性」は、基準時点にある「他の動作との時間的な関係にある」という点において、変化の結果の継続(変化動詞継続相)に近い(本章 3-2 参照)。これに対し、「事実性」は、「非時間的な関係(論理的な関係など)のなかにおかれ」、「ただ、過去における事実をさしだしてい

¹⁸ 終止の位置のシタは、<過去>と<完了>というアスペクト的な意味とパーフェクト的な意味の 2 側面をもった形として、捉えられることが多い。工藤 1995 も、<完了>のシタを、<パーフェクト>として扱っている。だが須田 2003 では、「限界到達をあらわしていれば、必然的に、基準時点とのむすびつきをもたされる」ものであることを示し、「アスペクト的な意味を土台として、パーフェクト的な意味が、萌芽的な形であらわれているとみることもできる」としながらも、それはやはり、「限界到達という個別的なアスペクト的な意味のもつ機能」であると結論づけている(p86)。

¹⁹ 先述したように、この「基準時点」は、奥田 1993「動詞の終止形(その 1)」(『教育国語』2-9)で示された、「時間の座標軸」に相当するものとされている。奥田の「時間の座標軸」が、ある事象の「基準」となる抽象化された別の事象によって設定されるものと規定されているのに対し、須田 2003 は「基準時点」を、「時間軸上の一時点」(p197)として捉えている。

る」だけとされている。(須田 2003 が、工藤 1989 の③「後の段階＝効力」をその規定に含めない理由はここにある。) この時、動作が関係づけられているのはその動作と同じ時間帯にあるもう 1 つの動作であり、「過去の事実のあいだにある論理的な関係を現在の時点からとらえている」。このことから須田 2003 は、「したがって、コンテキストにおける他の動作との関係において、工藤氏のいう一時的後退性をあらわしていない」と述べ、パーフェクトの規定となる「動作が基準時点に先行していること」と、テキスト的機能である「一時的後退性」の、厳密な区別の必要性を強調している。(pp71-73 より。)

またパーフェクトは、「継続相というアスペクト形式がテンス形式としての側面をもちはじめること」(高橋 1985:115)を示すというように、複合的に捉えられるものである。工藤 1995 でもその捉えられ方は同じであるが、アスペクトというカテゴリーの 1 要素(現代日本語においてはアスペクト的意味の 1 つ)であることがより強調され、明確に、その体系内に位置づけられている²⁰。これに対し須田 2003 は、その扱いに対して疑問を投げかけ、アスペクトとパーフェクトの本質的差異を次のように述べる。

しかし、<後続する時点＝設定時点における運動の直接的結果あるいは間接的効力の継続性>というのは、はたして、アスペクト的な意味であろうか。(中略) 基準時点との関係において、みずからの内的な時間構造、時間的な展開のし方をさらけだし、動作の時間的な展開のひとつの段階が基準時点と関係づけられるのが、アスペクトであるのに対して、パーフェクトでは、動作の内的な時間構造に対して外的に、つまり、内的な時間構造をさらけ出すことなく、動作が、間接的な効力など、なんらかの、べつのし方で、基準時点に関係づけられている。基準時点との関係において、基本的に、アスペクトは、ひろい意味において、同時的(おなじ時間帯)、同場面であり、パーフェクトは、非同時的(ことなる時間帯)、異場面である。」(須田 2003 『現代日本語のアスペクト論』 pp87-88 下線引用者)

須田 2003 の記述の通り、パーフェクトが「内的な時間構造、時間的な展開のし方」をさらけださないのだとすれば、それは、まさにそれをとらえることを本義とする、アスペクトの一般的な規定に抵触することになる。つまり須田 2003 は、パーフェクトが、アスペクトとは別のカテゴリーと捉えられるべき性質のものであることを示唆しているのである。この点において、パーフェクトに関する工藤 2005 と須田 2003 それぞれの規定は、全くことなるものとなっている。

3-2. <パーフェクト>と<変化の結果の継続>

上に見たような、須田氏と工藤氏それぞれに代表されるだろうパーフェクトの扱い方をめぐる対立は、<パーフェクト>と<変化の結果の継続>というアスペクト的意味の関係をどう捉えるか、ということにも関わってくる。この 2 つの意味について見ていくために、まず、高橋他 2005 で示されている用例を以下に挙げよう。そこでは<パーフェクト>と<変化の結果の継続>の意味の違いが明確に述べられている。なお、後者の意味(<変化の結果の継続>)はいわゆる変化動詞の継続相によって実現されるものである。

²⁰ 工藤 1995 は、「パーフェクトという派生的意味では、アスペクト的なものとテンス的なものとが、相互浸透していて(複合化されていて)、単純なアスペクト的意味ではない」(p39)と述べつつも、「現代日本語の<パーフェクト>は、以下の点を認めた上で基本的には、アスペクトであると規定してよいのではないか」(p107)と結論づけている。「以下の点」については省略

問題9 次の(a)と(b)のアスペクト的意味のちがいについて,かんがえてみよ。

学校を する ときには, 門が あいていた(a). ところが, うちに かえって, わすれものに 気が ついて, 学校に もどった ときには, すでに 門が しまっていた(b). (高橋他 2005『日本語の文法』 p88)

(a)は<変化の結果の継続>、(b)は<パーフェクト>の意味をそれぞれ実現している。これらは、「基準時間において、変化結果の持続過程をなす局面のなかにあるすがたをさしだしている点において共通なのであるが、(b)のばあいには、そのほかに、もうひとつ、基準時間のまえに変化が完成したことも、あわせてあらわしている」(同上:89)。

このように、<パーフェクト>と<変化の結果の継続>には大きな共通点があり、近い関係にあることがわかる。だが須田 2003 は、この2つを次のように区別する。

これ(先行性—引用者)は、ふたつのパーフェクト的な意味のうちでは、変化動詞の継続相のあらわす変化の結果の継続にちかいものである。だが、基準時点に、動詞のさししめす変化から一義的にきまる状態が顕在的にあらわれている、変化の結果の継続とちがって、たとえ、基準時点に一義的にきまるような状態が存在するとしても、基準時点以前に動作や変化が実現したことを中心にあらわしているため、基準時点における状態は、顕在的には、あらわれてこない。(須田 2003『現代日本語のアスペクト論』 p72)

この須田 2003 と同様の記述が、工藤 1989 にも見られる。長くなるが、2箇所を引用する。

運動の後続段階をとらえるという点では、パーフェクトは、シテイルの基本的意味<持続>の1バリエーションである<結果持続性>と共通する点をもっている。効力とは、広い意味での「運動の結果」であろう。また、<結果持続>とは、結果が残っていることは既に運動は先行して起こっているということなのであるから、広い意味でのパーフェクトであろう。(中略) しかし、「パーフェクト」という用語を、あるいは「結果」という用語をひろく規定しようと、シテイルの基本的意味である<結果持続>と、派生的意味である<パーフェクト>とはアスペクト的に同じではない。<結果持続>は、<パーフェクト>と「運動実現後の段階をあらわす」点で共通しつつも、しかしまた<動作持続>と、<持続>をあらわす点では1つにまとまっていて、それゆえに、機能的にも、<同時性＝共存性>を表わし、<パーフェクト>のように<一時的後退性>を表わさない。(工藤 1989「現代日本語のパーフェクトをめぐる」p83 下線引用者)

結果持続は、確か既に(以前に)変化が起こったことを前提としているとはいえ、そのことは、含み(含意)としてしめすにとどめ、直接的にはその結果の段階のみを捉えている事をしめす。この含みとしてある、以前の変化(運動)そのものをも直接的にとらえたとき、パーフェクトというアスペクトの意味がでてくるのである。(同上 p85 同上)

つまり、<変化の結果の継続>が基準時点における「変化の結果の段階」にその意味の中心をおくのに対し、<パーフェクト>は基準時点以前の「変化」に重きを置いている。工藤 1989 と須田 2003 は、この全く同じ理由で、両者を区別していると言える。だが、工藤 1995 ではこれが一転する。

運動の後続段階をとらえるという点では、パーフェクトは、シテイルの基本的意味<継続性>の1バリエーションである<結果継続性>と共通する点をもっている。効力とは、広

い意味での「運動の結果」であろう。また、<結果継続>とは、結果が残っていることは、既に運動は先行して起こっているということなのであるから、広い意味でのパーフェクトであろう。(中略)

従って、次のような図式化が可能である。<結果継続＝状態パーフェクト>は、一方では、<継続性＝非限界づけられ性>の点で、<動作継続>と共通し、他方では、<運動完成後の段階>を捉える点で、<動作パーフェクト>と共通している。(工藤 1995『アスペクト・テンス体系とテキスト』 p117 下線引用者)

先に引用した工藤 1989 とは異なり、工藤 1995 ではその意味の中心の違いから生じるタクシス機能の違い(「<パーフェクト>のように<一時的後退性>を表さない」)については触れられていない。つまり後者では、<パーフェクト>と<変化の結果の継続>の関係性を、その相違点よりも「<運動完成後の段階>を捉える」という共通点に重きをおいて、捉えていると言ってよいだろう。そうして、<変化の結果の継続>と<パーフェクト>は、「パーフェクト」として1つにまとめられる。しかし、このような捉え方は「タクシスという機能・意味的カテゴリー」を担う事を「アスペクトの本質的機能」と見なし、かつパーフェクトをアスペクト的な意味の1つと捉える工藤 1995 の基本的立場と矛盾することにはならないのか。また、<変化の結果の継続>について、それは果たして、<先行の時間的段階(＝完成性)>を捉えているとみとめられるものなのか。やはり、それは「ほのめかしにすぎず、背後にしりぞけられている」(須田 2003:96)のではないのか。

3-3. 「パーフェクト」というカテゴリー

以上、現代日本語の「パーフェクト」に関する先行研究を概観した。工藤 1995 の<パーフェクト>と<変化の結果の継続>の捉え方については、その最後に2つの問いを示しているが、それによって、パーフェクトをアスペクト的な意味の1つとする工藤氏の規定そのものが否定されるわけではない。また、須田 2003 は、アスペクトとパーフェクトの本質的差異を明らかにすることによって、パーフェクトをアスペクトから区別し、「時間的な位置づけ」というカテゴリーにまとめているが、「これを、形態論的なカテゴリーとみることができるかどうか」、また、「これまでの、アスペクト・テンス体系を提示する形態論のパラダイムに対して、パーフェクトを、そこに、どのようにくわえるか」(p243)という問題については、「これからの重要な課題」と述べるに留めている²¹。

ところで、両者の「パーフェクト」への対応は、パーフェクトが、‘アスペクトとはかなりことなるものである’という認識において共通している。そして、それは一般言語学的にも共通のものとさえそうである。例えば Comrie 1976 では、‘I have lost (Perfect) my penknife.’ と ‘I lost (non-Perfect) my penknife.’ という英語の過去形と完了形の2つの文を例に挙げ、前者が「小刀はまだうしなったままである」という「ふくみ implication」を持つのに対して、後者にはそのような「ふくみ」がないことを指摘し、2つの文の違いを明確に示している(山田 1988: 83)。だが Comrie は、「パーフェクトはこのアスペクトとはかなりことなっている」ことに言及しながらも、「しかし、パーフェクトは、伝統的な用語法においては、アスペクトにかぞえられているので、アスペクトにかんする書物でとりあげておいたほうが、きわ

²¹ また、鈴木「解説」では、アスペクトから区別された「パーフェクト的な意味」は「アスペクチュアリティー」に含まれないことになるにも関わらず、須田 2003 では含められていることも、合わせて指摘されている(p299)。

めて好都合であるように思える」(同上:83)とし、上記の例についても、アスペクト対立の1つとして扱っている。(Comrie1976 では、英語に、進行相と非進行相、パーフェクトと非パーフェクトという、2つのアスペクトの対立がみとめられている(山田訳 1988:197)。)²²

現代日本語のパーフェクトに関する工藤 1995 の捉え方は、このような一般言語学の流れに追随するものと位置づけられよう。実際、共通語に限って言うならば、<パーフェクト>はシテイルという形式によって実現される文法的意味であり、よってそれを継続相のシテイルの派生的な意味の1つとする捉え方はごく自然のことにようにさえ感じられる。だがしかし、「意味論的には、パーフェクトは、アスペクトやテンスと、はっきり区別することができる」(須田 2003:243)ということは、パーフェクトを考える上でより重要視されるべきことではないだろうか。<パーフェクト>がアスペクトの一般的な定義に「合わない」ことは、既に示してきたとおりである²³。また外形的な面についても、西日本諸方言や琉球諸方言のように、形態的にも「区別」の見られる言語は多く存在している。このように考えるとき、いくつかの問題を孕みながらも、須田 2003 の主張が非常に首尾一貫したものであるということが明らかとなる。

そして、本研究の対象言語である多良間方言について言えば、まず次のような単純で明確な理由によって、パーフェクトをアスペクトにふくみこませて捉えることが困難となっている。つまり、多良間方言では、この<パーフェクト>の意味を主に si: ukī という分析的な形式によって表しているが、この形はまたいわゆる継続相によっても形づくられる(si: buri ukī)、ということである。もし si: ukī が、いわゆる完成相、継続相と3項対立をなしているとすれば、このような「アスペクト対立の存在」(工藤 1995:33)はみとめられないはずである。須田 2003 の言を借りるならば、「対立的な文法的な形は、ひとつの単語のなかに共存することができない」(p18)のであり、多良間方言の si: ukī はこの点において既に、完成相、継続相と同一の形態論的カテゴリーに加わることができないのである。

このように、少なくとも多良間方言については、「パーフェクト」と「アスペクト」を区別して考察していく必要がありそうである。よって本研究では、それぞれに1つずつ章を立てて、別々に論じていくこととする。

3-4. シテアルとシテオクについて

ここまで、「パーフェクト」という文法的概念について、その問題を示し、シテイルという形式に関わる議論を検討することによって、本研究が採っていく立場を明らかにしていった。だが、<パーフェクト>の意味を実現するのはシテイルに限られた用法ではなく、シテアルやシテオクという形式によっても表されるものである。これらの形式の基本的な用法は、共に<結果継続>あるいは<パーフェクト>の意味を表すこととされ、並行した性質を持ち、意味的にも深く関連するものとして位置づけられている(金水他 2000:69)²⁴。

²² しかし、英語の進行形と完了形は共存可能なものであり、このことについて須田 2003 では、「アスペクトとパーフェクトがべつの体系をなしていることを意味しているのだろう」(p18)と述べられている。

²³ Comrie1976 でも、「しかし、まえにあげたアスペクトの定義(本章注10 参照—引用者)によれば、パーフェクトをアスペクトのなかにふくみこませることができるか、どうか、うたがわしい」と、その扱い方の矛盾を自ら指摘している。

²⁴ シテアルとシテオクの関わりについて、高橋 1999 では、シテオクとシテアルはそれぞれ perfective、imperfective として対立し、「アスペクト動詞としてパラディグマチックなペアをくんでいる」(p86)と捉えられている。工藤 1989 は、シテアルとシテオク、またシテイルは、「主体のもくろみ性ととともに<動作+

そして、上に挙げた多良間方言の *si: uki* は形態的にシテオクに対応する形であり、また、北琉球方言をはじめ、他の琉球諸方言では、シテアルに相当する形が<パーフェクト>の意味を実現するための形式として現れることが報告されている。だが注意しなければならないのは、多良間方言の *si: uki*、そして琉球諸方言のシテアル相当形も、その意味・内容面では、共通語のシテオク、シテアルにそれぞれ対応するものではないということである。そこで、第6章で行う *si: uki* についての議論の前提として²⁵、共通語のシテアルとシテオクの意味・用法を、簡単にではあるがここで示しておく。

まず、シテアルについて、鈴木重幸 1972 は、この形式を「結果相(態)」とよんでいる。共通語のシテアルは、「直接対象にはたらきかけて、その結果その対象をあたらしい状態にかえたばあい、その対象を主語として、はたらきかけをうけた結果の状態を述語としてあらわす」働きを持つ。よって、主に他動詞から作られ、「雨がフッテアル」や、「この 泉の 水は のんである」(働きかけの結果が対象に残らない)のように言うことはできないことが示されている(p385)。この鈴木 1972 の規定は高橋太郎 1969 に倣ったものであり、高橋 1969 では、シテアルは「対象に変化を生ずるうごきがおわったあと、その対象を主語にして、結果の状態を述語としてあらわしたもの」(金田一他 1976:128)と規定されている。つまり、「壁に絵をカケル」→「壁に絵がカケテアル」のように、動作客体はヲ格ではなくガ格によって示される。但し、この格標示は絶対的なものではなく、ガ格を典型としつつも、ヲ格との間で揺れている(鈴木 1972:48)。

また、工藤 1989、須田 2003 にも同様の記述が見られる。工藤 1989 は、シテアルに、<結果継続>と<パーフェクト>という、シテイルと同様の 2 つの「アスペクト的意味」を認めているが、その形をとりうるのが「意志的動詞に制限されている」(p108)ことから、シテアルを、アスペクト対立の項の 1 つとしていない(<動作主体の意図性＝もくろみ性>の明示)。須田 2003 では、そのパーフェクト的な意味が「名詞のさしだす客体にのこる、なんらかの結果や効果にかかわる」ことから、シテアルを「客体的なパーフェクト」と呼んでいる(p111)。なお、これに対するシテイルは「非客体的なパーフェクト」となるが、両者の時間的な意味の違いはなく、それぞれパーフェクト的な意味の変種として捉えられている²⁶。

次に、シテオクについて、高橋 1969 は、シテオクを「すがた」(＝アスペクト)と「もくろみ」にわけて記述している。「すがた」は、(1)対象を変化させて(a)、その結果の状態を持続させる(b)ことをあらわす(＝状態をつくりだす過程)、(2)対象にはたらきかけないで、そのまゝの状態を持続させる(＝状態を維持する過程)という 2 つの意味を表す。「もくろみ」は、

その結果、効力>を常にとらえる」点で共通しつつも、「シテイル、シテアルとシテオクでは後の時間段階から先行する運動を<回顧的>にとらえるか動作を行なう前の時間段階において<みとおしの(前望的)>にとらえるかで異なっている」(p111)と述べている。また工藤 1995 は、シテアルとシテオクには共に「包括性の欠如」、「他の文法的意味の共存」が見られ、「スルーシテイルのアスペクト対立のように、典型的ななかたちで、文法化されているとはいえない」とし、これらを「準アスペクト」とよんでいる(pp30-31)。

²⁵ 第6章のはじめに述べることであるが、琉球方言のパーフェクトの形式は、そのパーフェクトの形式が、シテアルとシテオク相当のいずれの形式を示すかということによって異なっている。だが、その基本的な意味・用法が共通しており、そして、その内容面においては、シテアル、シテオクのいずれにもそれぞれ対応していない。

²⁶ なお、シテアルも、「設定時に先行して出来事が達成されていることをあらわす」場合(金水他 2000:46)、シテオクと同じく<準備>の意味を獲得する。この場合は自動詞も用いられる。

(1)準備的な動作、(2)体験する動作、(3)とりあえずの動作・しかたなくする動作・故意にする動作、(4)「しておいて」「しておきながら」の形で「したにもかかわらず」の意味をあらわすという4つの用法が示されている。なお、鈴木 1972 ではシテオクはもくろみ動詞に位置づけられているが、高橋太郎 1999 は「アスペクト動詞の側面のほうが基本」とし、工藤 1989 や須田 2002, 2003 も、高橋 1999 と同様の立場をとっている。

また吉川武時 1971 も、「対象を変化させて、その状態を持続させる」というアスペクトの意味を、シテオクの基本的な用法として位置づけており、そこからさらに、次の2種類のアスペクトの意味を見出している(p267)。

(I) ある時まで一定の状態を持続させること

(ここで状態というのは、変化させられた対象の状態のことである。)

(II) ある時までにある対象に変化を与えること

シテオクの「もくろみ」性はこの2種の意味から派生していると考えられているのだが、吉川 1973 では、対象の変化を表さない他動詞や自動詞がこの形をとっている場合について、「アスペクト的に規定できないから、ただちに(他から派生したものと考えずに)「準備」か「一時的処置」の意味になる」と考えられていた。これに対し、高田祥司 1999 は、「これらはアスペクト的に見ると、「あるときまでにある動作を行なうこと」という意味を表して」おり、「この「ある時まで」に」という期限を意識して行なう動作が、必然的にその後続く事態との関係の中で捉えられる」ことによって、これらの動詞のシテオクの形がもくろみ性を帯びると捉えた(p55)。そして、上の吉川 1973 の(II)を、「ある時までにある動作を行なうこと(対象に変化を与えること)」に改め、シテオクの形を、「<意図的パーフェクト>と言うべきアスペクトの意味を表す形式」と規定した。須田義治 2002 も、高田 1999 と同様、シテオクを「その実現による結果や効果をみこして、動作をおこなうという目的志向性の意味を中心としてあらわす形式と捉えている(p51 下線引用者)。つまり、シテオクは、自動詞か他動詞かといった動詞の種類ではなく、意図的な行為を表しているかどうかによって、その形をとる動詞が制限されているということである。

第5章 テンス・アスペクト論

近年、日本の言語学では、「アスペクト」という文法的カテゴリーに関わる研究が盛んに行われており、前章ではその研究の流れを概観した。また、共通語に限らず、各地方言の個別言語的な研究も積極的になされつつあり、例えば、東京方言に代表されるスルとシテイルの2項対立型のアスペクトに対し、京阪方言を除く西日本諸方言のアスペクトでは、スル、シヨル、シトルという3つの形式による対立を示すということは、既によく知られるところである¹。

琉球諸方言の形態論レベルでのアスペクト体系についても、西日本諸方言と同じく、基本的には3項対立(沖縄本島方言は4項対立²か)を示すことを示唆するような先行研究がいくつか見られる。例えば鈴木重幸 1960 では、首里方言の'junuN<基本態>、'judooN<持続態>、'judeeN<結果態>³というアスペクチュアルな形式の見られることが報告されている。これらの形式にはそれぞれ、シヲリ、シテヲリ、シテアリ(シテアル)という対応語形が想定される。また、この他の沖縄方言のアスペクトに関しては、島袋幸子 1987、狩俣・島袋 1989 に、今帰仁方言についての詳しい記述が見られる。だが、やはり、音韻や語彙、その他の文法的カテゴリーに比べると、アスペクトに関する研究は決して多いとは言えない。また、上に示したものも含め、その数少ない研究についても、各形式の実現するアスペクチュアルな意味・用法の記述や、体系化のための考察は決して十分ではない。このように、琉球諸方言のアスペクト研究はまだこれからであり、その全体像はおろか、基本的な体系についても、明らかにされているとは言い難い。各方言の個別言語的な研究の深化と、そこで明らかになった諸形式、そして体系の比較・考察は、今後の大きな課題である。

このような状況は、当然、本研究の対象となっている多良間方言にも当てはまる。本章は、この多良間方言のアスペクトの形式についてその具体的な意味・内容を明らかにし、体系化を試みるものである。またアスペクトは、同じく時間に関わる文法的カテゴリーである「テンス」と緊密な相関関係を持つものであるから、その体系は「テンス・アスペクト」の体系として示されなければならないだろう。よって本章は、それぞれのアスペクト形式が実

¹ 西日本諸方言のシヨルとシトルは、金田一春彦 1955 に、既にその区別についての記述が見られている(「進行態」と「已然態」)。だが、その意味内容に関わる具体的な研究の成果については、特に、工藤真由美氏の一連の論文群に見出すことができるだろう。「宇和島方言のアスペクト」(『国文学解釈と鑑賞』48-6,1983)、「西日本諸方言のアスペクト体系の記述をめぐって」(『日本語研究』18,東京都立大学,1998)、「西日本諸方言と一般アスペクト論」(『言語』27-7,1999)、「アスペクト体系の生成と進化」(『ことばの科学』10,むぎ書房,2001)など。また、工藤 2001 ではスル、シヨル、シトルをそれぞれ「完成相」、「不完成相」、「パーフェクト相」とよんでいるが、井上文子「アル・イル・オル」によるアスペクト表現の変遷」(『国語学』171,1992)は、シヨルを「進行態」、シトルを「結果態」と称している。

² 今帰仁方言では完成相非過去形 numiN に対する過去形として、nudaN と numi:t'aN の2形式が現れる。後者は、過去の特定時に「飲む」という動作が話者の眼前で進行していたことを表しており、継続相過去形 nuduit'aN とその実現する意味は異なっている。このような現象を受け、島袋 1987 では、今帰仁方言のアスペクトに「進行相」を加えた4項を認めている。首里方言についても、同様のことが言えるようである。

³ 上村幸雄 1963 では保存態'judoocuN も報告されている。以下引用。「'judee(読んでではなく'judi+ja)と?ucuN(置く)の複合したもので、動作の結果を保存しておこうとする意をあらわす」(p73 アクセント記号等は省略)。共通語のシテオクに対応するものと思われるが、その意味・用法は明らかでない。

現しているテンス的意味についても、言及していくこととなる。

以下では、まず、多良間方言の基本的なテンス・アスペクトの体系を明らかにするために、文の終止に位置する動詞を対象として、それぞれの形式のもつ意味・用法を記述していく、その体系化を試みる(第1節)。次に、文の連体の位置の動詞の各形式について、その意味・用法を記述し、‘基本的な’テンス・アスペクトの体系との異同関係を明らかにしていく(第2節)。

第1節 多良間方言のテンス・アスペクトの体系

1-1. 形式

多良間方言には、以下に示すような、共通語のスル(シタ)とシテイル(シテイタ)に対応する形式が見られ、同方言の基本的なテンス・アスペクトの体系をなしていると考えられる。

- (1)完成相⁴ 非過去形 si:, siM 過去形 si(:)taL, si(:)taM, si:, si:qta(L), si:qtaM
 (2)継続相 非過去形 si: buL/si:L 過去形 si: butaL/si:taL

完成相の非過去形、過去形は、それぞれスルーシタに相当する。これらの形には ri 系(あるいは非 m 系)と m 系という、意志をあらわす*mu(あるいは*mo)の後接の有無による、陳述性の違いの見られる2系統の形式が存在する。またこの2系とは別に、過去形には3型2種の形式が見られ、それぞれ、sītaL<si-tari(シタリ)、si:<si-ari(シアリ)、si:qta(L)<si-ari-tari(シアリタリ)のように形づくられていると考えられる。シアリタリ形は、終止形うちけし形式、またテンスの対立の見られる終止形以外の活用形(連体形など)には現れない(本稿序論3「形態論」の3-2参照)。

継続相の非過去形、過去形は、それぞれシテイルーシテイタに相当する。動詞の第一中止形に buL(フリ)が後接して形づくられているが、両者が融合して現れる場合と(si:L/si:taL)、融合しない場合とがある(si: buL/si: butaL)。前者を融合形、後者を分析形と呼ぼう。多良間方言では、そのほとんどの動詞が両方の形式を形づくることができ、そして、それぞれに置きかえられることから、両者は併用されていることがわかる。ただし、mi:L(見る, 見える)など、2音節の弱変化タイプ動詞の継続相には、原則的に分析形しか現れない。その想定される融合形継続相は完成相と同音形式であり、両者の混同を避けるため、分析形のみが用いられていると考えられる⁵。

また、アスペクトに関わる(1)、(2)以外の形式として、次の形式が挙げられる。

- (3)パーフェクト 非過去形 si: ukī 過去形 si: ukītaL

これらは、(2)と同じくらいに文法化された形式である。形態的にはシテオク、シテオイタに対応するのだが、<意図性=もくろみ性>は擦り切れており、意味・機能的には、<パーフェクト>をあらわすシテイルやシテアルなどに対応していると考えられる。第4章で述べたとおり、この形式については別に章を立てて(第6章)考察していく。

1-2. テンス・アスペクトの意味の体系性

須田 2003 では、共通語のアスペクト形式をめぐって、次のようなアスペクトの意味の体系性が示されている(本稿第4章2-3-2参照)。

⁴ なおここでは、多良間方言の si:(スル)の形式にフリの融合を認めるか否かは問題としない。

⁵ この他、ki:L(着る)、qsi:L(擦る)、bi:L(座る)、ni:L(煮る)などの動詞が挙げられる。多良間方言の長母音/i:/は、「共通語の1音節1拍の語の短母音音素/e/と/i/に対応する」(本稿 p20, 序論2「音韻論」2-2-1)ため、これらの動詞では、その動詞語幹と第一中止形が同音となっている。

a. 中核的な意味…「限界到達(非過程継続)」と「過程継続」

	限界動詞	無限界動詞
完成相	限界へ到達した動作	動作の発生
継続相	動作の過程の継続	動作の過程の継続

- ・完成相；基準時点に対して、過去形は「以前(直前過去)」、非過去形は「以後(直後未来)」
- ・継続相；「基準時点」における動作の過程の継続(過去形は「過去」、非過去形は「現在」)

b. 基本的な意味…「全体的な事実の意味」と「動作の具体的な過程継続」

- ・継続相；(中核的な意味に一致)
- ・完成相；「全体的な出来事の意味」
 - 動作の実現・非実現の確認
 - 出来事の側面的な、付随的な特徴の確認
 - 特定時への出来事の位置づけ
- 「全体的な名づけの意味」
 - 提示
 - 例示・手順
 - 評価・特徴づけ

特に過去形において、基本的な意味の完成相と継続相は、「動作の内的な時間構造をあらわしている」か否か、という欠如的な対立を示している。

c. 周辺的な意味…「非連続的な過程の明示」とその「非明示」

なお、須田 2003 は「パーフェクト性」をこの周辺的な意味の1つに挙げているが、本研究は「パーフェクト」を「アスペクト」から区別する立場をとっており(本稿第4章 3-3 参照)、よってこの「パーフェクト性」をアスペクト的な意味の1つと見なしていない。

d. 一般的な意味…「非過程継続」と「継続性(過程継続)」

以下、この須田 2003 による意味の体系化(「パーフェクト性」を除く)を手掛かりとし、多良間方言のアスペクト形式それぞれについて、その意味・用法を記述していく。

1-3. 完成相

多良間方言でも、その基本的な用法は「動詞のあらわす動作(広義)、または、その一定の局面を、分割することなく、始発から終了までふくめて、まるごとのすがたでさしだす」(高橋 1985:33)ことである。基本的に過去形は<過去>、非過去形は<未来>のテンスの意味をそれぞれ表す。また過去形には、シタリ過去形(sitaL)、シアリ過去形(si:)、シアリタリ過去形(si:qta)という3形式がある。以下、非過去形、過去形の順に見ていこう。

1-3-1 完成相非過去形

1) 限界に到達する動き；<基準時点以後=未来>のテンスの意味を表す。限界動詞によって実現されるアクチュアルな用法である。この意味が表されるのは基準時点(波線で示す)が発話時=現在の場合に限られており、その動作・変化が「未来すなわち発言の瞬間よりものちのある一つの時間(時点あるいは期間)」(鈴木 1979:17)に実現することを表わす。時間の状況語と共に現れることが多い。なお例 5-3 では、「近接」を示す kuNsi:(このように)というダイクティックな状況語によって、このアスペクトの意味が獲得されており、そのテンスの意味も、基準時点=発話時の<直後>となっている。

5-1 namakara izü: jakĩ.

今から 魚-を 焼く

5-2 namakara, Mme seNtakumunu-game-du iziL gumata.

今から もう 洗濯物-[強意]-ぞ 入れる [当然]

今から、もう洗濯物(を)入れるよ(ft.取り込むよ)。

5-3 aNti, kunu pagĩ-u kuma-ni: nu:si-taka: kuNsi fuguM. [Kij-b-3-A2]

それで この 脚-を ここ-に のせたら このように くぼむ

それで、この脚をここにのせたら、こうくぼむ。

2) 動作の発生 ; <基準時点以後=未来>のテンス的意味を表す。無限界動詞によって実現されるアクチュアルな用法である。1)と同様に、その基準時点は発話時=現在であり、「動作の発生やはじまり」を表す(須田 2003:167)。また発話者=動作主体の場合、<意志>のムードの意味を伴う m 形が用いられることが多いようである。

5-4 “sju:, sju:, no:gara:-nu-du nuNdi: kĩ:”-ti, [民]ⁱ

爺{主} 爺{主} 何やら-の-ぞ 出て くる-と

「おじいさん、おじいさん、(穴から)何かが出て来る(よ)」と、

5-5 oba:-mai zju:su: muti: kuM:=na. [Kij-a-8-B1]

おばーも ジュース-を 持って くる=な(尋ね)

おばー(に)もジュースを持ってくるようか?

5-6 “a, ba-ga-du, waqsa:-taL, jurusi: qfiru. namakara: kukuru: aratamitui, sa:ti:

[感] 私-が-ぞ 悪かった 許して くれ 今から-は 心-を 改めて [擬態語]

sjuqziba, mata qva-ga namagami-nu kutu-mai jurusa-M:”-ti:, [民]ⁱⁱ

するから また あなた-が 今まで-の こと-も 許す-と

「ああ私が悪かった、許してくれ。今からは心を改めて一生懸命するから(ft.働くから)、またあなたの今までのことも許そう」と、

また命令形では、限界か無限界かを問わず、<動作の発生>という意味が表わされる。

5-7 hai:, [??] mo: ugami: ku-da. [Oj-b-6-A1]

[感] モー 拝んで 来なさい

さあ、[? ?]モー拝んでおいで{note.お供えしたものを下げてくること}。

5-8 “a, gusju:=jo: nakü:ba: jami: wa:ri, kure: siwa: ne:Nniba”-ti: i:-badu, [民]ⁱⁱⁱ

[感] 御衆=よ 泣く-の-をば 止め なされ これ-は 心配-は ないから-と 言う

「ああ皆さん、泣くのは止めて下さい。これは心配ないですから」と言う、

3) 現在の状態 ; 動作主体が非意図的に知覚した現象の状態を表す動詞⁶や動作主体の感覚

⁶ kiki(聞く)や「見る」の意味の mi:L など、意図的な知覚動作を表す動詞はこの用法を表せない。なお、須田 2003 は、知覚動詞全般を「限界到達のバリエーション」の1つとして位置づけており、その他の無限界動詞同様、「完成相で動作の発生やはじまりをあらわす」とされている(p27)。だが本研究では、その<現在の状態>という文法的意味を、感覚動詞や存在動詞、心理状態を表す動詞などにも見られる、‘テンス・アスペクト的な意味’の1つとして取りたてた。

を表す動詞、また存在動詞などによって実現される、アクチュアルな用法である。但し、表現主体が聞き手や第三者の内的状態について述べる場合は、継続相が用いられる(本章1-4 参照)。また、この用法での動作主体は話し手自身に限られているが、存在動詞 aL(ある)⁷、buL(いる)を述語とする文や、たずね文などの場合には、話し手以外の動作主体(主語)もとることができる。

○動作主体によって非意図的に知覚された現象の状態(知覚動詞)

5-9 “agai, do:bucu-nu Mme-nu, kui-nu-du kikaiL. piNna munu”-ti [民 Joh-13-18]

[感] 動物-の [Pl.]の 声-の-ぞ 聞こえる 変な もの-と

「おや、動物たちの声が聞こえる。変だな」と

5-10 aga aN-ja, ifucu-N-ga mi:L.⁷ [Oj-d-27-B12]

[感] 私-は いくつ-にか 見える

ねえ、私はいくつに見える？

○主体の感覚的な状態(感覚動詞)

5-11 bi:mai burai-N, pagī-nu ja:M. [Kij-b-4-A7]

座っても いられない 脚-の 痛む

座ってもいられない。脚が痛む。

5-12 kuNsi aqcja:-taka: nudu-nu-du ka:kī.

このように 暑かったら 咽喉-の-ぞ 渴く

こう暑かったら咽喉が渴く。

○主体の生理・心理的な状態

5-13 sjaki numi-ba si: bata-Nkanu-du muqke: bi:L.

酒 飲み-(を)ば して 腹-にの-ぞ むかむかする

酒を飲んで腹(ft.が)むかむかする。

5-14 agai, ku:ki-du fukī. [狂言]

[感] 空気-ぞ 吹く

ああ、息が切れる。{cf. ikīdu fukī 息ぞ吹く}

○存在

5-15 we:, uma-N-du gomi-nu aL.

[感] そこ-に-ぞ ごみ-の ある

ほら、そこにゴミがある。

5-16 “a kure:, ba-ga usī-ja aNsi:-ja, ba-ga usī-nu cunu-nu pikaL gumata-ja

[感] これは 私-が 牛-は そのように-は 私-が 牛-の 角-の 光る [当然]-Ø-は

ar-aN-niba, kure: ma:-nu-du, kanarazu buL”-ti:, [民 Toj-1-8]

[COP]-否-順接 これは 魔-の-ぞ 必ず いる-と

「ああこれは、私の牛はそうには、私の牛の角が光るはずはないから、これは魔物が、必ず(牛の上に)いる」と(考えて)、

⁷ なお多良間方言では、存在動詞 aL(, ataL)にも形態的なアスペクトの対立(ari:L, ari:taL)があり、<基準時点における状態>を表す用法は、継続相によっても実現される。

なお、話し手以外の動作主体の<現在の状態>について述べる場合、存在動詞 buL(いる)を用いて、次のような表現によって言い表すこともできる。

5-17 agai, Mme qva: siNsi:-miduM nariqti Mme, aNta-ga siima: ku-N=na:.

[感] もう あなた-は 先生-女-Ø なって もう 私たち ex.-の 島-は 来ない=な

{中略} ukina:jumi-tu buL. [Kij-a-9-A4~A5]

沖縄嫁-と いる

ああ、もうあなたは(ft.も)先生(の)嫁(に)になって、もう、私たちの島(に)は来ない(だろう)ね。沖縄嫁という{note. 沖縄で結婚するつもりでいる、ということか}。

5-18 nama: tarama fuci-u nara buqsa:L-ti:. {中略} kiki si-gadu izai-N-ti bugro:.

今-は 多良間 言葉{口}-を 習い ~したい-と 聞くの-Ø するけど 言えない-と いる=よ

今は多良間方言を習いたいと(家に来ている)。{中略} 聞く(のは)するけど言えない(ft.聞けるけど話せない)という(ft.言っている)よ。

5-19 “we:, ki:-nu pa:-gami-mai, anu:-ba: kasjakasja-ti:-du buL=dara:na”-ti i:-tika:-du,

[間] 木-の 葉-[強意]-も 私-をば [擬声語]-と-ぞ いる=だろう-と 言う-と-ぞ

「ほら、木の葉までも私をカサカサという(ft.言っている)⁸だろう」と言うと、[民]^{iv}

4) 全体的なデキゴトの意味；<基準時点以後=未来>のテンス的意味を表す、アクチュアルな用法である。その<未来>の動きは「何らかの前提のもとでおこなわれ」(須田 2003:30)、基準時点は基本的に不特定時だが、時間の状況語や文脈などによって特定されている場合もある。ここでは、「何らかの前提」を破線で示す。

○動作の実現・非実現の確認

5-20 C; nara-mai zjagaimo-ju-du muti: ika-zī be:M, kadi:, ata kadi: turi iki:.

自分-も じゃが芋-を-ぞ 持って 行く[推]~だろうか 掘って 明日 掘って 取って 行って
自分(ft.その子)もじゃが芋を持って行くかな。(それなら)掘って、明日掘って取って行って(ft.来て)

A; muti tubi-ti: izi. @

持って 行け{飛べ}-と 言え

持って行けと言いなさい。

B; muti iki=dara. [Oj-b-7-C3~B5]

持って 行く=だろう

(そうよ)持って行くよ。

5-21 agai, Mme ure-u...si: nu:siL. siti, weNsi: si:..^ @ [Oj-a-2-A5]

[感] もう それ-を して 乗せる それで このように する

ああ、もうそれをして(ft.お手玉を上に向けて)乗せる(んだね)。それで、こうする？

○出来事の側面的な、付随的な特徴の確認

5-22 “katacu ara-baM, kunu muri-ga...katacu:ba: mi:qtika: aN-ja ikaiL”-ti [民 Joh-3-18]

形-Ø [COP]-譲歩 この 漏り-が 形-をば 見てから 私-は 行ける-と

⁸ この用例は、「私の名前はカサ(/kasja/)と言う」と答えたヤドカリが、自身の殻に引きずられて木の葉がカサカサ鳴っているのを指摘して、ネズミに言った台詞である。なお『民話』では、「ほら、木の葉でさえ私をカサカサと言っているじゃないか」のように訳されている(下線引用者)。

「形(だけ)でも、この(古屋の)漏りの形を見たら私は行ける{note.姿だけでも見ておきたい、ということ}」と(この狼は考えたそうだ)。

- 5-23 “aNti ‘Ndasi’-ti ĭzi: M:gi-Nke: ma:sĩ-tika:, sa:ti: NdiL-ba aNsi: siru. mata
 それで 出せ-と 言って 右-へ 回したら [擬態語] 出るから そのように しろ また
pĩdaL-Nke: ma:sĩ-tika: tumaL-ba”-ti sijo:ho-u tu:zuki: wa:L-taL-ti:. [民 Joh-10-18]
 左-へ 回したら 止まるから-と 使用法-を 指示し なさった-と
 「それで、「出せ」と言って右へ回したら、どんどん出るからそのようにしなさい。
 また左へ回したら止まるから」と、使用法を指示しなされたそうだ。

○特定時への出来事の位置づけ

- 5-24 kju:-nu sjo:gacu-ni-wa, raineN-no osjo:gacu-wa, ni saNnici,-daketo:, keNko:-ja
 旧-の 正月-ニ-ワ 来年-ノ オ正月-ワ 2 3日-ダケト 健康-は
sugusa: dikasumi wa:ri,-tu nigu:. [Oj-c-7-A6]
 過ごさせて 立派にさせ{でかせ?} なされ-と 祈る
 旧の正月ニワ、来年ノ正月ワ2、3日ダケト{note.すぐやってくる、ということ}、
 健康(で)過ごさせて下さいと祈る。

- 5-25 gecujo:-N-game-du, bĩ:ta uja-nu Mme-nu, ubuna:L. [Kij-a-17-A4]
 月曜-に-[強意]-ぞ 弱々しい 父親{親}-の [Pl.]-の 集まる
 月曜には、(身体の)弱っている父親たちが、集まる。

5) 一般的なコトガラ;完成相非過去形に限られた、非アクチュアルな用法である(須田 2003の「全体的な名づけの意味」)。時間的な具体性が弱く、<提示>の他、一連の動作(のうちのいくつか)を例としてあげる用法(<例示・手順>)やモノやヒトに対する<評価・特徴づけ>が、この意味の下位分類として挙げられている(須田 2003:32-34)。

○提示

- 5-26 “jana fucē: du:-Nke:-du ma:L.” (諺)
 嫌な 口-は 自分-へ-ぞ 回る
 「悪口は自分に回る(ft.戻る)」
 5-27 tarama-N-te:na buL pĩtu-nu kutuba:, kawaL. [Oj-d-8-A1]
 多良間-に-[限定] いる 人-の 言葉-は 変わる
 多良間にばかりいる人の言葉は、変わる(ft.違っている)。

○例示・手順

- 5-28 ~weNsi: pĩkaiL tukuru:ba pĩk(a)i:, agiraiL tukuru:ba agiL, mata sjagi:
 このように 控える ところ-をば 控えて 上げられる ところ-をば 上げる また 下げて
pĩkaiL tukuru:ba sjagiL-ti:-ja, sĩmisĩmi sĩ-taL. [Oj-d-13-A1]
 控える ところ-をば 下げる-と-は させさせ した
 こう(声)を控えるところは控えて、上げられるところは上げる、また下げて控
 えるところは下げると、させたりした(ft.していたよ)。
 5-29 nama sjozjo, zju:su:ba num-aN, cja:-ju-du nuM. [Kij-a-8-B4]
 今 少女{処女} ジュース-をば 飲まん 茶-を-ぞ 飲む
 最近の若い娘は、ジュースは飲まない、お茶を飲む。

○評価・特徴づけ

5-30 pakaubui-tu-du miduM-qva kinai-ba mucī-ti.

墓ウブイ{?}-と-ぞ 女-子-Ø 家庭-(を)ば 持つ-と

墓ウブイと(note.墓に入る為に)、女の子(は)家庭を持つて(昔は言われていた)。

5-31 ~uL-kara Mme:, upuboto:bo:sju:-ja kanigusjaM-ba cuki:, “nuqtai ta:-ga

それから もう ウブオートーボー主-は 金杖-(を)ば ついて どうして 誰-か

kuNsi: pītu-nu ja:-ju, marubasi=ga”-ti:, wa:L-badu [民 Mor-7]

このように 人-の 家-を 転ばす=か-と おっしゃるので

~ それからもう、大オートーボー主は金杖をついて(出てきて)、「どうして、誰(が)

このように人の家を転ばせる(ft.倒す)か」とおっしゃるので、

6) 反復的な動き⁹; 過去から未来にかけて繰り返される動きや、習慣的な動作を表す(「非連続的な過程の非明示」)。非アクチュアルな用法であるが、テンスと完全に無関係ではなく、それは<個別的な時間>から解放されるだけである。

5-32 “nuqtai-ga qva:, pītuki-ni:-ja ke: wa:r-aN-gutu, mainicī pītucu-na ke: wa:L

どうして-か あなた-は 1回-には 買い なさらないで 毎日 1つ-づつ 買い なさる

=ga”-ti: tazuni-tika:-du, [民]^v

=か-と 尋ねたら-ぞ

「どうしてあなたは、1回では買いなさらないで、毎日1つずつ買いなさるので
か」と尋ねると、

5-33 uL-u:-te:N Ndasī.

それ-を-[限定] 出す

(テレビは)そればかり出すよ。{note.オリンピックの時期で、その番組ばかりが放
送されている、ということ}

5-34 ukīna:-mai, zju:rukunicu-ti:-ja sī: ʔ [Oj-d-24-B1]

沖縄-も [行事名]-と-は する

沖縄{note.沖縄本島を指す}も、十六日とはする？

ここまで、共通語のスルとも共通する個別的な意味を示してきた。だが、多良間方言の完成相は共通語のスルよりも幅広い意味・用法を持っており、上の1)~6)の他にも、用例は多いとは言えないが、7)以下に示すような用法が現れている。結論を少し先取りして言うと、多良間方言の完成相・非過去形に見られるこの多様な意味・用法の広がり、次のことの現れであると考えられる。すなわち、テンスやアスペクト(恐らくパーフェクトも)という文法的なカテゴリーそれぞれにおいて、この/sī:/という unmarked の形式は、/sī-taL/、/si: buL/、

⁹ また、「反復強調形+sī:」という形でも、<反復的な動き>の意味は表される。

cf. ~-ti, īziqti:-du, baqsi-maN=do:, sugu baNta: kajo:-N-ja sugu qva-u-te:na
-と 言って-ぞ 忘れない=よ すぐ 私たち ex.-は 火曜-には すぐ あなた-を-[限定]

sugu abiraqzi: Mni mi:ru=jo:-ti: sugu baru:baru: sī: @ [Oj-d-33-A9]

すぐ 呼ぶから 夢-Ø みろ=よ-と すぐ 笑い笑い する

~って言って(ft.歌って)、忘れないよ、すぐ私たちは火曜にはあなたを呼ぶから、もう夢(に)見なさいよって、笑っている。

/si: uki/という marked の形式それぞれと、対立を示している(本稿第6章第4節参照)。

7) 限界に到達した動き ; <基準時点以前(直前)=過去>のテンス的意味が表されている。主に、限界動詞の完成相・非過去形のシアリタリ過去形によって実現される用法である¹⁰。

5-35 agai, nu:-nu, usi-nu-du ki:L=na ure:. [狂言]

[感] 何-の 牛-の-ぞ 蹴る=な(疑い) それ-は

わあ、(今の)何だ、牛が蹴る(ft.蹴った)のか？

5-36 ~uL-u:, uqpugi-nu sjaba-nu, o:, kamitui ki:, pa:mafuci-N bisi: wa:rasī-ba,

それ-を 大きな フカ-の [間] 啞えて{囃んで} 来て 浜口に 坐らせ なさらずと

“nu:-nu-ga, kure: nara-uba:, kaNsi: tasuki: wa:L=ga, umuimiga”-ti: i:-badu,

何-の-か これ-は 自分-をば あのように 助け なさる=か ウムイミガ-と 言う

~ その人{note.盲目の父親}を大きなフカが啞えてきて、浜辺に坐らせなさせると、(父親が)「何が、これは、自分をあのように(ft.このように)助けなさる(ft.助けなされた)かウムイミガ」と言う、[民 Saw-20~21]

8) 過去の全体的なデキゴトの意味 ; 7)と同じく、<基準時点以前=過去>のテンス的意味が表されている。主に、完成相・非過去形によって表される用法である。

5-37 sju: jari: wa:L-taqra, ara hanako:, we uma-kara: ki: kadi-da,-ti

主-Ø やり[COP] なさった(方)-は [感] 花子 [間] そこ-から 来て 掘りなさい-と

M:-mai kadisi. [Oj-a-12-A2]

芋-も 掘らす

(うちの)おじいさんでいらっしゃった方は、ほら花子、そこからきて掘りなさい、と芋も掘らせる(ft.掘らせた)。

5-38 imisja:L ke:-N, kanu, Mme, nu, asubī-ta:L munu-nu, Mme-u nara:si-ti: i:-badu,

幼い 頃に あの もう 何 遊んだ もの-の [Pl.]-を 習わせ-と 言うから

ma:Lfuci, Nna e:gu-mai nara:si. o:sa:ra:-mai. [Oj-a-2-A1]

鞠打ち [間] 歌-も 習わす お手玉-も

小さい頃に、あの、もう、何、遊んだものなんかを教えてと言うから、鞠打ち、歌も教える(ft.教えた)。お手玉も。

9) 動作の継続 ; <基準時点(同時)=現在>において動作が継続していることが表されている。主に、無限界動詞と主体の動作を表す限界動詞の継続相・非過去形によって実現される意味である¹¹。

¹⁰ 例 5-36 では kaNsi:(あのように)という遠称の指示副詞が現れているのだが、多良間方言では「語り」において、登場人物が自身の目のコトガラについて述べている台詞を直接話法によって言い表す場合でも、kuNsi:(このように)という近称の指示副詞は現れない(例 5-77 も参照)。よってこの kaNsi:は「このように」と意識され、例 5-36 は<限界到達>の意味を表していると捉えられる。

¹¹ 北琉球方言の動詞の完成相非過去形について、この形式には、現在進行過程にある動作や変化を表す用法がみとめられているのだが、(例えば、鈴木 1960, 上村 1963, 津波古 1989 などに首里方言に関する記述が見られる)、この現象には、狩俣・島袋 1989 が述べているように、「沖縄諸方言(すくなくとも宮古諸島方言をのぞく)における動詞の活用形の成立の仮定と深くかかっている」ことが考えられる(p140)。拙論 2002 では、多良間方言の動詞「終止形の叙述法・断定形」(テンス・アスペクト形式としては完成相非

5-39 Mme uL-u: nara:sĩ. ho:geN nara:-ti:. [Oj-d-1-A2]

もう それ-を 習わす 方言-Ø 習おう-と

もうそれを教える(ft.教えている)。(この子は)方言を習おうと(来ているよ)。

5-40 ati qfai kĩĩ-ti:nu ba:-ga jau. [Oj-b-4-B7]

あんまり(~すぎる) 肥料-Ø 効く-との 場合-が 様

あまりにも肥料(が)効く(ft.効いている)ということみたいね。{note.栽培している
ネギに臭いがない理由について述べられている}

10) 変化の結果の継続; 9)と同じく、<基準時点(同時)=現在>において、動詞の表す変化の結果の状態の継続段階にあることが表されている。主に、主体の変化を表す限界動詞の継続相・非過去形によって実現される用法である。なお、例 5-42 は、8)の<過去の全体的な出来事の意味>を表しているようにも解せられる。

5-41 taro:-ga-du, N, ××ja:-tu i: sī-taka: basjazībasjazī sī-taL. asjugadu Mme

太郎-が-ぞ [間] [屋号]-引 言う したら 怒り怒り した だけど もう

nama: nara:sĩ, nara, nara-ga Mme ××ja:-tu [???]. [Oj-d-9-B5]

今は 慣らす 自分 自分-が もう [屋号]-と

太郎が、[屋号]{note.「太郎」の家の渾名}と言ったら(ft.言われたら)怒っていた。けどもう今は慣らす(ft.慣れている)、自分がもう[屋号]と[? ?]。

5-42 A; muka-da:, aNta-ga mikaN-ju:.

剥いたら 私たち ex.-が みかん-を

剥いて、うちの蜜柑を。

B; fe:qte kĩ:. [Oj-d-2-A8~B9]

食べて 来る

食べて来る(ft.食べて来ている/食べて来た)。

また、基準時点において既に動作が完成あるいは完了していること、すなわちパーフェクト的な意味が表されているように思われる用例も、僅かだが確認された。

5-43 A; haru to:ke buraq-zja, abira-daka: nar-aN.

ハル 1人 いるだろうから 呼ばなければ ならない

ハル(は)1人(で)いるだろうから呼ばないといけない。

B; nama toro-nu-du: buL-ba-ti: i:, [???]-ni tibĩ:-taka: ani i:-taqro:.

今 太郎-の-ぞ いるから-と 言う -に 行ったら{飛んだら} そう 言った=よ

buL=do:-ti:. [Oj-a-11-B2]

いる=よ-と

今太郎がいるからと言う(ft.言っている)[? ?]に行ったら。そう言ったよ、いるよ一つて。

過去形)の成り立ちについて「ヲリ融合説」をとっているのだが(序論1「先行研究」の1-3を参照)、多良間方言のこの形式が<動作の継続>の意味を表している用例はあまりにも少ない。

1-3-2 完成相過去形

多良間方言の完成相過去形には、*sitaL*(シタリ)、*si:*(シアリ)、*si:ta(L)*(シアリタリ)という3型2種の形式が現れる。以下では、これらの形式の意味・用法の違いについても明らかにしていく。

1) 限界に到達した動き¹²；<基準時点以前=過去>のテンス的意味を表す。非過去形と同じく限界動詞によって実現されるアクチュアルな用法で、その基準時点は発話時=現在である。なお、この用法はシアリタリ形によって実現されるのが普通であり、そのテンス的意味も<直前>であることが多い。だが、例5-46のようにシアリ形が現れている用例も見られ、この場合、そのテンス的は必ずしも<直前>とはならないようである。

5-44 *zjo, barifuci-mai tatiqta. kuma-kara.* [狂言]

[感] 割り口(?)-も 立てた ここ-から

さあ、割り口も立てた(ft.決めた)。ここから(始めよう)。{note. /barifuci/とは、仕事の手始め、前回からの続きを始める場所を指す}

5-45 “*a:gataNdi Mme, muri, furuja-nu muri-ga-du Mme, kacimiqtaL*”-ti:,

[感] もう 漏り-Ø? 古家-の 漏り-が-ぞ もう 掴んだ-と

「わあ！漏り(が)、古家の漏りが(私を)掴んだ」と、 [民 Joh-3-13]

5-46 *C; wema, wema-kara.*

ここ ここ-から

B; ure uwari:. [Sim-3-C1~B2]

それ-は 終わった

2) 動作の発生；<基準時点以前(直前)=過去>のテンス的意味を表す。非過去形と同様、無限界動詞によって実現されるアクチュアルな用法で、その基準時点は発話時=現在である。主にシアリタリ形によって表され、そのテンス的意味は<直前>である。

5-47 *Mmadorobo:-ja ana-Nka tati:raiqli:, “tasuki na:-nu-du uri: kiqtaL”-ti:, @ tasuki,*

馬泥棒-は 穴-に 立てられて 助け(る) 縄-が-ぞ 下りて きた-と 助け(る)

tasuke nawa-ga orite kita:-ti: Mme pukarasja-u si:, ~ [民 Joh-3-27]

助け 縄-ガ 下リテ キタ-と もう 嬉しさ-を して

馬泥棒は穴に立てられて(ft.立って)、「助け縄が下りてきた」と、助け、助け縄が下リテキタってもう嬉しさをして(ft.喜んで)、

5-48 “*Mme tubiqta=na.*” “*ar-aN, muqtu tub-aN*”. ~¹³ [民 Saw-25~26]

もう 行った{飛んだ}=ね [COP]-否 全然 行かない{飛ばない}

「もう行ったね？」「いいえ、全く行かない」

¹² この用法は<パーフェクト>に近いものではあるが、共通語のシタと同様に「パーフェクト的な意味を積極的にあらわす形ではな」く、やはり、「限界到達という個別的なアスペクト的な意味のもつ機能」と捉えられる(須田 2003:86、本稿第4章の3-1及び注18も参照されたい)。

¹³ *iki*(行く)は、程度を表す状況語によって「限界」づけられることで、1)の<限界に到達した動作>の意味を表すようになる。

cf. “*ida-gami-ga ikiqtaL=ga.*” “*naNri-pudu Mme ikiqta.*”-ti: i:-badu, [民 Saw-注2]

どこ-まで-か 行った=か 何里-ほど もう 行った-と 言う

「どこまで行ったか？」「何里ほどもう行った」と言う、

また、非意図的な知覚動詞や、動作主体の生理・心理的な状態を表す動詞によっても、この<動作の発生>の意味は実現される。

- 5-49 kuL-u: tacigiki si-taL jubai butu-ja, “kure:, i: kutu: kikiqtaL”-ti: pitakina,
 これ-を 立ち聞き した 夜這い 夫-は これは 良い こと-を 聞いた-と すぐさま
 unu jama-Nke:, niNgakiN, tubi: ukĩ=sja. [民]ⁱⁱ
 その 山-へ 懸命に{念掛け}に 行って{飛んで} おく=さ
 これを立ち聞きした夜這い男は、「これは良いことを聞いた」とすぐさまその山へ、
 懸命に(走って)行ったよ。

- 5-50 “aha:, umuidasiqta, ‘meN’-ti:nu kutuba-du a-taL”-ti:, [民 Joh-13-注 2]
 [感] 思い出した メン-との 言葉-ぞ あった-と
 「ああ、思い出した、‘メン’という言葉(が)あった」と、

また、次の用例は遂行文的であるが、この用例でも<基準時点以前(直前)=過去の動作の発生>の意味が表されている。

- 5-51 unu sju:-kara:, “hai, bakamunu, kju:-ja qva:, de:Nga:nu i: kutu:-du si: ukĩ.
 その 爺{主}-から [感] 若者 今日-は あなた-は 大変な 良い こと-を-ぞ して おく
 atarimai-ti: ume:qti:mai, unu kutu, tikakirai-N tukuru-nu-du, niNgiN-nu atar-aN kutu.
 当たり前-と 思っても その こと-Ø 手懸けられないところ-の-ぞ 人間-の あたらない こと
 asjugadu qva: uL-u: si-taL-ba erai, sitai, qva-ga uNmei-ja kju:-si: pariqtam”-ti:,
 だけど あなた-は それ-を したから 偉イ でかした あなた-が 運命-は 今日-で 晴れた-と
 そのお爺さんから、「さあ若者(よ)、今日はあなたは大変な良いことをした。当
 たり前と思っても、そのこと(を)手懸けられないところが、人間のあたらない(ft.至
 らない)こと(だ)。だけどあなたはそれをしたから偉イ、でかした、あなたの運命
 は今日で晴れた」と、 [民]^{vi}

3) 全体的なデキゴトの意味 ; <基準時点以前=過去>のテンス的意味を表す。非過去形の場合と同じく基準時点は基本的に不特定時だが、時間の状況語や文脈などによって特定されている場合もある。過去形のいずれの形式によっても表される用法で、シアリタリ形によっても表わされるが、1)と 2)の用法の場合とは異なり、そのテンス的意味は必ずしも<直前>にはならない。またシアリタリ形は、<特定時への出来事の位置づけ>の意味の実現には基本的に用いられない。

○動作の実現・非実現の確認

- 5-52 B; bikiduM-ti i:ta, e: nu:-ti-ga i:-taL. Nna, zinaN-nu-du ku:-zi:-ti bu-taL=dara:na.
 男-と [言淀] [間] 何-と-か 言った [間] 次男-が-ぞ 来る[推]-と いた=だろう
 男って、えー何と言ったか。次男が来るといた(ft.言っていた)よね。
 A; uL-ga uja-ga-du kĩ-taL-ti:=jo:. [Oj-c-3-B1~A1]
 それ-が 親-が-ぞ 来た-と=よ
 その子の父親が来たってよ。{note.「その子の父親」は長男}
 5-53 ke, kanu sita-nu kata kare nu:, marubi:↗ [Kij-b-5-B3]
 [間] あの 下-の 方 あれ-は 何 転んだ

あれ、あの(脚の)下の方、あれは何、転んだ？

5-54 hai, ××harue: wa:riqta. [Oj-d-13-B1]

[感] [屋号]ハルエ-は いらっしゃった

ねえ、[屋号](の)ハルエはいらっしゃった？

5-55 A; qva ju:ī fu:taM. – B; Mme kisjagama fe:qta.

あなた 夕飯-Ø 食べた もう さっき 食べた

○出来事の側面的な、付随的な特徴の確認

5-56 kīnu:-du du:-nu nika-nu kuruma-N panirari: sīnitaqro:.

昨日-ぞ 自分{胴}-の 猫-の 車-に はねられて 死んだ-よ

昨日私の猫が車にはねられて死んだよ。

5-57 sjo:gacue:gu-mai, sjeNta:-N-kara muti: kī-taL munu turasi: ite oba:-N nara:si-ti.

[歌謡名]-も センター-に-から 持って 来た もの-Ø 取らせた イテおば-に 習わせろ-と

「正月エーグ」も、センターから持ってきたものを取らせた(ft.あげた)。いっておば-に習わせなさい(ft.教えなさい)って。 [Oj-d-6-A1]

5-58 hai, ifucu nasuqta qvata-ga munu. [Oj-d-2-B5]

[感] 幾つ なした あなたたち-が もの-Ø

ねえ、いくつ(実を)生したあなたたちのもの(は)。

○特定時への出来事の位置づけ

5-59 pe:pe:-ti:, Nna nu:-ti-ga ī:-taL, e: suqzja uiqte:-du sicizisugi-N kī-taqro:.

早々-と [間] 何-と-か 言った [間] 砂糖きび-Ø 植えて-ぞ 7時すぎ-に 来た-よ

早々と、何と言ったか、砂糖きび(を)植えて、7時すぎに来了よ。 [Oj-c-2-B7]

5-60 C; aidia-u Ndasī-taL pītu sīni: wa:ri:L.

アイディア-を 出した 人-Ø 死に なさっている

(その本の)アイディアを出した人(は)死になさっている。

B; tau.

誰-Ø

A; taro:saN. haqko:bi-ni sīni:. [Sim-1-C1~A2]

太郎さん 発行日-に 死んだ

その用例が確認されないことから、シアリタリ形は<特定時への出来事の位置づけ>の用法をもっていないと考えられるわけだが、例 5-55 に見られるように、kisjagama(さっき)など、<現在>との関わりが強い時間副詞による時間的な位置づけ(「特定時」とは言い難いだろうが)は受けることができる。またシアリタリ形は、「語り」の地の文には全く用いられず、主に、1)、2)の意味を表すのに用いられることから、<現在>に何らかの関わりをもつ<過去>を表す形式であると言ってよいだろう。特に、<直前>という時間的意味の実現をその用法の中核としていることから、この形を「直前過去(形)」と名づける。そしてこの直前過去(形)に対し、一般的に<過去>を表す用法をもつシタリ形とシアリ形を、まとめて「普通過去(形)」と呼んでおくことにする。なお、既に見てきたように、シタリ形とシアリ形の間にはテンス・アスペクト的な意味の違いがほとんどみとめられないのだが、シアリ形の方がやや不確実なデキゴトを回想的に述べる時に用いられやすいなど、ムード的な意味の違いはあ

るようである¹⁴。

4) 過去の状態；存在動詞によって表されるアクチュアルな用法である。この用法は、3) の<全体的な出来事の意味>に含めることのできるものであろうが、ここでは一応別に取り上げている。なお、非過去形の<現在の状態>と対称的なものではなく、知覚動詞(非意図的)や感覚動詞、生理・心理的な状態を表す動詞の完成相過去形はこの用法を表さない。

5-61 ~mata uja, sutuujā-nu-du aNsi: jiguN-nu a-taL. kuma-Nka Mnagifuci
 また 父{親} 義父{外親}-の-ぞ そのように 遺言-の あった ここ-に 空き屋敷-Ø
 sī-na=jō:-ti. [民 Asa-1-36~37]
 する-な=よ-と

また父、義父のそのような遺言があった。ここ(を)空き屋敷(に)するなよって。

5-62 kiqci gi qfa-nu Mme-nu butaqra:. [Oj-d-28-B1]
 綺麗な 子-の [Pl.]の いた-ね
 (あの家には)綺麗な子供たちがいたね。

また、次のような表現によって、<過去の状態>を言い表すこともできる。

5-63 B; bikiduM-ti i:ta, e: nu:ti-ga i:-taL. Nna, zānaN-nu-du ku:-zī:-ti bu-taL=dara:na.
 男-と [言淀] [間] 何-と-か 言った [間] 次男-が-ぞ 来る[推]-と いた=だろう
 男って、えー何と言ったか。次男が来るといた(ft.言っていた)よね。
 A; uL-ga uja-ga-du kī-taL-ti:=jō:. [Oj-c-3-B1~A1]
 それ-が 親-が-ぞ 来た-と=よ
 その子の父親が来たってよ。{note.「その子の父親」は長男}

上の例 5-63 の butaL は、その文脈から、「言っていた」のように意識することができる。なお、非過去形にもこのような用例は現れていた(例 5-18,19 と注 8 を参照)。また、butaL のこのような用法に関わるものとして、コピュラ的(存在動詞的)に用いられていると考えられる、i:taL(言った)が挙げられる¹⁵。

5-64 B; ××-nu nu:ti-ga i:-taL.
 [屋号]-の 何-と-か 言った
 [屋号]の(姓は)何と言ったか。
 A; ××.
 [姓]
 {中略}

¹⁴ インフォーマントの「語感」による。また、翻訳式の調査によって、シタリ形とシアリ形はそのほとんどの用例において言い換えが可能であることが確認できている。そのムード的意味の違いについての具体的な考察はここではおこなわず、今後の課題としたい。

¹⁵ 多良間方言では、移動動詞の iki(行く), kī(来る)、存在動詞 buL(いる)、そして i:(言う)の敬体動詞(尊敬動詞)は同一であり、敬体語彙動詞の wa:L が用いられている(拙論 2004:31-32)。よって、例 5-64 と 5-65 のように、動詞 i:(この場合は過去形)が存在動詞のようにふるまう傾向を示しているのは、敬体動詞からの影響であることがまず考えられる。

B; ××-ti-du i:-taL. [Oj-d-9-B15~B17]

[姓]-と-ぞ 言った

(そうだ)[姓]と言った(ft.[姓]という名字だった)

5-65 B; oto:saN-wa, oNna-no kjo:dai-mo iru=no.¹⁶

オトーサン-ワ 女-ノ 兄弟-モ イル=ノ

(R; エット,オバチャンガ.)

A; ha:, harucjaN-ti i:-taL. [Oj-d-28-B1~A1]

[言淀] ハルチャン-と 言った

ハルチャンと言った(ft.ハルチャンという名前だった)

5) 反復的な動作¹⁶ ; 過去に繰り返された運動や習慣的に行われた動作を表す(「非連続的な過程の非明示」)。非アクチュアルな用法であるが、非過去形の場合と同じく、<個別的な時間>から解放されているだけである。なお、シアリタリ形はこの意味を表せない。

5-66 ziro:-ja kīnu:, taro:-ju nikai baqzju:-taL.

次郎-は 昨日 太郎-を 2回 殴った

5-67 maLfuci:-nu, Nna munu-mai, uta-mai si:=sja: a:na:zi:’-ti:. [Oj-a-5-A1]

鞠打ち-の [間] もの-も 歌-も した=さ [遊戯唄]-と

(子供の頃は)鞠打ちのものも、歌もしたね。「アーナージー」って。

以上、完成相過去形の意味・用法について記述してきたが、これらの用法はまた、<現在>との関わり方において、次の2つの「過去」の意味に区別することができる。すなわち、「何らかの点で現在とむすびついた過去」と、「現在から切り離された過去」である。前者を<ペルフェクト的な過去>、後者を<アオリスト的な過去>という(鈴木 1979:42)¹⁷。<限界に到達した動き>と<動作の発生>の用法はペルフェクト的な過去の意味であり、<全体的な出来事の意味>、<過去の状態>、<反復的な動き>の用法は、アオリスト的な過去の意味である。

1-4. 継続相

¹⁶ また、完成相・非過去形の場合と同じく(本章の注9)「反復強調形+sitaL/ si:」という形でも、過去の<反復的な動作>の意味が表される。

cf 1. imisja:L ke:, ci:sai-koro-ba nubasi:-ga, Nna seikacu si-taL-ti i:-ba, a,
小さい 頃 小サイ頃-をば どのように-か [間] 生活-Ø した-と 言うから [間]
Mme, nakada-Nke: ikari-N, imisja:-taka: Mme:, idi:, we; kaqfibaL-Nka Nna-nu
もう 台所-へ 行けない 小さかったら もう 出て [間] カッフィ畑-へ 辺り-の
sju:-gama-u turi: ki: ni: fu:fu: si-taL-ti-mai i:zi:. [Oj-a-13-A1]

野草-[指小]-を 採って 来て 煮て 食い食い した-と-も 言った

小さい頃、小サイ頃はどのように生活したかと言う(ft.聞く)から、もう台所へいけない、小さかったらもう、(外に)出て、ええと、カッフィ畑に辺りの野草を採ってきて煮て食べていたとも言った(ft.話した)。

cf 2. ga: si-ja si:si: si:=ju. [Oj-a-5-A4]

議論-Ø して-は いしい した=よ

議論しては(鞠つきを)していたよ。

¹⁷ なお鈴木氏は、鈴木 1979,1996 に用いられているこの「ペルフェクト的な過去」、「アオリスト的な過去」という用語の初出について、「A.B.Бондарко が *перфектное прошедшее, аористне прошедшее* という用語をつかっているように、説明されているが、それはわたしの勘ちがいによるあやまりである。(中略)おわびして、訂正する。」という「(補注)」を、須田 2003 の「解説」において加えている(pp281-282)。

その基本的な用法は「動詞のさししめす動作が、その動詞のあらわす動作や変化の過程の、持続過程をなす局面のなかにあるすがたをさしだす」(高橋 1985:85)ことであり、基本的に、非過去形は現在を、過去形は過去をあらわす。

1) 動作の過程の継続；基準時点と関係付けられたアクチュアルな用法で、無限界動詞と主体の動作を表す限界動詞によって、その動作の継続が表される。なお、限界動詞のうち対象(破線で示す)に変化を引き起こす動作を示している動詞は、「限界に方向づけられた過程の継続」(須田 2003:26)を表す。また、そのテンス的意味について、過去形は<基準時点以前=過去>を、非過去形は基本的に<基準時点(同時)=現在>を表す。

○動作の継続

5-68 “a, kare: nu:-ti-ga izi:L=ga”-ti Mme kiki:, [民 Joh-5-19]

[感] あれ-は 何-と-か 言っている=か-と もう 聞いて

「あ、あの子は何と言っているのか」ともう(子供の歌を)聞いて(そう思って)、

5-69 kanamaL-mai jaM, du:-mai jami:L-ba, iqpe: du:-juki:L=do:.

頭-も 痛む 胴-も 痛んでいる-から ちょっと 体{胴}-休んでいる=よ

頭も痛む、身体も痛んでいるから、ちょっと休んでいるよ。 [狂言]

5-70 “qva: nu:-ti-ga:, e:gu-gama-uba uqtu-ba muri:taL”-ti i:-ba, [民 Joh-5-21]

あなた-は 何-と-か 歌-[指小]-をば 弟 or 妹-)を)ば 子守していた-と 言うと

「あなたは何と歌を(ft.何と歌って)妹を子守りしていたのか」と言うと、

5-71 unu paka-u aki: mi:-tika:-du, jarabi-gama-nu, kaNzjeN-ni Mmariti: ki:, na:-ga

その 墓-を 開けて 見たら-ぞ 童-[指小]-の 完全-に 生まれて 来て 自分-が

ka:saN-ga oqpai-ju, uma-Nka fe: bu-taL-ti:, [民 Joh-14-16]

母サン-が オッパイ-を そこ-に 食って いた-と

その墓を開けてみると、子供が、完全に(ft.元気に)生まれて来て、自分の母サンのオッパイを、そこで食っていた(ft.飲んでいた)って、

○限界に方向づけられた過程の継続

5-72 nagazju:sjoro: kiqti:, “qva: nu:-ju-ga aNsi: micuki: wa:ri:L=ga o:kamisaN”

長尾猿-は 来て あなた-は 何-を-か そのように 見つけ なさっている=か 狼サン

-ti i:-badu, [民 Joh-3-注 9]

-と 言うと

長尾猿は(ft.が)来て、「あなたは何をそのように見つけて(ft.探して)いらっしゃるのか狼さん」と言うと、

5-73 “nusitai, aNsi: uipitu-nu osoi jikaN: tamunu: bari: wa:ri:L=ga”-ti: i:-badu,

どうして そのように 老人-の 遅イ 時間-に 薪-を 割り なさっている=か-と 言うと

「どうして、そのようにお年よりが遅イ時間に薪を割りなさっているのですか」と言うと、 [民 Joh-10-8]

5-74 aNna: nakada-N-du suika-u kisi: wa:ri:-taL=do:.

母-は 台所-に-ぞ スイカ-を 切り なさっていた=よ

お母さんは台所でスイカを切りなさっていたよ。

- 5-75 junutama-ti:nu ika-u turi: ki:qti:-du, kuL-u: tunaL-de:N-si: baki: kama-ti:
 ユヌタマ-との イカ-を 取って 来て-ぞ これ-を 隣-同士-で 分けて 喰もう-と
taki: bu-taL-gi munu. [民]^{vii}
 炊いて いた-気 もの

(その島のある人が、)ユヌタマというイカを取ってきて、これを隣同士で分けて食べようと、炊いていたらしい。

但し、「対象における変化が、ある時点に一举に実現するような動作をさししめす動詞」の場合は、「限界到達後の段階」、この場合は「限界到達後に対象にのこる状態の維持」が表されていることが多い(須田 2003:26)。

- 5-76 “a: ba-ga-du Nna-u muti: buL-ba de:”-ti, e: we:si: wa:L-takara:-du,
 [感] 私-が-ぞ 縄-を 持っているから [感]-と [間] 差し上げ なさると-係
 「あー私が縄を持っているからさあ」と差し上げなさったら、[民 Nam-3- 4]
 5-77 cukafunu paka-nu mai-N amijaduri-u si: buL-badu, naka-Nka-kara kaina-u
 近くの 墓-の 前-に 雨宿り-を して いると 中-に-から 腕-を
 Ndasī: munu tanuM-nu cime-N kacimi: ukī-badu, dusī-Nke: “hai, banu:-du
 出して もの-Ø 頼み-の ため-に 掴んで おくので 友達へ [感] 私-を-ぞ
 we: kaNsi: kacimi: buL”-ti: sī-badu, [民]^{viii}
 [間] あのように 掴んで いる-と すると

近くの墓の前で雨宿りをしていると、(墓の)中から手を出して、もの頼みのために掴んだので(ft.頼みごとをしようと自分を掴んだので)、友達へ「おい、私をあのように(ft.このように)掴んでいる」とすると(ft.言うと)、

2) 変化の結果の継続；主体の変化を表す限界動詞によって表される、基準時点と関係付けられた、アクチュアルな用法である。基準時点において、その変化の結果の状態(限界到達後の状態)の継続段階にあることを表す。また、1)と同じく、過去形は<基準時点以前=過去>を、非過去形は基本的に、<基準時点(同時)=現在>のテンス的意味を実現する。

- 5-78 aidia-u Ndasī-taL pītu sīni: wa:ri:L. [Sim-a-1-C1]
 アイディア-を 出した 人-Ø 死に なさっている
 (その本の)アイディアを出した人(は)死になさっている。
 5-79 nuM-ja, tai-ju muti:riqti:, qsaN-nu bata-u jakitui-du, kaNsi: qsaN-nu bata:,
 蚤-は 松明-を 持っていて 虱-の 腹-を 焼いて-ぞ あのように 虱-の 腹-は
 jakai: qfami:L-ti:nu panasī. [民 Noz-6-6]
 焼かれて 黒んでいる-との 話

蚤は、松明を持っていて(ft.持っていた松明で)、虱の腹を焼いて、あのように虱の腹は、焼かれて黒くなっているという話。

- 5-80 A; aki-ga, naigī-aki-ga jumi-N nari:-taL.
 アキ-が [跛をひく(こと)]-アキ-が 嫁-に なっていた
 (あの子)はアキの、(ft.脚の悪い)アキの嫁になって、いた。

B; jumi=sja:mi:. nari:-taL ar-aN, jumi=sja:mi:. [Oj-a-3-A4~B5]

嫁=でしょう なっていたの-Ø [COP]-否 嫁=でしょう

嫁だよ。なっていたじゃない、(今も)嫁だよ。

5-81 nuNdi tubi:-taL.[↑] [Oj-a-1-A2]

出て 行っていた{飛んでいた}

(ハルはもう宿を)出て行っていた(ft.帰っていた)?

3) 基準時点における状態; 多良間方言では存在動詞 aL(ある)にも形態的なアスペクトの対立が現れるため、その継続相 ari:L, ari:taL によって表されるアクチュアルな用法である。

5-82 A; ××ziro:ta-ga-du bu-taL ar-aN.[↑]

[名字]次郎たちが-ぞ いたの-Ø [COP]-否

(あの家には今は)[名字]次郎たちがいたんじゃないかった?

{中略}

B; cigau=hazu=jo. kama akisiNsi:-ga ja:=pazī. [...] hai, are muko:-ni, pa,

違う=ハズ=ヨ あそこ-Ø アキ先生-が 家=[推量] [感] アレ 向コウニ [言淀]

pai-kata-N ari:L=dara:na. [Oj-d-28-A6~B16]

南-方-に ある,[融継]=だろう

違うハズヨ。あそこ(は)アキ先生の家(の)はず(だよ)。ほら、向コウニ、南側に
あるでしょ。

5-83 kore-wa: ne: usi tora, u: tacu-nu zju:niho:-nu, zju:niho:-nu-du, tui-ja Mme

コレ-ワ 子 丑 寅 卯 辰-の 十二方-の 十二方-の-ぞ 干支{年}-は もう

M:na: ke: nusī-zuke:-du ari:L. [民 Joh-1-1]

皆 [間] 主-付け-ぞ ある,[融継]

コレワ、子・丑・寅・卯・辰の、十二方の干支はもう、皆主付け(が)ある{note.主がつ
いている、ということ}。

5-84 ~hoN kau-ga-ti: wa:riqti:, unu hoNdana-u mi: wa:L-badu Mme, na-ga,

本-Ø 買いに-と いらっしゃって その 本棚-を 見 なさると もう 自分-が

hizjo:ni nuzomi: buL hoN-nu, hodana-N, ari:-taL-ti:.

非常に 望んで いる 本-の 本棚-に あった,[融継]-と

(ある人が本屋へ)本(を)買いにといらっしゃって、その本棚を見なさんと、自分が
大変に望んでいる本があったって。 [民 Joh-15-2~3]

なお次の用例では、基準時点だけでなく、基準時点以前から基準時点にかけての状態が表されており、パーフェクト的である。

5-85 B; ~aN-mai mata, kaL sju:-ti:-ti:-ja Nna ma:L-gama: are: ucikiqte kī-taL=jo:.

私-も また あれ-Ø しょう-と-と-は [間] 鞠-[指小] 洗って 置いて 来た=よ

私もまた、あれ{note.玉飾りの芯}(に)しょうって、鞠を洗って置いて来たよ。

A; nama:=na:.

今=ね

B; N: p̄ti:cu ari:L. [Oj-d-4-B4~B5]

[感] 1つ ある,[融継]

んー。1つある(ft.あつた)。

5-86 si:du, kunu, tui-ti muno:, Mme p̄tiqcia-game-du Mme ari:L-ga jau=sja.

それで この干支{年}-と ものは もう 1つ-[強意]-は-ぞ もう ある,[融継]-が 様=さ

それでこの干支と(いう)ものは、もう 1つだけある(ft.あつた)ようだよ。{note. 1
つだけ主のついていないものが残っていた、ということ} [民 Joh-1-4]

また、知覚動詞(無意図的)や感覚動詞、生理・心理的な状態を表す動詞の継続相・非過去形でも、基準時点において、その動詞によって示されるような内的状態にあることが表されているため、この用法に含めることができるだろう。特に、表現主体が聞き手や第三者の内的状態について述べる場合は、継続相によって表されるのが普通である。

○動作主体によって無意図的に知覚された現象の状態(知覚動詞)

5-87 kunu bunaL-kara:, “ure: a-ga-du, mida:, niNgiN-nu, e:, sudaga:L-ju sju-N,

この 姉 or 妹-から-は それは 私-が-ぞ まだ 人間-の [間] スダ変わり-を しない

su:kisaN, nioi-u si: buL-ba, kure: wa:ra-da.”-ti: Mme i:-badu [民 Joh-21-32~33]

[?] 臭イ-を しているのぞ こらえ なさったら-と もう 言って

その妹からは、「それは私がまだ、スダ変わり(note.人間から変わることを)をしない、

[?]、臭イを(ft.が)しているのぞ、我慢なさって下さい」と言うぞ、

○動作主体の感覚的な状態(感覚動詞)

5-88 cibusi jami:L, aNna. [Kij-b-5-B1]

膝-Ø 痛んでいる 母

膝(が)痛んでいる？お母さん。

5-89 ~aqcjaka:sjaN-du cukari: buL-tinu ba:. [Oj-b-6-B3]

[あまりに暑いこと]-ぞ 疲れて いる-との 場合

(~は)あんまり暑くて疲れているって。

○動作主体の生理・心理的な状態

5-90 B; ~Mmadosi, taro:azja:. rokuzju:ici-nu Mmadosi.

午年 太郎兄-係 61-の 午年

午年、太郎兄さんは。61(歳)の午年。

{中略}

A; aN-ja joNzju:ku:-ti-du ume:L. [Oj-a-7-B3~A2]

私-は 49-と-ぞ 思っている

私は 49(歳の午年)と思っている。

5-91 uNsjukunu u:ami-Nka-kara qs̄i p̄gi-sju:-nu wa:riqti:, “kaNsinu u:ami-Nka-u,

ものすごい 大雨-に-から 白い 髭-爺{主}-の いらっしゃって あんな 大雨-に-を

Nda-Nke:=ga”-ti, “aNsi: kaNsi:-du isjugi: buL”-ti. [民]^{vi}

どこへ=か-と そのように あのように-ぞ 急いで いる-と

ものすごい大雨(の中)から白いひげ(の)お爺さんがいらっしゃって、「あんな(ft.こんな)大雨(の中)をどこへ(行くの)か」と(尋ねたので、若者は)「こうこういうわけで

急いでいる」と(答えた)。

また、以下の用例のようにその動作性が失われている場合は、動作や変化の過程の継続ではなく、単に<基準時点における状態>の意味が表されるようになる。

5-92 micī-gama-u mo:ke nasi: wa:ritaqrū. N:. [Oj-d-28-A11]

道-[指小]-を 向かい-Ø なし なさっていた=よ [間]

(あの家は)小道を向かいになしなさっていたよ。うん。{note.家の向かいに小道があった、ということ}

5-93 jemunu-nu na:-kara pazīmi:, nezumi-nu ‘ni’-kara pazīmari:L-ti:nu panasī.

獲物-の 名-から 始めて ネズミ-の (ネ)-から 始まっている-との 話

(だから)獲物{note.ネズミを指す}の名前から始めて、ネズミの「ネ」から始まっているという話。[民 Noz-5-8]

5-94 karikuri we:gari:-kara sjurio:-gami kīkari:L, sjurio:-gami kīkari:-du^{ix}

あれこれ 成長してから 首里王-まで 聞かれている 首里王-まで 聞かれて-ぞ

あれこれ成長してから(は)首里王(に)まで(名が)聞かれている(ft.知られている)、首里王(に)まで(名が)聞かれて(ft.知られて)

また、「ながい時間のなかで進行するような」場面外の変化をあらわす動詞では(須田 2003:27)、以前(=過去)の変化の結果の状態が、基準時点に残っていることが表される。この用法は、<基準時点における状態>と先の<変化の結果の継続>との中間に位置する特殊な用法と言えるだろう。

5-95 aNta-ga haruko-mai ure uNsi ga:gari:L=sja:. [Kij-a-9-A1]

私たち ex.-が ハルコ-も それ-は そのように 痩せている=さ

うちのハルコもその子はそのように痩せているよね。

5-96 unu ma:ma, Mme aNsi:-du, o:sama-nu jumi-N nari:, uNsjuku jukari:L-ti

その 継母 もう そのように-ぞ 王様-の 嫁-に なって ものすごく 成功している-と

kīkiqti, Mme sīta-u faikīsi:, sīni: bu-taL-ti:. [民]^x

聞いて もう 舌-を 食い切り 死んで いた-と

その継母は、(継子が)もうそんなふうに、王様の嫁になって、大変に成功していると聞いて、舌を噛み切って死んでいたそう。

5-97 bata-gama-ga¹⁸ Ndi:-du buL-ba, a-ga-du jubi-du mi:ta:L. [Oj-b-12-B2]

腹-[指小]-が 出て-ぞ いるから 私-が-ぞ タベ-ぞ 見た

お腹が出ているから{note.妊娠しているということ}。私がタベ見た。

4) 反復的な動作；複数主体の動作や多回的な動作、習慣をあらわす(「非連続的な過程の明示」)。完成相の場合と同じく<個別的な時間>から解放された非アクチュアルな用法である。

5-98 ~-ti:nu, panasī-mai-du muksje: ari:, hoNto: kure: uNsinu panasē: ju:-du

-との 話-も-ぞ 昔-は あって 本当 これ-は そのような 話-は よく-ぞ

¹⁸ 多良間方言の ga 格は主にヒト固有名詞、代名詞によってとられる形式であり、この-ga はおそらく-nu の誤りであろう(序論 3 の 3-1 参照)。

kiki: buL. [民 Cin-17,注 6]

聞いている

～という話しも、昔はあって、本当(に)これは、そのような話は(昔から)よく聞いている。

- 5-99 ~Mme naNnicikaN-ga keNkju:ba si: wa:L-taL-ga jau, mi: wari:L-badu, ke:
 もう 何日間-か 研究-をば し なさった-が 様 見 なさっていると [間]
 mizü: amiqti:-du, ki:-Nke: nu:ri: tubi: ki:, {中略} ki:-ja tubütubi,
 水-を 浴びて-ぞ 木-へ 上って 行って{飛んで} 来て 来て-は 行き行き{飛び飛び}
 tiN:ke:-ti: nu:ri:L-ti:. [民 Joh-5-8~9]

天-へ-と 上っている-と

もう何日間か研究しなされたようで、見なさっていると、(その娘はまた来て)水を浴びて、木に上って行って(また)来て、来ては行ったりして、天へと上っている(ft.上っていた)そうだ。{note.水浴びをしに、木(地上)と天とを行ったり来たりしている、ということ}

- 5-100 uL-ga Mme, kunu tujumiganasë: we: kuma-Nkanu tujumiganasī, ari:
 それ-が もう この 豊見親加奈志-は [間] ここ-にの 豊見親加奈志-Ø [COP]
 wa:L-badu, Mme kaje: wa:ri:-taL-ti:. [民 Asa-1-3]
 なさる-ので もう 通い なさっていた-と

それがもう、この豊見親加奈志は、ここの豊見親、でありなさるので、もう(その妾のところ)に通いなさっていたって。

- 5-101 “jicë:, ba-ga-du mainicī kuma-nu fa:i-gu: muno:, fe: bu-taL”-ti:
 実-は 私-が-ぞ 毎日 ここ-の 食べ-そうな もの-は 食って いた-と
 qsai-taka:-du, [民 Sims-3-注 4]
 申したら-ぞ

「実は、私が毎日ここの食べられそうなものは食べていた」と申し上げると、

1-5. 基本的なテンス・アスペクトの体系

以上、多良間方言の動詞のテンス・アスペクトについて、各形式の実現する意味・用法を記述してきた。それぞれの形式が示している用法の基本的なものは、次のようにまとめられる。

	(アクチュアルな用法)	(非アクチュアルな用法)
a. 完成相・非過去形 ;	<限界に到達する動き> <動作の発生> <現在の状態> <全体的なデキゴトの意味>	<一般的なコトガラ> <反復的な動き>
b. 完成相・過去形 ;	<限界に到達した動き> <動作の発生> <全体的なデキゴトの意味> <過去の状態>	<反復的な動き>

c. 継続相；	<動作の過程の継続>	<反復的な動き>
	<変化の結果の継続>	
	<基準時点における状態>	

多良間方言のテンス・アスペクトの各形式の基本的な意味は、それぞれ、<全体的な事実の意味>と<動作の具体的な過程継続の意味>という(須田 2003)、共通語のスル・シタ、シテイル・シテイタと同様のものと言っても良いだろう。だが当然、共通語とは異なっている点も少なくない。例えば、b 完成相・過去形にはシタリ形、シアリ形、シアリタリ形という形づくりの異なる3タイプの形式が現れているが、これらは大きく、主に<限界到達>の意味を表すのに用いられるシアリタリ形(直前過去)と、シタリ形・シアリ形(普通過去)とを区別することができる。また継続相では、存在動詞 aL,ataL がその継続相 ari:L,ari:taL と形態的な対立を示していることから、<基準時点における状態>の意味がみとめられている。

また a 完成相・非過去形について、この形式は、上記の用法の他に、<限界に到達した動き>や<過去>の全体的なデキゴトの意味>、<動作の継続>や<変化の結果の継続>という、完成相・過去形や継続相(・非過去形)の基本的な用法をも持ち合わせていることが明らかになった。また、「基準時点において既に動作が完成或いは完了していること」を表すという、いわゆる「パーフェクト的な意味」をも示していた。1-3-1 でも軽く触れたが、完成相・非過去形、つまり/si:/という形式の示しているこの多様な意味・用法の広がり、次のことの現れであると考えられる。すなわち、テンスやアスペクト、そして恐らく、パーフェクトのカテゴリーそれぞれにおいて、この/si:/という形式は、/si-taL/、/si: buL/、/si: uki/といった marked の形式と、それぞれ対立を示しているということである。Comrie 1976 でも、「しるしづけられ性」の marked-unmarked の「もっとも決定的な基準のひとつ」として、「しるしづけ無しのカテゴリーの意味は、おおくのばあい、しるしづけられている片われの意味をとるこむことができる」(山田訳 1988:177)ということが挙げられている。

そして、これらの形式は、次のように体系化される。

テンス アスペクト			過去	
			普通過去	直前過去
完成相	ri 語尾形	kaki ス(シ)	kakitaL シタリ	kakiqta(L) シアリタリ
	(ari 形)	—	kaki: シアリ	—
	m 語尾形	kakiM シ=ム	kakitaM シタリ=ム	kakiqtaM シアリタリ=ム
継続相	融合形	kaki:L シアリヲリ	kaki:taL シアリヲリタリ	—
	分析形	kaki: buL //	kaki: butaL //	

表 16 多良間方言のアスペクト・テンス体系表 (代表形 kaki「書く」)

過去形について、完成相は、先述したとおり実現するテンス的意味の違いによって、タリ形・アリ形の普通過去とアリタリ形の直前過去に、大きく二分されるが、このうち直前過去形は対立する継続相の形式を持たないことから、アリタリ過去形はアスペクトの対立に参

加していないと捉えられる。

表 16 について、まず継続相は、その 2 つの形態的要素(/si:/, /buL/)の融合の有無により、融合形と分析形の 2 種の形式が現れている。これらはいわば同一語の異形態であり、本当ならば横に並べて示されるべきものであるが、スペースの問題により縦に並べて配置している。なお、継続相に m 語尾形は現れない。また、完成相の ri 語尾形と m 語尾形、アリ過去形を 1 つの枠内に収めているが、それは、これらが同一の語構成を持つ異形態であることをあらわすものではない。形式の違いによるアスペクト的意味の差異の見られないことによる。

第2節 連体形のテンス・アスペクト

動詞の主要なはたらきとは‘述語’になることである。よって、動詞が最も動詞らしくふるまうのは文の終止の位置においてであり、前節では、その文の終止の位置の動詞を対象として、それぞれの形式のもつ意味・用法を記述し、多良間方言の動詞の基本的なテンス・アスペクトの体系を明らかにしていった。だが、動詞は常に文の終止に位置しているわけではない。第2節では、特に、文の連体の位置の動詞の各形式について、その意味・用法を記述し、基本的なテンス・アスペクトの体系との異同関係を明らかにしていく。なお、「時」や「間」といった時間を表す名詞や、形式名詞を被修飾名詞とする連体節など、「独自の振る舞いを示す」(丹羽 1997:321)ものについては、今回は取り上げない。

2-1. 形式

多良間方言の動詞は、その活用の仕方によって、強変化タイプ(I 類)、弱変化タイプ(II 類)、特殊変化タイプ(III 類)の 3 つが区別されている。そして、その連体形は、活用タイプごとにやや異なる形式を示している。

強変化タイプ(I 類)には、その語幹が子音で終わる動詞が属している¹⁹。主に、古典語の「四段活用動詞」に対応するが、ki:L(蹴る)や ɪziL(入る)など、「一段活用動詞」に対応する動詞もいくつか含まれている。このタイプの動詞の完成相非過去・連体形(以下完成相・連体形)は、表 1 の完成相非過去 ri 語尾形(以下完成相・終止形)と同音形式で現れる。また、「ラ行変格活用」の存在動詞に対応する aL(ある)と buL(いる)もこのタイプ(C)に属するが、多良間方言の継続相(非過去形)は/buL/をその形態的要素の 1 つとしており、よって継続相非過去・連体形(以下継続相・連体形)は、表 16 の継続相非過去形(以下継続相・終止形)と同音形式である。なお、分析形、融合形共に現れている。

また完成相過去・連体形、継続相過去・連体形も、それぞれ、表 16 の完成相普通過去 ri 語尾形(以下完成相過去・終止形)、継続相過去形(以下継続相過去・終止形)と同音形式である。

A ; kaki(かく), kugi(漕ぐ), tubi(飛ぶ), kaqvi(被る), cuqfi(作る), kisi(切る),...

ex. i:ju kaki (絵をかく) — i:ju kaki pitu (絵をかく人)

¹⁹ 拙論 2002 では、強変化タイプに属する動詞を、その動詞が持っている語幹のタイプによってさらに下位分類している(A~D)。A は基本語幹のみを持っており、A' から D は、基本語幹の他にそれぞれ異なる「変わり語幹」を持っている。

A' ; maci(待つ), mucī(持つ), i:(言う),…

ex. aMju mucī (網を持つ) — ziN mucī z(j)aisaNka (金持ち(の)財産家)

B ; nasi(生す), kiqzi(削る), fuqci(移る),…

ex. qfau nasi (子を生す) — qfau nasi tukī (子を生す時)

C ; tuL(取る), buL(いる), ki(:)L(蹴る), naL(なる), nu:L(のぼる,乗る), nuM(飲む), aM(編む), ciciM(包む),…

ex. kumaN buL (ここにいる) — taramaN buL pītu (多良間にいる人)

D ; fu:(食う), umu:(思う), baru:(笑う),…

ex. ju:igamau fu (夕飯を食う) — fu munu (食う物)

D' ; nigu:(願う), usunu:,usuno:(失う), kau,ko:(買う)²⁰

ex. izü: kau/ ko (魚を買う) — kau/ ko munu (買う物)

継続相非過去形

ex. funiu kugi: buL (舟を漕いでいる) — funi-u kugi: buL izaku (舟を漕いでいる人)

過去形

ex. paLNke: ikītaL (畑へ行った) — hoN ko:ga ikītaL pītu (本を買いに行った人)

hoNju muti: butaL (本を持っていた) — muti: butaL izjara (持っていた人)

弱変化タイプ(Ⅱ類)には母音終わりの語幹をもつ動詞が属している。主に、古典語の「(上)一段活用動詞」と「二段活用動詞」に対応しているが、その完成相・連体形は、必ずしも完成相・終止形と同音形式であるとは限らず、その文の中で実現されるその(文法的)意味の違いによって、異なる形式をとって現れているようである。すなわち、<基準時点以後=未来>の動作を表している場合の完成相・連体形は完成相・終止形と同音形式であるのに対し、そうでない場合はそれと異なる形をとって現れている(本章 2-2 参照)。但し、これらの現れ方には揺れや個人差があり、原則的とはまでは言えないようである。なお、「ナ行変格活用動詞」のシヌに対応する siniL(死ぬ)もこのタイプに属している。

「(上)一段活用動詞」対応 ; mi:L(見る), ki:L(着る),…

ex. terebiu mi:L (テレビを見る) — ure: mi:L munu (それは見るもの)

cf. “tiN mi: garasja” (天を見る鳥(諺))

「二段活用動詞」対応 ; ukiL(起きる), tamiL(ためる), kaNgaiL(考える),…

ex. ziNju tamiL (お金をためる) — mizü: tamiL kami (水をためる甕)

cf. “ziNja tami sjo:bu” (お金は貯める勝負(諺))

特殊変化タイプ(Ⅲ類)について、「カ行変格活用動詞」にクルに対応する /ki:/(来る)、「サ行変格活用動詞」のスルに対応する /si:/(する)の2つがこのタイプとなる²¹。これらの動詞の完成相・連体形は、完成相・終止形と同音形式である。

ex. inanudu kumaNke: kī (犬がここへ来る) — kumaNke: kī pītu (ここへ来る人)

sīgutu: sī (仕事をする) — sīgutu: sī pītu (仕事をする人)

²⁰ 「ハ行四段活用動詞」に相当する動詞については、序論3「形態論」の注41を参照されたい。

²¹ なお、動詞 qsi:(知る)についてはここでは触れないこととする(序論3の注40)。

以上、多良間方言の連体形の形式は、次の表 17 のようにまとめられる(次頁)。

それぞれの「終止形」と同音形式であるものが「同形型」、異なるものが「異形型」である。また、上では触れなかったが、多良間方言では<勧誘・意志>、<推量>のムード的意味を表す形式も、文の連体の位置に現れることができる。これを「推量形型」と呼ぶ。この形式は完成相・連体形にのみ見られる形式である(2-2-1 の例 5-106,107 参照)。また、継続相について、非過去形、過去形ともに、融合形と分析形の両方が現れている。

		断定形(非推量形)		推量形
		同形型	異形型	
完成相・連体形	I 類=強変化	kakī	—	kakazī:
	II 類=弱変化	mi:L	mi:	mi:zī:
	III 類=特殊変化	sī:	—	sju:zī:
継続相・連体形	[融合形]	kaki:L	—	—
	[分析形]	kaki: buL	—	—
完成相過去・連体形		kakītaL	—	—
継続相過去・連体形	[融合形]	kaki:taL	—	—
	[分析形]	kaki: butaL	—	—

表 17 多良間方言動詞連体形の形式

2-2. 連体形のテンス・アスペクト的な意味

以下、多良間方言の動詞が、文の連体の位置においてどのようなテンス・アスペクト的な意味を実現しているのかを、それぞれの形式ごとに記述していく。そして、文の終止の位置において動詞が実現するテンス・アスペクト的な意味との異同関係を明らかにし、その体系化を試みる。また、連体形の動詞のテンスには、その動詞が表している動作が、発話時を基準として、時間的に位置づけられているものと、「文の終止の位置の動詞がさしだす動作が実現した時点を基準として」(須田 2005:16)、時間的に位置づけられているものとがあり、前者を「絶対的なテンス」、後者を「相対的なテンス」と呼ぶ。ここでも、基準時点は波線で示す。また、非修飾名詞は二重線で示す。

2-2-1 完成相・連体形

1) 実現する動き²²；<基準時点以後=未来>のテンス的意味を表す、アクチュアルな用法である。基本的に、「時間的に関係づけられた動作が文の中にない場合」(須田 2005:16)、すな

²² また、この用法の完成相・連体形は、<当然>や<義務>、<強い推量>といったムード的意味を表す gumata (-nu)を伴って現れることも多い。

cf. umukutu munō, irisuzuja:-nu akaL-u: mi:tui, “kanu, tu:L-nu sita-N-ja,
知恵{思う事} もの-は イリスズヤー-の 灯-を 見て あの ランプ-の 下-に-は
ba-ga miduM naL gumata-nu, kaL-ga-du buL”-ti: unu miduM-nu ka:gi-u
私-が 妻{女}-Ø なる [当然,推量]-の あれ-が-ぞ いる-と その 女-の 顔{影}-を
kanamaL-Nka ukabi: butui, [民 本章脚注 xi 参照]

頭-に 浮かべて いて

知恵者はイリスズヤーの灯を見て、「あのランプの下には、私の妻になるはずの、あの人がいる」と、その女の顔を頭に思い浮かべていて、

わち、文の終止の位置の動詞(以下述語動詞)が無い場合は絶対的なテンスが(例 5-102,103)、そうでない場合は相対的なテンスが表される(例 5-104)。また例 5-105 は、述語動詞が動作主体=話し手の<意志>を表していることから、絶対的なテンスを表していると考えられる。

5-102 si: Mme ataL. kiNjo: asato jaL munu. [Oj-a-10-A4]

[感] もう 合う 金曜 明後日-Ø やる もの

そうね、もう合う(ね)。(その法要は)金曜、明後日(に)やるもの(だから)。

5-103 nuzuM sjo: Ndi ar-abaM, Mme, taro: ar-abaM, ziro: ar-abaM.

望む 者-を どれ-Ø [COP]-譲歩 もう 太郎-Ø [COP]-譲歩 次郎-Ø [COP]-譲歩

(その子が)望む者をどれ(ft.誰)でも、もう、太郎でも次郎でも{note.話者は「その子」と話者の孫を結婚させようと提案している}。 [Kij-b-15-A2]

5-104 qfaMmaga iqtaru-made kuma-Nka-kara nuNdi:L qfaMmaga-nu Mme:, pītu-mo,

子孫-Ø 至る-マデ ここ-に-から 出る 子孫-の [Pl.]は 人-モ

sukosimo, Nna, jizimi-mai sirari-N, cja:gaL, cja:gaL-ba si: ikī-tu nara-ga tasuki,

少シモ [間] いじめ-も されない 伸びる 伸びるの-を して いく-と 自分-の 助け

uzigami-ti: Nna:, Nna:, su: si:, Nna, si: iki-ti:nu juiguN-ba si: wa:L-taL-ti:.

氏神-と [間] [間] する して [間] して いけ-との 遺言-(を)ば し なさった-と

子孫(に)至るマデ、ここから出る子孫らは、人モ(ft.に)、少シモ、いじめもされない、自分の助け(によって)伸びていくから、(自分を)氏神としていきなさい{note.

祀っていきなさいということ}という遺言をしなさったって。 [民 Asa-1-17]

5-105 kunu si:niN-ja uduruki-u si:, “nubasi:mai tasuki: wa:ri. wa:L kuto:,

この 青年-は 驚き-を して どうしても 助け なされ おっしゃる ことは

nubasinu kutu-mai kanarazu sjuqzi:”-ti, [民]^{xi}

どのような こと-も 必ず するから-と

この青年は驚いて、「どうしても助けて下さい。おっしゃることは、どのようなことでも必ずしますから」と、

また、完成相・連体形にのみ見られる「推量形」型(表 17)は、<基準時点以後=未来に実現する動作>というテンス・アスペクト的な意味を実現する用法のみを示している。現在までのところこの形式は、絶対的テンスを表している用例にのみ現れている。

5-106 jagate kju:zju: nara-zī: pītu-nu. @ [Oj-d-13-B5]

やがて 90-Ø なろう 人-の

やがて 90(歳に)なる人が。{note.こんなに元気でいらっしゃる、と続くニュアンス}

5-107 “futa:L-ga naka-N, pi:sja:-Nke: Mbai-zī: pītu-tu-du ika-zī:”-ti katare:, [民]^{xii}

2人-が 中-に 寒さ-へ 耐える[推] 人-と-ぞ 行こう-と 相談して{語って}

「2人の中で、寒さへ(ft.に)耐える人と行こう{note.結婚するということ}」と相談し、

2) 継続的な動作・状態 ; <基準時点(同時)=現在>のテンス的意味を表す、アクチュアルな用法である。共通語のスル連体形とは異なり、多良間方言では、(客体の変化を伴う場合も含めて)主体の動作を表す限界動詞と無限界動詞、そして、主体の変化を表す限界動詞によっても、このテンス・アスペクト的な意味は実現される。後者の場合、基準時点においてその変

化の結果の状態(限界到達後の状態)にあることが表されるわけだが、この用法は完成相・終止形にも現れていたものである。

○動作の継続

- 5-108 wa:ritqti:-du, kiM-ba a:ri: wa:L tukuru-Nke: Nna:, mumu-nu,^ momo=jo, sore-ga
 いらっしやって-ぞ 着物-(を)ば 洗い なさる ところ-へ [間] 桃-が モモ=よ ソレ-ガ
 garaNgaraN-to, N:, nagarete kita. [Oj-c-1-A3]
 ガランガラン-ト [間] 流レテ 来タ

(洗濯に)いらっしやって、着物を洗いなさる(ft.洗いなさっている)ところへ、桃が、モモよ、ソレガ、ガランガラント、流レテキタ。

- 5-109 kuNgeN-ja, “qvata-ga asubi sugata:, Nda kuda-N, nu:-ju si: buL,-ti:-gami-mai,
 クンゲン-は あなたたち-が 遊ぶ 姿-は どこ ここ-に 何-を して いる-と-[強意]-も
 sjarasjara=sja:mi”-ti:, [民]^{xiii}
 [擬態語]=だよ-と

クンゲンは、「あなたたちが遊ぶ(ft.遊んでいる)姿は、どこそこで、何をしているとまでも、はっきりだよ{note.よく見えるということ}」と、

○変化の結果の継続

- 5-110 kunu, raibjo:kaNdzja-nu Mme-nu, sumai tukuru-Nke: iki:, fe:-du pataraki:
 この ライ病患者-の [Pl.]-の 住む 所-へ 行つて 食つて-ぞ 働いて
 fe:-du, [民 Kun-6]
 食つて-ぞ

この、ライ病患者たちの住む(ft.住んでいる)所へ行つて、働いて食べて(いて)、

- 5-111 “nara:, we:, na:-ga siġutu: tanagiqti: tuNdi: ki:, uNzju-tu panasiai-ba si:,
 自分-は [間] 自分-が 仕事-を 棚上げて 飛んで きて あなた様-と 話し合(を)ば して
 bi:,L zikaN-si:-ja, nubasi:-bakaL-nu hoN-ju-du, uwari: uka-masiru-gadu, ~”
 座る 時間-で-は どのような-[程度]-の 本-を-ぞ 終わつて おく-[反実仮想]-けど

「自分は、自分の仕事を棚上げて飛んできて、あなたと話し合いをして、座る(ft.この座っている)時間ではいくつかの本を、(作り)終わっていたかもしれないけど、~」 [民 Joh-15-12]

- 5-112 a, ho:geN-ju nara:-ti ki: pitu-Nke: kanarazu kjo:cu:go-u sju:-zi:-ti: wa:L.
 [感] 方言-を 習おう-と 来る 人-へ 必ず 共通語-を しよう-と いらっしやる
 あら、方言を習いたいと来る(ft.来ている)人へ、必ず共通語を使おうといらっしやる。
 {note.どうして~するのか、と注意するニュアンス} [Oj-a-8-B10]

3) 基準時点における状態；無意図的に知覚された現象の状態や生理・心理的な状態を表す動詞、また存在動詞などによって表される。完成相・終止形にも見られる、アクチュアルな用法である。

○無意図的に知覚された現象の状態(知覚動詞)

- 5-113 unu kui-nu kikaiL tukuru-Nke: iki: mi:L-badu, kicigi miduM-nu bu-taL.
 その 声-の 聞こえる ところ-へ 行つて みると 綺麗な 女-の いた
 その声の聞こえるところへ行つてみると、綺麗な女がいた。

5-114 uipito:, mi:L pitu:ba cuka:-ti:-ti:-ja si:. [Oj-d-27-A9]

老人-は 見(え)る 人-をば 使おう-と-と-は する

年寄り-は、見(え)る 人-は使おう使おうとする。

○生理・心理的な状態

5-115 misita:L-ga naka-kara, bikiduM-ju nuziM pitu-nu, miutu: si: ko:fukuN kurasī-taL-ti:.

3人-が 中-から 男-を 望む 人-の 夫婦-をして 幸福に 暮した-と

3人の中から、(その)男を望む(ft.好いている)人が、夫婦をして(ft.夫婦になって)幸福に暮らしたと。[民 Han-2-注 3]

5-116 si:du, “agai, kure:, ba-ga, ba-ga mucī kukuro: janasja, jana munu=na”-ti:,

それで [感] これは 私が 私が 持つ 心-は 嫌な 嫌な もの=な(疑い)-と
それで、「ああこれは、私が持つ(ft.持っている)心は、嫌な(ft.駄目な)ものなのか」
と、[民 Cin-15]

○存在動詞

5-117 aNsibadu, kanagai-kara, usi, nu:ma-nu Nna:-nu, karamaki:-taka: ta:-ga usi,

だから 昔-から 牛 馬-の 縄-の 絡まっていたら 誰-が 牛

nu:ma ar-abaM, no:si:, naL-tika:, fusja-nu aL tukuru-Nke: pikima:si-du,

馬-Ø [COP]-譲歩 直して なるなら 草-の ある 所-へ 引き回す-ぞ

kaMganase: mi: wa:L-ti:nu munu. [民]^{xiv}

神加奈志-は 見 なさる-との もの

だから、昔から、牛、馬の縄が絡まっていたら、誰の牛、馬であっても、直して、なるなら(ft.できるなら)、草がある所へ引いて行く、(それを)神様は見なさるとのもの(ft.見ていなさるとのことだ)

また、gaga(ri)L(やせる)や qfaiL(太る)のような、「ながい時間のなかで進行するような」場面外の変化をあらわす動詞(須田 2003:27)の完成相・連体形は、動作(変化)性が薄れ、単に基準時点における状態を表していると考えられる。また、例 5-119 の連体形動詞 qsi:(知る)についても同様のことが言えるだろう。動作(変化)性の薄まりによって、これらは、被修飾名詞が示しているコトガラ的属性を表すという、非アクチュアルな用法に近づいている。

5-118 kure:, kunu, de:N cju:sja:-taL usi-mai, gagari usi-mai, usi-Nke: MmariL

これは この とても 強かった 牛-も 痩せる 牛-も 牛-へ 生まれる

mai-N-ja niNgiN-du a-taLru-gadu, kunu qfai usē:, de:N cju:sja:L usē:, kunu

前-には 人間-ぞ あったけど この 太る 牛-は とても 強い 牛-は この

gagari usi-Nke:, niNgiN,-ni Mmari: buL kuru-N, fusai-nu a-taLrugadu

痩せる 牛-へ 人間-に 生まれて いる 頃-に 負債-の あったけど

これは、この、1番強かった牛も、痩せた牛も、牛へ生まれる前には人間だったけど、この太った牛は、1番強い牛は、この痩せた牛へ、人間に生まれている頃に、負債があったけど、[民 Noz-3-9]

5-119 ~-ti:nu kutu-kara si:-du, munu: qsi: pitu-Nke: nare: mi:L-badu,

-との こと-から して-ぞ もの-を 知る 人-へ 習って みると

~ということからして(奇妙だったので)、ものごとを知る(ft.知っている)人へ習っ

て(ft.伺って)みると、[民 Noz-1-注 1]

4) 反復的な動き；繰り返される動きや習慣的な動作を表す用法である。非アクチュアルな用法であるが、完成相・終止形と同じく、テンスと完全に無関係ではない。

5-120 Mme jamuiN, “piNna munu aNsi:-du, na:-ga tiN-tu uL nu:L si: tubī-giM-ju,
もう 止む得ぬ 変な もの そのように-ぞ 自分-が 天-と 下り 上り する 飛び-着物-を
nusumari: ne:N, satunusiN”-ti: Mme, qsari:-du, [民 Joh-5-13]

盗まれて しまった{ない} 里主サン-と もう 申し上げて

もう止むを得ない(と)、「奇妙なこと(に)、このように、自分の天と(地上を)下り
たり上ったりする飛び着物を、盗まれてしまった、里主サン」と、もう申し上げて、

5-121 ~kamisori-u uL-ga aLkī micī-N tati:, ucu-ka: uL-N bata-u bari: sīni-taL-ti:.
剃刀-を それ-が 歩く 道-に 立てて 置いたら それ-に 腹-を 割って 死んだ-と
~ 剃刀をそれ{note.犬}が歩く道に立てて置いたら、それに腹を割って(ft.割られて)
死んだそうだ。 [民 Isg-2-3]

5) 一般的なコトガラ²³；完成相・終止形と同じく、非過去形に限られた非アクチュアルな用法である。連体形動詞が示す動きは、被修飾名詞の示すコトガラの「潜在的な属性」(高橋 1973:115)として表されており、<個別的な時間>が捨象されている。

5-122 unu, funi agiL kikai-nu=ju.↗ [Oj-b-11-C2]

その 船-Ø 上げる 機械-の=よ

その、船(を)上げる機械のよ。{note.建造中の小屋の使用目的について述べている}

5-123 ~kazi-u ukusi: wa:riqti:, Mme unu:, pītu-micū:ba: nu:L micū:, aki: wa:ri:
火事-を 起こし なさって もう その 1-道-をば 上る 道-を 開け なさって
ukī,-ba, buL-badu=sja:mi:.. [民 Joh-6-22]

おくから いる-から=さ

~ 火事を起こしなさって、その、1(つの)道は上る道を{note..上ってくるための道
として}、開けなさっておくから、(~なさって)いるからね。

5-124 unu aLkī micī-nu ho:ko:cigai-ba si:, Mme ikī gumata-nu micī ar-aN-gutu,
その 歩く 道-の 方向違い-(を)ばして もう 行く [当然]-の 道-Ø [COP]-逆接
その歩く道の方向違いをして(ft.帰り道を間違えて)、(家に帰るときに)行くべきの
道ではなくて、[民 Toj-1-14]

5-125 “nara:, kuL-ga tami-N, nara: cukī-N butui-ja seikacu: si: iki: ikail
自分-は これ-が ため-に 自分-は 月-に いて-は 生活-を して いて 生きられる
niNgiN. nara: tiN-nu niNgiN jaL-ba, Mme nara: tiNke: nu:raM”-ti:,

人間 自分-は 天-の 人間-Ø やれば[COP 化] もう 自分-は 天-へ 昇ろう-と

「自分(ft.私)は、これのために(帰れなかった)、私は月にいて(こそ)生活していて
生きられる人間。私は天の人間だから、もう私は天へ上る」と、 [民 Joh-5-25]

²³ 「実現する動き」を表す用法の場合と同じく(本章の注 22)、この用法の完成相・連体形も gumata(-nu)を伴って現れることが多い(例 5-123)。

また、その脱時間化が進むと、連体形動詞と被修飾名詞の組み合わせは複合名詞的にふるまうようになる(例 5-126,127)²⁴。また、複合名詞的とまではいかない場合でも、動作(変化)性が薄まり、規定的にふるまう連体形のシタによく似てくる(例 5-128,129)。

なお、2-1 で、弱変化タイプの完成相・連体形が、その表す文法的な意味によって現れる形式が異なることを述べたが、「異形型」(表 17)をとっている用例では、この、脱時間化の進んだ<一般的なコトガラ>の意味が表されている場合が多い。

5-126 junagatu, izu tuLga ikiqti, baqsi munu-nu aL-ba, “tau arabaM iki: turi: ku:”-ti: jarasī-badu, [民]^{xv}

夜 魚-Ø 採りに 行って 忘れ(る) もの-の あるので 誰-Ø [COP]-譲歩 行って 取って

来い-と やらすと
夜、魚(を)採りにいって、忘れ(た)ものがあるので、「誰でも(いいから)行って取って来い」とやらすと、

5-127 Mme jukuti: ucukiqti: Nne:ka-kara, gasu-ti kī:-taL-cī:-badu, unu ba:-N, unu sībuL-karanu...idi mizi-nu, [民 Joh-5-48~49]

冬瓜-からの 出(る) 水-の

もう横手(に)置いて、真ん中からガスって切ったそうで、その時、その冬瓜の中からの出(た)水が、

5-128 uL-ja M:na pitu...to:ri ja:susju-dataL, e: sīni-du tusi-dataL-ti:.

それ-は 皆 人-Ø 倒れ(る) 飢饉-ぞ-であった [間] 死(ぬ)-ぞ 年-ぞ-であった-と

それは人(が)皆倒れた飢饉だった、死んだ年だったって。 [民 Asa-1-41]

5-129 asjugadu mutunuse: kau nusī-Nke:ny, uqka-nu-du kanagai-kara a-taL-gi munu.

だけど 元主-は 買(う) 主-への 借金-の-ぞ 昔-から あった-気 もの

だけど元主は(その牛を)買った主への、借金が昔からあったらしい。 [民]^{xiv}

2-2-2 完成相過去・連体形

1) 実現した動き；<基準時点以前=過去>のテンス的意味を表す、アクチュアルな用法である。その用例の多くは絶対的なテンスであるが、述語動詞が過去形の場合、ダイクティックな時間名詞などが文中になれば、相対的なテンスとの区別がつきにくい(例 5-132)²⁵。

5-130 jubi, jubi kiki-ta:L panasū:-ti-du bareqra:.

タベ タベ 聞いた 話-を?-と-ぞ 笑っている-よ

タベ聞いた話って笑っているよ。

²⁴ 以下の例(cf.)のように、非修飾名詞に連濁が生じている場合は、完全に複合名詞として扱うことができるだろう。ここで挙げている他の用例についても、特に、例 5-126 の/baqsi munu/など、完成相・終止形と異なる形をとって現れているものは、1つの複合名詞として扱うべきなのかもしれない。だが、この「異なる形」の連体形動詞は、常に、非時間的な意味を表しているわけではないことから、本稿では便宜的に、連濁現象の見られる場合を除き、連体形動詞と名詞のくみあわせとしてこれらを捉えている。

cf. “sjudaci-zīma-N pairu.” 「育ち島で栄えろ」 [諺]
育つ-島-に 栄えろ

²⁵ なお、須田 2005 は、「終止形が過去形の場合、連体形のシタは、終止形のさしだす動作に先行する動作というより、発話時を基準とした過去の動作をさしだしていると解釈したほうが自然である」と述べ(p17)、例 5-132 のような文も、絶対的テンスを表すものと捉えている。

- 5-131 qfa-nu fa:-ti: subadu, unu fu: munu-Nka:, musi-nu Mme-nu baki: buL. asjugadu,
 子-の 食おう-とすると その食(う)もの-には 虫-の [Pl.]の わいている だけど
 “Mma-ga kiM-kara Ndasi: wa:L-taL, bakari-nu munu ari:”-ti:, sa:ti: fe:qti:,
 母-が 心{肝}-から 出し なさった 別れ-の もの-Ø [COP]-と [擬態語] 食って
 子供が食べようとする、その食べ物には虫なんかがわいている。だけど、「お母
 さんが心から出しなされた、別れのものだから」と、一生懸命食べて、[民]^{vi}
- 5-132 sjo:gacue:gu-mai, sjeNta:-N-kara muti: ki-taL munu turasi:. ite oba:-N nara:si-ti.
 [歌謡名]-も センター-に-から 持って 来た もの-Ø 取らせた [?]おばーに 習わせ-と
 「正月エーグ」も、センターから持ってきたもの(を)取らせた(ft.あげた)。いってお
 ばーに習わせなさい(ft.教えなさい)って。 [Oj-d-6-A1]

2) 基準時点に関わる以前=過去の動き ; <基準時点以前=過去>に行われた動きが、何らかの形で基準時点=現在にまで関わっていることを表す(=「パーフェクト的な意味をもつ」須田 2005:16)、アクチュアルな用法である。基準時点が発話時=現在である場合を除いて、主に、述語動詞を基準とする相対的なテンスが表される。

- 5-133 iki Nga-ti: si-gadu unu, u:sjazusju:-ga sjasikomi wa:L-taL ki:-ja Ngari-N.
 行って 抜こう-と するけど その ウーシャズ主が 差し込み なさった 木は 抜けない
 (マクバダラは)行って抜こうとするけど、その、ウーシャズ主が差し込みなした
 木は抜けない。 [民 Kad-1-23]
- 5-134 du:-ga cuqfi-taL ja:-ju jakuniN-nu Mme-nu, pikiagi: tubi-taka: kiduku
 自分-が 作った 家-を 役人-の [Pl.]の 引き上げて 行ったら{飛んだら} 気(の)毒-Ø
 ari:-ti:, unu ja:-nu para-u, uma kuma kizu: cuki:, [民]^{xvi}
 [COP]-と その 家-の 柱-を そこ ここ 傷-を つけて
 自分が作った家を、役人たちが(調べて分不相応だと)引き上げて行ったら気の毒
 だからと、その家の柱をあちこち傷をつけて、
- 5-135 unu, jo:zi si-ga ki-taL dusē: tati:iki:, [民 Joh-4-31]
 その 用事-Ø しに きた 友達-は 立って 行って
 その、用事をしに来た友達は立って行って、

だが次の用例では、補助動詞 kitaL(~来た)によって以前=過去の動作の基準時点への関わりは完全には失われていないものの、被修飾名詞の位置に現れている動作主体が個別的でないためか動作性が弱く、4)の<基準時点における状態>の意味に近づいている。

- 5-136 unu, aparagi sjugaL-ba si: i:, kesjo:-ba si: ki-taL miduM-ja M:na-N
 その 美しい 装い-(を)ば して 間投 化粧-(を)ば して きた 女-は 皆-に
hamiLru-gadu, ha, Nna, atar-aN. [民 Nam-1-5]
 はめるけど 言淀 間投 当らない
 その、美しい装いをして、化粧をしてきた女全員に(靴を)はめるけど当らない{note.
 うまくはまらない、ということ。}

3) 限界に到達した動作 ; 連体形動詞の表す動作・変化が、基準時点により近い以前=過去(直

前)に位置づけられている場合、このテンス・アスペクト的な意味が表される。この用法は、基準時点となる述語動詞の示す動作の主体と、連体形動詞の示す動作の主体が同一で、被修飾名詞によって差し出されている場合に限られるだろう。なお、文の終止の位置では、<限界に到達した動作>の意味は、主に「直前過去形」(表 16)によって表される²⁶。

5-137 ati aparagisjaN, kuL-u: mi:-taL si:niN-nu Mme:, kairi:-ja s̄inis̄ini si: buL-ba,
 ととも 美しくて これ-を 見た 青年-の [Pl.]は 返って-は 死に死に していたので
 あまりに美しいので、この子を見た青年たちは、(ひっくり)返っては死んだりし
 ていたので、[民]^{xvii}

5-138 unu kaci-taL si:niN-nu...umukutu...muṇo:, irisuzuja:-nu muku-N naL-taL-ti:.
 その 勝った 青年-の 知恵{思ふ事} もの-は イリスズヤー-の 婿-に なった-と
 その勝った青年の知恵者は、(約束通り)イリスズヤーの婿になったって。[民]^{xii}

4) 基準時点における状態；基準時点にまで関わる以前=過去の動作・変化ではあるが、その成立した動作・変化が、「時間的に遠く、異場面において生じたもの」(須田 2005:17)である場合、「その動作のプロセスの側面はきえてしまって、動作の結果である状態の側面だけがうかびあがって」くる(高橋 1973:123)。動作(変化)性は希薄であり、被修飾名詞の示すコトガラ属性を表す非アクチュアルな用法となっている。

5-139 “~karas̄i-taL ziN-ju, muti:-du baN-ja s̄ima-N-ja kairu gumata aLru-gadu,
 借らした 銭-を 持って-ぞ 私-は 島-へ-は 帰る [当然]-Ø [COP]-逆接
 unu ziN-ju para:i-N, piNgi:, para:-maN-ti:nu kimoci idi-ba kaNsi:, nu:ri:
 その 銭-を 払えない 逃げて 払わない-との 気持ち-Ø 出るので あのように 上って
 ki:, kuma-Nka kaqfi: buL=na”-ti:, [民 Joh-20-11~12]
 来て ここ-に 隠れて いる=な(疑い)-と

「~ 借らした(ft.貸した)お金を持って私は島には帰るべきであるけど、そのお金を払えない(から)、逃げて、(あるいは)払うものかという気持ち(が)出て、あのように(ft.このように)、上って来て、ここに隠れているのか」と、

5-140 mata, ka:s̄idai-nu ziN-ju uki: paku-Nka īzi: ukiqti:, atukara mi:-tika: unu
 また 菓子代-の 銭-を 受けて 箱-に 入れて おいて 後から 見ると その
 ziN-ja, ziN-ja ar-aN-gutu kabū: jak̄i-taL karapai-du atari:, [民 Joh-14-5]
 銭-は 銭-Ø-は [COP]-否順接 紙-を 焼いた 灰-Ø-ぞ [COP]
 また、菓子代を受けて箱に入れていて、後からみると、そのお金は、お金ではなくて、紙{note.紙銭のこと}を焼いた灰だったから、

なお、存在動詞がこの<基準時点における状態>を表す場合は、アクチュアルである。

5-141 uma-N a-taL kabaN-ja Nda.
 そこ-に あった 鞆-は どこ

²⁶ この<限界到達>の用法は、文の連体の位置と終止の位置とでは、その形式以上の大きな違いが見られる。すなわち、前者は「語り」の地の文でのみ、そして後者は「会話」の文でのみ、それぞれ、その意味の実現が可能であるということである。須田 2005 でも、連体形シタの表す<限界到達>の意味は、「語りの連体」という、「少し異なる連体形の用法」として示されている(pp19-20)。

- 5-142 kīnu: a-ga sjuba-N bu-taL pīto:, ba-ga uqtu.
 昨日 私-が 傍-に いた 人-は 私-が 弟 or 妹
 昨日私の傍にいた人は、私の弟(だ)。

5) 反復的な動き;繰り返される動きや習慣的な動作を表す、非アクチュアルな用法である。用例は僅かだが、被修飾名詞の示すモノゴトの属性を表す用法の1つと考えてよいだろう。

- 5-143 “aNsi:-du, ka: ozi:-ga, uNsjuku, M:na jo: munu-mai micugi: wa:L-taL
 そのように-ぞ 貧しい おじーが すごく 皆-Ø 弱い 者-も 貢ぎ なさった
ozi:-ga, nakunari: buL”-ti:, Mme iki: reNraku sī-taL-cu:-badu, [民]^{xviii}
 おじーが 亡くなって いる-と もう いって 連絡 した-[引・推]-ので
 「そのように、貧しいおじーが、とても、皆(に)、弱い者(に)も貢ぎなされた(ft.貢
 ぎなさっていた)おじーが、亡くなっている」と、もういって連絡したらしく、

2-2-3 継続相・連体形

1) 動作の過程の継続; <基準時点(同時)=現在>の継続的な動作を表す、アクチュアルな用法である。述語動詞がない場合やダイクティックな時間名詞がある場合は絶対的なテンスが、そうでない場合は相対的なテンスが表される。また、継続相・終止形と同じく、無限界動詞と主体動作・限界動詞はその動作の継続を、主体動作客体変化・限界動詞は「限界に方向づけられた過程の継続」をそれぞれ表す。

○動作の継続

- 5-144 “ure:, kunu, nara-ga funi-u kugi: buL izaku-ni:, sjuba-u tataki-badu
 それ-は この 自分-が 舟-を 漕いで いる 櫂-で 傍-を 叩けば
 no:L”-tu wa:L-ba, [民 Kad-1-30]
 直る-と 仰ると
 「それ{note.舟への海水の浸水を指す}は、この、自分(ft.あなた)が舟を漕いでいる
 櫂で、(舟の)傍を叩けば直る」とおっしゃると、

- 5-145 “pītu-nu mi: buL tukuru-N-ja mata kure beNzjo:-ja sju-N”-ti i:badu,
 人-が 見て いる 所-には また これは 便所-は しない-と 言う
 「人が見ている所では、またこれは便所はしない」と言う、 [民 Kad-1-11]

○限界に方向づけられた過程の継続

- 5-146 mata ziN, ziNkabī [??] ujaki usjagi: wa:ri:,L kata-mai ari: wa:L,-ti:-mai
 また 銭 銭紙-Ø お焼き-Ø 捧げ なさっている 方-も あり なさる-と-も
 mata mi:rai-taqrui:. [民 Joh-20-51]
 また 見られた=よ
 またお金、銭紙[??]御焼き(を)捧げなさっている方もありなさる、ともまた見ら
 れたよ。{note.銭紙を焼いている人を見かけた、ということ}

但し、継続相・完成相と同様、「対象における変化が、ある時点に一挙に実現するような動作をさししめす動詞」の場合は、「限界到達後に対象にのこる状態の維持」が表されていることが多い。

- 5-147 “~unu qva-ga muti: buL munu: buqsa:, buqsa:-ti M:na acumari: kī:=pazī
その あなたが 持って いる もの-を 欲しい 欲しい-と 皆 集まって くる=はず
aL-ba, ~” [民 Joh-10-16]

-Ø [COP]

「そのあなたが持っているものを欲しい、欲しいと皆集まって来るはずだから、」

2) 変化の結果の継続；継続相・終止形と同じく、主体の変化を表す限界動詞によって表されるアクチュアルな用法である。<基準時点(同時)=現在>において、その変化の結果の状態の継続段階にあることが表される。やはり、述語動詞やダイクティックな時間名詞の有無などによって、絶対的なテンスか相対的なテンスかが異なる。

- 5-148 kaNbo:-ti nini:L uqtu-N nicufusjuL numasja-zī:.

感冒-と 寝ている 弟 or 妹-に 熱薬-Ø 飲まそう

風邪と寝ている弟に熱薬(を)飲ませよう。

- 5-149 ~unu, meN-ba kaqvi: buL munu: mi:qti:, [民 Joh-13-23]

その 面-(を)ば 被って いる もの-を 見て

(動物たちは)その、面を被っている者(ft.男)を見て、

3) 基準時点における状態；感覚動詞や動作主体の生理・心理的な状態を示す動詞などによって表されるアクチュアルな用法である。また、継続相・終止形と同じく、存在動詞 aL の継続相 ari:L によっても表される(例 5-153)。

○動作主体の感覚的な状態(感覚動詞)

- 5-150 aLpī: jami: buL uja: qfa-u: abiri:-du tu:zuki-taL-ti:. [民]^{xix}

ある日 病んで いる 親-は 子-を 呼んで-ぞ 指示した-と

ある日、病んでいる(ft.病気の)親は、子供を呼んで言ったそう。

○動作主体の生理・心理的な状態

- 5-151 ~unu hoNdana-u mi: wa:L-badu Mme, na-ga, hizjo:ni nuzomi: buL hoN-nu,

その 本棚-を 見 なさると もう 自分が 非常に 望んで いる 本-の

hodana-N, ari:-taL-ti:.

本棚-に あった,[融継]-と

ある人が、この本屋へ本(を)買いにと、本(を)買いにと行かれて、その本棚を見な
さると、自分が大変に望んでいる本があった。 [民 Joh-15-2~3]

- 5-152 karijusu pikazu-nu aLpī:-nu sje:kaN, pama-Nke: touka: isjugi: buL, junsu:

おめでたい 日数-の ある日-の 早朝 浜-へ 1人 急いで いる ユヌス-を

cibi-kara abiL pītu-nu buL. [民]^{xx}

後ろ{尻}-から 呼ぶ 人-の いる

ある日の早朝、浜へ1人急いでいるユヌスを、後ろから呼ぶ人がいる。

○存在動詞(/aL/)

- 5-153 kuma-N ari:L hoN-ja M:na, ba-ga munu=do:

ここに ある,[融継] 本-は 皆 私-が もの=よ

ここにある本は、全部私のもの(だ)よ。

また以下の用例のように、その動詞の動作性が失われている場合など、その状態にある前の変化が問題とならないような場合には、その連体形動詞は単に<基準時点における状態>の意味を表すようになる。

- 5-154 kunu, ami-nu kutu:, ami-nu kutu: kakai:L tukuru:, buNsjö:-nu tukuru:,
この 雨-の こと-を 雨-の こと-を 書かれている ところ-を 文章-の ところ-を
Mme mafuda:, teisei-ba si:, [民 Joh-17-8]
もう マフダは 訂正-(を)ば して
この雨のことを、雨のことを(ft.が)書かれているところを、書かれている文章の
ところを、もうマフダは訂正して、{note.勝手に書きかえたということ}

4) 反復的な動き；繰り返される運動や習慣的な動作を表す非アクチュアルな用法である。

- 5-155 ~Mme, kaku,maci, reNraku: siqti:, idi: aLki: bu-taL-ti:. uL-u: keNkju:suru
もう 各町-Ø 連絡-を して 出て 歩いて いた-と それ-を 研究する
tame-N=ju. jukuefumei-ba si:mi:L, Nzja-u. [民 Joh-7-9~10]
ため-に=よ 行方不明-(を)ば させている やつ-を
もう各町(に)、連絡をして、(自分は)出て(山道を)歩いていたそうだ。それを研究
するためにね。(人や家畜を)行方不明を(ft.に)させているやつを。

- 5-156 aM-ju sju:ri, “aM-ju cuqfe:”-ga i:=na. aM-ju cuqfe: wa:ri:L naifu-gama,
網-を 修理 網-を 作って-ガ イーナ 網-を 作り なさっている ナイフ-[指小]
kunu naifu:, [Tok-11]
この ナイフ-を
網を修理、「網を作って」ガイナーナ。作りなさっているナイフ、このナイフを、

2-2-4 継続相過去・連体形

1) 動作の過程の継続；無限界動詞と主体動作・限界動詞、主体動作客体変化・限界動詞によって表される、アクチュアルな用法である。主に、<基準時点以前=過去>において、前者はその動作が継続していたことを、後者は「限界に方向づけられた過程の継続」の段階にあったことを、それぞれ表す。

○動作の継続

- 5-157 si:du unu, kju:zü: si:-taL, taniN-karanu...tanumai...qfa:, to: mata unu,
それで その 給仕-を していた 他人-からの 頼まれる 子-は [間] また その
teisju-Nkanu, musumesaN-ga-du reNraku: si: buL-ba, [民 Joh-11-48]
亭主-にの 娘サン-が-ぞ 連絡-を して いるから
それでその、給仕をしていた、他人からの頼まれた子供は、さあ、またその、亭
主の、娘サンが連絡をしているから、

- 5-158 ja:-nu kubiqtä-N naka-nu jo:su: mi: bu-taL tura:, kunu panasü: kikiqti:,
家-の 壁-に 中-の 様子-を 見て いた トラ-は この 話-を 聞いて
家の壁に(くつついて)中の様子を見ていたトラは、その話を聞いて、 [民]^{xxi}

○限界に方向づけられた過程の継続

- 5-159 paLmicī-Nke: kī:-badu, ta:-Nka fusja-u turi: bu-taL piakusjo:-nu, qs-aN-gutu, duru
 畑道へ 来ると 田に 草-を 取っていた 百姓-の 知らないで 泥-Ø
 daL fusja: micī-Nke: jaL-badu, nu:ma-nu bata-N atari:, duL daL-ba sīmi:,
 垂れ(る) 草-は? 道へ 投ると 馬-の 腹-に 当たって 泥-Ø 垂れるの-(を)ば させて
 (御主が)畑道へ来る(ft.行く)と、田で草を取っていた百姓が、(御主が来たのを)知
 らないで、泥(の)垂れた(ft.泥だらけの)草(を)道へ投げて、(それが)馬の腹に当た
 って泥だらけにして(しまい)、[民]^{xxii}

また、「対象における変化が、ある時点に一挙に実現するような動作をさししめす動詞」
 の場合は、やはり、「限界到達後に対象にのこる状態の維持」が表されていることが多い。
 なお、次の例 5-160 では、<基準時点以前=過去>における<状態の維持>ではなく、「終止形
 のさしだす過去の動作と同時的である継続的な動作・状態」(須田 2005:19 下線引用者)が表
 されている²⁷。なお、上の例 5-158 も、<同時的な動作の継続>を表しているようである。

- 5-160 agaitaNdi:-ti uduruki:, muti: bu-taL izjara-si: tura-nu zju:-ja nagikisi: [民]^{xxi}
 [感]-と 驚いて 持って いた 鎌-で トラ-の 尾-は 薙ぎ切った
 あれまあと驚いて、持っていた鎌でトラの尾は(ft.を)薙ぎ切った。

2) 変化の結果の継続；主体の変化を表す限界動詞が表すアクチュアルな用法である。<基
 準時点以前=過去>において、その変化の結果の状態の継続段階にあったことが表される。

- 5-161 kanu miNna-N-ja, we: hoNto:N unu funi-nu bari:taL tukuru-nu Mta-ti: aLro:,
 あの 水納-には [間] 本当に その 舟-が 割れていたところ-の 土-と ある=よ
 あの水納には、本当にその舟が割れていた(ft.割れて沈んでいた)ところの土とい
 うのが)あるよ、[民 Kad-1-32]

- 5-162 aNsībadu Mme unu, juka:ra-u si: mata qsībara-u si:, nubasi: bi: bu-taL,
 すると もう その 横側-を して また 後ろ側-を して どのように 坐って いた
do:bucu-nu Mme-maj, {中略} Mme M:na ciri: jama-Nka-Nke: piNgi: tubī-taL-ti:.
 動物-の [Pl.]-も もう 皆 散って 山-にへ 逃げて 行った{飛んだ}と
 するともうその、横側をしてまた後ろ側をして(ft.横向きにまた後ろ向きに)、座
 っていた動物たちも、{中略}もう皆散って、山へ逃げていったそうだ。[民
 Joh-13-23]

3) 基準時点以前=過去の状態；過去の存在動詞 ataL の継続相 ari:taL によって表される、ア
 クチュアルな用法である。また例 5-164 も、具体的な動作ではなく、「看護婦だった」とい
 う主体の<過去の状態>の意味(コピュラ的な意味)を表していることから、この用法に含ま
 れる。

- 5-163 uma-N ari:-taL kabaN-ju Nda-Nke: muti: ikī-taL=ga.
 そこ-に あった、[融継] 鞆-を どこへ 持って いった=か

²⁷ この<同時的な動作・状態の継続>の意味は、「語り」の地の文でしか実現されないものである。須田 2005
 では、2-2-2 の完成相過去・連体形の<限界到達>の用法の場合と同じく(本章注 26 参照)、「語りの連体」と
 して扱われている(p19)。

5-164 ××, kanu: kaNgofu: si:-taL qfa-nu, miduMqva-tu.

[屋号] あの 看護婦-を していた 子-の 女の子-と

[屋号](の家の)、あの看護婦をしていた人の女の子(ft.娘)って。

4) 反復的な動き；<基準時点以前=過去>に繰り返された動きや習慣的な動作を表す、非アクチュアルな用法である。

5-165 kunu tujume-nu ju:bai-ba si:-taL kaNdatuja:-nu miduM:-ja tura-nu pa

この 豊見親-の 夜這い-(を)ば していた カンダトゥヤーの 女-は 寅-の 方位-Ø

urazja-Nke: Mme paLru: si: gusiN-ba ne:ri nini:, nini: buLru-Nke:-du^{xxiii}

裏座へ もう はだか?-を して 陰門-(を)ば 向けて 寝て 寝て いるの-へ-ぞ

この豊見親が(かつて)夜這いをしていたカンダトゥヤーの娘は(ft.が)、寅の方向の裏座へもうはだかで(?)陰門を向けて寝て、寝ている(ところ)へ、

2-3. 連体形のテンス・アスペクトの体系

以上、文の連体の位置において、それぞれの形式の動詞が実現するテンス・アスペクト的な意味・用法を記述してきた。そのテンス・アスペクト的な意味は次のようにまとめられる。

	(アクチュアルな用法)	(非アクチュアルな用法)
a. 完成相・連体形；	<実現する動き> <継続的な動作・状態> <基準時点における状態>	<反復的な動き> <一般的なコトガラ>
b. 完成相過去・連体形；	<実現した動き> <基準時点に関わる 以前=過去の動き> <限界に到達した動作>	<基準時点における状態> <継続的な動作>
c. 継続相・連体形；	<動作の過程の継続> <変化の結果の継続> <基準時点における状態>	<反復的な動き>
d. 継続相過去・連体形；	<動作の過程の継続> <変化の結果の継続> <基準時点における状態>	<反復的な動き>

連体の位置の動詞のテンス・アスペクト的な意味は、基本的に、文の終止の位置の動詞のそれに対応するものであると言ってよいだろう。だが、両者の間の異なる点も、いくつか明らかになっている。

まず完成相について、非過去形(a)は<基準時点以後=未来>、過去形(b)は<基準時点以前=過去>の動きを「まるごとのすがたでさしだす」(高橋他 2005:80)²⁸というテンス・アスペクトの意味をそれぞれの基本的な用法としている点は終止形動詞と同じであるが、<限界到達

²⁸ 須田 2003 はこの意味を、「全体的な事実の意味」と呼んでいる。

(動作の発生)>という動きのある段階をさしだすことはできない(b の<限界到達>はやや特殊なものである(本章注 26 参照))。だが、完成相連体形動詞は、完成相終止形動詞には見られない、<基準時点(同時)=現在>に関わる継続的な動きの意味を表すことができる。また、文の連体の位置で与えられる‘名詞を修飾する’という役割によって、b の<基準時点における状態>を表す用法は「非修飾名詞の示すコトガラ属性を表す」という非アクチュアルな意味となっている。これは、a の脱時間化の進んだ<一般的なコトガラ>の意味と共に、文の連体の位置の動詞が「動詞らしさをうしなう」ことがあることを示している(高橋 2003:269)。

継続相は、非過去形(c)、過去形(d)とも、終止の位置の動詞の用法と大きくは変わらない。ただ d は、<基準時点以前=過去の動作の継続>ではなく、基準時点と<同時的な動作の継続>という、テンス的に終止形動詞とは異なる用法も示していた。但しこれは、b の<限界到達>と同様、やや特殊な用法である。

そして、これらの形式は、次のように体系化される。

テンス アスペクト	非過去			過去
	断定形		推量形	
	同形型	異形型		
完成相	kakī ス(シ)	(mi: シ)	kakazī: セ(ム)	kakītaL シタリ
継続相	[融合形] kaki:L シアリヲリ	—	—	kaki:taL シアリヲリタリ
	[分析形] kaki: buL 〃			kaki: butaL 〃

表 18 多良間方言連体形のアスペクト・テンス体系表 (代表形 kakī「書く」)

なお、完成相非過去形の異形型は弱変化タイプの動詞にのみ現れる形式であり、脱時間化した<一般的なコトガラ>を主に表す。表 18 では mi:L(見る)に代表させた。また、推量形型は完成相非過去形にのみ現れ、<基準時点以後=未来に実現する動き>の意味を実現する。

- ⁱ 『民話』〈本格昔話〉の「嫁の乳」より(pp140-142)。ある翁が、嫁たちの心試しとして病気を装い、それを治すために子を殺して自分に乳を飲ませてほしいという話をする。親は産めないからと受諾した嫁の1人が、翁に言われた通り子を埋めるための穴を掘ると、黄金が出てきて、それを与えられるという話。
- ⁱⁱ 『民話』〈本格昔話〉の「黄金のかめ」より(pp103-105)。外に妾を作っていた夫が妻と仲直りをし、その寝床で黄金の入ったカメを見つけた話をする。その話を、妻の元へ夜這いしようと来た男が立ち聞きし、先にそのカメを探しに行くが、蜂に刺されて死んでしまうという話。
- ⁱⁱⁱ 『民話』〈本格昔話〉の「金蠅のたましい」より(pp27-29)。イリスズヤーの娘の魂をとった海の神から金蠅(魂)をだましとり、娘を生き返らせて婿入りした男の話。
- ^{iv} 『民話』〈動物昔話〉の「嵐とヤドカリ」より(p1)。ネズミとヤドカリが互いの名前を尋ね合い、その答えが本当かどうかを確かめ合うという話。
- ^v 『民話』〈笑話〉の「讒言がじゃわら」より(pp154-157)。旅人が行商の美人と遊びたいと宿の主に相談すると、扇を毎日1つずつ買えと言われる。そしてその遊んだ話を聞いた宿の主はその美人の夫に告口する。だが旅人はそれを夢の話として難を逃れ、告口した宿の主は嘘をついたとくびにされたという話。
- ^{vi} 『民話』〈本格昔話〉の「かみなりの人だめし」より(pp82-83)。雷に焼かれて死ぬことを知った若者が、運命の当日、虫のわいた母親の最後の手料理を食べ、畑を荒らしていた牛の縄を繋ぎ、焼かれるという場所へ向かうと、白ひげの老人に運命が晴れたことを告げられるという話。
- ^{vii} 『民話』〈伝説〉の「通り池とユヌタマ」より(p251)。伊良部の下地島の人が夜イカを炊いていると、伊良部島からきた子守の子が自分を家に連れて行くようせがむので、その通りにして戻って来ると、村が津波に襲われ、屋敷跡に池ができていたという話。
- ^{viii} 『民話』〈笑話〉の「墓から手」より(p171)。お墓の前で雨宿りをしていた人が墓の中から出てきた腕に掴まれて、傍にいた友人に助けを求めると、友人はこの人を見捨てて逃げてしまったという話。“友だちは鬼と思ってつき合え”という古い諺の由来となっているようである。
- ^{ix} 長浜数子 1986「口承文芸」(『沖縄民俗』24:77-101, 琉球大学民俗研究クラブ)より。原文は以下の通り。本文では、本稿の体裁に合わせて表記を改めた。
- “karikuri we:gari:kara furio:gami k'ikari:l, furio:gami k'ikari:du” (p87)
- 「あれこれすぐれてから首里王にまで(名が)知られる、首里王にまで(名が)知られて」
- ^x 『民話』〈本格昔話〉の「ハガマ被り娘の話」より(pp128-134)。継母に苛められ、香箱のくつついたハガマを被ることになった娘が、家から逃れ、王様の子にかくまわれているが、皆が集る踊りの日にハガマが割れ、その美しさが明らかとなり、王様の子の妻となる話。
- ^{xi} 『民話』〈本格昔話〉の「九十九の運」より(pp73-74)。25歳までの運命であると告げられた青年が、ユタに助けを求める。たくさんのご馳走を携えてあの世の座敷へと赴き、人々をもてなすと、運命を37歳まで延ばしてもらえることになるが、係の者が帳簿に誤って99と書いてしまい、それがそのまま認められるという話。
- ^{xii} 『民話』〈本格昔話〉の「婿とりの話」より(pp87-88)。イリスズヤーの娘に惚れこんだ青年2人が、その娘から我慢くらべで相手を決めることを提案される。結果、イリスズヤーの灯りの方を目指して、娘の顔を思い浮かべながら寒さに耐えた青年が勝利し、婿になるという話。
- ^{xiii} 『民話』〈本格昔話〉の「隠れ着物」より(pp69-72)。ウブミークンゲンという男がお化けと親しくなり、隠れ着物を借りるが、うっかり焼いてしまう。お化けたちに果し合いを迫られて逃げられなくなるが、先祖に祈りを捧げて命拾いするという話。
- ^{xiv} 『民話』〈本格昔話〉の「もの言う牛」より(pp52-53)。ある人がつながれっぱなしのやせた牛の世話をし、あげると、その牛が自分を金持ちの飼主から買い上げ、その家の太った牛と闘わせるよう頼む。やせた牛が両角に一升ますを吊り下げて向かうと、太った牛は闘わずに逃げてしまったという話。
- ^{xv} 『民話』〈本格昔話〉の「猫に食われた話」より(p47)。夜、忘れ物を取りに行かせられた男が猫に邪魔をされていけないでいると、行かせた男が来て相手をすると言うので取りに行ってみると、食われていたという話。
- ^{xvi} 『民話』〈伝説〉の「大主になったアカシャ」より(pp217-218)。多良間に漂着したイルラマモツという腕の良い大工が、仕事を頼まれて、大変に立派な家を建てたが、立派すぎる家は役人に徴収されてしまうので、わざと傷をつけた。そして首里王子自ら調査に来たが、その家の妹を見初め、やがて生まれたアカシャ(私生児)を大主の位につけたという話。
- ^{xvii} 『民話』〈伝説〉の「クールクの神」より(p204)。クールクという大変美しい女の子がいたが、これをみた青年たちが次々に倒れて死んでしまうので、やむなく殺してしまったという話。
- ^{xviii} 『民話』〈本格昔話〉の「王様に生まれ変わったお爺」より(pp79-82)。薪取りを生業とする貧しい生活をしながら、より貧しい人々へ恵んでいた、顔に人とは違った痣のある翁が、ある日、山中で嵐に遭ってそのまま死んでしまったいたので、村人たちは翁のために墓標を立て、その前を通る時は必ず手を合わせ、線香を焚いていると、やがて島の王に、翁に痣までそっくりの男の子が生まれたという話。

^{xix} 『民話』<本格昔話>の「孝行息子と竹の子」より(pp147-148)。病気の父親に竹の子をせがまれ、何日も何日も竹林でひざまついて神様に願っていると、息子の尻で温められた地面から竹の子が生えてきて、それを食べた父親の病気が治ったという話。

^{xx} 『民話』<伝説>の「雨乞祭の由来」より(pp186-189)。多良間のウペーガラユヌスが、八重山のウプシガキメーラパイに、雨乞いのニリ(唱歌)を教えてもらう代わりに娘をやる約束をする。だが気持ちが変わり娘を隠すと、メーラパイに祟られ娘を失い、自分も死んで、共に雨乞いの神としてまつられたという話。

^{xxi} 『民話』<動物昔話>の「漏り加奈志」より(pp14-15)。貧乏な兄弟がある大雨の晩に漏り加奈志は虎より怖いという話をして、それを聞いた虎が逃げていると、自分の牛だと勘違いして虎にまたがる人がいて、虎はそれを漏り加奈志だと思い必死で穴に降り落とすが、好奇心から尾を入れて確かめようとし、鎌で切られてしまうという話。

^{xxii} 『民話』<本格昔話>の「カンヌ加奈志」より(pp84-87)。唐の国で、カンヌという悪王に親を殺された百姓の兄弟が、成長して親の仇討ちを果たす話。

^{xxiii} 長浜 1986 より(本章脚注 ix 参照)。原文は以下の通り。

“kunu tujumenu ju:baiba fi:tal kandatuja:nu midum:ja turanupa uradnjaŋ3ke: mme palru:si:
guʃimba ne:ri nini:, nini:bulrunke:du”

「この豊見親がかつて夜這いをしていたカンダトゥヤーの娘が寅の方の裏座ではだかで陰門をさ
らして寝て、寝ているところに」(p85)

なお、gusiN(陰門)は平良方言語彙で、多良間方言では/pi:/と言う。また/ju:bai/という語は、「妾」というヒト名詞の意味で用いられることの方が多いようである。よってこの用例も、「豊見親の妾をしていたカンダトゥヤーの娘」というように、主体の、この場合は<基準時点(同時)における状態>の意味を表していると解することもできるが、本稿では長浜 1986 の記述に従った。

第6章 パーフェクト論

第4章の第3節において、「パーフェクト」に関するこれまでの議論を手掛かりにその考察を試みた。そして、これまでの研究の主流が、‘アスペクトとはかなりことなるものである’という認識をもちつつも、パーフェクトをアスペクト的な意味の1つとして扱い続けていることへの疑問を、須田 2003 をもとに、示した。特に多良間方言については、<パーフェクト>の意味を実現する主な形式である *si: ukī* という分析的な形が、継続相によっても形づくられる(*si: buri ukī*)、という単純で明確な理由によって、パーフェクトをアスペクトにふくみこませて捉えることをより困難にしているのである。

琉球諸方言のパーフェクトに関する研究は、現在、テンス・アスペクトに関する記述と同じく、各方言の個別言語的な研究のさらなる進展が望まれる段階にある。よって、あくまでも推測でしかないのだが、上の多良間方言におけるパーフェクトとアスペクトの扱いは他の琉球諸方言にもあてはまるだろう。第5章の冒頭でも触れたが、琉球諸方言のアスペクトに関する先行研究では、そのアスペクトは基本的に「3項対立」(沖縄本島方言は「4項対立」)を示すことが示唆され、「結果相」に相当する形式として、シテアル、あるいはシテオクに相当する形式が挙げられている(第4章注5も参照されたい)。

例えば、北琉球方言に属する奄美方言(喜界島大朝戸 *nudi ai*)、沖縄本島方言(今帰仁 *nudeN*、首里 *judeeN*)では、いずれの方言でも、西日本方言の「結果相」に相当する形式として共通語のシテアリ(シテアル)に相当する形式が現れている¹。首里方言についての記述は少ないが、奄美方言と今帰仁方言では、他動詞だけでなく、「主体の意志的な行為をあらわす」(まつもと 1982:140)自動詞によっても、このシテアル相当の形式が形づくられている²。だが、その格支配の仕方は異なっており、奄美方言が、動作の主体の明示を必ずしも必要とせず、動作の客体の「対格→主格という、ボイス的な転換に無関心」(まつもと 1982:136)であるのに対して、今帰仁方言では、「動作の主体が文のなかで明示されるのが普通」(狩俣・島袋 1989:143)とされ、動作の客体も常に対格で示されているようである。また意味の面では、「単なる結果の状態」と「準備的な動作」(奄美方言,まつもと 1982:138)、「結果」、「パーフェクト」、「痕跡」(今帰仁方言,島袋 2001:49)を表すことが、それぞれ挙げられている。(なお、奄美方言と今帰仁方言とで挙げられている「意味」が異なっているが、文法的意味の名づけの問題であり、両方言のシテアル形が異なる意味を実現しているということではない。)

また、南琉球方言に属する宮古方言(平良 *numi: aɿ*、城辺保良 *numju:kɿ*)、八重山方言(石垣 *nume:N*)について、まず宮古方言では、同島内に位置しているにも関わらず、平良方言はシテアル相当形、保良方言ではシテオク相当形、というように、それぞれ異なる形式が

¹ 琉球諸方言のパーフェクトの形式(「結果相」)について、奄美方言はまつもとひろたけ 1982、今帰仁方言は狩俣繁久・島袋幸子 1989、首里方言は上村幸雄 1963、平良方言は狩俣繁久 1997、城辺保良方言はかりまたしげひさ 2003、八重山方言は鈴木他 2000 を、それぞれ参照している。

² 但し、奄美方言の「結果相」が「*tarooniee naa ooti ai* 太郎にはもうあってある」(まつもと 1982:141 補助記号は省略)のような、1人称の動作主体をとる表現が可能であるのに対し、今帰仁方言についてはこの点への言及がない。よって本文で、両方言の動詞の制限に関してひとまとめに示していることに問題がないわけではない。

現れている。その具体的な意味や格支配の仕方に関する記述は少ないのだが、平良方言のシテアル相当の形式には、「sakinu numi: a₁「酒が飲んである」という場合、酒そのものになくなっていたり、あるいは、酒を飲んだ跡があったりする」というような、主体の動作や変化の結果にとどまらない用法」(狩俣 1997:395)が見られること、そして、保良方言のシテオク相当の形式にも、「客体結果や痕跡をあらわす」(かりまた 2003:81)用法が確認されていることから³、平良の numi: a₁ と城辺保良の numju:k₁ は、同様の文法的意味を実現する形式であると言えるだろう。また保良方言では、aminudu qfju:k₁ (雨がぞ降っておく[雨が降っている≠動作継続])という表現が可能であり、その形式をとれる動詞が他動詞に限られていない事がわかる。次に石垣方言について、その「結果相」nume:N は、「du によるとりたての形が numidu are:rī であり、補助動詞 aN がふくまれていることから、結果相の形が標準語のシテアルに相当することがわかる」(鈴木他 2001:41)。そしてその意味・用法については、「結果」、「パーフェクト」、「痕跡」の意味を実現することが挙げられている。

このように、琉球方言では、そのパーフェクトの形式が、シテアルとシテオク相当のいずれの形式を示すかということによって異なっていることがわかる。多良間方言の si: uki は共通語のシテオキ(シテオク)に相当するわけだが、上に挙げたもののなかでは、城辺の保良方言で現れている形式が、多良間方言のそれと共通している。

だが、琉球方言のパーフェクトの形式はその形態的な違いに関わらず、同様の意味・用法を実現するものであると言ってよいだろう。それは以下の点において明らかである。まず、シテアル相当形を示す平良方言と今帰仁方言では共に「主体を明示するのが普通」(狩俣 1997:395)であり、同じくシテアル系の石垣方言でも、「結果相の主語は動作の主体である」(鈴木他 2000:49)という記述から、動作主体を明示する傾向が伺えること(また、奄美方言と同じく、一人称主語をとることも十分に可能なようである)。また、シテアル相当形を示す平良方言とシテオク相当形を示す保良方言は、同様の文法的意味を実現する形式であると考えられること。そして、先の記述から明らかのように、これらの形式はその内容面において、シテアル、シテオクには対応していないこと。

以上のことをふまえ、本章では、琉球方言全体のパーフェクト研究に繋がる個別言語的な研究の1つとして、多良間方言のパーフェクトの形式 si: uki に関する記述・考察を通して、前章で示したテンス・アスペクトの体系との関わりを考察していきたい。以下では、まず、多良間方言の si: uki の格支配の仕方や意味・用法、テンスの対立の仕方などについて記述し(第1節)、<パーフェクト>の si: buL の表す意味・用法との比較を通して、si: uki の形の‘内容’を特徴づけている「中核的な時間的意味」の考察を試みていく(第2節)。そして、継続相のシテオク形の表す意味・用法の記述、考察を通して、si: buri uki の形と si: uki、si: buL との相違点を明らかにした後(第3節)、多良間方言の時間に関する文法的カテゴリーについて、第II部を通しての記述・考察によって得られた、1つの仮説を提示する(第4節)。

³ 保良方言でも、(部屋が臭いのに気づいて)「taugara: gadu sakju: numju:ky (誰かがぞ酒を飲んでおく)」(かりまた 2003 の収められている調査報告書「調査データ集」p190 より)のように、同様の表現が可能である。なお、引用用例中の「y」は[ɿ]を表している。

第1節 多良間方言のパーフェクト

1-1. 形式

多良間方言では、<パーフェクト>の意味を実現するのに、主に、si: ukī という分析的な形が用いられている。その形式は、動詞の第一中止形と補助動詞 ukī のくみあわせからなっており、形態的なテンスの対立も見られる。なお、ukī(/ ukītaL)は、その意味内容において、動作動詞「置く(,置いた)」には対応しておらず、造語成分としてのみ用いられている⁴。

(1) パーフェクト 非過去形 si: ukī 過去形 si: ukītaL

これらは、継続相(si: buL/ si: butaL)と同じくらいに文法化された形式であり、形態的にはシテオク、シテオイタに対応し、シテアル相当の形を示す北琉球方言や平良、石垣方言のパーフェクトの形式とは、異なっている。この多良間方言の si: ukī の形式を、仮に「シテオク形」と呼ぶこととしよう。但し、シテオク形には、共通語のシテオクに見られるような<意図性>あるいは<もくろみ性>は伴われておらず、その形をとることのできる動詞は制限されていない。これは例えば、aminu qfi: ukī (雨の降っておく)のような、自然現象を表す文の述語にもなりうることや、存在動詞 aL(ある)と buL(いる)が、それぞれ、ari: ukī, buri: ukī というシテオク形を形づくることのできることから明らかである(本章 1-2 参照)。また、多良間方言では、存在動詞 aL がコピュラ(繫辞)や形容詞の語形の要素ともなっていることから、名詞述語文、形容詞述語文にもこのシテオク形が存在する。なお aL は、継続相 ari:L と形態的に対立しているのだが(第5章 1-4 参照)、シテオク形の場合と同じく、名詞述語文、形容詞述語文にまでその対立の範囲は及んでいる。

また、taro:ga ki: buri ukī (太郎が来ていておく)というように、継続相(分析形のみ)によっても、このシテオク形は形づくられる。第4章第3節で考察した通り、パーフェクトは意味論的にアスペクトやテンスと区別されるものであること、そして、多良間方言のシテオク形は継続相によっても形づくられることから、本研究では、この si: ukī という<パーフェクト>の意味を表す形式を、完成相(sī:)と継続相(si: buL)と同一の形態論的カテゴリー、すなわち、アスペクトにふくめていない。

なお、シテアルに対応する si: aL も、自然談話においては全く現れない形であるため一般的な表現とは言えないが⁵、動作の客体を主語として<動きの完了とその痕跡>(本章 1-3 参照)の意味を実現する場合、許容されるようである。

1-2. 格支配の仕方と統語論的特徴

以下に示すように、多良間方言の si: ukī の形は、まず、その形をとることのできる動詞の制限がない点において、共通語のシテオクやシテアルと大きく異なっている。なお、次の例 6-2 から 6-6 には、例えば、「地面が濡れているのを見て」(例 6-2)、「父親の顔が赤いの

⁴ 動作動詞「置く」には ucīki が対応する。

⁵ 多良間方言同様、パーフェクトの形式にシテオク形が現れている城辺保良方言についても、「話者(中略)によると、テアル形「カキアい」(書いてある)は、平良方言の言い方で、保良方言ではこのいいかたをしないとのことであった」(かりまた 2003:339 下線引用者)という記述が見られる。

を見て」(例 6-3)といった、何らかの「前提」がある。

6-1 tau-gara-ga-du mado: aki: uki.

誰-やら-が-ぞ 窓-を 開けて おく

(ft.誰かが窓を開けてある)。

6-2 jubi ami-nu qfi: uki.

タベ 雨-の 降って おく

(ft.タベ雨が降っている)。<{note.≠動作の継続}

6-3 a: oto:-ja sjaki-u Nkagi: wa:ri: uki=na:.

[感] オ父-は 酒-を 召し上がり なさって おく=な

(ft.あーお父さんは酒を召し上がっているな)。<{note.≠動作の継続}

6-4 nika: uma-N-du sini: uki=na:.

猫-は そこ-に-ぞ 死んで おく=な

(ft.(あの)猫はそこ{に/で}死んでいるな)。<{note.≠変化の結果の継続}

6-5 uma-N-ja gomi-nu-du ari: uki=na.

そこ-には ゴミ-の-ぞ あって おく=な

(ft.そこにはゴミがあつたな)。

6-6 gazjaN-nu-du huri: uki=na.

蚊-の-ぞ いて おく=な

(ft.蚊がいたな)。

例 6-1 について、共通語のシテアルを述語とする文の場合、主体の動作によって変化をこうむる対象を主語とする文に言いかえることもできる(「窓ガ開ケテアル」)。だが多良間方言のシテオク形は、動作の客体を主語にとることはできない。よって、いずれの用法においても、シテオク形を述語とする文において主語となるのは‘動き’の主体であり、それは常に、明示されるか文脈によって示されるかしている。そして、主体の動作によって対象に変化をもたらす動作を表す動詞のシテオク形を述語とする文では、その変化をこうむる対象=客体は、必ず対格形式をとって現れる。

また、主に‘変化’を表す動詞のシテオク形を述語とする文では、表現主体にとって、その変化したモノゴトが明らかであるか否かによって、係助辞-du(ぞ)が文中でとりたてる要素が異なってくる。例えば、上の例 6-4 のように、変化にかかわる場所を表す補語がとりたてられている文では、表現主体が、<基準時点以前=過去>に「猫」が実際に死にかけている様を見るなどして、「猫」を特定=個別化していることが含意されているという。これに対し、次の変化の主体である「猫」が係助辞-du によってとりたてられている文では(例 6-7)、表現主体にとってその「猫」は特定のものではない、ということが含意された表現となる⁶。(但し、「個別化」に対する「一般化」を意味するものではない。) また当然のことながら、こ

⁶ この例 6-7 では、「猫が・死ぬ」というデキゴトが、「そこ」に残された何らかの「痕跡」を根拠として判断されていることも含意されている。本章 2-4 で述べることだが、具体的な状態の変化を表す動詞の si: uki の形は、「メノマエ」のデキゴトを表す場合、変化のシテそのものの基準時点(=発話時)における状態を、先行するデキゴトの「結果」として捉えることができない。よって、例 6-7 では、<動作・変化の完了とその変化の結果の継続>ではなく、<動きの完了とその痕跡>のパーフェクト的な意味が表されていると捉えられる。

のような個別化の問題には、共通語のガ格に一部対応する ga 格あるいは nu 格と、係助辞ハに対応する -ja との対立も大きく影響しているだろう。つまり、多良間方言の文の「情報伝達のはたらき」(高橋他 2005:19)には、この -ga, -nu と -ja という形式の使いわけと、係助辞 -du のとりたてが関わりあっていることが考えられるが、本研究の主題からはずれるため、これ以上の考察は行わない。

6-7 nika-nu-du uma-N s̄ini: uk̄i=na:.

猫-の-ぞ そこ-に 死んで おく=な

(ft.猫が、そこ{に/で}死んでいるな)。{note. ≠変化の結果の継続}

1-3. 意味・用法

以下、多良間方言の si: uk̄i という形の示す具体的な意味・用法を記述していく。なおここでは、その基本的な意味を明らかにするために、文の終止に位置する動詞を対象とする。

1) 動作・変化の完了とその変化の結果の継続；以下単に<完了と結果の継続>。<基準時点以前>の動作(・変化)の成立と、その動作によって対象にもたらされた何らかの変化、あるいは主体の変化が、基準時点にまで影響を及ぼしていることを表す用法である。第4章で示した通り、<先行の時間的段階(=完成性)>、すなわち、「変化をもたらす動作」あるいは「変化」をも捉えている点において、継続相の<変化の結果の継続>の意味とは異なる。主に、対象に何らかの変化をもたらす動作、あるいは主体の変化を表す動詞によって、この用法は実現される。ここでは、基準時点を波線、変化の主体及び変化をこうむる客体を二重線で示す。

○対象に変化をもたらす動作

6-8 a, we: upugi:-gama-na-nu munu:-du aNsi: ju:cu-Nke: bari: jak̄i uk̄i=do: ure:.

[感][間] 大きい-[指小]-な-の もの-を-ぞ そのように 4つへ 割って 焼いて おく=よ それ-は

あら、大きなものを{note.じゃが芋のこと}、そのように4つに割って(ft.切って) 焼いておくよ(ft.焼いてあるよ)、それは。 [Oj-b-8-B3]

6-9 uL-nu itu: nara-ga oba:-ja aM uk̄i-ti:, unu niNgjo:=ju.

それ-の 糸-を 自分-が おば-は 編んで おく-と その 人形-を=?よ

その糸を、自分(ft.その子)のおばあさんは編んでおく(ft.編んである)って。その人形(を)よ。{note.発話者の持っている人形と同じものを、「その子」はおばあさんに編んでもらったことがあるという話から}

6-10 “ma:Nti:, nara: unu tama-uba: numi:-du uk̄i, nama pak̄idiqzi:”-ti si: pak̄idiqte:.

本当に 自分-は その 玉-をば 飲んで-ぞ おく 今 吐き出すから-として 吐き出して 「確かに、自分(ft.私)はその玉を飲んでおく(ft.飲んでいる)、今吐き出すから」として吐き出して、[民]ⁱ

○主体の変化

6-11 to:to:, unu qfa-gama: nagasjai: k̄i:-ba, cuNdara:sja, i:ku-gama-ga-jara-du.

トウトウ その 子-[指小]-は 流されて 来るから 可哀想に 乞食{飯乞い}-[指小]-か-やら-ぞ

nari: uk̄i gumata, si:du Mme mainaNka:, kawaiso:-ti:, {中略} unu qfa-gama-N なんて おく [強い推量] それで もう マイナン(家)-には 可哀想-と その 子-[指小]-に

fa:si:-ja wa:Lwa:L, [民 Joh-19-注 3,24]

食わせては なさりなさり

トウトウ、その子供は流されてきて{note.島流しになったということ}、可哀想に、物乞いかなんか(に)なっておく(の)だろう(ft.なっていたのだろう)、それでもうマイナン家では可哀想と、その子供に(芋などを)食べさせなさっていて、

6-12 ~e: sīcīpunaka-u sī-na-ti: ma, ma:L-taL-ga ma:-du, kunu pītō: sīni: ukī

[間] スツウプナカ-を する-な-と [言淀] 回った-が ため-Ø-ぞ この 人-は 死んで おく

-ti:nu kutu-kara aNsi: nama-mai, taramazīma-N-ja, sīma M:na ubuna:Ltui,

-との こと-から そのように 今も 多良間島-に-は 島 皆 集まって

sīcīpunaka-uba:, seidaiN si: buL sīdai-desu. [民 Noz-1-13~14]

スツウプナカ-をば 盛大に して いる 次第-デス

スツウプナカをするなど、回ったため、この人は死んでおく(ft.死んでいる)ということから、そのように今でも、多良間島では、島全体(で)集まって、スツウプナカを、盛大にしている次第デス。

6-13 B. tuLdui.ʔ hacizju:go:-nu tuLdui-u mukae wa:ri: ukī=sa:. ar-aN, Mme.

酉年 85-の 酉年-を 迎エ なさって おく=さ [COP]-否 もう

酉年?(じゃあハルおばさんはもう)85(歳)の酉年を迎えなさっておく(ft.迎えな~~さ~~っている)よね。ちがう?

A. N:N. Nna, nama-kara=sja:mi:. [Oj-a-6-B2~A2]

[感] [間] 今-から=さ

ううん。今からだよ。

既に述べたように、多良間方言の si: ukī は基本的に<動作主体の意図性=もくろみ性>は擦り切れているのだが、以下に示す用例では、「その実現による結果や効果をみこして、動作をおこなうという目的志向性の意味」(須田 2002:51)、すなわち、<準備的な動作>の意味が表されていると言える。これらは、意図性=もくろみ性との関連では出発点的な意味に近いといえるかもしれないが、現在の多良間方言の用法の広がりの中で見るならば、それぞれ、「今日は家を建てるから」という条件節(例 6-14)、zjuNbi-u sī:, sīko:L(準備(を)する)という動詞の語彙的な意味(例 6-15)によってもたらされた、<完了と結果の継続>からの派生的な用法と位置づけられるだろう。いずれの用例でも、発話時以後=未来に設定された基準時点(「家を建てる」・「お昼」)において、それ以前に動作(「印を付ける」・「祝いの準備をする」)が行なわれることと、その動作によってもたらされた何らかの変化の結果の状態(「木に印が付けられている」・「祝いの準備がされている」)にあることが表されている。

6-14 “zju:zju: be:ta: kju:-ja ja:ma-Nke: idi:, ja: fukaqzi-ba, Nna: ki:-ju,

[感] 私たち in.-は 今日-は 山-へ 出て 家-Ø 建てる{葺く}から [間] 木-を

paN-ba cīki: ukī”-ti:, [民 Isg-2-7]

判-(を)ば つけて おく-と

「さあさあ、私たちは今日は山へ出て、家(を)建てるから、木を、印を付けておく(ft.印を付けよう)」と、

- 6-15 A; oto:-ja idi:, sjaNtiki-game:, nakasjarabaru:, sjaqvīragiqti kuqzi-ba, ja:nuMma:,
 お父-は 出で お昼-までは ナカシヤラ畑-を 草刈りして くるから 本妻{家の母}
 kunu, be:ta-ga, nanatugamikami-Nkanu, kunu, nu:-ti i:, mugü: ciki:, nasigaĩ-ga
 この 私たち in.-が 七斗甕-にの この 何-と 言う 麦-を 搗いて 出産-が
 jo:i-nu, zjuNbi-u si: uki=jo:.
 祝い-の 準備-を して おけ=よ
 お父は出で、お昼までは、ナカシヤラ畑を、(へラで草を)刈りに行ってくるから、
 ヤーヌンマ、(あなたは)この私達の七斗甕に、何と言う、麦を搗いて、出産のお
 祝いの準備をしておきなさいよ。
 B; o:, siko:ri ukaqzi:. [狂言]
 [感] 準備して おこう
 はい、準備しておきます。

なお、例 6-15 では、シテオク形動詞が命令形の形をとって現れているが、多良間方言のシテオク形動詞の全てが、この命令形の形をとれるわけではない。また、これは、<準備的な動作>と、次に示す<放任の状態>の意味を実現している場合に限られた現象であろう。このような<動作主体の意図性=もくろみ性>は、通時的、すなわち、多良間方言の si: uki の形が、北琉球方言などに現れるシテアル相当の形が示す文法的な意味を、獲得していく途中の段階においては、共通語のシテオクと同じく、「パーフェクト性」と対等に張り合っているような文法的意味の1つであっただろう。だが、共時的には、si: uki の形に現れる<もくろみ性>は周辺のものとし扱えず、よって例 6-15 についても、その動詞の現れ方は、派生的な意味を実現する場合の特別なものであると言わざるをえない。

また、「対象にはたらきかけないで、そのままの状態を持続させること」(高橋他 2005:105)、つまり、<放任の状態>(例 6-17 では<非放任>)を表している用例も、わずかだが見られた。これらもやはり、動詞の語彙的な意味などからもたらされた、<完了と結果の継続>からの派生的な用法とみてよいだろう

- 6-16 ~ hai, Nnazju:-mai, muqtu sjur-aN, gaba nasi: uciki uki. [Oj-b-3-B4]
 [感] 葦-も 全く 刈らない 古く なして 置いて おく
 ねえ、葦も全然刈らない(ft.収穫しないで)、古くさせて置いておく(ft.置いてある)。
 6-17 piNda-nu Mni-nu, ki: Mme: a:-u, fe: arasi: buL-ba, “kunu Nzja:-uba
 山羊-の 群れ-の 来て もう 粟-を 食い 荒らして いるので この 野郎-をば
jurusi: uk-aN”-ti:, we: iki-badu, [民 Noz-1-6]
 許して おけない-と 追って いくと
 山羊の群れが、来てもう粟を食い荒らしているので、「この野郎(共)は許しておけない」と、追っていくと、

2) 動きの完了とその痕跡; 以下単に<完了と痕跡>。基準時点には既に存在している「痕跡」に関わる動きが、<基準時点以前>に成立していることを表す用法である。この「痕跡」は、広い意味での「(変化の)結果」に含まれるものであろうが、この用法では、それは必ずし

も、先行する動作・変化によって必然的に生じるものではない点において、1)の<完了と結果の継続>とは異なるものと捉えられる。またこの意味は、対象に変化をもたらす動作や主体の変化を示す動詞だけでなく、主体の動作や存在を表す動詞などによっても、実現される。但し、1人称主語を動きの主体にとることはできない。なお、第三者を主体とし、かつその「痕跡」が動きから必然的にもたらされたものではない場合、「痕跡」から判断されたコトガラを述べる、推量的なニュアンスを伴う表現となる(例 6-2 から 6-6 も参照)⁷。ここでは、「痕跡」を太線で示す。

6-18 jarabi-nu-du paL-Nka-u mata aLki: ukī.

童-の-ぞ 畑-に-を また 歩いて おく

子供がまた畑を歩いておく(ft.歩いている)。{note.「畑に子供の足跡があるのをみて」という前提}

6-19 unu, suzume:, tubagari: ki: unu, na:-ga mugū: ucuki: bu-taL tukuru-N

その 雀-は 飛んで 来て その 自分-が 麦-を 置いて いた 所-に

bi:qti:, Mme, unu cibu, cibu-Nka: imi:qcja-nu ami-gama-nu furi: ukī=sa: Mme:.

坐って もう その [?] [?]-には 少し-の 雨-[指小]-の 降っておく=さ もう

unu mugū-nu Mme-u bisi:, izi: ukī-taL isi-nu ana-gama-Nka, kauzū: uzuma:L

その 麦-の [Pl.]-を 据えて 入れて おいた 石-の 穴-[指小]-に 麴-を 埋めている

e: mugū: uzuma:riti Mme, ko:zī-N nari:, uL-Nke: mizi-gama-nu tamari:L.

[間] 麦-を 埋めていて もう 麴-に なって それ-に 水-[指小]-の 溜まっている

その雀は飛んで来て、自分が麦を置いていた所にとまって、その[?]にちょっと雨が降っておくさ(ft.降っているよ)⁸。(それで)その麦なんかを入れておいた石の穴に麴を埋めて、えー麦を埋めていて、麴になって、それに水が溜まっている(ft.溜まっていた)。[民 Joh-2-8~9]

6-20 aLtukī, gakumuNcju:-N, bi:dai-N, cuki-nu munu-ga-jara. aka:aka mamari: ukī=sja:.

ある時 学問中-に 椅子{坐台}-に 月-の もの-か-やら 赤く 付いて おく=さ

ある時、学問(ft.勉強)中に、(その人の)椅子に、月のもの(だろう)か、赤く付いておく(ft.付いていた)よ。[民]ⁱⁱ

3) 経歴・記録; 以前=過去におこなわれた動きを、経歴・記録(「ただ、過去における事実」(須田 2003:73))として差しだす用法である。いずれの動詞によっても表される用法で、また、多くの場合、シテオク形の動詞によって示される動きは、その他のデキゴト(動き)の「前提」となっている。ここでは、その他のデキゴト(動き)を二重線で示す。

6-21 aNti: kaL-u: hacumei-ba si: wa:L-taL pīto:, jana munu:-du hacumei-ba si: ukī-ti

それで あれ-を 発明-(を)ば し なさった 人-は 嫌な もの-を-ぞ 発明-(を)ば して おく-と

kubi-N nasjari: wa:L-taL-ti:. [民 Joh-2-19]

首-に なされ なさった-と

それであれ{note.酒のこと}を発明しなされた人は、嫌なもの(ft.良くないもの)を発

⁷ この場合、<疑い>の意味を表す終助辞-na:などが伴われやすいようである。なお、本文で挙げている用例では、終助辞-na:の有無による文の意味の違いは生じない。

⁸ 『民話』でこの部分は、「そして後から小雨が降ったらしいので」(p11)のように推量形で意識されている。

明をしておく(ft.発明している)と首にされなさったそうだ。

- 6-22 ~ma:L-taL-ga ma:-du, kunu pīto: sīni: ukī-ti:nu kutu-kara aNsi: nama-mai,
 回った-が ため-Ø-係 この 人-は 死んで おく-との こと-から そのように 今-も
 taramazīma-N-ja, sīma M:na ubuna:Ltui, sīciūpunaka-uba:, seidaiN si: buL
 多良間島-には 島 皆-Ø 集まって スツウプナカ-をば 盛大-に して いる
sīdai-desu. [民 Noz-1-13~14]
 次第-デス

(~と)回ったため、この人は死んでおく(ft.死んでいる)ということから、今でも、多良間島では島全体(で)集まって、スツウプナカを盛大にしている次第デス。

- 6-23 B; kiteta.↗

来テタ

(あなたのお父さんは生年祝いに)来テタ? {note. 多良間では生まれ年ごとに、同窓会も兼ねた生年祝いが行なわれる。}

(R; 来テマシタ.(私と)入レ替ワリデ.)

{中略}

A; M:na gaqko:-ja kuma-N Ndi ukī=sjami:. [Oj-d-25-B8~A5]

皆 学校-は ここ-に 出て おく=でしょう

皆学校はここで出ておく(ft.出ている)でしょ。{note.R の父親とその兄弟たちについて話されている}

- 6-24 aL fuziN-nu ki:, unu pītu-nu takucinaN-N-du idu-nu ari: ukī=sa:, uma-N
 ある 婦人-の 来て その 人-の 宅地内-に-ぞ 井戸-の あって おく=さ そこ-に
sjeNtaku: si:-ja buLbuL mi:-ja mi:-N fuziN-nu=ju.↗ [民 Joh-4-8]

洗濯-を して-は をりをり 見て-は みない 婦人-の=よ

ある婦人(ft.女性)が来て、その人(ft.男)の宅地内に(は)井戸があつておく(ft.あつた)よ、そこで洗濯をしたりしている、見てみない(ft.見たことのない)婦人がね。

また、この用法では、他のデキゴトの「前提」としてシテオク形の動詞によって表されているデキゴトそれ自体が、何らかの「前提」を持っていると捉えることができるだろう。すなわち、具体的なモノとして言語外に存在している‘記録’や、表現主体(物語の登場人物)の‘記憶’などである。これらの「前提」の存在は普通、顕在化されず、言語的に表されることもほとんどないのだが、以下に示すように、具体的な「記録」の存在を「前提=根拠」として、以前=過去におこなわれた‘動き’を、「過去における事実」として差しだしていることが明らかな用例も見られる。

- 6-25 jarabisja:L ke: kunu pīto: to:kjo:-N-du buri: ukī.

童の[Adj.] 間頃 この 人-は 東京-に-ぞ いて おく

子供の頃この人は東京にいておく(ft.いた)。{note.「履歴書を見て」という前提}

これに対し、「語り」の地の文では、シテオク形の動詞の示している動きが、基準時点となるデキゴトに至るまでの、単なる流れの1つとして示されている場合がある。このとき、シテオク形の動詞の表す動きと、他の動きとの間に見られた「非時間的な関係」性は薄れて

おり、単に、以前=過去のデキゴトが差しだされているにすぎないと捉えられる。上の例 6-25 が、2)の<完了と痕跡>の用法に接する一方の極にあるとすれば、以下に示す用例は、その反対側の極に位置するものと言えるだろう。

- 6-26 aL ba:-N-ja, sīgutu-Nke:-du kunu bikiduM-ja iki: buriqti:, ja:-Nke: Mme
ある 場合-に-は 仕事-へ-ぞ この 男-は 行っ て いて 家-へ もう
cja:-mai nuM gohaN-mai siki-tu Mme ja:-Nke: kaeri ki: uki=sa. daidokoro
茶-も 飲む ご飯-も 召し上がる-と もう 家-へ 帰り 来て おく=さ 台所
-Nka-u fuziN-nu, Mme aNsi: kicigi miduM-nu, gohaN-nu zjuNbi-du site:
-に-を 婦人-の もう そのように 綺麗な 女-の ご飯-の 準備-Ø-ぞ シテ
pataraki: buL-ga jau=sja:mi. [民 Joh-4-12~13]
働いて いる-が 様=さ
ある時、仕事へこの男は行っていて、家へ、お茶を飲む、ご飯も召し上がると、
家へ帰ってきておく(ft.帰ってきた)よ。(すると)台所で綺麗な女(の人)が、ご飯の
準備をシテ、働いている(ft.働いていた)ようだよ。
- 6-27 jagati jakuniN-nu Mme-nu ki: uki. kuL-ga-du, kanu tukī-nu sjurio:-nu qfa-ti:,
やがて 役人-の [Pl.]の 来て おく これ-が-ぞ あの 時-の 首里王-の 子-と
naminami-nu pīto: ari: uk-aN, wa:riqti:-du, kunu ja:-nu jumi-nu, aparagi
並々-の 人-Ø-は [COP] おかない いらっしゃって-ぞ この 家-の 嫁-の 美しい
miduM-ba si: kuL-N puri: uki-gi munu. asjugadu, “kure: ba-ga bunaL ari:,
女-(を)ば して これ-に 惚れて おく-気 もの だけど これは 私が 姉 or 妹-Ø [COP]
jui wa:ri”-ti:nu ba:ju si:, Mme ja:-nu turisirabe-mai sju-N, tubi-taL-ti:. [民]ⁱⁱⁱ
貰い なされ-との 場合-を して もう 家-の 取調べ-も しない 行った{飛んだ}-と
やがて役人たちが来ておく(ft.来た)。これが、あの時の首里王の子供と(いう)、並
の人ではなくて、(その人が)いらっしゃって、この家の嫁が美しい女で、この人
に惚れておくらしい(ft.惚れたらしい)。だけど、(この家の主が)「この人は私の妹
だから、貰いなさって下さい」ということをして(ft.~と言ったので)、(役人たちは)
もう家の取調べもしない(で)、行った(ft.帰った)そうだ。

以上、多良間方言の si: uki の形の意味・用法を記述してきた。ここまでに示してきた3つの用法が、いずれも、「基準時点に先行しておこった出来事をあらわす」(須田 2003:71)というパーフェクトの規定に適うものであることから、この si: uki の形は、「パーフェクトの意味を実現するための形式である」と言って良いだろう。また、須田 2003 では、パーフェクトに<先行性>と<事実性>という2つのパーフェクト的な意味を認めているが(本稿第4章 3-1 参照)、多良間方言でも、1)の<完了と結果の継続>の意味が<先行性>に、3)の<経歴・記録>の意味が<事実性>にそれぞれ相当している⁹。

また、2)の<完了と痕跡>の意味について、この意味も1)と同じく、<先行性>に相当するものであると考えられる。だが、この用法における「痕跡」と、3)の、「具体的なモノとして

⁹ また工藤 1995 でも、須田 2003 のいう<事実性>の意味、あるいは本稿での<経歴・記録>の意味に関して、「単純に過去の事実を提示・記述するのではなく、(中略)判断あるいは意見の理由・根拠を説明する過去の出来事を取り出している」のように説明されている(p116)。

言語外に存在している‘記録’や、表現主体(物語の登場人物)の‘記憶’とを等価のものとして捉えるならば、2)の<完了と痕跡>(但し、第三者を‘動き’の主体とする場合)と3)の<経歴・記録>には、何らかの「前提」から判断された以前=過去のデキゴトが、シテオク形の動詞によって差しだされているという共通性が現れてくる。すなわち、<完了と痕跡>の意味は、「(変化)の結果」と「前提」、あるいは<先行性>と<事実性>という、二面的なパーフェクト的な意味が表される用法であるということである。

そしてそれは、多良間方言の si: uki の形が実現する3つのパーフェクト的な意味、<完了と結果の継続>、<完了と痕跡>、<経歴・記録>の、連続性を示すものと言えるだろう。基準時点との関わり方の度合いは右にいくほど薄くなり、3)<経歴・記録>における<完了と痕跡>の「反対側の極」、つまり、最も右側に位置すると考えられる上の例 6-26,27 では、そのシテオク形の動詞が表している文法的意味は、完成相・過去形によって表される<(基準時点以前=過去における)全体的なデキゴトの意味>と、ほとんど差がなくなってしまう¹⁰(但し、その出現は文体的に限られており、「語り」の地の文においてのみ現われる)。すなわち、多良間方言のパーフェクトでは、基準時点との関わり方の度合いによって、大きく3つの個別的な意味が区別される。そしてその最も基本的なものは、<動作・変化の完了とその変化の結果の継続>の意味を表す用法である。

1-4. シテオク形のテンスの対立

ここで、シテオク形のテンス対立についても見ておこう。多良間方言のシテオク形にも形態的なテンスの対立は見られており(本章 1-1 参照)、その過去形も非過去形と同じく、<動作・変化の完了とその変化の結果の継続>、<動きの完了とその痕跡>、<経歴・記録>という3つのパーフェクト的な意味を表す用法を示している。

6-28 ~ pari: wa:L-ke: nu:-N Mme, mizigumuL-nu mai-gami, Mme usi urusi:

走り なさるまでに 何-に? もう 水溜り-の 前-まで もう 押し 下ろして

uki-taL-gi munu=sja:. [民]^{iv}

おいた-気 もの=さ

(母親が)走りなさる(ft.走って来なさる)までに(か)何(か)に、もう、(カッジャンガペーたちは宇増呂を、井戸の)水溜りの前(ft.所)まで押し下ろしておいた(ft.押し下ろしていた)らしいよ。

6-29 aNna-ga-du suika-u kisi: wa:ri: uki-taL.

母-が-ぞ スイカ-を 切り なさって おいた

お母さんがスイカを切りなさっておいた(ft.切りなさってあった)。{note.「切ったスイカが置いてあったのを思い出して」という前提}

6-30 aNsi:-du, rakusju: i:zi: uki-taL-ti:. kunu tauke:-ga=ju. {中略} ~ Mme, Mme:

そして-ぞ 落書-を 入れて おいた-と この 1人-が=よ もう もう

sugu, kure ta:-ga-ga kaNsi:nu, si:gutu:-game: si: uki gumata=ga-ti: M:na

すぐ これは 誰-が-か あのような 仕事-を-[強意]-は して おく [強い推量]=か-と 皆

¹⁰ 後に見ていくように、多良間方言のシテオク形からは、<完了=以前性>という中核的な時間的意味が取り出される。<経歴・記録>の用法に見られるこのような用例は、基準時点との関わりが薄いために、その<完了=以前性>が前面に出てきたことによるものと考えられる(本章 2-3)。

Mme sjawagiNki:, [民 Joh-19-9,12]

もう 騒ぎ立てて

そして、落書を入れておいたそうだ。この1人がね。

(それで)もう、すぐこれは誰があのような、仕事をしておくか(ft しているのか)と、皆もう騒ぎ立てて、

だがその対立は、si:(する)–sitaL(した)のようなアスペクトにおけるテンスの対立と比べると、非常に曖昧である。例えば、以下の例 6-31 や 6-32 では、kanagai(昔)という<過去>の時間の状況語や、基準時点となるデキゴトを表す動詞が過去形で現れているにもかかわらず、非過去形のシテオク形の動詞が用いられている。また、上に示した例 6-29 も、インフォーマントによると、非過去形によっても言い表すことができるという。

すなわち、多良間方言のシテオク形では、そのテンスの対立は形態上のものにすぎず、内容的には失われてしまっている(あるいは失われつつある)と考えられる。

6-31 kanagai, tai-ju uki:-nu fuziN-nu-du sīni-taL-cī:-badu, dabi-u sumasi: ukī.

昔 胎-を受けて-の 婦人-の-ぞ 死んだ-[引・推]-ので 茶毘-を 済ませて おく

昔、胎を受けての(ft.妊娠している)婦人が死んだそうで、茶毘を済ませておく(ft.済ませた)。[民 Joh-14-1]

6-32 bikiduMke: unu aida-ja Mme. usī-nu cīno: aNsi: ukī-ti:-ja ĭza-dataM

夫{男}-へ その 間-は もう 牛-の 角-は そのようにして おく-と-は 言わなかった

-cī:-ba=ju:. {中略} usī-nu cīnu-ti:-ja, kure: kuNsi: takara-na munu, qvi-taka:

-[引・推]-のでよ 牛-の 角-と-は これ-は このように 宝-な もの 売ったら

taka-dai munu-ti:-ga-jara ume: ukī=sja:. [民]^v

高-代 もの-と-か-やら 思って おく=さ

夫へその間はもう、牛の角をそのようにしておく(ft.そのようにしてある)とは言わなかったらしいからね。牛の角とは、これはこのような宝物、売ったら高(い)代(ft.値段になる)物とか思っておく(ft.思っていた)よ。

第2節 シテオク形の中核的な時間的意味

前節では、多良間方言の si: ukī 形が実現している個別的な意味とテンスの対立について記述し、シテオク形が、パーフェクト的な意味を実現するための形式であること、また、そのテンスの対立が内容的には失われていることが明らかになった。これらのことを踏まえ、本節では、<パーフェクト>の si: buL との比較を通して、si: ukī の形の「内容」を特徴づけている「中核的な時間的な意味」の考察を試みていく。

2-1. パーフェクト的な意味を表す si: buL

第4章、第5章で述べたように、多良間方言の継続相である si: buL の形にも、共通語のシテイルと同様、パーフェクト的な意味を表す用法が見られる。そして以下に示すように、<パーフェクト>の si: buL は、1-3 で示した si: ukī が示している3つの意味のいずれをも、

表すことができる。

○動作・変化の完了とその変化の結果の継続

6-33 harucjaN-ga ke:ti buL.¹¹ ure: uma ka:sĩ. [Kij-b-16-B5]

ハルちゃん-が 買っ ている それ-は 美味しい 菓子

ハルちゃんが買っている。それはおいしいお菓子。

6-34 unu bikiduM-ja, “nusĩtai-ga, Nda-Nke: tubi:L=ga”-ti, du:-ga

その 男-は どうして-か どこ-へ 行っている {飛んでいる}=か-と 自分-が

ujaMma-Nke: panasĩ-badu, [民 Kam-2-6]

両親 {親母}-へ 話すと

その男(ft.夫)は、「(妻は) どうして、どこへ、行っているか」と、自分の両親へ話すと(ft.尋ねると)、

○動き¹²の完了とその痕跡

6-35 agai, sībīdaru-nu, upuganu sjaniusi-nu-du uma-N, niNsuke:L si:qte: tubi:L-ga

[感] [屋号]-の 大きな 種牛-の-ぞ そこ-に 寝転がる して 行っている

jau=jo:. [狂言]

{飛んでいる}-が 様=よ

ああ、スィブイダル家の、大きな種牛が、そこで、寝転がって行っているようだ。

{note.「そこ」に、牛が寝ていたような跡があるということ}

6-36 taro:-ja paL-Nke:-du iki:-taL=na:.

太郎-は 畑-へ-ぞ 行っていた=な

太郎は畑へ行っていた(んだ)な。{note.「野菜がとってきてあるのを見て」という前提}

○経歴・記録

6-37 C; aidia-u Ndasĩ-taL pĩtu sĩni: wa:ri:L.

アイディア-を 出した 人-Ø 死に なさっている

(その本の)アイディアを出した人(は)死になさっている。

B; tau.

誰-Ø

A; taro:saN. haqko:bi-ni sĩni:. [Sim-a-1-C1~A2]

太郎さん 発行日-に 死んだ

6-38 ~ki:-nu pĩtu-mutu-si:, ja:-nu pĩtu-kiqbuL buN atui, uNsi: ja:-u tatirai-taL,

木-の 1本-で 家-の 1-[家の助数詞] 分 あって そのように 家-を 建てられた

-ti:nu kutu-kara: si:, unu ja:-uba: upukija:-ti ĩ:-ti:nu panasĩ-nu, nama-game,

-との こと-から して その 家-をば 大木家-と 言う-との 話-の 今-まで

e: cutairai buL. [民 Noz-2-14~15]

[間] 伝えられて いる

(その)木の1本で、家の(その)1本(の木)で家が1軒建てられたということから、

¹¹ 第2中止形と-buLとが組みあわさって、継続相を形づくっている例である。恐らく共通語からの類推によって生じた比較的新しい形式であり、老年層ではあまり用いられていない。

¹² なお<パーフェクト>の si: buL のこの用法は、si: uki に比べて用例が少ない。よって si: uki の場合と同じく「動き」としてよいのか検討を要するが、便宜的に同じ名づけを行なっている。

その家を大木家と言うという話が、今まで、伝えられている。

この他、si: buL には、「始発の局面が基準時間より前に成立したことで、基準時間において動作の局面のなかにあること」を表す用法も見られる(高橋他 2005:89)。これは、主体の動作を表す動詞によって表されるパーフェクト的な意味の1つであり、須田 2003 の<先行性>に含まれるだろう。si: ukī の形は、このパーフェクト的な意味を表すことはできない。

6-39 oto:-ja ju:ī Nkagi-kacje:N sjaki-u Mme numi: wa:ri:L.

お父-は 夕飯-Ø 召し上がり-ながら 酒-を もう 飲み なさっている

ここで、ここまでに記述してきた si: ukī と<パーフェクト>の si: buL, それぞれの形式が表す意味・用法をまとめると以下ようになる。

	a. シテオク形(si: ukī)	b. パーフェクトの si: buL
先行性	<動作・変化の完了とその変化の結果の継続>	<動作の開始とその過程の継続>
	<動きの完了とその痕跡>	<動作・変化の完了とその変化の結果の継続>
	<経歴・記録> (<以前=過去のデキゴト>)	<動きの完了とその痕跡>
事実性		<経歴・記録>

表 19 多良間方言パーフェクトの形式の意味・用法

これら、パーフェクト的な意味を表す2種の形式で最も異なっている点は、si: ukī の形が、<動作の開始とその過程の継続>の意味を表す用法を持たないことである。これは恐らく、以下で考察するように、それぞれの形式の「中核的な時間的意味」が異なっていることによるだろう。また、シテオク形では、<準備的な動作>と<放任の状態>を表す用法も現れているが、これらはいずれも、条件節やその動詞の語彙的な意味などによってもたらされる、<動作・変化の完了とその変化の結果の継続>からの派生的な用法である。

2-2. パーフェクト的な意味の区別

表 19 で示したように、多良間方言の si: ukī の形は3つの連続的なパーフェクト的な意味を表す用法を示している。ここで、それぞれの意味の違いについて明らかにしておこう。

2-2-1 <動きの完了とその痕跡>と<経歴・記録>

変化を表す動詞のシテオク形を述語とする文では、表現主体にとってその変化したモノゴトが明らかであるか否かによって、係助辞-du(ぞ)が文中でとりたてる要素が異なっている。この、表現主体の‘認識’に関わる-du の位置の違いが、<完了と痕跡>と<経歴・記録>の意味を区別する手掛かりの1つとなっている。例えば、変化にかかわる場所などを表す補語がとりたてられている場合、表現主体は、変化の主体を特定=個別化しているのに対し(例 6-40)、変化の主体を表す名詞(主語)がとりたてられている場合は、表現主体にとってそれ

は、特定のものではないということが(例 6-41)、それぞれ含意された表現となる。

6-40 nika: uma-N-du sini: uki=na:. (=例 6-4)

猫-は そこ-に-ぞ 死んで おく=な

(ft. (あの)猫はそこ{に/で}死んでいるな)。

6-41 nika-nu-du uma-N sini: uki=na:. (=例 6-7)

猫-の-ぞ そこ-に 死んで おく=な

(ft.猫が、そこ{に/で}死んでいるな)。

例 6-40 について、「死ぬ」主体である「猫」を特定=個別化しているということは、つまり、表現主体は、「猫が・死ぬ」というデキゴトが起こった(あるいは起こる)こと自体を知っているということである。よって、たとえ「血の跡を見て」というような「前提」を伴っていたとしても、表現主体の「記憶」を根拠とする、<経歴・記録>に近い意味が表されていると言える。これに対し例 6-41 では、表現主体は、「猫が・死ぬ」というデキゴトを、「そこ」に残された何らかの「痕跡」を根拠として判断していることが含意されている。よって、この用例では、<完了と痕跡>に近い意味が表されていると言えるだろう。

2-2-2 <動作・変化の完了とその変化の結果の継続>と<動きの完了とその痕跡>

<完了と結果の継続>の意味は、対象に何らかの変化をもたらす動作、あるいは主体の変化を表す動詞によって実現される用法である。そしてその「(変化の)結果」は、それぞれの動詞が表す動作・変化から必然的に生じるものであり、この点において、「痕跡」とは大きく異なっている。これは極端に言うと、例えば、以下の2例のような全く同一の文でも、その「前提」が、「窓を・開ける」というデキゴトから必然的にもたらされるものか否かによって、表されるパーフェクトの意味が異なってくるということである。

6-42 tau-gara-ga-du mado: aki: uki.

誰-やら-が-ぞ 窓-を 開けて おく

(ft.誰かが窓を開けている)。{note.「窓が開いている」のを見て}という前提}

6-43 tau-gara-ga-du mado: aki: uki.

誰-やら-が-ぞ 窓-を 開けて おく

(ft.誰かが窓を開けている)。{note.「窓は閉まっているが部屋が寒い」を感じて}という前提}

だが、主体の変化を表す動詞のうち、具体的な状態の変化を表す動詞のシテオク形では、「ハナシテが目撃している」、「ココに、イマ、アクチュアルにあらわれているデキゴト」が示される場合(まつもと 1996:77)、原則的に、<完了と結果の継続>の意味を実現することはできない。例えば以下の例 6-44 のように、「金魚が・死ぬ」というデキゴトによって必然的に生じる「(変化の)結果」、すなわち、「金魚」が死んだ状態(=死体)が表現主体の「メノマエ」に存在していることが「前提」となっている場合、シテオク形ではなく、si: buL の形が必ず用いられる(但し、時間の状況語あるいは時間副詞などによって、「変化の完了の段階の意味」は与えられていなければならない)。これに対し例 6-52 では、「金魚」のいない状態という「痕跡」によって判断された、以前のデキゴトが表されている。

6-44 (kunu) kiNgjo: Mme sini: buL.

この 金魚-は もう 死んで いる

{note.「金魚が浮いている」のを見て」という前提}6-45 kiNgjo-nu-du sini: uki=na:.

金魚-の-ぞ 死んで おく=な

(ft.金魚が、死んだな)。{note.「水槽が空になっている」のを見て」という前提}

すなわち、このタイプの動詞のシテオク形は、「メノマエ」のデキゴトを表す場合、変化の主体そのものの状態を、先行するデキゴトの「結果」として捉えることができないのである¹³。よって、具体的な状態の変化が表される場合、si: uki の形は、デキゴトの<メノマエ性>に関わって、<パーフェクト>の si: buL と対立するのである。これは、多良間方言のシテオク形が、<動作の開始とその過程の継続>のパーフェクト的な意味を表せないことと平行的な現象であろう。なお、このことは存在を表す動詞についても当てはまり、存在の主体が基準時点に‘存在’する場合、シテオク形は用いられない。

そして、変化の主体そのものの状態は、先行するデキゴトから必然的にもたらされるものであると捉えられることから、やはり、<完了と結果の継続>と<完了と痕跡>の用法は、その広い意味での「結果」の<必然性>によって、区別されていると言える。存在を表す動詞のことについても、これに準じるものと考えられるだろう。

以上の記述をふまえ、以下では、si: buL と si: uki それぞれの中核的な時間的意味について考察していく。

2-3. si: buL の中核的な時間的意味

須田 2003 では、共通語のシテイル(継続相)の「中核的な意味」として、<過程継続>という意味が取りだされ、パーフェクト的な意味を表す用法は、「周辺的な意味」の1つに位置づけられている(本稿第4章 2-3-2 参照)。これは、パーフェクト的な意味を表しているシテイルが、表されているデキゴト(動作や変化)の開始や完了の段階(局面)を表す意味を動詞に与えるような、時間副詞や時間の状況語などを伴っている場合が多いことから明らかであろう。そして、多良間方言の継続相 si: buL についても同様のことが言える。次の2例、

6-46 kjo:sicu-nu jado: aki:-taL.↗

教室-の 戸-は 開いていた

6-47 zju:zi-kara-tu ume:-taL-gadu kunu maqcja: icizikaNmai-N Mme aki:-taL.

10 時-から-と 思っていたけど この 店-は 1 時間前-に もう 開いていた

前者では<変化の結果の継続>というアスペクト的な意味、後者では<動作・変化の完了とその変化の結果の継続>というパーフェクト的な意味が、それぞれ表されている。いずれの用例でも aki:taL(開いていた)という同じ形の動詞が現れているにもかかわらず、その表さ

¹³ まつもと 1996 によると、奄美大島方言の「シタ ri 形」にも、多良間方言の si: uki の形と同様の現象が現れているようである。

れている文法的意味が異なっているのだが、それは、例 6-47 の文中には、変化の完了の段階の意味を与える時間の状況語が現れているからである。例 6-46 についても、そこに時間の状況語を加えると、たちまちパーフェクト的な意味が表されるようになる。

6-46' kjo:sicu-nu jado: Mme aki:-taL.[↑]
 教室-の 戸-は もう 開いていた

また、主体の動作を表す非限界動詞の si: buL が表すパーフェクト的な意味について、例えば、以下の例 6-48 では、時間副詞 Mme(もう)によって「歩く」という動作の開始の段階が捉えられ、<動作の開始とその過程の継続>のパーフェクト的な意味が表されている。だが、例 6-49 では、「5 km」という動作の限界点が設定されることによって動作の完了の段階が捉えられ、<動作・変化の完了とその変化の結果の継続>の意味が表されている¹⁴。すなわち、<パーフェクト>の si: buL に見られるこの 2 つのパーフェクト的な意味は、その形をとる動詞の<限界性>の有無によって、区別されているということがわかる。

6-48 aN-ja Mme aLki:L=jo:.
 私-は もう 歩いている=よ

6-49 aN-ja Mme gokiro(-mai) aLki:L.
 私-は もう 5km(-も) 歩いている

このように、<パーフェクト>の si: buL は、文中の他の言語的要素や文脈などの‘助け’を借りて、「基準時点に先行して」いる動作・変化のある段階の意味を表す、というパーフェクト的な意味を表す用法を獲得しているのである。つまり、si: buL の形はパーフェクト的な意味を積極的に表す形式ではなく、それは si: buL の持つ派生的な意味の 1 つにすぎない、とすることができる。多良間方言の si: buL の中核的な時間的意味とは、やはり、<継続性>なのである。

2-4. si: uki の中核的な時間的意味

次に、si: uki の形について、その中核的な時間的意味を考察していく。

2-1 で示したように、シテオク形には、<動作の開始とその過程の継続>の意味を表す用法がない。そして、この<パーフェクト>の si: buL との違いは、そのまま、両者の中核的な時間的意味の違いを示すものと言える。シテオク形の中核的な時間的意味は、次の 2 つの

¹⁴ なお、主体の動作を表す動詞の場合、si buL の形と si: uki の形とでは、同じく<動作・変化の完了とその変化の結果の継続>のパーフェクト的な意味が表されているとしても、その文の内容は同じではない。例えば、動詞述語が si: buL の形で表れている例 6-49 では、「歩く」という動作が、「5km以上続くことが含意されている。これが、si: uki の形に置き換えられると、「歩く」という動作は「5 kmで終了し、それ以上は行われないことになる。

cf. 6-49' aN-ja Mme gokiro aLki: uki.
 私-は もう 5km 歩いて おく
 (ft.私はまだ 5km(を)歩いている)。

この置き換えの問題に関わって、対象に変化を与える動作も含め、何らかの変化を表す動詞では、パーフェクト的な意味を実現するのに、si: uki の形を用いるのが最も普通の表現である。また、その動詞の si: buL 形は、<動作の過程の継続>のアスペクトの意味を表しやすい。よって、例えば、2-4 で挙げている例 6-50, 51 の si: uki 形動詞などは、非常に、si: buL の形に置き換えにくくなっている。

用例が表す、異なるパーフェクト的な意味の共通性によく現れている。

6-50 aNna-ga-du suika-u kīsi: wa:ri: ukī.

母-が-ぞ スイカ-を 切り なさって おく

(ft.お母さんがスイカを切りなさんしている)。{note.「切ったスイカが置いてあるのを見て」という前提}

6-51 aNna-ga suika-u-du kīsi: wa:ri: ukī.

母-が スイカ-を-ぞ 切り なさって おく

(ft.お母さんがスイカを切りなさんしている)。{note.第三者に「切れたスイカ」を勧めながら}

まず例 6-50 では、<動きの完了とその痕跡>のパーフェクト的な意味が表されている。動作の主体である aNna(母)が係助辞-du によってとりたてられていること、つまり、動作の主体が「特定=個別化」されていないことから(本章 1-2 参照)、表現主体は、‘その先行する動作を目撃していない’ということが、含みとして出てきている。よって、その si: ukī 形の動詞は、「基準時点には既に存在している痕跡」から「判断された」、基準時点以前に起こったデキゴトを表していると捉えられるだろう。これは、si: ukī の<完了と痕跡>の用法に見られる特徴の1つと言ってよい。これに対し例 6-51 では、<経歴・記録>のパーフェクト的な意味が表されていると捉えられる。係助辞-du にとりたてられているのが「スイカ」であることから、表現主体は、「母が・スイカを・切る」という「基準時点に先行しておこった出来事」を確定できているということが含意され、「痕跡」から「判断された」デキゴトでとは言えないからである。

このように、<完了と痕跡>と<経歴・記録>とでは、基準時点との関わりにおいてその意味は大きく異なっている。だが上の用例は、これらの文法的意味が、‘基準時点以前のデキゴト’を表している、という点において共通していることを示している。さらに、シテオク形は<動作の開始とその過程の継続>の意味を表す用法を持たないことから(本章 2-1)、捉えられるその動きは‘完了の段階’でなければならない。これを、<完了=以前性>と呼ぼう。すなわち、多良間方言の si: ukī の形は、基準時点におけるデキゴト(動作や変化)の何らかの「結果」よりも、この<完了=以前性>を表すことを、その意味内容の中心としていると言える。また、例 6-51 は、「あなた(第三者)に食べさせるために母が切っておいた」という<準備的な動作>のニュアンスも帯びているのだが、これも、「切れたスイカ」という「結果」よりも、「(スイカを)切る」という先行する動作の成立(完了=以前性)に、重きがおかれていることのあらわれであると言える。

この<完了=以前性>について、もう少し検討する。以下の用例も<動きの完了とその痕跡>のパーフェクト的な意味を表しているのだが、その「痕跡」が、「スイカを切る」という動作が行われたのは「テーブルの上」である、という判断をもたらすものではないため、単に kīsi: ukī(切っておく)と言うことができなくなっている。このことから、si: ukī の形が、基準時間における「結果」ではなく、基準時点以前に成立した動きそのものを捉えることをその中核的な時間的意味としているということは明らかである。

6-52 aNna-ga-du suika-u kīsi: (muti:) ki: wa:ri: ukī.

母-が-ぞ スイカ-を 切って (持って) 来 なさって おく

お母さんがスイカを切って(持って)きなさっておく(ft.切って(持って)きなさって
ている){note.「切れたスイカがテーブルの上に置いてあるのを見て」という前提}。

また 1-4 で、シテオク形のテンスの対立は形態上のものにすぎず、内容的にはほとんど失われていることを示したが、このことにも、si: ukī の形の<完了=以前性>という中核的な時間的意味が深く関わっている。特に<経歴・記録>の用法で、「シテオク形の動詞の示している動きが、基準時点となるデキゴトに至るまでの、単なる流れの1つとして示されている場合」、その文法的意味は、完成相・過去形が表す<(基準時点以前=過去における)全体的なデキゴトの意味>とほとんど重なっていた(本章 1-3 参照)。これは、<経歴・記録>の用法におけるシテオク形動詞と基準時点との関わりが薄いために、その<完了=以前性>が前面に出され、「ただ、過去における事実」を差しだしている、つまり、そのシテオク形動詞が非過去形であるにも関わらず、<過去>のテンス的意味が実現されているということが考えられる。

以上の考察から、本研究では si: ukī の中核的な時間的意味を、<完了=以前性>と規定する。そしてそれは、その基本的な意味である<動作・変化の完了とその変化の結果の継続>の用法、また須田 2003 の<先行性>に対応していることから、シテオク形の中核的=基本的な意味でもある。

第3節 継続相のシテオク形

多良間方言では、パーフェクト的な意味を実現するための形式であるシテオク形が、継続相によっても形づくられる(si: buri ukī)。本節では、この si: buri ukī の形の表す意味・用法を記述、考察することによって、si: ukī や si: buL との相違点を明らかにしていく。

3-1. 形式

多良間方言では、継続相 si: buL も、シテオク形を形づることができる¹⁵。そして第4章で示した通り、この継続相のシテオク形の存在が、多良間方言に関して、パーフェクトをアスペクトにふくみこませて捉えることを、より困難にしているのである。継続相シテオク形は、シテオク形の場合と同じく、継続相動詞の第一中止形と補助動詞-ukī のくみあわせからなっているのだが、形態的なテンスの対立を示していない。

(1) 継続相シテオク形 非過去形 si: buri ukī 過去形 —

3-2. 意味・用法

以下、多良間方言の si: buri ukī の形が示す、具体的な意味・用法を記述していく。但し、その用例は、シテオク形や<パーフェクト>の si: buL のそれに比べると非常に小数であり、

¹⁵ 但し、継続相の融合形 si:L は、シテオク形を形づくることはできない。これは、仮に融合形のシテオク形が現れても、単なるシテオク形と同音形式になってしまうためであろう。

十分な考察を行なうことのできなかつた点のあることを、はじめに断っておきたい。

1) 動作の開始とその過程の継続; まず、「始発の局面が基準時間より前に成立したことで、基準時間において動作の局面のなかにあること」を表す用法が見られた(高橋他 2005:89)。この用法は、<パーフェクト>の *si: buL* によっても表されるものであり、やはり、主体の動作を表す動詞によって実現されている。だが、継続相のシテオク形の場合、そのテンスの意味が常に<以前=過去>である点において、<パーフェクト>の *si: buL* とは異なっている。

6-53 *asjugadu micinaka-N-ja, upuganu iki-nu atui, uma-Nka ka:tui-nu, gaqfe:*

だけど 道中-には 大きな 池-の あって そこへ 鴨-の たくさん

asibi: buri: ukī, uL-u: mi:-taL bikiduM-ja, unu ka:tui-ju, isi-si: tura-ti:,

遊んで いて おく それ-を 見た 男-は その 鴨-を 石-で 捕ろう-と

2人は嬉しそうに、両親へ感謝をして、洞窟の家へいっておく(ft.行った)よ。だけど、途中に、大きな池があって、そこで鴨がたくさん遊んでいっておく(ft.遊んでいた)。それをみた男は、その鴨を石でとろうと、[民]^{vi}

6-54 *unu ba:-N, unu sibuL-karanu, idi mizi-nu, kanu, qvata: mi: mi:L=sja,*

その 場合-に その 冬瓜-からの 出(る) 水-の あの あなたたち-は 見て みる=さ

kanu upu-ka:-ti. upuka:. {中略} tiN-ni: aNsi aL. [[e: aNsinu kawa-nu,

あの 大川-と 大川 天-に そのように ある [間] そのような 川-の

watari:L-tu ba:~]] N: @ [[o:]] @ we: uma-N mi: buri: ukī=sa.

渡っている-と 場合 [間] [感] [間] そこ-に 見えて いて おく=さ

その時に、その冬瓜から出た水が、あの、あなたたちは見てみるでしょ、あの 大川と。大川。天にそのようにある。[[えーそのように川が渡っているということ?]] んー。[[あー。]] ねえそこに見えていっておく(ft.見えていた)よね。[民 Joh-5-49~50]

6-55 ~ *M:na ciri: jama-Nka-Nke:, piNgi: tubi-taL-ti: aNsi:-du, kunu meN-kaqvē:,*

皆 散って 山-にへ 逃げて 行った{飛んだ}-と それで-ぞ この 面-被り-は

“a:, piNna munu nu:-ju kare kaNsi: Mnaka-u si: buri: ukī=ga:”-ti:,

[間] 変な もの 何-を あれ-は あのように 真ん中-を して いて おく=か-と

(動物たちは)もう皆散って、山へ逃げていったそう。それで、この面被り(ft.面を被った人)は、「ああ不思議(だ)、何をあれ(ら)は、あのように真ん中をしておるか(ft.真ん中においていたのか)」と、[民 Joh-13-23~24]

2) 基準時点以前から基準時点にかけての状態; 主体の変化を表す動詞や、生理・心理的な状態を表す動詞によって表される用法のようである。<基準時点以前>の‘動き’の、ある段階が捉えられていることから、パーフェクト的な意味の1つであると言って良いだろう。また、1)の<動作の開始とその過程の継続>の用法の場合と同じく、常に、<以前=過去>のテンスの意味が実現されている。

6-56 *jo:zi si-ga ki-tari:, kiqti:-du, ju:zi-u si:-ja panasipanasī, mata unu daidokoro-Nka*

用事-Ø し-に 来たので 来て-ぞ 用事-を して-は 話し話し また その 台所-に

-u-mai mi:-ba si: buriqti:, {中略} e:, si: buriqti:-du, aNsi: Mme unu okusaN-ga

-を-も 見る-(を)ば して いて [間] して いて-ぞ そのように もう その 奥サン-が

jukuefumei-ba si:L-ti:-ja, Mme sitasi: dusi-gama ari: qsi: buri ukĩ=sja:mi:
 行方不明-(を)ば している-と-は もう 親シイ 友達-[指小]-Ø [COP] 知っ て いて おく=さ
 tunaL-nu dusi dataL-ga-jara nu:-ga-jara. [民 Joh-4-19,25]
 隣-の 友達-Ø [COP]-過-か-やら 何-か-やら

(男の友達が)用事(を)しに來たから、來て、用事をしては話したり、またその台所
 をも見たりしていて、{中略}えー、していて、そのようにもうその(男の)奥さんが
 行方不明をしていることは、もう親しい友達だから知っていておく(ft.知っていた)
 のだろう、隣の(家の)友達だったのか何なのか。

6-57 unu kurusjaitaL pĩto:, mai-nu ju:-nu azü:-du, baqsirai-N buri: ukĩ=sja. [民]^{vii}
 その 殺された 人-は 前-の 夜-の 味-を-ぞ 忘れられないで いて おく=さ
 その殺された人は、(その)前の夜の味{note.収獲を横取りできたこと}を忘れられ
 ないでいておく(ft.忘れられないでいた)んだよ。

6-58 u:ami-nu, u:ami-nu ba:-N, Mme jadu-gama-u qfi: wa:Ltui:, ozi:-mai oba:-mai,
 大雨-の 大雨-の 場合-に もう 戸-[指小]-を 閉め なさって おじーも おばーも
bi: wa:ri: buri ukĩ=sja Mme:.. si:du, unu ozi:saN-ga mi: wa:L-taka:, {中略}
 座り なさって いて おく=さ もう それで その 才爺サン-が 見 なさると
 o:kami-nu ki:, kuL-nu, e: amadaL-N tati:tui, ~ [民 Joh-3-1,3]
 狼-の 來て これ-の [間] 軒{雨垂れ}-に 立って

大雨の、大雨の時に、もう戸を閉めなさって、お爺さんもお婆さんも、坐りな
 さっていておく(ft.座りなさっていた)よ、もう。そして、そのお爺さんが見なさ
 ると、狼が來て、こいつが軒(下)に立っていて、～

3) 基準時点以前の状態(の継続)とその痕跡；また、<基準時点以前>に、基準時点において
 存在している何らかの「痕跡」に関わる状態が継続していたこと、あるいはその状態にあっ
 たことを表す用法が見られた。以下の用例ではいずれも、「痕跡」から判断された<以前=過
 去>の状態が表されている。また、このパーフェクト的な意味は、主に主体の具体的な状
 態の変化を表す動詞や存在動詞によって、実現されるようである。

6-59 taro-ga ki: buri ukĩ=na:.
 太郎-が 來て いて おく=な
 (ft.太郎が來ていたな)。{note.「太郎はその時いなかったがお土産が玄関に置いてあ
 ったのを思い出して」という前提}

6-60 duru pagĩ-ni:-du isu-N bi: buri ukĩ.
 泥-Ø? 足-に-ぞ 椅子-に 座って いて おく
 (あの子は)泥足で椅子に座っていておく(ft.座っていた)。{note.「椅子に泥が付いて
 いたのを思い出して」という前提}

6-61 kjaku-nu-du wa:ri: buri: ukĩ.
 客-の-ぞ いらっしゃって いて おく
 お客(さん)がいらっしゃっていておく(ft.いらっしゃっていた)。{note.「お客さんは
 いなかったが、お土産があったのを思い出して」という前提}

4) 経歴・記録；また、<以前=過去>の‘状態’を、「ただ、過去における事実」として差しだす用法も見られた。例 6-62 では、継続相のシテオク形によって示されている‘状態’は、その他のデキゴトの「前提」となっており、また例 6-63 では、具体的な「記録」の存在を「前提=根拠」する、上の例 6-59~61 に近い意味が表されている。用例は僅かだが、このような意味の振幅が見られる点は、シテオク形や、<パーフェクト>の si: buL によって表される<経歴・記録>の意味と共通するものである。但し、その動詞によって表されるデキゴトの「完了」の段階ではなく、「(状態の)継続」の段階が捉えられている点は、異なっている。

- 6-62 sikiN-nu pītu-nu Mme:, fuci-N-gami-du īza-N, kīM-Nka: we:masja-ti:-ja,
 世間-の 人-の [Pl.]は 口-に-まで-ぞ 言わない 心{肝}-に-は 羨ましい-と-は
 tau-mai ume:-du buri: ukī, aNsi ari-badu, kanu taramasjuNkani-mai Mmari,
 誰-も 思っ-て-ぞ いて おく そう だから あの [歌謡名]-も 生まれ
 bunagama-ga e:gu-mai, unu puka we:Mma-u, we:masja-u si:-nu e:gu-nu, sīma-Nka:
 [人名]-が 歌-も その 他 ウェーンマ-を 羨まし-さ-を して-の 歌-の 島-に-は
 Mti: buL=dara:na:. [民]^{viii}
 満ちて いる=だろう

世間の人々は、口に(は)言わない(けど)、心には羨ましいとは誰も思っ-て-いておく (ft.思っ-て-いた)、そうだから、あの多良間シュンカニ{note.歌謡名}も生まれ、ブナガマの歌も、その他ウェーンマ{note.人頭税時代のいわゆる現地妻のこと}を羨望する歌が、島には満ちているんだろうよ。

- 6-63 icizi-kara nizi-game deNki-nu ke:ri: buri ukī.
 1 時-から 2 時-まで-は 電気-の 消えて いて おく
 1 時から 2 時までは電気が消えていておく (ft.消えていた)。{note.「メーターをみながら」という前提}

5) 反復的な動き¹⁶；基準時点以前から基準時点時点にかけて行なわれていた、複数主体の動作や多回的な動作、習慣を表す用法も見られた。主に、主体の動作を表す動詞によって実現されており、やはり、そのテンス的意味は<以前=過去>である。また、以下の用例ではいずれも、いわゆる「語り」の地の文において用いられ、基準時点となるデキゴトの単なる「背景」の1つとして、継続相のシテオク形動詞が示す動きが差しだされているようでもある。つまり、si: ukī の<経歴・記録>の用法に見られた「基準時点となるデキゴトに至るまでの、単なる流れ」が示されている場合と同じく、基準時点との関わりが薄いということ

¹⁶ また、「反復強調形+si: buri ukī」やそれに準じる形式によっても、この意味は実現されている。この<反復的な動き>の意味を表すのに反復強調形が用いられることは、完成相・非過去形、完成相・過去形にも見られた現象である(第5章の注9及び16を参照)。

cf 1. kunu we:Mma:, uma kuma-karanu, juri īzū: ka:kasi: ukītui, me:ku-nu nusī-ga
 この ウェーンマ-は そこ ここ-からの 貰う 魚-を 乾かして おいて 宮古-の 主-が
 qfa-nu Mme-Nke: mutasimutasi, si buri: ukī. [本章文末脚注 viii 参照]
 子-の [Pl.]へ 持たし持たし して いて おく

このウェーンマは、そこここからの、魚を乾かしておいて、宮古の主の子供達へ待たせたりしてしておく (ft.持たせたりしていた)。

cf 2. (~-ti:) kunu niNgiN-ja, Mme: kaNgai-na kaNgai: buri: ukī.

-と この 人間-は もう 考え-[強意] 考えて いて おく

〜と、この人間は考えに考えていておく (ft.考えてばかりいた)。[民 Joh-12-注 4]

である。

- 6-64 kirama-nu pītu-nu Mme:, unu uzi-nu pune: pise: ki:, ja: fuki ba:-nu,
 慶良間の 人-の [Pl.]は その うなぎ-の 骨-は 拾って きて 家-Ø 建てる{葺く} 場合-の
 para-nu bisasi-Nke: cuke: buri: uki-gi=sja:i. “uNsinu ja:-ti:-mai-du, aL=na,
 柱-の 根石-へ 使って いて おく-気=らしい そのような 家-と-も-ぞ ある=な
 {中略}”-ti:, ukina:-kara usukanu pītu-nu Mme-nu, mi:-ga-ti:-ja ikiiki, [民]^{ix}
 -と 沖縄-から たくさんの 人-の [Pl.]の 見-に-と-は 行き行き
 慶良間の人々は、その(巨大)うなぎの骨は(ft.を)拾ってきて、家(を)建てる場合の、
 柱の根石へ(ft.に)使っていておく(ft.使っていた)らしいよ。「そのような家ともあ
 るのか、{中略}と、沖縄からたくさんの人たちが、見に行って、

- 6-65 aNsutidu, ifuka-mai naha-N tumariqti: ki: jo:-N nari:, asjugadu tuzē:, suna:ka
 それで 何日-も 那覇-に 泊まって くる よう-に なった けれど 妻-は [静かなさま]
 -gama sutui, kaL-uba: Nke: buri: uki=sja. mata buto: tuzi-nu pu-gi-nu-du
 -[指小] して あれ-をば 迎えて いて おく=さ また 夫-は 妻-の 挙動-の-ぞ
 piNnasja:L-ba simi-taka:-du, [民]^x
 おかしので 責めると-ぞ

それで、何日も那覇に泊まって来るようになった、だが妻は、静かな様子で彼を
 迎えていておく(ft.迎えていた)よ。また夫は妻の挙動がおかしいので責めると、

- 6-66 mata Mme: uma-Nka-u timizu-mai cuke: cukau mizu-mai ami-u si: wa:ri:
 また もう そこ-に-を 手水-も 使って 使う 水-も 浴び-を し なさって
 buri uki=sja, kunu satunusē:. {中略} arekore si: wa:L-ba, nusī-nu wa:riL
 いて おく=さ この 里主-は アレコレ し なさると 主-の いらっしゃる
 cju:-N-du, kicigi sjozjosaN-nu, ki:, sugu pe:si:-na mizū: ami: bu-taLru-gadu,
 中-に-ぞ 綺麗な 処女サン-の 来て すぐ ちょっと-ずつ 水-を 浴びて いたけど
mi:rar-iN buLbuL su-taL-ti:=ju. [民 Joh-5-3,5~6]
 見えない をりをり した-と=よ

また、もうそこで手水も使って(ft.手も洗って)水も浴びをなさっていておく(ft.
 水浴びもしなさっていた)よ、この里主は。{中略}アレコレしなさって、主がいら
 っしゃる中に(ft.時に)、綺麗な少女が来て、すぐ、少時間ずつ、水を浴びていた
 けど見えない(と)いたそうだよ。{note.水を浴びていていつの間にかいなくなる
 ということがしばしば続いた、ということ}

なお、次の用例では、単に、過去の反復的な動作が表されているようである。

- 6-67 kanagai-ja, bikiduM: furaiqti:-nu miduM-nu-du, du:-ga naga aka-u darasiqti:,
 昔-は 男-に 振られて-の 女-の-ぞ 自分{胴}-が 長い 髪-を 垂らして
 pītu-N mipana-u kaqfasi:, miduM-ju mi:-taka: nu-mai sju-N-sjugadu, bikiduM-ju
 人-に 顔{目鼻}-を 隠して 女-を 見たら 何-も しないけど 男-を
 mi:-taka:, tau ara-baM kaikacimi: buri uki-gi munu. {中略} kuL-u-du zja:-ti
 見たら 誰 であっても 捕まえて いて おく-気 もの これ-を-ぞ ジャー-と

ĩ:gi munu. [民]^{xi}

言う-気 もの

昔は、男に振られての女が、自分の長い髪を垂らして、人に(ft.から)顔を隠して、女を見たら何もしないけど、男を見たら、誰であつても捕まえておく(ft.掴まえていた)らしい。{中略}これを、ジャーと言うそうだ。

以上は、継続相のシテオク形によって表される文法的な意味である。以下にまとめて示しておく。

	(先行性)	(事実性)
c. 継続相シテオク形；	<動作の開始とその過程の継続>	<経歴・記録>
(si: buri uki)	<基準時点以前から基準時点にかけての状態>	<反復的な動き>
	<基準時点以前の状態(の継続)とその痕跡>	

いずれの用法も、<基準時点以前>の動きのある段階が捉えられていることから、パーフェクト的な意味が表されていると言って良いだろう。また、上に挙げた用例のほとんどで、継続相のシテオク形は、主体の変化や動作(但し、客体に変化を与えない)や、広い意味での状態を表す動詞によって形づくられており、よってその形の実現するパーフェクト的な意味も、このようなタイプの動詞によって表されている。そして、これらのパーフェクト的な意味では、常に、<以前=過去>の状態の継続の段階が捉えられている点において、si: ukiの形や<パーフェクト>の si: buL とは異なっている。

第4節 多良間方言の時間の表現—仮説の提示—

以上、多良間方言の si: uki の形と<パーフェクト>の si: buL、また継続相のシテオク形(si: buri uki)について記述してきた。まず、前の2つの形式について、<パーフェクト>の si: buL は、文中の他の言語的要素や文脈などの助けを借りなければ動作・変化の開始や完了の段階を捉えることはできず、よってそのパーフェクト的な意味は、<継続性>という、継続相の中核的な時間的意味から派生した、周辺的な用法の1つであった。これに対しシテオク形は、基準時点以前に起こったデキゴトの完了の段階を捉える<完了=以前性>が、その中核的な時間的意味として取りだされた。つまり、同じくパーフェクト的な意味を実現することのできる形式であっても、si: uki と si: buL とでは、その‘内容’を特徴づけている「中核的な時間的意味」が全く異なっているということである。

次に継続相のシテオク形について、この形式も、やはり、パーフェクト的な意味を表す用法を示している。だが、形態的なテンスの対立を持たず、意味内容的にも、常に<以前=過去>のテンス的意味を表している点、また、その形の動詞が表すデキゴトが、常に状態の継続の段階であるという点において、上の2つの形とは異なっている。だがこのうち、テンスの対立がないことについては、シテオク形のテンスの対立が形態上のものにすぎず、内容的にはほとんど失われていることに、よく似ている。また、広い意味での状態の継続の段階を表すことについても、継続相 si: buL の意味・用法に共通している。すなわち、多

良間方言の *si: buri ukī* の形は、その名づけの通り、継続相とシテオク形の意味特徴を合わせ持った形式であると言えるだろう。

以上のことを踏まえ、本稿の第II部における一連の考察から得られた1つの仮説をここで示したいと思う。

本稿第5章の1-3-1で、多良間方言の完成相・非過去形の意味・用法を記述していった。この形式は、<基準時点以後=未来>の<限界到達>やいわゆる<ひとまとまり性>という、共通語のスルとも共通するテンス・アスペクト的な意味の他に、<過去>のテンス的意味や<過程継続>のアスペクト的な意味、さらに、「基準時点において既に動作が完成あるいは完了していること、すなわちパーフェクト的な意味」を表す用法をも示していた。そして、完成相・非過去形に見られるこの多用な意味・用法の広がりから、この *sī:* という unmarked の形式が、*sī-taL*, *si buL*, *si: ukī* という marked の形式それぞれと、それぞれの文法的カテゴリーにおいて、対立しているということが考えられる¹⁷。テンスのカテゴリーにおける非過去形と過去形の対立、アスペクトのカテゴリーにおける完成相と継続相の対立については、それぞれ、第5章で示した通りである。また、その緊密な相関関係から、「テンス・アスペクト」としてその体系を差し込んでいる。

だが、パーフェクトについては、それがアスペクトとは異なるカテゴリーである可能性が示唆されたばかりであり、具体的にどのような対立が示されているのかをここで断定することは困難だろう。しかし、本章でのパーフェクト的な意味を実現する3つの形式についての記述から、多良間方言パーフェクトのカテゴリーは、テンスとアスペクトの関係のように、その他の時間に関する文法的カテゴリーと関わって、体系をなしていると考えられる。あくまでも仮説だが、以下に、その体系を示しておく。

	パーフェクト		アスペクト		パーフェクト
	(完了=以前)	(非完了=以前)	(非完了=以前)	(完了=以前)	
テンス		完成相	継続相		
非過去形	<i>si: ukī</i>	<i>sī:</i>	<i>si: buL</i>	<i>si: buri ukī</i>	
過去形	<i>(si: ukī-taL)</i>	<i>sī-taL</i>	<i>si: bu-taL</i>	—	

表 20 多良間方言の時間の文法的カテゴリーの体系表

すなわち、多良間方言のパーフェクトは、特に、アスペクトのカテゴリーと緊密な関係にあることが考えられる。またテンスについても、*si: ukītaL* というシテオク形の過去形が現れていることから一応の関わり合いがあるものと思われるが、その意味・内容における *si: ukī* と *si: ukītaL* の対立性は薄い。これは、<以前>と<過去>という文法的意味の類似性によるものであろう。

¹⁷ marked—unmarked の対立について Comrie1976 は、「しるしづけ無しのカテゴリーの意味は、おおくのばあい、しるしづけられている片われの意味をとりこむことができるのだが、このことはもっとも決定的な基準のひとつである」、と述べている(山田小枝訳『アスペクト』むぎ書房 1988:177)。

- ⁱ 『民話』<本格昔話>の「若者の長旅」より(pp100-102)。自分のことを占ってもらおうと、占者のもとへ旅していた若者が、その道中に、言葉話を話さない娘の母親と、飛べなくなった龍から、それぞれの状況の理由も聞いてきて欲しいと頼まれる。占者は、娘は将来の夫の顔を見れば、龍は魔法の玉を吐き出せば良いと教え、若者がそれを伝えたところ、龍は魔法の玉を若者に与え、娘は若者を見て言葉話を話した。若者はその娘と夫婦になり、裕福に暮したという話。
- ⁱⁱ 『民話』<本格昔話>の「カニツミガウエーニ」より(pp92-94)。男として育てられたカニツミガウエーニという女の子が、勉強のためにと唐へ行くが、勉強中、月経の際の血らしきものが椅子についているのを友人が見つける。性別を確かめようと石投げをさせると、やはり横にそれてしまうので、カニツミガウエーニは秘密を打ち明け、その友人と結婚するという話。
- ⁱⁱⁱ 『民話』<伝説>の「大主(うぶしゅう)になったアカシャ」より(pp217-218)。多良間に漂着したイルラマモツという腕の良い大工が、仕事を頼まれて、大変に立派な家を建てたが、立派すぎる家は役人に徴収されてしまうので、わざと傷をつけた。そして首里王子自ら調査に来たが、その家の妹を見初め、やがて生まれたアカシャ(私生児)を大主の位につけたという話。
- ^{iv} 『民話』<伝説>の「宇増呂(うどうる)とカッジャンガペー」より(pp205-207)。宇増呂(土原豊見親の幼名)が、カッジャンガペーたちが畑を耕している様子を真似していると、それをうるさく思われたのか井戸に落とされそうそうになるが、やってきた母親に励まされ、反対にカッジャンガペーらをやっつけるという話。
- ^v 『民話』<本格昔話>の「牛の角の話」より(pp107-116)。ある娘が町へ出るとき両親から牛の角を持たされる。娘は宿を借りた老婆の助言で良人と巡り合い、牛の角を宝物として大切に埋めておくが、病に伏せ夫に牛の角のことを遺言する。夫はやがて盲になるが、長男と次男はそれを山に捨てようとする親不孝ものだった。だが竜巻のために長男と次男は死に、親孝行の三男だけが見知らぬ老婆の助言によって命拾いしたので、2人で牛の角を掘り出してみると、中に黄金が詰まっていたという話。
- ^{vi} 『民話』<本格昔話>の「貧乏男と黄金」より(pp77-79)。ある金持ちの娘が貧しい漁師の男との結婚を望み、両親もしぶしぶながら承諾して、2人に紙包みを渡して送り出した。その道中、男が池の鴨を捕ろうとその紙包みを投げてしまったことに娘は驚くが、男の住む洞窟へ着くと金がゴロゴロ溢れており、2人はそれを拾って売って、幸福に暮らしたという話。
- ^{vii} 『民話』<本格昔話>の「欲ばりの大損」より(pp144-145)。ある人がイカとりに出かけ、大漁をしていると、黒い奇妙な影が現れ、驚いて逃げてしまった。翌日も同じように現れたので、今度は逃げずに鉆で突き殺したが、見ると、それは近所の親しい友人だったという話。
- ^{viii} 『民話』<伝説>の「多良間シュンカニ」より(pp237-241)。「人頭税時代」(1500年頃に始まったらしい人頭税制度が廃止される1903年までの期間を指していると思われる)に、中央から派遣される施政者へ、島の女性が妾として差し出されるという慣習があり、それがどのように行なわれたか、またその女性たちがどのような生活を送ったかなどについて語られている。「多良間シュンカニ」では、同棲していた役人(施政者)を見送る、「ウエーンマ」(妾となった女性の尊称)の別離の悲しみが語られている(『多良間村史 第五巻』より)。
- ^{ix} 『民話』<本格昔話>の「白うずの仇討」より(pp50-51)。ある漁師が取り逃がした小さな白いうなぎが大変大きくなり船の邪魔をしていて、その漁師から三代目の人に退治された。その骨が慶良間の浜に流れつき、そこの人々はその骨を根石にして家を建てていた。その話が沖縄で評判となり、その珍しい家を見ようと人々が訪れるようになった。うなぎを退治した人のさらに三代目に当たる人が見に行ったところ、その根石が爆発して死んでしまったという話。
- ^x 『民話』<本格昔話>の「黄金のかめ」より(pp103-105)。外に妾を作っていた夫が妻と仲直りをし、その寝床で黄金の入ったカメを見つけた話をする。その話を、妻の元へ夜這いしようとした男が立ち聞きし、先にそのカメを探しに行くが、蜂に刺されて死んでしまうという話。
- ^{xi} 『民話』<伝説>の「ジャーの話」より(pp231-232)。失恋して、誰彼かまわず男を捕まえてその着物をはぎとるようになった、ジャーという女の魔物の話。

おわりに

本研究は、多良間方言において、<空間>と<時間>というそれぞれの「内容」が、どのような「形式」によって表されるかを、明らかにしようと試みるものであった。文法事項の「網羅的な」記述を目指した拙論 2002(以下前稿)を足がかりに、「内容」から「形式」へと、記述の流れを変えて行ったこの一連の考察は、多良間方言の表現形式全体の体系性を、その一端ではあるが、浮き彫りにしていると考えられる。以下に、各章節の概要をまとめておく。

第1章では、<空間>を指し示す名詞について取りあげた。空間を、「具体的で、視覚などの身体的感覚によって直接的に捉えられるもの」と規定するならば、この「直接的に捉えられる」ということは、言語的には、それを直接的に指し示すための‘名づけ’が行なわれることと等価であり、その捉えられた空間の性質(あるいは空間の捉えられ方)によって、その‘名づけ’のし方も体系的であることが考えられる。第1節ではこの空間名詞について考察し、大きく4つの類型—[1]イキモノの身体全体のところ [2]モノにとってのところ [3]部分と「部分化」の相対名詞 [4]「空間化」の名詞—を区別した。第2節では、前稿で体系化した多良間方言の「指示語」のうち、特に、空間表現に関わる<場所・方向>の指示代名詞(「空間の指示代名詞」)について、その具体的な意味・用法を記述し、再考察を試みた。その結果、その用法には大きく<現場指示>、<文脈指示>、<観念指示>が見られ、空間名詞と同じく、<イキモノの身体全体のところ>や<モノにとってのところ>、また<部分>を指し示すことが明らかになった。また、少なくとも kuma と kama の対立が前面にでる場面においては、uma と kuma の対立が失われて、「ku系,u系」対「ka系」の2項対立化することを示した。第3節では、序論3で示した格形式の内部構造及び下位体系のうち(表1)、動作や状態に関わるところ、すなわち「空間的な意味」をあらわす用法を持つ格形式について考察した。多良間方言では ni 格と Nka 格、また Nke:格、kara 格、gami 格に、空間名詞をその語幹として空間的な意味を実現する用法がみとめられ、奄美方言などの「空間格」と比べるとその「空間格」の「空間格らしさ」は低いのだが、ni 格と kara 格を除くいずれの形式でも空間的な意味を表す用法がその中核となっていることなどから、完全に分化した状態ではないけれども、「空間格」としてのまとまりがみとめられることを明らかにした。ni 格について、Nke:格が<方向性>を、Nka 格が<内部性>をその文法的意味特徴としているのに対し、ni 格はそのいずれをも兼ね備えていること、モノの<移動先>を含む、<動作の間接的な対象>を表す用法などがみとめられることなどから、ni 格は単に、<到達点>を表す形式であると規定した。複合連体格助辞の要素とはならないため、形態的には「空間格」の枠から外れざるを得ないのだが、意味の観点からは「空間格」への繋がりが窺えた。また kara 格について、そのところ性は二次的なものであり、完全には「空間格」に含められないが、tu 格や si:格というその他の間接格と「空間格」との中間に位置し、「空間格」の格体系内での位置づけを決定していること、すなわち、この kara 格の存在によって、「空間格」は間接格から分離されず、そのさらに下位のカテゴリーとして位置づけられることを示した。

第2章では、「移動」を表す動詞について取りあげた。「移動」を「人や物体が空間内の一つの点から別の点に移動すること」と規定し(岡田 2003:102)、寺村 1982 による「動的事象の描写」(動詞文)の5つの下位分類のうちの3類型(移動・変化の表現のうちの移動の表現、「入レル,出ス」タイプの動詞、授受の表現)を取りあげ、これらを大きく「ヒト=イキモノの移動の表現」と「モノの移動の表現」とに再分類した。そして、それぞれの表現の中心的な役割を果たす動詞の語彙=文法的な意味について、岡田 2000 によって提示された分析の観点(格の形式・その格の名詞がある動詞とともに用いられることによって表す語彙=文法的意味・その動詞の語彙の意味という3者間の相互関係, p101)を用い、記述を試みた。第1節では、主体的な空間的な移動を表す動詞として、ヒト=イキモノを中心とする移動の表現について考察し、この表現に関わる動詞に4つの下位分類—1「出ル」類 2「通ル」類 3「入ル,着ク」類 4「行ク,来ル」類—をみとめた。そして、1から3のタイプの動詞が、それぞれ<出発性>、<経路性>、<到着性>という語彙=文法的な意味を示していることを明らかにした。また4の *iki*(行く)と *ki*(来る)について、これらの動詞の間には、「とおのくうごき」と「ちかづくうごき」という、移動の方向の対称性がみとめられた。第2節では「モノの移動」を、「X(し手)が Y(対象,相手)に働きかけて、その働きかけの結果、Y(対象,Y=対象)あるいは Z(対象,Y=相手)の空間的な位置が変化することを表す表現」と規定し、その表現に関わる対象的な空間的な移動を表す動詞として、大きく「入レル,出ス」類の動詞」と「授受の表現」の2つを区別した。そして前者のタイプには 1「入レル,置ク」動きを表す動詞」と 2「出ス,取ル」動きを表す動詞」とを下位分類し、その枠からはみ出るものとして、3「空間的な位置変化」を表す動詞類」をみとめた。また後者のタイプには、4「与エル」類」、5「受ケル」類」、6「双方向的な「授受」を表す動詞」、7「やりもらい」の4つを下位分類した。また、多良間方言の「やりもらい」動詞について、形態的には *qfiL*(くれる)と *juiL*(貰う)の二項対立を示しているのだが、<し手>と<相手>、<与え手>と<受け手>の相関関係によって、意味的には三項対立を示していることを明らかにした。

第3章では、「存在」を表す動詞について考察している。一般に「存在」とは、「物理的な時間、空間を対象が占有することを表す出来事の種類」(金水 2002:478)というように規定することができ、そのデキゴトを言いあらわすのに用いられる動詞を「存在動詞」、存在動詞を述語とする文を「存在文」と呼ぶ。だが本研究では、「移動の表現」に関わる動詞と「存在の表現」に関わる動詞の中間に位置するような動詞(「泊マル」など)、また、ヒトやモノ、デキゴトの「出現」を表す動詞(「生まれる,起こる」など)についても、存在の表現に近いふるまいを示すものとして取りあげ、この章での考察の対象とした。第1節では、「移動そのものを表すのではなくて、移動した結果、変化した結果の状態を表わしている」(寺村 1982:113) 動詞と「ヒトやモノ、デキゴトの「出現」を表す動詞」を取り上げ、前者のタイプを「泊マル」類の動詞、後者のタイプを<出現>の動詞と呼んで、その語彙=文法的な意味の記述を試みた。また第2節では、いわゆる存在動詞(文)について、その意味・用法の記述を通して、*al*(ある)と *buL*(いる)がどのように使い分けられているかを示した。そして第3節において、「存在の表現」に関わるこれらの動詞の類型として、1「泊マル」類」、2「<出現>の動詞」、3「存在動詞」の3つの類型をみとめ、これらの動詞がいずれも、*ni* 格あるいは *Nka* 格とくみあわさって<アリカ性>を示す用法を持つという点において共通していること、だが、「泊マル」類と<出現>とでは<移動性>の度合いが異なること、また存在動詞には、狭い意味での<

存在>に限られない広範な用法がみとめられることなどを明らかにした。

以上が第Ⅰ部「<空間>の表現」の各章の概要である。この部では特に、「移動」の表現と「存在」の表現との連続性によって、「空間表現」としての一貫性が保たれていることを示すことができたと考える。次に、第Ⅱ部「<時間>の表現」の概要を示していく。

第4章では、第5章以下での考察の前提となるコトガラを、先行研究を手掛かりに、示していくことに割り当てた。第1節では、「アスペクト」という概念について山田 1984 を手掛かりに再考察し、本研究におけるアスペクトの概念規定を行った。山田 1984 は、アスペクトというカテゴリーを「いくつかの下位カテゴリーから成り立ち、そのそれぞれの下位カテゴリーが言語によって多様な現れ方をしているだけでなく、同一言語内でもいく通りかに表現されるもの」(p203)として捉え、それまでのアスペクト理論を詳細に辿ることで、「それぞれの下位分類の中身を吟味して、できるだけ体系的に記述すると共に、下位カテゴリー相互の関係づけ」(序)を行うこと、すなわち、アスペクトの「総合化、抽象化」(p205)を試みている。だが本研究では、そこで提示された総合的な「アスペクト」モデルをそのままに適用することはせず、山田 1984 が、下位カテゴリー(「多様な現象」)を「ゆるくまとめたもの」としてみとめる「総合的アスペクトシステム」(p73)を、「広義のアスペクト」もしくは「アスペクチュアリティ」と呼び、「アスペクト」という語は、各言語の特徴的かつ基本的な現象の体系に対して用いることとした(<狭義のアスペクト>)。このような規定は、現代日本語における形態論的カテゴリーとしての「アスペクト」の概念をも覆うものである。第2節では、現代日本語のアスペクトに関する先行研究を概観し、須田 2003 による、アスペクト的意味の体系化の試みを概説した。須田 2003 は、奥田靖雄がみとめた完成相の<ひとまとまり性>と<限界達成性>を、それぞれ基本的な意味と中核的な意味ということなるレベルのアスペクト的意味として位置づけ、そして、それぞれの意味が、<継続性>という継続相の意味特徴との対立において現れてくる性質のものであるということを示し、アスペクトという文法的カテゴリーにおける有標―無標という形態的な対立が、意味の面においてもあてはまることを明らかにしている。第3節では、「パーフェクト」という文法的概念が抱えている問題を示し、工藤 1989,1995 と須田 2003 それぞれの主張を検討することによって、本研究が採っていく立場を明らかにした。両者の「パーフェクト」への対応は、パーフェクトが、「アスペクトとはかなりことなるものである」という認識において共通しつつも、アスペクトとの関わらせ方(アスペクトに含めるか否か)において全く真逆の立場を示しているのだが、本研究では、「意味論的には、パーフェクトは、アスペクトやテンスと、はっきり区別することができる」(須田 2003:243)ことを、パーフェクトを考える上でより重要視すべきと考えること、そして何より、多良間方言では<パーフェクト>の意味を表す主な形式である si: uki が、継続相によっても形づくられる(si: buri uki)ことから、「パーフェクト」と「アスペクト」を区別する立場をとった。

第5章では、多良間方言のアスペクトの体系化を試みた。アスペクトは、同じく時間に関わる文法的カテゴリーである「テンス」と緊密な相関関係を持つものであるから、その体系は「テンス・アスペクト」の体系として捉えられている。第1節では、その基本的なテンス・アスペクトの体系を明らかにするために、文の終止の位置に現れる動詞を対象として、そ

それぞれの形式のもつ意味・用法を記述した。多良間方言のテンス・アスペクトの各形式の基本的な意味は、それぞれ、<全体的な事実の意味>と<動作の具体的な過程継続の意味>という(須田 2003)、共通語のスル・シタ、シテイル・シテイタと同様だったが、異なる点として、例えば、完成相・過去形にはシタリ形、シアリ形、シアリタリ形という形づくりの異なる3タイプの形式が現れているが、これらは大きく、主に<限界到達>の意味を表すのに用いられるシアリタリ形(直前過去)と、シタリ形・シアリ形(普通過去)とを区別することができること、また継続相では、存在動詞 aL,ataL がその継続相 ari:L,ari:taL と形態的な対立を示していることから、<基準時点における状態>の意味がみとめられることなどを挙げた。また完成相・非過去形について、この形式は、<限界に到達した動き>や<過去の全体的なデキゴトの意味>、<動作の継続>や<変化の結果の継続>という、完成相・過去形や継続相(・非過去形)の基本的な用法も持ち合わせていることが明らかになった。また、「基準時点において既に動作が完成或いは完了していること」を表すという、いわゆる「パーフェクト的な意味」をも示していた。そして、完成相・非過去形、つまり/si:/という形式の示しているこの多様な意味・用法の広がりから、この形式は、テンスやアスペクト、パーフェクトのカテゴリーそれぞれにおいて、/si-taL/、/si: buL/、/si: uki/といった marked の形式と対立している可能性のあることを示唆した。第2節では、特に、文の連体の位置の動詞の各形式について、その意味・用法を記述し、基本的なテンス・アスペクトの体系との異同関係を明らかにした。連体の位置の動詞のテンス・アスペクト的な意味は、基本的に、文の終止の位置の動詞のそれに対応するものであると言えるが、相違点として、完成相連体形動詞には完成相終止形動詞には見られない、<基準時点(同時)=現在>に関わる継続的な動きの意味を表す用法がみとめられること、文の連体の位置で与えられる‘名詞を修飾する’という役割によって、「非修飾名詞の示すコトガラ」の属性を表す」という非アクチュアルな用法を得ていることなどを挙げた。

第6章では、多良間方言のパーフェクトの形式 si: uki について、その具体的な意味・用法を記述し、体系化を試みることによって、前章で示したテンス・アスペクトの体系との関わりを考察していった。第1節では、多良間方言の si: uki の形式について、その格支配の仕方や意味・用法、テンスの対立の仕方などについて記述し、多良間方言のパーフェクトの形式にも、須田 2003 が取り出した、<先行性>と<事実性>という2つのパーフェクト的な意味がみとめられることを明らかにした。本研究ではこれらを、それぞれ<動作・変化の完了とその変化の結果の継続>、<経歴・記録>と呼んでいる。またこの方言では、<動きの完了とその痕跡>という、「(変化)の結果」と「前提」、あるいは<先行性>と<事実性>という、二面的なパーフェクト的な意味が表される用法がみとめられることも明らかにした。そしてこの多良間方言の si: uki の形が実現する3つのパーフェクト的な意味、<動作・変化の完了とその変化の結果の継続>、<動きの完了とその痕跡>、<経歴・記録>は連続的で、基準時点との関わり具合は右にいくほど薄くなることを示した。このように、多良間方言のパーフェクトでは、基準時点との関わり方の度合いによって大きく3つの個別的な意味が区別される。そしてその最も基本的なものは、<動作・変化の完了とその変化の結果の継続>の意味を表す用法である。第2節では、<パーフェクト>の si: buL との比較を通して、si: uki の形の「内容」を特徴づけている「中核的な時間的な意味」の考察を試みた。その結果、<パーフェクト>の si: buL は、文中の他の言語的要素や文脈などの‘助け’を借りて、パーフェ

クト的な意味を表す用法を獲得していること、つまり、si: buL の形はパーフェクト的な意味を積極的に表す形式ではなく、それは si: buL の持つ派生的な意味の 1 つにすぎないことを明らかにし、その中核的な時間的意味を<継続性>と規定した。また si: uki の中核的な時間的意味は、前節で明らかにした 3 つの用法が‘基準時点以前のデキゴト’を表すという点において共通し、さらにその形式によって捉えられるその動きが、‘完了の段階’でなければならないことから、その中核的な時間的意味として、<完了=以前性>を提示した。なおこれは、その基本的な意味である<動作・変化の完了とその変化の結果の継続>の用法に対応していることから、シテオク形の中核的=基本的な意味でもある。第 3 節では、継続相のシテオク形の表す意味・用法の記述、考察を通して、si: buri uki の形式は主体の変化や動作(但し、客体に変化を与えない)や広い意味での状態を表す動詞によって形づくられており、常に<以前=過去>の状態の継続の段階が捉えられている点において si: uki の形や<パーフェクト>の si: buL とは異なることを示した。そして第 4 節では、多良間方言の時間に関する文法的カテゴリーについて、第 II 部を通しての記述・考察によって得られた仮説として、多良間方言のパーフェクトのカテゴリーが、テンスとアスペクトの関係のように、その他の時間に関する文法的カテゴリーと関わって体系をなしているという考えを提示し、その体系を表に示した。

以上が各章節の概要となる。本研究は、多良間方言における<空間>と<時間>の表現形式それぞれの基本的な体系性を明らかにしたという点において、一応の成果を得たものと考えている。では最後に、今後の研究の展開を素描して、本論を終えよう。

まず、空間的意味から時間的意味へのずれ、あるいはその逆の現象など、空間表現と時間表現の関わり方についての考察が求められるだろう。本研究ではそれぞれの基本的な体系を明らかにすることをその主眼としたため、例えば、空間的意味から時間的意味にまたがる多義語の意味記述はおこなっておらず、また、存在動詞 buL や「置く」に形態的に対応する uki を含む、アスペクト、パーフェクトの形式についても、空間表現との関わりから再考察する必要があると考えている。恐らく<空間>と<時間>は不可分のものであり、その表現も、明確に分かつことのできない連続性を持っているに違いない。

これは、多良間方言についての個別言語的な研究の指針であるが、長期的には、次のような展開を考えている。拙論 2002 で、多良間方言には「宮古方言」的要素、「八重山方言」的要素などの混在という、方言区画上異なる複数地域の<言語的要素>が混在するという特徴があることを明らかにした。ここではそれを「多方言性」と呼んでいく。そして、その具体的な姿を明らかにするための、平良、石垣方言を始めとする隣接地域の言語や中央の首里方言との比較研究が、今後の長期的研究課題となる。例えば、本研究で考察したパーフェクトの形式については、今のところ、琉球方言の多く(奄美, 今帰仁, 首里, 平良, 石垣)がシテアルに相当する形式を示すのに対し、多良間方言、城辺保良方言ではシテオクに相当する形式が現れることが明らかになっている。期待される比較研究のためには、宮古、八重山のその他の地域ではどのような形が用いられているかを明らかにし、それぞれの方言の個別言語的な記述的研究を進めることが、まず求められるだろう。1 つ 1 つ、しっかりと進めていきたい。

参考文献(50 音順, 序論 1 の一覧に示してあるものを省く)

- 相場 覚 1985 「時間の知覚と認識」『言語生活』 403;38~45, 筑摩書房
- 荒 正子 1975 「から格の名詞と動詞とのくみあわせ」『教育国語』 40,41 むぎ書房 {言語学研究会編 1983 所収;397~425}
- 荒川清秀 1982 「日本語名詞のトコロ(空間)性ー中国語との関連でー」『日本語と中国語の対照研究』 6 日本語と中国語対照研究会 {大河内康憲編 1992 『日本語と中国語の対照研究論文集』 所収,補訂有;71~94}
- 2004 「空間名詞と空間化」『国文学解釈と鑑賞』 69-7;32~38, 至文堂
- 池上嘉彦 1975 『意味論』 大修館書店
- 2003 「<移動>のスキーマと<行為>のスキーマー日本語の「ヲ格+移動動詞」構造の類型論的考察ー」『外国語科研究紀要』 41-3, 東京大学教養学部外国語科
- 井上 優 2001 「現代日本語の「タ」ー主文末の「…タ」の意味についてー」つくば言語文化フォーラム編『「た」の言語学』 ;97~163, ひつじ書房
- 今泉志奈子 2003 「日本語動詞の分類にもとづく統語論」『日本語学』 22-10 ;24~39, 明治書院
- 今田水穂 2005 「日本語存在文の記述の二面性」『日本語文法』 5-1;55~69, 日本語文法学会
- 上村幸雄 1961 「沖縄本島」『方言学講座 第四巻』 ;334~357, 東京堂
- 1963 「首里方言の文法」『沖縄語辞典』 ;58~86, 国立国語研究所
- 1992 「琉球列島の言語(総説)」『言語学大辞典』 ;311~354, 三省堂
- 内間直仁 1990 『沖縄言語と共同体』 社会評論社
- 1994 『琉球方言助詞と表現の研究』 武蔵野書院
- 梅林博人 2004 「ドコ・ドチラ・ドッチの意味」『国文学解釈と鑑賞』 69-7;26~31, 至文堂
- 岡田幸彦 2000 「現代日本語の空間移動を表す動詞と場所を表す名詞の構文論的結合関係ー動詞の語彙的意味の記述への応用」『マテシス・ユニウェルサリス』 2-1;99~128, 獨協大学外国語学部言語文化学科
- 2003 「物体の空間移動を表す他動詞の語彙的意味記述のための試論ー補語的名詞(句)との結合関係に基づいてー」国松昭他編『松田徳一郎教授追悼論文集』;102~114, 研究社
- 奥田靖雄 1962 「に格の名詞と動詞とのくみあわせ」{言語学研究会編 1983;281~323}
- 1967 「語彙的な意味のありかた」『教育国語』 8, むぎ書房 {松本編 1978, 奥田 1985(pp3~20)所収}
- 1968-1972 「を格の名詞と動詞とのくみあわせ」{言語学研究会編 1983;21~149}
- 1974 「単語をめぐって」『教育国語』 36, むぎ書房 {松本編 1978, 奥田 1985(pp41~51)所収}
- 1977 「アスペクトの研究をめぐってー金田一的段階ー」『国語国文』 8 宮城教育大学 {奥田 1985 所収;85~104}
- 1978 「アスペクトの研究をめぐってー講義ー」『教育国語』 53, 54, むぎ書房 {奥田 1985 所収;105~143}
- 1985 『ことばの研究・序説』 むぎ書房
- 1988 「時間の表現(1)(2)」『教育国語』 94;2~17 / 95;28~41, むぎ書房

- 1993「動詞の終止形(1)」『教育国語』2-9;44~53, むぎ書房
- 1994「動詞の終止形(2)(3)」『教育国語』2-12;27~42 / 2-13;34~40, むぎ書房
- 奥津敬一郎 1974『生成日本文法論』大修館書店
- 金田章宏 2001『八丈方言動詞の基礎研究』笠間書院
- 2004「述語の指示性—指示語の文法化と「コソアリエー」」『国文学解釈と鑑賞』69-7;54~67, 至文堂
- かりまたしげひさ 2003「沖縄県宮古郡城辺町保良方言概況」, 「第1次調査[全体的なコメント]」文部省科学研究費補助金研究成果報告書 No.4『方言における動詞の文法的カテゴリーの類型論的研究』;80~82, 339~340
- 狩俣繁久・島袋幸子 1989「今帰仁方言の動詞の文法的なカテゴリー」言語学研究会編『ことばの科学』2;135~157,
- 木村恵介 2005「連語の移行関係」『国文学解釈と鑑賞』70-7;206~213, 至文堂
- 金水 敏 1988「日本語における心的空間と名詞句の指示について」『女子大文学 国文篇』39:1~24, 大阪女子大学国文学科
- 1990「方向と選択—コチラ類の指示詞—」『日本語学』90;22~30, 明治書院
- 2002「存在表現の構造と意味」近代語学会編『近代語研究』11;473~493, 武蔵野書院
- 金水敏・工藤真由美・沼田善子 2000『日本語の文法2 時・否定と取立て』岩波書店
- 金田一春彦 1950「国語動詞の一分類」『言語研究』15 {金田一編 1976 所収;5~26}
- 1955「日本語動詞のテンスとアスペクト」『名古屋大学文学部研究論集』X {金田一編 1976 所収;27~61}
- 1958「撥ねる音・詰める音」『国語と国文学』35-6, 東京大学国語国文学会 {金田一 1967『日本語音韻の研究』東京堂出版 所収;154~167}
- 金田一春彦編 1976『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房
- 日下部文夫 1972「平良市(宮古島)における所の呼びかた」『人類科学』25;133~162, 九学会連合
- 工藤真由美 1989「現代日本語のパーフェクトをめぐって」言語学研究会編『ことばの科学』3;53~118, むぎ書房
- 1995『アスペクト・テンス体系とテキスト』ひつじ書房
- 1999「時間的限界点のタイプ—広義アスペクト的把握の観点から—」『日本語学』18-9;15~23, 明治書院
- 2001「アスペクト体系の生成と進化」『ことばの科学』10;118~173, むぎ書房
- 工藤真由美編 2004『日本語のアスペクト・テンス・ムード体系』ひつじ書房
- 工藤 浩 1985「日本語の文の時間表現」『言語生活』403;48~56, 筑摩書房
- 久保美織 2000「内的時間構成の様々な見方」『日本語学』19-5;42~48, 明治書院
- 言語学研究会 2000「琉球石垣方言文法形態論」(未公刊)
- 言語学研究会編 1983『日本語文法・連語論(資料編)』むぎ書房
- 後藤克巳 1964「「本を読む」と「道を歩く」」『国文学攷』35;52~58, 広島大学国語国文学会
- 小松寿雄 1984「明治以降の動詞研究の歴史」鈴木一彦・林巨樹編『研究資料 日本文法』2;139~167, 明治書院

- 此島正年 1973『国語助詞の研究』桜楓社
- 定延利之 2002「時間から空間へ?—<空間的分布を表す時間語彙>をめぐって—」生越直樹
編『対照言語学』(シリーズ言語科学 4);183~215, 東京大学出版会
- 佐藤喜代治 1973「助詞の分類」『品詞別日本文法講座 9 助詞』明治書院
- 佐藤純一 1982「テンス・アスペクト—ロシア語」『講座日本語学』11;81~97, 明治書院
- 島袋幸子 1987「今帰仁方言における動詞のテンス・アスペクト」『琉球方言論叢』;491~503,
琉球方言研究クラブ 30 周年記念会編
- 2001「沖縄今帰仁方言のアスペクト」『言語』30-13;48~49, 大修館書店
- 清水伸子 2000「日本語の認知特性と移動表現」『言語と文化』2;75~90, 愛知大学言語学教育研究室
- 正保 勇 1981「「コソア」の体系」『日本語の指示詞』国立国語研究所;51~122
- 菅井三実 1999「日本語における空間の対格標示について」『名古屋大学文学部研究論集』
133(文学 45);75~91
- 鈴木重幸 1957「日本語の動詞のすがた(アスペクト)について」(言語学研究会報告){金田一
編 1976 所収;63~81}
- 1960「首里方言の動詞のいいきりの形」『国語学』41 {鈴木 1972『文法と文法指導』;289~302, むぎ書房、服部四郎他編 1979『日本の言語学』4;600~614, 大修館書店 所収}
- 1972『日本語動詞・形態論』むぎ書房
- 1979「現代日本語の動詞のテンス—終止的な述語につかわれた完成相の叙述法断定のばあい—」言語学研究会編『言語の研究』;5~59, むぎ書房 {鈴木 1996 所収;107-158}
- 1996『形態論・序説』むぎ書房
- 鈴木重幸・宮良安彦・登野城ルリ子・狩俣繁久・島袋幸子 2001『琉球八重山方言の動詞の研究』平成 11 年度・12 年度 文部省科学研究費補助金
- 鈴木 泰 1992『古代日本語動詞のテンス・アスペクト』ひつじ書房
- 須田義治 2000「限界性について」『山梨大学教育人間科学部紀要』1-2;87~94
- 2001「アスペクト的な意味の体系性について」『千葉大学留学生センター紀要』
6;1~32
- 2002「現代日本語のアスペクチュアリティーの体系について」日中対照言語学会
『日本語と中国語のアスペクト』;41~66, 白帝社
- 2003『現代日本語のアスペクト論』海山文化研究所
- 2005a「連体形のテンス・アスペクトについて」『沖縄大学人文学部紀要』6;15~24
- 2005b「連語論と動詞の意味的な分類」『国文学解釈と鑑賞』70-7;121~129, 至文堂
- 瀬戸賢一 1995『空間のレトリック』海鳴社
- 高田祥司 1999「大阪方言におけるテオク形の用法」『現代日本語研究』6;51~77, 大阪大学
文学部日本語学講座
- 高橋太郎 1969「すがたともくろみ」(講座テキスト){金田一編 1976 所収;117~153}
- 1973「動詞の連体形「する」「した」についての一考察」『ことばの研究』4(国立国
語研究所論集 4);101~132, 秀英出版

- 1985『現代日本語動詞のアスペクトとテンス』秀英出版
- 1996「『場面』と『場』の再確認」鈴木泰・角田太作編『日本語文法の諸問題－高橋太郎先生古稀記念論文集－』;1~27, ひつじ書房
- 1999「「シテオク」と「シテアル」の対立について」『関西外国語大学研究論集』70;81~95
- 2003『動詞九章』ひつじ書房
- 高橋太郎他 2005『日本語の文法』ひつじ書房
- 田窪行則 1984「現代日本語の「場所」を表わす名詞類について」『日本語・日本文化』大阪外国語大学 12;89~117
- 田中茂範・松本曜 1997『空間と移動の表現』研究社出版
- 角田太作 1991『世界の言語と日本語』くろしお出版
- 津波古敏子 1989「不完成相につきまとう臨場性－首里方言のばあい－」言語学研究会編『ことばの科学』2;159~177, むぎ書房
- 寺村秀夫 1968「日本語名詞の下位分類」『日本語教育』12;42~57, 日本語教育学会
- 1971「‘タ’の意味と機能－アスペクト・テンス・ムードの構文的位置づけ－」岩倉具実教授退職記念論文集出版後援会『言語学と日本語問題』;244~289, くろしお出版
- 1982『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』くろしお出版
- 1984『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
- 徳永健伸・小山智史・齋藤 豪 2004「日本語空間名詞の分類」『情報処理学会研究報告』108;135~140
- 登野城ルリ子 2002「石垣方言名詞の格の用法について」『国文学解釈と鑑賞』67-7
- 長野泰彦 1999「時間・ことば・認識」長野泰彦編『時間・ことば・認識』;1~7, ひつじ書房
- 仲原 穰 2003「石垣島宮良方言の音韻研究序説」『琉球の方言』27;139~157, 法政大学沖縄文化研究所
- 中山康雄 2003『時間論の構築』勁草書房
- 西山佑司 1994「日本語の存在文と変項名詞句」『慶応義塾大学言語文化紀要』26;115~148
- 丹羽哲也 1996「ル形とタ形のアスペクトとテンス」『人文研究 大阪市立大学文学部紀要』48;703~740
- 1997「連体節のテンスについて」『人文研究 大阪市立大学文学部紀要』49;295~330
- 野村剛史 1993「古代から中世の「の」と「が」」『日本語学』12-11, 明治書院
- 白 愛仙 2005「に格、が格の名詞と動詞「ある」の組み合わせ」『国文学解釈と鑑賞』70-7;105~120, 至文堂
- 藤井 正 1966「「動詞＋ている」の意味」『国語研究室』5, 東大国語研究室 {金田一編 1976所収;97~116}
- 外間守善 1971『沖縄の言語史』法政大学出版局
- 堀口和吉 1978「指示語の表現性」『日本語・日本文化』8, 大阪外国語大学
- 1990「指示詞コ・ソ・アの表現」『日本語学』9-3;59~70, 明治書院
- 松村 明編 1969『古典語現代語 助詞助動詞詳説』学燈社
- 松村一登 1993「「格」と認識」『言語』22-10, 大修館書店

- まつもとひろたけ 1982「奄美方言の動詞結果相の問題点」仲宗根政善先生古稀記念『琉球の言語と文化』;135~142
- 1989「活用体系のとらえかた」中森義宗・上村保子『美とかたち』;117~155, 東信堂
- 1993「名詞の「主体＝客体格」の用法と問題点」仁田義雄編『日本語の格をめぐって』;139~161, くろしお出版
- 1996「奄美大島方言のメノマエ性－龍郷町瀬留－」鈴木泰・角田太作編『日本語文法の諸問題－高橋太郎先生古希記念論文集－』;77~105, ひつじ書房
- 1998「格のカテゴリーの内部構造」『国文学解釈と鑑賞』63-1;82~93, 至文堂
- 松本泰丈 1982「琉球方言の主格表現の問題点」『国文学解釈と鑑賞』47-9;178~185, 至文堂
- 1986「形容詞の語形のタイプから」『国文学 解釈と鑑賞』51-8;153~160, 至文堂
- 1993「<メノマエ性>をめぐって－しるしづけのうつりかわり」『国文学解釈と鑑賞』58-7;118~130, 至文堂
- 松本泰丈編 1978『日本語研究の方法』むぎ書房
- 三尾 砂 1948『国語法文章論』三省堂 {三尾 2003 所収:1-133}
- 2003『三尾砂 著作集 I』ひつじ書房
- 三上 章 1953『現代語法序説』刀江書院
- 1955『現代語法新説』刀江書院
- 宮崎和人 2001「現代日本語のアスペクト体系」『国文学』46-2;102~109, 学燈社
- 宮島達夫 1972『動詞の意味・用法の記述的研究』(国立国語研究所報告 43) 秀英出版
- 1984「日本語とヨーロッパ語の移動動詞」『金田一春彦博士古稀記念論文集』2, 三省堂 {宮島達夫 1994『語彙論研究』むぎ書房所収:43~72}
- 宮田幸一 1948『日本語文法の輪郭』三省堂
- 牟 世鍾 1993「発見・思い出しにおける「ル」形と「タ」形」『日本語学』12-2;88~97, 明治書院
- 森田良行 1987「自動詞と他動詞」山口秋穂編『国文学講座 6』;155~180, 明治書院
- 2002『日本語文法の発想』ひつじ書房
- 2004「移動動詞と空間表現」『国文学解釈と鑑賞』69-7;19~25, 至文堂
- 森野宗明 1973「格助詞」『品詞別日本文法講座 9 助詞』明治書院
- 森山卓郎 1988『日本語動詞述語文の研究』明治書院
- 矢澤真人 2001「「格」をめぐる研究」『国文学解釈と教材の研究』;46-2;66~72, 学燈社
- 山口 巖 2005『ロシア文法の周辺－一般言語学への招待－』日本古代ロシア研究会
- 山口治彦 2002「直示動詞と対話空間:英語,日本語,そして九州方言をもとに」『神田外大論叢』53-3;51~70
- 山崎 馨 1963「日本語の形容詞の起源について」『美夫君志』6 {山崎 1992『形容詞助動詞の研究』和泉書院 所収}
- 山田小枝 1984『アスペクト論』三修社
- 2002「ヨーロッパ諸語との比較における日本語のアスペクト・モダリティ」『日本語学』21-8;50~58, 明治書院
- 姚 艶玲 2003「日本語における「ヲ格+移動動詞」と「空間・場所名詞句」との結びつき関係」『比較社会文化研究』14;63~72, 九州大学大学院比較社会文化学府

- 吉川武時 1973「現代日本語動詞のアスペクトの研究」『Linguistic Communications』9 ,Monash University {金田一編 1976;155~327 所収}
- Bernard Comrie 1976 ‘Aspect’ Cambridge UP (山田小枝訳 『アスペクト』 むぎ書房 1988)
- Ю.С.Маслов 1984 Об основных понятияхаспектологии ‘Очерки по аспектологии’ Ленинград, с.5-47 (菅野裕臣訳「アスペクトの基本概念について」, 菅野編訳 1992『動詞アスペクトについて(Ⅱ)』 学習院大学東洋文化研究所所収;98~139)